

椎田バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

— 8 —

上 卷

福岡県築上郡築城町所在
塞ノ神遺跡・赤幡森ヶ坪遺跡の調査

1992

福岡県教育委員会

椎田バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

— 8 —

上 卷

福岡県築上郡築城町所在
塞ノ神遺跡・赤幡森ヶ坪遺跡の調査



赤幡森ヶ坪遺跡全景



(1) 赤幡森ヶ坪遺跡出土石帯・管玉



(2) 赤幡森ヶ坪遺跡出土灰釉陶器

序

福岡県教育委員会は、日本道路公団から委託を受けて、一般国道10号線椎田バイパス建設敷地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を昭和61年度以降実施してまいりましたが、平成元年12月をもちまして無事現地調査完了の運びとなりましたことは、関係各位のご協力の賜であります。

本報告書は、昭和63年度から平成元年度にかけて調査を実施した築上郡築城町所在の塞ノ神遺跡・赤幡森ヶ坪遺跡・十双遺跡についての調査結果を「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第8集としてとりまとめたものであります。本報告書が、文化財愛護思想の普及ならびに学術研究の一助となれば幸いに存じます。

なお、発掘調査にあたり多大なるご協力を頂いた地元の方々を初めとして、関係各位に深く感謝いたします。

平成4年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 御手洗 康

例 言

1. 本書は、昭和63年度から平成元年度にかけて福岡県教育委員会が日本道路公団から委嘱されて発掘調査を実施した築上郡築城町塞ノ神遺跡・赤幡森ヶ坪遺跡・十双遺跡の報告書であり、一般国道10号線椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第8冊目にあたる。
2. 本書に掲載した遺跡は、上巻－塞ノ神遺跡（第7－A地点）・赤幡森ヶ坪遺跡（第7－B地点）、中巻－赤幡森ヶ坪遺跡、下巻－十双遺跡（第7－C地点）である。
3. 遺構の写真撮影・実測図作成は、調査担当者が行った。
4. 遺物の復原・整理作業は、九州歴史資料館及び福岡県文化課甘木発掘調査事務所において岩瀬正信整理指導員のもとに行った。
5. 上・中巻掲載の遺物写真は、岡紀久夫氏の撮影による。上・中巻掲載の遺物の実測は、渡辺輝子・高瀬照美・大野愛里・鬼木つや子・若松三枝子・小崎みゆき・棚町陽子・友永澄子・中川真理子の諸氏及び井上・伊崎・小田が行い、図面作成・製図は、豊福弥生・塩足里美・原カヨ子・水野美奈・近藤美恵子・関久江の諸氏及び伊崎・小田による。
6. 赤幡森ヶ坪遺跡出土の鉄滓分析は、新日本製鉄株式会社TACセンターに依頼し、大澤正己氏に分析結果についての玉稿をいただいた。
7. 挿図で使用する方位は、すべて座標北である。
8. 遺跡分布図は、昭和53年国土地理院発行の「中津」5万分の1を使用した。
9. 中巻図版1の航空写真は、国土地理院の撮影による。
10. 本書の執筆は、上巻を伊崎・小田が行い、中巻は井上・伊崎・小田・大澤による。下巻は、井上・中間・大澤があたった。
11. 本書の編集は、上・中巻を小田が、下巻を中間が担当し、小田がとりまとめた。

本文目次

[上 卷]

I 調査組織と調査経過	1
II 遺跡の位置と環境	7
III 各遺跡の調査	11

みやのかみ
塞ノ神遺跡

1. 調査の概要	11
2. 遺構と出土遺物	11
(1) 積石塚	11
(2) 自然流路	19
3. 小 結	20

あかはたもりが つぼ
赤幡森ヶ坪遺跡

1. 調査の概要	21
2. 遺構と出土遺物	21
(1) 竪穴式住居跡	21
(2) 掘立柱建物跡	198
(3) 竪 穴	226
(4) 土 壙	240
(5) 集石土壙	274

[中 卷]

赤幡森ヶ坪遺跡

(6) 鍛冶炉跡	283
(7) 溝	286
(8) 谷状遺構	294
(9) その他の遺構と遺物	338
3. 遺物各説	354
4. 自然科学的分析	381
5. 小 結	389

[下 卷]

十双遺跡

1. 調査の概要	1
2. 縄文時代の遺構と遺物	3
(1) 竪穴住居跡	4
(2) 土 壙	6
(3) 包含層出土の遺物	6
3. 弥生・古墳時代の遺構と遺物	18
(1) 竪穴住居跡	18
(2) 掘立柱建物	91
(3) 土 壙	95
(4) 溝状遺構	106
(5) 谷	111
4. 自然科学的分析	131
(1) 十双遺跡出土銀製品の分析調査	131
(2) 石庖丁等の石材鑑定	134
5. 小 結	135
(1) 弥生後期集落について	135
a 竪穴住居の構造	135
b 集落の変遷	141
(2) 漢式土器について	144
(3) 銀製品について	145
(4) 抉りのある器台について	147
(5) まとめ	148

図 版 目 次

[上 卷]

巻頭図版 1	赤幡森ヶ坪遺跡全景
巻頭図版 2	(1) 赤幡森ヶ坪遺跡出土石帯・管玉
	(2) 赤幡森ヶ坪遺跡出土灰釉陶器

図版 1	(1) 塞ノ神遺跡周辺航空写真 (南東上空から)	11
	(2) 発掘調査前状況 (東から)	11
図版 2	(1) 積石塚伐採後 (南から)	11
	(2) 積石塚伐採後 (北から)	11
図版 3	(1) 積石塚全景 (南から)	14
	(2) 表土除去後 (南から)	14
図版 4	(1) 表土除去後 (南東から)	14
	(2) 表土除去後 (北から)	14
図版 5	(1) 表土堆積状況 (南東から)	14
	(2) 積石塚半裁状況 (南から)	14
図版 6	(1) 自然流路全景 (南西から)	19
	(2) 自然流路全景 (西から)	19
	(3) 土層堆積状況	19
図版 7	(1) 積石塚①層出土土器	14
	(2) 積石塚②・③層出土土器	14
	(3) 自然流路出土土器	20
図版 8	(1) 塞ノ神遺跡出土遺物①	17
	(2) 塞ノ神遺跡出土遺物②	18

挿 図 目 次

第 1 図	国道10号線椎田バイパス路線図	
第 2 図	赤幡森ヶ坪遺跡周辺地形図 (1/10,000)	5
第 3 図	塞ノ神遺跡・赤幡森ヶ坪遺跡地形図 (1/3,000)	6
第 4 図	赤幡森ヶ坪遺跡周辺遺跡分布図 (1/50,000)	8
第 5 図	塞ノ神遺跡地形測量図 (1/300)	12
第 6 図	塞ノ神遺跡土層断面実測図 (1/120)	13
第 7 図	塞ノ神遺跡出土土器実測図① (1/3)	15
第 8 図	塞ノ神遺跡出土土器実測図② (1/3)	16
第 9 図	塞ノ神遺跡出土土器実測図③ (1/4)	17
第 10 図	塞ノ神遺跡出土遺物実測図① (1/2)	18

第 11 図	塞ノ神遺跡出土遺物実測図② (1/3)19
第 12 図	赤幡森ヶ坪遺跡遺構配置図 (1/800)折込
第 13 図	1号住居跡実測図 (1/60)22
第 14 図	1号住居跡出土土器実測図 (1/3)23
第 15 図	2号住居跡, 22号建物跡実測図 (1/60)24
第 16 図	3・4号住居跡実測図 (1/60)25
第 17 図	3号住居跡出土土器実測図 (1/3)26
第 18 図	4号住居跡出土土器実測図 (1/3)27
第 19 図	4号住居跡内焼土壙実測図 (1/30)27
第 20 図	5・6号住居跡実測図 (1/60)28
第 21 図	5号住居跡出土土器実測図 (1/3)29
第 22 図	6号住居跡カマド実測図 (1/30)30
第 23 図	6号住居跡出土土器実測図 (1/3)31
第 24 図	7号住居跡実測図 (1/60)31
第 25 図	7号住居跡出土土器実測図 (1/3)31
第 26 図	8号住居跡実測図 (1/60)32
第 27 図	8号住居跡カマド実測図 (1/30)33
第 28 図	8号住居跡出土土器実測図 (1/3)33
第 29 図	9号住居跡実測図 (1/60)34
第 30 図	9号住居跡出土土器実測図 (1/3)34
第 31 図	10号住居跡, 4号竪穴実測図 (1/60)35
第 32 図	10号住居跡カマド実測図 (1/30)36
第 33 図	10号住居跡出土土器実測図① (1/3)37
第 34 図	10号住居跡出土土器実測図② (1/3)38
第 35 図	10号住居跡出土土器実測図③ (1/3)39
第 36 図	11号住居跡, 2号溝実測図 (1/60)40
第 37 図	11号住居跡カマド実測図 (1/30)41
第 38 図	11号住居跡出土土器実測図 (1/3)42
第 39 図	12号住居跡実測図 (1/60)43
第 40 図	12号住居跡出土土器実測図 (1/3)43
第 41 図	13・14号住居跡実測図 (1/60)44
第 42 図	13号住居跡出土土器実測図 (1/3)45
第 43 図	14号住居跡出土土器実測図 (1/3)45

第 44 図	15・16号住居跡, 5～7・9・10号竪穴実測図 (1/60)	46
第 45 図	15号住居跡カマド実測図 (1/30)	47
第 46 図	15号住居跡出土土器実測図 (1/3)	47
第 47 図	16号住居跡カマド実測図 (1/30)	48
第 48 図	16号住居跡出土土器実測図① (1/3)	49
第 49 図	16号住居跡出土土器実測図② (1/3)	50
第 50 図	17号住居跡実測図 (1/60)	51
第 51 図	17号住居跡出土土器実測図 (1/3)	52
第 52 図	18号住居跡実測図 (1/60)	52
第 53 図	18号住居跡出土土器実測図 (1/3)	53
第 54 図	19号住居跡実測図 (1/60)	53
第 55 図	19号住居跡出土土器実測図 (1/3)	54
第 56 図	20号住居跡実測図 (1/60)	54
第 57 図	20号住居跡出土土器実測図 (1/3)	55
第 58 図	21号住居跡実測図 (1/60)	55
第 59 図	21号住居跡出土弥生土器実測図 (1/4)	56
第 60 図	21号住居跡出土土器実測図 (1/3)	57
第 61 図	22号住居跡実測図 (1/60)	58
第 62 図	22号住居跡カマド実測図 (1/30)	59
第 63 図	22号住居跡出土土器実測図 (1/3)	60
第 64 図	23号住居跡カマド実測図 (1/30)	61
第 65 図	23・24号住居跡, 18号土壌実測図 (1/60)	62
第 66 図	23号住居跡出土土器実測図① (1/3)	63
第 67 図	23号住居跡出土土器実測図② (1/3)	64
第 68 図	24号住居跡カマド実測図 (1/30)	65
第 69 図	24号住居跡出土土器実測図 (1/3)	66
第 70 図	25号住居跡, 37号建物跡実測図 (1/60)	折込
第 71 図	25号住居跡カマド実測図 (1/30)	67
第 72 図	25号住居跡出土土器実測図① (1/3)	68
第 73 図	25号住居跡出土土器実測図② (1/3)	69
第 74 図	26号住居跡実測図 (1/60)	70
第 75 図	26号住居跡出土土器実測図 (1/3)	71
第 76 図	27号住居跡実測図 (1/60)	71

第 77 図	27号住居跡出土土器実測図 (1/3)	72
第 78 図	28号住居跡実測図 (1/60)	73
第 79 図	28号住居跡出土土器実測図 (1/3)	74
第 80 図	29号住居跡実測図 (1/60)	75
第 81 図	29号住居跡出土弥生土器実測図 (1/4)	76
第 82 図	30号住居跡カマド実測図 (1/30)	76
第 83 図	30号住居跡出土土器実測図 (1/3)	76
第 84 図	31号住居跡出土土器実測図 (1/3)	77
第 85 図	31・32号住居跡実測図 (1/60)	78
第 86 図	32号住居跡出土土器実測図 (1/3)	79
第 87 図	33号住居跡実測図 (1/60)	80
第 88 図	33号住居跡出土土器実測図 (1/3)	80
第 89 図	34号住居跡実測図 (1/60)	81
第 90 図	34号住居跡カマド実測図 (1/30)	82
第 91 図	34号住居跡出土土器実測図 (1/3)	83
第 92 図	35号住居跡実測図 (1/60)	84
第 93 図	35号住居跡カマド実測図 (1/30)	85
第 94 図	35号住居跡出土土器実測図 (1/3)	86
第 95 図	36・43号住居跡実測図 (1/60)	87
第 96 図	36号住居跡出土土器実測図 (1/3)	88
第 97 図	37・38号住居跡上面出土土器実測図 (1/3)	89
第 98 図	37・38・44・45号住居跡実測図 (1/60)	90
第 99 図	37号住居跡出土土器実測図 (1/3)	91
第 100 図	38号住居跡出土土器実測図 (1/3)	92
第 101 図	39号住居跡実測図 (1/60)	93
第 102 図	39号住居跡カマド実測図 (1/30)	94
第 103 図	39号住居跡出土土器実測図 (1/3)	95
第 104 図	40号住居跡実測図 (1/60)	96
第 105 図	40号住居跡出土土器実測図 (1/3)	97
第 106 図	41・42号住居跡実測図 (1/60)	98
第 107 図	41号住居跡出土土器実測図 (1/3)	99
第 108 図	42号住居跡出土土器実測図 (1/3)	100
第 109 図	43号住居跡出土土器実測図 (1/3)	101

第 110 図	44号住居跡出土土器実測図 (1/3)	101
第 111 図	45号住居跡出土土器実測図 (1/3)	102
第 112 図	46号住居跡実測図 (1/60)	102
第 113 図	46号住居跡出土土器実測図 (1/3)	103
第 114 図	47号住居跡実測図 (1/60)	104
第 115 図	47号住居跡カマド実測図 (1/30)	105
第 116 図	47号住居跡出土土器実測図 (1/3)	105
第 117 図	48・49号住居跡実測図 (1/60)	106
第 118 図	48号住居跡出土土器実測図 (1/3)	107
第 119 図	49号住居跡カマド実測図 (1/30)	108
第 120 図	49号住居跡出土土器実測図 (1/3)	109
第 121 図	50号住居跡カマド実測図 (1/30)	109
第 122 図	50・81号住居跡実測図 (1/60)	110
第 123 図	50号住居跡出土土器実測図 (1/3)	111
第 124 図	51号住居跡実測図 (1/60)	112
第 125 図	51号住居跡カマド実測図 (1/30)	113
第 126 図	51号住居跡出土土器実測図 (1/3)	114
第 127 図	52号住居跡実測図 (1/60)	115
第 128 図	52号住居跡カマド実測図 (1/30)	116
第 129 図	52号住居跡出土土器実測図 (1/3)	116
第 130 図	53・56号住居跡実測図 (1/60)	117
第 131 図	53号住居跡出土土器実測図 (1/3)	118
第 132 図	54号住居跡実測図 (1/60)	119
第 133 図	54号住居跡カマド実測図 (1/30)	120
第 134 図	54号住居跡出土土器実測図 (1/3)	121
第 135 図	55号住居跡実測図 (1/60)	122
第 136 図	55号住居跡カマド実測図 (1/30)	123
第 137 図	55号住居跡出土土器実測図 (1/3)	123
第 138 図	56号住居跡カマド実測図 (1/30)	124
第 139 図	56号住居跡出土土器実測図 (1/3)	125
第 140 図	57号住居跡実測図 (1/60)	126
第 141 図	57号住居跡カマド実測図 (1/30)	127
第 142 図	57・58号住居跡出土土器実測図 (1/3)	127

第 143 図	59号住居跡出土土器実測図 (1/3)	128
第 144 図	58・59・70号住居跡実測図 (1/60)	折込
第 145 図	60~62号住居跡実測図 (1/60)	折込
第 146 図	60号住居跡出土土器実測図 (1/3)	129
第 147 図	61号住居跡カマド実測図 (1/30)	129
第 148 図	61号住居跡出土土器実測図 (1/3)	130
第 149 図	62号住居跡出土土器実測図 (1/3)	130
第 150 図	63・64・68号住居跡実測図 (1/60)	折込
第 151 図	63号住居跡出土土器実測図 (1/3)	131
第 152 図	64号住居跡出土土器実測図 (1/3)	132
第 153 図	65号住居跡実測図 (1/60)	133
第 154 図	65号住居跡出土土器実測図 (1/4)	133
第 155 図	66号住居跡出土土器実測図 (1/3)	133
第 156 図	66号住居跡実測図 (1/60)	134
第 157 図	67・72号住居跡実測図 (1/60)	135
第 158 図	67号住居跡出土土器実測図 (1/3)	136
第 159 図	68号住居跡出土土器実測図 (1/3)	136
第 160 図	69号住居跡実測図 (1/60)	137
第 161 図	69号住居跡出土土器実測図 (1/4)	138
第 162 図	70号住居跡出土土器実測図 (1/3)	138
第 163 図	71号住居跡実測図 (1/60)	139
第 164 図	71号住居跡カマド実測図 (1/30)	140
第 165 図	71号住居跡出土土器実測図 (1/3)	141
第 166 図	72号住居跡出土土器実測図 (1/3)	141
第 167 図	73・74号住居跡実測図 (1/60)	142
第 168 図	74号住居跡出土土器実測図 (1/3)	143
第 169 図	75・76号住居跡実測図 (1/60)	144
第 170 図	75号住居跡出土土器実測図 (1/3)	145
第 171 図	76号住居跡出土土器実測図 (1/3)	145
第 172 図	77~79号住居跡実測図 (1/60)	146
第 173 図	78号住居跡カマド実測図 (1/30)	147
第 174 図	78号住居跡出土土器実測図 (1/3)	148
第 175 図	79号住居跡出土土器実測図 (1/3)	148

第 176 図	80～85号住居跡検出時出土土器実測図 (1/3)	149
第 177 図	80号住居跡実測図 (1/60)	150
第 178 図	80号住居跡出土土器実測図 (1/3)	151
第 179 図	81号住居跡カマド実測図 (1/30)	152
第 180 図	81号住居跡出土土器実測図① (1/3)	153
第 181 図	81号住居跡出土土器実測図② (1/4)	154
第 182 図	82号住居跡実測図 (1/60)	155
第 183 図	82号住居跡出土土器実測図 (1/3)	155
第 184 図	83号住居跡実測図 (1/60)	156
第 185 図	83号住居跡カマド実測図 (1/30)	157
第 186 図	83号住居跡出土土器実測図 (1/3)	158
第 187 図	84号住居跡カマド実測図 (1/30)	159
第 188 図	84・85号住居跡実測図 (1/60)	160
第 189 図	84・85号住居跡出土土器実測図 (1/3)	161
第 190 図	85号住居跡カマド実測図 (1/30)	162
第 191 図	86号住居跡, 23号建物跡実測図 (1/60)	163
第 192 図	87・88号住居跡実測図 (1/60)	164
第 193 図	87号住居跡カマド実測図 (1/30)	165
第 194 図	87号住居跡出土土器実測図 (1/3)	166
第 195 図	89号住居跡実測図 (1/60)	167
第 196 図	90・91号住居跡実測図 (1/60)	168
第 197 図	90号住居跡出土土器実測図 (1/3)	169
第 198 図	91号住居跡出土土器実測図 (1/3)	170
第 199 図	92号住居跡出土土器実測図 (1/3)	170
第 200 図	92・93・108号住居跡, 16号建物跡実測図 (1/60)	折込
第 201 図	93号住居跡出土土器実測図 (1/3)	171
第 202 図	94号住居跡実測図 (1/60)	172
第 203 図	94号住居跡出土土器実測図 (1/3)	173
第 204 図	95号住居跡実測図 (1/60)	173
第 205 図	95号住居跡カマド実測図 (1/30)	174
第 206 図	95号住居跡出土土器実測図① (1/3)	175
第 207 図	95号住居跡出土土器実測図② (1/4)	176
第 208 図	96号住居跡実測図 (1/60)	177

第 209 図	97・98号住居跡実測図 (1/60)	178
第 210 図	97号住居跡出土土器実測図 (1/3)	179
第 211 図	98号住居跡出土土器実測図 (1/3)	179
第 212 図	99号住居跡出土土器実測図① (1/3)	180
第 213 図	99号住居跡出土土器実測図② (1/4)	181
第 214 図	100号住居跡カマド実測図 (1/30)	182
第 215 図	100号住居跡出土土器実測図 (1/3)	182
第 216 図	99・100号住居跡, 45号土壙実測図 (1/60)	折込
第 217 図	101~103号住居跡実測図 (1/60)	折込
第 218 図	101号住居跡カマド実測図 (1/30)	183
第 219 図	101号住居跡出土土器実測図 (1/3)	184
第 220 図	103号住居跡出土土器実測図 (1/3)	184
第 221 図	104号住居跡実測図 (1/60)	185
第 222 図	104・105号住居跡出土土器実測図 (1/3)	186
第 223 図	104号住居跡出土土器実測図 (1/4)	186
第 224 図	106号住居跡実測図 (1/60)	187
第 225 図	106号住居跡カマド実測図 (1/30)	188
第 226 図	106号住居跡出土土器実測図① (1/3)	189
第 227 図	106号住居跡出土土器実測図② (1/4)	189
第 228 図	107号住居跡出土土器実測図 (1/3)	190
第 229 図	107号住居跡, 46号土壙実測図 (1/60)	折込
第 230 図	109号住居跡実測図 (1/60)	191
第 231 図	110号住居跡実測図 (1/60)	192
第 232 図	1号建物跡実測図 (1/80)	折込
第 233 図	2・21・27号建物跡実測図 (1/80)	折込
第 234 図	3号建物跡実測図 (1/80)	199
第 235 図	4・26号建物跡実測図 (1/80)	200
第 236 図	5・6号建物跡実測図 (1/80)	201
第 237 図	7号建物跡実測図 (1/80)	203
第 238 図	8・10号建物跡実測図 (1/80)	204
第 239 図	9・13号建物跡実測図 (1/80)	205
第 240 図	11・14号建物跡実測図 (1/80)	207
第 241 図	12・17号建物跡実測図 (1/80)	208

第 242 图	15·20号建物跡实测图 (1/80)	·····210
第 243 图	18·19号建物跡实测图 (1/80)	·····212
第 244 图	24·25号建物跡实测图 (1/80)	·····折込
第 245 图	28·29号建物跡实测图 (1/60)	·····215
第 246 图	30·31号建物跡实测图 (1/60)	·····216
第 247 图	32·33号建物跡实测图 (1/60)	·····218
第 248 图	34号建物跡实测图 (1/80)	·····219
第 249 图	35号建物跡实测图 (1/80)	·····220
第 250 图	36·38号建物跡实测图 (1/80)	·····221
第 251 图	建物跡出土土器实测图① (1/3)	·····222
第 252 图	建物跡出土土器实测图② (1/3)	·····223
第 253 图	竖穴出土土器实测图① (1/3)	·····226
第 254 图	1·2·8号竖穴, 5号土壙实测图 (1/60)	·····227
第 255 图	3·11号竖穴实测图 (1/60)	·····228
第 256 图	竖穴出土土器实测图② (1/3)	·····229
第 257 图	12·13号竖穴实测图 (1/60)	·····231
第 258 图	14·15号竖穴实测图 (1/60)	·····233
第 259 图	16·17号竖穴实测图 (1/60)	·····234
第 260 图	18·19号竖穴实测图 (1/60)	·····235
第 261 图	20~22号竖穴实测图 (1/60)	·····236
第 262 图	23·24号竖穴实测图 (1/60)	·····237
第 263 图	25·26号竖穴实测图 (1/60)	·····239
第 264 图	1~3号土壙实测图 (1/30)	·····241
第 265 图	土壙出土土器实测图① (1/3)	·····242
第 266 图	4·6~8号土壙实测图 (1/40)	·····244
第 267 图	土壙出土土器实测图② (1/3)	·····245
第 268 图	9·11·13·15号土壙实测图 (1/40)	·····247
第 269 图	10·12·31·33号土壙实测图 (1/30)	·····248
第 270 图	土壙出土土器实测图③ (1/3)	·····250
第 271 图	16~19号土壙实测图 (1/40)	·····252
第 272 图	20·22~24号土壙实测图 (1/60)	·····254
第 273 图	21·28号土壙实测图 (1/40)	·····256
第 274 图	25·26·32号土壙实测图 (1/40)	·····257

第 275 図	土壙出土土器実測図④ (1/3)	258
第 276 図	27・29号土壙実測図 (1/30)	259
第 277 図	30・40~42号土壙実測図 (1/60)	261
第 278 図	34・35号土壙実測図 (1/40)	262
第 279 図	土壙出土土器実測図⑤ (1/3)	264
第 280 図	36~39号土壙実測図 (1/40)	266
第 281 図	土壙出土土器実測図⑥ (1/3)	268
第 282 図	43~45号土壙実測図 (1/40)	269
第 283 図	46号土壙実測図 (1/60)	270
第 284 図	土壙出土土器実測図⑦ (1/3)	271
第 285 図	土壙等出土土器実測図① (1/6)	272
第 286 図	土壙等出土土器実測図② (1/6)	273
第 287 図	1号集石土壙実測図 (1/40)	274
第 288 図	東群集石土壙 (2~9号) 実測図 (1/100)	275
第 289 図	3号集石土壙実測図 (1/20)	276
第 290 図	中央群集石土壙 (10~15号) 実測図 (1/100)	278
第 291 図	西群集石土壙 (16~18号) 実測図 (1/100)	280
第 292 図	集石土壙出土遺物実測図 (1/3)	281

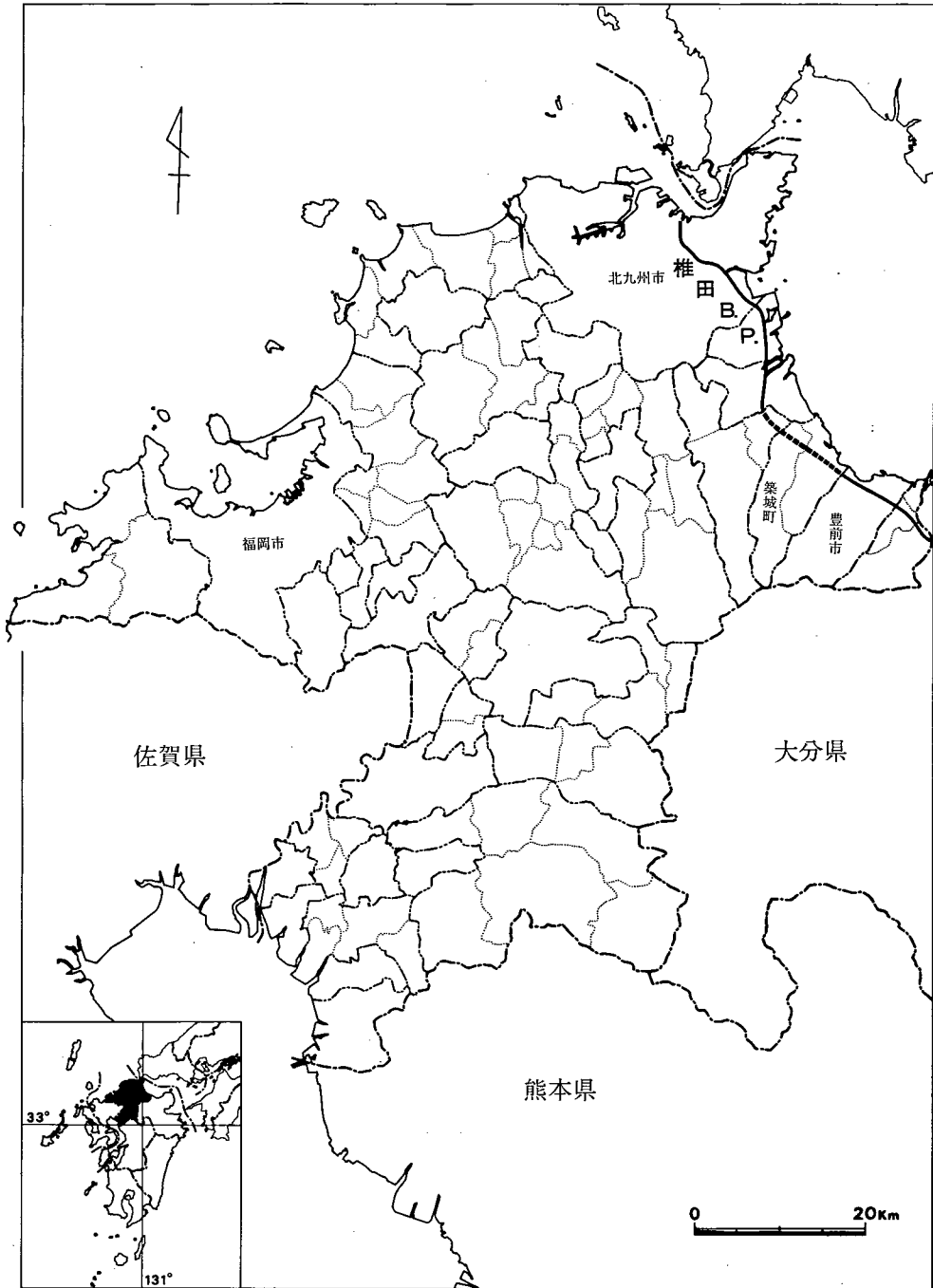
付 図 目 次

付 図 1	赤幡森ヶ坪遺跡遺構配置図 (1/300)
付 図 2	十双遺跡遺構配置図 (1/300)

表 目 次

表 1	住居跡一覧表①	193
表 2	住居跡一覧表②	194
表 3	住居跡一覧表③	195

表 4	住居跡一覽表④	196
表 5	住居跡一覽表⑤	197
表 6	建物跡一覽表①	224
表 7	建物跡一覽表②	225



第 1 図 国道10号線椎田バイパス路線図

I 調査組織と調査経過

福岡県教育委員会は、日本道路公団より委嘱された一般国道10号線椎田バイパス(豊津～椎田間約10.3km)に係る埋蔵文化財の発掘調査を昭和61年度以降行っている。本書掲載の塞ノ神遺跡(第7-A地点)・赤幡森ヶ坪遺跡(第7-B地点)・十双遺跡(第7-C地点)は、昭和63年12月～平成元年10月に調査を行った。以下、個別に調査経過を記す。

塞ノ神遺跡の調査経過

発掘調査は、椎田バイパス建設工事区のSTA36+60の地元住民が“塞ノ神”と呼称する積石塚を中心とした450㎡(拡張したため実際は1,400㎡)を対象地とした。

平成元年6月3日に広末・安永遺跡(第8地点)の調査が終了し、テント・器材類を塞ノ神遺跡に移動した。調査は荒地地となっていた積石塚の伐採・清掃から始め、12日に全景写真を撮影し、土層観察用のベルトを残して塚の掘り下げにかかった。22日に表層の掘り下げが終了し、平板測量・写真撮影を行う。28日に重機で塚を断ち割り、土層図を作成する。

塚東側の試掘トレンチの土層観察により、谷(自然流路)が入っていることが判明していたので、調査区を拡張し谷部の掘り下げにかかった。しかし、湧水が著しく、ポンプアップしながらの調査となった。7月1日に谷部北端の土層断面図を作成し、塞ノ神遺跡の調査を終了した。同日にテント・器材を赤幡森ヶ坪遺跡に移動する。

赤幡森ヶ坪遺跡の調査経過

第7-B地点とした赤幡森ヶ坪遺跡は、椎田バイパスの料金徴収所に該当し、道路建設工事区のSTA38+10のC.BOXからSTA40+10のC.BOX間の長さ200m×幅130mを調査対象地とした。遺構密度の薄い東側を排土置場として確保し、バックホー・ブルドーザー・ダンプカーを導入して表土除去を行ったが、表土が20～60cmと厚く、かつ面積が広大であるため作業は遅々として進まなかった。

平成元年2月22日に調査を開始したが、調査期間が限られており、工事工程の優先順位を考慮して調査を行った。まず、調査区中央をクランク形に走る農道の付け替え工事のため西端部に一等最初に着手した。次に、調査区の南端を走る工事用道路と水路の付け替え工事のため北端部の調査にかかった。遺構面が砂地であり、晴天が続いたため遺構検出に手間取った。しかし、東端部を排土置場としたため工事用道路が確保できず、結局、中央部の調査が終了次第、工事用道路を南端から切り替えることになった。

調査区中央から北側にかけてと南壁中央部分は、住居跡・建物跡等の遺構が密集し、かつ層

位的に住居が重複していたため調査に難航した。また、料金徴収施設の上下部構築物の工事にかかりたいとの道路公団側の要請を受けて、中央住居群より南半分を明け渡した。住居跡の調査を終了し、下層の谷部の掘り下げにかかったのは9月に入ってからであった。谷部からは弥生後期後半の土器群が出土し、その量はパンコン200箱にも上った。10月7日に谷部の全景写真・地形測量を行い赤幡森ヶ坪遺跡の調査を終了した。

調査面積は、約15,400㎡(下層分を含めると約23,000㎡)に及び、検出した遺構には、竪穴住居跡110軒・建物跡38棟・竪穴26基・土壇46基・集石土壇18基・鍛冶炉跡2基・溝16条・谷等がある。出土遺物には、弥生土器・須恵器・土師器をはじめとして、緑釉陶器・製塩土器・土製模造品・飯蛸壺・瓦・フイゴ羽口・石帯、石斧・砥石・石庖丁等の石器類、刀子・鉄鏃等の鉄器類等が出土した。

十双遺跡の調査経過

第7-C地点とした十双遺跡は、赤幡森ヶ坪遺跡に東接し、昭和63年12月1日より調査を開始した。発掘調査は、椎田バイパス建設工事区のSTA40+10～42+30の区間を対象地とし、東側から着手した。調査区内には、2本の農業用水路が走り、水路工事を優先したいとの公団側の要望により、水路付近の調査を優先的に行った。発掘は平成元年1月28日に終わり、作業員を広末・安永遺跡の方に回した。2月10日までに実測を完了し、調査を一時中断した。

西半部の調査は、7月21日から再開したものの赤幡森ヶ坪遺跡と並行しての調査とならざるを得ず、労働力の分散により調査工程の進捗に支障をきたした。10月に入り、主力を注いでいた赤幡森ヶ坪遺跡の調査も山場を向かえたので、作業員の大半を十双遺跡の方に回し、谷部の掘り下げを行った。同月21日に谷部の調査を終了し、発掘器材を文化課甘木発掘調査事務所に搬入した。検出した遺構には、住居跡34軒・建物跡2棟・貯蔵穴3基・土壇11基・溝15条があり、銀製品・漢式土器の出土は特筆される。

調査にあたり、日本道路公団椎田事務所、村本・岡崎共同企業体の協力を得た。また、黙々と作業に従事して頂いた地元作業員の方々には、心から感謝したい。なお、塞ノ神遺跡・赤幡森ヶ坪遺跡・十双遺跡における昭和63・平成元年度の調査関係者は、次のとおりである。

日本道路公団福岡建設局

局長	杉田 美昭 (前任)	白井 信	
次長	吉岡 康行 (前任)	進 哲美	
総務部長	安元 富次 (前任)	進 哲美 (前任)	堀 義任
管理課長	副島 紀昭		
管理課長代理	三野 徳博 (前任)	荒木 恒久	

日本道路公団福岡建設局椎田バイパス工事事務所

所 長	山田 勝博 (前任)	大島 勲
副所長 (事務)	佐藤 健一郎	
副所長 (技術)	坂牧 嵩三 (前任)	国本 忠敬
庶務課長	櫻川 敏博	
用地課長	二神 鉄男 (前任)	益岡 政夫
工務課長	佐々木俊治 (前任)	飯田 文夫
築城工事区工事長	山口 宗雄	
椎田工事区工事長	黒田 義樹	

福岡県教育委員会

総 括

教育 長	竹井 宏 (前任)	御手洗 康
教育次長	大鶴 英雄 (前任)	淵上 雄幸
指導第二部長	大平 岩男 (前任)	月森 清三郎
指導代二部参事	葉石 勲 (兼任)	
文化課長	葉石 勲 (前任)	六本木聖久
文化課長補佐	平 聖峰 (前任)	安野 義勝
文化課長技術補佐	宮小路賀宏 (前任)	石松 好雄
文化課参事補佐	柳田 康雄	
同	井上 裕弘	

庶務・管理

文化課庶務係長	池原 脩二
文化課主任主事	沢田 俊夫

調 査

文化課調査班総括	柳田 康雄 (兼任)
同 総括補佐	井上 裕弘 (兼任, 赤幡森ヶ坪遺跡担当)
同 技術主査	木下 修
同 技術主査	中間 研志 (十双遺跡担当, 現福岡教育事務所)
同 主任技師	伊崎 俊秋 (赤幡森ヶ坪遺跡担当, 現京築教育事務所)
同 技 師	小田 和利 (塞ノ神・赤幡森ヶ坪遺跡担当, 現主任技師)
同 技 師	水ノ江和同
同 文化財専門員	木村 幾多郎 (現大分市立歴史資料館長)

同 文化財専門員 日高 正幸
 調査補助員 高田 一弘
 武田 光正 (現遠賀町教育委員会)

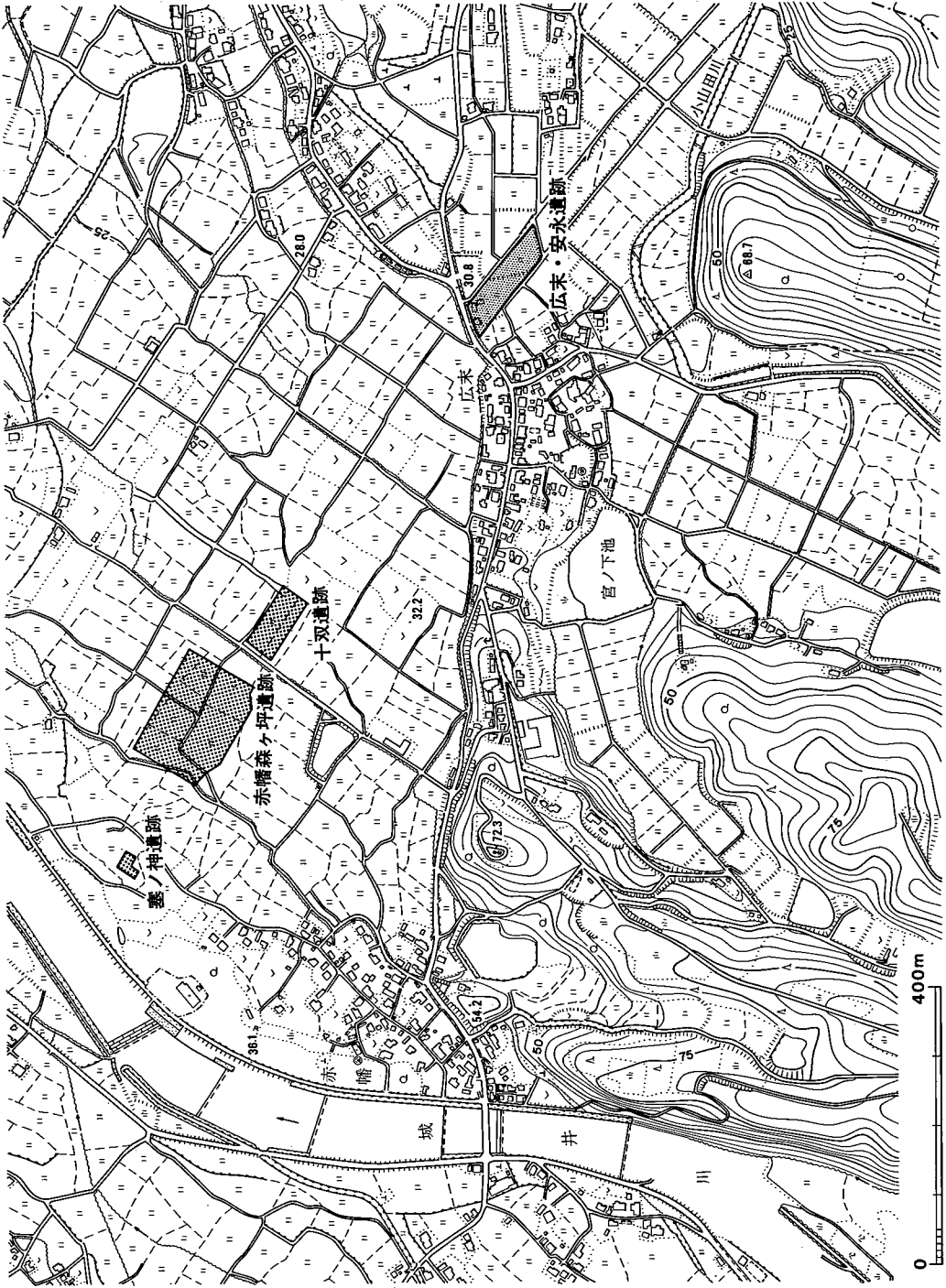
〈発掘作業員〉

池永一午	江本忠雄	久保 悟	久保正輝	久保田 久	塩田大一	舟川武雄
永井 守	西村徳彦	横田 昇	横田信夫	阿部洋子	池永さだ子	池永なみ
井上キクエ	井上ミツエ	井上ふみよ	稲田ヒサ子	稲田芳子	稲田和子	稲田十九子
上田栄子	江本シズ子	江本ツジエ	大田キヨ子	奥本ツジエ	海津恵子	加藤昌子
鎌田つる代	川端トシコ	木戸時子	久保年子	久保ミヨ子	神 マス子	笹田明代
笹田千代子	笹田直美	塩田孝子	塩田テツ子	塩田幸子	繁永和子	正野鈴子
末永キヨ子	高橋愛子	高橋知子	谷中さち子	田原ふじ子	田村シズ子	田村ナミ子
田村キョ子	田村初子	西森和子	西森ヒサ子	久本英子	平田綾子	平田春子
平塚クニ子	平塚武子	平塚悦子	藤本フジ子	中野貞子	中江スズミ	中山紀子
中山ヒサエ	永尾愛子	橋本富代	前田フサエ	水上八重子	宮尾茂子	宮原 操
村上シゲ子	森 伸美	森淵アツ子	薬丸ぎんこ	山添サカエ	横田シズ子	横田みち子
米田公子	米谷美千子					

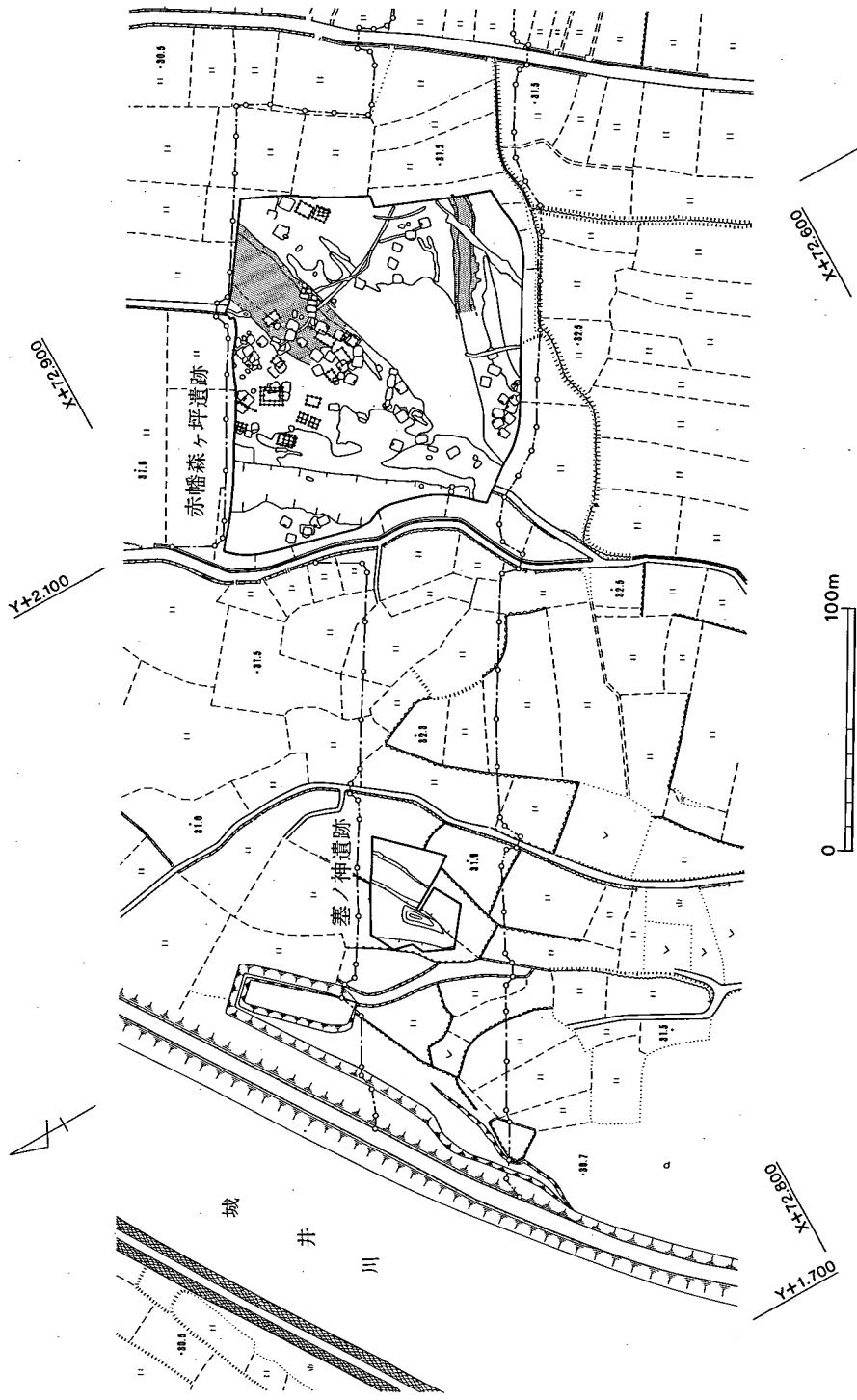
出土遺物の復原整理作業は、九州歴史資料館・福岡県文化課甘木発掘調査事務所において岩瀬正信整理指導員の下に奥村千恵子・桑本亜子・友清光子・平石史子・有馬信子・植山洋子・鬼木美知子・栗栖絹子・中塩屋リツ子・西奇子・小島佐枝子・石井紀美子・尾花道子・藤井カオルさんが行った。遺物の写真撮影・焼付けは、岡紀久夫氏の手を煩わせた。遺物実測・製図作業は、鬼木つや子・若松三枝子・小崎みゆき・棚町洋子・友永澄子・中川真理子・渡辺輝子・高瀬照美・大野愛里・豊福弥生・原カヨ子・水野美奈・関久江・岡由美子・黒木美幸・塩足里美・近藤美恵子・上野周平諸氏の多大なる協力があった。

本報告書作成にあたり、福岡大学小田富士雄、新日鉄大澤正己、北九州市立自然史博物館藤井厚志、松下辰章、宮本工の諸氏には有益な御指導・御教示を得た。末筆ながら、記して感謝致します。

(小田)



第 2 図 赤幡森ノ坪遺跡周辺地形図 (1/10,000)



第 3 図 塞ノ神遺跡・赤幡森ヶ坪遺跡地形図 (1/3,000)

II 遺跡の位置と環境

遺跡の位置

塞ノ神遺跡は、福岡県築上郡築城町大字赤幡字徳一624・625番地他に所在する。赤幡森ヶ坪遺跡は、同町大字赤幡字森ヶ坪690・700番地、同字柿ヶ坪643・650番地他に所在する。十双遺跡は、同町大字赤幡字二連町678番地、同町大字広末17・18番地他に所在する。三遺跡は、城井川右岸の氾濫原に形成された遺跡で、標高は31mを測る。次に、本題に入る前に築城町について若干紹介しよう。

築城町は、福岡県の東部に位置する人口約11,500人・面積約67.9km²の農林業を主体とする町である。町域は南北に細長く、東縁は椎田町・豊前市に接し、西縁は豊津町・犀川町と接し、北縁は行橋市と接し、南縁は大分県山国町と境する。町域の大半を山間地が占めているため、宅地は北側の平地部に集中している。JR日豊本線・国道10号線が町域の北端をかすめ、休日ともなると潮干狩客のマイカーが国道に列を連ね、10号線バイパスの建設は地域住民に切望されていた。

犬ヶ岳(1130.8m)・経読岳(992.0m)・雁股山(807.1m)・瓦岳(624m)・大平山(597.4m)と連なる国定公園の英彦山・犬ヶ岳開析溶岩山地は、八手状に海岸部へ伸展し、海岸部に近接するに従い徐々にその高さを減ずる。山地間には、祓川・城井川・岩丸川・極楽寺川・真如寺川・角田川・佐井川・山国川等の侵食作用により形成された細長い谷底平野がよく発達しており、この地域特有の景観を呈する(図版1)。

歴史的環境

築城町において本格的な発掘調査がなされたのは、昭和57・58年度の農業基盤整備事業に伴う安永遺跡(註1)の調査が最初であり、今回の椎田バイパス建設に伴う一連の発掘調査の成果は、これまで不明瞭であった築城町・椎田町の歴史解明に一石を投じるものとなった。ここでは、椎田バイパス関係の遺跡を中心にみてゆこう。

祓川右岸の河岸段丘上に立地する皆見遺跡(第1地点)は、弥生時代から奈良時代にかけての複合遺跡であり、竪穴式住居跡6軒・掘立柱建物跡13棟・井戸1基・溝5条等が検出された(註2)。皆見遺跡に西接するカワラケ田遺跡(第2地点)では、竪穴式住居跡4軒・掘立柱建物跡2棟・土壙墓4基・貯蔵穴6基・溝8条等の弥生時代から歴史時代にかけての遺構が調査された(註3)。

築城インターとして調査を行った安武土井の内遺跡(第6-A地点)・安武深田遺跡(第6-B地点)は、城井川左岸の河岸段丘上に立地し、両遺跡は谷部を隔てている。安武深田遺跡は、弥生時代後期初頭と古墳時代後期の二時期を主体とする集落跡である。弥生時代の遺構としては、

竪穴式住居跡9軒・土壙墓3基・甕棺墓1基・土壙2基が検出された。50号住居跡内には、製鉄遺構があり、鉄銹をはじめとした豊富な鉄器の出土をみた。また、鳥と動物の脚を表現したと思われる壺形の絵画土器が出土した。

古墳時代の遺構としては、竪穴式住居跡64軒・掘立柱建物跡30棟・土壙24基・土壙墓1基・溝15条等が調査された。奈良時代の遺構には、竪穴式住居跡9軒・掘立柱建物跡2棟・溝11条がある。谷部からは、弥生時代後期の祭祀土器や石器類が、奈良時代のものとしては、木簡・墨書土器の他、木製農工具・杭等が多量に出土している(註4)。特に、木簡・墨書土器の発見は、豊前国府との関連を窺わせる貴重な発見となった。また、安武土井の内遺跡からは、弥生・古墳時代の住居跡、落し穴30基が調査され、両者は同一遺跡として捉えられよう(註5)。

塞ノ神遺跡(第7-A地点)は、地元住民の信仰の対象とされてきた積石塚であるが、調査の結果、戦後の地下げで周囲の川原石を積み上げたものと判明した(註6)。

料金徴収所として調査を行った赤幡森ヶ坪遺跡(第7-B地点)は、城井川右岸の氾濫原に形成された弥生時代後期から奈良時代にかけての大集落跡で、竪穴式住居跡110軒・掘立柱建物跡38棟・竪穴26基・土壙46基・鍛冶炉跡2基・溝16条等の遺構が重層的に検出された(註7)。住居跡のなかには、竪穴のコーナー部にカマドを付設した特異な住居跡がある。

出土遺物には、石帯・緑釉陶器・製塩土器・銅鏡・瓦・土製模造品等があり、注目される。また、住居群下層の谷状遺構からは、弥生時代後期中葉～終末の土器群の投棄がみられ、その出土量はパンコン200箱にも上る。

十双遺跡(第7-C地点)は、赤幡森ヶ坪遺跡に東接する遺跡で、縄文時代晩期から古墳時代にかけての複合遺跡である(註8)。当遺跡の主体は、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の32軒からなる集落跡で、9号住居跡からは銀製の带状金具が、13号住居跡からは瓦質の漢式土器が発見され、朝鮮半島と交流があったものと推測される。また、住居跡の分布状況からみて、当遺跡と赤幡森ヶ坪遺跡とは一連のものと考えられ、当地における母村的な集落と目される。

広末・安永遺跡(第8地点)は、昭和58年度の調査により、弥生時代中期前半の集落跡と判明していたが、今回の調査で、終末期の横穴式石室墳2基・奈良時代の土壙墓4基、それに縄文時代の所産と考えられる落し穴6基が新たに検出された。特に、落し穴の発見は、京築地方において初めての検出例として注目される(註9)。

広幡城遺跡(第9地点)は、小山田川と岩丸川に挟まれた丘陵突端部(標高60m)に立地し、宇都宮氏が黒田氏の攻撃に激しく対抗した中世山城として知られていた。今回の調査対象地区は、所謂本丸全域と二の丸の一部にあたり、防御のための土塁と濠が検出された。本丸内には礎石が残存しており、礎石を有する櫓が存在したのであろう。また、本丸の周辺では、弥生時代前期の住居跡・貯蔵穴も検出している(註10)。当地特有の八手状の丘陵には、宇都宮氏関係の山城が多く築城され、広末・安永遺跡が立地する丘陵にも赤幡城が占地している。

山崎遺跡（第10地点）は、岩丸川の右岸に位置する縄文時代から中世にかけての複合遺跡で、縄文時代後期の住居跡・土壌、古墳時代から奈良時代にかけての竪穴式住居跡・掘立柱建物跡、13世紀後半の掘立柱建物跡群・柵列等の調査がなされた（註11）。当遺跡は、昭和62年度に椎田町浄水場建設に伴い調査された石町遺跡と一連の遺跡で、石町遺跡の4号土壌からは土偶の胸部破片が出土している（註12）。

石堂中後ヶ谷古墳群（第21地点）・菜切古墳群（第22地点）・頭無古墳群（第23地点）は、石堂川と上の河内川に挟まれた丘陵の先端部に位置する古墳時代終末期の群集墳である。石堂中後ヶ谷古墳群では、16基の古墳が調査された。墳形は5～10m程の円形で、南東方向に開口する単室の両袖横穴式石室を内部主体とする。羨道部はハ字形に開き、その前面には外護列石を設けているが、墳丘を全周するものではない（註13）。

菜切古墳群では、6基の古墳が調査された。墳形は石堂中後ヶ谷古墳群同様、5～10m程の円形で、南東方向に開口する単室の両袖横穴式・無袖横穴式石室を内部主体とする。羨道部はハ字形に開き、その前面のみに外護列石を設けている（註14）。

当地方の八手状丘陵の先端部には、古墳時代後期になると多数の群集墳が築造される。築城町内においては、後谷古墳・辛山古墳群・王子ヶ迫古墳群・横井塚古墳群・安永古墳群・堂がへり古墳群・朝日寺古墳群等が存在していたが、近年の田畑造営や宅地開発に伴いその大半が未調査のまま消滅したことは悔やまれる。

椎田バイパス関係の一連の発掘調査は、遺跡破壊を前提としたものであるが、重要な遺跡の消滅と引き換えに縄文時代から中世に至るまでの膨大なデータを提供してくれた。それら出土資料を如何に活用してゆくのが、我々に課せられた今後の課題と言えよう。（小田）

註1 酒井仁夫編 「安永遺跡」（築城町文化財調査報告書第1集） 1984 築城町教育委員会

註2 緒方 泉編 「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告-3-」 1991 福岡県教育委員会

註3 註2に同じ。

註4 木下修・水ノ江和同編 「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告-4-」 1991 福岡県教育委員会

註5 註4に同じ。

註6 1989年に福岡県教育委員会が調査を実施。本書所収。

註7 1989年に福岡県教育委員会が調査を実施。本書所収。

註8 1988・89年に福岡県教育委員会が調査を実施。本書所収。

註9 小田和利編 「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告-5-」 1991 福岡県教育委員会

註10 1988・89年に福岡県教育委員会が調査を実施。本年度の報告予定。

註11 1987年に福岡県教育委員会が調査を実施。本年度の報告予定。

註12 高橋 章編 「石町遺跡」（椎田町文化財調査報告書第1集） 1988 椎田町教育委員会

註13 緒方 泉編 「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告-2-」 1990 福岡県教育委員会

註14 註13に同じ。

III 各遺跡の調査

塞ノ神遺跡

1. 調査の概要

椎田バイパス第7-A地点とした塞ノ神遺跡は、築城町大字赤幡字徳一に所在する。小字は塞ノ神ではなく徳一であるが、調査対象の積石塚は地元住民が通称“塞ノ神”と称し、信仰の対象となってきたという経緯をふまえて遺跡名を塞ノ神遺跡とした。

積石塚は、拳大から人頭大程の河原石を積み上げたもので、築造時期・性格及び試掘トレンチで確認していた谷部との前後関係を確認するために地形測量・写真撮影後に塚を重機で断ち割った。塚の土層図作成・写真撮影後に谷部の発掘にかかった。

谷部の規模は試掘トレンチで大略判明していたが、田植の時期と重複し、湧水が著しく、調査に難航した。谷部からの出土遺物は殆どなく、自然流路の状況を呈していた。

2. 遺構と出土遺物

(1) 積石塚 (図版1-2~5, 第5・6図)

1. 調査前の状況 (図版1-2)

調査に入る以前の塚の現状は、雑草が青々と生い茂り、コンクリートブロック等の廃棄物が周囲に散在し、如何なる形状を呈しているのか判別できない状態にあった。また、塚の石垣はマムシの巣窟になっているとの地元作業員の助言により、素手で直接石を除去しないように指図して作業を進めた。マムシに十分気を付けながら雑草を伐採し、周囲の廃材を片付けると塚の形状が明らかになった(図版2)。

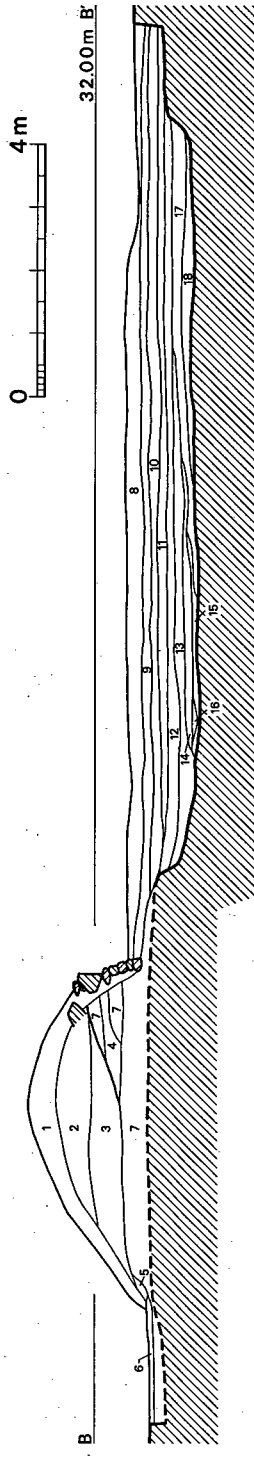
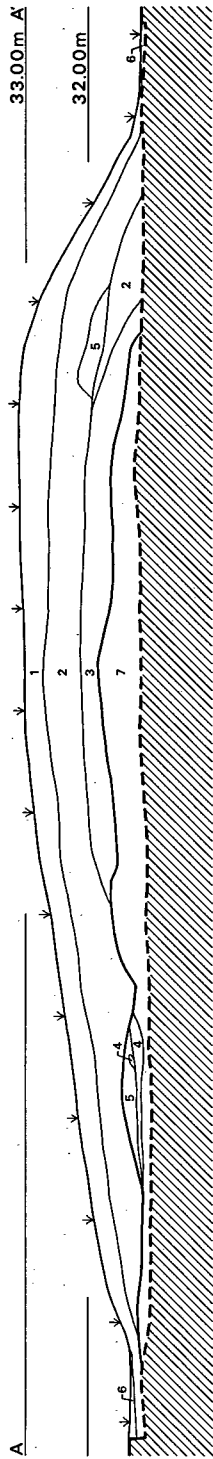
塚は全長20.6m、最大幅5.8m、高さ2.08mを測り、長軸を東西に取る。東側は高く膨らみ、西側が低く細長くなっているため、横からみたら鯨の様な形状を呈している。南側面は基底部に人頭大の石を据え、その上に10~15cm大の石を石垣状に12~15段程積み上げていた。北側側面は石垣状ではなく、積むと言うよりは石を単に乗せた様な状況であり、傾斜も南側に比してかなり緩やかである。これは、南側面が地境にあたり、石の崩落を防ぐため後世に積んだものと思われる。

2. 表土除去後の状況 (図版3-2・4)

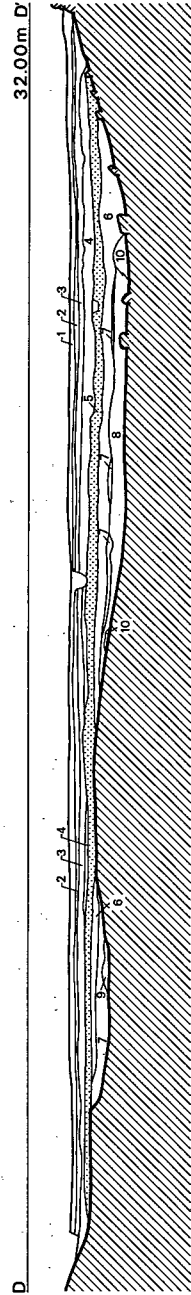
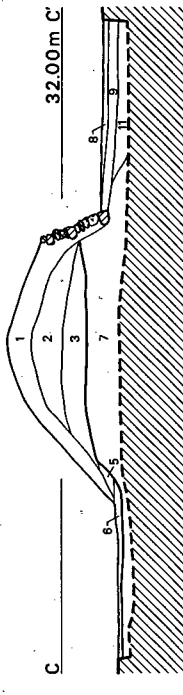
塚そのものが石積みであり、表土と言う表現は適切ではないが、一応礫と黒褐色土の混合土(礫が大半)を表層①層とみなして掘り下げた。表層は東側で0.6m、南側で0.3mの厚さを測る。表層中からは、弥生土器・須恵器・土師器・青磁・瓦器・陶器・磁器・砥石・銅銭等種々の遺物が出土した。



第 5 図 塞ノ神遺跡地形測量図 (1/300)



- | | | |
|---------------|------------|-----------|
| 1 礫と黒褐色土の混合 | 10 淡黄灰色砂質土 | 1 耕作土 |
| 2 褐色土 (円礫多し) | 11 黄褐色砂質土 | 2 床土 |
| 3 暗褐色土 (円礫多し) | 12 黄灰色粘砂 | 3 緑灰色砂質土 |
| 4 暗褐色砂 | 13 緑灰色粘砂 | 4 淡緑灰色砂質土 |
| 5 緑灰色砂質土 | 14 灰褐色細砂 | 5 黄緑色砂質土 |
| 6 黄褐色砂質土 | 15 灰白色粗砂 | 6 暗緑色砂質土 |
| 7 砂礫層 | 16 灰白色砂 | 7 淡緑色シルト |
| 8 耕作土 | 17 緑褐色細砂 | 8 灰青色シルト |
| 9 灰褐色砂質土 | 18 灰白色粗砂 | 9 茶褐色粗砂 |
| | | 10 黄褐色礫砂 |



第 6 図 塞ノ神遺跡土層断面実測図 (1/120)

表層除去後の規模は、全長20.5m、最大幅6.2m、高さ1.56mを測り、除去以前に比して高さが0.5m低くなった程度である。②層は円礫と褐色土であり、①層同様礫が大半を占める。③層は円礫と暗褐色土の混合土で、土師器皿・瓦器碗・青磁碗が出土した。塚の盛土は、①～③層である(図版5)。⑦層とした地山は、円礫と灰白色砂との砂礫層であり、城井川の氾濫によって形成されたものと考えられる。

出土遺物(図版7・8、第7～11図)

磁器(1～3) 1は器高4.3cm、口径7.1cm、高台径2.7cmを測る小型の碗で、II区表層の出土。体部には連続菱形文の中を牡丹様の花びら文様で充填し、口唇部と体部下位の圏線間を2本一組の縦線で埋める。花びら文様は、二種類のスタンプ文により、交互に施している。釉薬は乳白色を呈する。2はIII区①層出土の染付碗で、器高5.8cm、口径10.7cm、高台径4.3cmを測る。口縁部内面は斜格文、体部外面は二種類の斜格文を交互に施し、見込みには源氏香文が描かれる。釉薬は淡緑白色を呈する。3はI区①層出土の無地の碗で、III区①層出土品と接合した。器高4.9cm、口径12.0cm、高台径5.6cmを測る。体部はチョコレート色の釉掛け。

陶器(4・5) 4はIII区①層出土の厚手の染付碗で、口径は10.1cmに復原した。体部外面には、簡略化した唐草文を施す。緑褐色の胎に緑灰色の釉掛けで、貫入がみられる。5はII区B①層出土の無地の碗で、III区①層出土品と接合した。器高5.6cm、復原口径8.3cm、高台径3.8cmを測り、体部は鉄釉掛け。

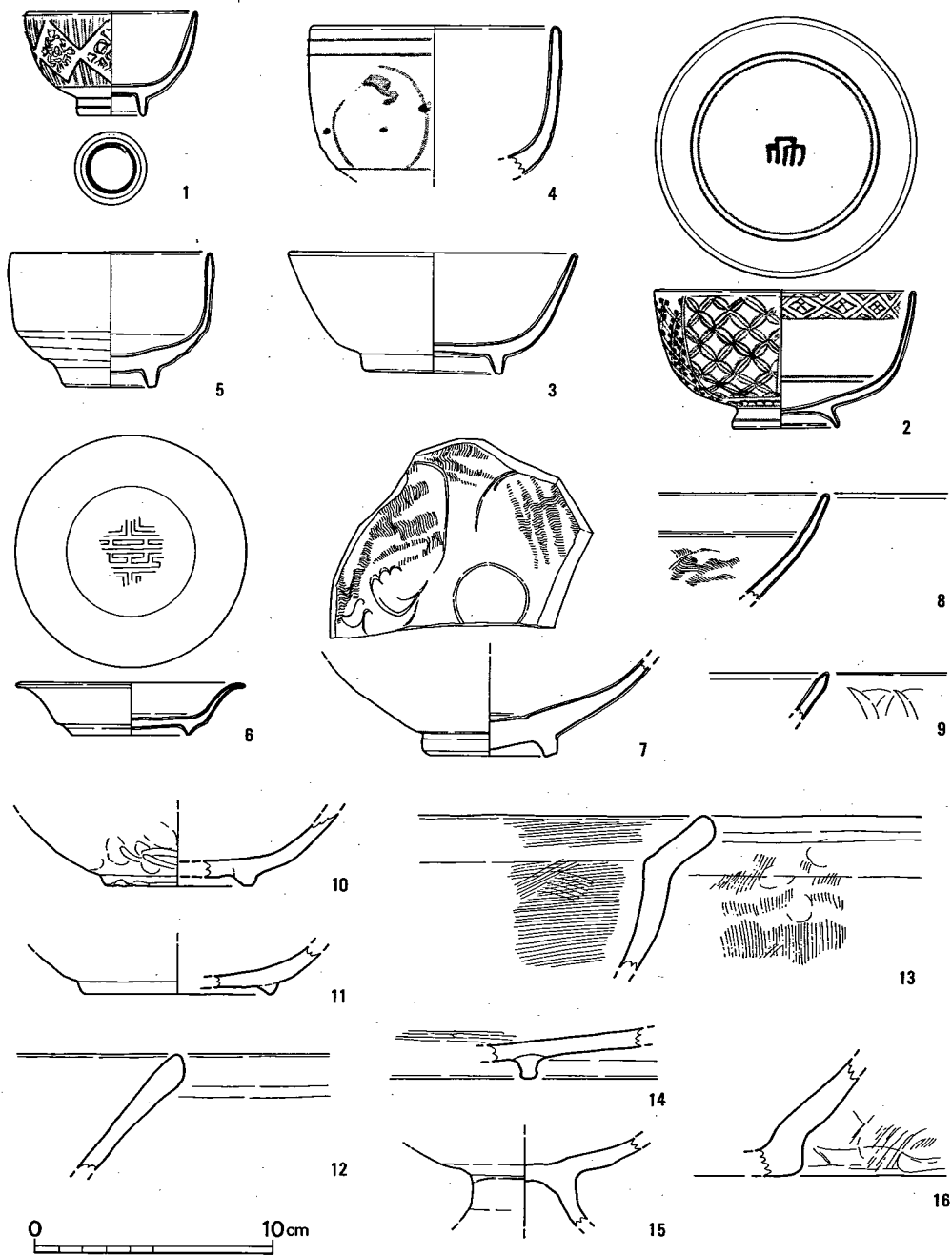
白磁(6) 6はIV区①層出土の小皿で、器高2.2cm、復原口径9.0cm、高台径5.0cmを測る。口縁部は大きく開き、見込にはへら先による雷文が施される。釉薬は乳白色を呈する。

青磁(7～9・17・18) 7は碗の底部破片で、高台高0.9cm、径5.6cmを測る。II区①層の出土。見込みには、櫛描き文様を施す。暗灰色の胎に淡緑灰色の釉掛かり。8は碗の口縁部破片で、内面には櫛描き文様を施す。暗灰色の胎に淡緑灰色の釉掛け。I区①層の出土。9も碗の口縁部小片で、蓮弁がみられる。灰白色の胎に淡緑色の釉掛け。表層より出土した。

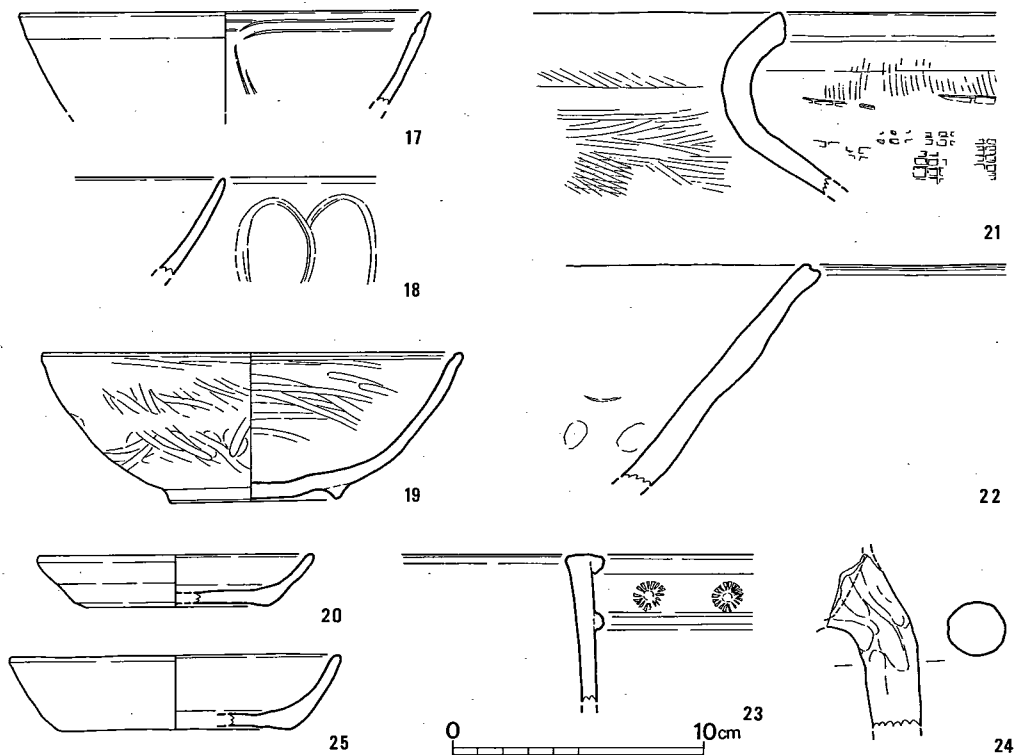
17・18はI・II区②・③層出土の碗の口縁部小片で、17の内面はへら先による沈線文を施す。灰白色の胎に淡緑色の釉掛け。18の外面はへら沈線による蓮弁文を施す。褐色の胎に緑灰色の釉掛け。

瓦器(10・11・19・20) 10・11は瓦器碗の底部破片で、高台径は10が6.2cm、11は7.6cmに復原した。10はナデ調整の後に雑なへらミガキを施す。焼成はともに良好で、色調は10が灰色、11は灰褐色を呈する。19は碗で、器高5.8cm、口径16.5cm、高台径6.8cmを測る。口縁部内面にはへら先による沈線を一条巡らす。調整はナデの後に雑なへらミガキを施す。

20は皿で、器高2.0cm、復原口径10.8cm、復原底径7.2cmを測る。体部はナデ調整により、外底面には板目圧痕がある。10・11はI区①層の出土、19・20はI・II区②・③層の出土。



第 7 図 塞ノ神遺跡出土土器実測図① (1/3)



第 8 図 塞ノ神遺跡出土土器実測図② (1/3)

瓦質土器 (12・16・21・23・24) 12は口縁部破片で、こね鉢になろう。口縁部は肥厚し、ナデ調整による。焼成は良好で、暗灰色を呈する。16は底部片で、甕になるか。外面はハケ目、内面はナデによる。焼成は良好で、灰褐色を呈する。12は表層、16はⅣ区①層の出土。

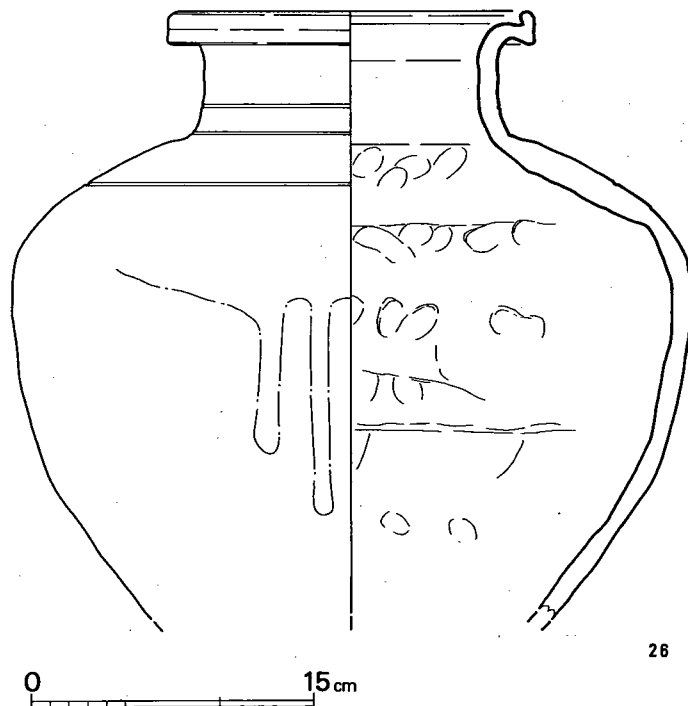
21は甕の口縁部破片。口縁部ヨコナデ、外面格子タタキ目、内面ハケ目調整による。焼成は良好で、暗紫色を呈する。23は鉢の口縁部片で、口縁部と頸部に粘土帯を貼付し、その間に菊花状のスタンプ文を押圧する。焼成は良好で、褐色を呈する。Ⅰ・Ⅱ区②・③層の出土。24は鼎の脚部破片で、Ⅳ区②・③層の出土。

須恵質土器 (22) 22は口縁部破片で、こね鉢になるか。口唇部にはへら沈線を施し、器面はナデ調整による。焼成は堅緻で、内面には灰が厚く被る。Ⅳ区②・③層の出土。

土師器 (13・15) 13は口縁部破片であるが、鍋になろう。調整は外面ハケ目→ナデ消し、内面ハケ目(9条/cm)による。15は高坏で、口縁部と脚裾部を欠く。器面はナデ調整による。焼成は良好で、黒灰色を呈する。13はⅣ区①層の出土で、15はⅢ区①層の出土。

土師質土器 (14) 14は底部破片で、高さ1cm程の高台を貼付する。焼成は良好で、緑灰色を呈する。Ⅳ区①層の出土。

常滑壺 (26) 26はIIA・B区①層及びIII A区①層出土の壺で、残高は32.7cmを測る。口径は18.2cm、胴部最大径は35.4cmに復原した。口縁部はよく締まった頸部から直線的に立上がり、一旦屈曲して、さらに上方に突出する。肩部はよく張っており、頸部と胴部最大径のやや上位にヘラ先による沈線を巡らす。灰白色の胎に灰緑色の釉掛かりで、胴下半部は茶褐色に発色している。肩部外面は、灰被りが顕著である。

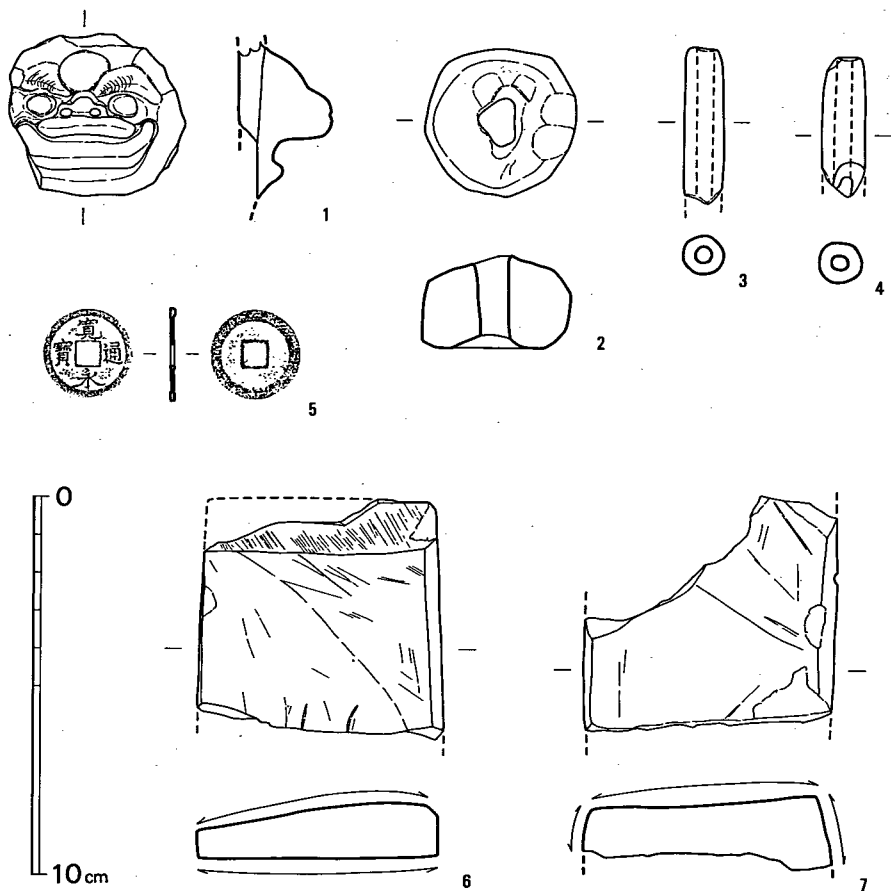


第 9 図 塞ノ神遺跡出土土器実測図③ (1/4)

獸脚 (1) 1は瓦質の獸脚破片である。口を大きく空けた獅子をモチーフとしている。火車になるか。塚表層の出土である。

紡錘車 (2) 2はII A区①層出土の土製紡錘車である。手捏ね風で、径3.9cm、高さ2.4cm、重さ37.3gを測る。側面には板状圧痕がみられる。胎土に石英・雲母などを含む。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。

土錘 (3・4) 3・4は管状土錘で、共に欠損品。3は残長3.7cm、径1.1cm、4は残長4.2cm、径1.1cmを測る。色調は3が橙褐色、4は黒色(黒斑)を呈し、3はIV区掘り下げ時の出土品。4はI・II区②・③層の出土である。

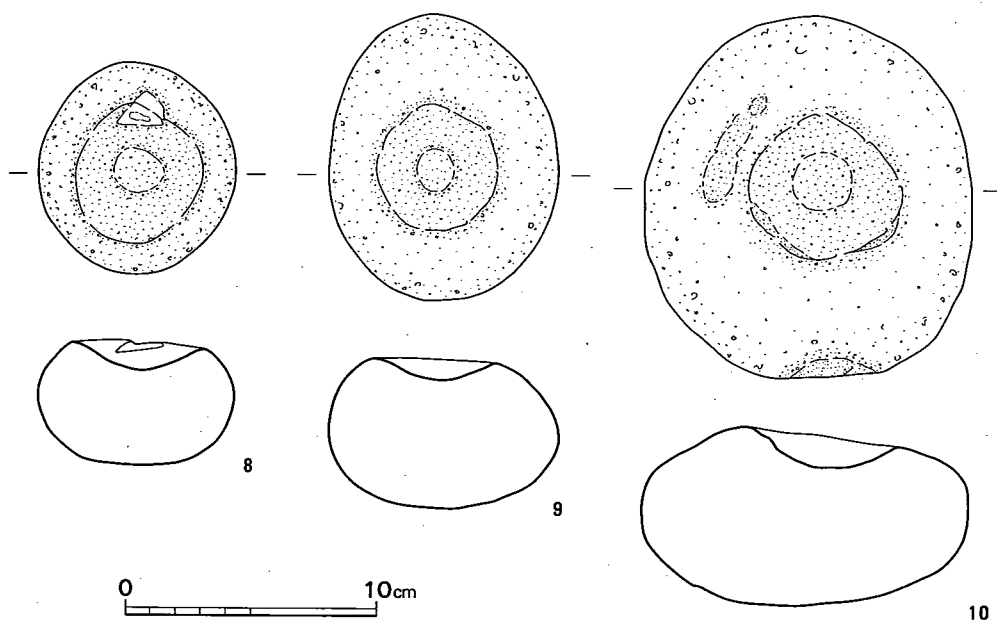


第 10 図 塞ノ神遺跡出土遺物実測図① (1/2)

銅 銭 (5) IV区①層出土の寛永通寶である。径2.4cm, 重さ2.8gを測る。

砥 石 (6・7) 6はⅢA区①層出土の仕上げ砥石で, 残存長6.2cm, 幅6.4cm, 厚さ1.5cmを測る。上下2面を砥面とし, 側縁は面取りを施す。砥面には, 線刻状の砥痕がみられる。色調は茶褐色を呈し, 粘板岩製であろう。7は砂岩製の砥石欠損品で, 幅6.7cmを測る。3面を砥面としている。上面は火を受け, 黒化している。Ⅲ区①層の出土である。

凹 石 (8~10) 8~10は安山岩製の凹石で, 8は長径8.4cm, 短径7.9cm, 厚さ4.9cm, 重さ370gを測り, 表層の出土である。9は長径10.3cm, 短径9.1cm, 厚さ5.9cm, 重さ720gを測り, 表層より出土した。10は長径14.3cm, 短径12.8cm, 厚さ7.0cm, 重さ1,540gを測り, Ⅲ区①層の出土である。



第 11 図 塞ノ神遺跡出土遺物実測図② (1/3)

(2) 自然流路 (図版 6, 第 5・6 図)

積石塚の南側に設定したトレンチで谷状の落込みを確認していたが、出土遺物も少ないことから東半部のみ、塚の調査終了後に掘り下げることにした。

東端部の埋土は、上層から①耕作土、②床土、③緑灰色砂質土、④淡緑灰色砂質土、⑤黄緑色砂質土、⑥暗緑色砂質土、⑦淡緑色シルト、⑧灰青色シルト、⑨茶褐色粗砂、⑩黄褐色礫砂が堆積していた。⑤の黄緑色砂質土には円礫が多く入っており、④層との境に土師器が包含されていた。

塚の⑦層は地山の砂礫層で、堤防状に周囲より一段高くなっており、落込みの肩部にあたる。また、第 3 図の地形図を見ると、落込みの北壁が水田の地境と重複しており、190mまでは確認できる。⑤層より下位には遺物が包含されておらず、人為的な掘削によるものとは考え難いので、自然流路とした。

流路は、中央部での幅 9.2m・深さ 0.45m、東端部での幅 11.4m・深さ 0.54m を測り、積石塚の南側を西→東方向に流れていたようである。湧水が著しく、調査に支障をきたした。流路からは、土師器皿が出土したのみである。

出土遺物（図版7，第8図25）

土師器（25）25は皿で，器高2.9cm，復原口径12.8cm，復原底径9.0cmを測る。器面調整は，体部ヨコナデ，底部ヘラケズリによる。焼成は良好で，淡橙色を呈する。

3. 小 結

塞ノ神遺跡では，積石塚と自然流路を検出した程度である。積石塚は河原石を積み上げたもので，墓壙・石塔等は存在しない。塚の時期・性格に若干ふれてまとめとしたい。

積石塚は全長20.6m，最大幅5.8m，高さ2.08mを測り，側面観は鯨状を呈する。南側縁は円礫を積み上げているが，北側は単に石を乗せただけの状況であった。また，表層には，陶磁器・青磁・瓦器・須恵器・土師器・弥生土器が混在しており，調査当初は地下げに伴い出てきた河原石を積み上げたものと考えていた。しかし，遺物が混入しているのは表層のみで，2～4層からは13～14世紀代の青磁・瓦器・土師器が出土しており，近世陶磁器の混入は見られない。

塚の南側には，幅11.4mの自然流路が西→東方向に流れており，流路の北側肩部は塚の南側縁と重複する。地山の⑦層は，土層断面図のC-C間において幅9mの自然堤防状を呈し，東端部の土層断面図においても幅2m程の僅かな高まりが観察される。

これらのことから，中世期において自然堤防状の高まりに河原石を積み上げた小塚に，近世の地下げで排出した河原石を積み上げ，近現代において塞の神一道祖神として信仰の対象に転化したものと考えられる。また，中世期に信仰の対象であったかどうかは，関連する遺物の出土がなく不明。

類似例に築上郡新吉富村に所在する吉岡遺跡第5調査区の集石遺構（註1），嘉穂郡穂波町清水遺跡（註2）等がある。吉岡遺跡の集積遺構は，長軸9.4m，短軸7.3m，高さ1.6mの三角形状を呈する。河原石を積み上げた塚で，表層に五輪塔が散在していたが内部施設はなかった。

清水遺跡は水田の畦畔上に立地し，長軸4m弱，短軸2m，高さ2mを測り，三角形状を呈する。河原石を積み上げた塚であり，出土遺物には弥生土器・須恵器・青磁・白磁・陶磁器があり，塞の神遺跡と共通する。

中世の塚に関しては，民間信仰に関するとか，土地境界を区切る標識であるとされているが，その性格に関しては不明瞭な点が多く，今後とも検討を要する。（小田）

註1 緒方 泉編 『吉岡遺跡』（新吉富村文化財調査報告第6集） 1991 新吉富村教育委員会

註2 毛利哲久編 『穂波地区遺跡群』（穂波町文化財報告書第6集） 1989 穂波町教育委員会

圖 版



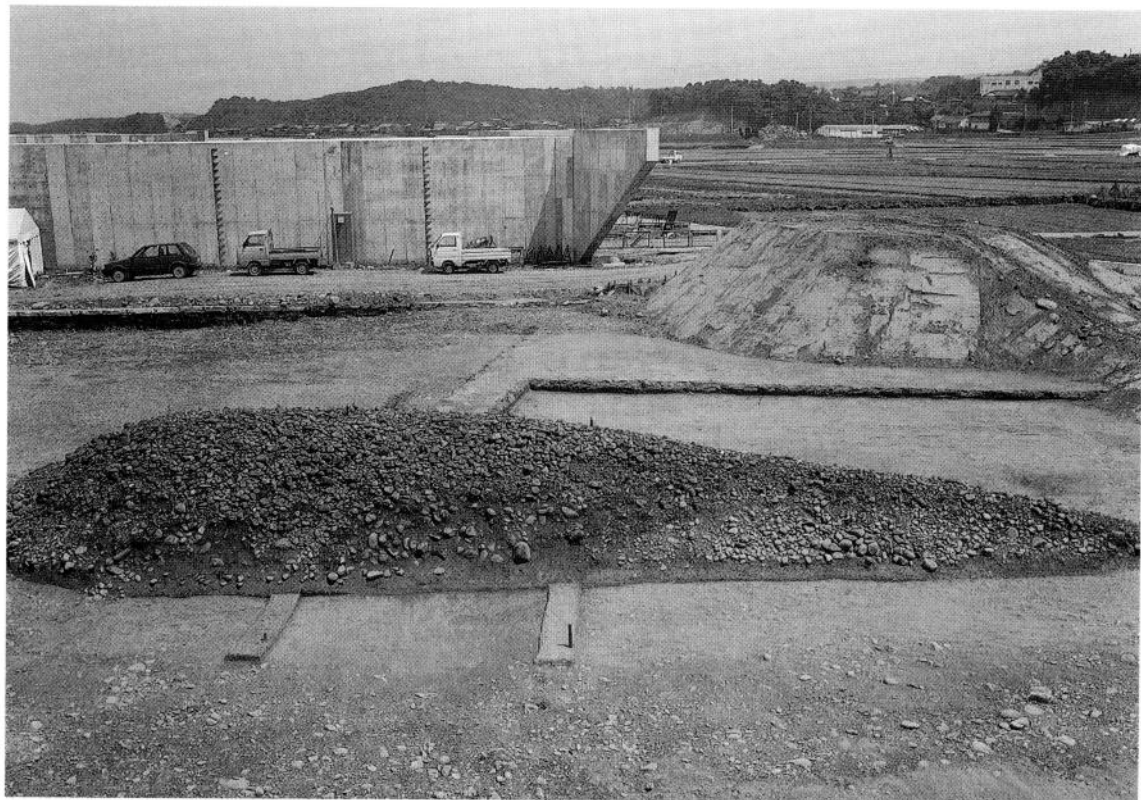
(1) 塞ノ神遺跡周辺航空写真（南東上空から）



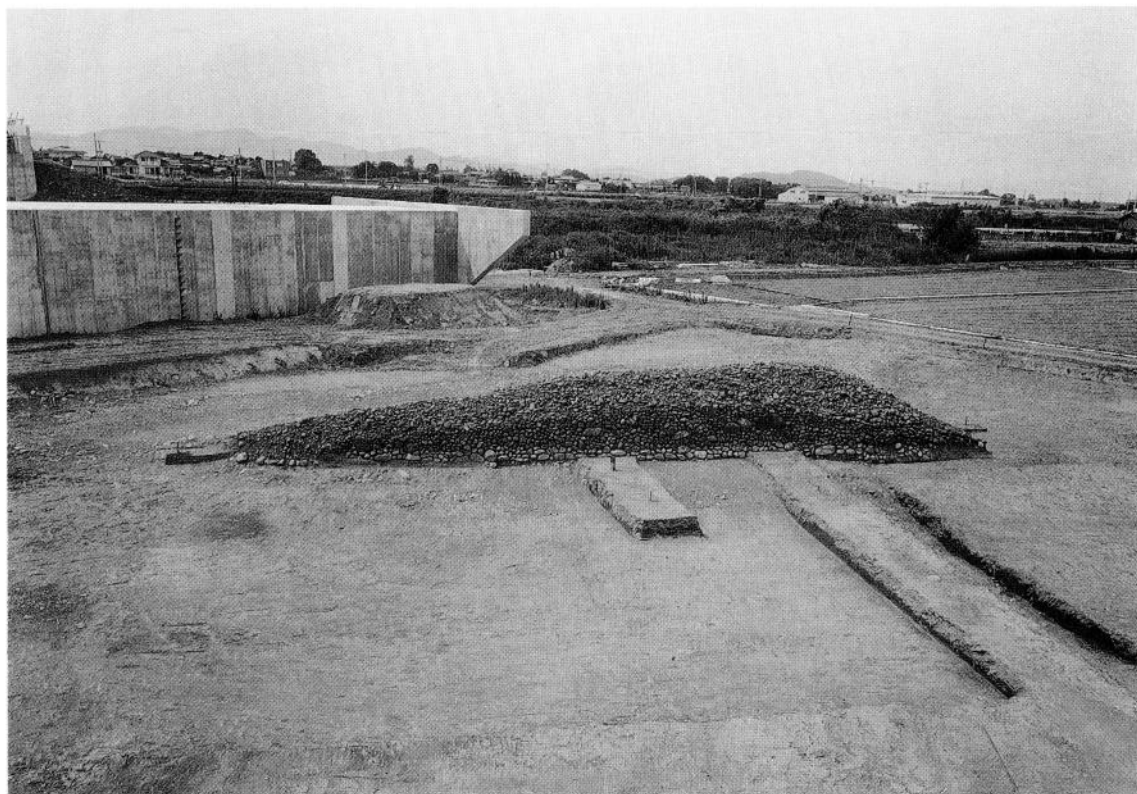
(2) 発掘調査前状況（東から）



(1) 積石塚伐採後（南から）



(2) 積石塚伐採後（北から）



(1) 積石塚全景 (南から)



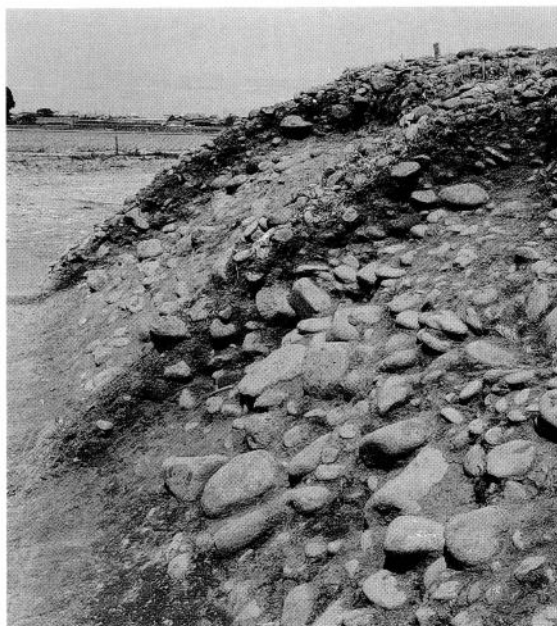
(2) 表土除去後 (南から)



(1) 表土除去後（南東から）



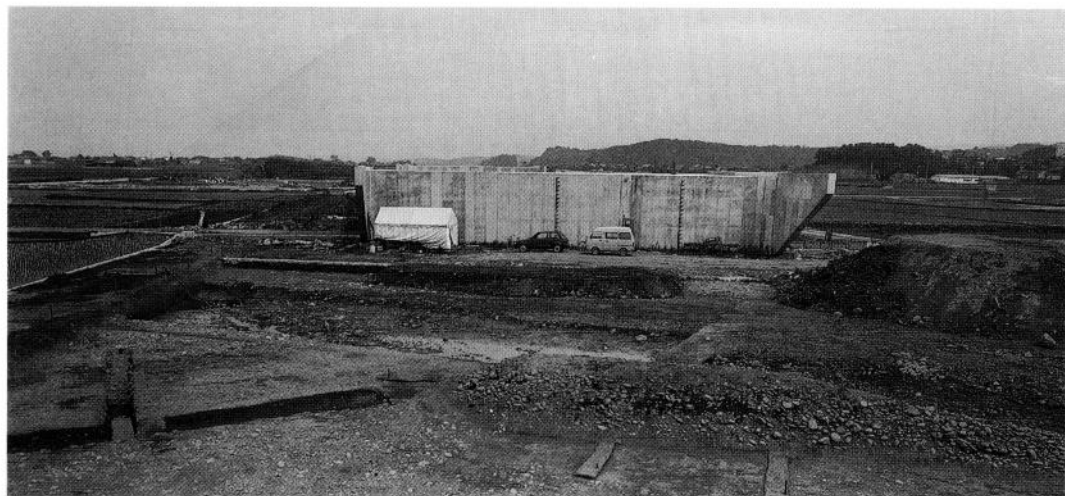
(2) 表土除去後（北から）



(1) 表土堆積状況 (南東から)



(2) 積石塚半裁状況 (南から)



1

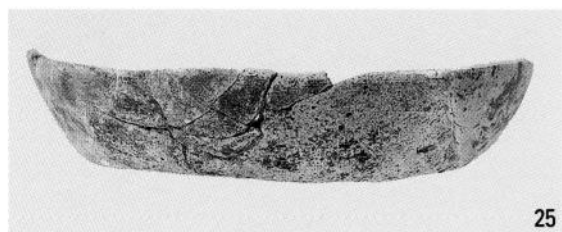
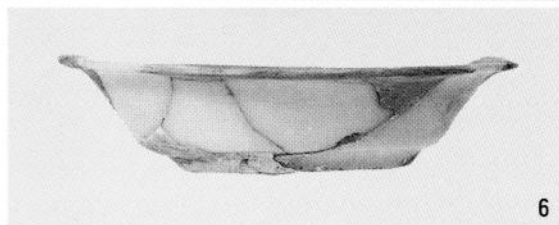
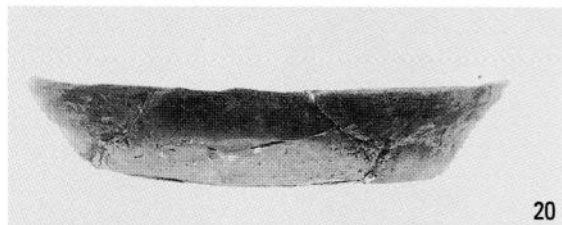


2

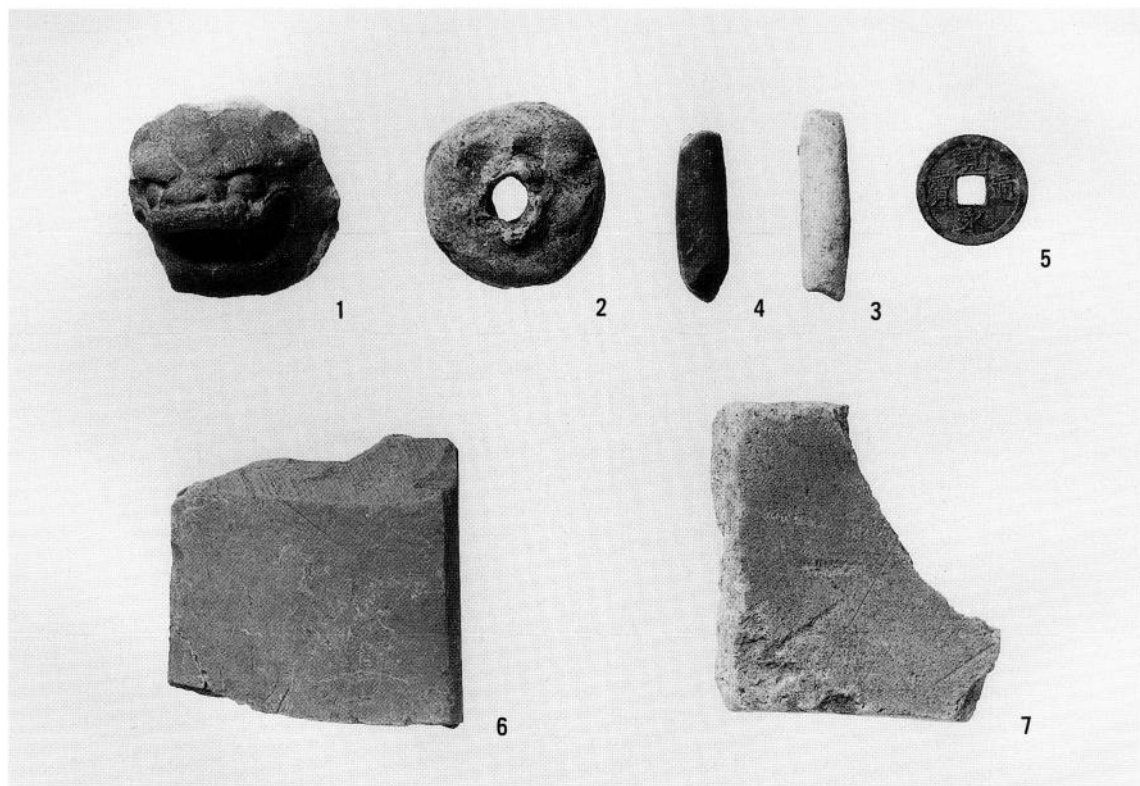


3

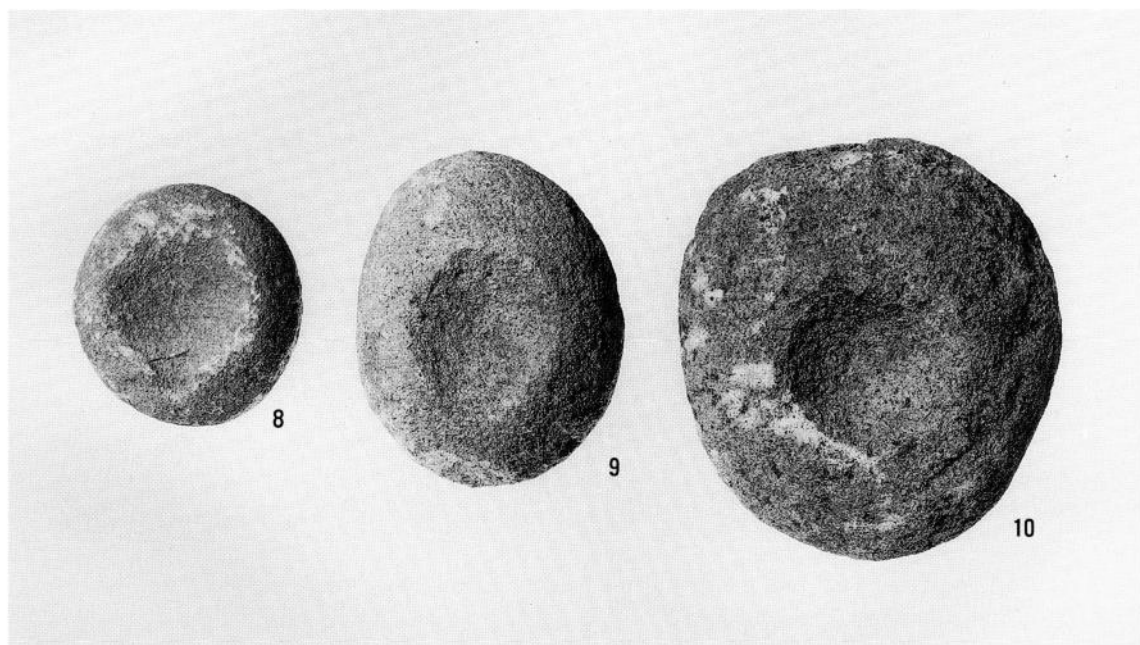
(1) 自然流路全景 (南西から) (2) 自然流路全景 (西から) (3) 土層堆積状況



(1) 積石塚①層出土土器
(2) 積石塚②・③層出土土器
(3) 自然流路出土土器

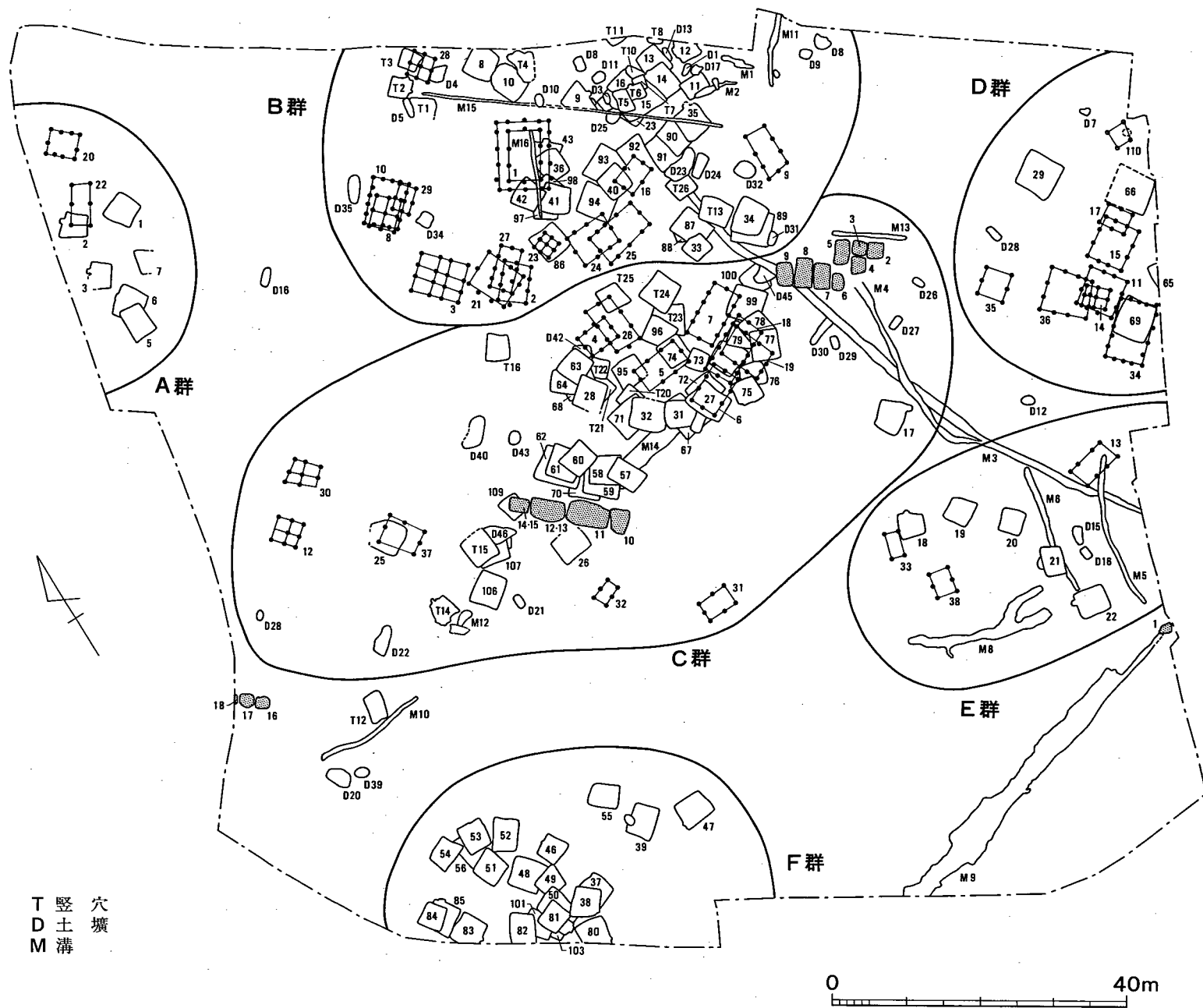


(1) 塞ノ神遺跡出土遺物①



(2) 塞ノ神遺跡出土遺物②

赤幡森ヶ坪遺跡



第 12 図 赤幡森ヶ坪遺跡遺構配置図 (1/800)

1. 調査の概要

赤幡森ヶ坪遺跡は、椎田バイパスの料金徴収所に該当し、長さ200m×幅130mを調査対象とし、実際の調査面積は19,500㎡であった。平成元年2月22日に調査を開始したが、調査期間が限られていたため工事工程の優先順位を考慮して調査を進めた。調査区中央部は、遺構の密度が高く、住居跡・竪穴等の切合いが著しかった。また、住居群の下層には谷状遺構が存在し、パンコン200箱もの土器が出土した。そのため調査の終盤には、工事と併行しての調査とならざるを得なかった。谷部の調査を10月初旬に終えて、赤幡森ヶ坪遺跡の発掘調査を終了した。

2. 遺構と出土遺物

検出した遺構には、住居跡110軒・建物跡38棟・竪穴26基・土塋46基・集石土塋18基・鍛冶炉跡2基・溝16条・谷状遺構等がある。出土遺物には、弥生土器・須恵器・土師器等の日常容器を始めとして、石斧・石庖丁・砥石・石錘・紡錘車等の石器類、鉄鏃・刀子・鉄鎌・紡錘車等の鉄器類、製塩土器・フイゴ羽口等の生産関連遺物、土製模造鏡・ミニチュア土器・土玉等の祭祀遺物と多岐にわたる。また、石帯・緑釉陶器・瓦の出土は特筆される。

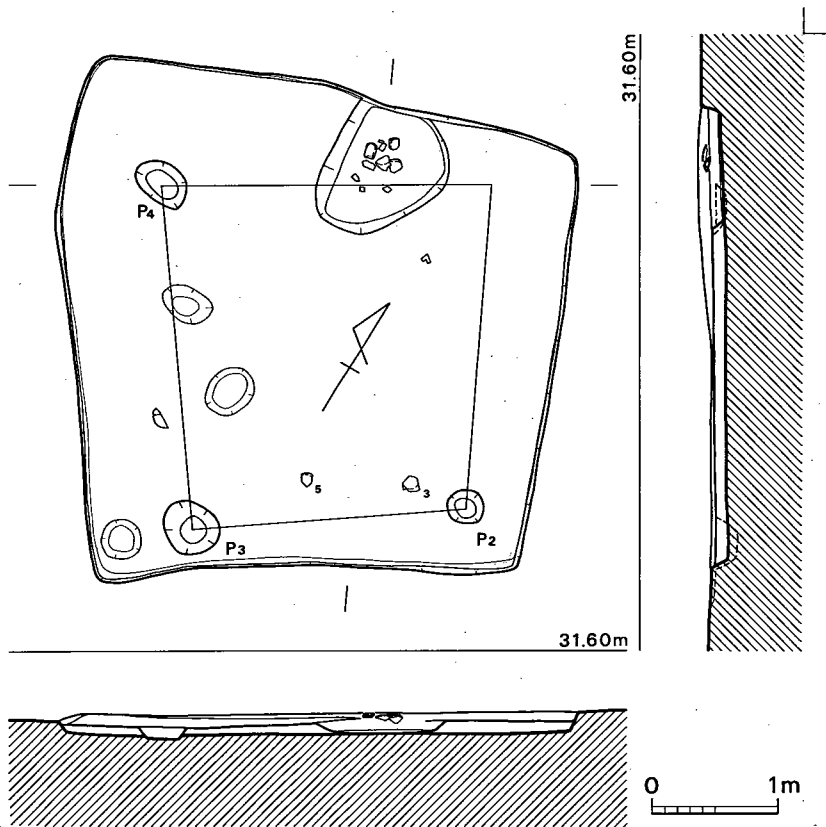
(1) 竪穴式住居跡

調査区の全域において、総数110軒検出した。住居跡は大きくA～F群の6グループに分かれ(第12図)、砂質土に掘り込んでいた。空白部分は、地山の円礫が露出している部分であり(第3図の地形図参照)、当初より住居の築造を避けたものと考えられる。B・C・F群においては住居の重複が著しく、重層的な調査となった。特に、C群においては、3～4回掘り下げて住居跡を検出したという次第である。

カマド・焼土が遺存するものを住居跡としたが、炉跡・カマド及び主柱穴が判然としないものがあり、竪穴とした方が妥当なものも含まれているが、一応住居跡として報告しておく。また、住居跡の説明は時代ごとではなく、検出番号順に行う。

1号住居跡(図版4-1, 第13図)

調査区北西端部に位置し、A群に属する。削平が著しく、壁高は東壁側で7cmを残す程度であった。カマドとみられる焼土の存在から住居跡とした。平面形は不整形を呈し、北壁長3.92m、東壁長3.3m、西壁長4.17mを測る。主柱穴は4本と考えられるが、P1を検出していない。また、柱穴は10cmと浅く、貼床内で納まる。貼床下層からピットを3個検出した。



第 13 図 1号住居跡実測図 (1/60)

カマド (第13図)

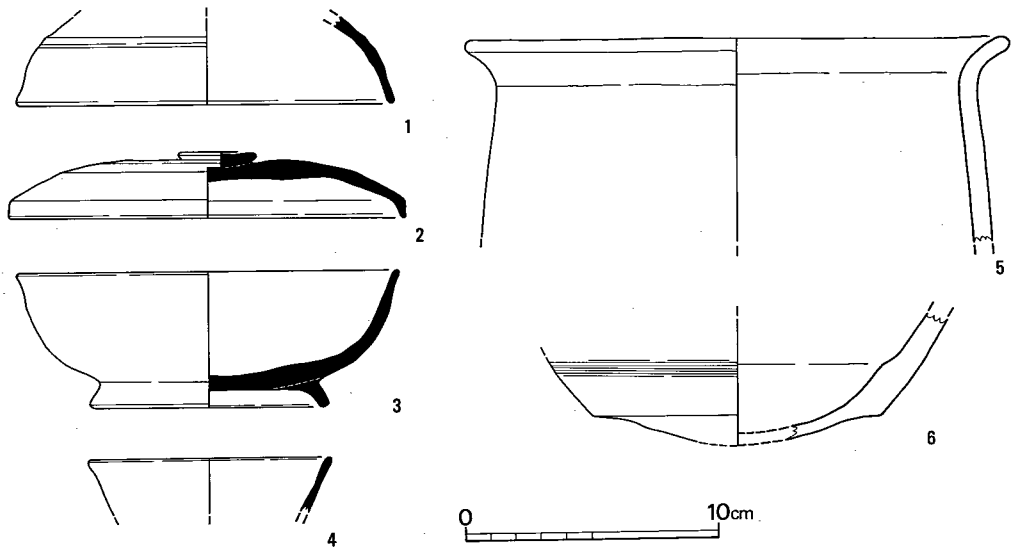
北壁のやや東寄りに付設するものの袖部は留めず、カマド構築時の掘り込みを残すのみである。カマド内には、焼土・炭が入っており、土器が出土した。

出土土器 (図版128-1, 第14図)

須恵器 (1~4) 1・2は坏蓋である。1は口縁部の破片で、復原口径は14.7cmを測る。口唇部は丸く納め、天井部との境にヘラ沈線を巡らす。2は器高2.6cm、口径15.8cmを測り、口縁部は小さく立つ。天井部は低く、偏平な撮みを付す。口縁部ヨコナデ、天井部ヘラケズリ、内面ナデ調整による。焼成は堅緻で、暗青灰色を呈する。カマド内の出土である。

3は高台を付した坏身で、器高5.3cm、復原口径15.2cm、高台径9.8cmを測る。体部は丸みを帯び、八字形の高台に移行する。焼成はやや軟質で、暗灰色を呈する。4は口縁部破片で、臚もしくは椀になるか。焼成は堅緻で、色調は灰青色を呈する。貼床下層より出土した。

土師器 (5・6) 5は甕の口縁~肩部破片で、口径は21.6cmに復原した。口縁部は「く」字状に外反し、口唇部は丸く納める。焼成は良好で、内面橙灰色を呈する。6は甕の底部破片で、



第 14 図 1号住居跡出土土器実測図 (1/3)

カマド内の出土である。外面はカキ目調整により、底面は内外からのヘラケズリにより薄く仕上げられる。また、外底部には煤が遺存する。焼成は良好で、橙褐色を呈する。

住居跡の時期は、カマド内出土の須恵器坏蓋(2)及び3から8世紀中頃と考えられ、1の坏蓋は混入したものであろう。

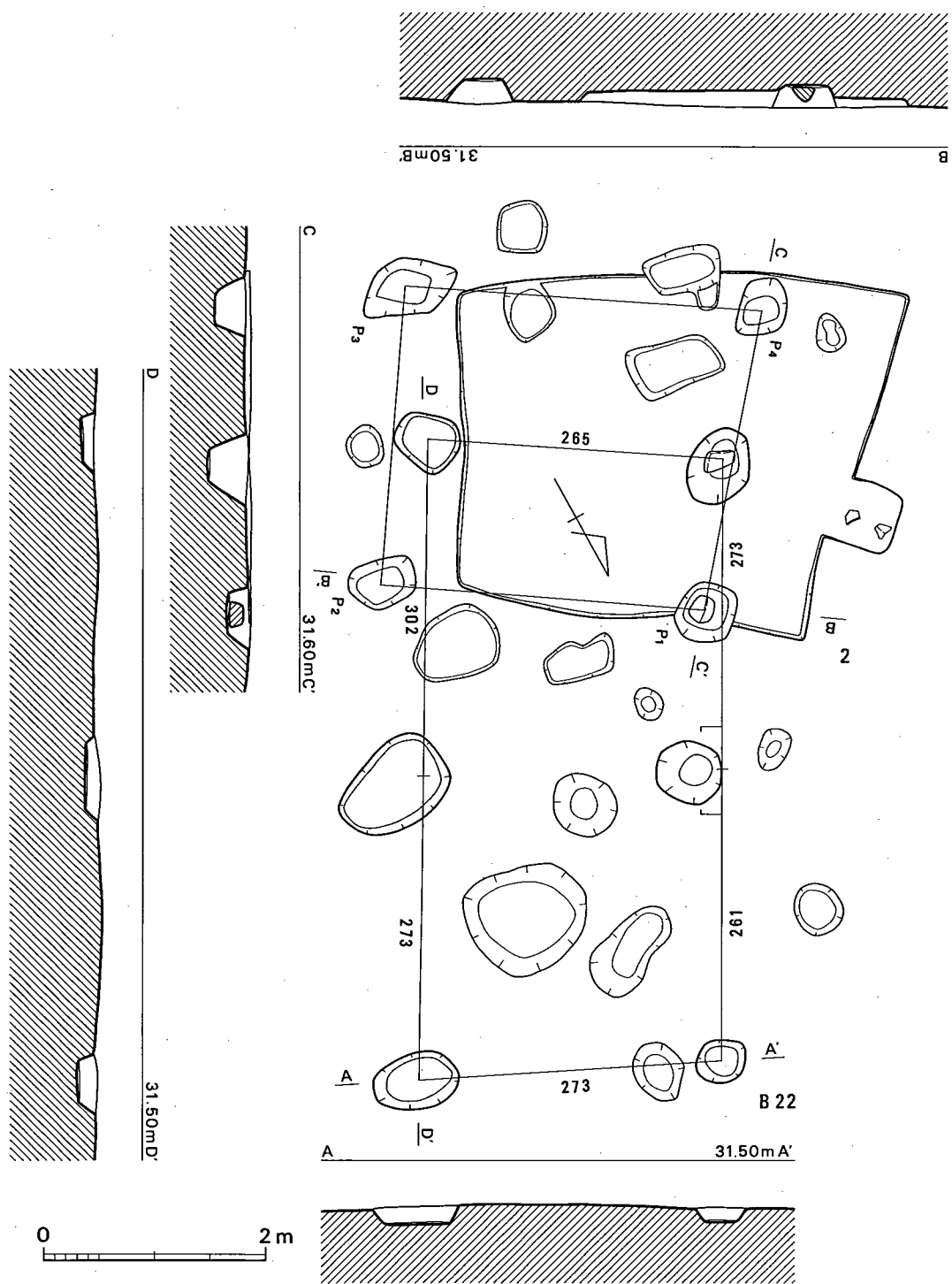
2号住居跡 (第15図)

1号住居跡の2m西側に位置し、22号建物跡と切合い関係にあるが、前後関係は不詳。平面形は不整長方形を呈し、北壁長3.14m、東壁長2.62m、西壁長3.24mを測る。削平が著しく、壁高は殆ど留めない。竪穴部に支柱穴といえる明確なピットが存在しなかったため、竪穴外のP2・3を捨ててP1～4の4本を支柱穴とした。支柱穴は径50～60cm、深さ20～27cmとほぼ同レベルである。P1－2間2.92m、P1－4間2.74mを測り、支柱穴を結んだ線は、掘方同様に不整長方形を呈する。

カマド (第15図)

北西壁のやや北よりに付設される。遺存状態は悪く、袖部さえ留めない。突出型のカマドで、掘方幅59cm、奥行き56cmを測る。カマド内より土師器片が出土したものの図示に耐えない。カマド主軸は、N41°Wを示す。

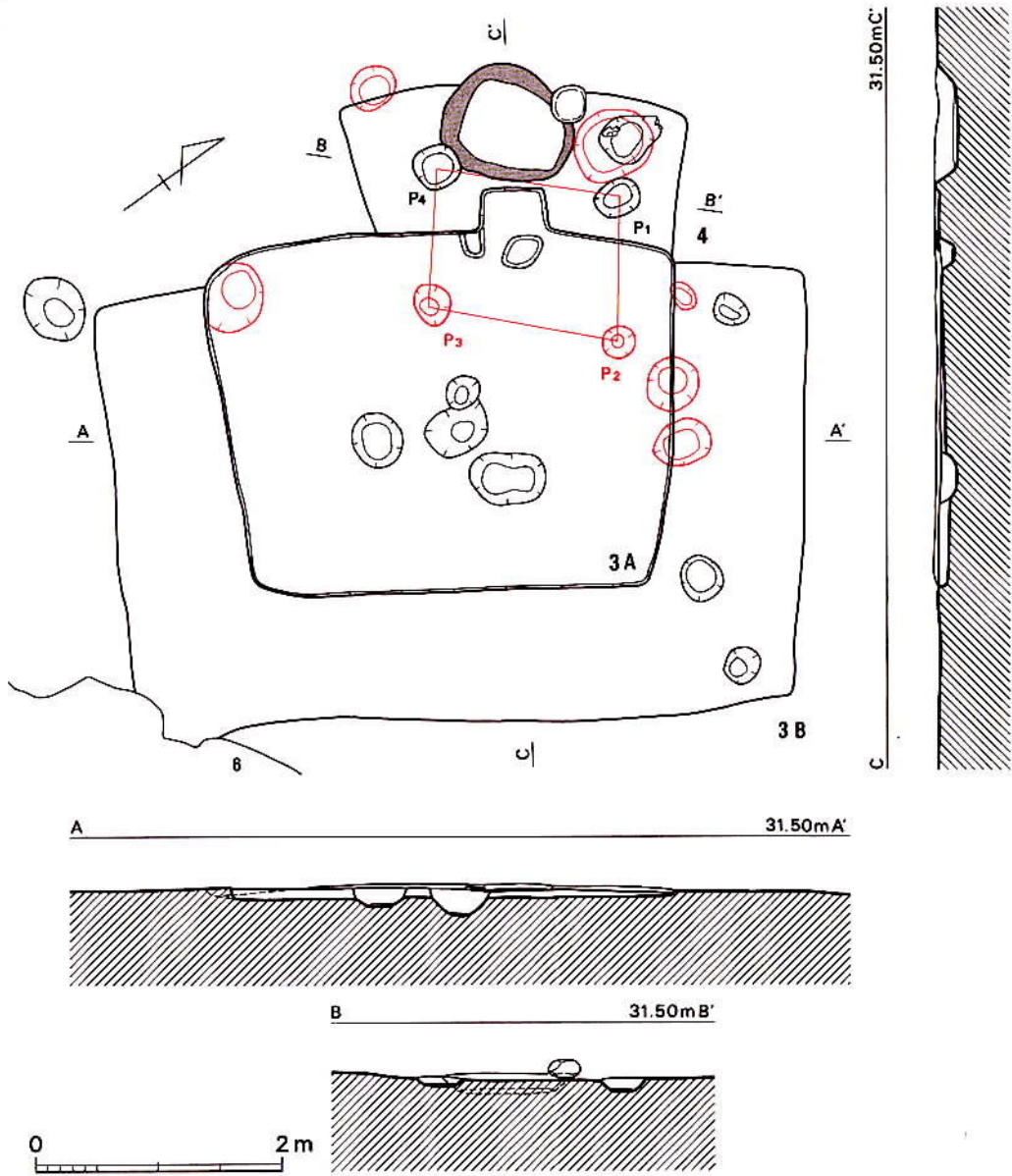
時期を決定できる遺物の出土はないが、カマドが突出型であり、3号住居跡と方位を等しくすることから同時期の存在であろう。



第 15 图 2 号住居跡, 22号建物跡実測図 (1/60)

3号住居跡（図版4-2・5，第16図）

2号住居跡の4m南側に位置し，A群に属する。4号住居跡を切って築造されるが，当住居跡も遺存状態が悪く，壁高は僅か5cmを留める程度である。床面の硬化部が3B号住居跡にも広がっており，両者は単一の遺構として捉えるべきであろうが，3A号住居跡の床面は若干窪んでお



第16図 3・4号住居跡実測図（1/60）

り、別のものとした。3A号住居跡は長軸3.78m、短軸2.94mを測る。3B号住居跡は長軸5.74m、短軸3.66mを測り、南コーナーは6号住居跡と切合う。何れも床面には、柱穴とすべき穴はなく、支柱穴は不明。埋土中より土器が出土しており、4号住居跡と接合関係にある。

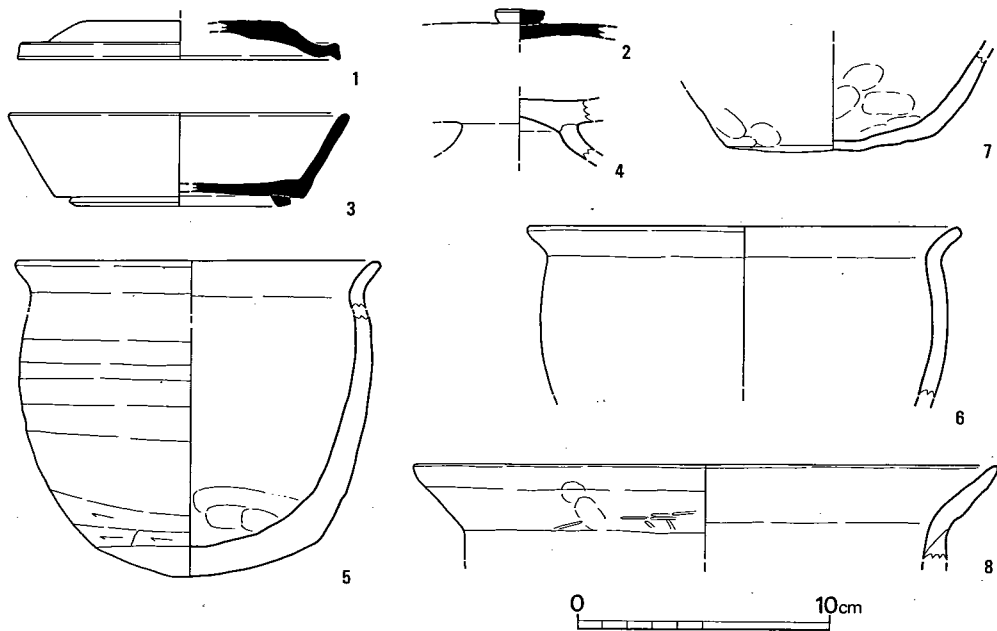
カマド (図版5-2, 第16図)

西壁に付設される突出型のカマドで、左軸を僅かに留める程度である。カマド掘方は、中央部で幅58cm、奥行き34cmで、左袖は基底部幅20cm、残存長20cmを測る。埋土中から土師器甕の破片、製塩土器片が出土した。

出土土器 (図版128-2, 第17図)

須恵器 (1~3) 1・2は坏蓋で、1は撮みを欠き、2は撮み部破片である。1は口径12.7cmに復原した。口縁部は一旦屈曲してから立上がり、偏平な天井部に移行する。2は偏平な擬宝珠形撮みを付したもので、1とは別個体。3は坏身で、低い高台を付す。底部から逆ハ字形に開き、口径は13.4cmに復原した。1が3A号、2・3は3B号の出土である。

土師器 (4~8) 4は高坏の脚部と体部との接合部位の破片である。脚裾はかなり開くようだ。5~8は甕である。5の口縁部と胴部は直接接合せず、図上復原した。口縁部は「く」字形に外反し、底部は丸底を呈する。胴部まではナデによるが、底部付近はヘラケズリを施す。4号住居跡と接合した。6は口縁部破片で、5と形態的には同じであるが、一回り大きい。7



第 17 図 3号住居跡出土土器実測図 (1/3)

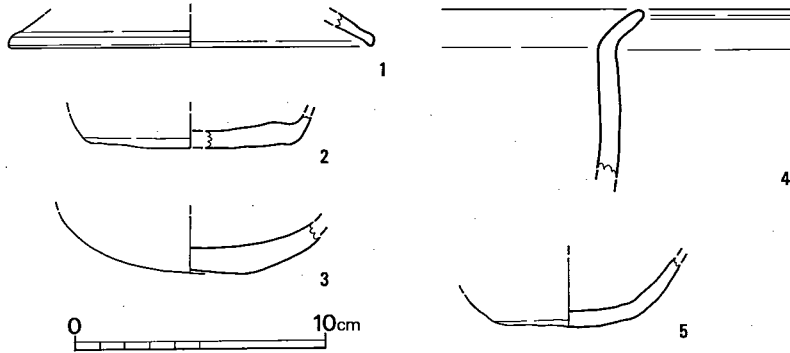
は底部破片で、内外面には指頭圧痕がみられる。8は口縁部破片で、口径は22.9cmに復原した。雑な胎土で、色調は茶褐色を呈する。住居跡の時期は、8世紀後葉であろう。

4号住居跡 (図版4-2・5, 第16図)

3A号住居跡に切られて位置し、西壁側には焼土壌が存在する。西壁長2.8mを測るものの削平が著しく、本来の規模であるか不詳。P1~4を主柱穴としたが、P1-2間1.17m, P2-3間1.55mと短く、疑問が残る。カマドは不明。

出土土器 (第18図)

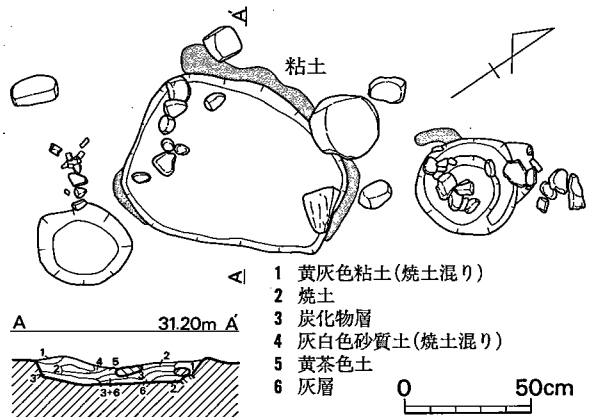
土師器 (1~5) 1は坏蓋, 2~5は甕である。1は口縁部破片で、復原口径は14.4cm。2・3・5は底部破片で、2は平底, 3・5は丸底を呈する。4は口縁部小片で、「く」字形に外反する。



第18図 4号住居跡出土土器実測図 (1/3)

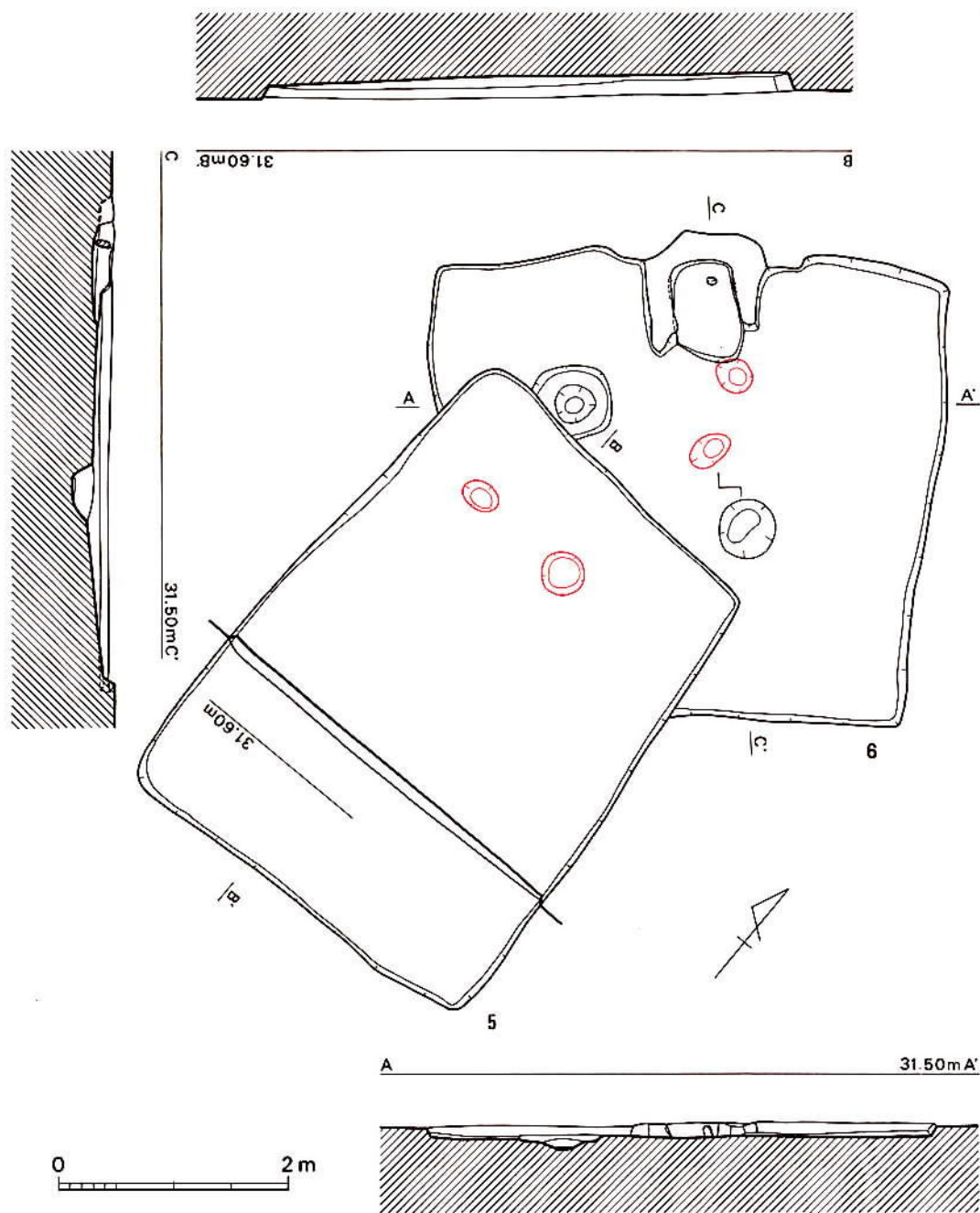
4号住居跡内焼土壌 (図版5-2, 第19図)

4号住居跡の西壁側に位置する。住居跡の残りが悪く、前後関係は不詳であるが、当土壌が後出するものと思われる。長軸84cm, 短軸66cm, 深さ12cmを測る。壁面は、スサ入り粘土状であり、北壁は特に顕著である。埋土中には焼土・炭化物・灰が入っており、坏蓋(1)・製塩土器が出土した。



第19図 4号住居跡内焼土壌実測図 (1/30)

5号住居跡 (図版6-1, 第20図)



第 20 图 5・6号住居跡实测图 (1/60)

調査区の北西端部に位置し、6号住居跡を切っている。北壁長2.97m、南壁長3.52m、西壁長4.78m、壁高0.17mを測る隅丸長方形を呈する。北壁側に若干の焼土・灰がみられたことから住居跡としたが、カマド及び支柱穴は不明で、竪穴とした方が妥当であろう。埋土中から土器・すり石が出土した。

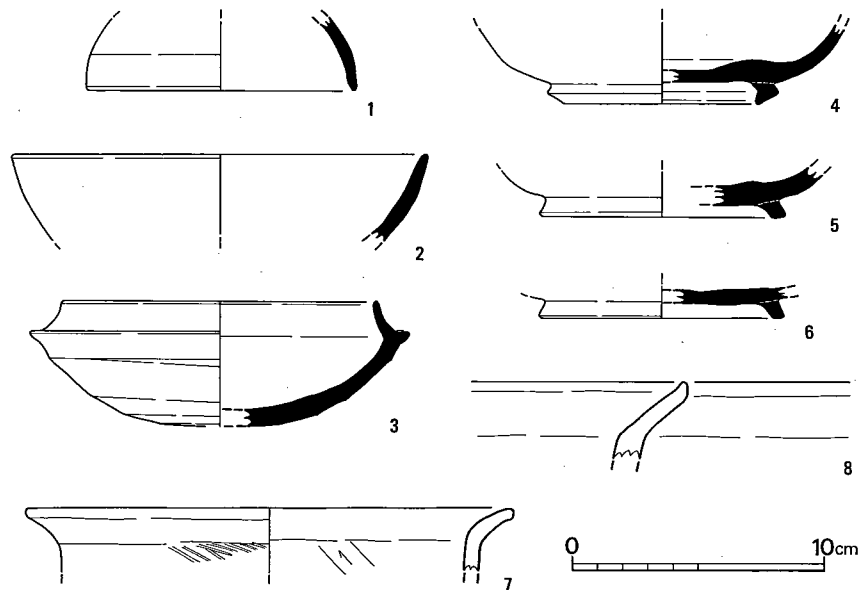
出土土器 (図版128-3, 第21図)

須恵器 (1~6) 1は口縁部破片で、口径は10.0cmに復原した。短頸壺の蓋になろう。2は口縁部破片であるが、口唇部がそのまま開くことから高台付き坏身になろう。4~6は高台を有する坏身で、何れも口縁部を欠く。4の高台は稜を有するもので、5・6は八字形の低い高台を付す。4・5は高台から丸みを有して立上がる。5は貼床下層の出土である。

3は坏身で、器高5.0cm、口径は12.4cmに復原した。たちあがりは内傾し、口唇部はシャープである。口縁部ヨコナデ、外面回転ヘラケズリ、内面ナデ調整による。焼成は堅緻で、色調は内面暗灰色、外面灰緑色を呈する。混入品であろう。

土師器 (7・8) 7・8は甕の口縁部破片で、7は19.2cmに復原した。口縁部は大きく外反する。8は口縁部小片で、口唇部は上方に立つ。

住居跡の時期は、4~6の坏身から8世紀前半~中頃か。



第 21 図 5号住居跡出土土器実測図 (1/3)

6号住居跡 (図版6-1, 第20図)

3B号住居跡のすぐ南側に位置し、5号住居跡に切られる。また、3B号住居跡と切合い関係にあるが、遺存状態が悪いことから前後関係は不詳。北西壁長4.6m、北東壁長3.8m、壁高0.12mを測る。床面にピットが2個あるが、柱穴ではなく、主柱穴は不明。埋土中より土器が出土したにすぎない。

カマド (図版6-2, 第22図)

北西壁のほぼ中央に付設する。作り付け型と突出型の間形態を呈するカマドで、住居壁を25cm程掘り込み、緑灰色砂質土を貼付しカマドを構築する。

カマドの遺存状態は悪く、両袖部を留めるにすぎない。右袖は基底部幅36cm、残存長57cm、残高10cm、左袖は基底部幅32cm、残存長78cm、残高12cmを測る。両袖とも加熱を受け、よく焼けていた。

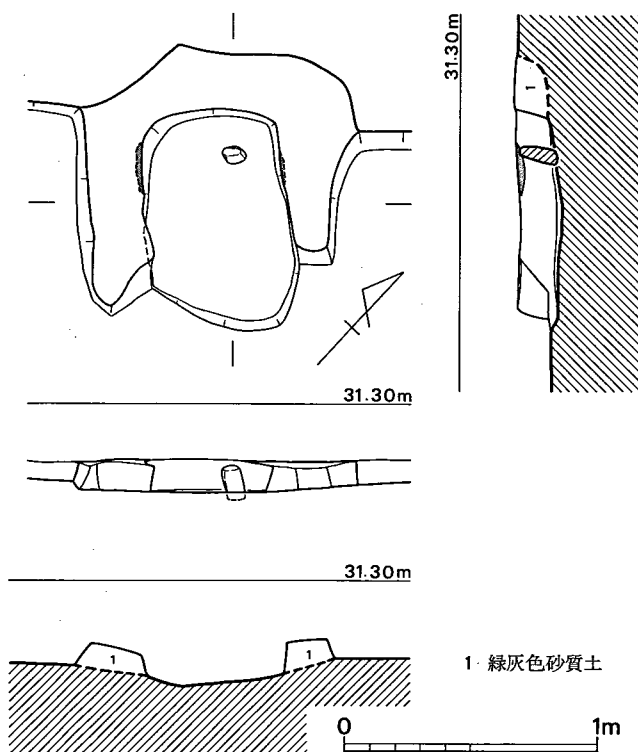
支脚は棒状の河原石を立てたもので、奥壁から12cmの位置にある。やや奥まっておき、位置的に疑問が残る。カマド内からは、土師器甕・高坏が出土した。

出土土器 (図版128-4, 第23図)

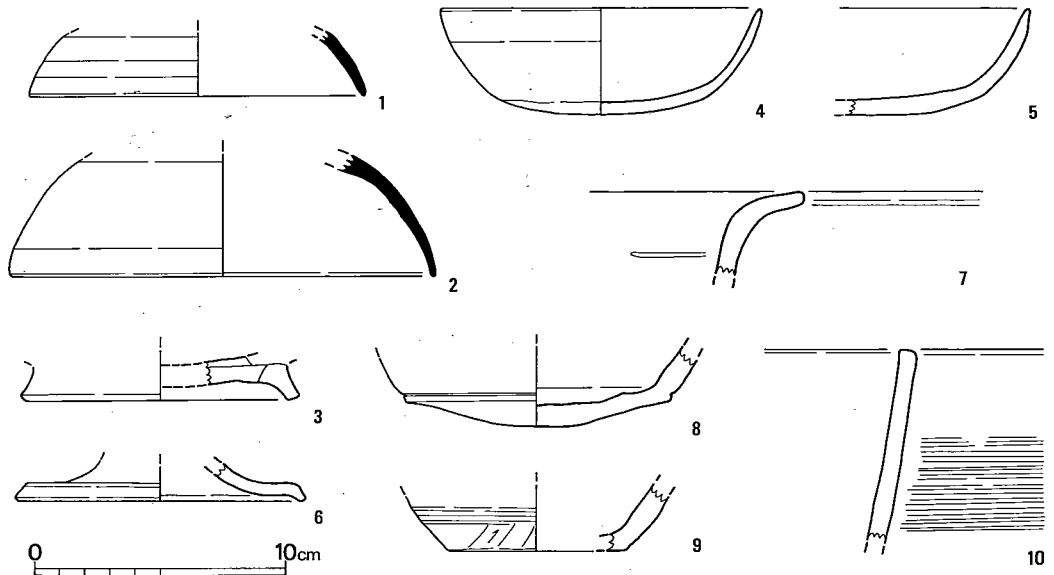
須恵器 (1・2) 1は復原口径13.4cmを測り、蓋とした。2は口唇部がシャープであることから蓋とした。復原口径は16.8cmを測る。天井部を欠くが、ドーム状を呈しよう。

土師器 (3~10) 3は高台付き椀になるか。4・5は坏で、4は器高4.2cm、口径は12.6cmに復原した。5は口縁部破片で、口唇部は小さく立つ。6は高坏の脚部破片で、脚径は11.2cmを測る。7~9は甕で、7は口縁部、8・9は底部破片である。8の外底面は加熱により赤変する。9の外面はカキ目で、下位はヘラケズリを施す。10は甑の口縁部片で、外面はカキ目調整による。

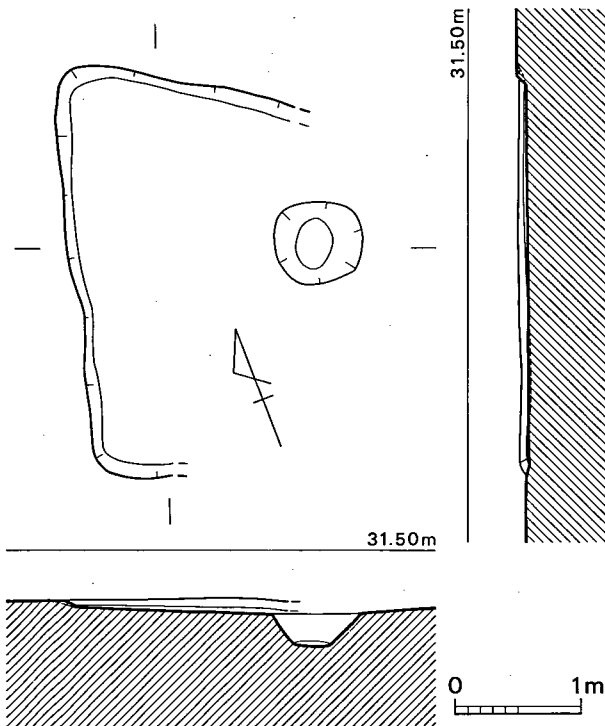
カマド内出土の甕8は、住1カマド出土の甕6に類似し、8世紀中頃か。とすると住5の年代に矛盾が生じる。住5出土の坏身4~6は、6号に帰属させた方が妥当で、3を住5の時期と考えた方がよからう。以上をまとめると、5号→6号→3B号住居跡の順になる (矢印は古→新)。



第22図 6号住居跡カマド実測図 (1/30)



第 23 図 6号住居跡出土土器実測図 (1/3)



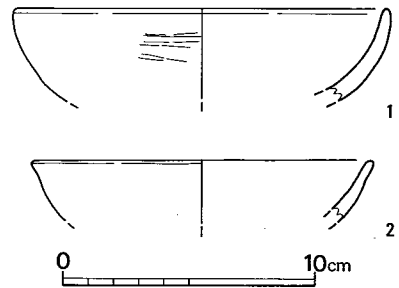
第 24 図 7号住居跡実測図 (1/60)

7号住居跡 (第24図)

6号住居跡の1m北東側に位置する。西壁を3.17m残すのみで、柱穴・カマド等不明。住居ではないか。

出土土器 (第25図)

土師器 (1・2) 1・2は坏の口縁部破片。1は外面に赤橙色の顔料を塗布する。調整はともにヘラミガキ。

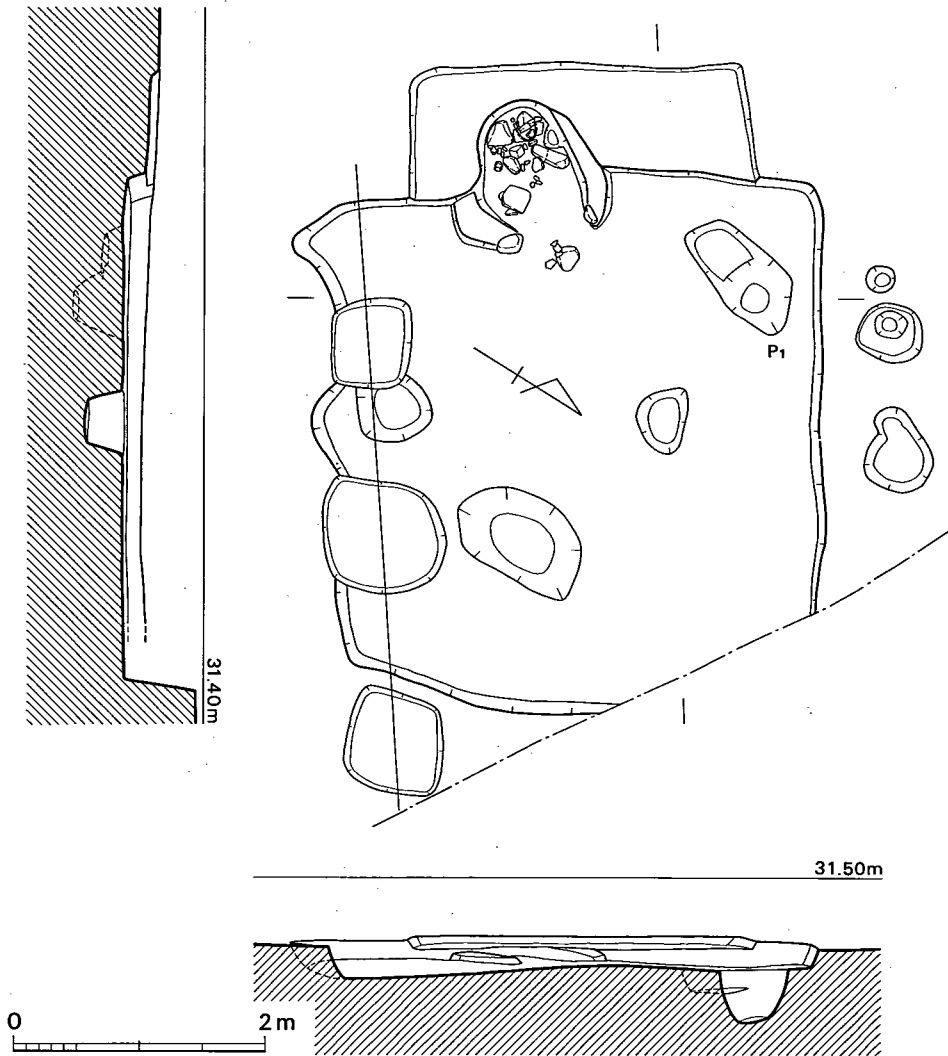


第 25 図 7号住居跡出土土器実測図 (1/3)

8号住居跡 (図版8-1, 第26図)

調査区の北端に位置し、B群に属する。南壁側には浅い柱穴群があり、住居を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し、西壁長4.04m、南壁長3.76m、壁高は西壁側で0.23mを測る。床面にはピットが4個あるが、積極的に支柱穴とすべき穴はない。

また、西壁側には、一辺2.64mの方形の浅い段がある。住居跡に付随するものか不詳。埋土中及びカマド内から少量の土器が出土した。



第 26 図 8号住居跡実測図 (1/60)

カマド(図版8-2, 第27図)

突出型のカマドで、西壁のやや左寄りに付設される。遺存状態は悪く、袖部を僅かに留める程度である。

掘方は半円状で、中央部幅106cm、奥行き63cm、右袖は基底部幅26cm、残存長38cm、高さ7cm、左袖は基底部幅28cm、残存長59cm、高さ5cm、焚口幅52cmを測る。

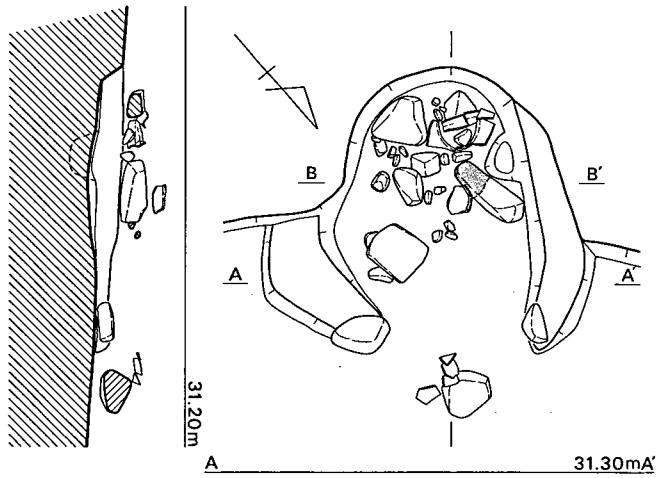
壁面・床面はあまり加熱を受けておらず、赤変がみられない。煙道は削平されて遺存しない。また、支脚は原位置を留めないが、カマド中央の焼けた石が支脚になろう。床面より15cm程浮いた状態で土器・石が出土した。

出土土器(図版128-5, 第28図)

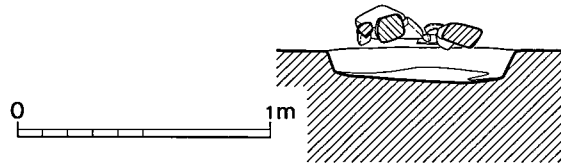
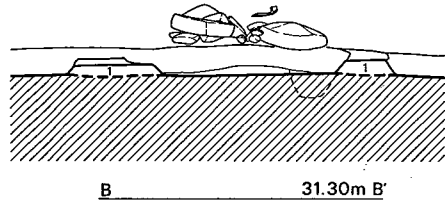
須恵器(1) 1は坏身で、器高4.3cm、復原口径13.3cmを測る。たちあがりは小さく内傾し、受部の突出は弱い。受部ヨコナデ、底部ヘラケズリ調整による。

土師器(2) 甕の口縁部～肩部破片で、口縁部は肥厚することなく大きく開く。口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整による。

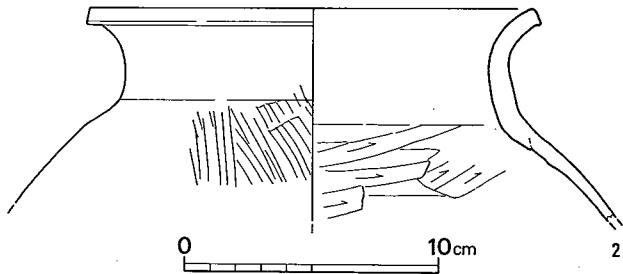
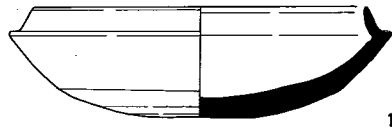
出土遺物から、6世紀後半の時期と考えられる。



1 茶褐色砂質土



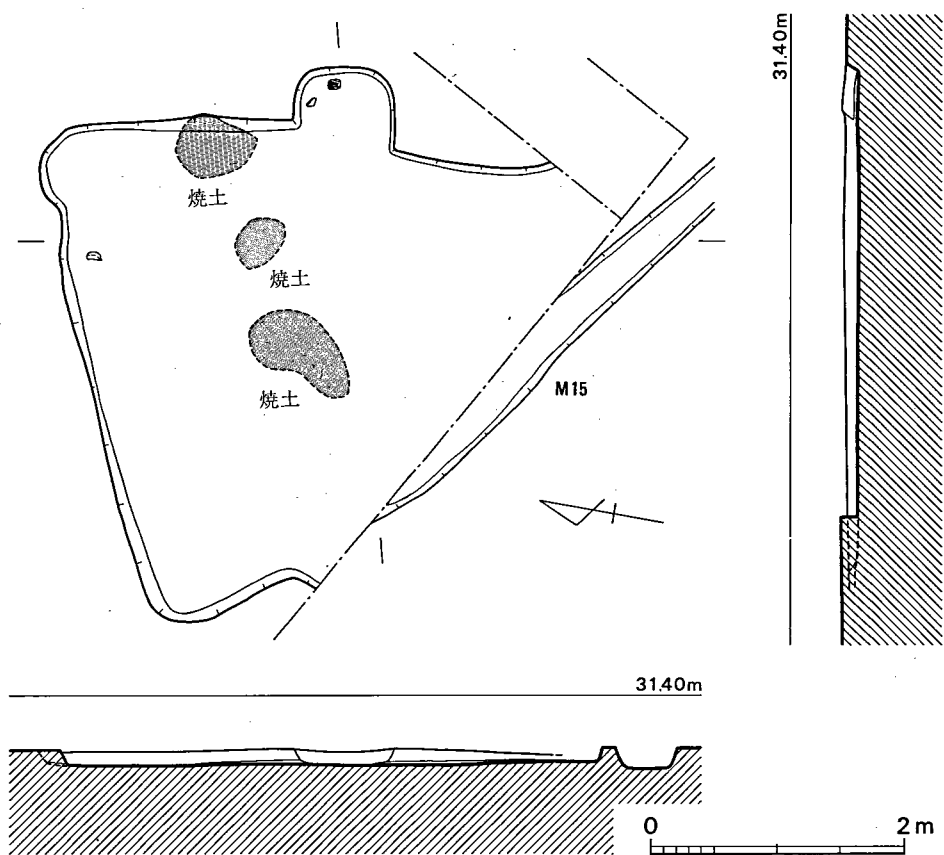
第27図 8号住居跡カマド実測図 (1/30)



第28図 8号住居跡出土土器実測図 (1/3)

9号住居跡 (図版9-1, 第29図)

調査区の北端部で、8号住居跡の10m南東に位置する。B群に属し、15号溝に南壁を切られる。北壁長4.06m、東壁は4.0m遺存する。平面形は隅丸方形を呈しよう。壁高は北東コーナー部で、10cm遺存する。床面には焼土が40~90cmの範囲で3箇所に見られた。支柱穴は不明。



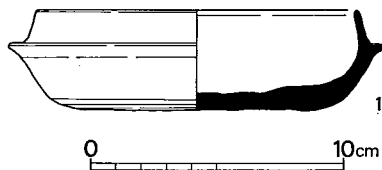
第29図 9号住居跡実測図 (1/60)

カマド (第29図)

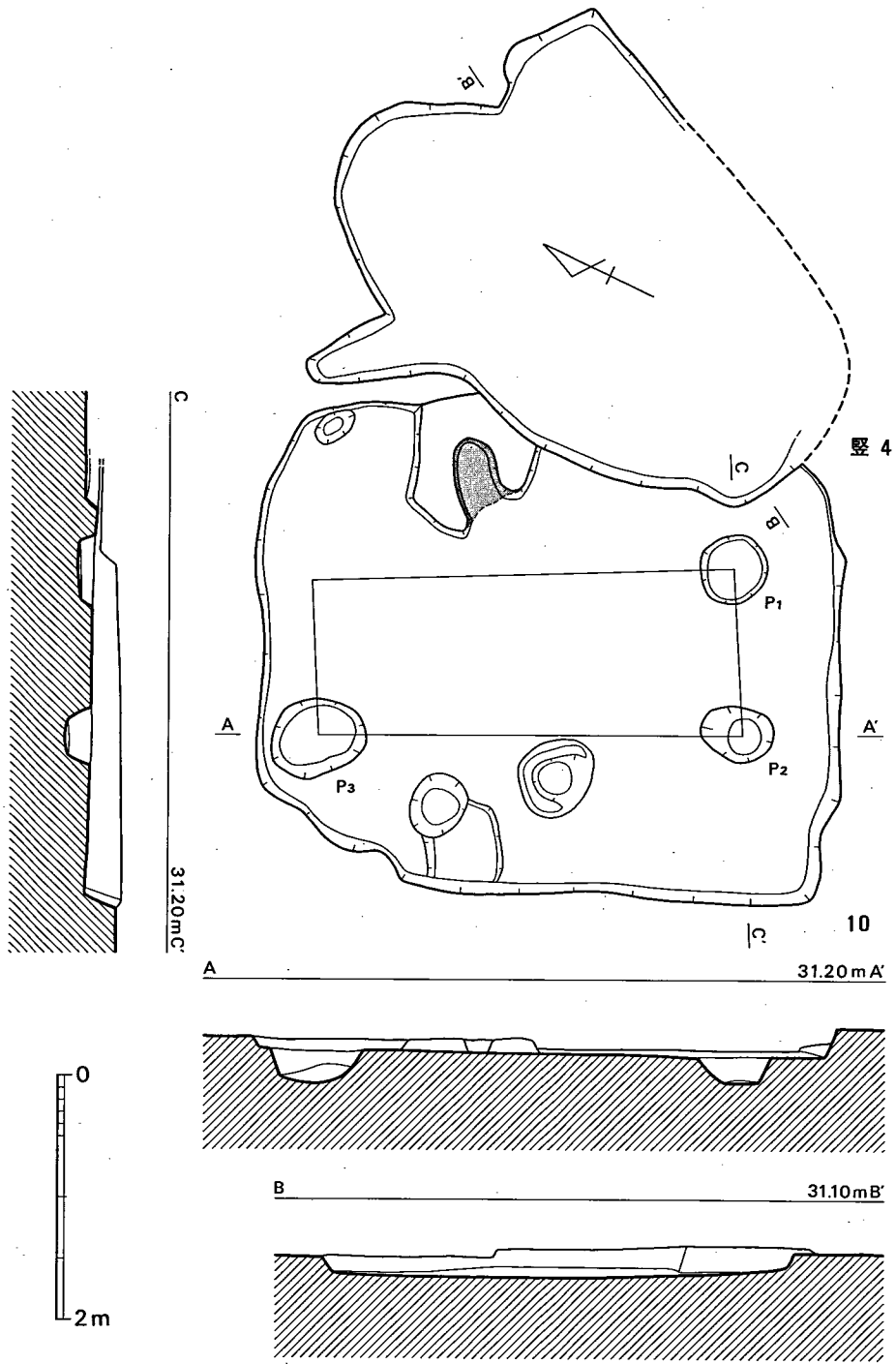
突出型で、東壁のほぼ中央に付設される。遺存状態は悪く、掘方を留めるにすぎない。掘方は幅81cm、奥行き65cm、高さ12cmを測る。火床・支脚は不詳。

出土土器 (図版128-6, 第30図)

須恵器 (1) 1は坏身で、器高3.9cm、復原口径12.6cm。たちあがりはやや内傾し、底部は平たい。



第30図 9号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第 31 图 10号住居跡, 4号竖穴实测图 (1/60)

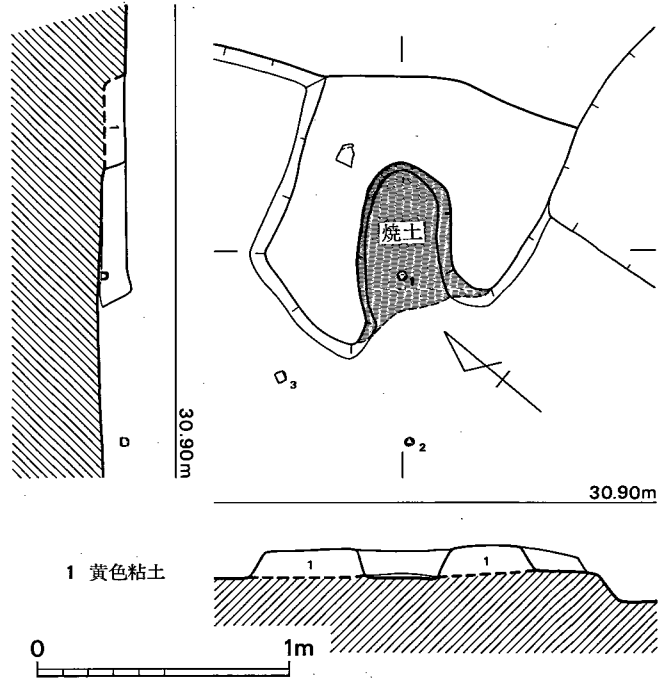
10号住居跡 (図版9-2, 第31図)

8号住居跡のすぐ南側に位置し、4号竪穴に切られる。平面形は横位隅丸長方形を呈し、東壁長4.36m、北壁長3.67m、壁高は南壁側で0.24mを測る。支柱穴は位置・深さからP1~3としたが、P1・2は近接しており、疑問が残る。当住居跡からは、多量の土器とともに製塩土器が出土した。

カマド(図版9-3, 第32図)

作り付け型のカマドで、東壁のほぼ中央に付設する。住居壁に黄色粘土を100cm×110cmの範囲で貼付し、その中央を幅30cm×奥行き60cm程掘り込み、壁体としている。床面・壁体はよく焼けていた。支脚は不明。また、煙道は削平されて遺存しない。

カマド内から須恵器・土師器・ミニチュア土器、周辺から土錘が出土した。また、ミニチュア土器は焼けておらず、カマド使用後の祭祀行為に伴うものであろう。



第32図 10号住居跡カマド実測図 (1/30)

出土土器 (図版128-7・129・

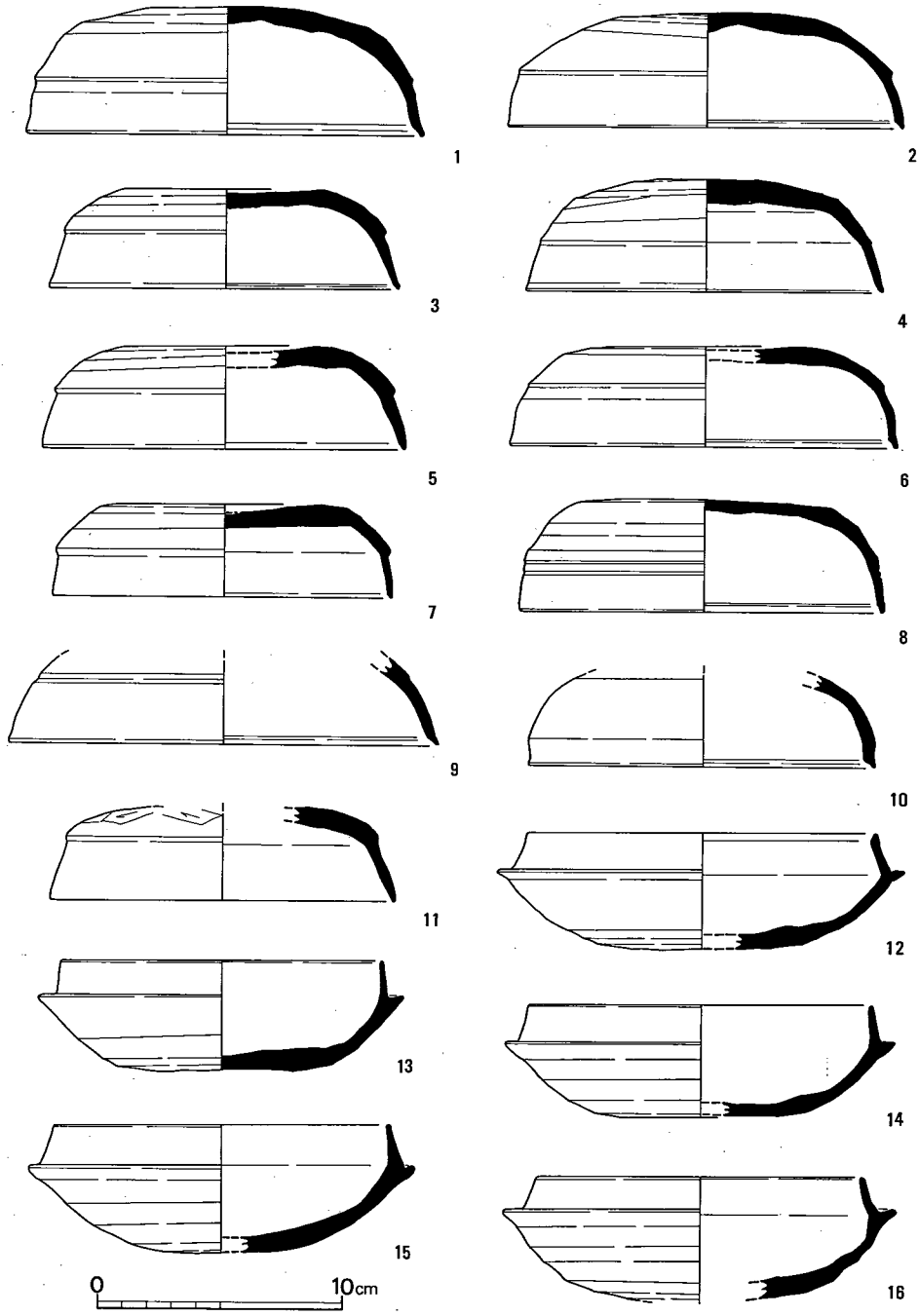
130-1, 第33~35図)

須恵器 (1~24) 1~11は坏蓋で、器高3.8~5.1cm、口径14.2~16.1cmを測る。1~8の天井部は低く偏平である。外面の稜は退化しており、8・9は沈線に転化する。口唇部がシャープで内面に段を有する1~3・6・8~10と稜だけの4・5・7・11の二者がある。調整は口縁部ヨコナデ、外面回転ヘラケズリ、内面ナデによる。また、11の外天井部は手持ちヘラケズリによる。

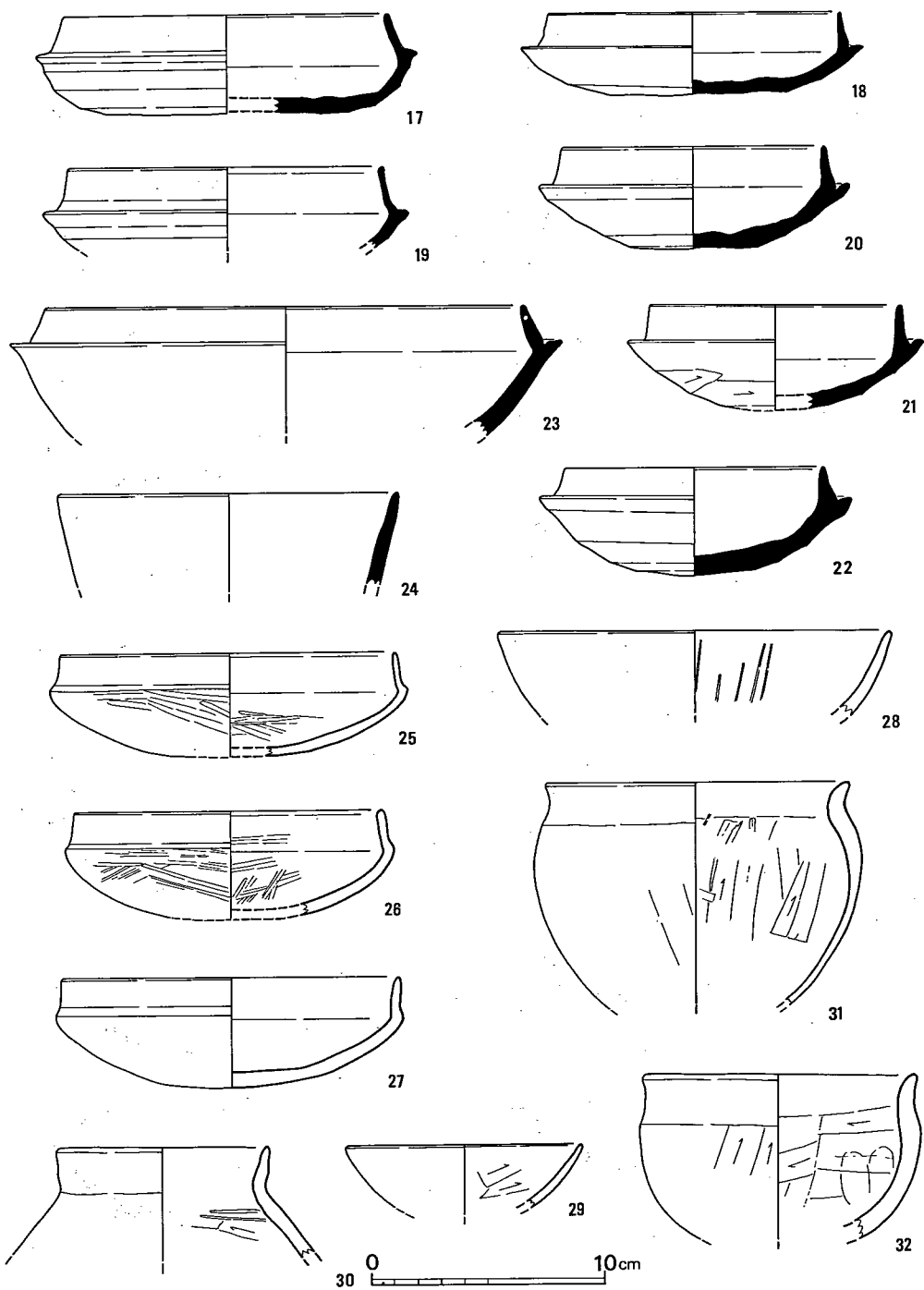
12~22は坏身で、器高3.5~5.1cm、口径11.2~15.4cmを測る。たちあがりか上方に立つもの(13~15・18・20~22)と内傾するもの(12・16・17・19)がある。また、17・18は器高が低く、底部は平たい。23は口径22cmを測る大型品である。受け部は5mm程の面を有する。何れも調整は、口縁部ヨコナデ、外面回転ヘラケズリ、内面ナデによる。

24は口縁部破片で、口径は14.4cmに復原した。直線的に開き、椀になるか。

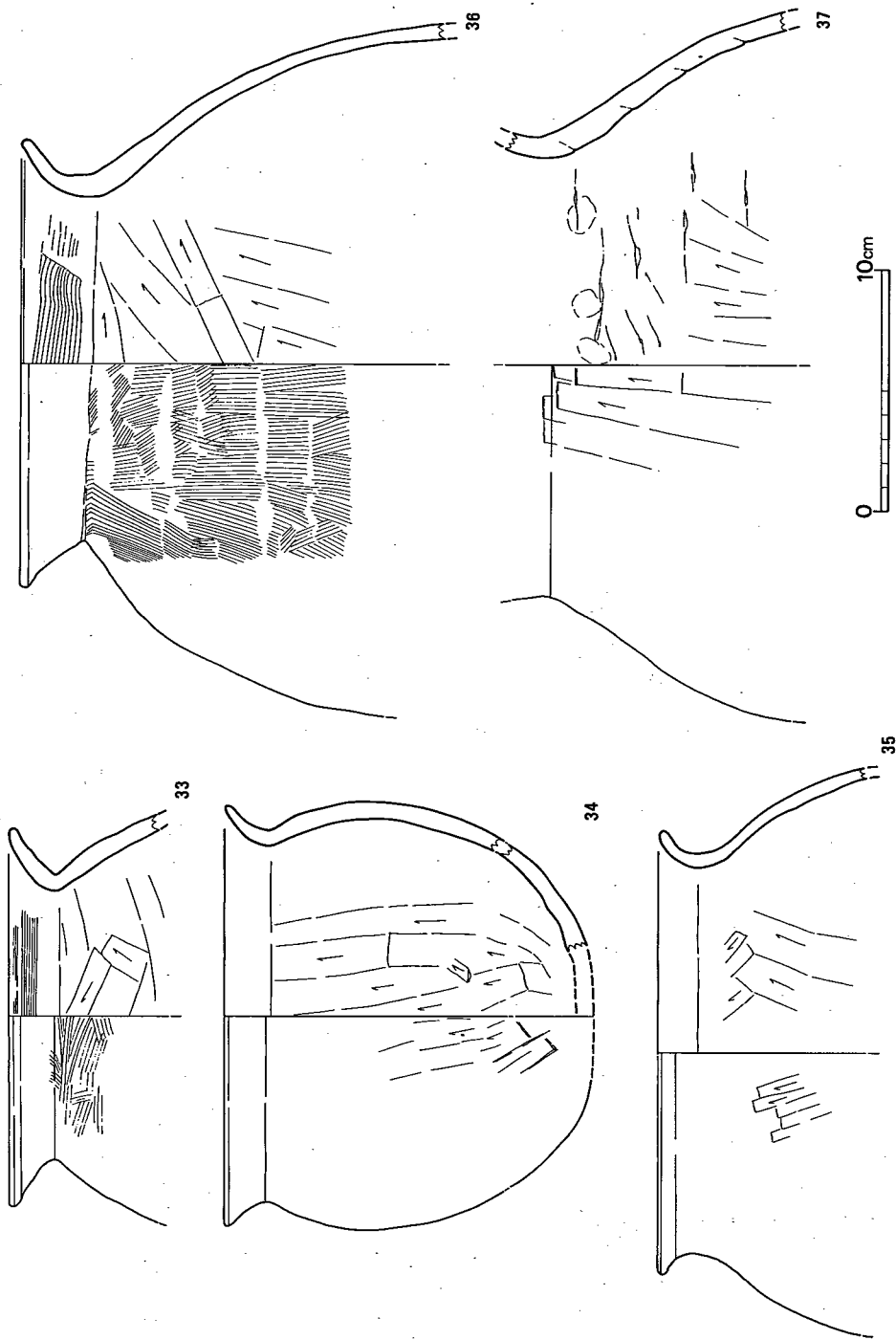
土師器 (25~37) 25~28は坏で、25・26は口縁部が内側に屈曲するもの、27はそのまま立上



第 33 图 10号住居跡出土土器実測図① (1/3)



第 34 图 10号住居跡出土土器実測図② (1/3)



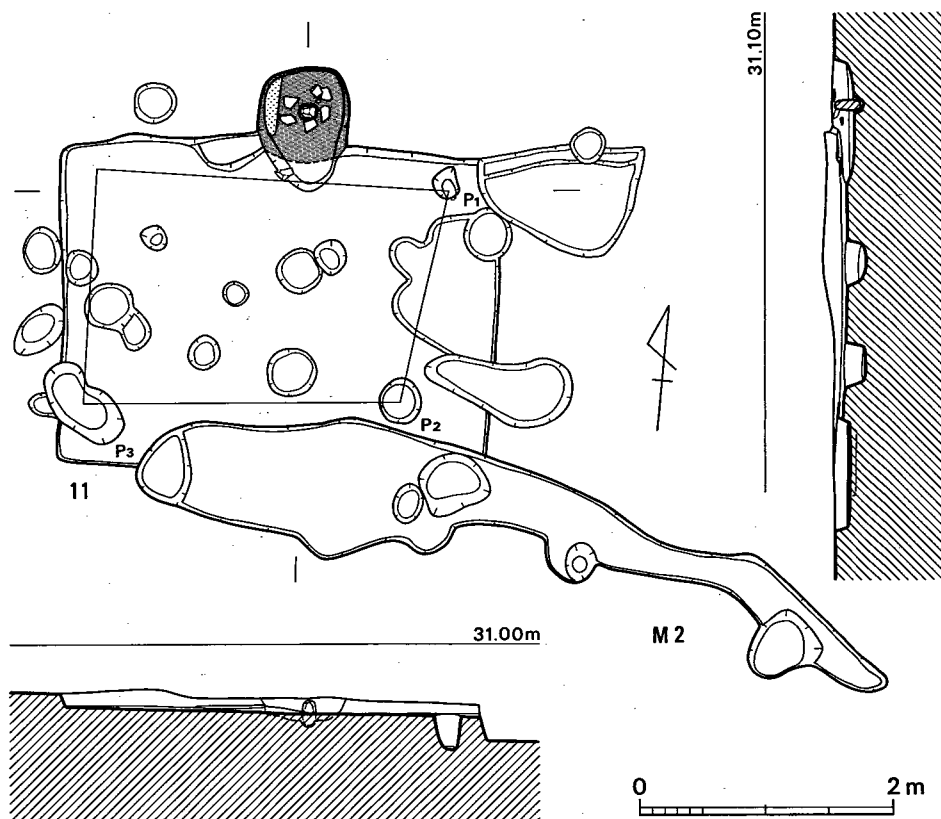
第 35 图 10号住居跡出土土器実測图③ (1/3)

がるもの。口径は25が14.5cm, 26は13.2cm, 27は14.6cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ, 内外面細かなヘラミガキによる。胎土に赤褐色粒・雲母を含む。28は口縁部が内湾し, 口唇部は丸く納める。口縁部ヨコナデ, 内面ヘラミガキ調整による。口径は16.6cmに復原した。29は小型の鉢で, 口径は10.0cmに復原した。口唇部は丸く納め, 内面調整はヘラケズリによる。

30は頸部が締め, 口縁部が上方に立つことから壺とした。口径は8.9cmである。31・32の口縁部は小さく外反し, 胴部は球状を呈することから椀とした。丸底を呈するか。

33~37は甕で, 33・34は小型, 35~37は大型である。33は口縁部が「く」字形に屈曲し, 古い様相を残す。34の口縁部は「く」字形に屈曲するが, 頸部から丸みを帯びた胴部に移行する。35の口縁部はスプーン状に屈曲する。36はよく締まった頸部から大きく外反し, 肩部には張りがみられる。33・36は口縁部ヨコナデ, 外面ハケ目, 内面ヘラケズリ調整による。35・37の外面は工具による擦痕がみられる。住居跡の時期は, 6世紀前半頃であろう。

11号住居跡 (図版10-1, 第36図)



第36図 11号住居跡, 2号溝実測図 (1/60)

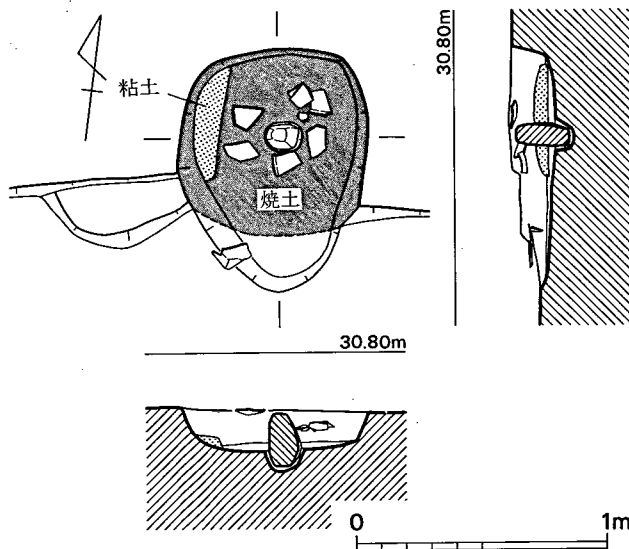
調査区の北東側に位置し、B群に属する。南壁の大半を2号溝に切られる。平面形は横位長方形を呈し、西壁長2.48m、南壁側で3.4mを測る。当住居跡も著しい削平により、壁高は北壁側で12cmを留めるにすぎない。床面はほぼ水平である。

支柱穴はコーナー寄りのP1～3を想定した。P1～2間1.73m、P2～3間2.5mを測る。柱穴の深さは20cm前後である。埋土中より土器が出土した。

カマド(図版10-2, 第37図)

突出型で、北壁の中央に付設する。遺存状態は悪く、左袖の一部を留める程度。掘方は幅74cm、奥行き58cm、残高18cmを測る。

奥壁から27cmの箇所に支脚があり、床面を7cm掘り下げて長さ21cmの河原石を立てていた。壁体・床面は加熱により赤変する。また、土師器甕(4)が床面より10数cm浮いて出土したが、本来支脚に乗っていたものであろう。



第37図 11号住居跡カマド実測図(1/30)

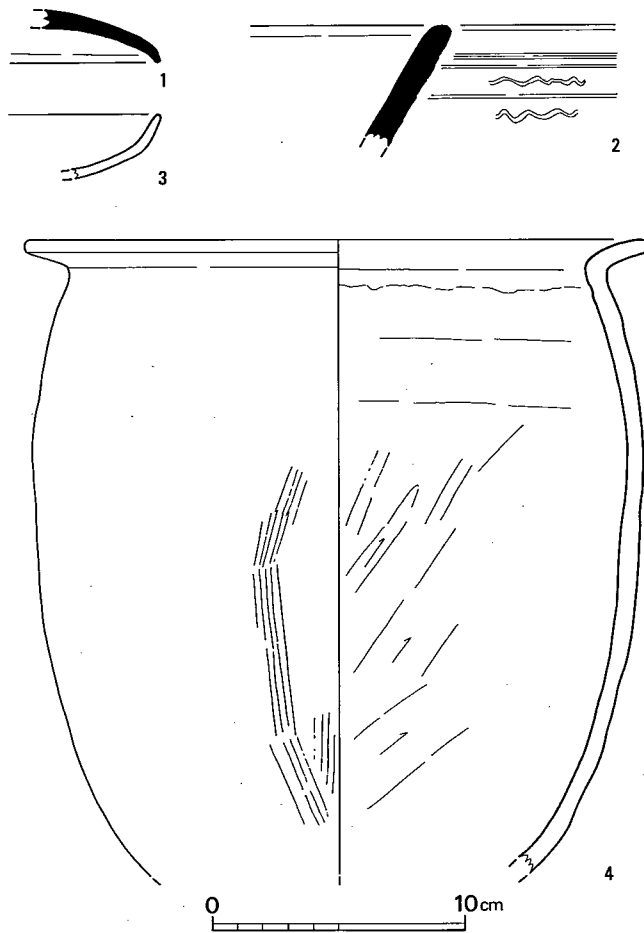
出土土器(図版130-2, 第38図)

須恵器(1・2) 1は坏蓋の口縁部小片で、口唇部は小さく立つ。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外天井部は回転ヘラケズリ調整による。2は口縁部破片であるが、器肉が1cmと厚く甕になろう。口唇部には平坦面を有し、外面には2段に稚拙な波状文が描かれる。内外面は緑灰色の自然釉が掛かる。胎土に長石・石英を含む。

土師器(3・4) 3は坏の口縁部破片で、屈曲して立上がる。4は長胴の甕で、残存器高24.9cm、復原口径24.6cmを測る。口縁部は「く」字形というよりは、逆L字形を呈する。調整は口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ヘラケズリによる。8世紀前半代か。

12号住居跡(第39図)

調査区の北東に位置し、B群に属する。北東壁は調査区外に伸展するが、平面形は隅丸方形を呈しよう。南壁長2.96m、西壁長3.42m、壁高0.12mを測る。柱穴はP2～4を想定しておこう。P2～3間1.88m、P3～4間2.86mを測る。カマドは区外の北壁もしくは東壁に存在するのであろう。埋土中から製塩土器片が出土している。



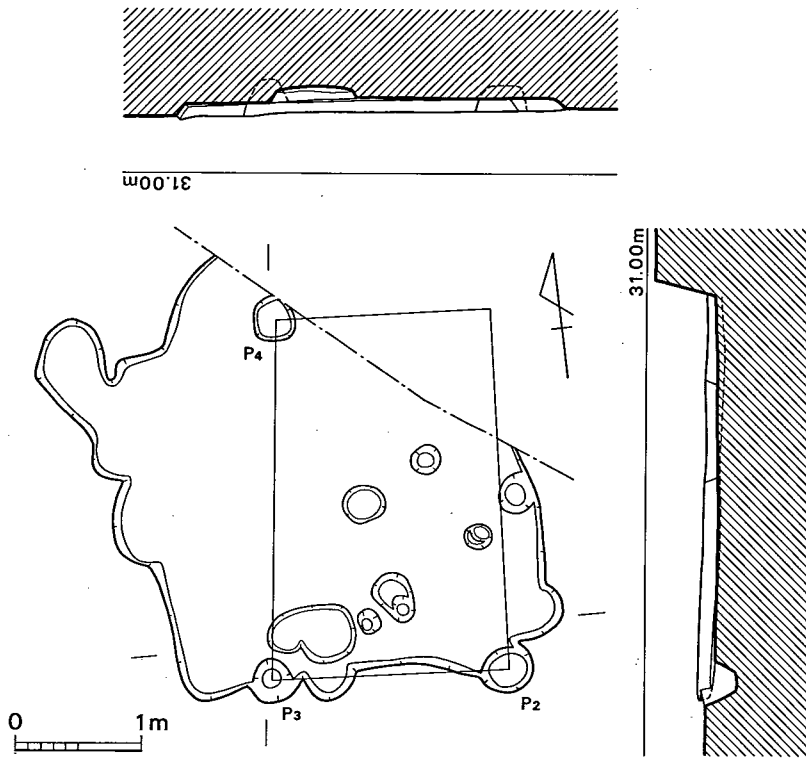
第 38 図 11号住居跡出土土器実測図 (1/3)

出土土器 (第40図)

須恵器 (1・2・4) 1は坏蓋の口縁部破片で、口径は13.8cmに復原した。口縁部は小さく立ち、6mmの面を有する。調整はヨコナデによる。2は口縁部小破片で、口縁部は一旦屈曲する。坏蓋になろう。調整はヨコナデで、外面には灰が被る。4は甑の底部破片であり、端部は爪先立つ。外面はカキ目調整(5~6条/cm)、内面はナデ調整による。焼成は軟質で、紫灰色を呈する。

土師器 (3) 3は高台破片で、高台が高いことから椀になるか。高台径は8.8cmに復原した。胎土に赤褐色粒を含む。

住居跡の時期は、8世紀中~後半であろう。



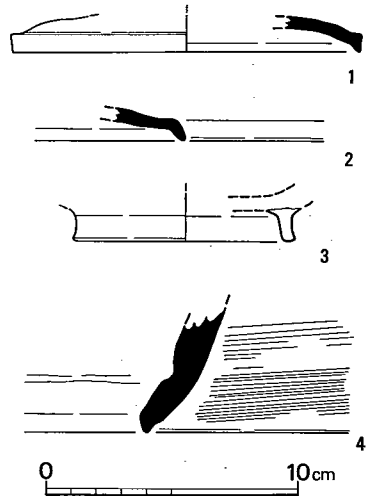
第 39 図 12号住居跡実測図 (1/60)

13号住居跡 (図版11-1, 第41図)

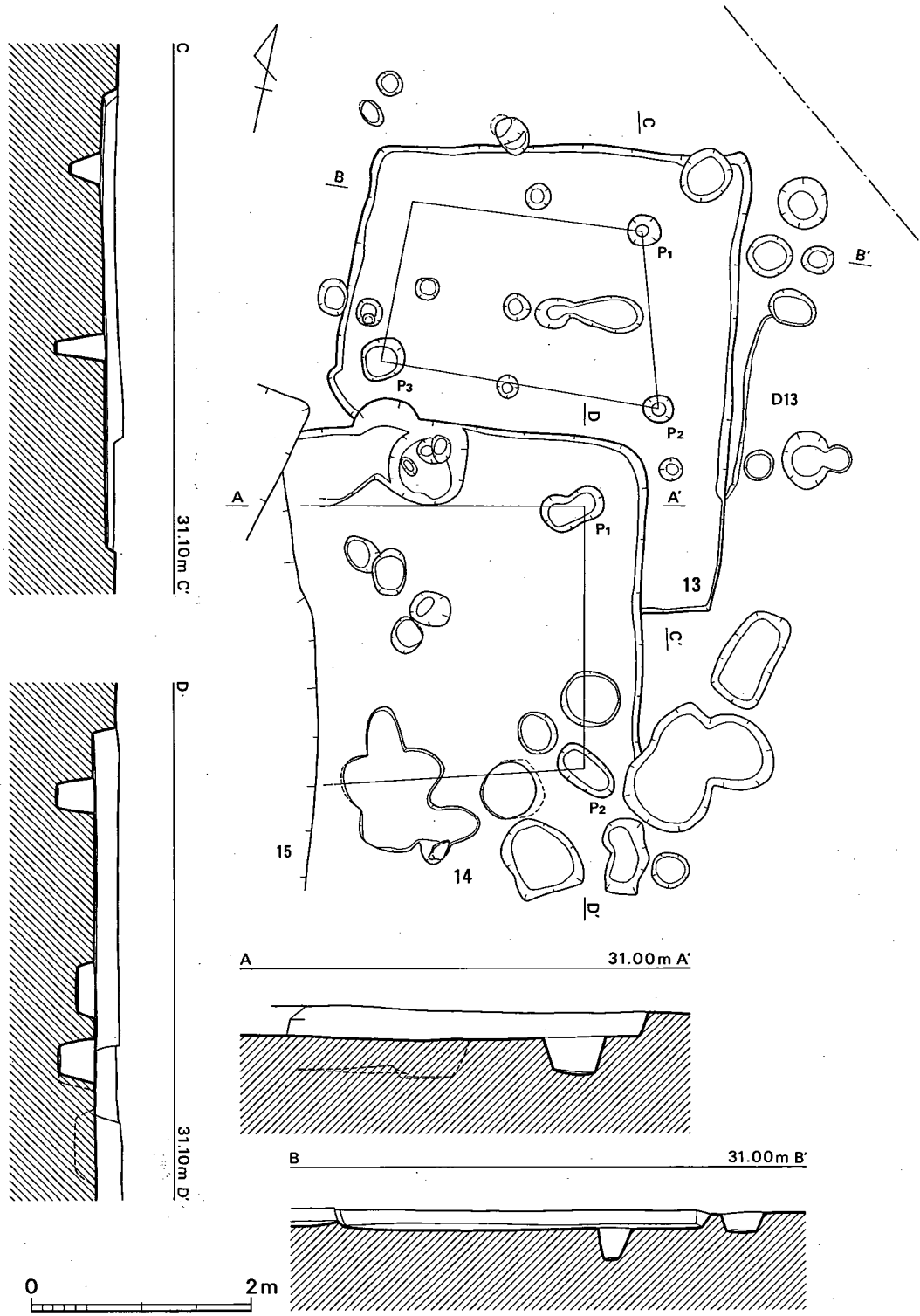
調査区の北東部に位置し、B群に属する。14号住居跡に切られ、10号竪穴を切っているようである。また、東壁側には13号土壌が接するが、切合い関係はよく判らなかった。

平面形は隅丸長方形を呈し、北壁長3.32m、東壁長4.18mを測る。P1～3を支柱穴としたが、P4は検出し得ていない。P1-2間1.62m、P2-3間2.56mを測る。また、北壁からP1までは0.54m、南壁からP2までは1.7mを測り、その3倍強の間隔を有することから南壁には別遺構が存在したのか。カマドは南壁側に存在したのであろうか、竪穴内では検出していない。

埋土中より製塩土器・鉄鎌が出土した。



第 40 図 12号住居跡出土土器実測図 (1/3)

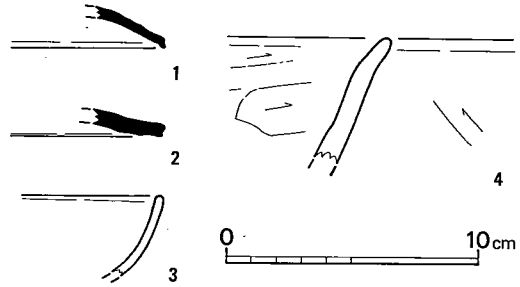


第 41 图 13·14号住居跡実測图 (1/60)

出土土器 (第42図)

須恵器 (1・2) 1は坏蓋の口縁部破片で、口唇部は小さく立つ。焼成は堅緻で、青灰色を呈する。2も口縁部破片で坏蓋になろう。

土師器 (3・4) 3は坏の口縁部破片で、口唇部は若干肥厚する。胎土に砂粒を含み、赤橙色を呈する。4は甑の口縁部破片になろう。口唇部は僅かに屈曲する。口縁部ヨコナデ、内外面ヘラケズリ調整による。



第42図 13号住居跡出土土器実測図 (1/3)

14号住居跡 (図版11-1, 第41図)

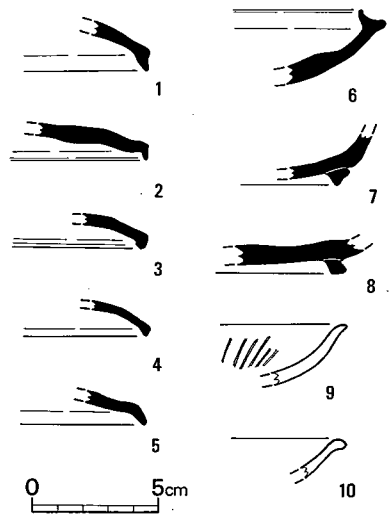
調査区の北東側に位置し、B群に属する。15号住居跡に西壁の大半を切られ、7号竪穴に北西コーナーを切られる。東壁長3.6m程になるか。床面にはピットが数多くあるが、P1・2は深さが34cm程で柱穴とした。埋土中より飯蛸壺が出土した。カマドは西壁に存したのか不明。

出土土器 (第43図)

須恵器 (1~8) 1~5は坏蓋の口縁部小片で、1・2・4の口唇部は小さく立つ。3の口唇部は肥厚気味。5は斜め方向に開く。2~4は低い器高を呈しよう。何れもヨコナデ調整による。

6は坏身で、たちあがりは小さい。口縁部ヨコナデ、外面回転ヘラケズリ、内面ナデ調整による。焼成は堅緻で、灰青色を呈する。7・8は高台を有する坏身の底部破片である。7の高台は爪先立つもので、8の高台は断面ハ字形を呈する。

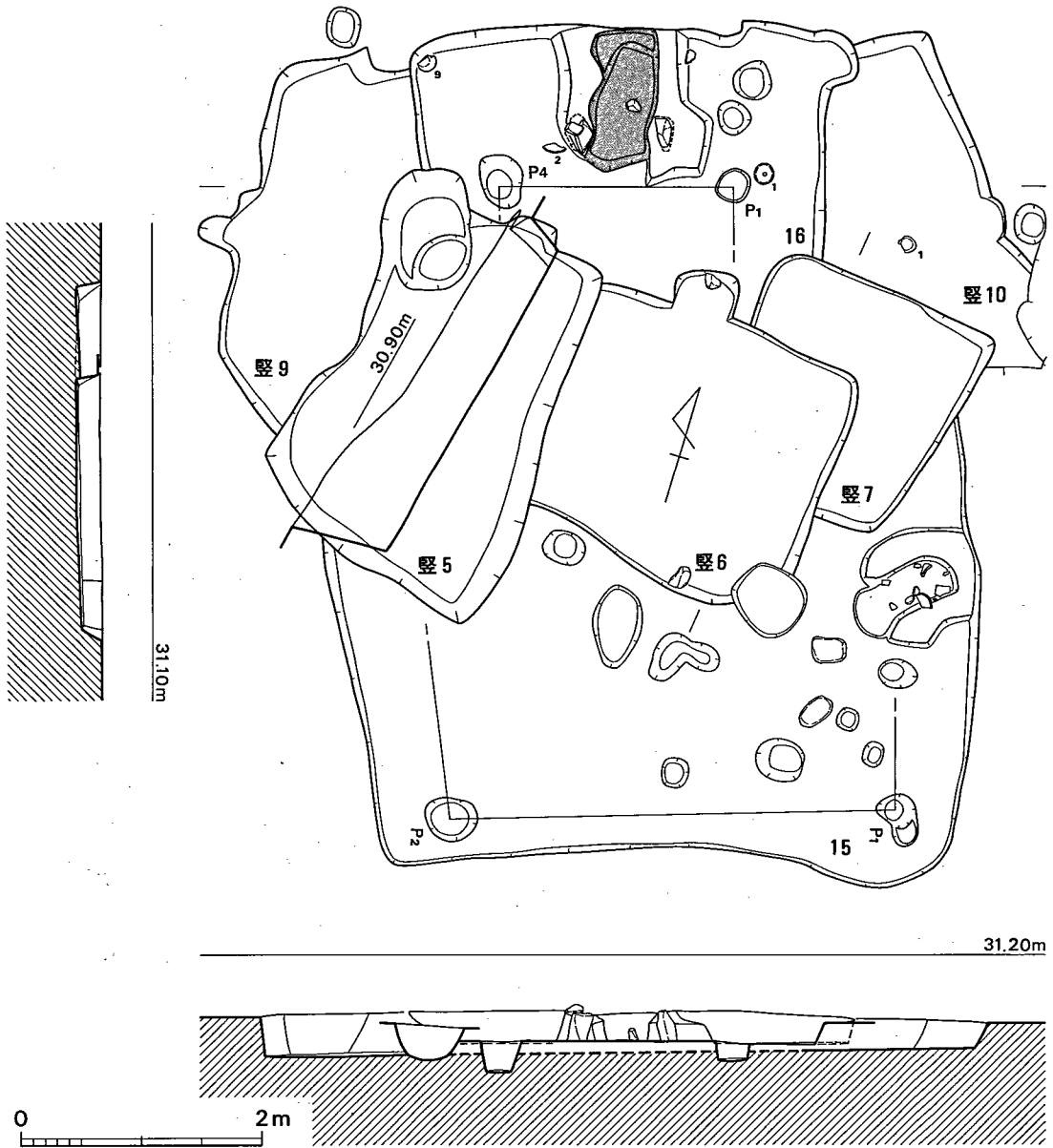
土師器 (9・10) 9・10は口縁部小片で、9の口縁部はそのまま外反するが、10の口唇部は肥厚する。9は外面ヘラミガキ、内面には暗文がみられる。10はヨコナデ調整による。何れも胎土に赤褐色粒を含むものの精良なつくり。住居跡の時期は、8世紀中~後半であろう。



第43図 14号住居跡出土土器実測図 (1/3)

15号住居跡 (図版11, 第44図)

調査区の北東側に位置し、B群に属する。14号住居跡を切り、5~7竪穴に切られる。また、16



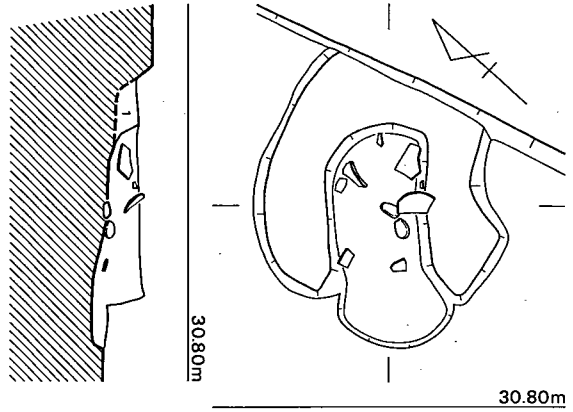
第 44 図 15・16号住居跡，5～7・9・10号竖穴実測図（1/60）

号住居跡と切合い関係にあるが、前後関係は不詳。南壁は4.72mを測り、平面形は縦位長方形を呈するか。壁高はカマド側で25cmを留める程度である。柱穴はP1・2で、その距離は3.68mを測る。埋土中から製塩土器・鉄製品が出土した。

カマド (図版11-2, 第45図)

作り付け型のカマドで、東壁に斜めに付設する。遺存状態は悪く、両袖部を留めるにすぎない。右袖は長さ75cm, 基部幅27cm, 残高12cm, 左袖は長さ98cm, 基部幅32cm, 残高16cmを測り、緑灰色粘砂を盛っていた。

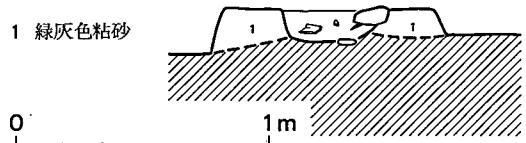
カマド床面の掘り込みは、長軸85cm, 短軸32cmを測る。壁面はあまり焼けておらず、支脚は遺存しない。



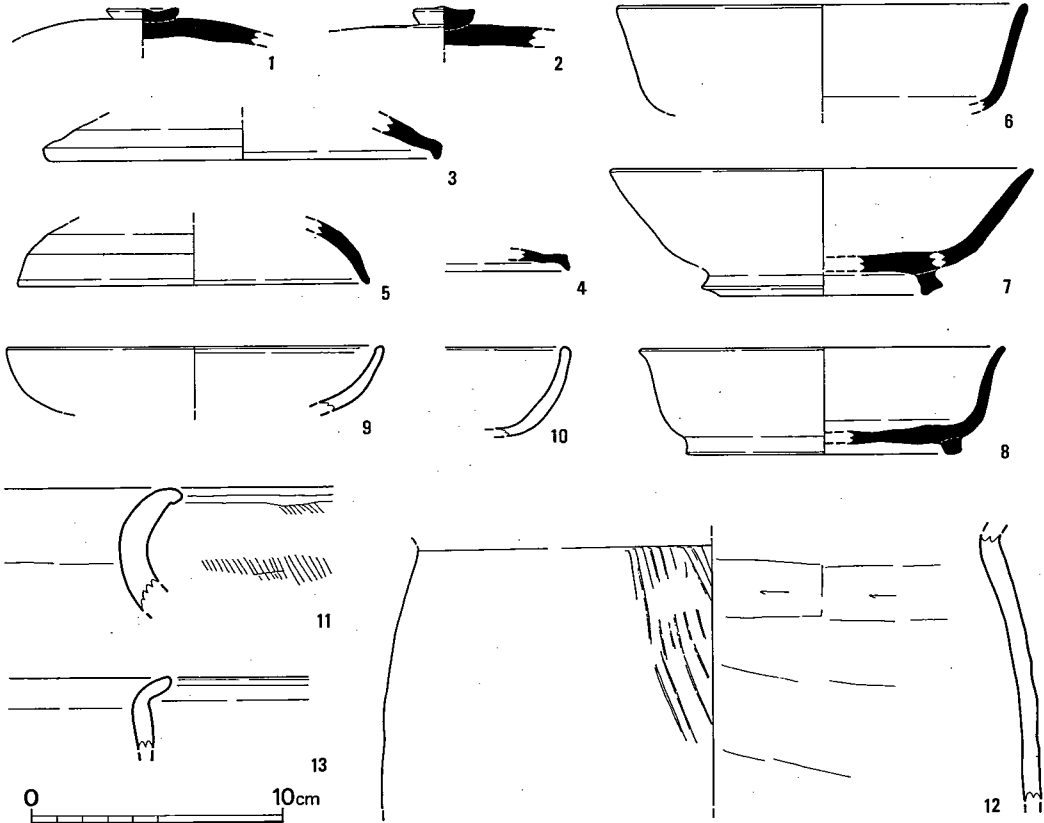
出土土器 (図版130-3, 第46図)

須恵器 (1~8) 1~5は坏蓋で、1・2は天井部破片。3~5は口縁部破片。

1の撮みは扁平な擬宝珠形で、2は擬



第45図 15号住居跡カマド実測図 (1/30)



第46図 15号住居跡出土土器実測図 (1/3)

宝珠形撮みを付す。3・4の口唇部は小さく立ち、低い器高を呈しよう。5は口唇部を丸く納めた器形で、短頸壺の蓋になろう。1～4はカマド内の出土、5は埋土中の出土である。

6は口縁部破片であるが、高台を付したものと思われる。7・8は高台を有する坏身で、7は高台と接合しないものの同一個体として実測した。7の高台は稜を有し、爪先立つ。8の高台は断面ハ字形を呈する。口径は6が16.2cm、7は16.8cm、8は14.3cmに復原した。何れもカマド内の出土である。

土師器（9～13）9・10は坏の口縁部破片で、口唇部を肥厚さす。9の口径は15.0cmに復原した。10はやや深めの器形。11・12は甕で、11は口縁部小片。12は胴部破片であり、カマド内の出土。13は口縁部破片で、小型の甕になろう。口縁部は「く」字形に屈曲する。

16号住居跡（図版11-1，第44図）

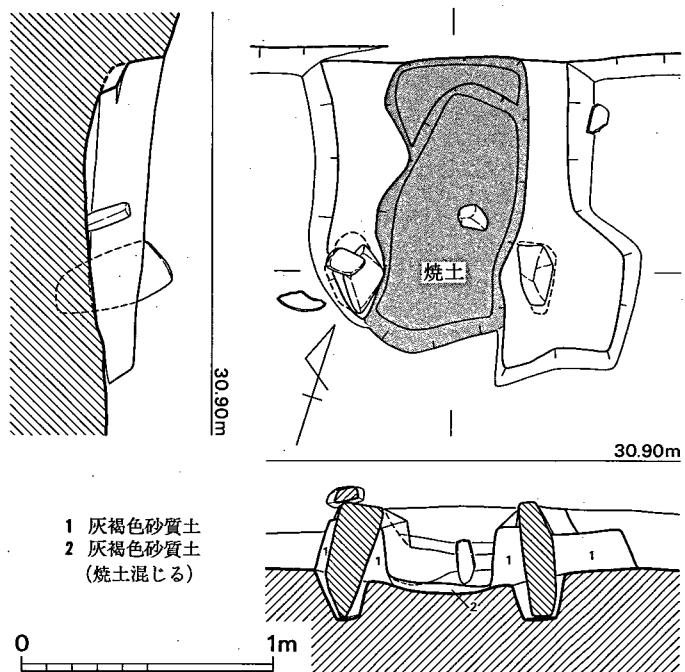
5～7号竪穴に切られて位置し、9・10号竪穴を切る。南半部を失うため詳細は不明。北壁長3.45m、壁高はカマド側で26cmを測る。床面にはピットが数個存在するが、支柱穴の詳細は不明。埋土中から割合多量の土器が出土した。

カマド（図版11-3，第47図）

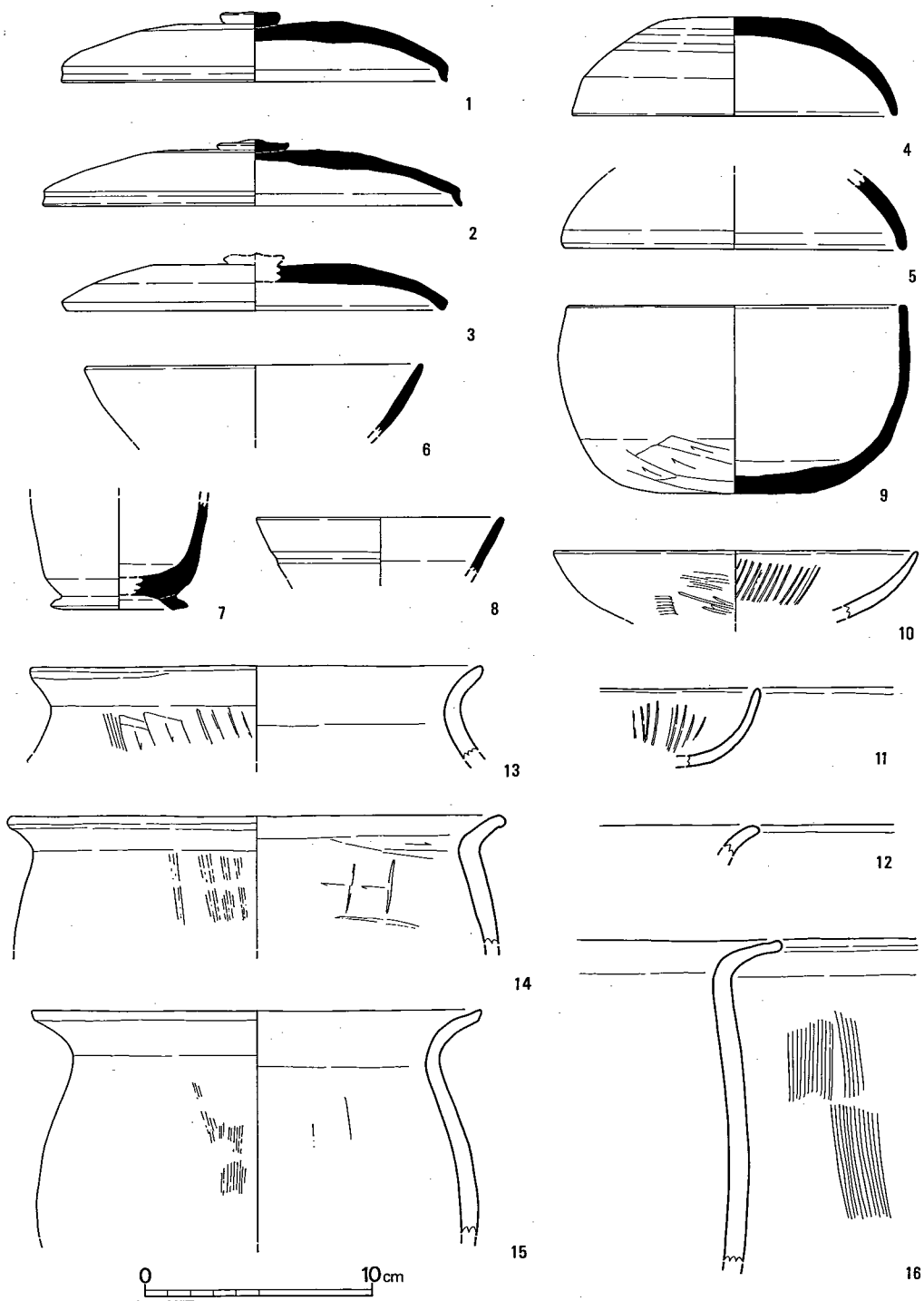
作り付け型のカマドで、北壁の中央に付設している。両袖部を留める程度で、天井部は遺存しない。

右袖は長さ122cm、基底部幅29cm、残高15cm、左袖は長さ108cm、基底部幅38cm、残高20cmを測る。袖部の先端を15～20cm掘り込み、長さ45cmの河原石を立てている。その上に天井石を掛けたものであろう。

石の間隔は52cmを測り、床面からの高さは34cmである。支脚は17cm程の石を立てている。カマド床面の掘り込みは、長軸104cm、短軸45cmを測り、壁面は加熱により赤変していた。



第 47 図 16号住居跡カマド実測図（1/30）



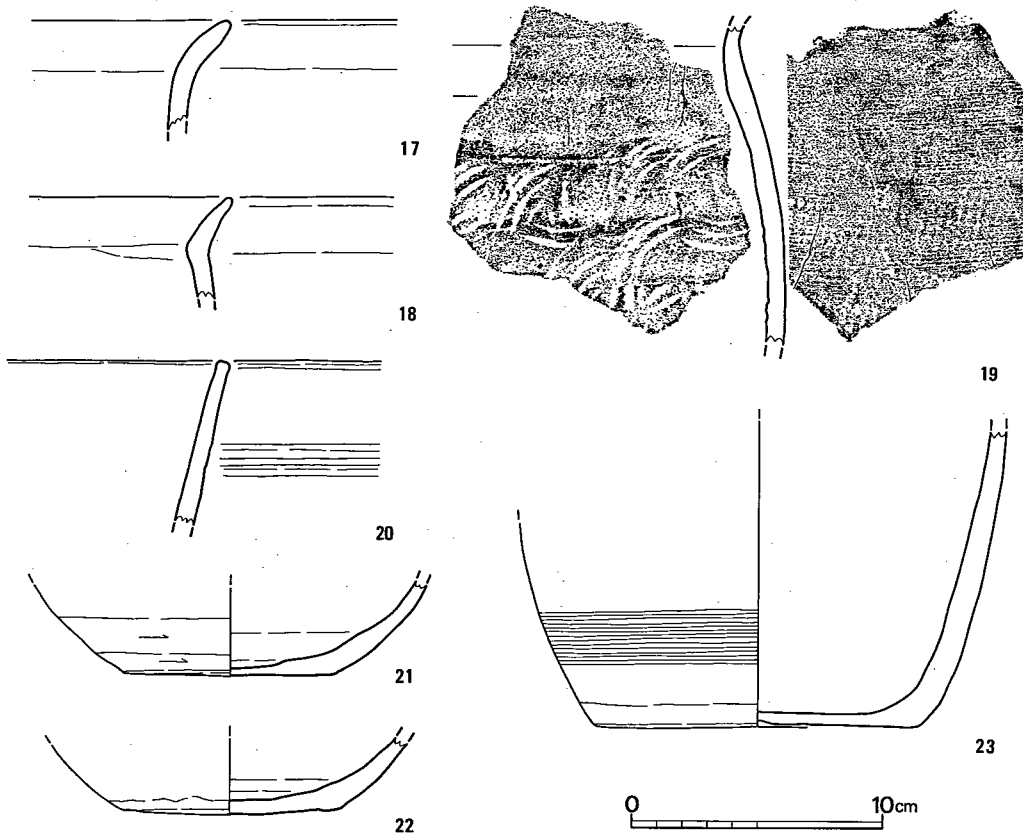
第 48 图 16号住居跡出土土器実測図① (1/3)

出土土器 (図版130-4, 第48・49図)

須恵器 (1~9) 1~5は坏蓋で, 1・2の口唇部は小さく立つ。1・2は天井部にボタン状の偏平な撮みを貼付する。口径は1が16.9cm, 2は18.4cm。口縁部ヨコナデ, 天井部回転ヘラケズリ, 内面ナデ調整による。3の口唇部は肥厚し, 口径は16.6cmに復原した。4・5は天井部がドーム状を呈する坏蓋で, 口唇部は丸く納める。4は器高4.3cm, 口径14.2cmを測る。

6は口縁部破片で, 坏身になるか。口唇部は小さく納める。7は口縁部を欠失するが, 深めであることから椀とした。8は口縁部破片であるが, 沈線を有することから甗の口縁部になろう。9は鉢で器高8.1cm, 口径14.8cmを測る。口唇部は丸く, 胴部はあまり張らずに平底の底部に移行する。口縁部ヨコナデ, 外底部手持ちヘラケズリ, 内面ナデ調整による。

土師器 (10~23) 10・11は坏で, 11は内湾気味に立上がる。外面ヘラミガキ, 内面には暗文がみられる。12~19・21~23は甕である。13・14は断面「く」字形を呈する。15・16は前者よ

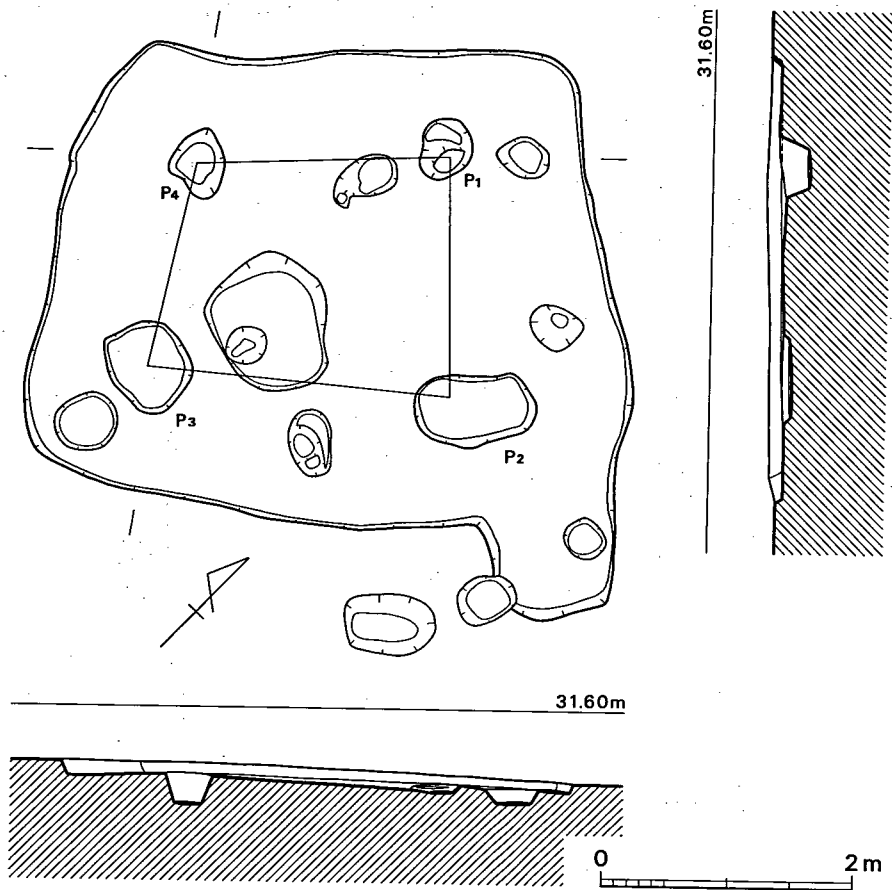


第 49 図 16号住居跡出土土器実測図② (1/3)

り屈曲している。17・18の口縁部の外反度合は小さい。19は甕の頸部～肩部破片で、外面平行タタキ目→カキ目（8条/cm）、内面円弧タタキ目→一部ナデ消しによる。胎土に長石・石英・角閃石粒を多く含む。焼成は良好で、色調は黄灰色を呈する。20は甗の口縁部破片で、口縁部のやや下位にヘラ沈線を2条巡らす。21～23は平底の底部破片で、21・22の底部はヘラケズリにより、23はカキ目を施す。22・23は加熱を受けて赤変している。8世紀前半頃か。

17号住居跡（図版12-1，第50図）

調査区の東側に位置し，C群に位置する。平面形は隅丸方形を呈し，北西壁長3.38m，北東壁長4.44mを測る。削平が著しく，壁高は12cm留める程度である。西側コーナーに112×83cmの方形の張出しがあり，入口部になるか。



第 50 図 17号住居跡実測図 (1/60)

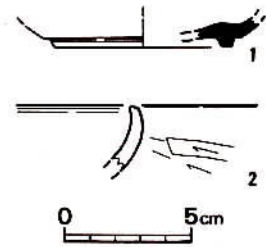
主柱穴はP1～4で、P1－2間1.9m、P2－3間2.42mを測る。カマドは不明。

出土土器 (第51図)

須恵器 (1) 1は高台を有する坏身で、高台径は6.8cmを測る。焼成は堅緻で、色調は暗青灰色を呈する。

土師器 (2) 2は坏の口縁部破片で、口縁部は内湾する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ調整による。

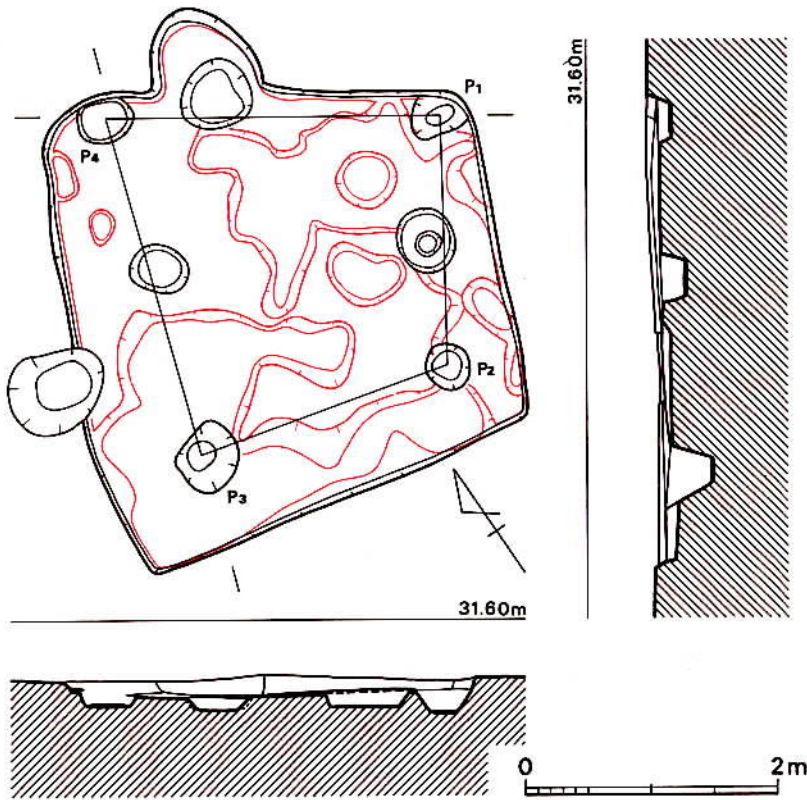
当住居跡からは、上記の2点しか出土しておらず、時期決定に苦慮するが、大略8世紀代か。



第 51 図 17号住居跡出土土器実測図 (1/3)

18号住居跡 (図版12-2, 第52図)

17号住居跡の10.3m南側に位置し、E群に属する。18～22号住居跡は、弧を描いて配される。

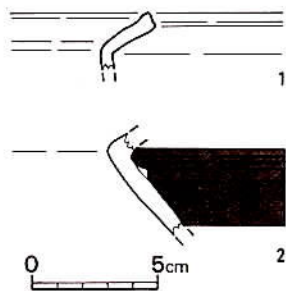


第 52 図 18号住居跡実測図 (1/60)

平面形は台形を呈し、北壁長3.42m、東壁長2.65mを測る。当住居跡も削平により、壁高は12cmを留めるにすぎない。コーナー部に配されるP1～4が支柱穴と考えられ、P1-2間1.98m、P2-3間2.1mを測る。埋土中からは弥生土器が出土した。

出土土器 (第53図)

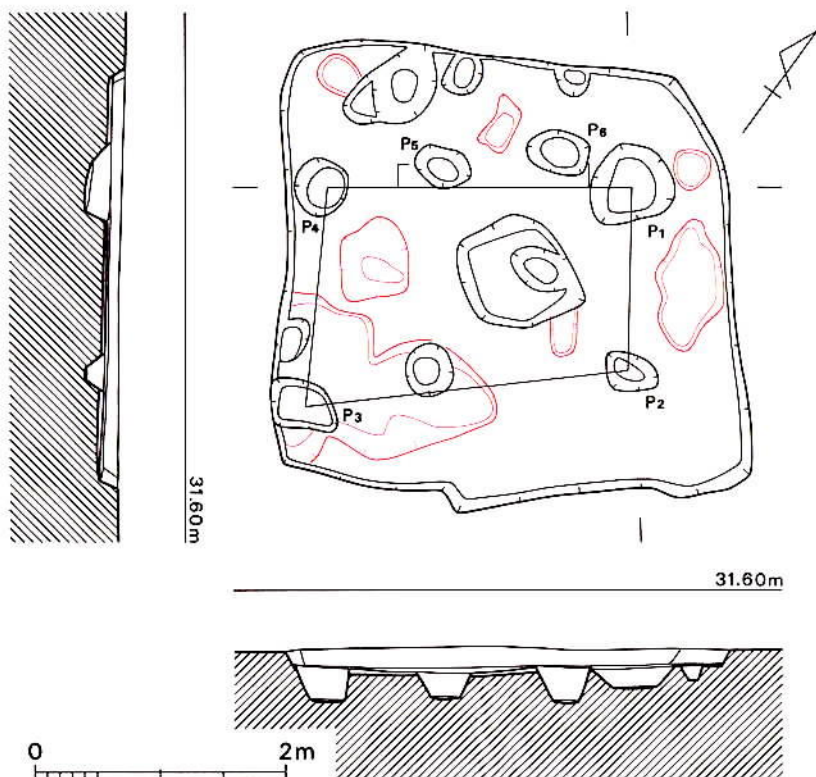
弥生土器 (1・2) 1は甕の口縁部破片で、口唇部は上方に立つ。2は頸部破片で、頸部直下に断面三角凸帯を貼付する。外面には、丹塗りの痕跡を留める。弥生期の築造か。



第 53 図 18号住居跡出土土器
実測図 (1/3)

19号住居跡 (図版13-1・2, 第54図)

18号住居跡の2.5m東側に位置し、E群に属する。平面形は隅丸方形を呈し、北西壁長2.98m、南西壁長3.28m、壁高0.16mを測る。支柱穴はP1～4を想定した。P1-2間1.45m、P1-4間2.42mを測る。カマドはその痕跡を留めないが、北西側で検出したP5・6は、位置・深さか



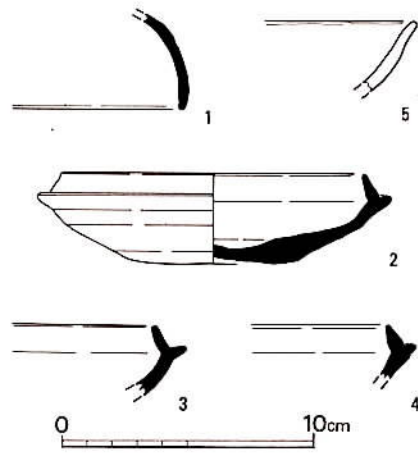
第 54 図 19号住居跡実測図 (1/60)

らみて袖石の抜き跡と考えられよう。埋土中から土器片が出土した。

出土土器 (図版130-5, 第55図)

須恵器 (1~4) 1は坏蓋の口縁部破片で、口唇部は丸く納める。2~4は坏身である。2は器高3.6cm, 復原口径12.0cmを測る。たちあがりは内傾し、口唇部はシャープである。調整は口縁部ヨコナデ, 内外面ナデ, 底部はへら切り離し未調整。3・4は口縁部小破片。

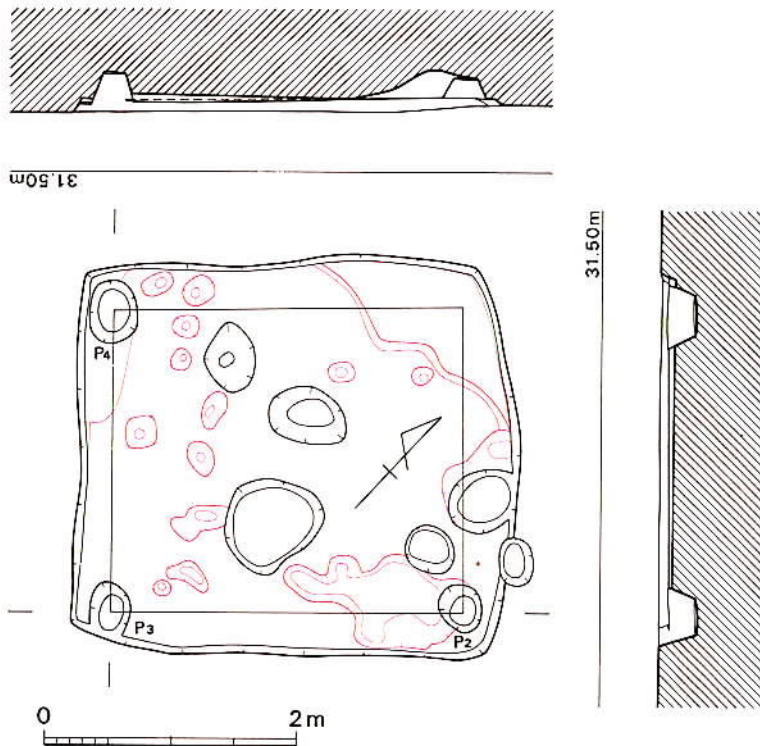
土師器 (5) 5は口縁部小片で、坏になるか。口唇部は丸く納める。



第 55 図 19号住居跡出土土器実測図 (1/3)

20号住居跡 (図版14, 第56図)

19号住居跡の3.5m南東側に位置し、E群に属する。平面形は隅丸方形を呈し、北西壁長3.1

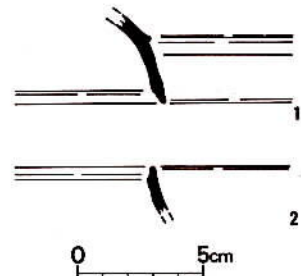


第 56 図 20号住居跡実測図 (1/60)

m, 北東壁長3.1mを測り, 壁高は削平により10cm前後留める程度。支柱穴は4本と考えられるが, 検出したのはP2~4の3本で, P1は確認し得ていない。P2-3間2.78m, P2-4間2.4mを測る。カマドは本来存在したのであろうが, 遺存しない。

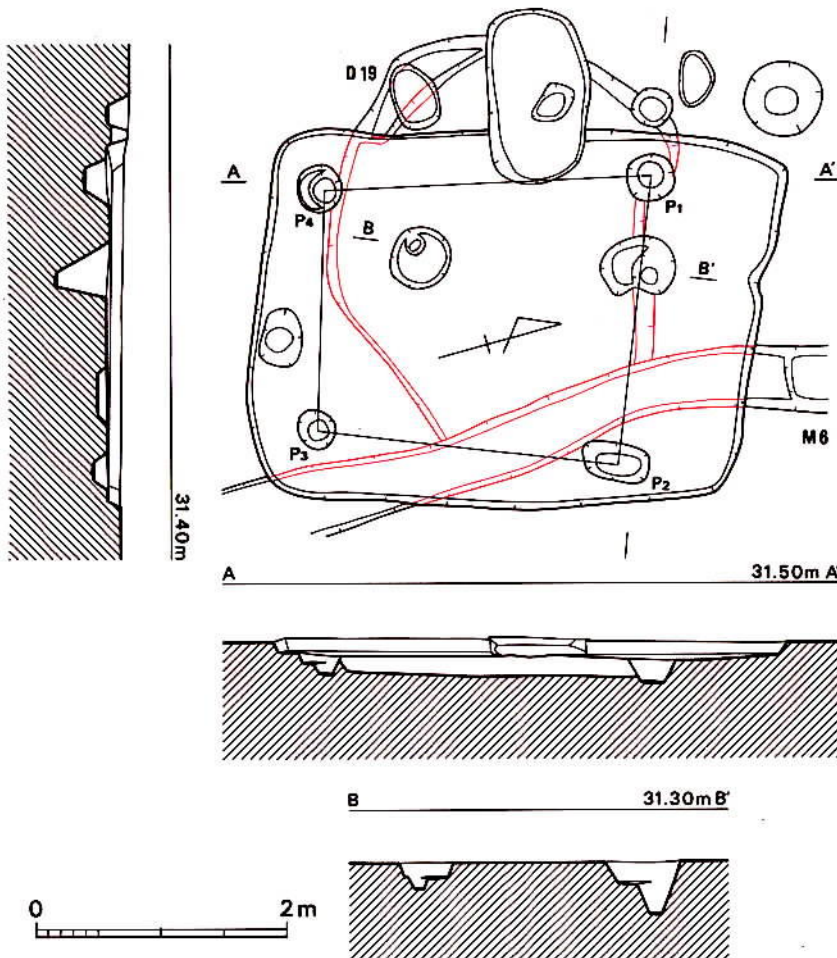
出土土器 (第57図)

須恵器 (1・2) 1は坏蓋の口縁部小片で, 外面の稜は鋭い。口唇部内面には段を有する。2は坏身のたちあがり部の破片。



第 57 図 20号住居跡出土土器
実測図 (1/3)

21号住居跡 (図版15-1, 第58図)



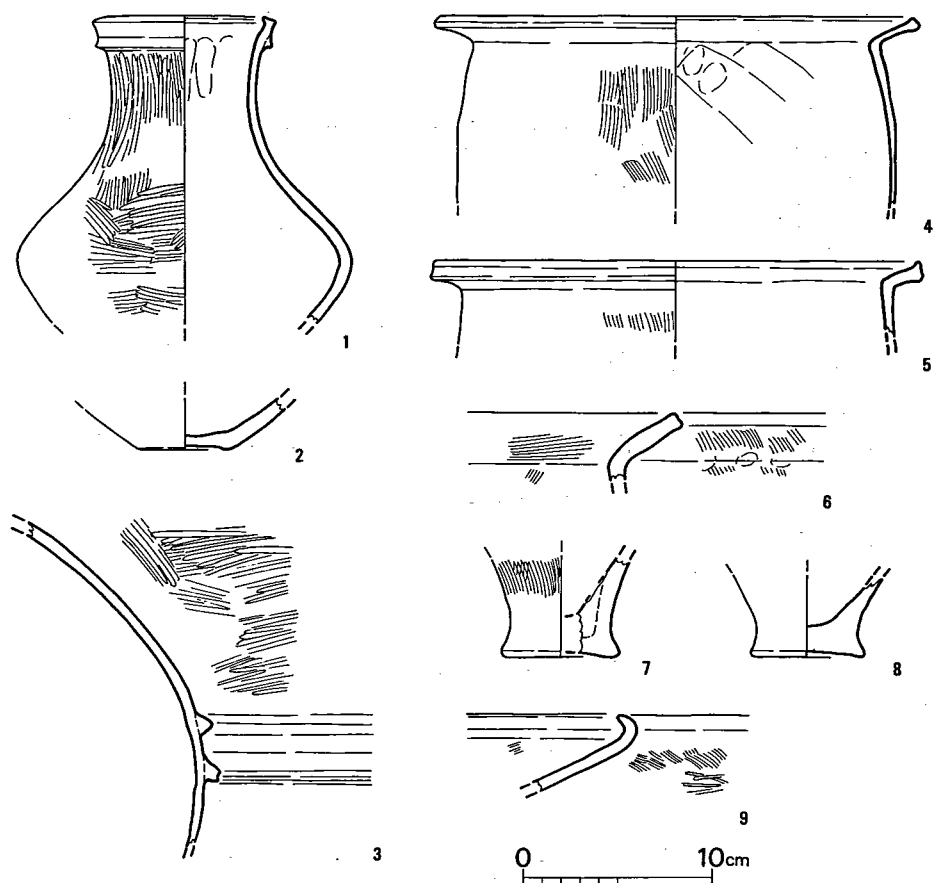
第 58 図 21号住居跡実測図 (1/60)

20号住居跡の3.5m南側に位置し、E群に属する。19号土壇と6号溝を切っている。平面形は隅丸方形を呈し、西壁長4.0m、北壁長2.62mを測る。当住居跡も遺存状態は悪く、壁高は西壁側で14cmを留める程度である。

主柱穴はP1～4の4本で、深さ14～18cm、柱穴間の距離はP1-2間2.32m、P1-4間2.58mを測る。カマドは不明であるが、西壁中央の長円形のピットには、壁面は焼けていないものの炭がぎっしり詰まっております、或はカマドになるか。埋土中から弥生土器・須恵器が出土した。

出土土器 (図版131-1, 第59・60図)

弥生土器 (1～9) 1は長頸壺で、底部を欠く。口径8.8cm、胴径18.2cmに復原した。口唇部は内側に突出し、口縁端部のやや下位に断面三角凸帯を貼付する。口縁部から内湾気味に胴部に移行するが、胴部はフラスコ状に張り出す。調整は口縁部ヨコナデ、頸部縦方向のヘラミガ



第 59 図 21号住居跡出土弥生土器実測図 (1/4)

キ、胴部横方向のへらミガキ、頸部内面指頭によるナデ、内面ナデによる。胎土に石英・角閃石・雲母を含む。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。2は壺の底部破片で、復原底径は5.0cmを測る。外面工具ナデ、内面雑なナデ調整による。焼成は良好で、橙灰色を呈する。

3は胴部破片であるが、丸みを帯び、へらミガキ調整を施していることから壺になろう。2条の凸帯を貼付するが、上位は断面三角形、下位はコ字形を呈する。下層の19号土壙出土品と接合した。

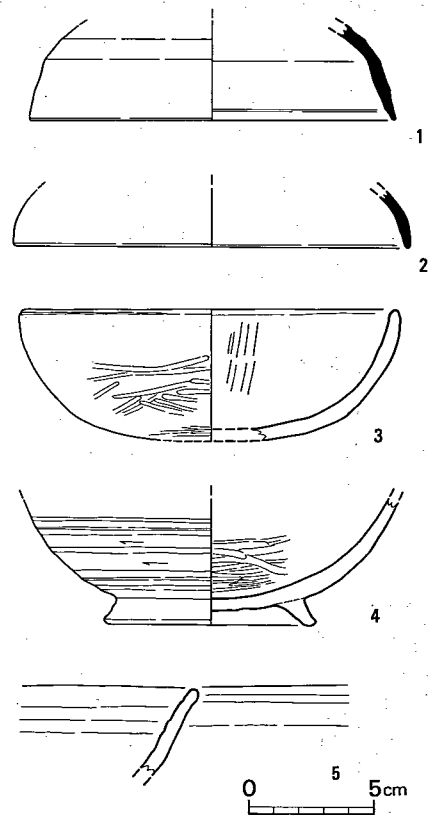
4～8は甕で、4～6が口縁部、7・8は底部破片である。4・5の口縁部は「く」字形を呈し、口縁端部は上方に跳ね上げる。外面はへぎ板状工具によるナデ、内面ナデ調整による。外面には煤の付着がみられる。口径は4が25.2cm、5は26.4cmに復原した。6は口縁部小片で、口唇部を若干窪ませる。内外面ともハケ目調整による。

7・8は上底の底部で、底径は7が6.4cm、8は6.2cmを測る。9は高坏の口縁部破片で、鈎状に内反する。外面ハケ目→へらミガキ、内面ハケ目→ナデ調整による。

須恵器 (1・2) 1・2は坏蓋の口縁部破片で、口径は1が14.4cm、2が15.7cmに復原した。焼成は堅緻で、色調は灰色を呈する。

土師器 (3～5) 3は坏で、器高5.2cm、復原口径14.7cmを測る。口唇部は内湾し、内面には漆状の膠着物が見られる。外面は細かいへらミガキによる。4は椀で、底部には八字形の高台を付す。内外面ともへらミガキ調整による。5は口縁部破片であるが、椀になろう。内外面ナデ調整により、外面には漆状の膠着物がみられる。

当住居跡出土の遺物には、弥生土器・須恵器・土師器と混在しているが、弥生土器は下層の19号土壙と接合関係にあり、19号土壙出土品とみなせることから、1・2の須恵器坏蓋の時期をあてたい。



第60図 21号住居跡出土土器実測図 (1/3)

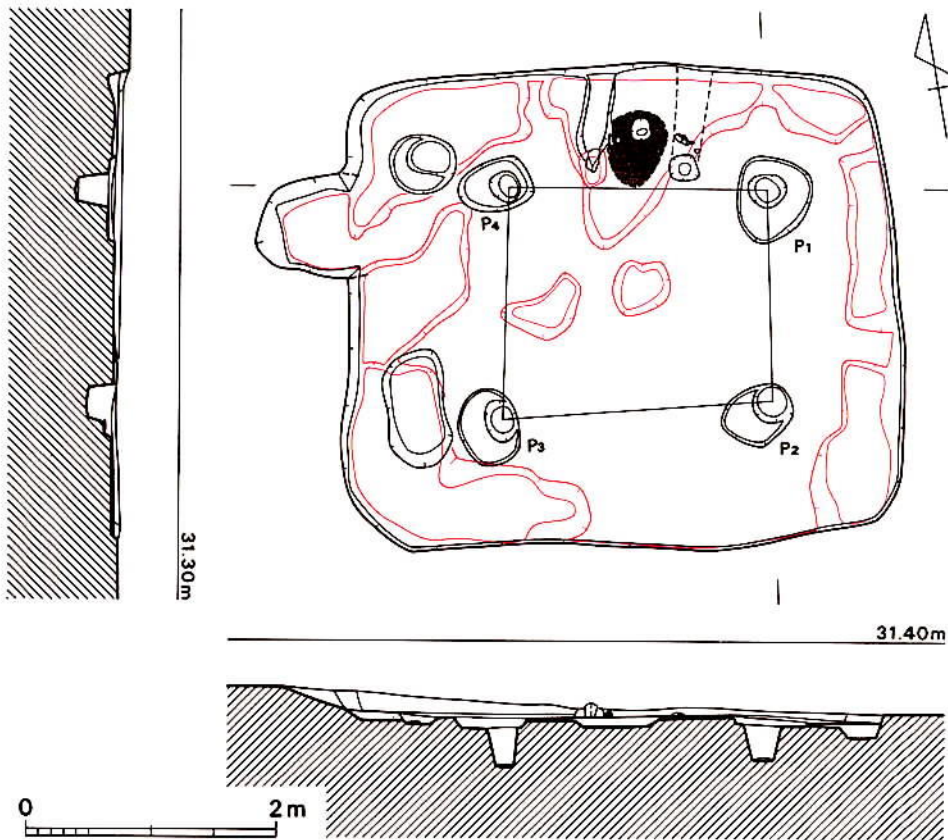
22号住居跡 (図版15-2・16-1, 第61図)

21号住居跡の3.2m南側に位置し、E群に属する。平面形は隅丸長方形を呈し、北壁長4.08m、東壁長3.5mを測る。当住居跡も著しい削平により、壁高は西壁側で15cm残す程度である。主柱穴はP1～4で、径25～34cm、深さ24～46cmを測る。柱の間隔はP1-2間1.68m、P1-4間2.05mを測る。埋土・カマド内から土器が出土した。

カマド (図版15-3, 第62図)

作り付け型で、北壁の中央に付設する。遺存状態は悪く、左袖を留める程度である。左袖は長さ63cm、基底部幅27cm、残存高10cmで、先端部には袖石を立てている。右袖は遺存しないが、袖石の抜き跡がある。また、袖部の真下には土器があり、補強のために置いたものか。支脚は抜き跡があることから石を立てていたものと考えられ、抜き跡の前面が火床面になる。

カマド内からは、土器が出土した。



第 61 図 22号住居跡実測図 (1/60)

出土土器 (図版131-2, 第63図)

須恵器 (1~4) 1・2は坏蓋で、1は口唇部内面に段を有し、天井部との境に沈線を巡らす。2は天井部が平坦で、沈線は有しない。1は器高4.2cm, 復原口径13.2cm, 2は器高3.7cm, 復原口径16.3cmを測る。口縁部ヨコナデ, 天井部ヘラケズリ, 内面ナデ調整による。1の天井部には一本線のヘラ記号がある。

3は坏身で、たちあがり内傾する。器高4.3cm, 復原口径12.2cmを測る。口縁部ヨコナデ, 外面回転ヘラケズリ, 内面ナデ調整による。焼成は良好で、緑灰色を呈する。

4は口縁部破片で、口径は8.0cmに復原した。小型の壺になるか。口縁部はヨコナデで、内面には灰が掛かる。

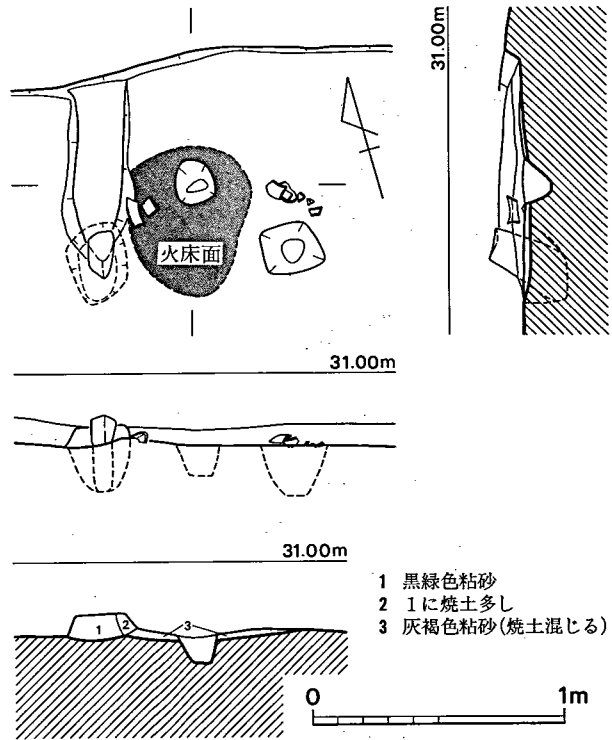
土師器 (5~9) 5はカマド内出土の長頸壺で、須恵器を模倣したもの。器高16.6cm, 口径11.9cm, 頸部径6.4cm, 胴部径11.9cmを測り、口径と胴径は等しい。器面調整はカキ目(6条/cm)による。焼成は良好で、乳灰色を呈する。

6~8は甕で、8は口縁部を欠失する。6・8は頸部の締りがよく、肩部に張りが見られるが、7は頸部から直線的に胴部に移行する。調整は口縁部ヨコナデ, 外面ハケ目で、8の内面はハケ目による。口径は6が19.4cm, 7は21cmに復原した。何れも胎土に赤褐色粒, 角閃石を含む。焼成は良好で、6は淡橙色, 7は黄褐色, 8は暗橙灰色を呈する。

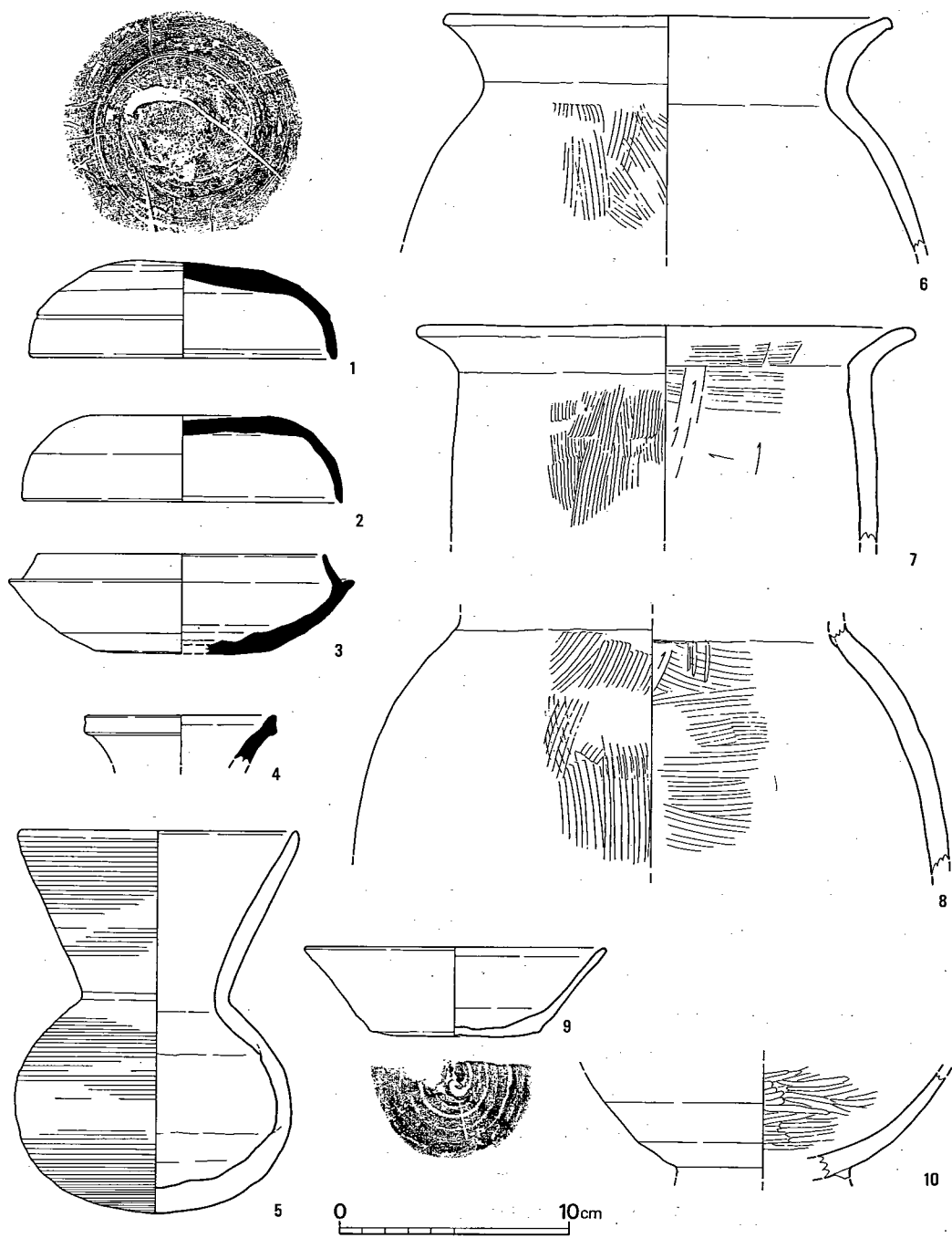
9は坏で、器高3.9cm, 復原口径13.0cm, 復原底径7.4cmを測る。底部から直線的に開き、口唇部を若干肥厚させている。口縁部回転ナデ, 内面ナデ, 底部は回転ヘラケズリによる。焼成は良好で、内面暗黄褐色, 外面灰褐色を呈する。

内黒土器 (10) 底部に高台を貼付した碗の破片で、外面回転ヘラケズリ, 内面ヘラミガキ調整による。焼成は良好で、内面黒褐色, 外面肌色を呈する。胎土に赤褐色粒を含むものの割合に緻密である。

9・10は混入品で、当住居跡の時期は6世紀後半であろう。



第 62 図 22号住居跡カマド実測図 (1/30)



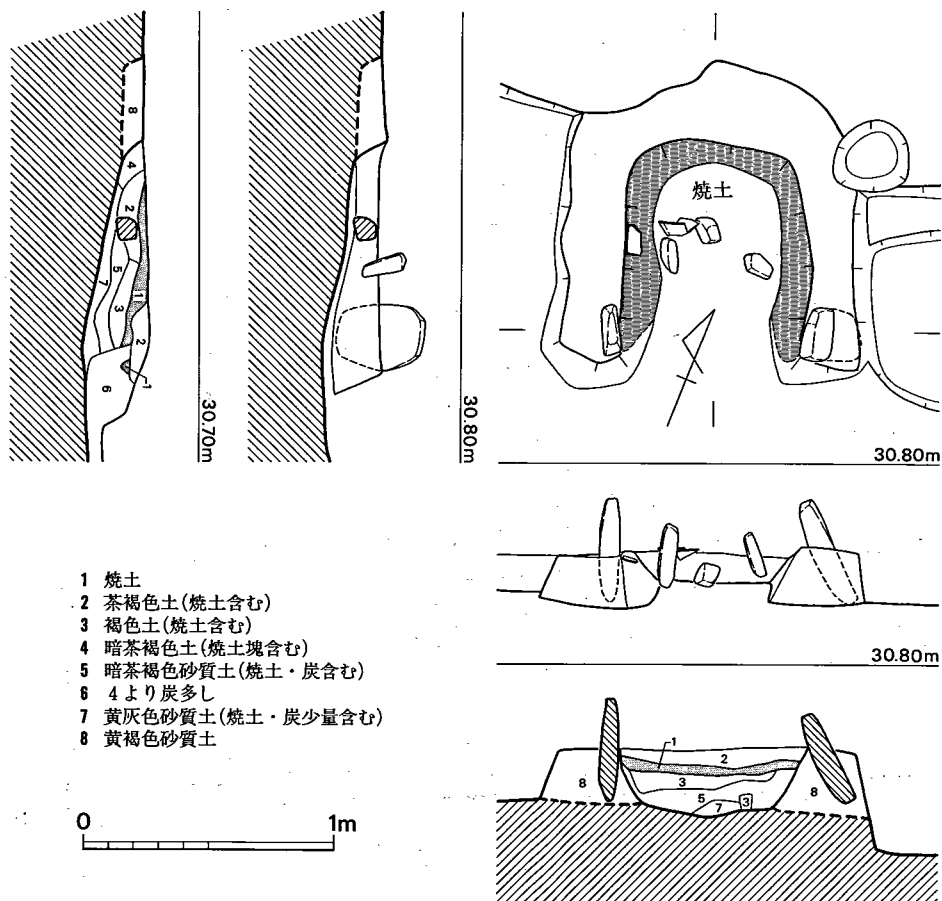
第 63 图 22号住居跡出土土器実測図 (1/3)

23号住居跡 (図版17-1, 第65図)

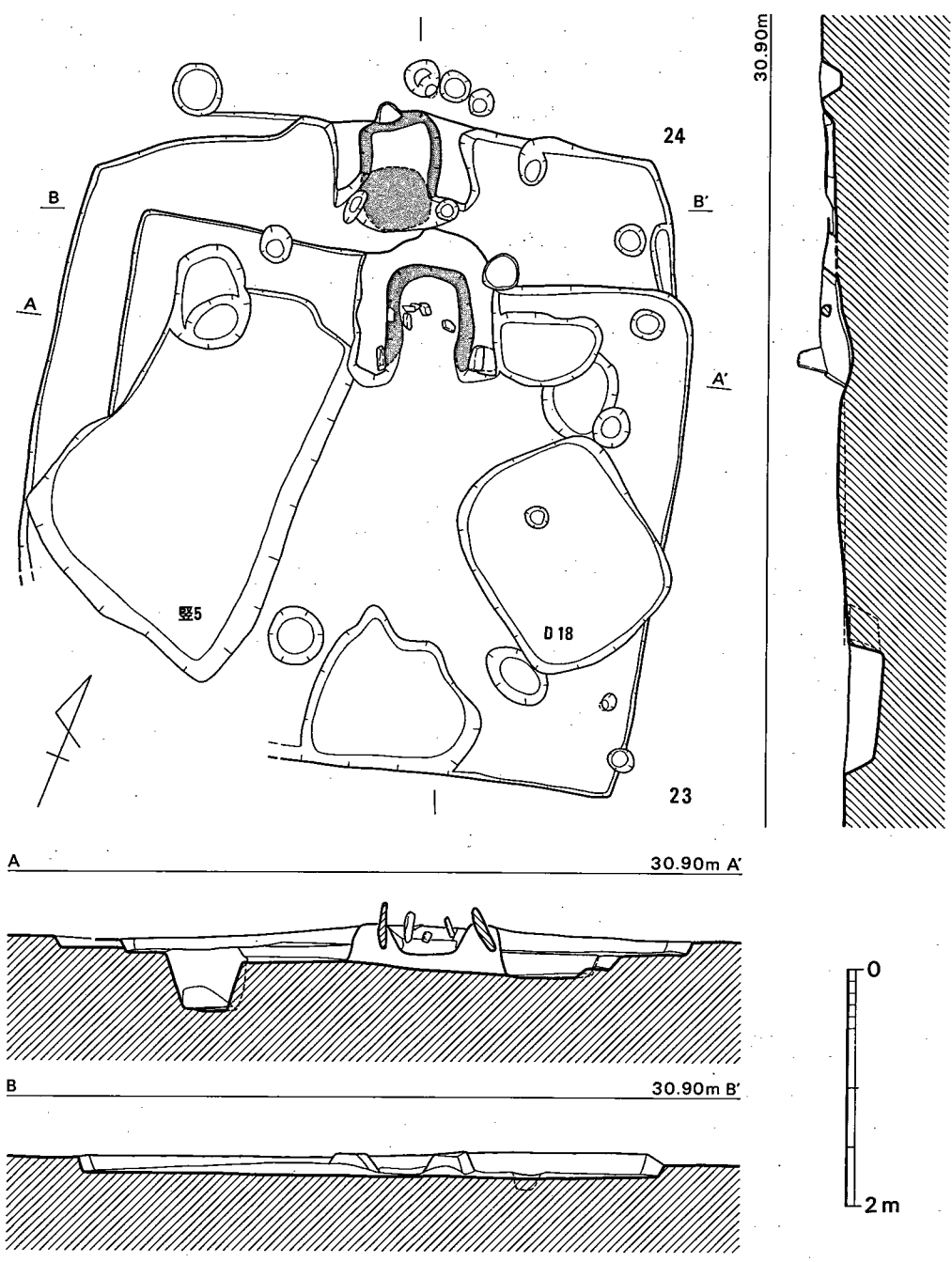
5~7号竪穴の下層で検出した住居跡で、18号土壌に切られ、24号住居跡を切っている。方形を呈し、北壁長4.73m、東壁長4.3mを測る。壁高は北壁側で17cm遺存する程度。床面に柱穴らしいピットはあるが、上層からの掘り込みで、主柱穴には成り得ない。埋土中・カマド内から土器が出土した。

カマド (図版17-2, 第64図)

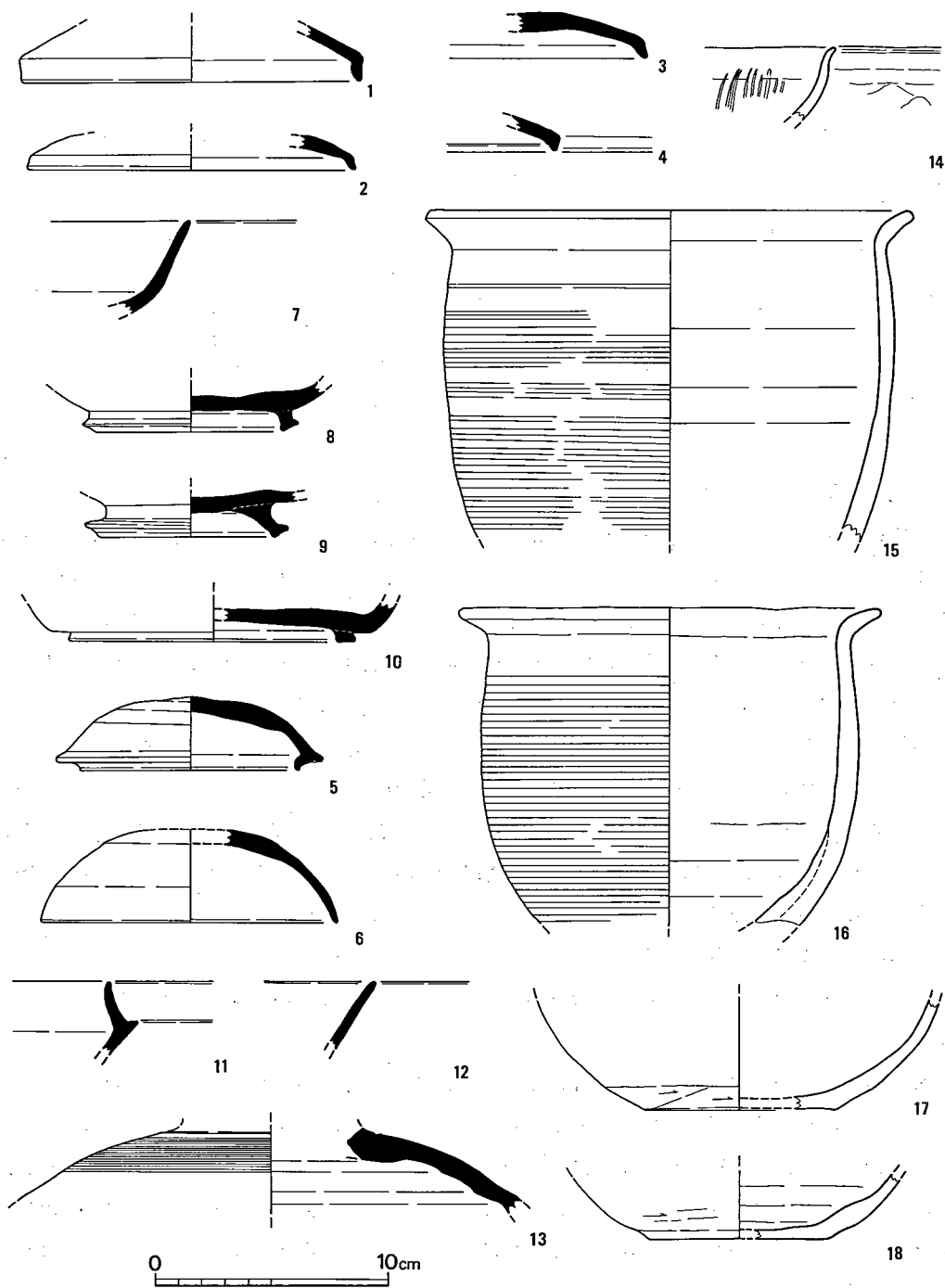
作り付け型のカマドで、北壁の中央に付設する。遺存状態は悪く、袖部を留める程度である。右袖は長さ79cm、基部幅37cm、残高22cm、左袖は長さ110cm、基部幅42cm、残高20cmを測る。袖部の先端には、長さ40cm程の石を立てていた。壁面はよく焼けており、埋土上層には焼土層がみられたが、天井部の崩落土と考えられる。



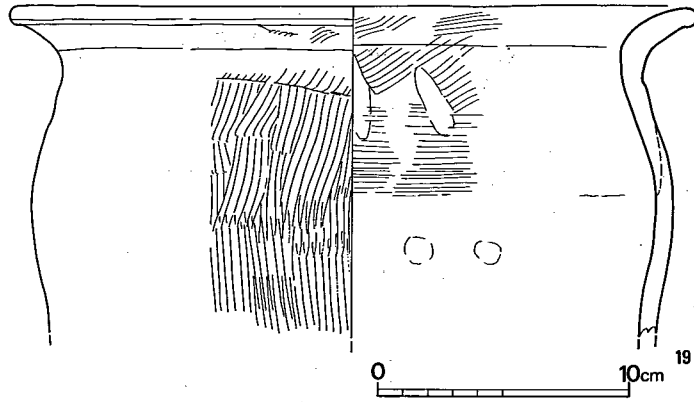
第 64 図 23号住居跡カマド実測図 (1/30)



第 65 图 23·24号住居跡，18号土壙実測図 (1/60)



第 66 图 23号住居跡出土土器実測図① (1/3)



第 67 図 23号住居跡出土土器実測図② (1/3)

出土土器 (第66・67図)

須恵器 (1~13) 1~4は坏蓋の口唇部小片で、口唇部は小さく立つ。器高が低い器形を呈しよう。1は口径14.4cm, 2は14.0cmに復原した。口縁部はヨコナデ調整による。5は口縁部内面にかえりを有するもの。器高3.1cm, 復原口径11.5cmを測る。口縁部ヨコナデ, 外面回転ヘラケズリ, 内面ナデ調整による。14号住居跡出土品と接合関係にある。6は残高3.9cm, 復原口径12.8cmを測る。口唇部は丸く納め, 短頸壺の蓋になるか。口縁部ヨコナデ, 天井部ヘラケズリ→ナデによる。焼成は良好で, 色調は暗灰色を呈する。床面直上の出土である。

7~11は坏身で, 7は口縁部破片, 8・9は高台部破片である。7の口唇部は丸く納め, 回転ナデ調整による。8・9の高台は外方に突出するもので, 9の高台は1.5cmと高い。高台径は8が8.0cm, 9は7.4cmを測る。8はカマド右袖より出土した。9は5号竪穴出土品と接合関係にある。10は高台径12.2cmを測る大型品で, 床面直上の出土。11はたちあがり内傾するもの。12は口縁部小片で, 坏身になるか。

13はカマド右袖の出土で, 頸部はカキ目調整による。壺になるか。焼成は良好で, 灰色を呈する。

土師器 (14~19) 14は坏で, 口縁部は小さく屈曲する。外面ヘラケズリ, 内面ヘラミガキによる。胎土に砂粒は殆ど含まず, 緻密である。焼成は良好で, 色調は暗赤褐色を呈する。

15~19は甕である。15・16は小型品で, 口縁部ヨコナデ, 内面ナデ, 外面はカキ目調整による。器面は二次加熱を受け赤変する。口径は15が20.6cm, 16は18.0cmに復原した。17・18は底部破片であり, 15・16と同一手法による。19は大型の甕で, 口径は27.0cmに復原した。口縁部は大きく外反する。口縁部ヨコナデ, 内面ハケ目→ナデ消し, 外面ハケ目調整による。

当住居跡の時期は, 8世紀中~後半か。

24号住居跡 (図版17-1, 第65図)

16号住居跡に重複して下層で検出した住居跡で、23号住居跡に大半を切られる。北壁長4.72m, 西壁長4.98m, 壁高は北壁で18cmを測る。柱穴は不詳。埋土中より土器が出土した。

カマド (図版17-3, 第68図)

作り付け型のカマドで、北壁の中央に付設する。16号住居跡カマドと完全に重複する。遺存状態は悪く、両袖を留める程度である。また、袖部先端の小ピットは16号住居跡カマド袖石の抜き跡である。

右袖は残存長68cm, 基底部幅43cm, 残高16cm, 左袖は残存長34cm, 基底部幅33cm, 残高12cm, 袖部幅49cmを測る。奥壁には幅20cmのテラスがあり、煙道になるか。壁体はよく焼けており、また火床面は54×56cmの範囲で焼けていた。

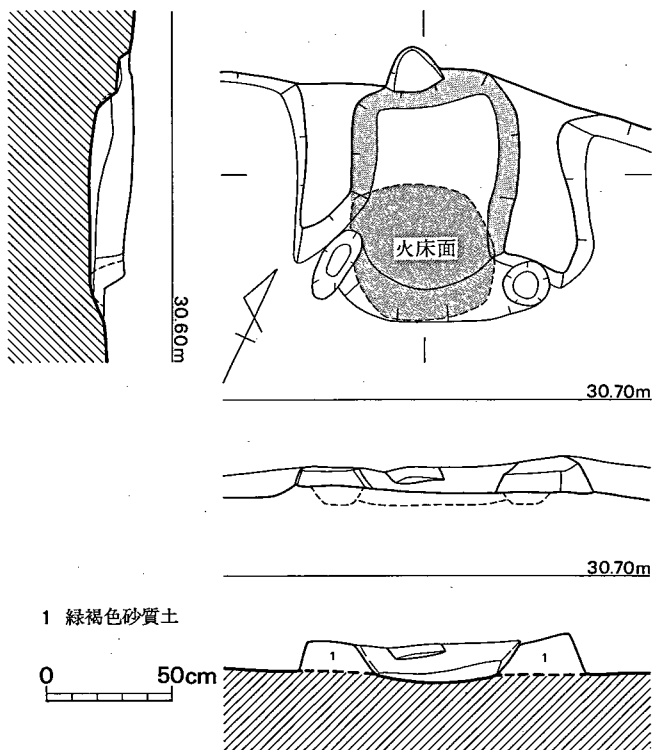
埋土中から土器が出土した。

出土土器 (図版131-3, 第69図)

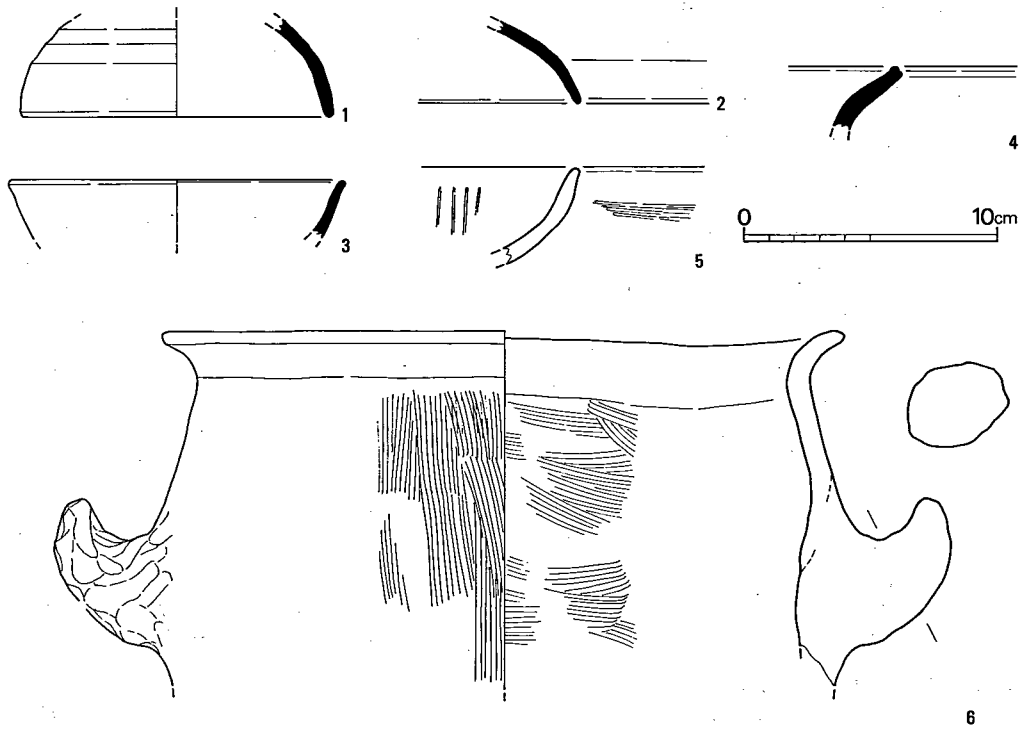
須恵器 (1~4) 1・2は坏蓋の口縁部破片で、1の口唇部は丸く納める。復原口径は12.2cmで、器高が高いことから短頸壺の坏蓋になるか。口縁部は回転ナデ調整による。2の口唇部はシャープである。

3は口縁部破片で、口唇部は若干外反する。復原口径は13.2cmであり、坏身になろう。外面には灰が掛かる。カマド内より出土した。4は口縁部小片で、壺になるか。内面灰被りである。

土師器 (5・6) 5は坏の口縁部小片で、口唇部は丸く納める。外面細かいヘラミガキ, 内面には暗文がみられる。焼成は良好で、黄褐色を呈する。6は取っ手付き甕の口縁部~胴部上位破片である。口縁部は大きく外反し、頸部のやや下位に太目の取っ手をソケット式に貼付する。調整は口縁部ヨコナデ, 外面縦方向のハケ目, 内面ヨコハケ目→ナデ消しによる。また、内外面には、焼きこげがみられる。口径は26.6cmを測る。



第 68 図 24号住居跡カマド実測図 (1/30)



第 69 図 24号住居跡出土土器実測図 (1/3)

25号住居跡 (図版18-1, 第70図)

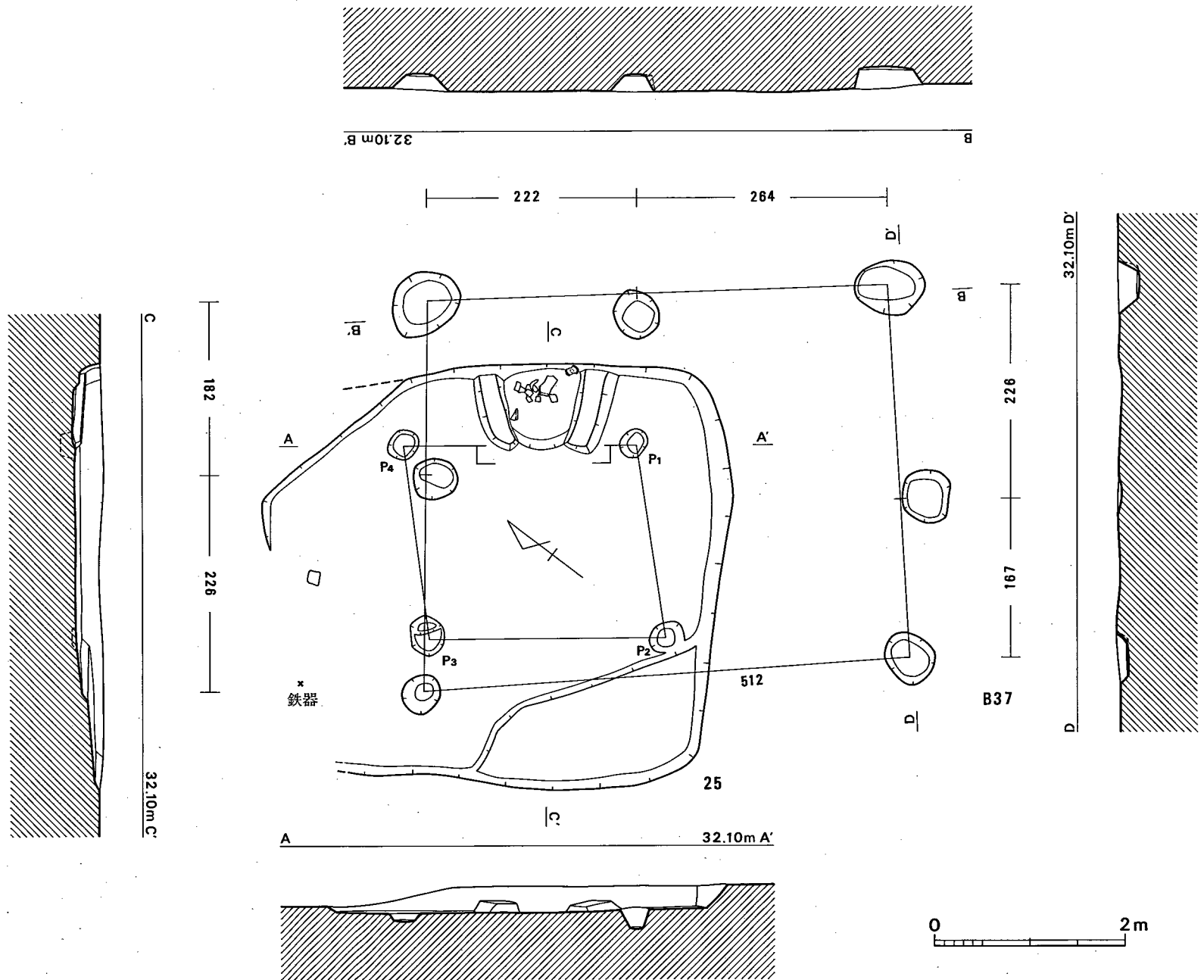
調査区の西側に位置し、C群に属する。37号建物跡と切合い関係にあるが、前後関係はよく判らなかつた。住居跡の規模は南東壁長4.16m、壁高0.24m、南西壁は3.6m遺存する。北東壁は喪失するものの縦位長方形を呈しよう。

主柱穴はP1~4で、径32~40cm、深さ7~23cmを測る。柱間はP1-2間2.04m、P1-4間2.44mを測る。また、南西側には6cmほどのテラスを有する。埋土中からは土器の他に製塩土器・瓦・鉄鏃等が出土した。

カマド (図版18-2, 第71図)

作り付け型のカマドで、北東壁の中央に付設する。遺存状態は悪く、両袖部を留める程度である。右袖は残存長86cm、基底部幅37cm、残高10cm、左袖は残存長82cm、残高8cmを測る。袖部は焼土混じりの茶褐色土を盛っていた。壁体はあまり焼けておらず、支脚はみられない。

カマド床面から5cm程浮いた状態で、土器が出土した。



第 70 図 25号住居跡, 37号建物跡実測図 (1/60)

出土土器 (図版131-4・132-1, 第72・73図)

須恵器(1~19) 1~8は坏蓋である。1は天井部破片で、擬宝珠形撮みを貼付する。2~8は口縁~天井部破片で、口唇部は何れも小さく立つ。

口径は12.9~13.8cmを測る小型品(6~8)と15cm前後を測る中型品(4・5)と17cmを越す大型品(3)がある。

6は偏平な撮み, 7は偏平な擬宝珠形撮みを貼付する。

9~14は坏身で、低い高台を付すもの(9・10)

と稜を有するもの(11・12)がある。9は底部から斜め上方に開き, 10は内湾気味に開く。9は器高3.4cm, 復原口径13.6cm。10は器高4.2cm, 復原口径12.5cmを測る。

15は器高3.4cm, 口径13.2cmを測る。口縁部は内湾し, 坏身とした。18は復原高台径が13.8cmと大きく, 高台付きの盤になるか。19は取っ手部の破片で, 生焼け品。

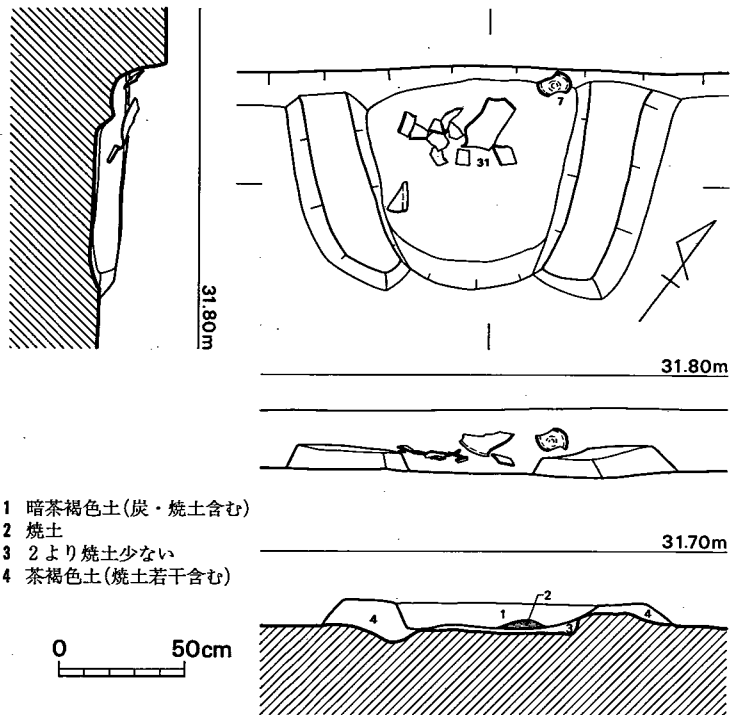
土師器(20~34) 20・21は蓋で, 20は器高が低く, 口唇部は小さく立つ。精製品で, 色調は暗赤橙色を呈する。21は器高3.8cm, 口径15.8cmを測り, 薬壺形短頸壺とセットをなすもの。焼成は良好で, 暗赤橙色を呈する。

23は坏の小破片。24・25は皿で, 口縁部は僅かに外反する。口径は24が15.0cm, 25は15.3cmに復原した。26は坏で, 外面へラミガキ, 内面には暗文がみられる。

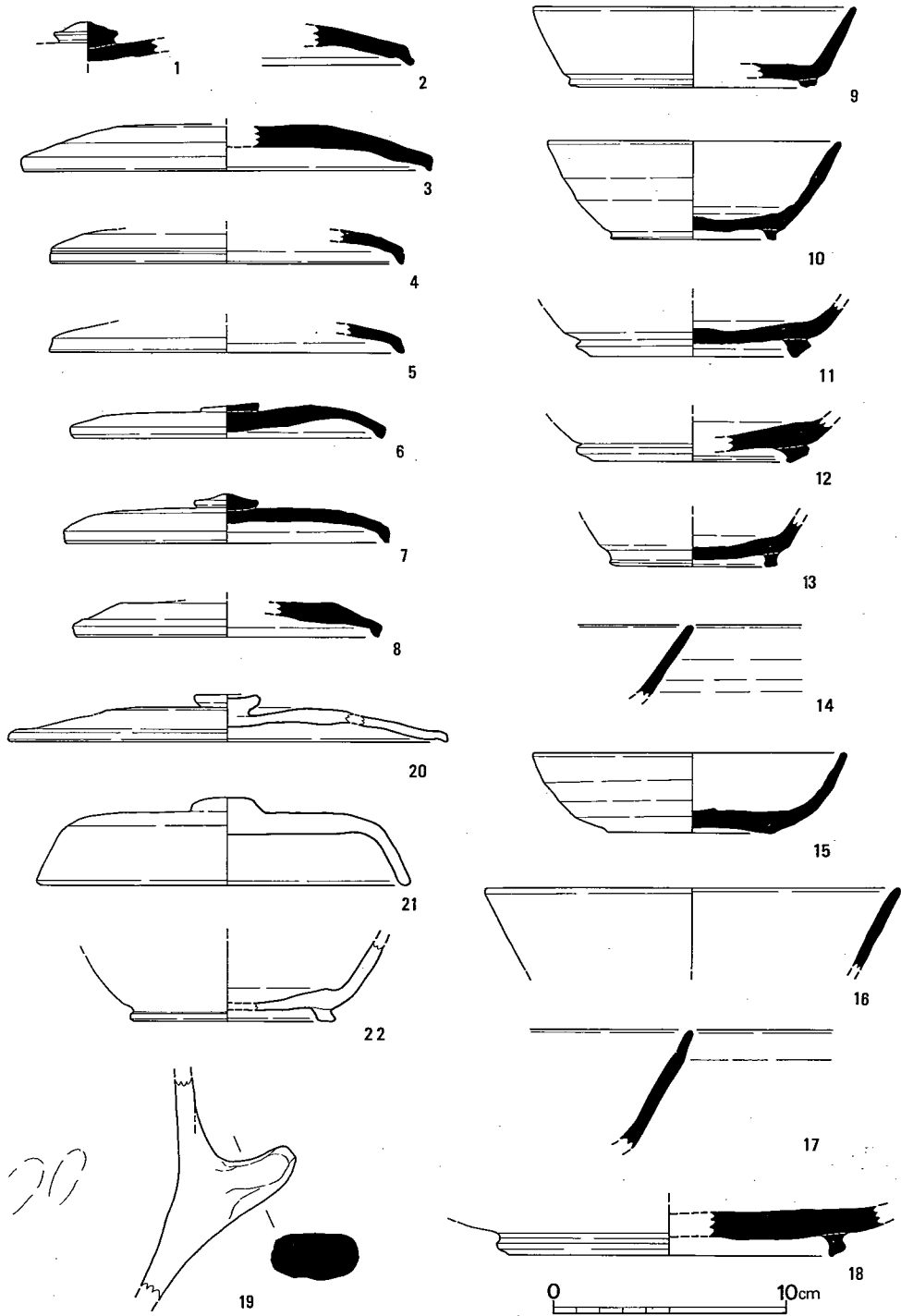
27は頸部に締りがあることから壺とすべきか。口縁部はヨコナデ調整による。28は口縁部が大きく外反する器形で, 鉢になろう。内外面ともミガキ調整による。29~31は甕で, 31は長胴形を呈しよう。外面は縦方向の擦過, 内面工具ナデ調整による。カマド内の出土である。

32は口縁部破片であるが, 甕になろう。33は内面にタタキ目を有する甕で, 外面はカキ目調整による。34も口縁部破片で, 口縁部は大きく開く。外面には平行タタキ目がみられる。

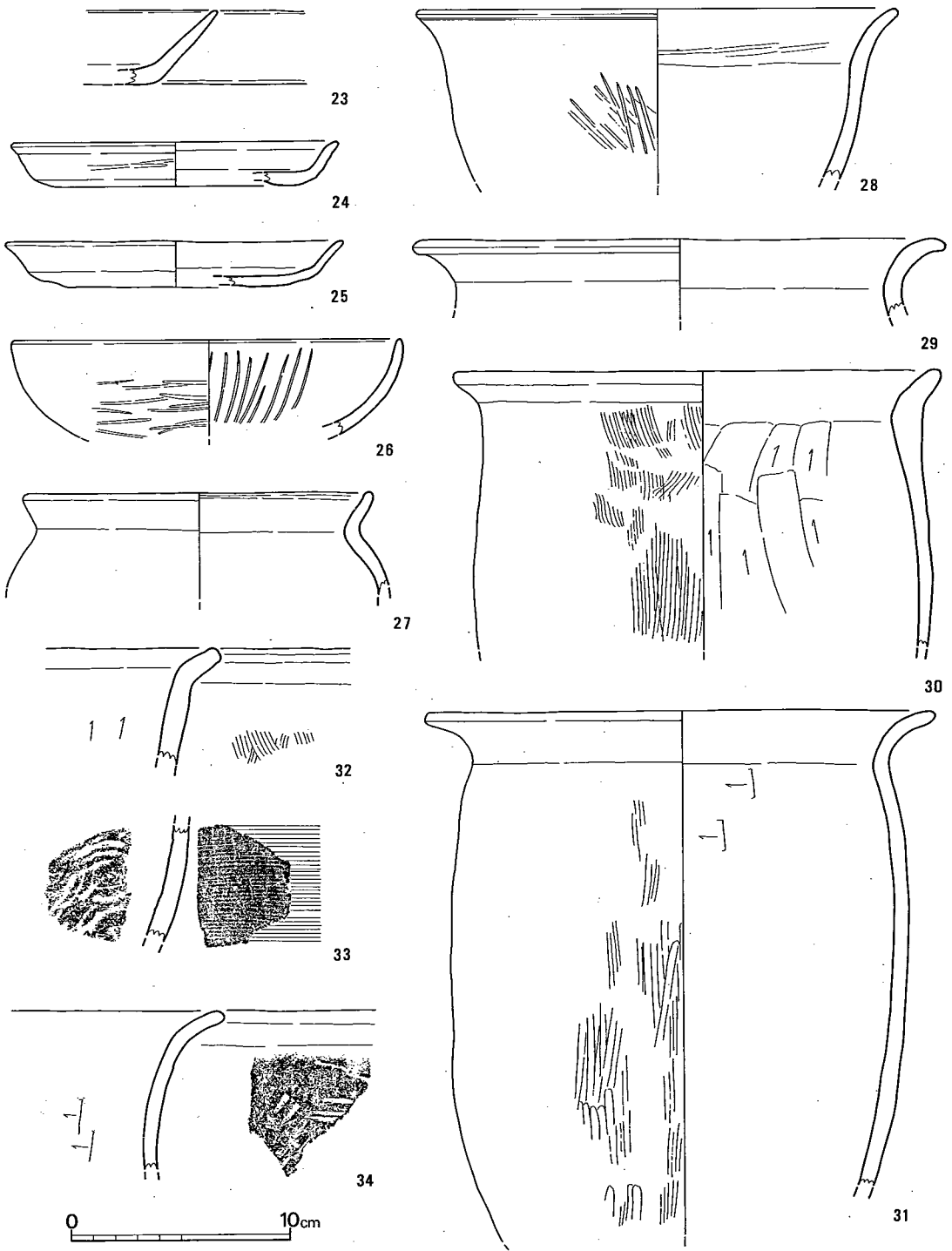
当住居跡の時期は, 8世紀中~後半頃であろう。



第71図 25号住居跡カマド実測図(1/30)



第 72 图 25号住居跡出土土器実測図① (1/3)



第 73 图 25号住居跡出土土器実測図② (1/3)

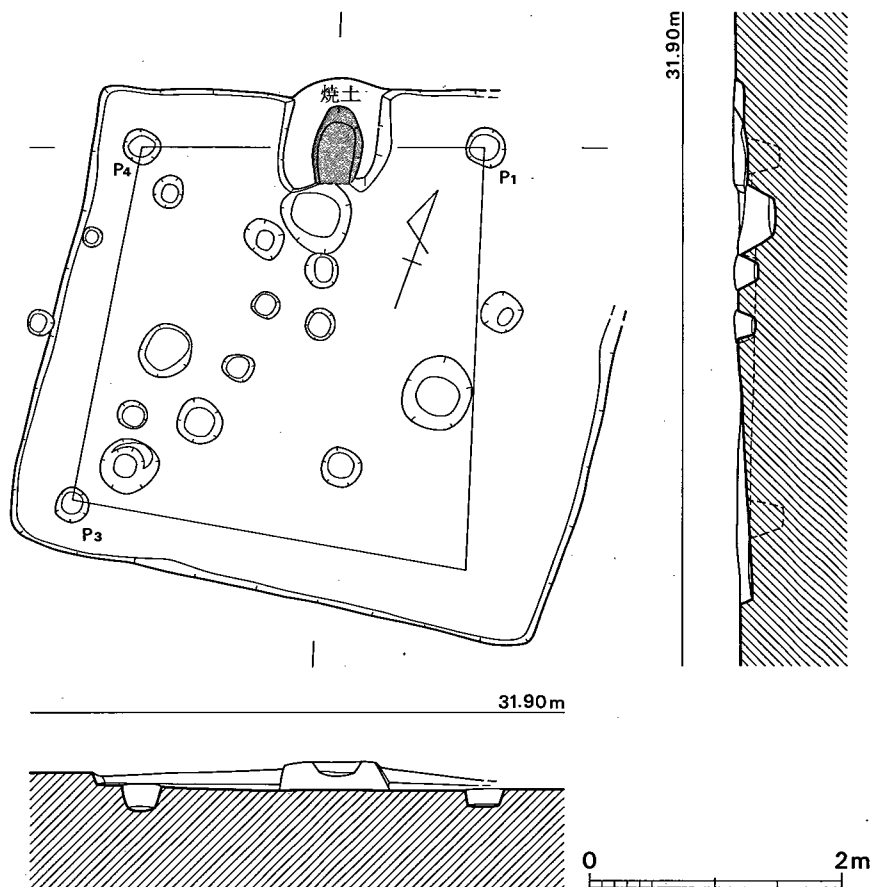
26号住居跡 (図版19-1, 第74図)

調査区の中央に位置し、C群に属する。平面形は隅丸方形を呈し、西壁長3.62m、南壁長4.25m、壁高はカマド側で14cmを留める。床面には無数のピットがあるが、支柱穴は位置・深さからP1~4と考えられるが、P2は検出し得ていない。埋土中から土器が出土した。

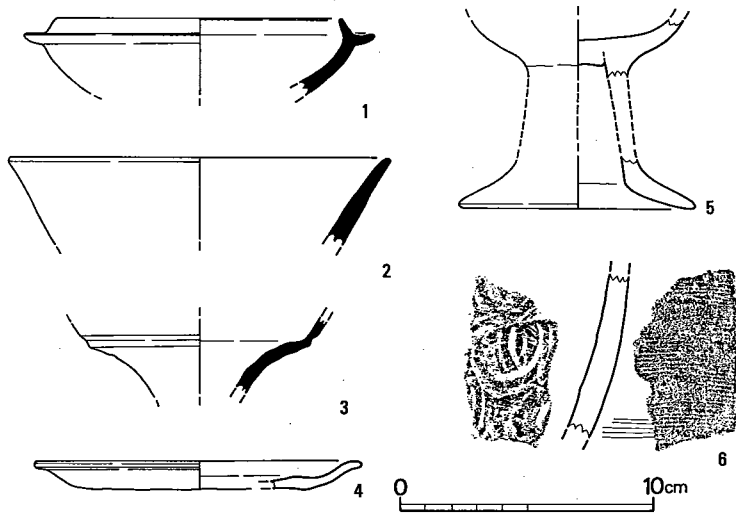
カマド (図版19-2, 第74図)

作り付け型のカマドで、北壁の中央に付設する。遺存状況は悪く、両袖部を留める程度である。袖部は残存長72cm、基底部幅32cm、残高14cm、焚口幅24cmを測り、焼土混じりの暗褐色土を盛っていた。壁体・床面はよく焼けていたが、支脚は不明。

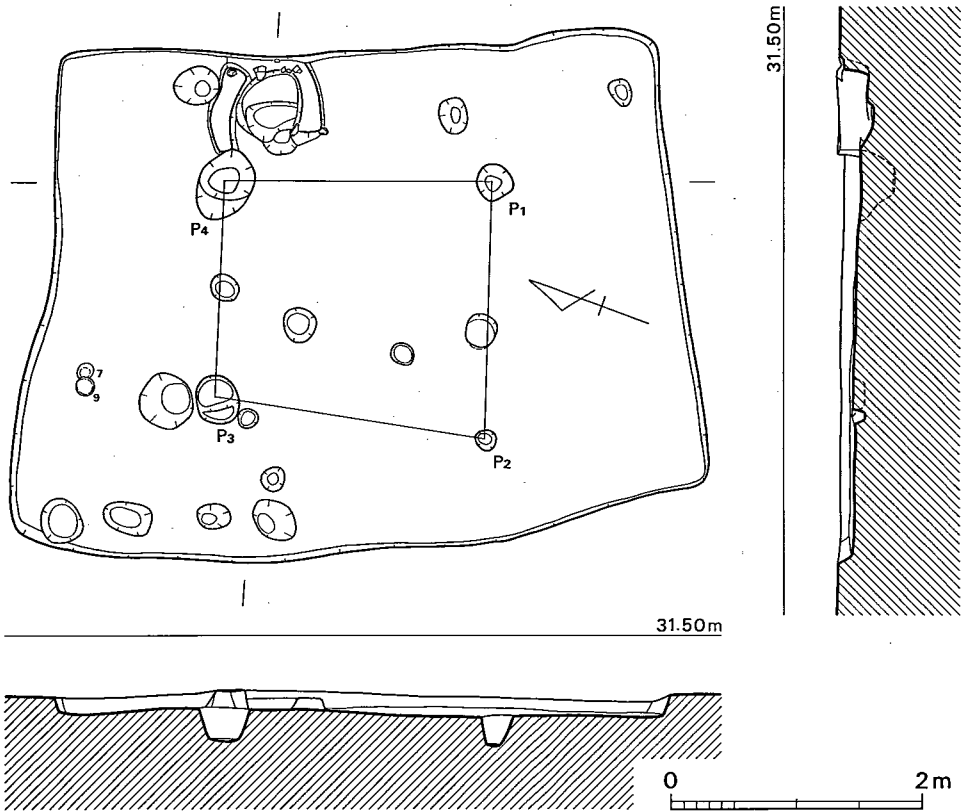
また、住居掘り下げの際に床面を下げすぎてしまい、カマドが浮いてしまった。カマド内からの遺物の出土はなかった。



第74図 26号住居跡実測図 (1/60)



第 75 图 26号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第 76 图 27号住居跡実測図 (1/60)

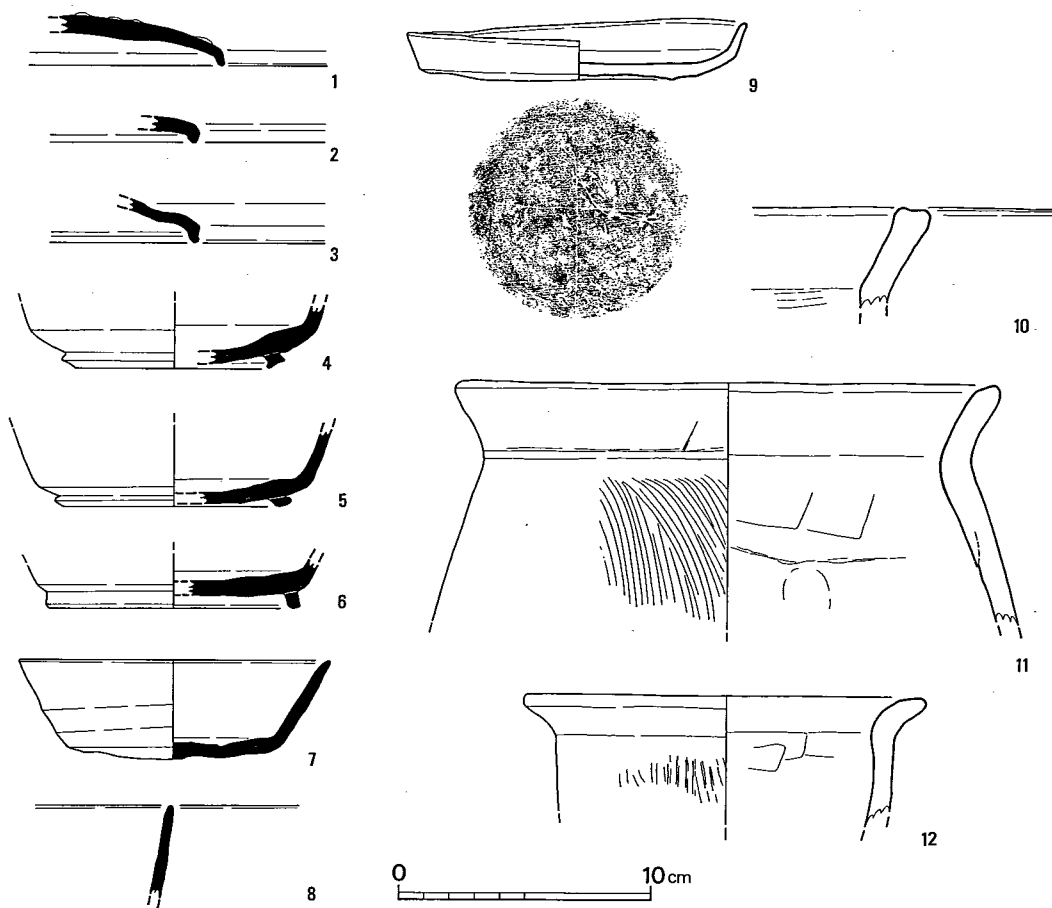
出土土器 (第75図)

須恵器 (1~3) 1は坏身の口縁部破片で、たちあがりは内傾する。受部の突出が強いので蓋になるか。2は口縁部破片で、椀になろう。3は甗の口縁部破片で、屈曲部には沈線を巡らす。

土師器 (4~6) 4は皿で、口唇部は水平方向に屈曲する。5は高坏の坏部と脚部の破片で、接合しないが同一個体である。6は内面にタタキ目を有する甕で、外面はカキ目調整による。

27号住居跡 (図版20-1, 第76図)

調査区の中央に位置し、C群に属する。72号住居跡を切り、6号建物跡に切られる。平面形は隅丸方形を呈し、東壁長4.27m, 南壁長3.56m, 壁高0.12mを測る。支柱穴はP1~4で、P1-2間2.04m, P1-4間2.13mを測る。埋土中より製塩土器が出土した。



第77図 27号住居跡出土土器実測図 (1/3)

カマドは東壁の北寄りに付設される作り付け型であるが、P4の直前にあり位置的に悪く、壁面も過熱を受けていないことからカマドとするには疑問が残る。

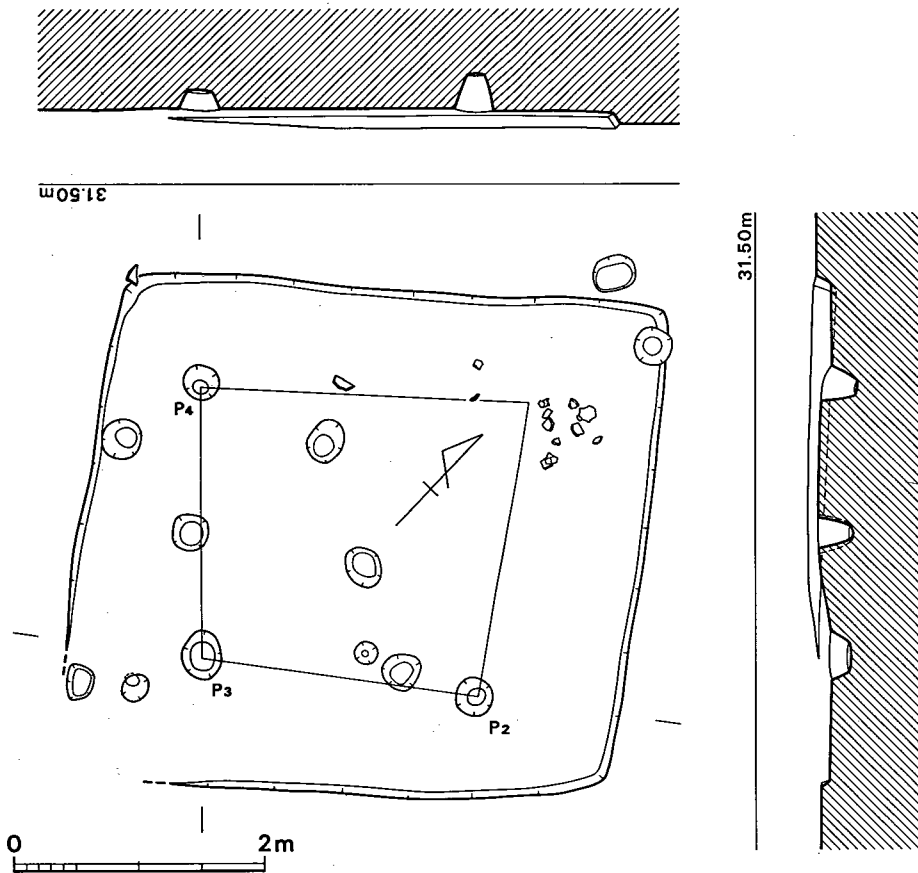
出土土器 (図版132-2, 第77図)

須恵器 (1~8) 1~3は坏蓋で、口唇部は小さく立ち、3は屈曲する。4~6は高台を有する坏身で、4・5の高台は稜を有する。7は器高3.9cm、口径12.3cmを測る完形の坏で、口縁部は斜め外方に開く。8は口縁部小片で、坏になるか。

土師器 (9~12) 9は焼け壺が著しいが、皿になろう。外底面には×状のへら記号を付す。10~12は甕で、10は口縁部小片で、口縁端部が窪む。11は口縁~肩部破片で、外面は荒いハケ目による。12は小型甕の口縁部破片で、口縁部は大きく外反する。

28号住居跡 (図版21-1, 第78図)

調査区の中央に位置し、C群に位置する。63・64・68号住居跡及び21・22号竪穴を切っ



第 78 図 28号住居跡実測図 (1/60)

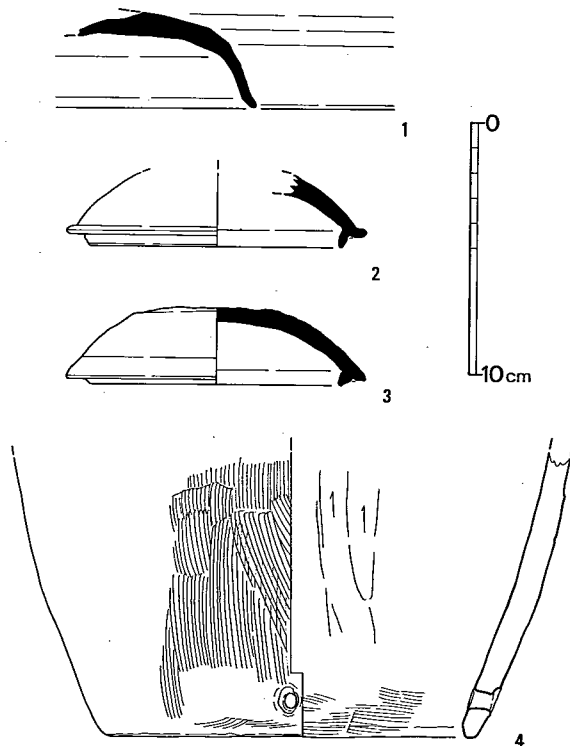
る。平面形は横位長方形を呈し、北東壁長3.72m、北西壁長4.24m、壁高0.15mを測る。支柱穴は4本であろうが、P1を検出し得ていない。P2-3間2.24m、P3-4間2.16mを測る。カマドは不詳。

北壁寄りから土器がまとまって出土した。

出土土器 (図版132-3, 第79図)

須恵器 (1~3) 1~3は坏蓋で、2・3は内面にかえりを有する。口径は2・3ともに12cmを測る。

土師器 (4) 4は甑の底部破片で、底径は14.6cmを測る。外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整による。底部付近には、焼成前に穿孔した円孔がみられる。住居跡の時期は、7世紀中頃であろう。



第79図 28号住居跡出土土器実測図 (1/3)

29号住居跡 (図版21-2, 第80図)

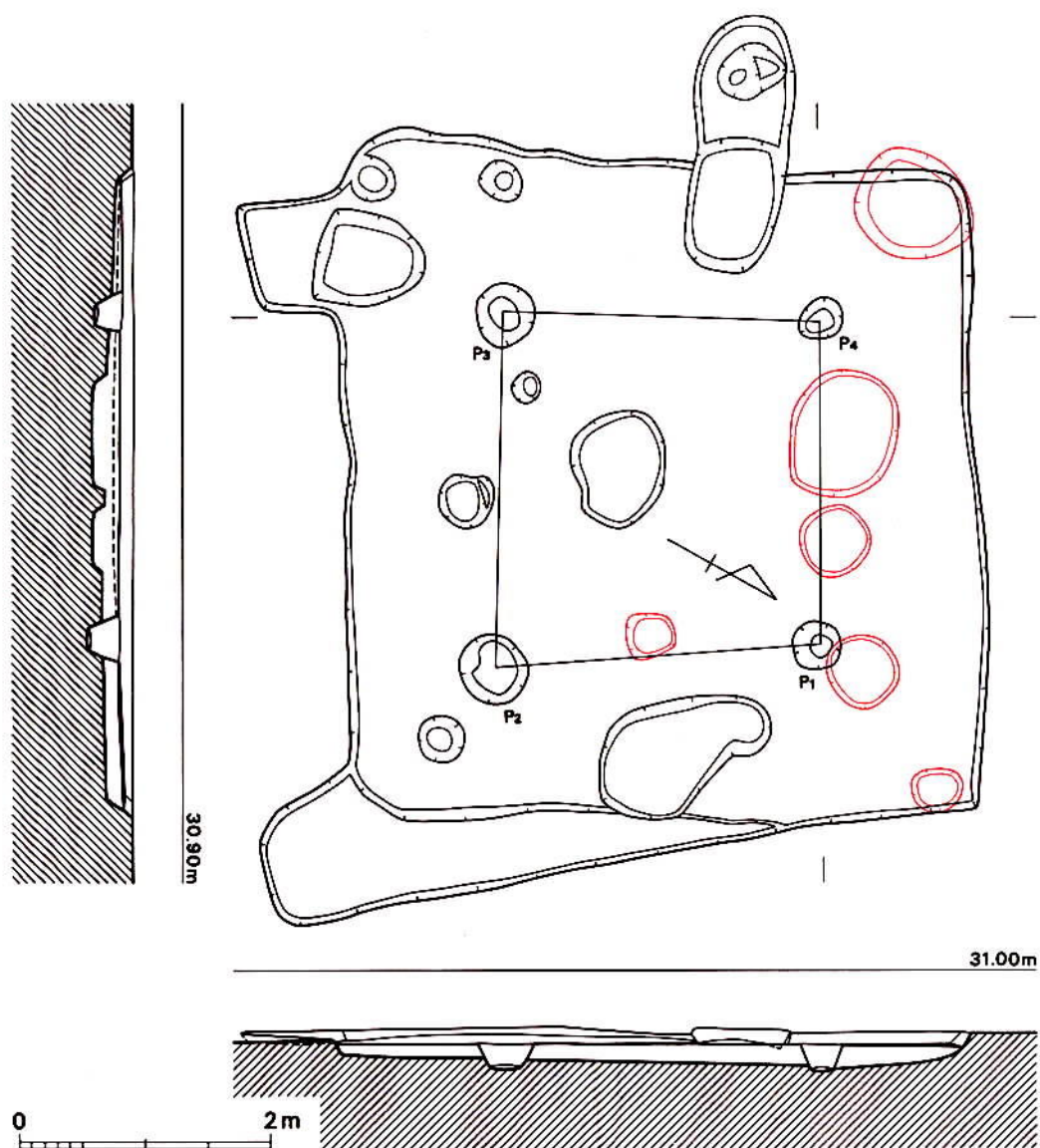
調査区の東側に位置し、D群に属する。平面形は隅丸方形を呈し、北壁長5.07m、西壁長4.92mを測り、削平により壁高は12cmを留める程度である。支柱穴はP1~4の4本で、径38~56cm、深さ20~26cmを測る。柱間はP1-2間2.58m、P1-4間2.56mの間隔を有する。

また、P4の西側のピットには炭がぎっしり詰まっていた。埋土中からは、弥生土器が出土したのみである。

出土土器 (第81図)

弥生土器 (1~9) 1~4は甕の口縁部破片で、口縁部形は1が如意形、2は「く」字形、3は口唇部が跳ね上がるものである。また、1の口唇部にはキザミ目を付している。4の口縁部は緩やかに外反するもので、甕もしくは鉢になるか。口唇部は肥厚する。5は胴部破片で、断面コ字形の凸帯を貼付する。7は口縁部破片で、口縁端部は平坦面を有する。鉢になるか。外面ナデ、内面ヘラミガキ調整による。8は脚部破片であるが、ヘラミガキを施していることから高坪になろう。6は底部破片で、底径は8.8cmを測る。9は蓋で、撮みを欠損する。口唇部は肥厚さす。

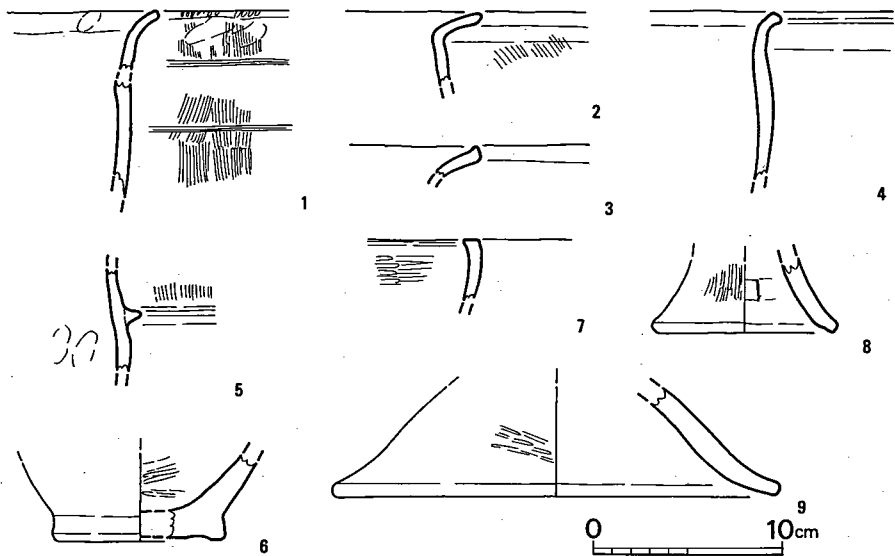
時期的に混在しているが、弥生後期頃か。



第 80 図 29号住居跡実測図 (1/60)

30号住居跡 (図版22-1, 第82図)

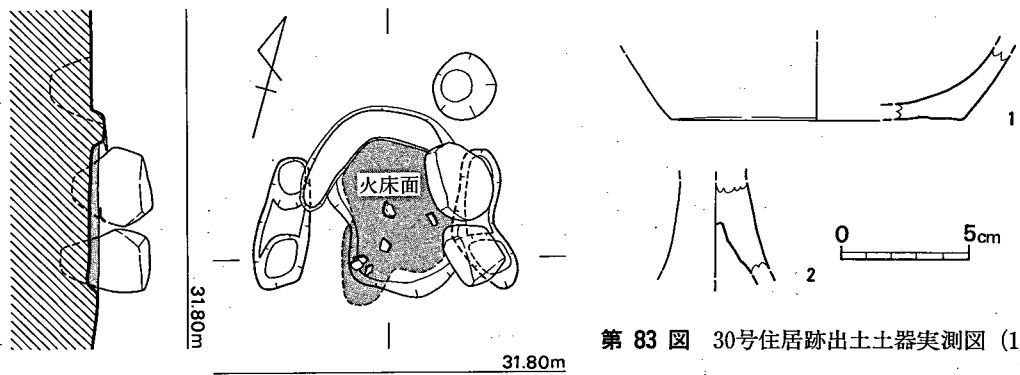
25号住居跡の10m南側に位置し、C群に属する。住居壁を喪失し、カマドのみ遺存する。袖部に石を立てるタイプで、右側部分が残る。袖石は長さ40cm前後を測り、2個つつ立てている。火床面はよく焼けており、埋土中から土器が出土した。支脚は不詳。



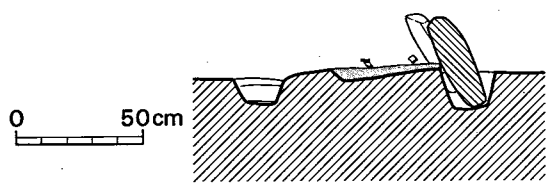
第 81 図 29号住居跡出土弥生土器実測図 (1/4)

出土土器 (第83図)

土師器 (1・2) 1は甕の底部破片で、底径10.6cmを測る。調整は磨滅により不明。2は高坏の脚柱部破片である。



第 83 図 30号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第 82 図 30号住居跡カマド実測図 (1/30)

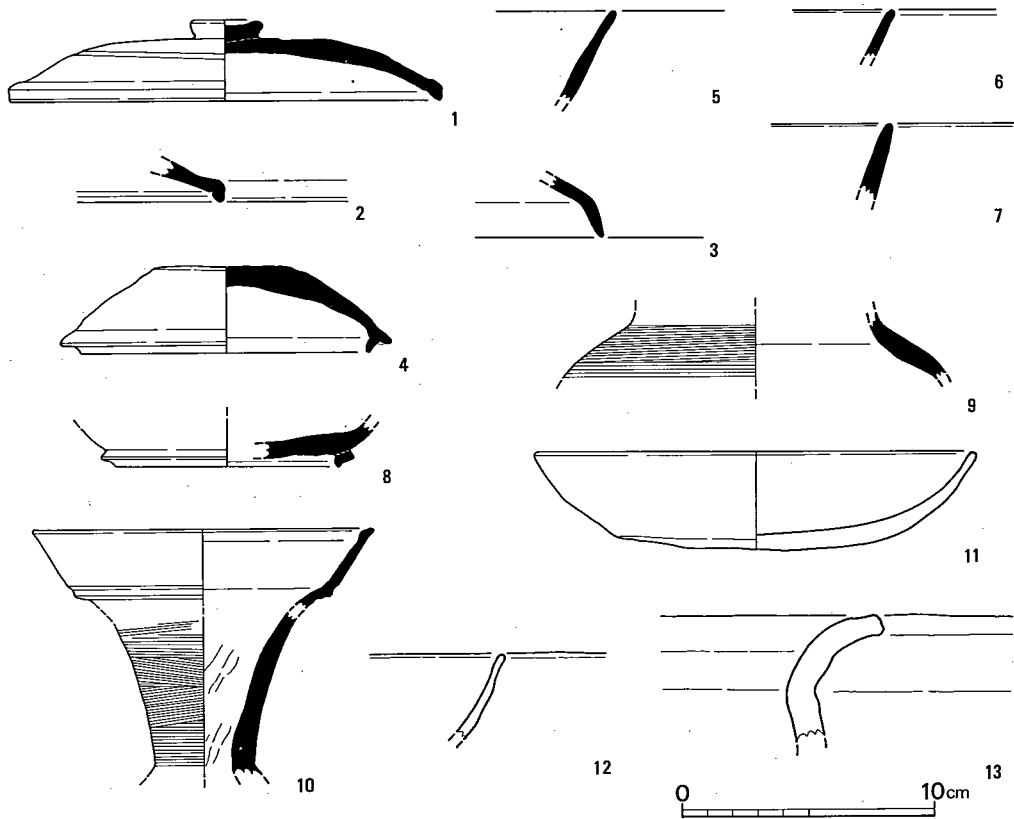
31号住居跡 (図版22-2, 第85図)

調査区の中央に位置し, 27号住居跡に切られ, 32号住居跡を切っている。北西壁長3.75m, 壁高0.18mを測る。床面にピットはなく, カマドも存在しないことから住居跡ではなく, 竪穴とした方が妥当であろう。埋土中から製塩土器が出土している。

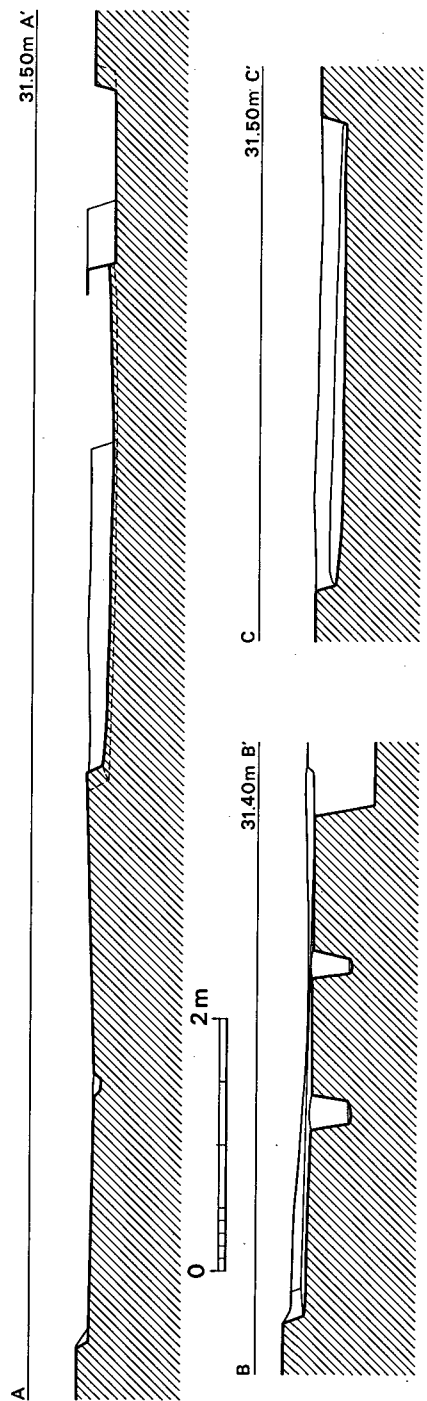
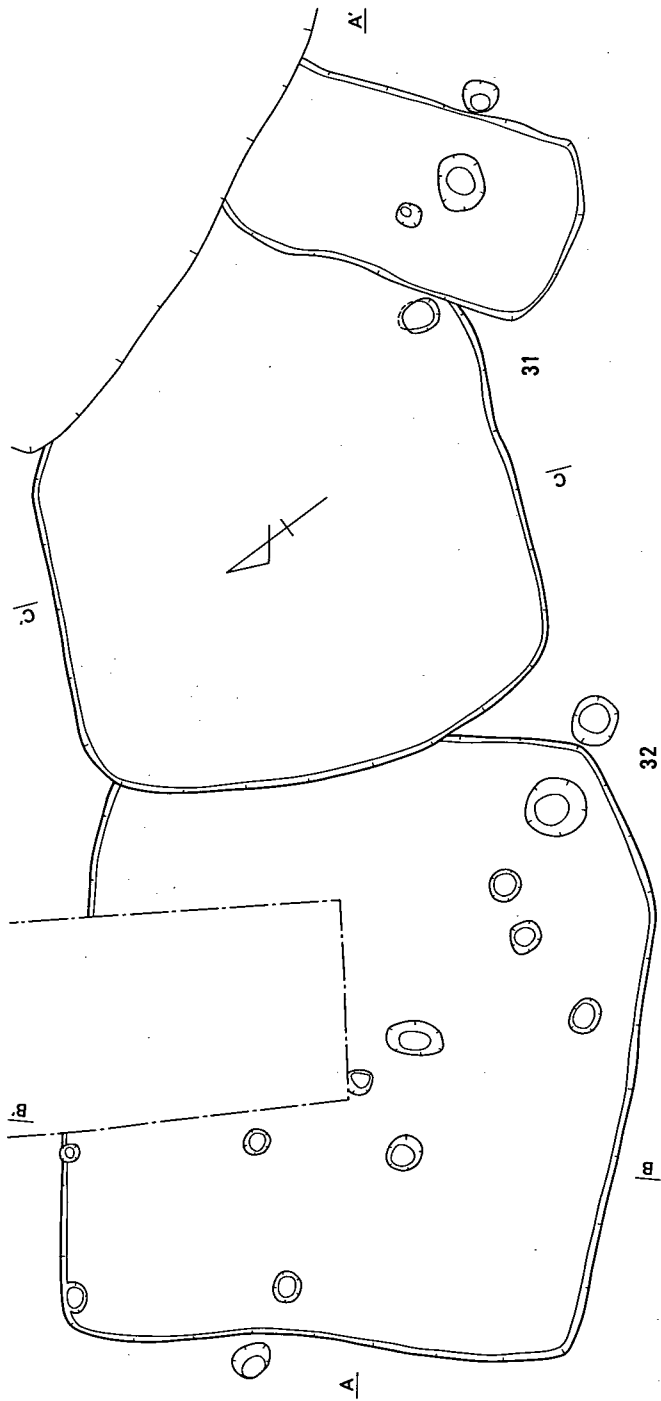
出土土器 (図版132-4, 第84図)

須恵器 (1~10) 1・2は口縁部が小さく立つ坏蓋で, 1は器高3.2cm, 復原口径17.0cmを測る。天井部には内窪みの撮みを貼付する。3は口縁部小片で, 屈曲することから蓋とした。4は坏蓋で, かえりは口縁部より出る。口縁部ヨコナデ, 内外面ナデ調整による。5~7は口縁部小片であるが, 坏身になろう。8は坏身の底部破片で, 高台は稜を有し, つま先立つ。

9は短頸壺の頸部破片で, 外面はカキ目調整による。10は甗で, 口縁部と頸部は接合しないが同一個体として実測した。口唇部は肥厚し, 口縁部は回転ナデ, 頸部はカキ目調整を施す。復原口径は13.4cmを測る。



第 84 図 31号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第 85 图 31·32号住居跡実測图 (1/60)

土師器 (11~13) 11は坏で、器高3.9cm、口径は17.1cmに復原した。口唇部は丸く納める。12の胎土は精良で、椀になるか。13は甕の口縁部破片で、大きく外反する。

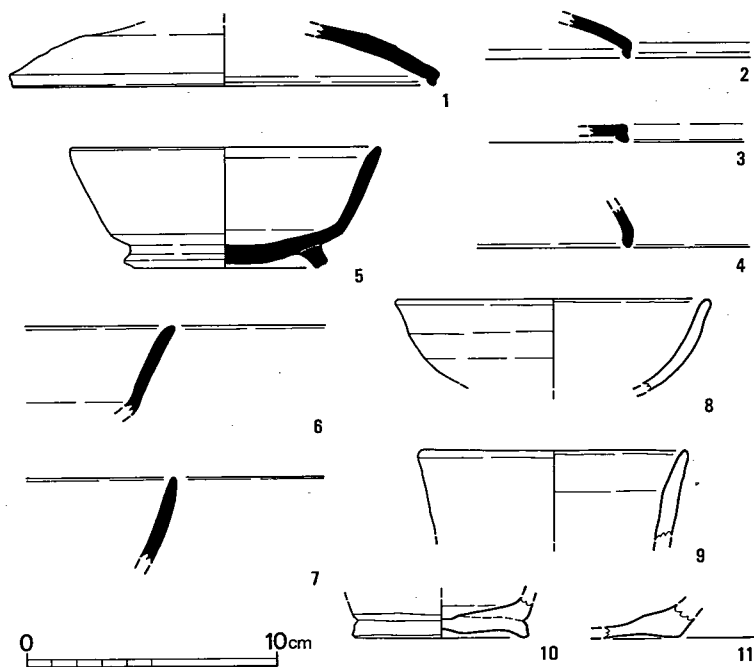
32号住居跡 (図版22-3, 第85図)

31号住居跡に東壁を切られて位置する。平面形は横位長方形を呈し、北西壁長3.96m, 南西壁長4.82m, 壁高0.14mを測る。当住居跡も支柱穴は判然とせず、カマドは試掘トレンチに切られたものか存在しない。埋土中から製塩土器が出土している。

出土土器 (図版132-5, 第86図)

須恵器 (1~7) 1~4は坏蓋で、1~3は口縁部が小さく立つもの。4は口唇部を丸く納めるもの。5は坏身で、器高に比して太めの高台を貼付する。器高4.8cm, 復原口径12.4cmを測る。口縁部ヨコナデ, 内外面ナデ調整による。6・7は坏身の口縁部破片であろう。何れも口唇部は丸く納める。

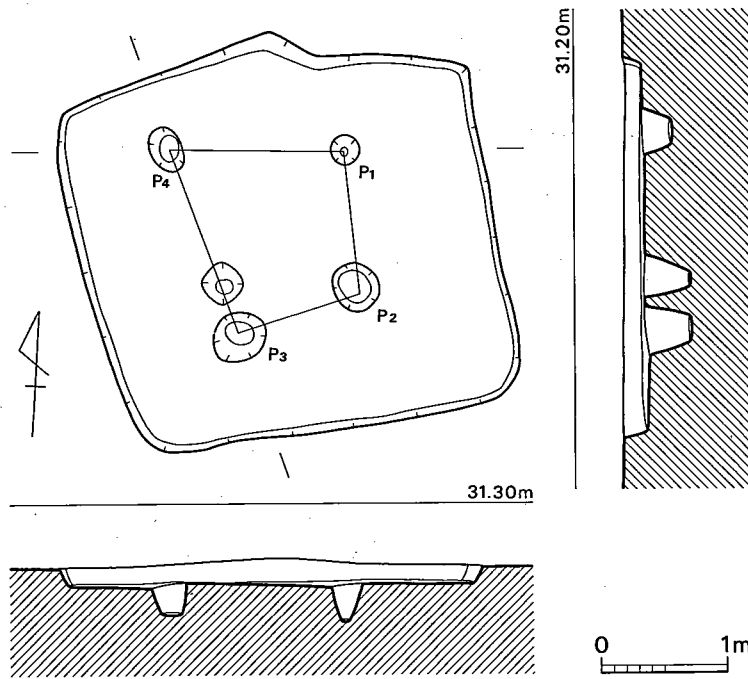
土師器 (8~11) 8は口縁部破片で、ヨコナデ調整による。胎土は精良で、椀になるか。9は口縁部破片であり、口唇部は丸く納める。10・11は底部破片であり、10の胎土は割に精良。時期は8世紀中頃か。



第 86 図 32号住居跡出土土器実測図 (1/3)

33号住居跡 (図版23-1, 第87図)

B群の南端部に位置し、87号住居跡を切っている。平面形は隅丸方形を呈し、西壁長2.8m, 南壁長3.02m, 壁高は北側で0.18mを測る。柱穴はP1~4で、径23~45cm, 深さ24~36cmを測る。柱間はP1-2間1.14m, P1-4間1.38mと狭小である。埋土からフィゴ羽口が出土した。



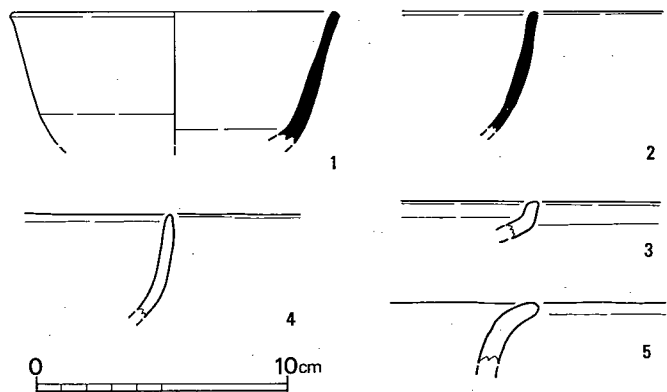
第 87 図 33号住居跡実測図 (1/60)

また、北壁中央にカマド状の遺構を検出し、掘り下げたが、カマドではなかった。

出土土器 (第88図)

須恵器 (1・2) 1・2は坏身になろう。ヨコナデ調整。

土師器 (3~5) 3は口縁部が屈曲する器形で、口唇部は丸く納める。4は碗の口縁部破片になるか。5は甕の口縁部破片で、外反する。



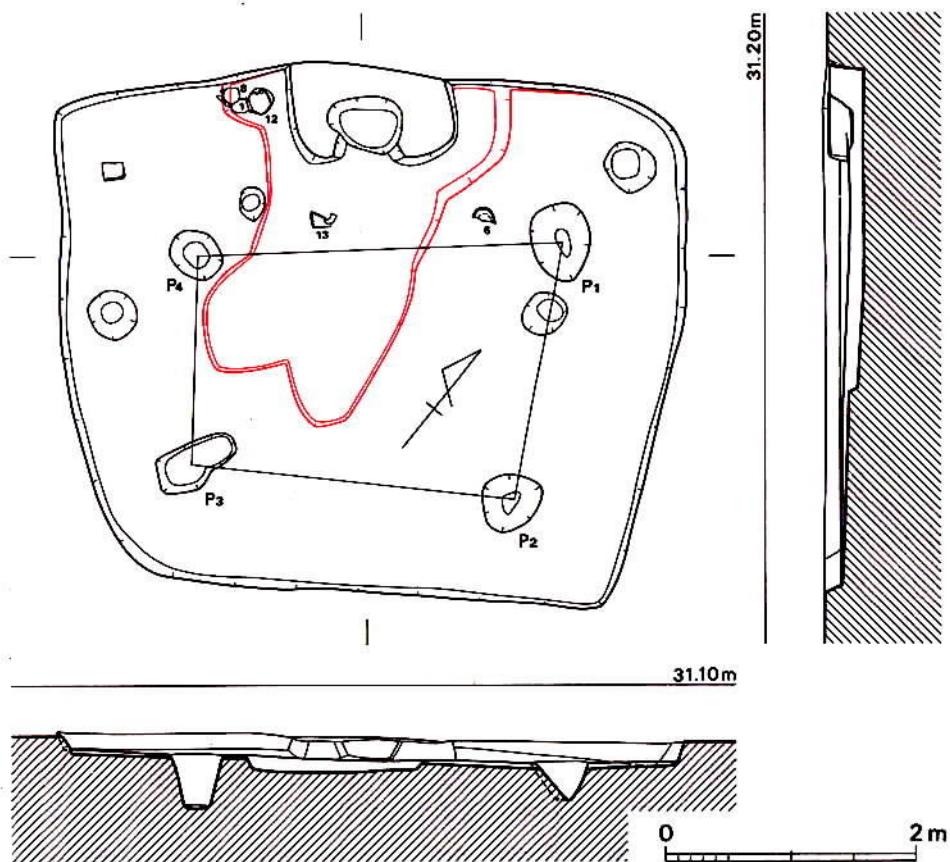
第 88 図 33号住居跡出土土器実測図 (1/3)

34号住居跡 (図版23-2, 第89図)

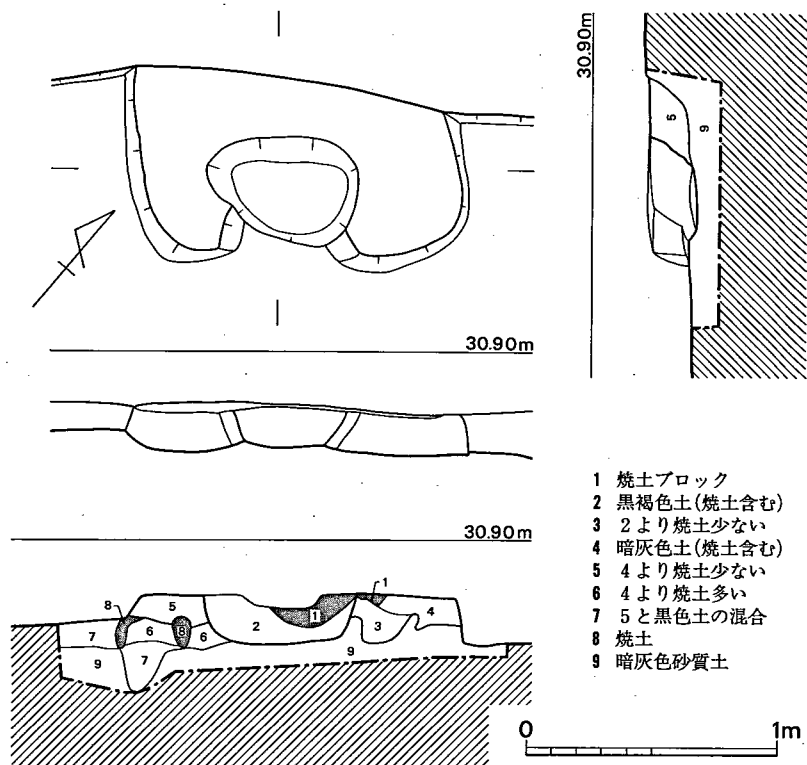
33号住居跡の3.2m東側に位置し、89号住居跡を切っている。平面形は逆台形状を呈し、北西壁長5.02m、北東壁長3.9m、南東壁長3.72mを測る。削平を受け、壁高はカマド側で10cm前後を測る程度である。主柱穴はP1~4で、径30~50cm、深さ30~48cmを測る。柱間はP1-2間2.08m、P1-4間2.92mの間隔である。カマド左側から土器を検出している。

カマド (図版24, 第90図)

作り付け型のカマドで、北西壁の中央に付設する。遺存状態は悪く、両袖を留める程度。右袖は残長70cm、基底部幅50cm、残高17cm、左袖は残長78cm、基底部幅40cm、残高は18cmを留める程度。壁体は加熱を受けて赤変するものの、支脚については判らなかった。また、カマド内からは土器破片が出土したにすぎない。



第 89 図 34号住居跡実測図 (1/60)



第 90 図 34号住居跡カマド実測図 (1/30)

出土土器 (図版132-6・133-1, 第91図)

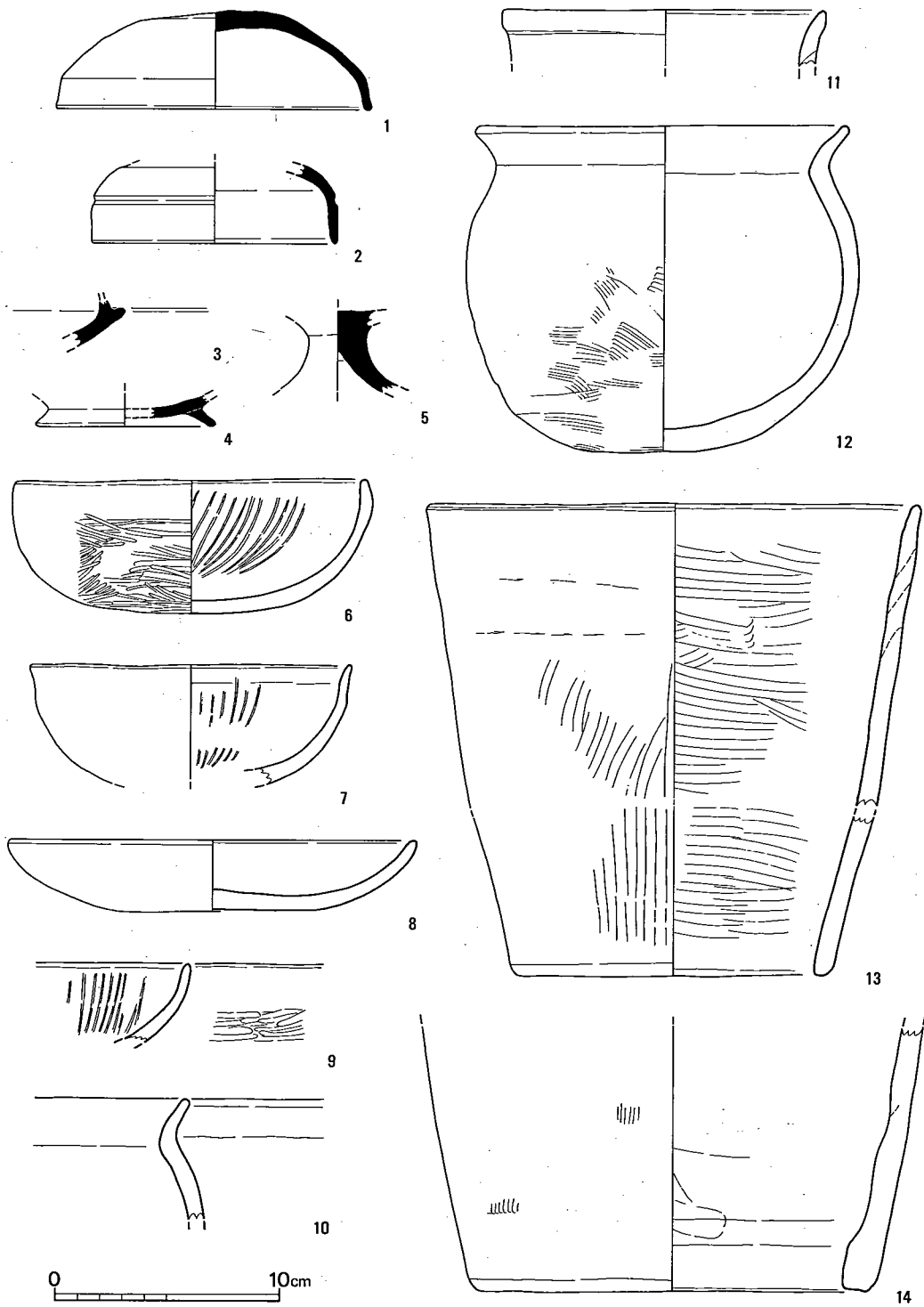
須恵器 (1~5) 1は坏蓋で、天井部はドーム状を呈し、口縁部外面に屈曲がみられる。口縁部ヨコナデ、内外面ナデ調整による。器高4.3cm、復原口径13.9cmを測る。2は口径が10.8cmと小さいことから短頸壺の蓋になろう。天井部との境にヘラ沈線を巡らす。

3は坏身の口縁部破片で、ヨコナデ調整による。4は底部の破片で、高台はハ字形に大きく開く。坏身であろうか。5は小型高坏の脚部破片。1は床面、2は下層の出土。

土師器 (6~14) 6~9は坏で、6・7・9は深めの器形。7の口唇部は小さく外反する。調整は口縁部ヨコナデ、外面ヘラミガキで、内面には暗文がみられる。6は器高6.0cm、口径15.5cmを測る。8は器高3.2cm、口径17.9cmで、口唇部は丸く納める。6・8は床面、7は下層の出土。

10~12は甕で、10・12は口縁部が「く」字形に屈曲する。12は器高14.4cm、口径は15.9cmに復原した。口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面工具ナデ調整により、外面は二次加熱を受けて赤変する。11は口縁部小片で、口唇部は上方に立つ。12が床面、10・11は下層より出土した。

13・14は甗で、床面の出土。13は口縁部から直線的に底部に移行する。粗いハケ目調整による。14は底部破片で、底部は肥厚する。住居跡の時期は、6世紀末であろう。



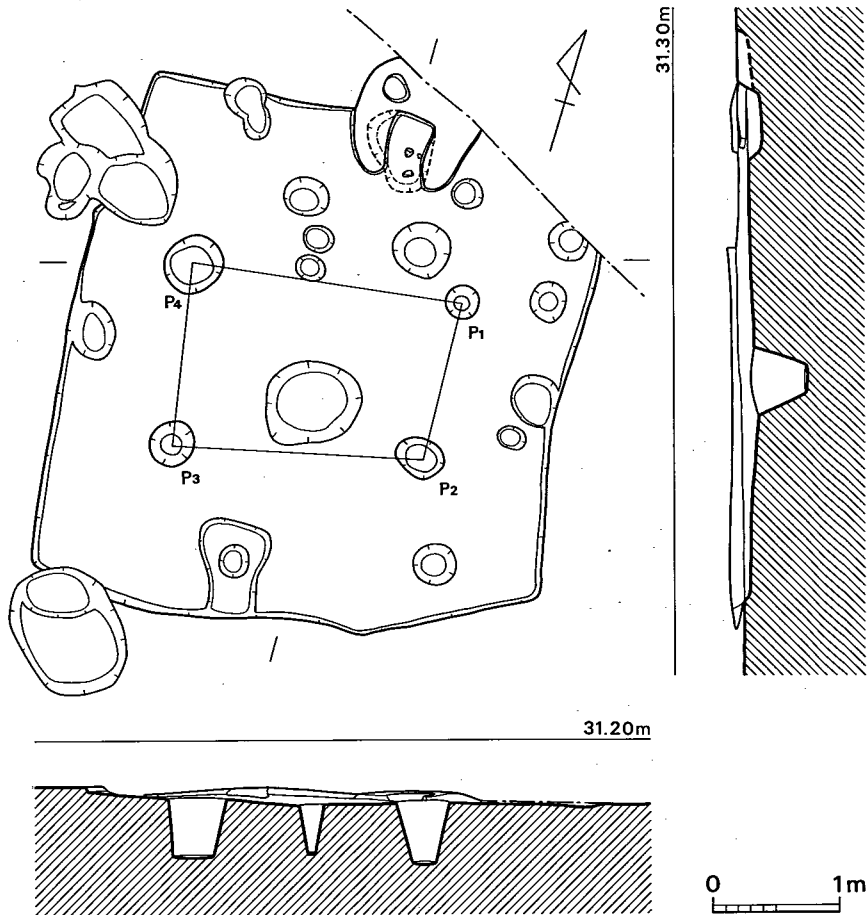
第 91 图 34号住居跡出土土器実測図 (1/3)

35号住居跡（図版25-1，第92図）

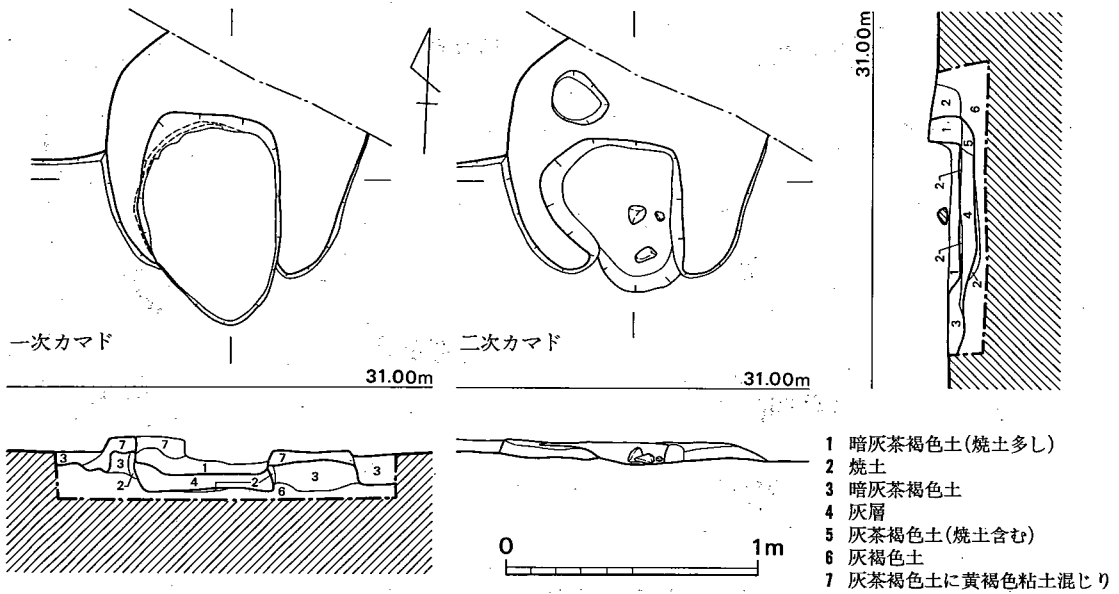
調査区の北東側に位置し，B群に属する。15号溝に切られ，90号住居跡を切っている。西壁長4.06m，南壁長4.06mを測る方形を呈し，壁高は削平により12cmを留めるにすぎない。床面には多くの穴があるが，支柱穴は番号を付したP1～4で，柱間はP1-2間1.28m，P1-4間2.16mを測る。遺物は埋土・カマド内より土器・製塩土器が出土した。

カマド（図版25-2・3，第93図）

北壁の中央に付設する突出型のカマドで，床面を2面有する。一次の床面掘り込みは，長軸80×短軸52cmを測り，壁面はよく焼けていた。二次の床面掘り込みは長軸57cm，短軸42cmを測る。一次の袖部に3～5cmの厚さで粘土を付加して袖部を形成する。壁面はそれ程焼けていなかった。カマド内からは土器が出土した。



第 92 図 35号住居跡実測図 (1/60)



第 93 図 35号住居跡カマド実測図 (1/30)

出土土器 (第94図)

須恵器 (1~15) 1~5は坏蓋で、1・2は天井部の破片で、ボタン状の偏平な撮みを貼付する。口縁部はヨコナデ調整による。3~5は口縁部の破片で、口唇部は小さく立つ。6~14は坏身で、6~8は口縁部破片で、口唇部は丸く納める。9はかえりを有する坏身で、口唇部内面に沈線を有する。外面には灰が厚く被る。混入品である。

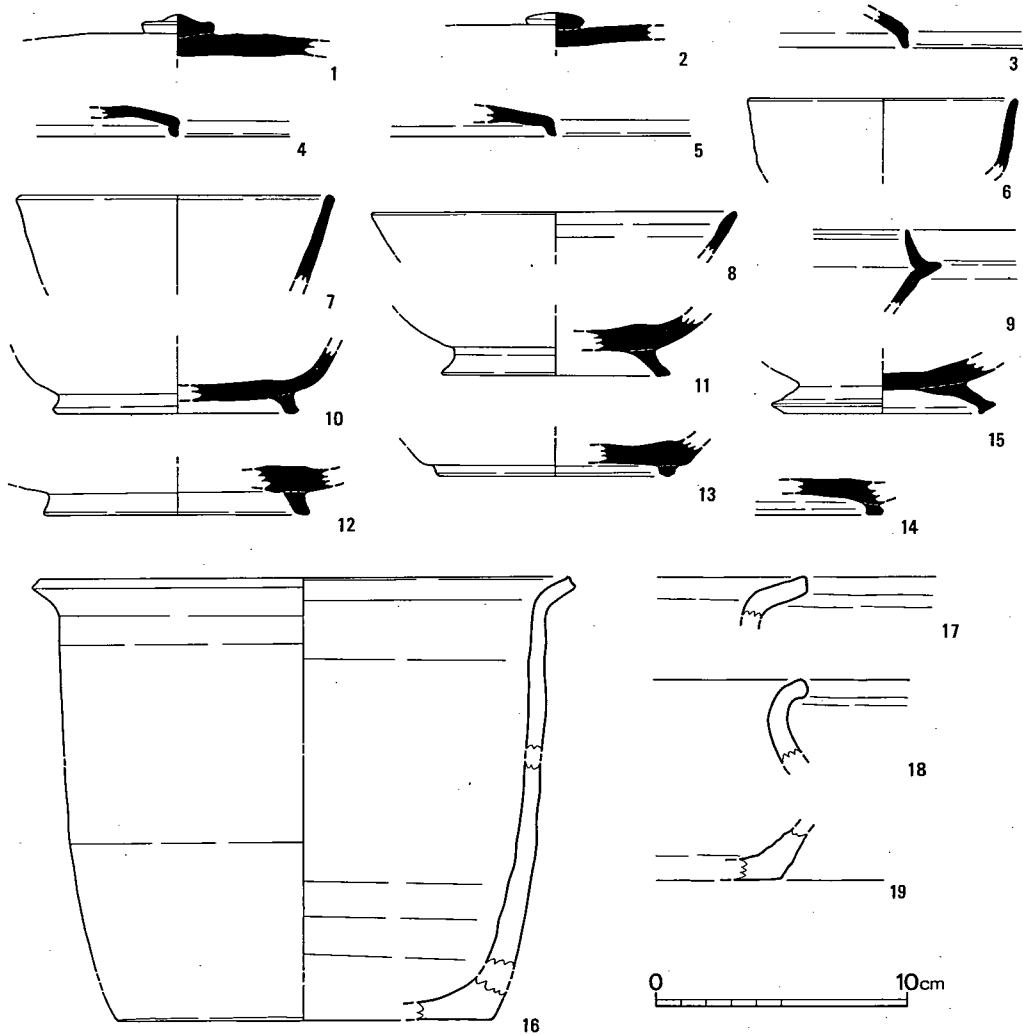
10~15は底部破片で、高台を貼付する。断面ハ字形の高台を貼付するもの (10・12)、低めの高台を貼付するもの (13・14)、高い高台を貼付するもの (11・15) がある。

土師器 (16~19) 16~19は甕である。16は口縁部・胴部・底部と接合しないが、同一個体として復原実測した。口唇端部は僅かに立上がる。器面調整はナデ調整により、胎土に長石・石英・雲母を含む。焼成は良好で、色調は緑褐色を呈する。

17・18は口縁部小片で、18は大きく外反する。19は底部破片で、ナデ調整による。16・17・19はカマド内の出土である。住居跡の時期は、8世紀中~後半であろう。

36号住居跡 (図版27-1, 第95図)

調査区の北側に位置し、B群に属する。1号建物跡・11号溝に切られ、43号住居跡を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し、北壁長3.42m、東壁長3.63m、壁高は東壁側で0.16mを測る。床面にはピットが数個あるが、柱穴にはなり得ない。また、東壁中央でカマド状の遺構を検出したが、断ち割った結果、壁面・床面は全く加熱を受けておらず、カマドではないと判断した。



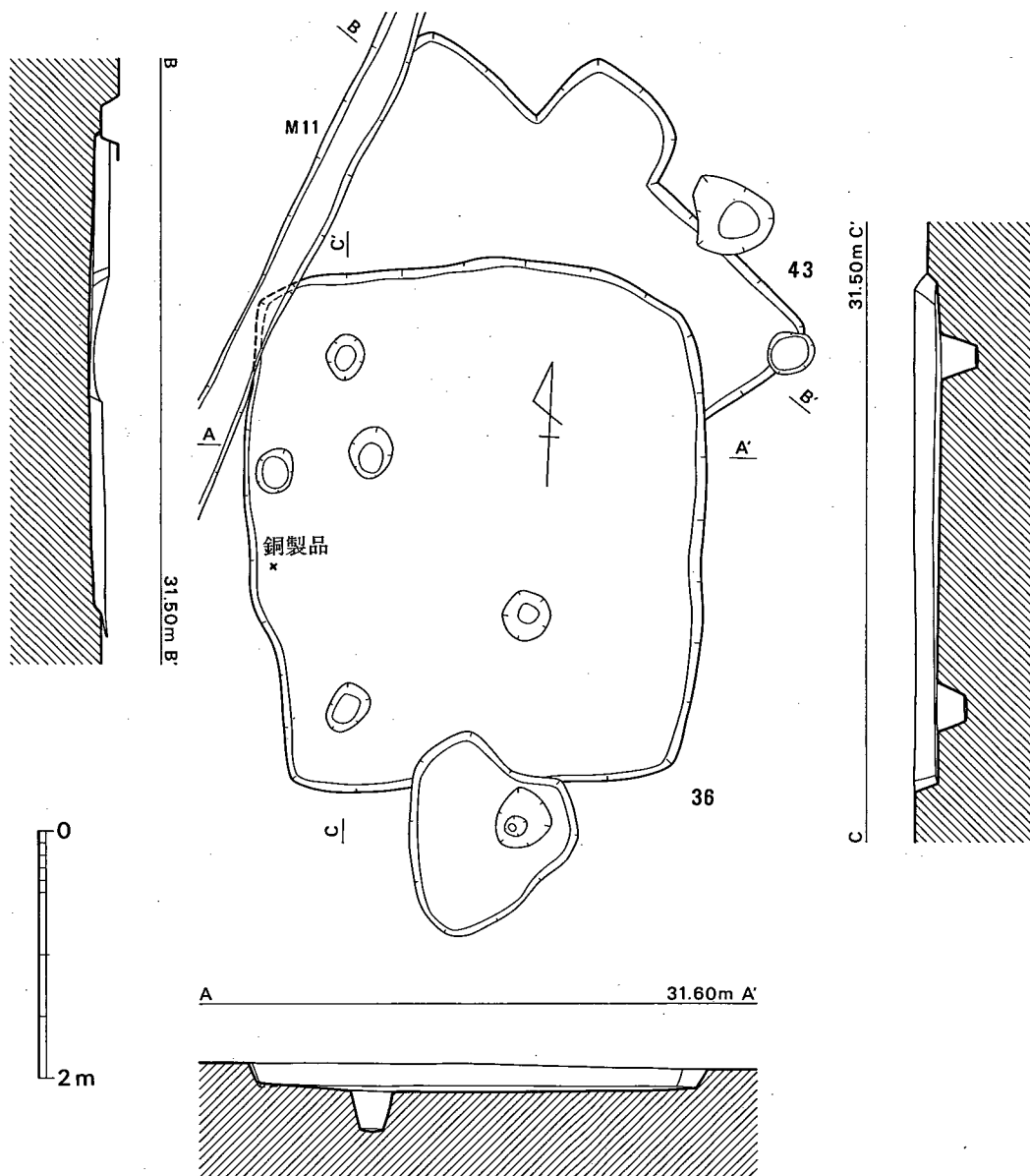
第 94 図 35号住居跡出土土器実測図 (1/3)

カマド・柱穴は不明であるが、埋土中からは刀子・銅製品・製塩土器等の出土がみられた。

出土土器 (第96図)

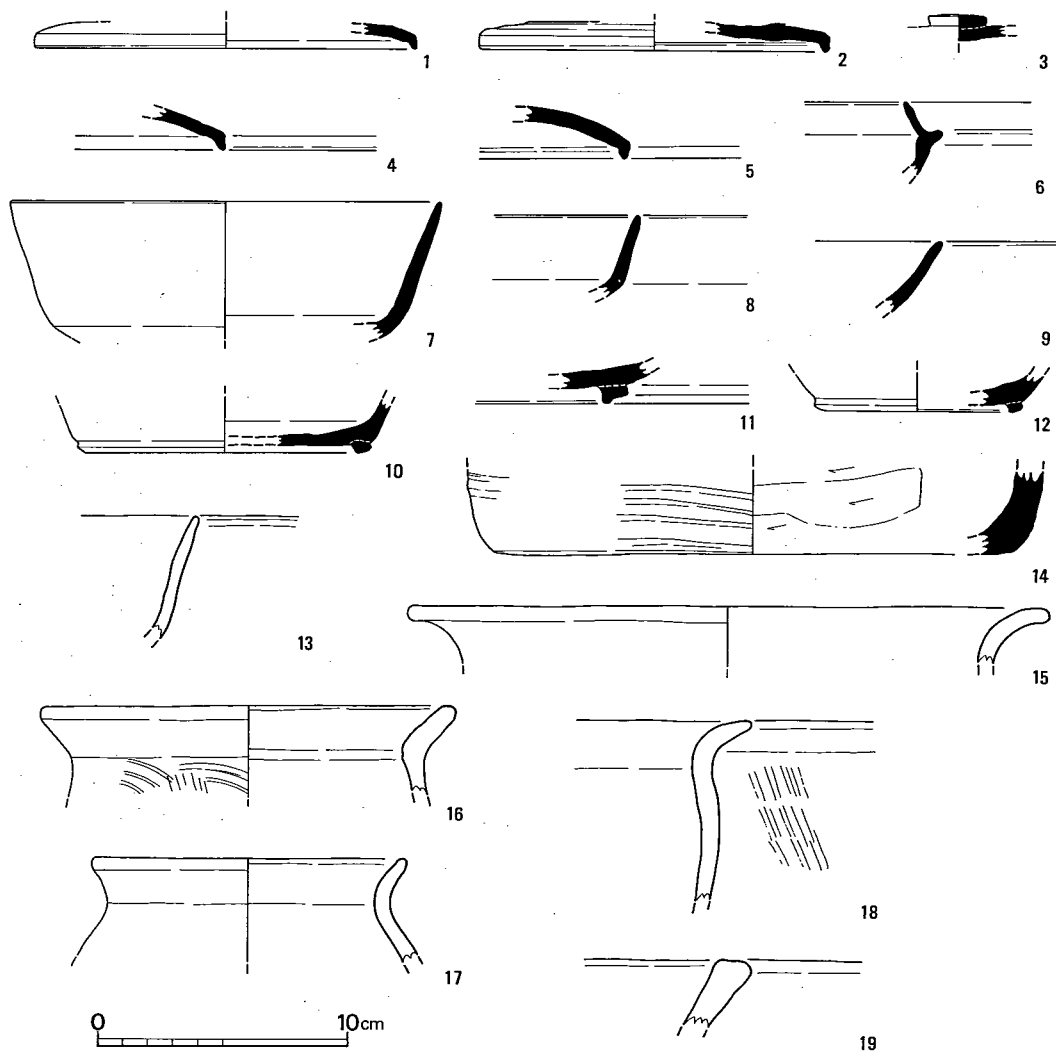
須恵器 (1~12) 1~5は坏蓋で、1・2の器高は低く、口径は1が15.0cm、2は13.6cmに復原した。3は天井部破片で、ボタン状の撮みを貼付する。4・5は口縁部小片で、1・2よりは高い器高を呈しよう。何れも口縁部はヨコナデ調整による。

6~12は坏身で、6はたちあがりの内傾する。混入したものであろう。7~9は口縁部破片で、口唇部は丸く納める。10~12は底部破片で、低めの高台を貼付する。



第 95 図 36・43号住居跡実測図 (1/60)

須恵質土器 (14) 14は底部破片で、復原底径は19.2cmを測る。鉢になるか。外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整による。胎土に角閃石・白色砂粒を含む。焼成は良好で、外面灰褐色・内面暗緑灰色を呈する。



第 96 図 36号住居跡出土土器実測図 (1/3)

土師器 (13・15~19) 13は坏の口縁部破片で、胎土に角閃石・石英などの砂粒を含む。15~19は甕の口縁部破片で、15は大きく外反する。16は口径の割に肥厚し、外面は粗いハケ目調整による。17は頸部の締りがよく、口唇部は丸く納める。口径は16が16.0cm, 17は12.2cmに復原した。18の口縁部は大きく外反し、外面は二次加熱により赤変する。19の端部は平坦面を有する。器壁が厚く、大型品になろう。

1・2の坏蓋は器高が低いことから8世紀末頃であろう。

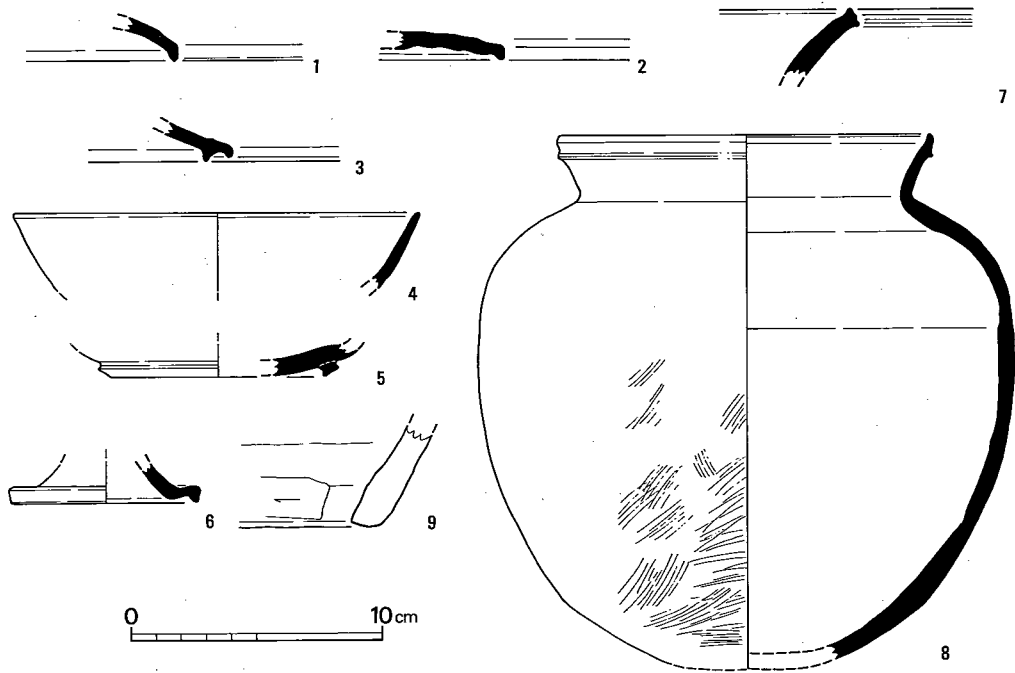
37・38号住居跡上面出土土器 (図版133-2, 第97図)

第97図1～9は、37・38号住居跡周辺の遺構検出時に出土した土器で、37・38号住居跡と接合関係を有するが、上面出土ということで説明を加える。

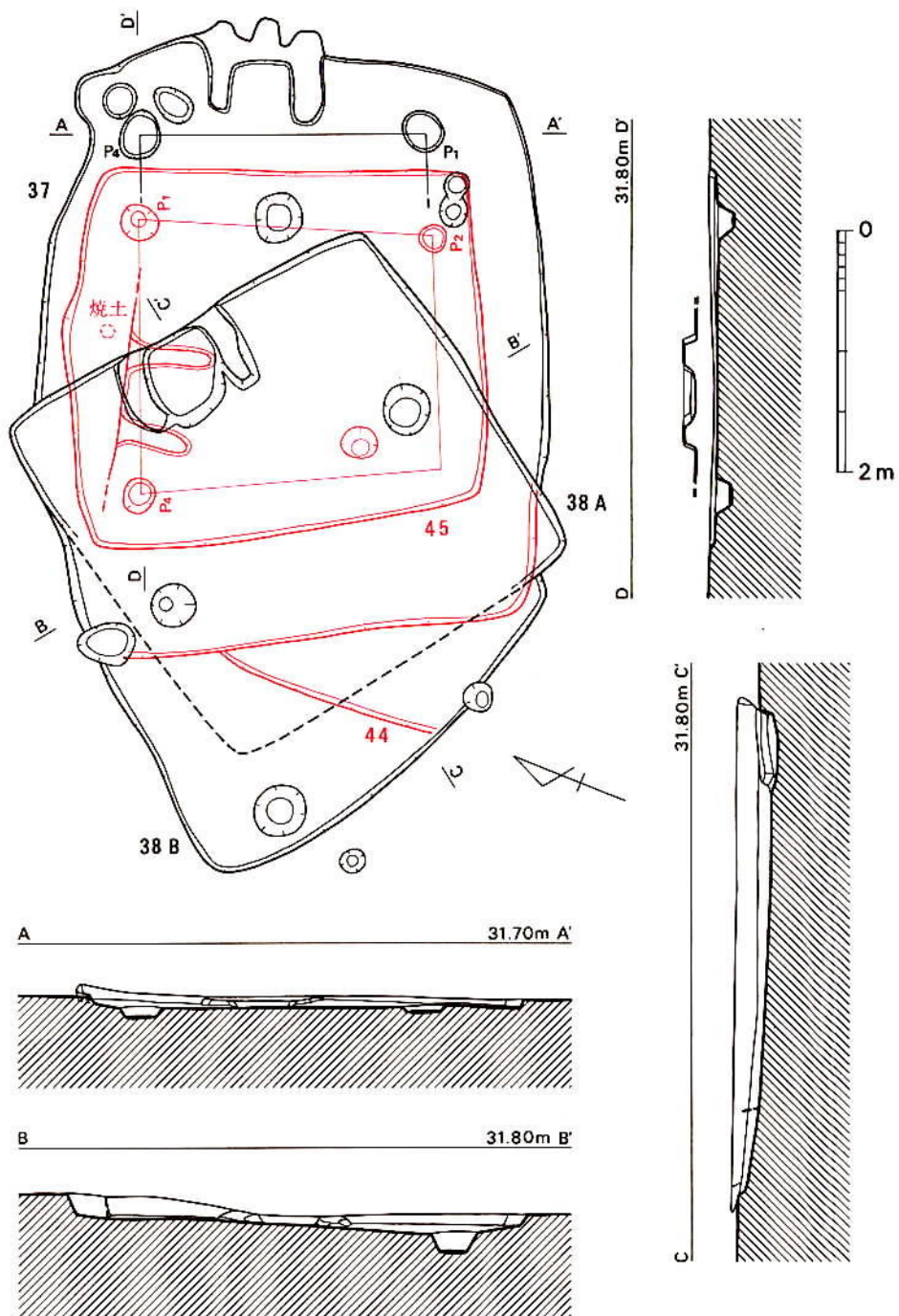
須恵器 (1～8) 1～3は坏蓋の口縁部小片。1・2の口唇部は小さく立ち、2は低い器高を呈しよう。3は口縁部内面にかえりを有する。何れも調整はヨコナデによる。4・5は坏身で、4が口縁部、5は底部の破片で、低めの高台を貼付する。6は高坏の脚部破片で、復原脚径は7.2cmを測る。脚裾部は一旦屈曲して立つ。

7は口縁部破片で、口唇部は上方に立つ。8は広口壺で残存器高20.6cm、復原口径14.6cmを測る。口縁部は内湾し、口唇部のやや下位にシャープな凸帯を巡らす。肩部はよく張っており、丸底の底部に移行する。器面調整は、口縁部ヨコナデ、外面平行タタキ目→ハケ目による撫で消し、内面円弧タタキ目→ナデによる。焼成は良好で、色調は小豆色を呈する。

土師器 (9) 9は甑の底部小片で、外面ナデ、内面ヘラケズリ調整による。



第 97 図 37・38号住居跡上面出土土器実測図 (1/3)



第 98 图 37·38·44·45号住居迹实测图 (1/60)

37号住居跡 (図版29, 第98図)

調査区の南西側に位置し、F群に属する。38号住居跡に切られ、45号住居跡を切っている。東壁長3.52m、南壁長4.28mを測る縦位隅丸長方形を呈する。主柱穴は4本と考えられるが、2本分を検出し得ていない。埋土中からは、土器の他に鉄器が出土した。

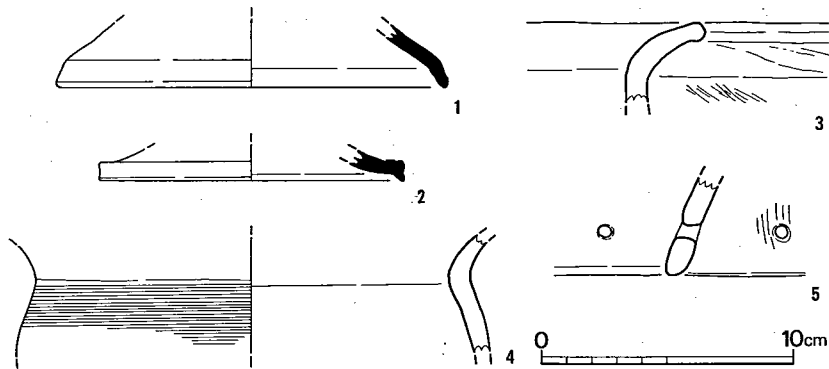
カマド (第98図)

東壁のやや北寄りに付設するが、遺存状態は悪く、袖部のみ残存する。住居壁を袖部の幅分掘り込み、暗茶灰色土を貼付して袖部とする。右袖は残存長77cm、基部幅29cm、残高7cmで、左袖は残存長73cm、基部幅21cm、残高8cmを測る。壁体・床面はあまり加熱を受けていない。支脚は不詳で、土器の出土はみられない。

出土土器 (第99図)

須恵器 (1・2) 1は坏蓋の口縁部破片で、口唇部は丸く納める。口径は15.4cmに復原した。2は高坏の脚裾部破片で、端部は小さく立つ。脚径は12.0cmを測る。

土師器 (3~5) 3・4は甕で、3は頸部破片、4は口縁部小片である。3の口唇部は丸く肥厚する。4の外面はカキ目調整により、口縁部内面は黒変している。5は甑の底部小破片で、焼成後穿孔の円孔(径5mm)を有する。



第99図 37号住居跡出土土器実測図 (1/3)

38号住居跡 (図版29, 第98図)

調査区の南西に位置し、37・44・45・50・81号住居跡を切っている。当初のプランは、38B号の範囲まで考えていたが、南側コーナーにずれがみられることから、破線で示した方形プランを呈しよう。住居跡の規模は、北東壁長3.36m、南東壁長3.1m、壁高0.18mを測る。床面には、主柱穴といえる明確なピットはなかった。埋土中からは、砥石が出土した。

カマド (第98図)

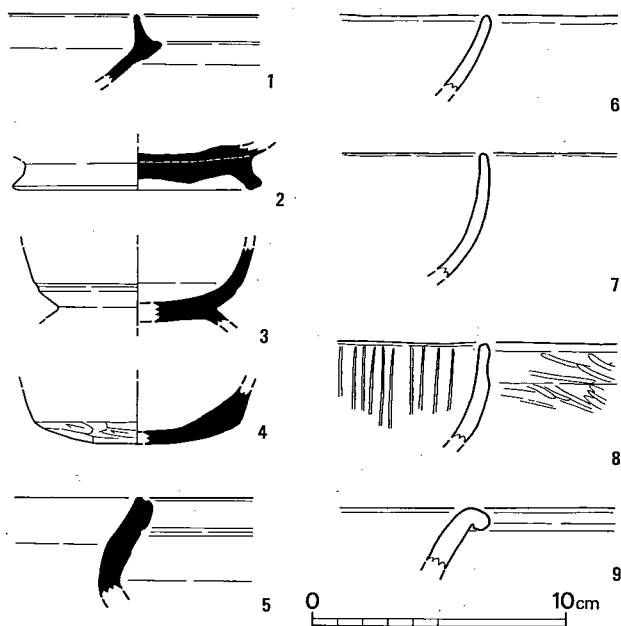
作り付け型のカマドで、北東住居壁に付設する。遺存状況は悪く、袖部を留めるにすぎない。右袖は残存長72cm、基部幅28cm、残高5cmで、左袖は72cm、基部幅28cm、残高10cmを測る。床面の掘り込みは、長軸72cm×短軸57cmを測る。壁体・床面はさほど加熱を受けておらず、掘り込みの前面が焼土と化していた。支脚は不明。埋土中から土器が出土した。

出土土器 (第100図)

須恵器 (1~5) 1・2は坏身で、1は口縁部、2は底部の破片。1のたちあがりは上方に立つ。2は高台を有し、高台径は9.0cmを測る。

3は脚部付近の破片で、台付きの椀になるか。体部下位にヘラ沈線を巡らす。4は底部破片で、外底面は手持ちヘラケズリ調整による。椀になるか。カマド内の出土である。5は甕の口縁部破片で、口唇部と口縁部のやや下位にヘラ沈線を巡らす。

土師器 (6~9) 6~8は坏の口縁部破片で、口唇部は丸く納める。8は外面ヘラミガキ、内面には暗文がみられる。9は甕の口縁部破片で、口唇部は丸める。



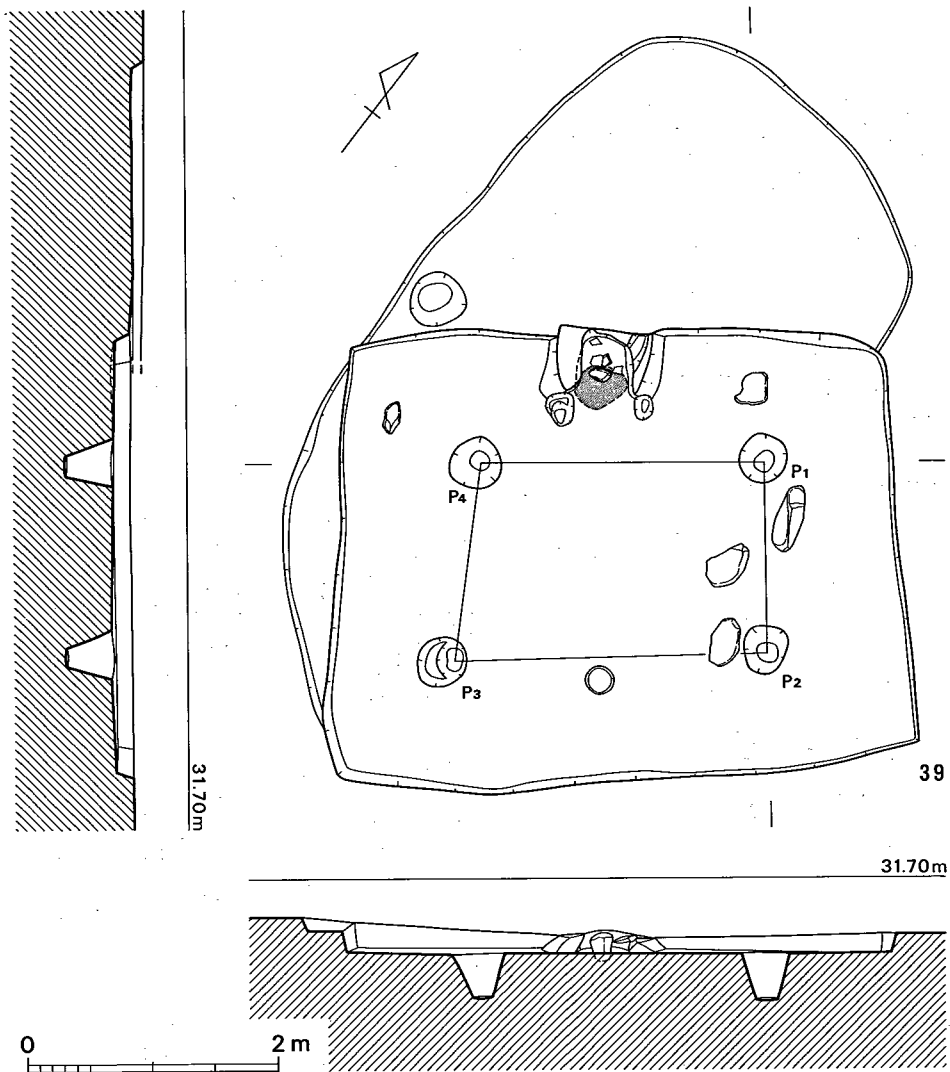
第100図 38号住居跡出土土器実測図 (1/3)

39号住居跡 (図版30-1, 第101図)

37号住居跡の5.4m南西側に位置し、楕円形の竪穴状遺構を切る。平面形は横位長方形を呈し、北西壁長4.2m、北東壁長3.1m、壁高は北西壁側で0.2mを測る。主柱穴はP1~4で、径38~42cm、深さ34~38cmを測る。柱間はP1-2間1.54m、P1-4間2.24mの間隔を有する。埋土中から砥石・手捏ね土器が出土した。

カマド (図版30-2・3, 第102図)

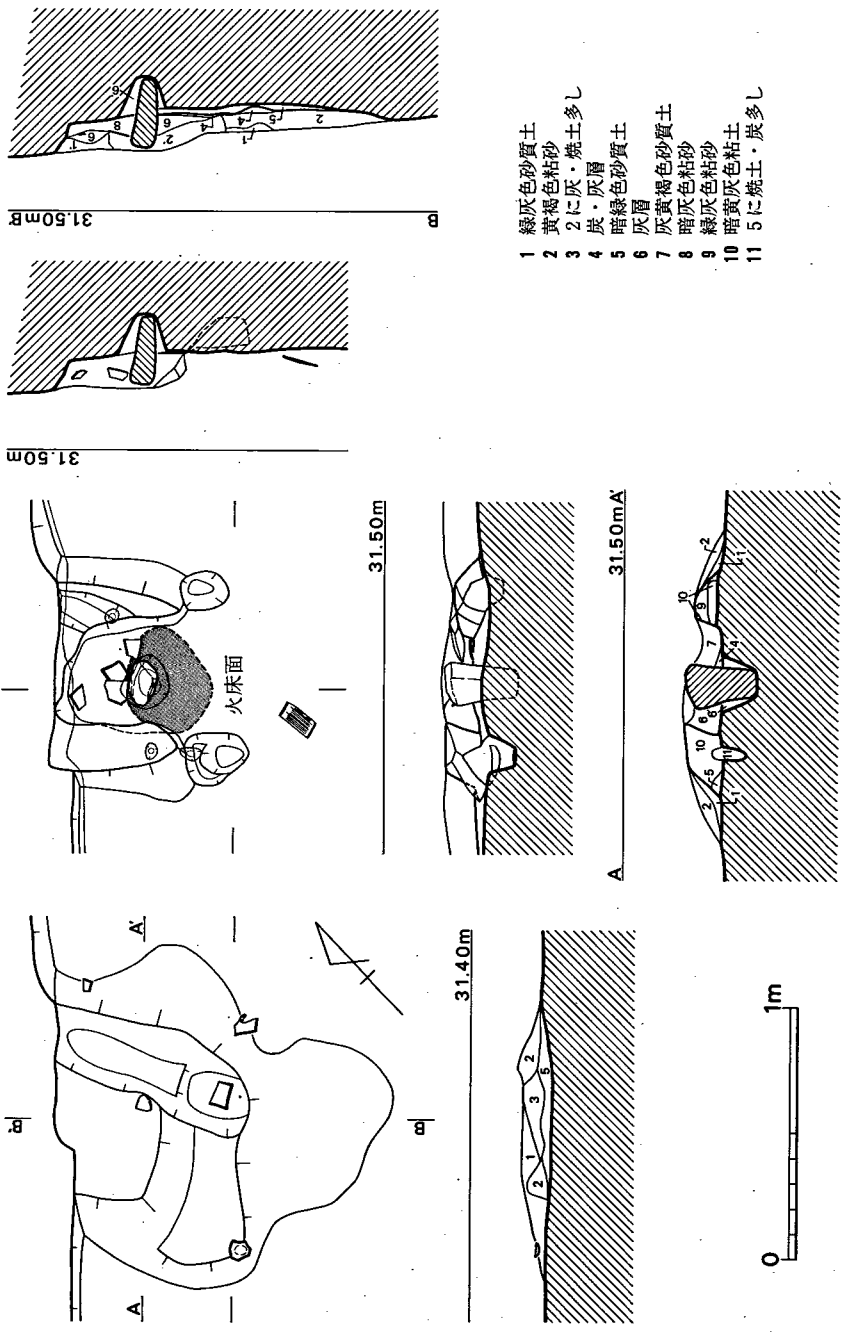
作り付け型のカマドで、北西壁の中央に付設する。遺存状態は割合に良好で、カマド検出時には黄褐色粘砂(②層)で全体が被われていた。それを、除去すると袖部・支脚が検出された。



第101図 39号住居跡実測図 (1/60)

右袖は長さ47cm, 基底部幅30cm, 残高14cmで, 左袖は長さ47cm, 基底部幅27cm, 残高18cmを測る。袖部には緑灰色粘砂・暗黄灰色粘砂を盛っていた。両袖部の先端には袖石の抜き跡があり, 床面から8~10cmの深さを測る。壁体・床面はよく焼けており, 奥壁から23cmの箇所に河原石の支脚を立てていた。

袖部の下からは, 焼土・灰が入った小ピットを検出しており, カマド構築時の施設であろう



- 1 緑灰色砂質土
- 2 黄褐色粘砂
- 3 2に灰・焼土多し
- 4 炭・灰層
- 5 暗緑色砂質土
- 6 灰層
- 7 灰黄褐色砂質土
- 8 暗灰色粘砂
- 9 緑灰色粘砂
- 10 暗黄灰色粘土
- 11 5に焼土・炭多し

第 102 図 39号住居跡カマド実測図 (1/30)

か。また、カマド内出土の甑と②層中出土の甑は接合関係にあり、カマド廃棄時の祭祀行為一カマド封じーによるものと推定される。

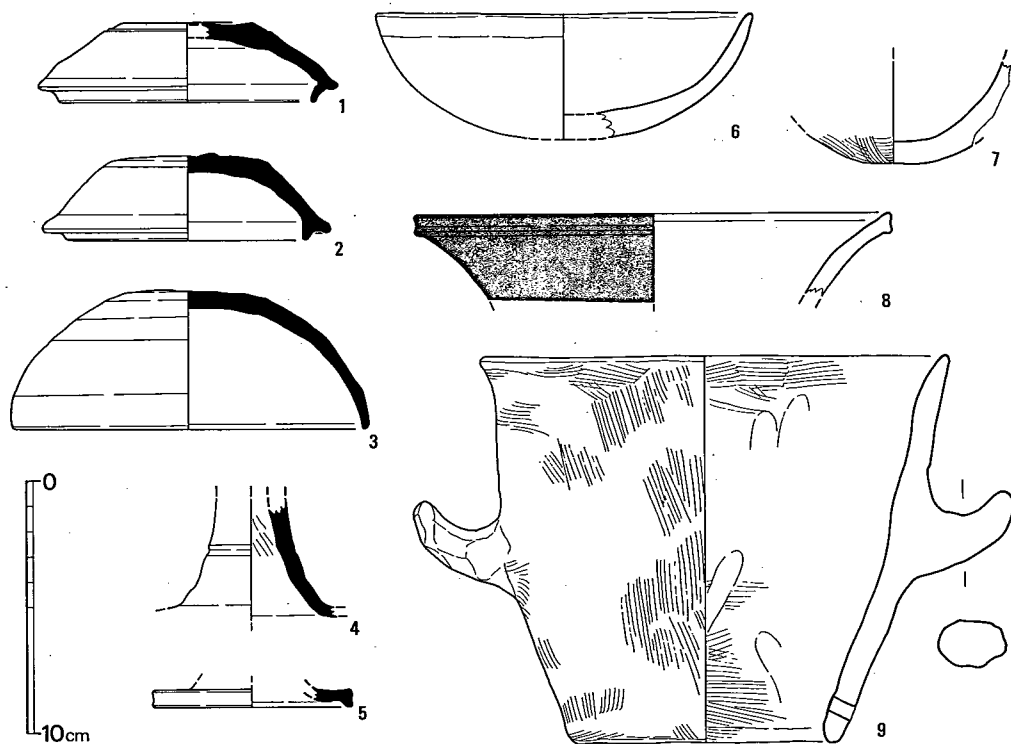
出土土器 (図版133-3, 第103図)

須恵器 (1~5) 1~3は坏蓋で、1・2は内面にかえりを有する。かえりは外方に立ち、口径は1が12.0cm, 2は11.5cmに復原した。口縁部ヨコナデ, 天井部回転ヘラケズリ, 内面ナデ調整による。焼成は堅緻で、色調は1が黒灰色, 2は暗灰色を呈する。3は口唇部が丸く, 天井部がドーム形を呈する坏蓋。外面は回転ヘラケズリによる。カマド埋土上層の出土。

4・5は高坏で、4は脚柱部の破片, 5は脚裾部の破片である。5の裾部は爪先立つ。

土師器 (6~9) 6は坏で、器面は肥厚する。口唇部は丸く納める。口縁部ヨコナデ, 内外面ナデ調整による。7は小型土器の底部破片で、外面はハケ目調整による。8は口縁部破片で、口唇部には沈線を有する。胎土に石英を含み、黄褐色を呈する。また、外面には丹を塗布する。

9は甑で器高15.1cm, 口径18.6cm, 底径10.6cmを測る。器高の割には太めの取っ手を貼付する。内外面ともハケ目調整による。また、底部には焼成前の円孔を外→内方向に穿つ。カマド内の出土である。当住居跡の時期は、6世紀末~7世紀前半であろう。



第103図 39号住居跡出土土器実測図 (1/3)

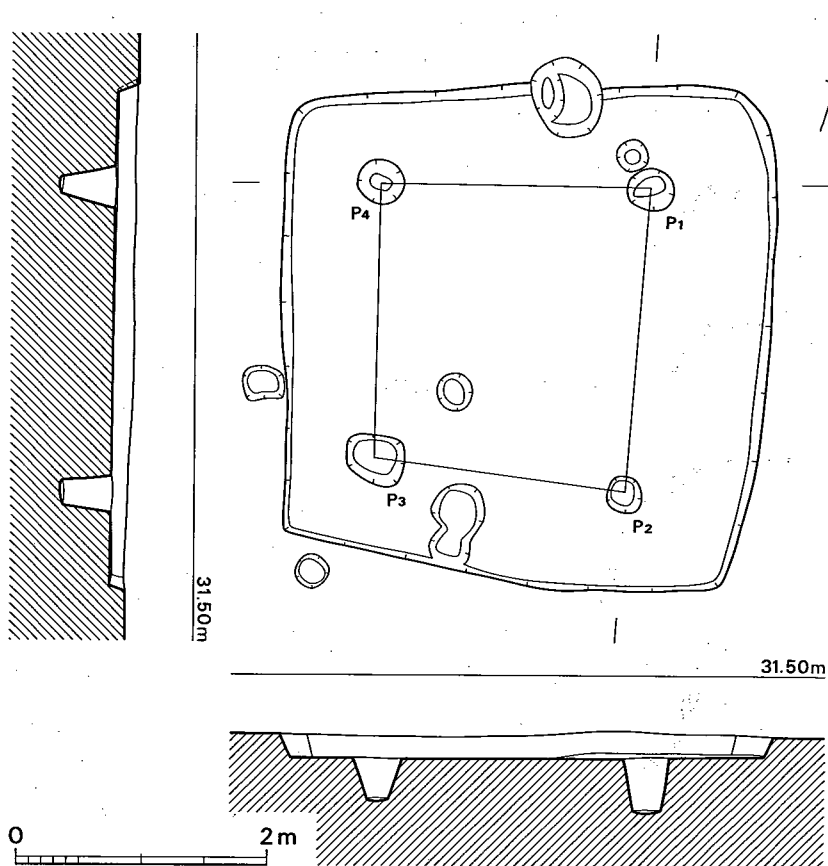
40号住居跡 (図版31-1, 第104図)

調査区の北東側に位置し、B群に属する。93・94号住居跡及び16号建物跡を切る。平面形は台形状を呈し、北壁長3.53m、西壁長3.36m、東壁長3.94m、壁高0.19mを測る。主柱穴はP1～4で、径26～47cm、深さ34～42cmとしっかりした柱穴である。柱間はP1-2間2.42m、P1-4間2.13mを測る。埋土中から土器が出土した。

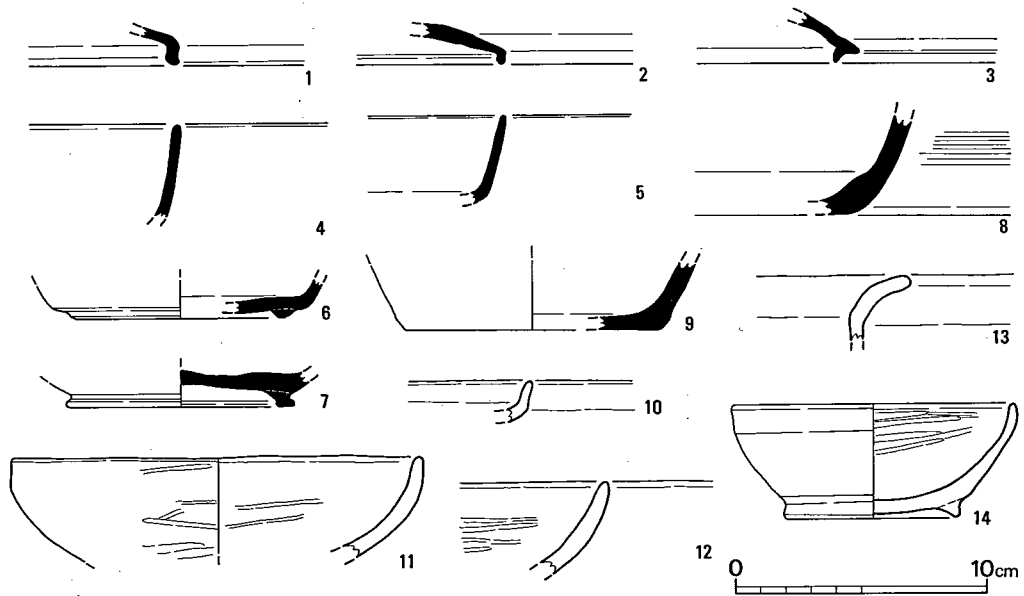
また、西壁中央でカマドらしい遺構を検出したが、断ち割った結果、壁体は全く焼けておらず、火床もみられないことからカマドではないと判断した。

出土土器 (図版133-4, 第105図)

須恵器 (1～9) 1～3は口縁部破片で、2の口唇部は小さく立つ。3は口縁部内面にかえりを有する。何れも口縁部ヨコナデ調整による。4～7は坏身で、4・5は口縁部破片である。



第104図 40号住居跡実測図 (1/60)



第105図 40号住居跡出土土器実測図(1/3)

口唇部は丸く納める。6・7は底部破片で、低めの高台を貼付する。高台径は6が8.2cm, 7は8.8cmに復原した。8・9は底部破片で、8の外面はカキ目調整による。

土師器 (10~13) 10~12は口縁部破片で、10の口縁部は上方に立つ。11・12は坏で、口唇部は丸く納める。11の復原口径は16.0cmを測る。器面調整はヘラミガキによる。13は甕の口縁部小片で、口縁部は大きく外反する。

内黒土器 (14) 14は椀で、器高4.5cm, 口径は12.0cm, 高台径6.8cmを測る。口縁部は内方にやや屈曲し、口唇部は丸く納める。外面ナデ、内面ヘラミガキ調整による。

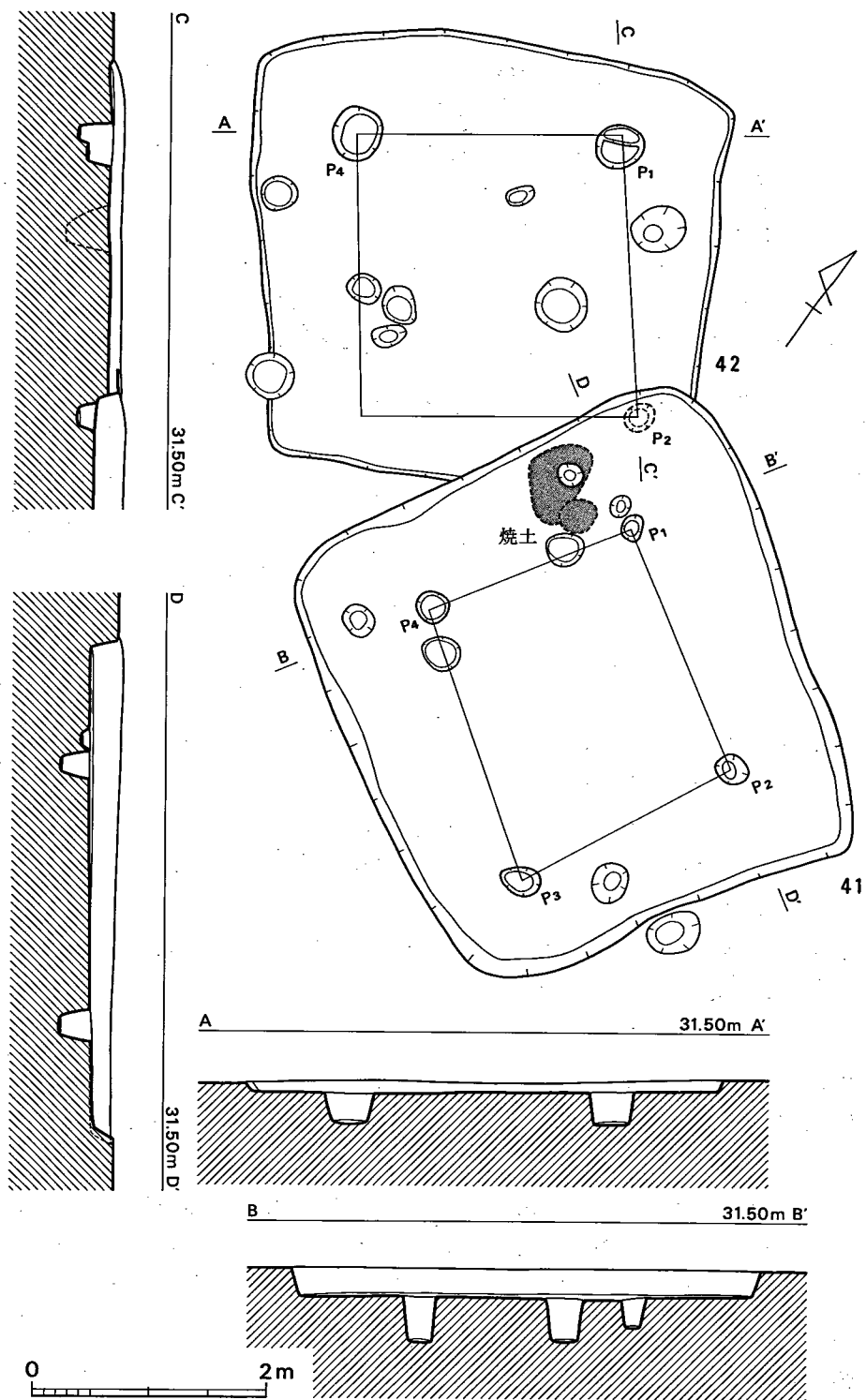
41号住居跡 (図版31-2, 第106図)

調査区の北側に位置し、B群に属する。42・97・98号住居跡を切る。平面形は縦位隅丸長方形を呈し、西壁長3.76m, 北壁長4.22m, 壁高0.22mを測る。支柱穴はP1~4で、径22~34cm, 深さ26~38cmを測る。柱間はP1-2間2.21m, P1-4間1.84mの間隔を有する。

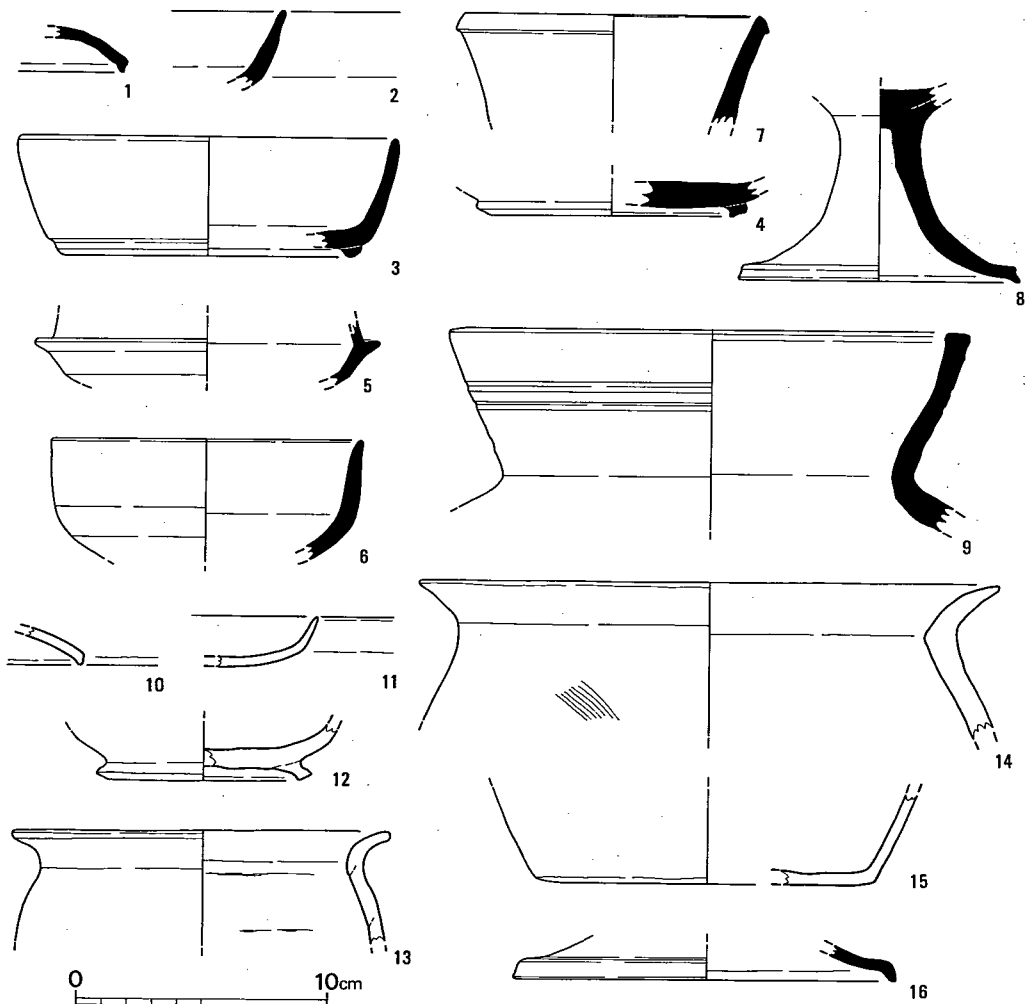
カマドは遺存しないが、西壁側の焼土がカマドの残骸と考えられる。床面はほぼ水平で、製塩土器が出土した。

出土土器 (第107図)

須恵器 (1~9・16) 1~5は坏で、1は蓋, 2~5が坏身である。1の口唇部は小さく立つ。2は口縁部破片で、口唇部は丸く納める。3・4は底部破片で、低い高台を貼付する。3



第 106 图 41·42号住居迹实测图 (1/60)



第107図 41号住居跡出土土器実測図 (1/3)

は器高4.7cm、復原口径15.0cmを測る。5はたちあがり内傾し、受部も突出する。

6は椀で、口唇部は丸く納める。口径は12.4cmに復原した。7は口縁部破片で、壺になるか。8は高坏の脚部破片で、脚径は11.2cmを測る。内面にはシボリ痕がみられる。9は内湾する口縁部破片で、甕になろう。頸部との中間にヘラ沈線を2条巡らす。16は脚部破片で、高坏の脚裾になろう。

土師器 (10~15) 10は坏蓋、12は坏身の破片である。13・14は甕の口縁部破片で、14の内面の稜は鋭い。口径は13が15.0cm、14は23.0cmを測る。15は底部破片で、鉢状の器形を呈するか。当住居跡も遺物の混在が著しいが、8世紀中～後半頃か。

42号住居跡 (図版26, 第106図)

41号住居跡に東側コーナーを切られて位置する。北西壁長4.04m, 南西壁長3.32mを測る隅丸方形を呈する。主柱穴は4本と考えられるが, P3を検出し得ていない。柱穴の径28~46cm, 深さ28~30cmを測る。柱間はP1-2間2.38m, P1-4間2.24mの間隔を有する。

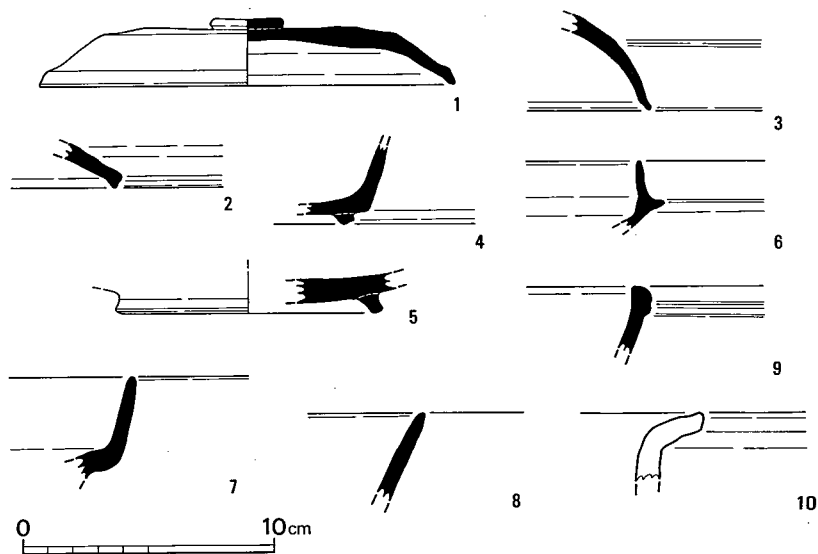
カマド・焼土は遺存せず, 詳細は不明。埋土中から製塩土器が出土した。

出土遺物 (第108図)

須恵器(1~9) 1~3は坏蓋で, 1は天井部に偏平な撮みを付す。器高2.6cm, 復原口径16.4cmを測る。口縁部ヨコナデ, 天井部回転ヘラケズリ調整による。2は口縁部破片で, 端部は小さく立つ。3は口唇部内面に稜を有する坏蓋で, 天井部との境に沈線を巡らす。

4・5は坏身で, 底部には低い高台を貼付する。6のたちあがりは上方に立つ。7・8は口縁部破片で, 口唇部は丸く納める。坏身になるか。9は口縁部破片で, 端部は肥厚する。

土師器(10) 10は甕の口縁部小破片で, 端部は小さく立つ。

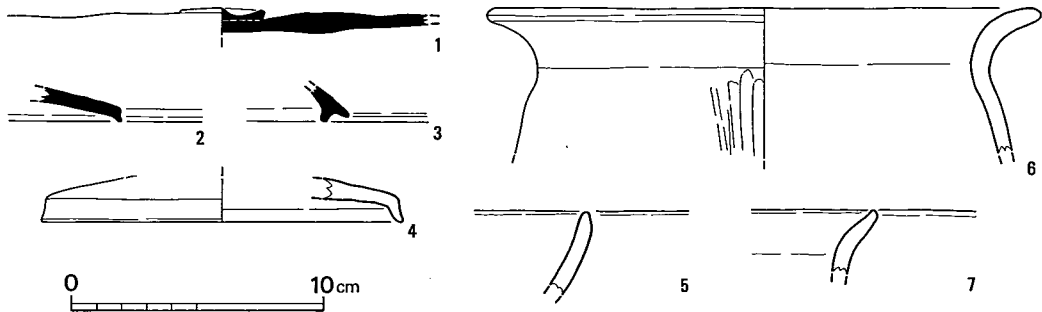


第108図 42号住居跡出土土器実測図 (1/3)

43号住居跡 (図版27-1, 第95図)

B群の中央部で, 36号住居跡・11号溝に切られて位置する。南壁の大半が36号住居跡に切られるため北東壁を残す程度である。北壁長3.9m, 壁高0.14mを測る。柱穴は判然としない。

また, コ字形の張出しが北東壁の中央にあるが, 壁・床面は焼けておらず, カマドと考えるには疑問が残る。埋土中から砥石・製塩土器が出土した。



第109図 43号住居跡出土土器実測図 (1/3)

出土土器 (第109図)

須恵器 (1~3) 1~3は坏蓋である。1は天井部破片で、偏平な撮みを付す。2は口縁部破片で、口唇部は小さく立つ。3は内面にかえりを有する坏蓋で、かえりは下方に突出する。

土師器 (4~7) 4は坏蓋の口縁部破片で、撮みを欠く。口径は14.4cmに復原した。5は坏の口縁部小片で、ヨコナデ調整による。6・7は甕の口縁部破片で、6は口径21.2cmに復原した。口縁部は大きく外反する。7の口唇部は内湾して立上がる。

44号住居跡 (第98図)

F群に属し、38号住居跡の床面直下で検出した。カマド付近を残す程度で、平面形・柱穴など詳細は不明。

45号住居跡を切っている。

カマド (第98図)

北壁に付設する作り付け型のカマドで、袖部のみ遺存する。右袖は残長72cm、底部幅18cm、残高8cmで、左袖は残長62cm、底部幅22cm、残高12cmを測る。

壁体・床面はさほど加熱を受けておらず、支脚も不明。

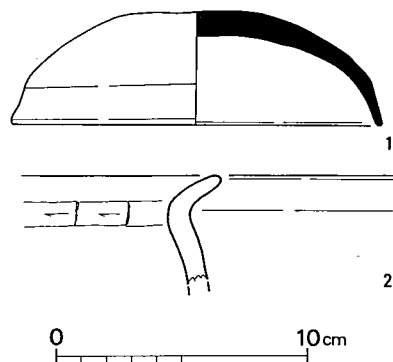
出土土器 (図版133-5, 第110図)

須恵器 (1) 1は坏蓋で、天井部はドーム状を呈する。器高4.5cm、口径14.8cmを測る。口唇部は丸く納める。

器面調整は磨滅により不明。焼成はやや軟質で、色調は灰白色を呈する。

土師器 (2) 甕の口縁部小片で、口唇部は丸く納める。内面ヘラケズリによる。

当住居跡の時期は、6世紀末であろう。



第110図 44号住居跡出土土器実測図 (1/3)

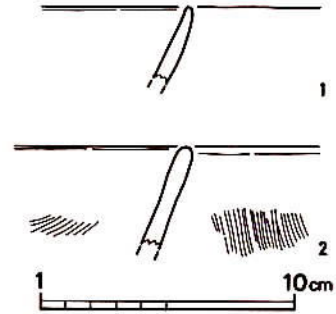
45号住居跡 (図版29-2, 第98図)

37号住居跡の貼床下層で検出した。隅丸方形を呈し、北壁長3.12m, 南壁長3.0mを測る。柱穴はコーナー部に位置するP1~4であるが、P3を検出し得ていない。径は23~28cm, 深さ12~25cmを測る。柱間はP1-2間2.44m, P1-4間2.28mの間隔を有する。

カマドは、北壁側に焼土が僅かに遺存する程度で、カマドそれ自体は削平されており、詳細は不明。

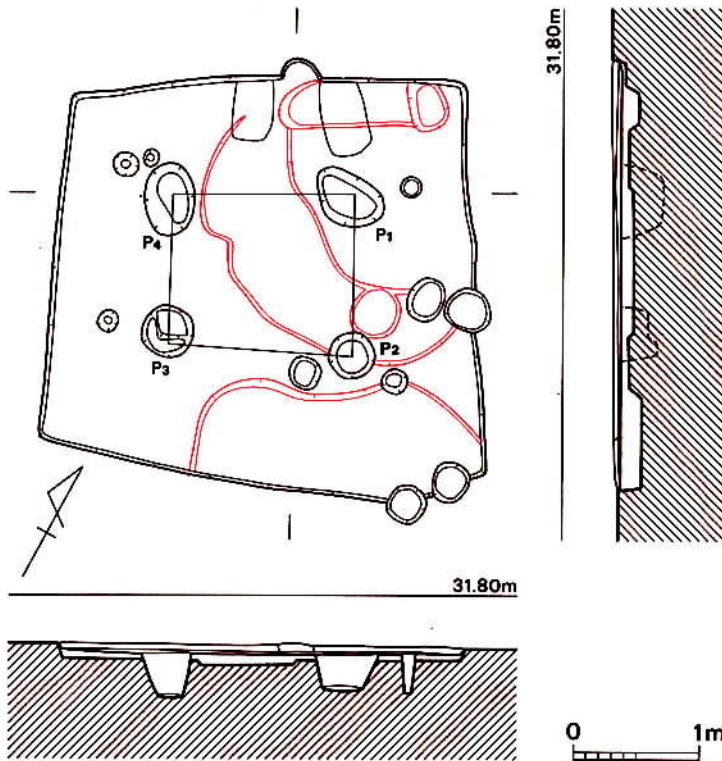
出土土器 (第111図)

土師器 (1・2) 1は口縁部小片で、坏になるか。2は甑の口縁部小片で、直線的に開く。内外面ともハケ目調整を施す。



第111図 45号住居跡出土土器実測図 (1/3)

46号住居跡 (図版34, 第112図)



第112図 46号住居跡実測図 (1/60)

38号住居跡の4.3m北側に位置し、49号住居跡カマドと接する。平面形は方形を呈し、北西壁長3.14m、北東壁長3.06mを測る。削平が著しく、壁高は北西側で7cm遺存する程度である。主柱穴はP1～4の4本で、径38～57cm、深さ32～44cmを測る。柱間はP1－2間1.28m、P1－4間1.44mの間隔で、狭小な感を抱く。埋土・カマド内・下層から製塩土器が出土した。

カマド (第112図)

北西壁の中央に付設される作り付け型のカマドで、袖部に焼土・炭の範囲を留める程度。焚口幅は50cm程になろう。また、住居壁を14×28cmの半円形に掘り込み煙道とする。

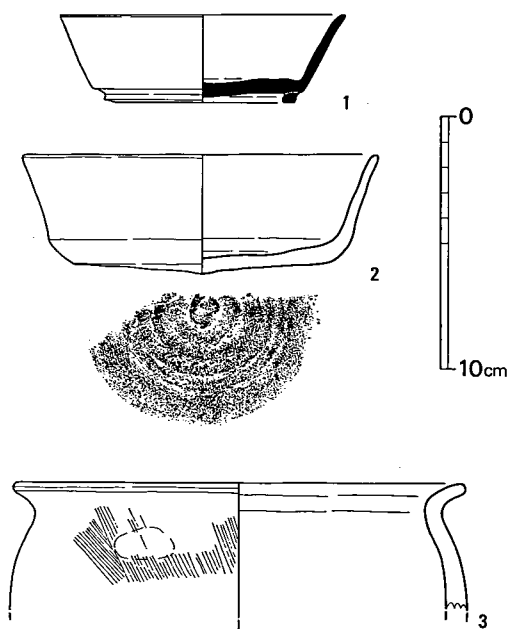
出土土器 (第113図)

須恵器 (1) 1は坏身で器高3.4cm、口径11.3cm、高台高0.3cmを測る。口縁部は底部から直線的に開き、口唇部は丸く納める。口縁部ヨコナデ、内面ナデ調整による。焼成は堅緻で、色調は紫灰色を呈する。

土師器 (2・3) 2は高台を付さない坏で、須恵器の技法による。器高4.7cm、復原口径14.0cmを測る。口唇部は丸く、底部は回転ヘラケズリ調整による。焼成は良好で、色調は赤橙色を呈する。

3は甕で、口縁部は大きく外反する。口径は18.0cmに復原した。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目調整による。胎土には石英・雲母を含む。

住居跡の時期は、8世紀後半であろう。



第113図 46号住居跡出土土器実測図 (1/3)

47号住居跡 (図版35-1, 第114図)

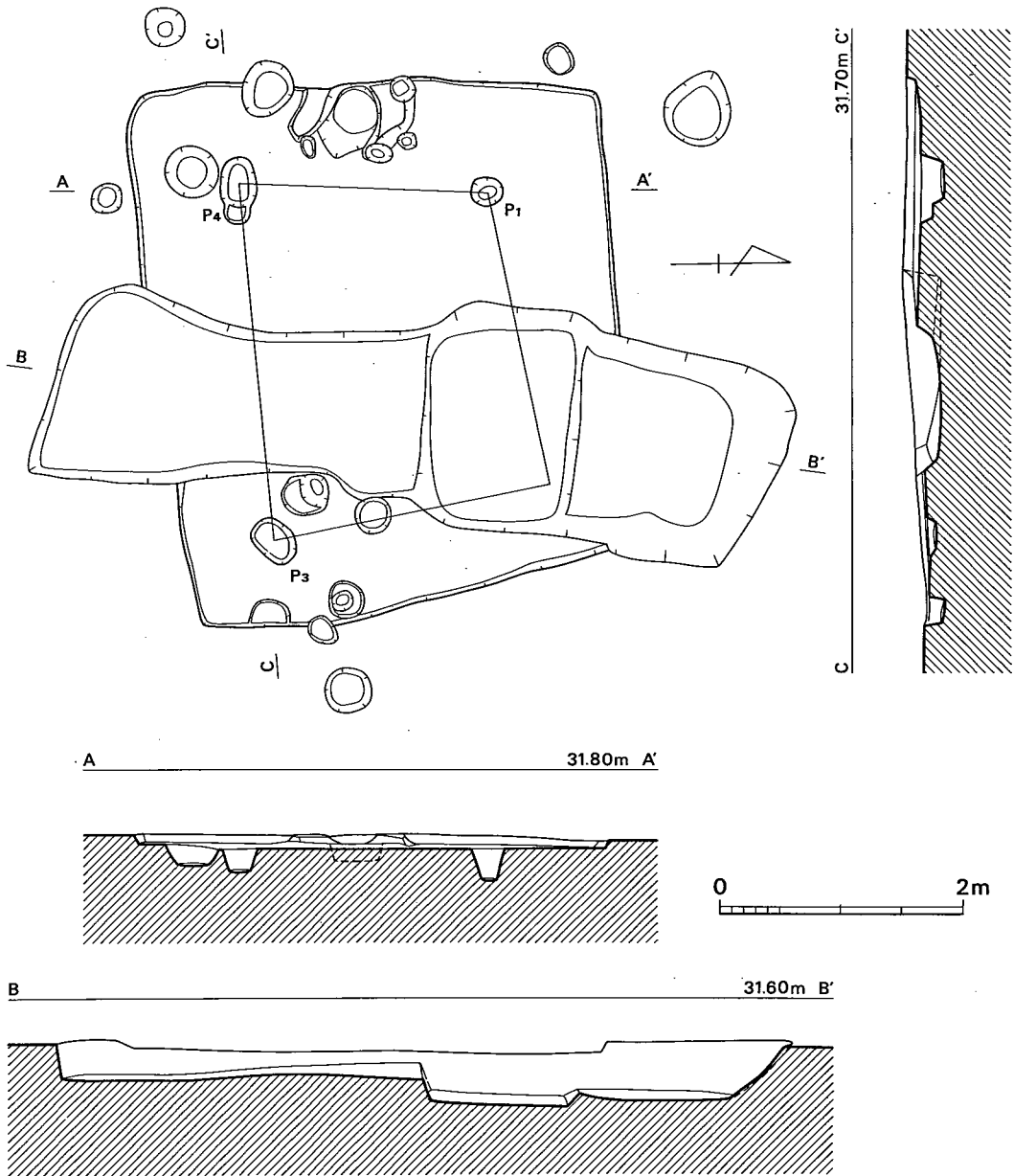
39号住居跡の2m東側に位置し、中央部を長方形土壇に切られる。平面形は縦位長方形を呈し、西壁長3.82m、南壁長4.43mを測る。当住居跡も削平が著しく、壁高は西壁側で7cmを留める程度であった。

主柱穴はP1～4の4本で、P2を土壇に切られ失う。径26～52cm、深さ15～27cmを測る。柱間はP1－4間2.07m、P3－4間2.97mを測る。遺物の出土量は少なく、埋土中から土器が出土したにすぎない。

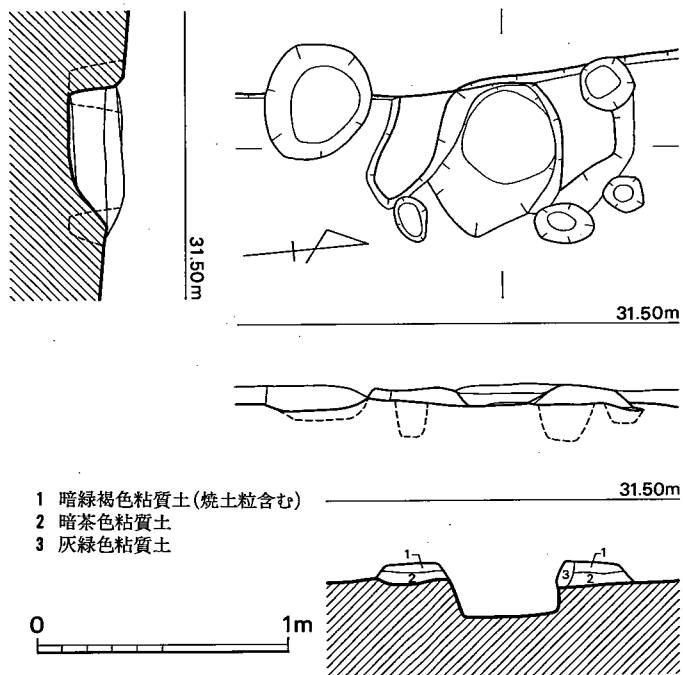
カマド (図版35-2, 第115図)

作り付け型で、西壁のほぼ中央に付設する。遺存状態は悪く、両袖部を留める程度である。

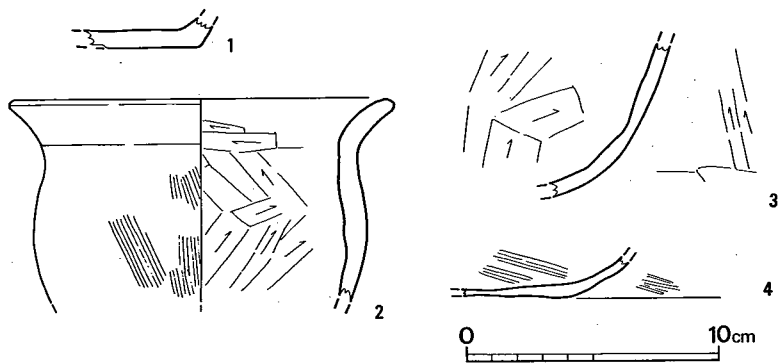
また、カマド床面中央にピットがあり、支脚・火床面は遺存しない。右袖は残存長63cm、基部幅32cm、残高8cmで、左袖は残存長43cm、基部幅28cm、残高6cmを測る。両袖部の先端から径19~24cm、深さ16cm程の小ピットを検出しており、袖石の抜き跡と考えられる。



第114図 47号住居跡実測図 (1/60)



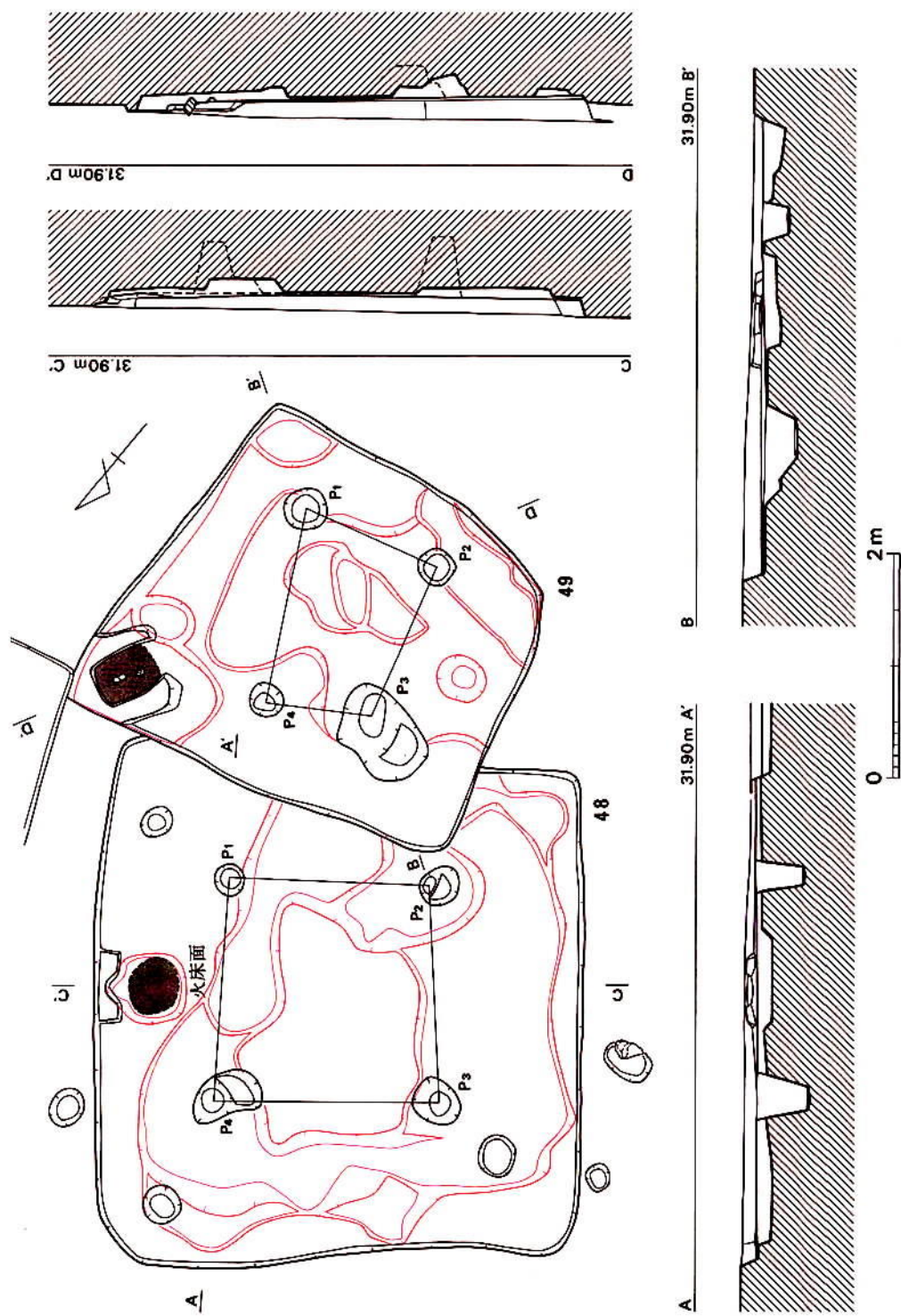
第115図 47号住居跡カマド実測図 (1/30)



第116図 47号住居跡出土土器実測図 (1/3)

出土土器 (第116図)

土師器 (1~4) 1は坏の底部破片で、底面には板状圧痕がみられる。2~4は甕で、2は口縁~胴部破片、3・4は底部破片である。2の口径は15.4cmに復原した。口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整による。4は内外面ともヘラミガキを施す。



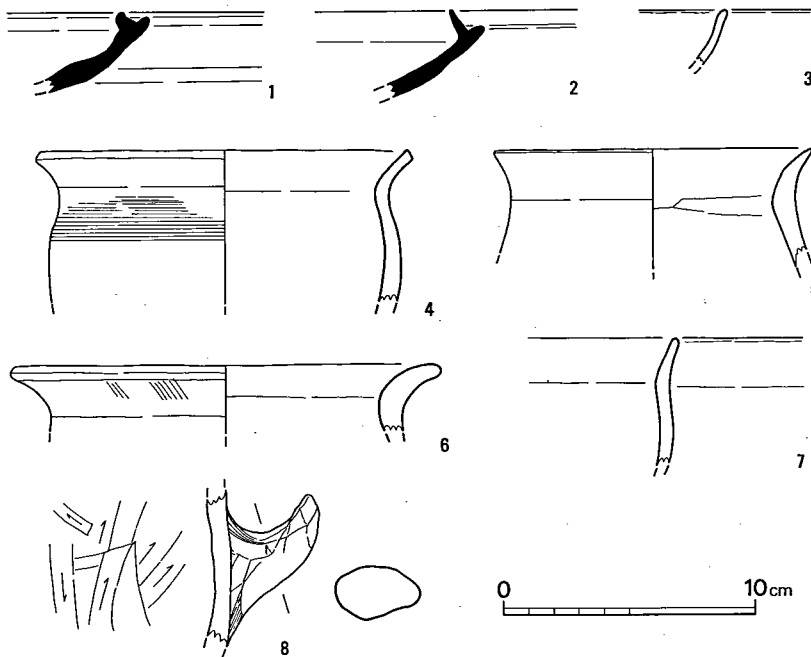
第 117 图 48·49号住居跡実測图 (1/60)

48号住居跡 (図版36-1・2, 第117図)

調査区の南西端部に位置し、F群に属する。南東壁を49号住居跡に切られる。平面形は隅丸方形を呈し、北東壁長4.66m、北西壁長4.02mを測る。住居跡の遺存状態は悪く、壁高は北側で12cmを留めるにすぎない。支柱穴はP1~4の4本で、径26~44cm、深さ46cmを測るしっかりした柱穴である。柱間はP1-2間1.78m、P1-4間2.0mを測る。貼床下部には、土壇状の落込みが存在する。埋土中より土器が出土した。

カマド (図版36-3, 第117図)

作り付け型のカマドで、北東壁の中央に付設する。遺存状態は悪く、袖部の一部を留める程度である。袖部は残存長22cm、残高8cmを測り、袖部の前に46×52cmの火床面がある。



第118図 48号住居跡出土土器実測図 (1/3)

出土土器 (第118図)

須恵器 (1・2) 1・2は坏身の口縁部破片で、1のかえりは肥厚する。2のかえりは大きく突出する。

土師器 (3~8) 3は坏で、口唇部は丸く納める。4~6は甕の口縁部破片で、4の外面はカキ目調整による。口径は4が14.6cm、5は12.6cm、6は17.0cmに復原した。7は頸部に締りがなく、鉢になるか。8は甕の取っ手部破片。当住居跡の時期は、6世紀末であろう。

49号住居跡 (図版37-1・2, 第117図)

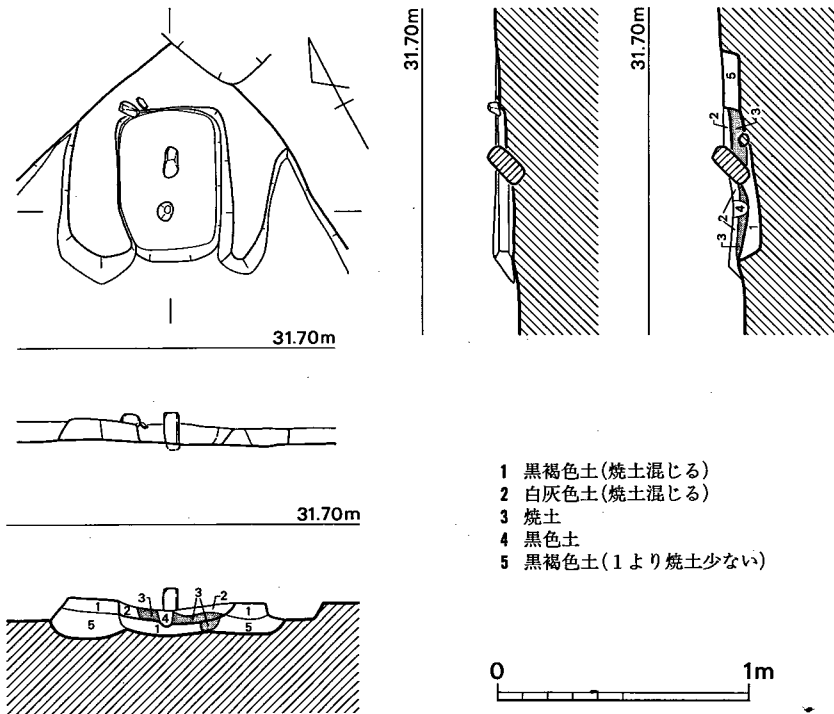
48号住居跡を切って位置する。検出当初は、50号住居跡が切っているとしたが、コーナー部にカマドを有する81号住居跡に切られるので、前後関係を50号→49号とした。

平面形は長方形を呈し、北壁長3.68m, 東壁長3.22mを測る。コーナー部にカマドを有するため柱穴が判然としないが、一応P1~4を主柱穴とした。径30~60cm, 深さ25cm前後を測る。柱間はP1-2間1.28m, P1-4間1.78mを測る。埋土中から製塩土器が出土した。

カマド (図版37-3, 第119図)

北側コーナー部に付設される作り付け型のカマドである。北部九州地域において、コーナー部にカマドを付設する住居跡は類例に乏しいが、F群では10軒ほど確認された。

カマドの遺存状態は悪く、袖部と支脚を留める程度である。右袖は残存長76cm, 基底部幅22cm, 残高6cmで、左袖は残存長76cm, 基底部幅23cm, 残高8cmを測る。袖部は焼土混じりの黒褐色土を盛っており、壁面・床面はよく焼けていた。支脚は奥壁から23cmの箇所であり、長さ17cmの河原石を立てていた。埋土中からは土器小片が出土したにすぎない。



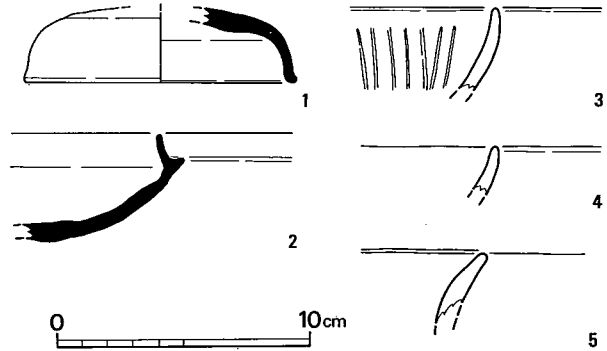
第119図 49号住居跡カマド実測図 (1/30)

出土土器 (第120図)

須恵器 (1・2) 1は坏蓋で残高2.9cm, 復原口径10.6cmを測り, 口唇部は丸く納める。2は坏身の口縁部破片で, たちあがりは内傾する。

土師器 (3~5) 3・4は坏の口縁部破片で, 口唇部は丸く納める。3は内面に暗文がみられる。5は甕の口縁部小片。

6世紀末の築造であろう。



第120図 49号住居跡出土土器実測図 (1/3)

50号住居跡 (図版58-2, 第122図)

調査区の南西端に位置し, F群に属する。38・81号住居跡に切られるため, 正確な規模は測り得ないが, 東西長3.9m, 壁高0.1mを測る。支柱穴は4本と考えられるが, 2本しか確認し得ていない。P1-2の柱間は2.34mを測る。住居跡の遺存状態に比して土器は割合に多く, 他にも床面から石製紡錘車, 埋土中から製塩土器が出土した。

カマド (第121図)

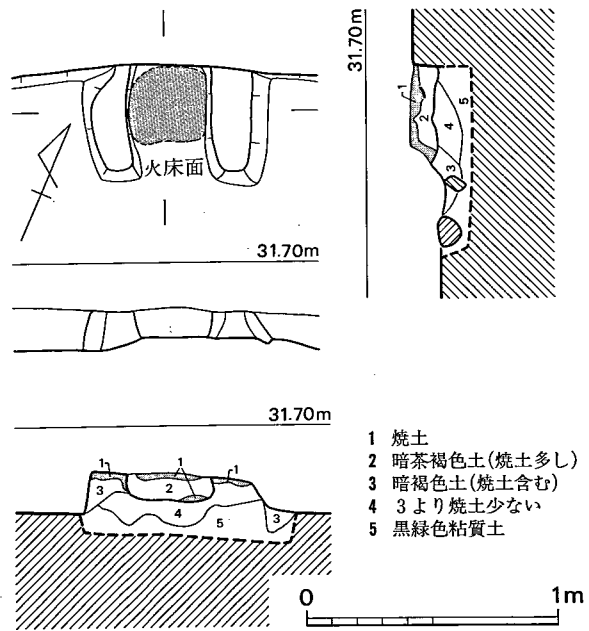
作り付け型のカマドで, 北壁中央に付設する。遺存状態は悪く, 両袖部を留めるにすぎない。

右袖は残存長46cm, 基底部幅23cm, 残高11cmで, 左袖は残存長46cm, 基底部幅27cm, 残高16cmを測る。袖部は焼土混じりの暗褐色土を盛っていた。

壁体・火床面はよく焼けており, 火床面は30×37cmの範囲を有する。支脚については不詳。埋土中からは土器片が出土したにすぎない。

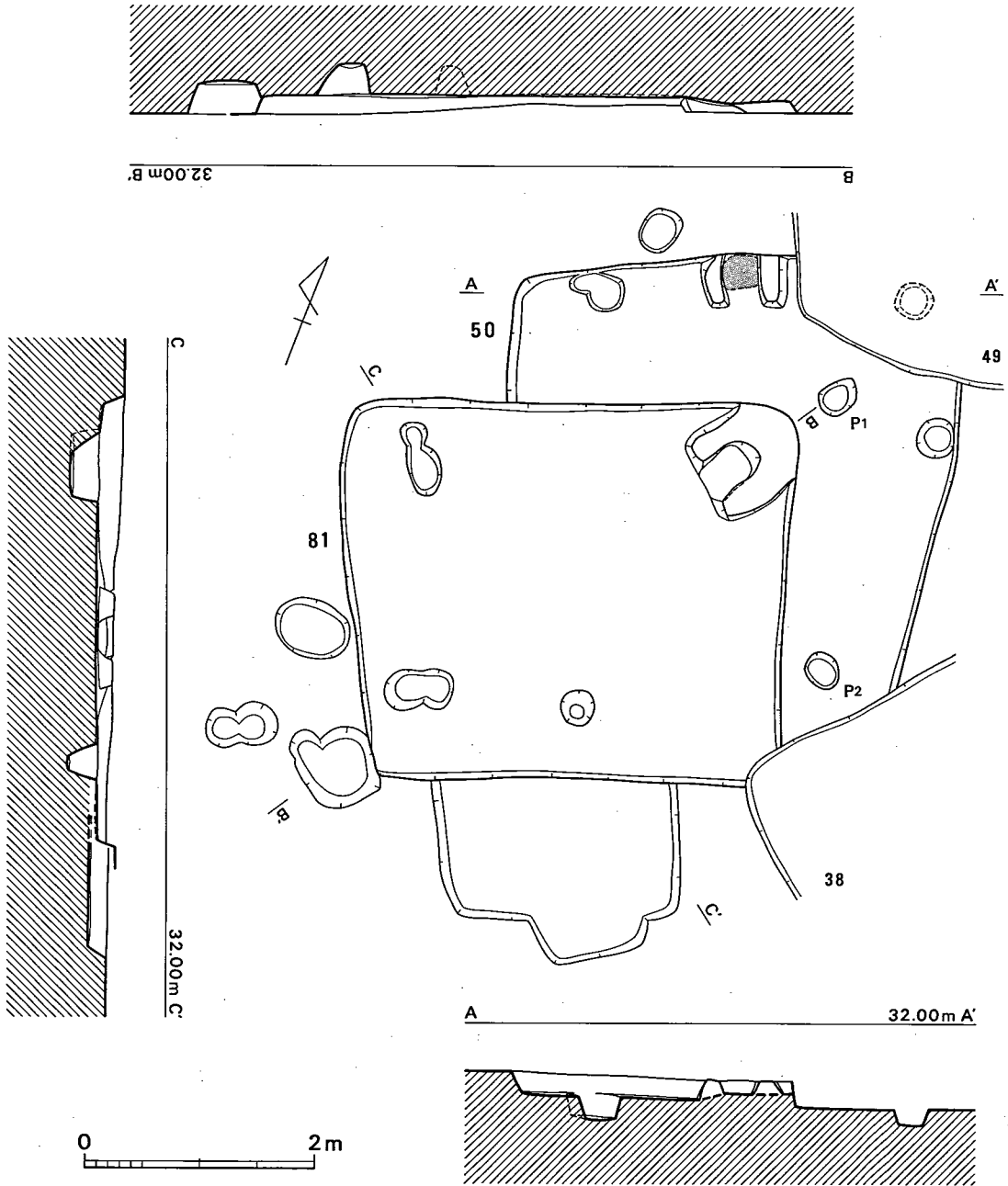
出土土器 (第123図)

須恵器 (1) 1は坏蓋の口縁部小片で, 口唇部は小さく立つ。ナデ調整による。焼成はやや軟質である。

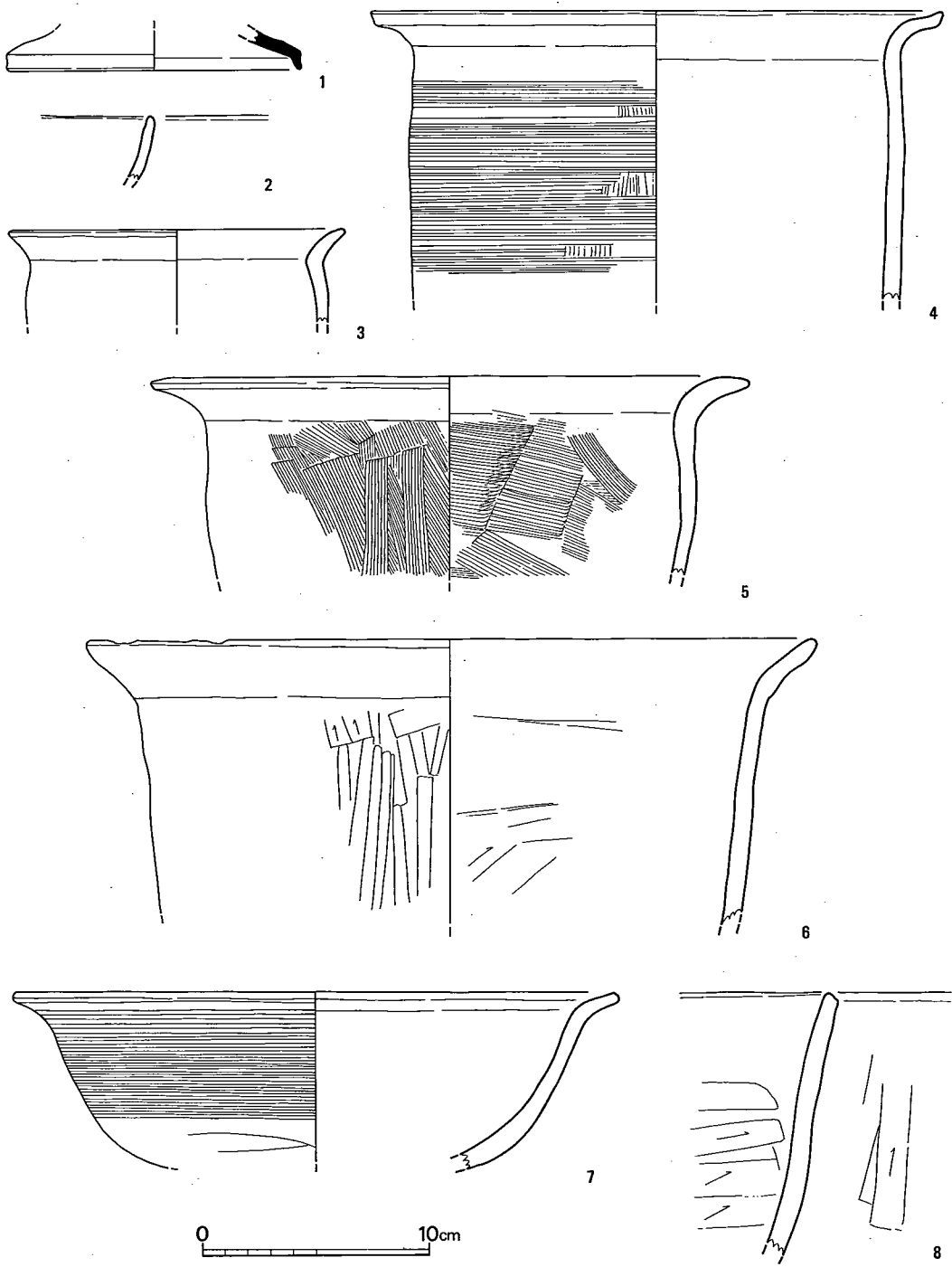


第121図 50号住居跡カマド実測図 (1/30)

土師器（2～8）2は坏の口縁部小片で、口唇部は丸く納める。3～6は甕で、3は小型品。4・6は長胴甕になろう。3は内外面ともナデで、口径は14.8cmに復原した。4は外面カキ目



第122図 50・81号住居跡実測図 (1/60)



第 123 图 50号住居跡出土土器実測図 (1/3)

(8~10条/cm), 内面ナデ調整による。5の口縁部は大きく外反し, 内外面ともハケ目調整を施す。6の外表面は雑なへラミガキで, 内面はナデ調整による。

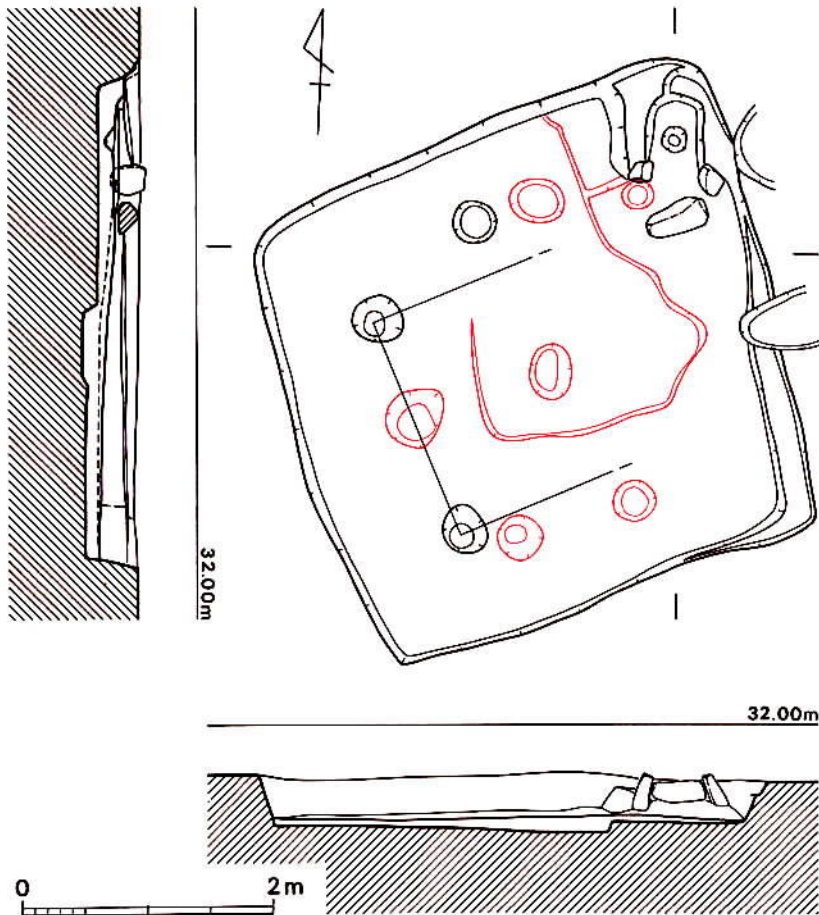
7は鉢で, 口縁部は水平気味に開く。外面は4同様カキ目調整により, 内面は丁寧なナデ。

8は甑の口縁部小片で, 口縁部は直線的に開く。内外面ともへラケズリによる。

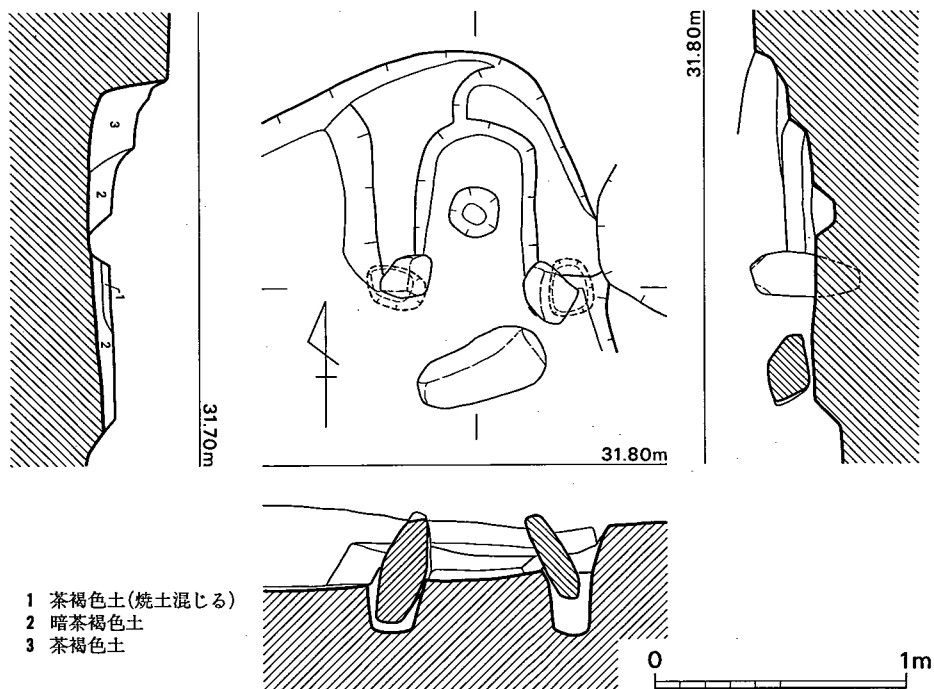
住居跡の時期は, 8世紀後半頃か。

51号住居跡 (図版38, 39-1・2, 第124図)

48号住居跡の0.5m北西側に位置し, 56号住居跡を切っている。平面形は方形というよりは菱形を呈し, 北壁長3.84m, 西壁長3.52m, 壁高0.27mを測る。柱穴は判然としない。埋土中から製塩土器が出土した。



第124図 51号住居跡実測図 (1/60)



第 125 図 51号住居跡カマド実測図 (1/30)

カマド (図版39-3, 第125図)

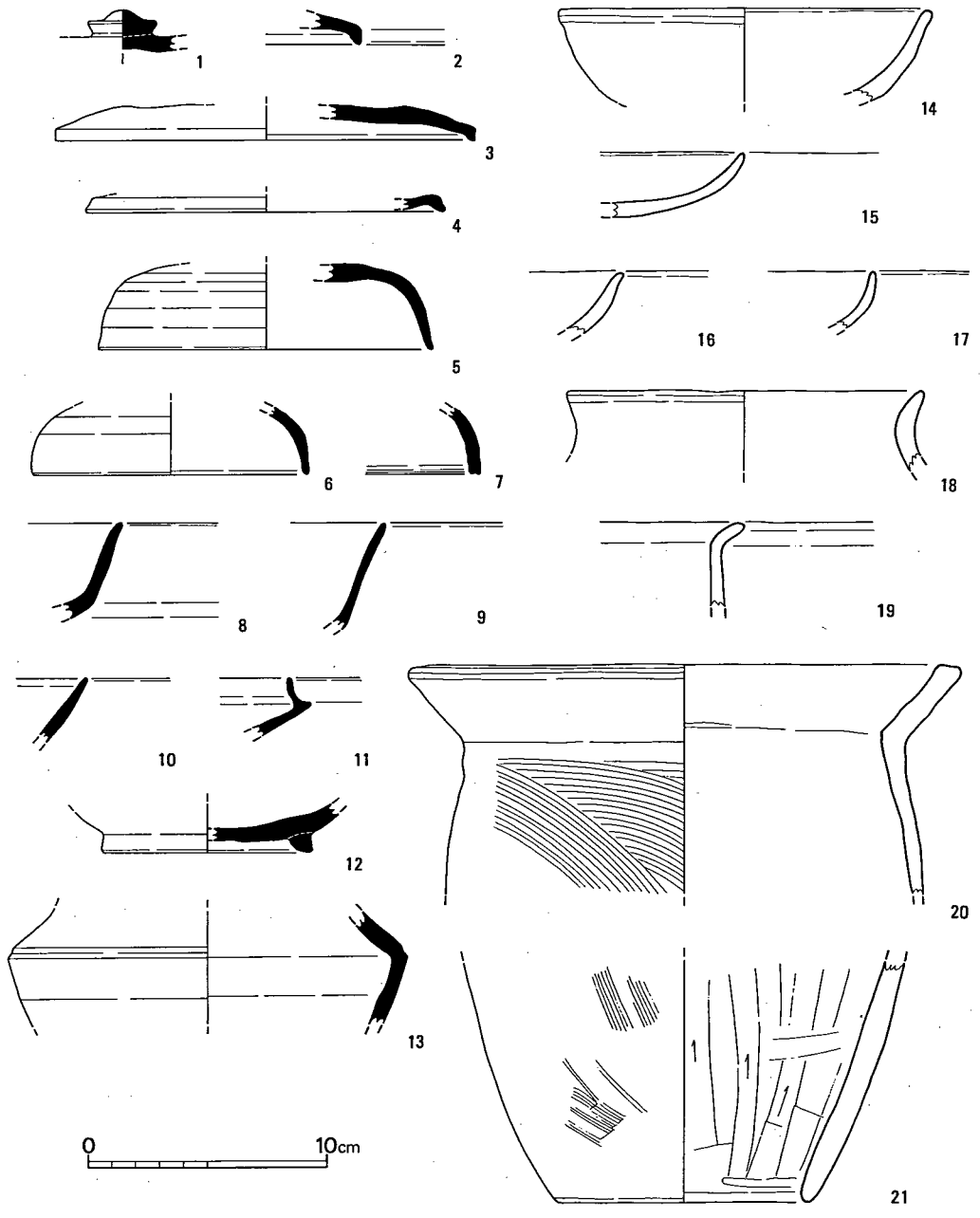
作り付け型のカマドで、北壁コーナーに付設する。遺存状態は割合に良好で、袖石を留めていた。右袖は残存長55cm、基底部幅30cm、残高10cmで、左袖は残存長68cm、基底部幅33cm、残高13cmを測る。両袖部の先端には40cm前後の河原石を立てており、その手前には天井石がずり落ちていた。石の下からは、獣骨が検出された。また、火床面の中央に径20cm、深さ10cmの小ピットがあり、支脚の石を立てていたものと思われる。

出土土器 (図版133-6, 第126図)

須恵器 (1~13) 1~4は坏蓋で、1は天井部の破片、2~4は口唇部が小さく立つ蓋である。5~7は短頸壺の蓋になろう。5・6の口唇部はシャープであり、7は肥厚する。8~11は口縁部破片で、坏身になろう。11のたちあがりは上方に立つ。12は底部破片で、低めの高台を貼付する。13の肩はよく張っており、ヘラ沈線を巡らす。

土師器 (14~21) 14~17は坏で、口唇部は丸く納める。18・19は甕の口縁部破片で、19の口縁部は肥厚せずに外反する。20は甕の口縁~肩部破片で、口縁部は内湾する。外面粗いハケ目、内面ナデ調整による。21は甕の底部破片で内面ヘラケズリ、外面ナデ調整による。

当住居跡の時期は、8世紀末であろう。



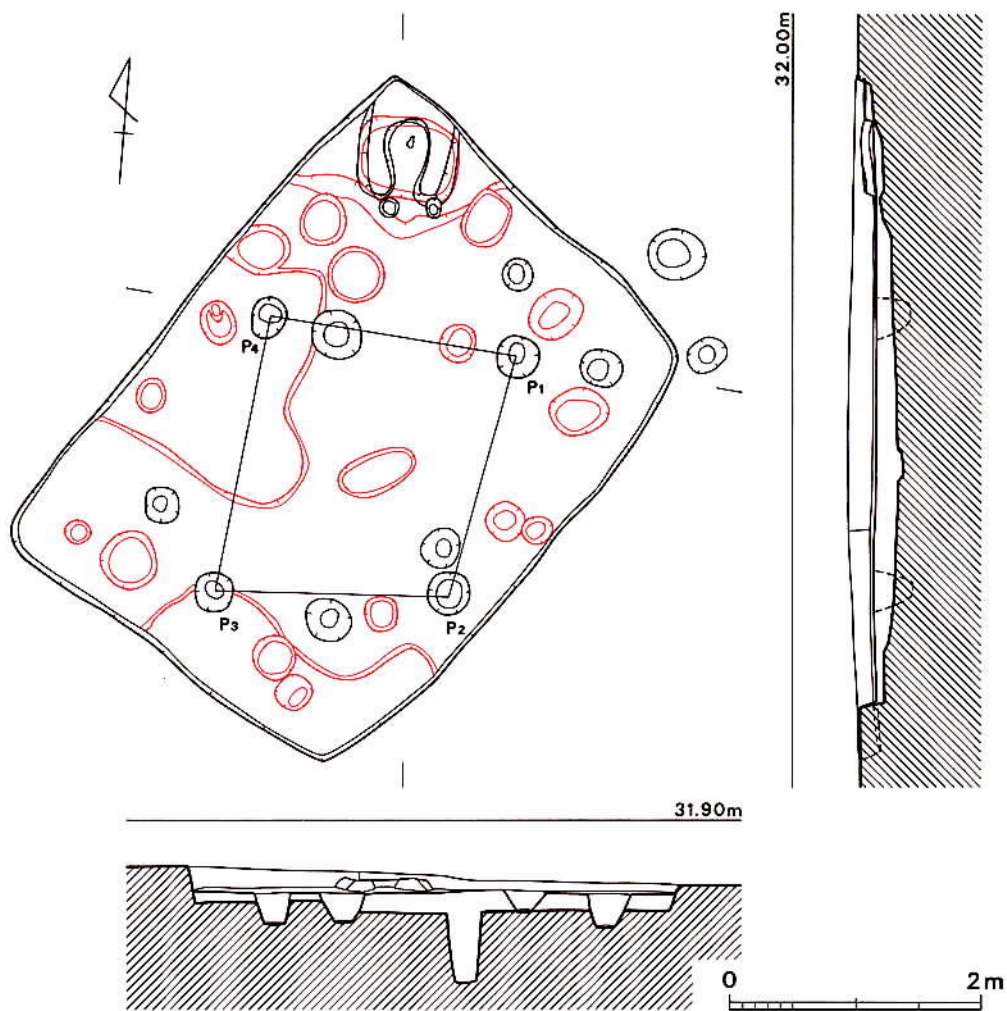
第 126 图 51号住居跡出土土器实测图 (1/3)

52号住居跡 (図版40-1・2, 第127図)

調査区の西側に位置し、F群に属する。51号住居跡と接し、56号住居跡を切る。平面形は隅丸長方形を呈し、北東壁長3.18m、北西壁長4.8m、壁高0.2mを測る。床面にはピットが数多くあるが、深さからみてP1~4を支柱穴とした。径28~34cm、深さ30cm前後を測り、柱間はP1-2間1.98m、P1-4間1.96mの間隔を有する。床面を掘り下げたところ、ピット・落込みを検出した。埋土中から砥石が出土している。

カマド (図版40-3, 第128図)

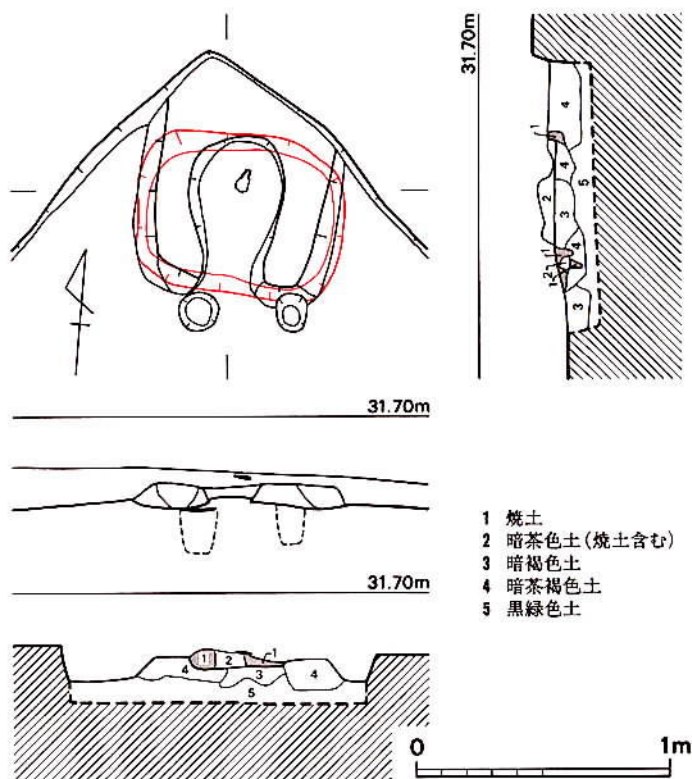
住居壁の北側コーナー部に付設される作り付け型のカマドである。遺存状態は悪く、袖部を



第127図 52号住居跡実測図 (1/60)

留めるにすぎない。右袖は残存長75cm, 基底部幅28cm, 残高9cmで, 左袖は, 残存長80cm, 基底部幅28cm, 残高20cmを測る。袖部の下層には, 長軸82cm×短軸63cmの隅丸長方形の掘り込みがあり, それを一旦埋めてから, 暗褐色土を盛って袖部としている。下層の掘り込みは, 湿気対策か。

また, 両袖部の先端から径10~15cm, 深さ18cmの小ピットを検出しており, 袖石の抜き跡になろう。壁体・床面はよく焼けていたが, 支脚については不明。

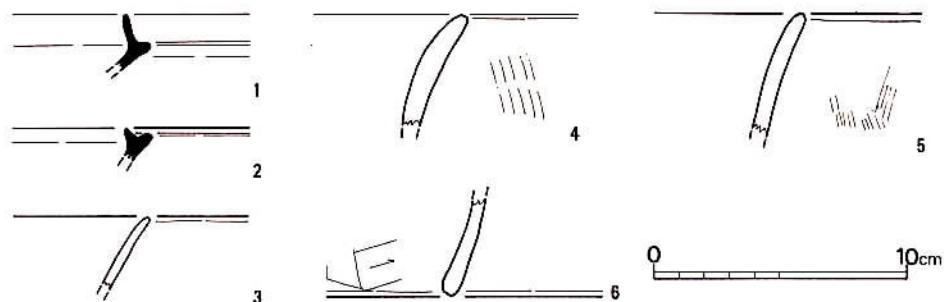


第128図 52号住居跡カマド実測図 (1/30)

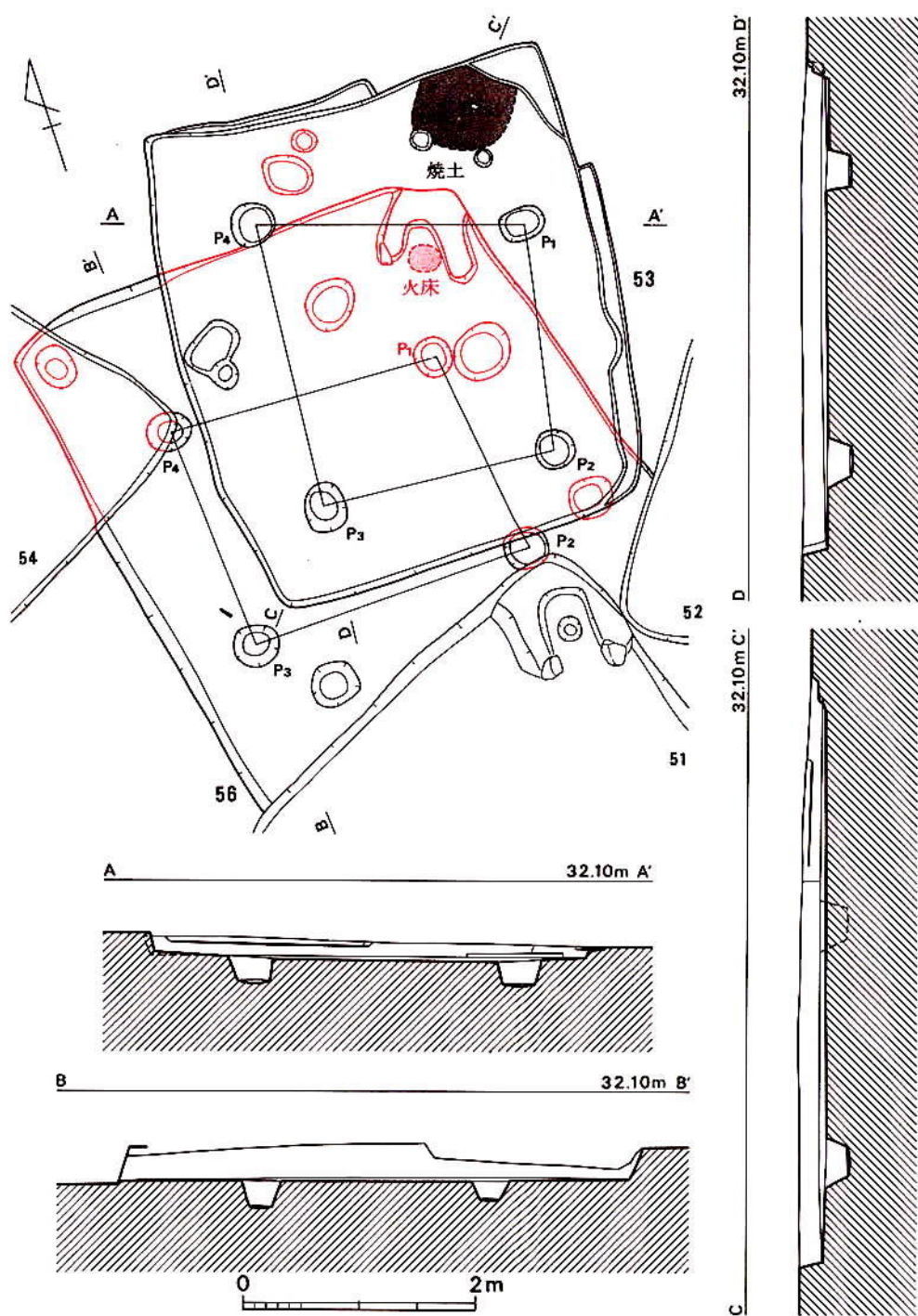
出土土器 (第129図)

須恵器 (1・2) 1・2は坏身の口縁部小片で, 2のたちあがりは弱い。

土師器 (3~6) 3は口縁部小片であるが, 直線的に開き, 坏になるか。4~6は甎小片で, 4・5が口縁部, 6が底部である。口縁部ヨコナデ, 外面ハケ目, 内面ヘラケズリ調整による。土器の出土量が僅かで時期決定に事欠くが, 周囲の住居跡は8世紀代であり, 同時期か。



第129図 52号住居跡出土土器実測図 (1/3)



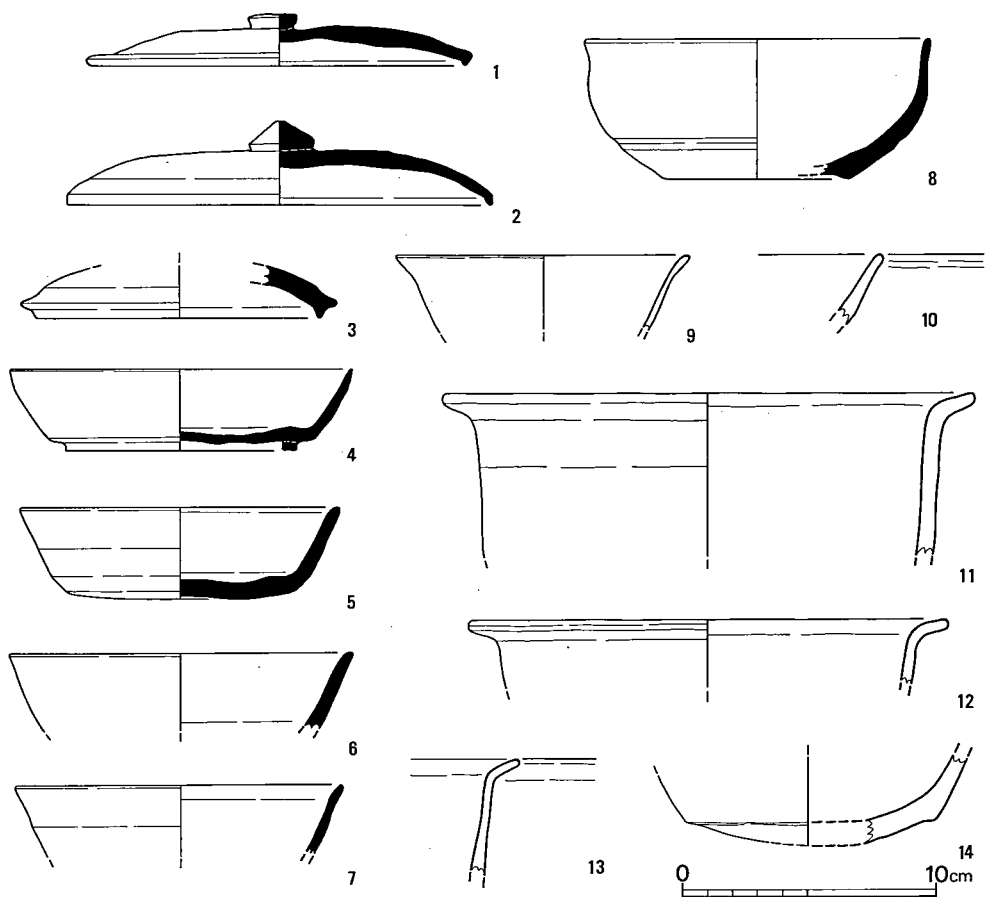
第 130 图 53・56号住居跡实测图 (1/60)

53号住居跡 (図版41・42-1, 第130図)

51号住居跡のすぐ北側に位置し, 56号住居跡を切る。平面形は隅丸長方形を呈し, 北壁長3.46m, 西壁長4.14mを測る。当住居跡も削平が著しく, 壁高は北壁側で13cmを留める程度であった。支柱穴はP1~4の4本で, 径34~42cm, 深さ20cm前後を測る。柱間はP1-2間1.94m, P1-4間2.28mの間隔を有する。埋土中から石製紡錘車・製塩土器が出土した。

カマド (図版42-2, 第130図)

住居壁の北東側コーナー部に付設されるカマドで, 遺存状態は極めて悪く焼土混じりの褐色土(網かけ部分)を残すのみであるが, 住居壁を掘り込んでいないことから作り付け型になろう。また, 袖部の先端にあたる箇所から径16~19cm, 深さ10cm前後の小ピットを検出しており, 袖石の抜き跡になるか。支脚については不明。



第131図 53号住居跡出土土器実測図 (1/3)

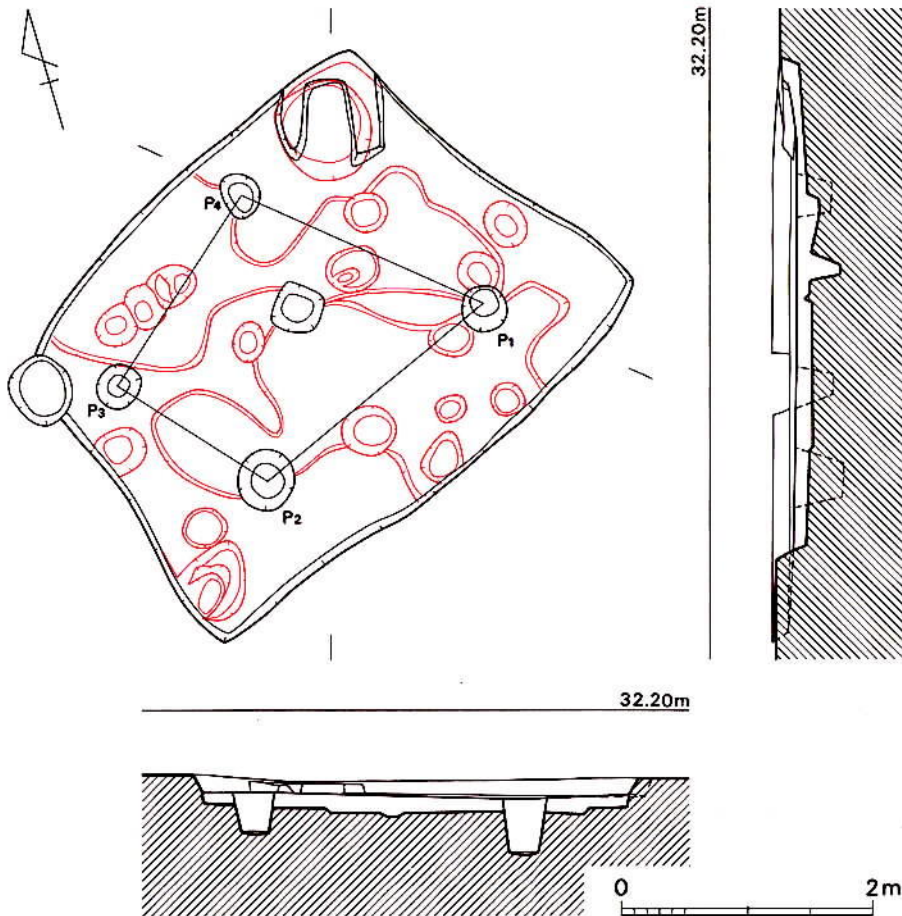
出土土器 (図版134-1, 第131図)

須恵器 (1~8) 1~3は坏蓋で、口唇部は小さく立つ。1は偏平な撮み、2は尖頭状の撮みを付す。3の口径はもう少し大きくなるか。4~7は坏身で、4は低い高台を貼付する。5は高台を有しないもの。6・7は口縁部破片。8は椀で、体部下位にヘラ沈線を巡らす。

土師器 (9~14) 9・10は坏で、9の口縁部は外反する。11~14は甕である。11~13は口縁部破片で、口唇部はL字状に屈曲する。14は底部破片である。

住居跡の時期は、8世紀中~後半であろう。

54号住居跡 (図版43-1, 第132図)



第132図 54号住居跡実測図 (1/60)

53号住居跡のすぐ西側に位置し、56号住居跡を切っている。平面形は台形状を呈し、北西壁長3.6m、北東壁長2.92m、南壁長4.32m、壁高0.16mを測る。床面で検出したP1～4を支柱穴とした。柱穴は径36～50cm、深さ32～44cmで、柱間はP1-2間2.24m、P1-4間2.12mを測る。埋土中から鉄製品が出土している。

カマド (図版43-2, 第133図)

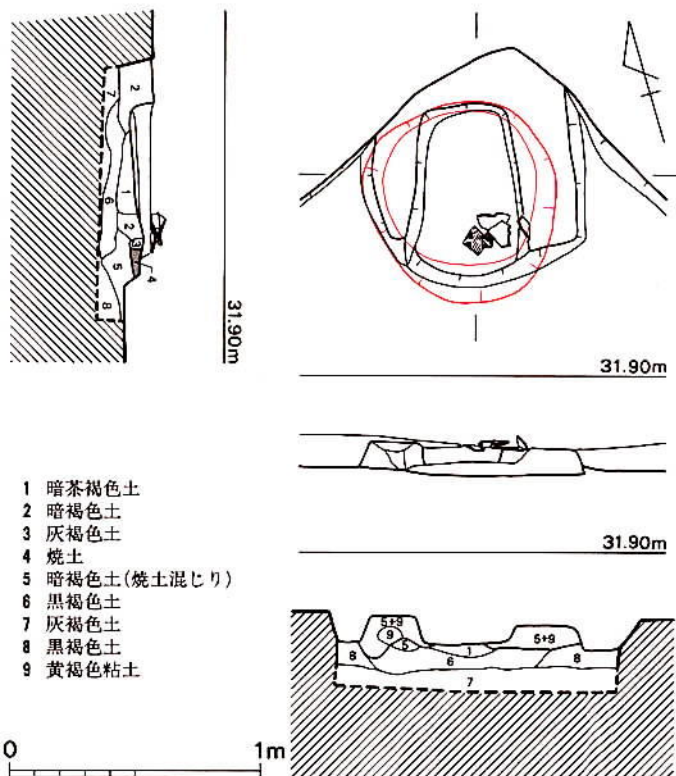
住居壁の北側コーナー部に付設する作り付け型のカマドである。遺存状態は悪く、袖部を留めるのみであった。

右袖は残存長64cm、基底部幅30cm、残高10cmで、左袖は残存長62cm、基底部幅21cm、残高11cmを測る。袖部の下層には、76×80cmの不整形形の掘り込みがある。

壁体・床面はさほど加熱を受けていない。支脚は不明。

浮いた状態で、土師器甕(第134図10)及び製塩土器が出土した。

出土土器 (図版134-2, 第134図)



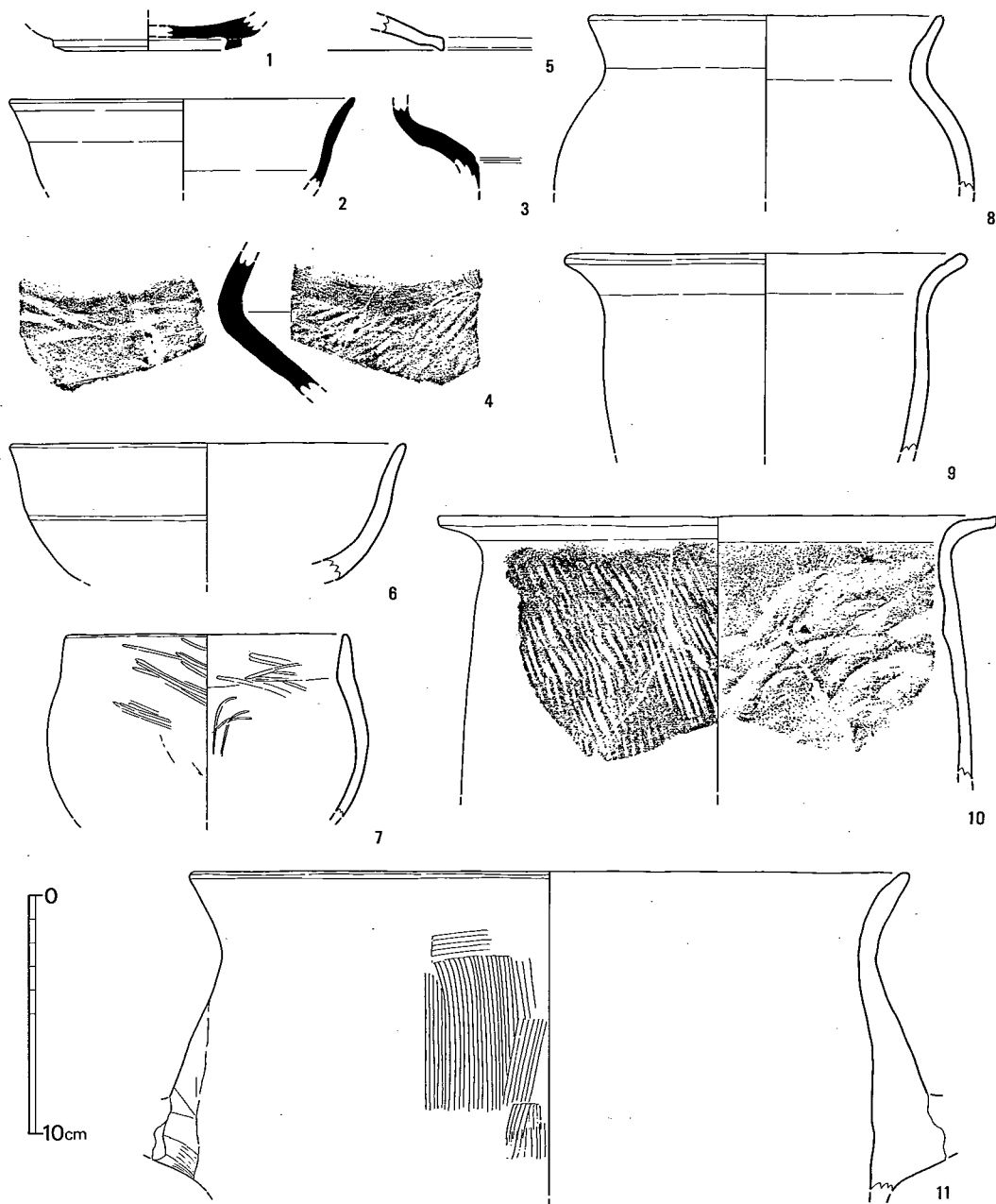
第133図 54号住居跡カマド実測図 (1/30)

須恵器 (1～4) 1は坏身の底部破片で、低めの高台を貼付する。2は口縁部破片で、坏もしくは椀になるか。3は肩部の破片で、ヘラ沈線を1条巡らす。甕になろう。4は甕の頸部破片で、外面平行タタキ目、内面円弧タタキ目による。

土師器 (5～11) 5は坏蓋の口縁部破片で、口唇部は小さく立つ。6は口縁部破片で、復原口径16.6cmを測る。内外面ともナデ調整により、椀になるか。7は頸部の締りが悪く、口縁部が直立するもの。内外面ともヘラミガキ調整による。

8は頸部の締りが良く、肩部が張っていることから甕とするより壺とした方が妥当であろう。9・10は甕で、9の口縁部は大きく開く。10は口縁部を水平近く外反させた器形で、長胴の甕

になろう。外面平行タタキ目、内面円弧タタキ目調整による。11は甑の口縁～取っ手部破片で、口縁部は外反する。外面ハケ目、内面は磨滅している。8世紀後半代か。



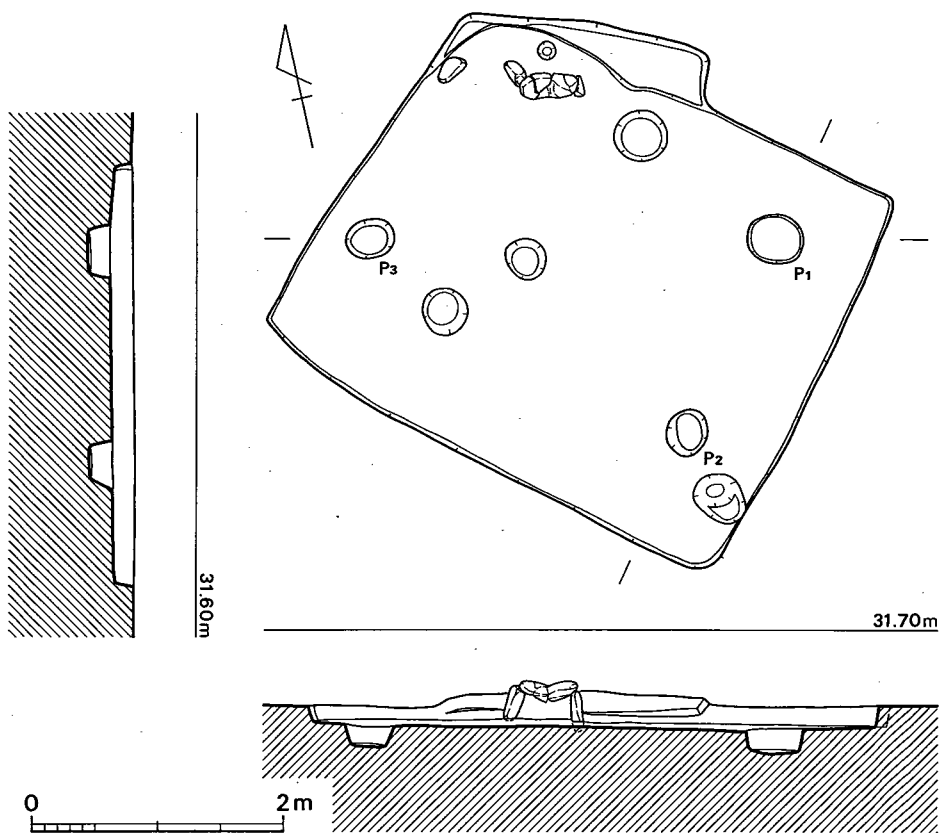
第134図 54号住居跡出土土器実測図 (1/3)

55号住居跡 (図版44-1, 第135図)

39号住居跡の2.4m北側に位置する。カマド天井石の存在から住居跡と判明した次第である。平面形は隅丸長方形を呈し、北東壁長3.5m、北西壁長2.96mを測る。住居跡の遺存状態は悪く、壁高はカマド側で16cmを測るにすぎない。カマドがコーナー部に位置するので、どのような柱配置を有していたか不明であるが、一応P1～3を主柱穴とした。柱穴は径35～45cm、深さ20cm前後を測り、柱間はP1-2間1.66m、P2-3間2.96mの間隔を有する。埋土中から鉄鍔・刀子が出土した。

カマド (図版44-2, 第136図)

当初、住居跡との認識が全くなく、ひび割れた石が露出していたのを疑問に思い、周囲を若干掘り下げたところ袖石が検出され、カマドの存在に気づいた。カマドは作り付け型で、北壁のコーナー部付近に付設される。袖部は掘り下げの際に誤って飛ばしてしまったが、袖石の存



第135図 55号住居跡実測図 (1/60)

在から35cm前後の長さを有していたと考えられる。袖石は長さ30cm程の河原石を立てており、その上に長さ47cm、幅20cmの天井石を懸架する。

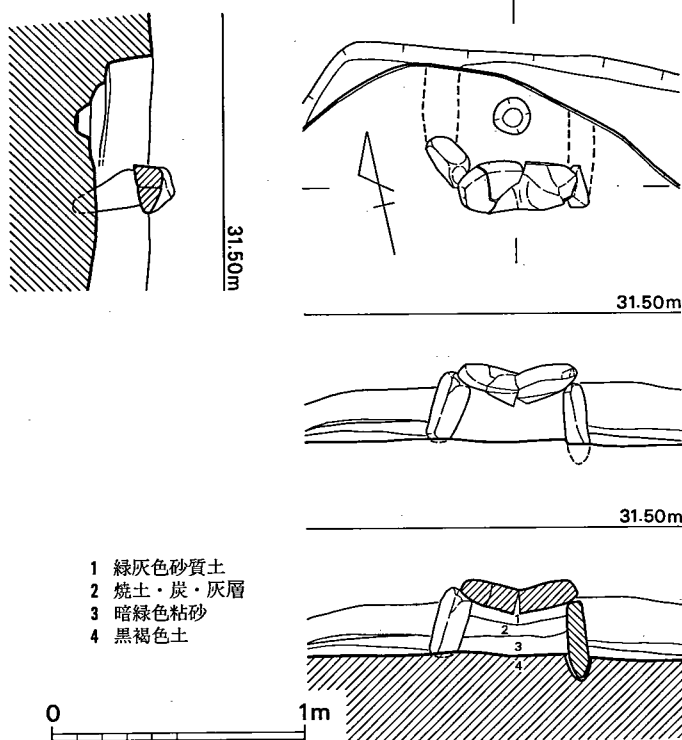
奥壁から8cmの箇所に小ピットがあり、支脚の抜き跡と考えられる。カマド内からの遺物の出土は皆無に近い。

出土土器(図版134-3, 第137図)

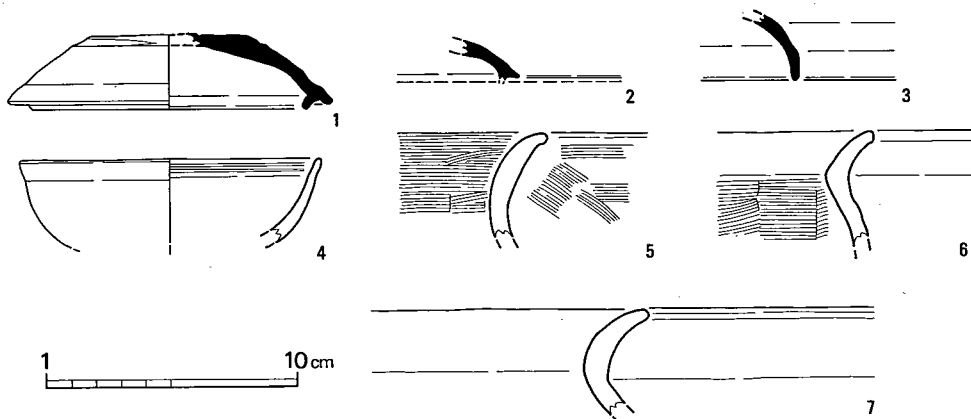
須恵器(1~3) 1~3は坏蓋で、1・2は口縁部内面にかえりを有する。1は器高2.9cm、口径12.8cmに復原した。3はかえりを有しない蓋で、口唇部は丸く納める。

土師器(4~7) 4は椀で、口唇部は僅かに屈曲する。口縁部内面はハケ状工具による

ナデ、体部はナデ調整による。5~7は甕の口縁部破片で、5は大きく外反する。口縁部は内外面ともハケ目調整による。6・7は「く」字形を呈する。6の内面にはハケ目調整がみられる。住居跡の時期は、7世紀前半~中頃であろう。



第136図 55号住居跡カマド実測図(1/30)



第137図 55号住居跡出土土器実測図(1/3)

56号住居跡 (図版45-1・2, 第130図)

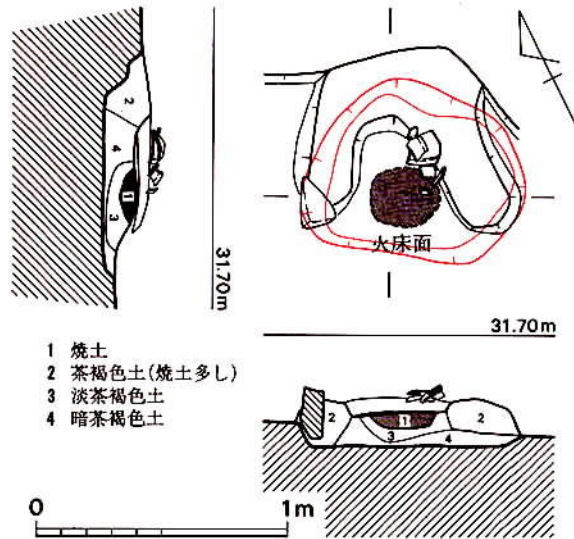
53号住居跡の下層から検出した住居跡で、51・52・54号住居跡に切られ、遺存状態は悪い。北壁長4.03m, 西壁の長さは4.42m確認した。主柱穴はP1～4の4本で、径33～40cm, 深さ16～22cmを測る。柱間はP1-2間1.93m, P1-4間2.28mの間隔を有する。床面から砥石, 埋土中から製塩土器片が出土した。

カマド (図版45-3, 第138図)

住居壁の北側コーナー部に付設される作り付け型のカマドである。53号住居跡に切られるため遺存状態は悪く、袖部・火床面を留める程度であった。

右袖は残存長77cm, 基底部幅26cm, 残高13cmで、左袖は残存長61cm, 基底部幅26cm, 残高10cmを測る。左袖部の先端には、袖石が半折した状態で原位置を保っていた。

壁体はそれほど加熱を受けていないが、床面には24×27cmの範囲で火床面がみられた。また、火床面から5cm浮いた状態で土師器甕(第139図5)が出土した。



第138図 56号住居跡カマド実測図 (1/30)

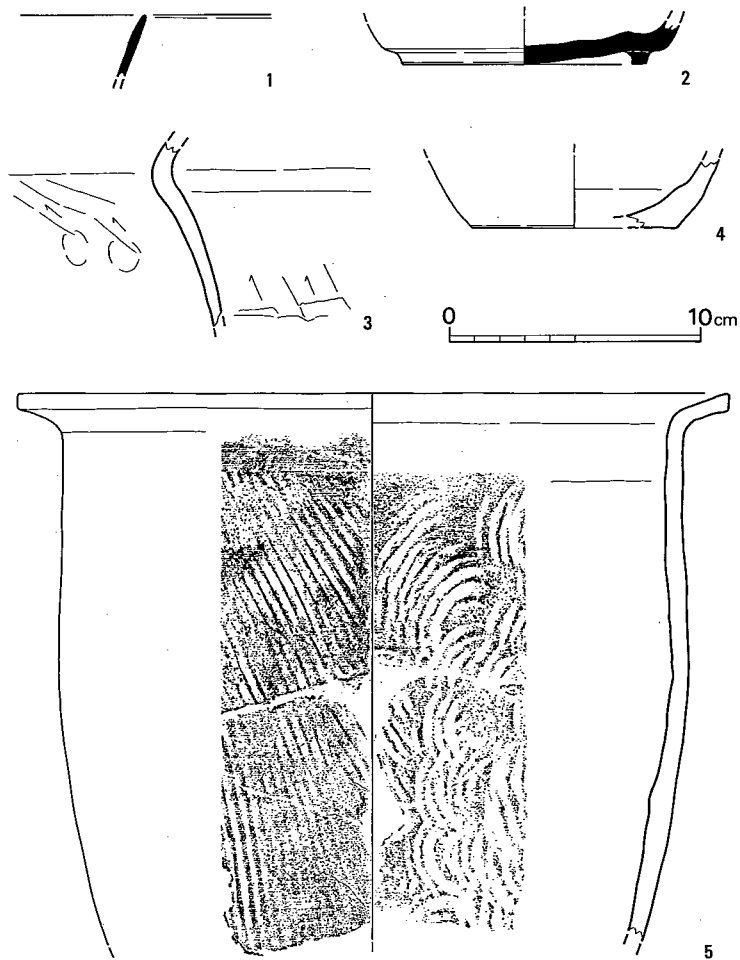
出土土器 (第139図)

須恵器 (1・2) 1は口縁部小片であり、口唇部は丸く納める。坏身の口縁部になるか。2は坏身の底部破片で、低い高台を貼付する。高台径は9.6cmに復原した。器面調整はナデによる。焼成はやや軟質で、色調は灰白色を呈する。

土師器 (3～5) 3は甕の頸部破片で、内外面ともヘラケズリ調整による。焼成は良好で、茶褐色を呈する。4は底部破片で、底径は8.0cmに復原した。内外面ナデ, 外底面ヘラケズリ調整による。胎土に角閃石・赤褐色粒を含む。色調は良好で、褐色を呈する。

5は口縁部を水平気味に広げた長胴甕で、残高21.8cm, 復原口径28cmを測る。口縁端部には7mm程の面を有する。良く締まった頸部から直線的に胴下半部に移行する。器面調整は口縁部ヨコナデ, 外面平行タタキ目, 内面円弧タタキ目調整による。胎土に2mm大の長石・石英・角閃石を含む。焼成は良好で、橙褐色を呈する。カマド内の出土である。

住居跡の時期は、8世紀前半代であろうか。



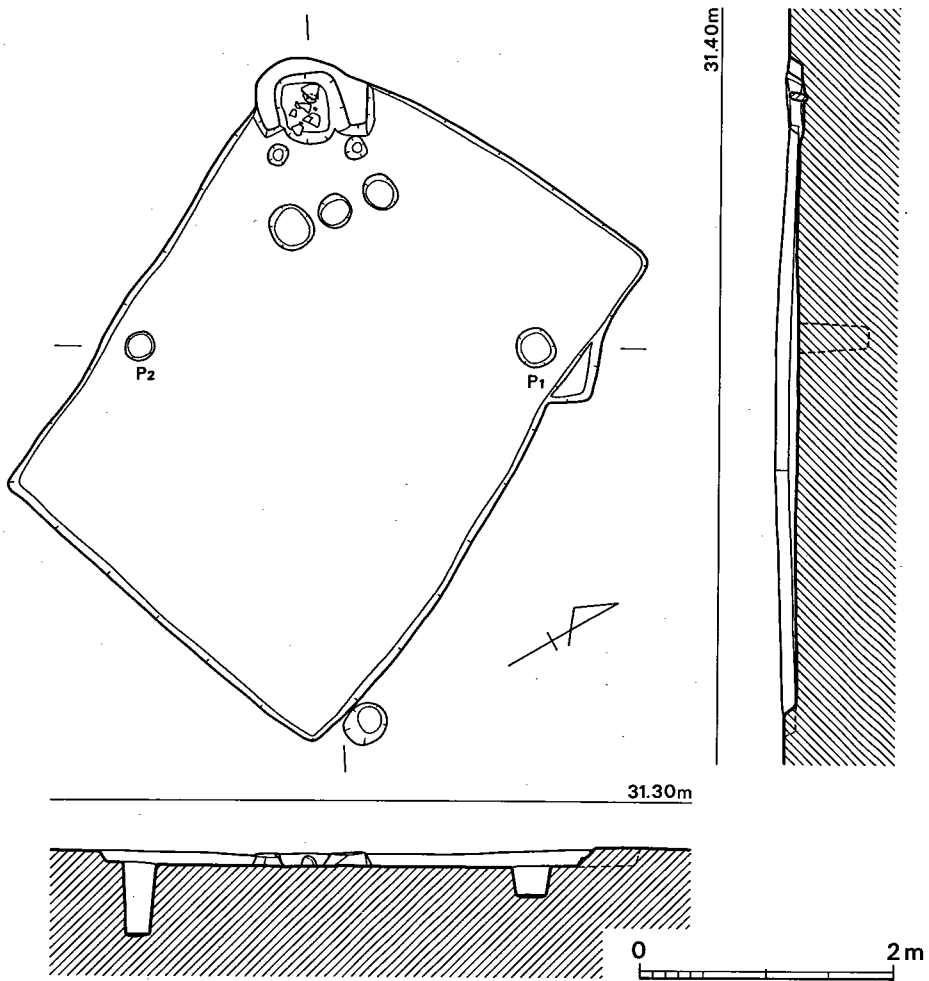
第 139 図 56号住居跡出土土器実測図 (1/3)

57号住居跡 (図版46・47-1, 第140図)

32号住居跡の5m西側に位置し、C群に属する。58・59号住居跡、14号溝を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し、北壁長3.3m、西壁長4.1mを測る。削平が著しく、壁高は北壁側で10cm遺存する程度である。床面にはピットが数個あるが、支柱穴は判然としない。遺物の出土も僅かであった。

カマド (図版47-2, 第141図)

西壁コーナー部を若干掘り込んだ突出型のカマドである。遺存状態は悪く、袖部・支脚を留める程度である。右袖は残存長43cm、基底部幅32cm、残高8cmで、左袖は残存長38cm、基底部



第140図 57号住居跡実測図 (1/60)

幅24cm, 残高9cmを測る。両袖部の先端には径16cm, 深さ10cm程の小ピットがあり, 袖石の抜き跡になろう。壁体はよく焼けており, 火床面は長軸38cm×短軸34cm, 深さ5cm掘り込んでいた。

カマド奥壁から9cmの箇所に支脚があり, 長さ15cmの河原石を立てていた。カマド内からは, 土師器甕の胴部破片が出土した。

出土土器 (第142図)

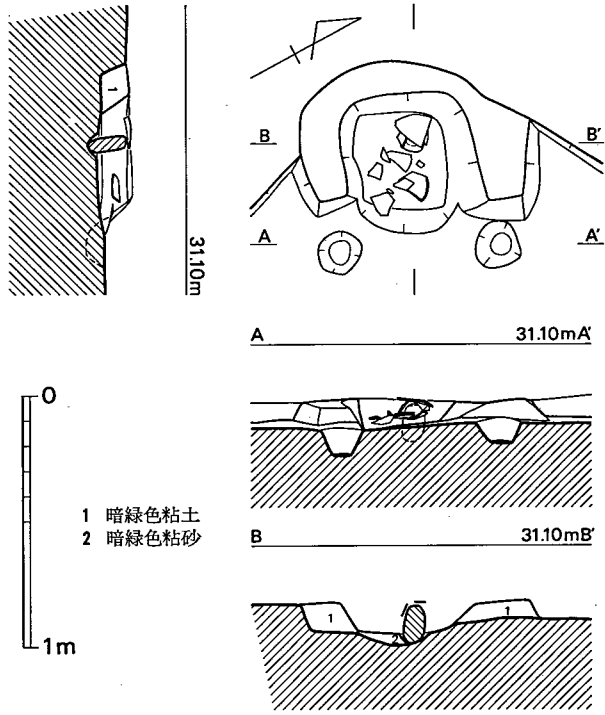
第142図1～4は, 57・58号住居跡検出時に出土した土器である。8が57号住居跡, 5～7は58号住居跡の出土である。

須恵器（1～4）1は坏身の口縁部破片で、たちあがりは内傾する。口縁部はナデ調整による。

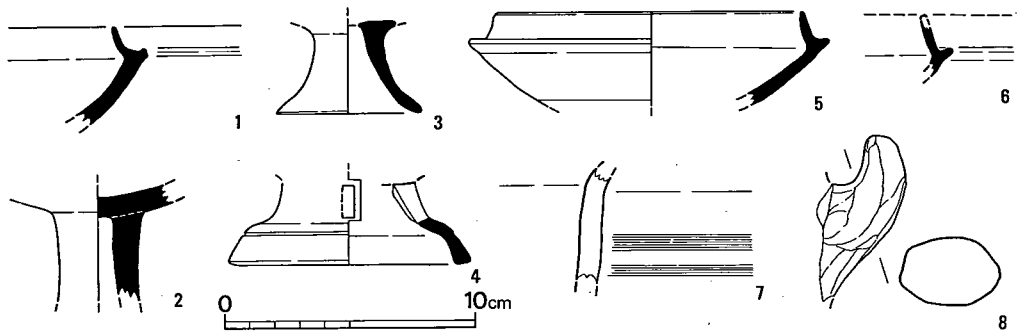
2～4は高坏の脚部破片で、2は脚柱部、3・4は脚裾部である。2はへら先でスカシ窓を切り込んだ後絞っている。焼成は堅緻で、色調は紫灰色を呈する。

3は残高3.6cm、脚径5.8cmを測る。脚裾はハ字形に開く。焼成は軟質で、暗灰色を呈する。4は復原脚径9.7cmを測り、長形状のスカシ窓を空ける。焼成は堅緻で、色調は灰色を呈する。

土師器（8）甑の取っ手部破片で、断面形は長円形を呈する。胎土に赤褐色粒を含み、黄灰色を呈する。



第141図 57号住居跡カマド実測図（1/30）



第142図 57・58号住居跡出土土器実測図（1/3）

58号住居跡（図版46・47-1，第144図）

57・60号住居跡に切られ，59号住居跡を切っている。平面形は長方形を呈し，北西壁長3.78m，北東壁長4.16mを測る。壁高は北東側で30cm遺存する程度である。主柱穴はP1～4の4本で，径32～46cm，深さ20～36cmを測る。柱間はP1-2間2.56m，P1-4間2.38mの間隔を有する。床面から刀子，埋土中から土器が出土した。

カマドは本来存在していたものと思われるが，焼土さえも遺存しない。

出土土器（第142図）

須恵器（5・6）5・6は坏身で，5は残高3.7cmを測る。たちあがりはやや内傾し，受け部の突出度も大きい。口縁部ヨコナデ，底部外面にはヘラケズリを一部残す。焼成は良好で，色調は灰色を呈する。6は口縁部小片で，たちあがりは内傾する。

土師器（7）7は甕の頸部破片で，外面カキ目，内面ナデ調整による。胎土に角閃石・雲母を含む。焼成は良好で，橙褐色を呈する。住居跡の時期は，6世紀末であろう。

59号住居跡（図版46・47-1，第144図）

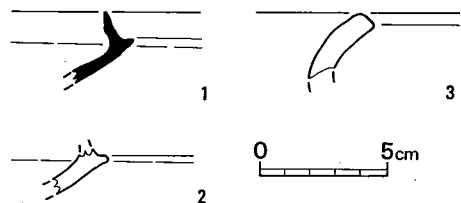
57・58・60号住居跡に切られ，70号住居跡を切っている。平面形は方形を呈し，北西壁長4.66m，南西壁長4.9mを測る大型の住居跡である。壁高は南西側で16cm遺存する。主柱穴はP1～4の4本で，径26～40cm，深さ13～25cmを測る。柱間はP1-2間2.9m，P1-4間3.2mの間隔を有する。埋土中から鉄鏝が出土した。

当住居跡も，カマドは本来存在していたものと思われるが，遺存していなかった。

出土土器（第143図）

須恵器（1）1は坏身の口縁部破片で，たちあがりはやや内傾する。口唇端部はシャープである。焼成は堅緻で，色調は灰色を呈する。

土師器（2・3）2は坏身の口縁部破片で，器壁は厚い。胎土に赤褐色粒を含む。3は甕の口縁部小破片で，端部は面を有する。

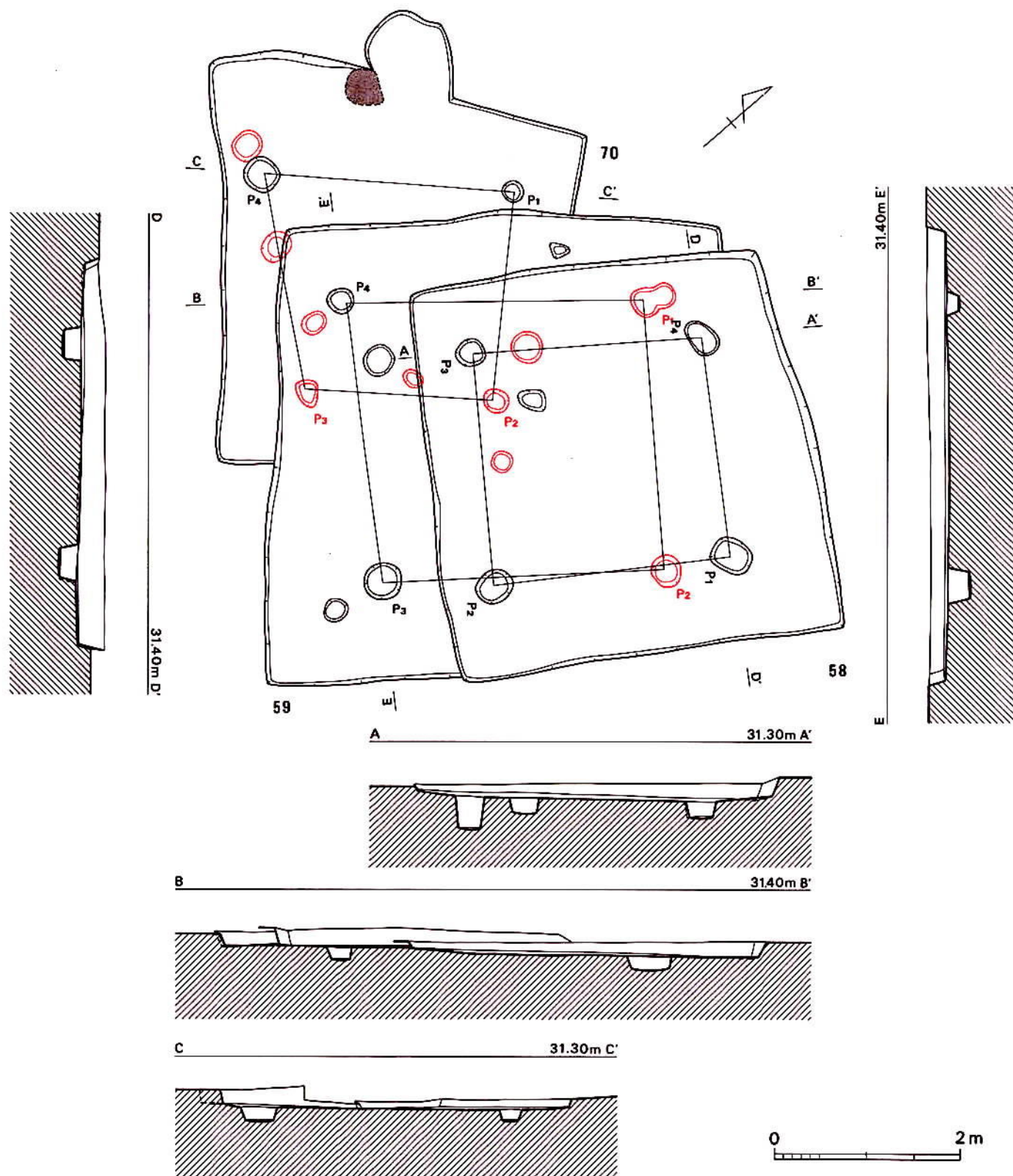


第143図 59号住居跡出土土器実測図（1/3）

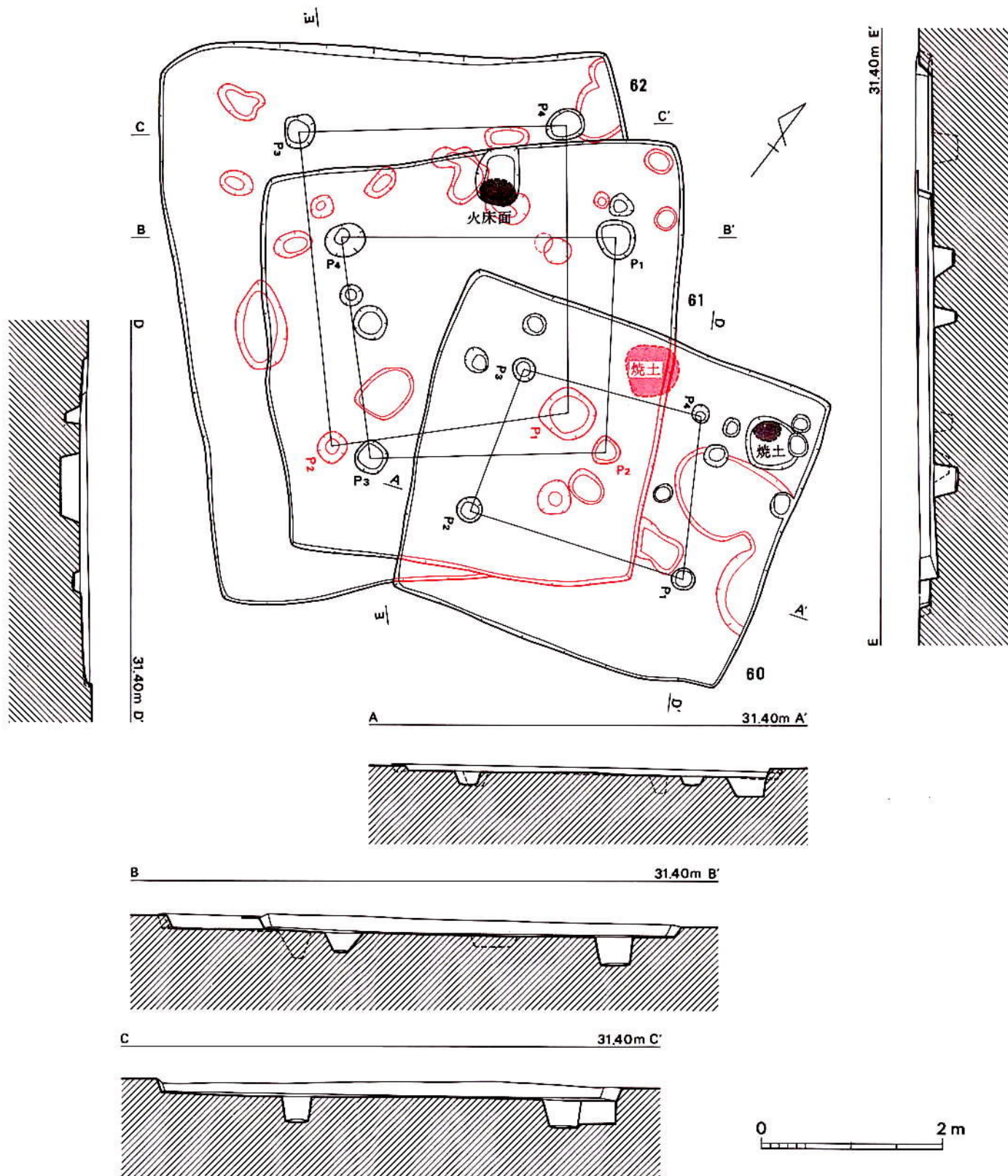
60号住居跡（図版48-2，第145図）

57号住居跡の2.5m北側に位置し，C群に属する。58・59・61・62・70号住居跡を切っている。平面形は長方形を呈し，東壁長3.32m，北壁長4.13mを測る。削平が著しく，壁高は北側で5cm遺存する程度である。主柱穴はP1～4の4本で，径18～27cm，深さ10～14cmを測る。柱間はP1-2間2.43m，P2-3間1.65mの間隔を有する。

カマド本体は遺存しないものの北側コーナー付近に焼土があり，或はコーナー部に付設され



第 144 图 58·59·70号住居跡実測图 (1/60)



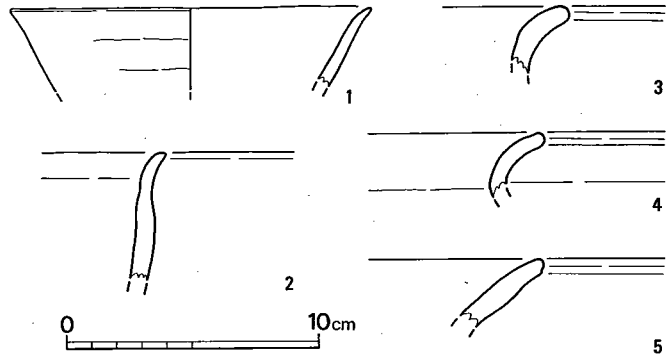
第 145 图 60~62号住居跡実测图 (1/60)

ていた可能性を有する。遺物は埋土中から土器が出土したのみである。

出土土器 (第146図)

土師器 (1~5) 1は口縁部小片で、口唇部はシャープである。碗になるか。2も口縁部破片で、直線的に外反する。

3~5は甕の口縁部小片で、3・4は大きく外反するもの。5は斜め方向に直線的に外反するもの。



第146図 60号住居跡出土土器実測図 (1/3)

61号住居跡 (図版48-1, 第145図)

C群に属する。60号住居跡に切られ、62号住居跡を切っている。平面形は不整形を呈し、北西壁長4.43m、北東壁長4.72mを測る。壁高は北西側で20cm遺存する程度である。主柱穴はP1~4の4本で、径33~40cm、深さ25cm前後を測る。柱間はP1-2間2.33m、P1-4間2.97mの間隔を有する。

カマド (第147図)

カマド本体は遺存せず、北西壁中央に掘り込み・焼土といったカマドの残骸がある。

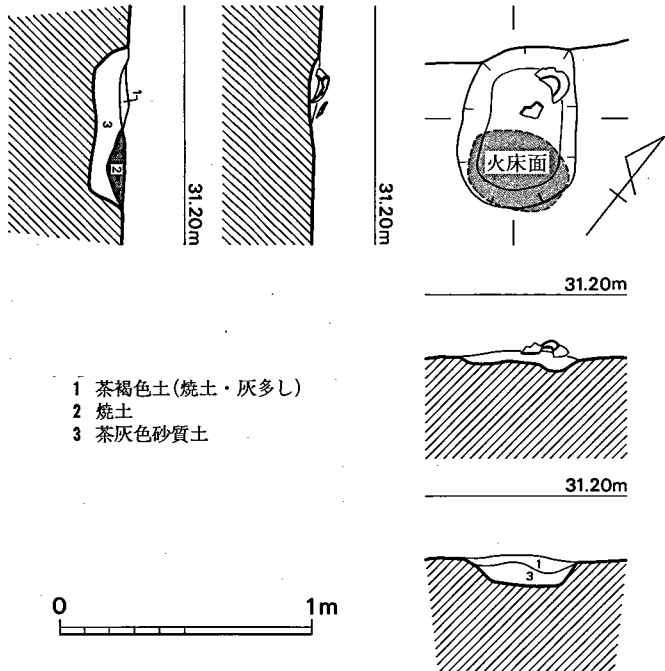
下層の掘り込みは隅丸長方形を呈し、長軸65cm、短軸46cmを測る。掘り込みの手前に30×40cmの火床面がみられる。

埋土中から須恵器坏身が出土した。

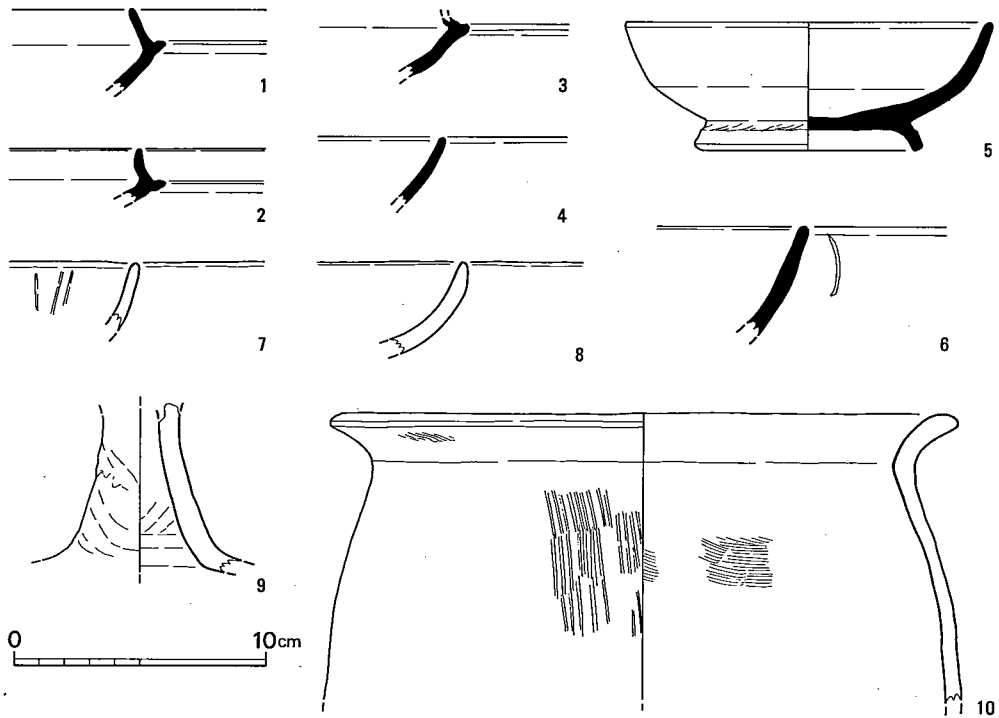
出土土器 (図版134-4, 第148図)

須恵器 (1~6) 1~3は坏身の口縁部破片で、たちあがりは内傾する。62号住居跡の混入品であろう。

4・6は口縁部破片で、坏



第147図 61号住居跡カマド実測図 (1/30)



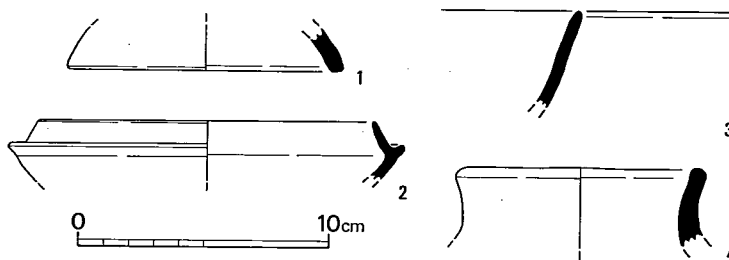
第148図 61号住居跡出土土器実測図 (1/3)

身になるか。5は高台を有する坏身で、器高5.0cm、口径14.4cm、高台径8.2cmを測る。口縁部は丸く、緩やかに底部に移行する。体部はナデ調整による。

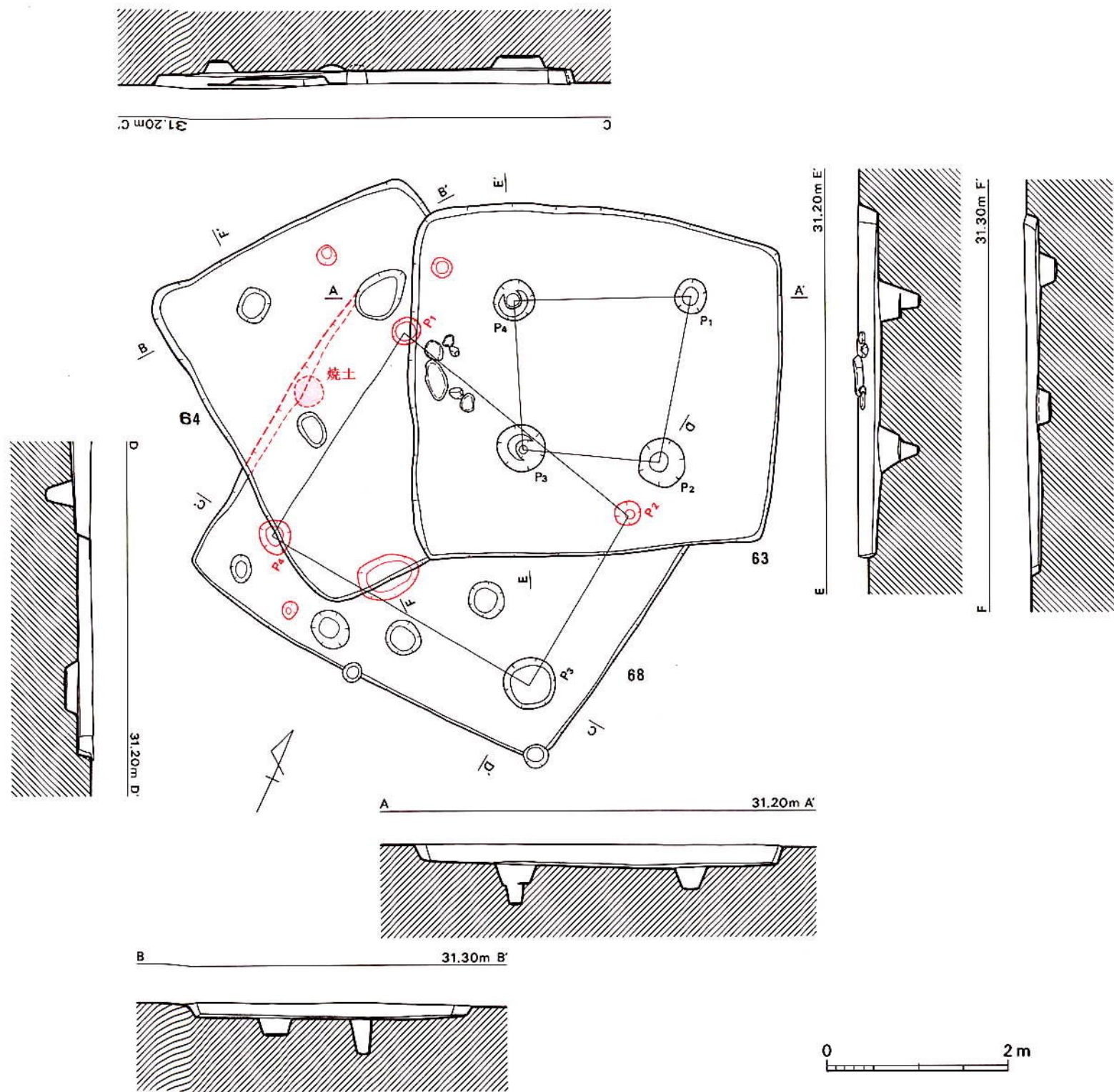
土師器(7~10) 7・8は坏で、口唇部は丸く納める。9は高坏の脚部破片で、内外面にシボリ痕が見られる。10は甕の口縁部破片で、口縁部は大きく外反する。復原口径は23.8cm。

62号住居跡 (図版48-1, 第145図)

60・61号住居跡に切られて、C群の中央に位置する。平面形は長方形を呈し、北西壁長4.8m、



第149図 62号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第 150 图 63·64·68号住居跡実測図 (1/60)

南西壁長5.82mを測る大型の住居跡である。壁高は北西壁側で16cm遺存する程度である。支柱穴はP1～4の4本で、径32～54cm、深さ25cm前後を測る。柱間はP1－2間2.58m、P1－4間3.13mの間隔を有する。遺物は埋土中から土器が出土したのみ。

出土土器 (第149図)

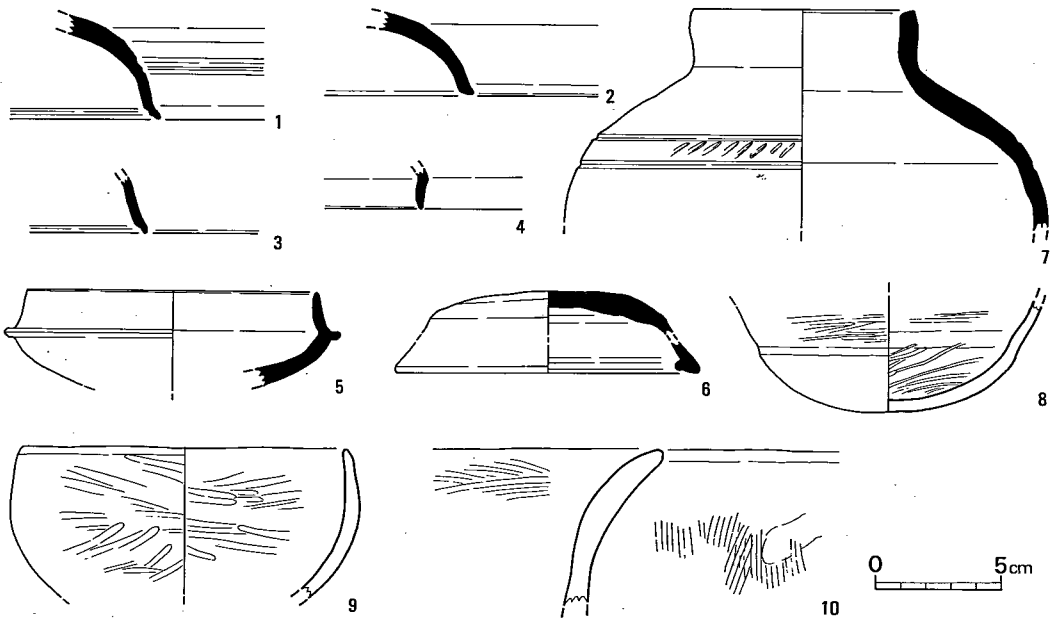
須恵器 (1～4) 1は口縁部破片で、口唇部は3mm程の面を有する。短頸壺の蓋になろう。2は坏身の口縁部破片で、たちあがりは内傾する。口縁部はナデ調整による。3は口縁部小片で、坏になるか。4は直口壺の口縁部破片で、口径は9.2cmに復原した。口唇部は若干肥厚する。住居跡の時期は、6世紀末であろう。

63号住居跡 (図版49, 第150図)

C群に属する。28号住居跡床面の30cm下位で検出した。64・68号住居跡を切っている。平面形は隅丸方形を呈し、北東壁長3.81m、北西壁長3.82mを測る。壁高は北西側で18cm遺存する程度である。支柱穴はP1～4の4本で、掘方は径38～52cm、深さ24～45cmを測る。柱間はP1－2間1.87m、P1－4間1.96mの間隔を有する。埋土中より土器が出土した。

また、北西壁側に河原石があり、カマドに関連するかと思って掘り下げたが、焼けておらず、無関係と判明した。カマドは本来存在していたものと思われるが、遺存しない。

出土土器 (図版134-5, 第151図)



第151図 63号住居跡出土土器実測図 (1/3)

須恵器（1～7） 1～4は坏蓋の口縁部破片で、1・3は口唇部内面に段を有する。また、1は外面に2条のへら沈線を施文する。2は内面に稜を有する。6は口縁部内面にかえりを有する坏蓋で、口縁部と天井部は接合しないものの同一固体として実測した。焼成は軟質で、緑灰色を呈する。

5は坏身で、残高3.7cm、口径は11.5cmに復原した。たちあがりは大きく内傾するが、受部の突出は小さい。7は短頸壺で、口縁部は短く直立する。肩部にへら沈線を2条施文し、その間をへらによる刺突文で充填する。焼成は堅緻で、色調は暗青灰色を呈する。

土師器（8～10） 8は鉢で、口縁部は大きく開こう。内外面とも細かいへらミガキを施す。胎土は精良で、色調は暗赤橙色を呈する。9は椀で、底部を欠くものの丸底を呈しよう。器面調整は内外面ともへらミガキによる。口径は12.6cmに復原した。10は甑の口縁部破片で、口縁部は大きく外反する。内面には炭化物の付着がみられる。

遺物が混在しており、6は混入したものか。

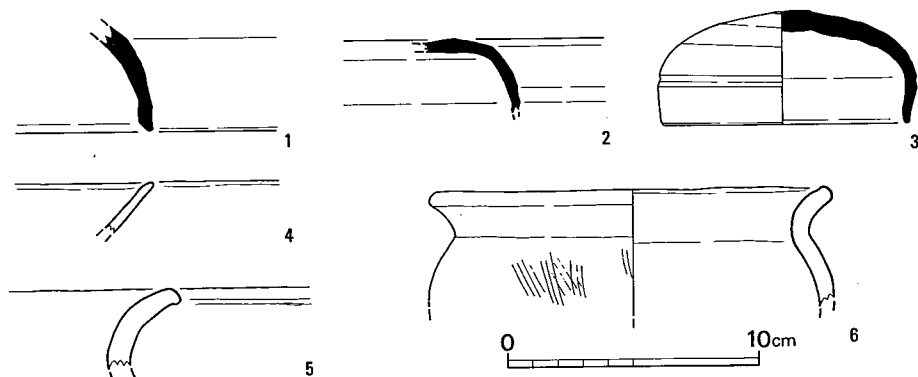
64号住居跡（図版49，第150図）

63号住居跡に切られ、68号住居跡を切っている。平面形は長方形を呈し、北西壁長3.06m、南西壁長3.96mを測る。壁高は北西側で16cmを留める。床面にピットが数個存在するものの支柱穴は判然としない。カマドも不明で、住居跡とすべきでないか。

出土土器（第152図）

須恵器（1～3） 1～2は坏蓋の口縁部小片で、1は口唇部内面に稜を有する。3は壁高4.5cm、復原口径9.8cmを測り、短頸壺の蓋になろう。天井部との境にへら沈線を1条巡らす。焼成は堅緻で、色調は暗青灰色を呈する。

土師器（4～6） 4は坏の口縁部小片で、口唇部は丸く納める。5・6は甕で、5は口縁部小片。6は口縁～肩部破片で、口径は18.0cmに復原した。



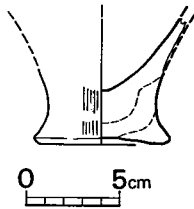
第152図 64号住居跡出土土器実測図（1/3）

65号住居跡 (第153図)

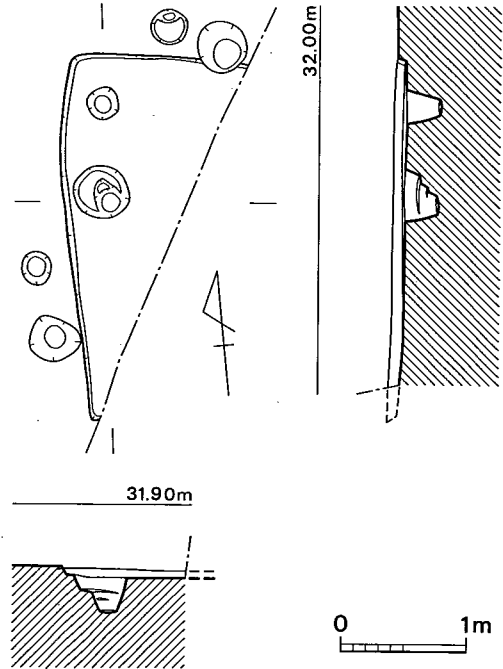
調査区の東端部に位置し、D群に属する。大半が調査区外に伸展するため規模・柱穴など詳細は不明。西壁長2.9mを測る。

出土土器 (第154図)

弥生土器 甕の底部破片で、復原底径は6.8cmを測る。上底で、端部は大きく張出す。焼成は良好で、暗橙色を呈する。他に、須恵器・土師器片が出土したが図示不可能。



第154図 65号住居跡出土土器
実測図 (1/4)



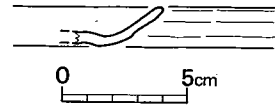
第153図 65号住居跡実測図 (1/60)

66号住居跡 (図版50-1, 第156図)

調査区の東端部に位置し、D群に属する。17号建物跡と切合っているが、前後関係は不明。削平が著しく、南西壁を残す程度である。南西壁長5.32m、壁高は僅か3cm残る。主柱穴はP1-4の4本で、掘方は径56~82cm、深さ30~42cmを測る。柱間はP1-2間3.22m, P1-4間3.15mの間隔を有する。カマドは本来存在していたものと思われるが、焼土さえも遺存しない。埋土中から須恵器・土師器・弥生土器が出土した。

出土土器 (第155図)

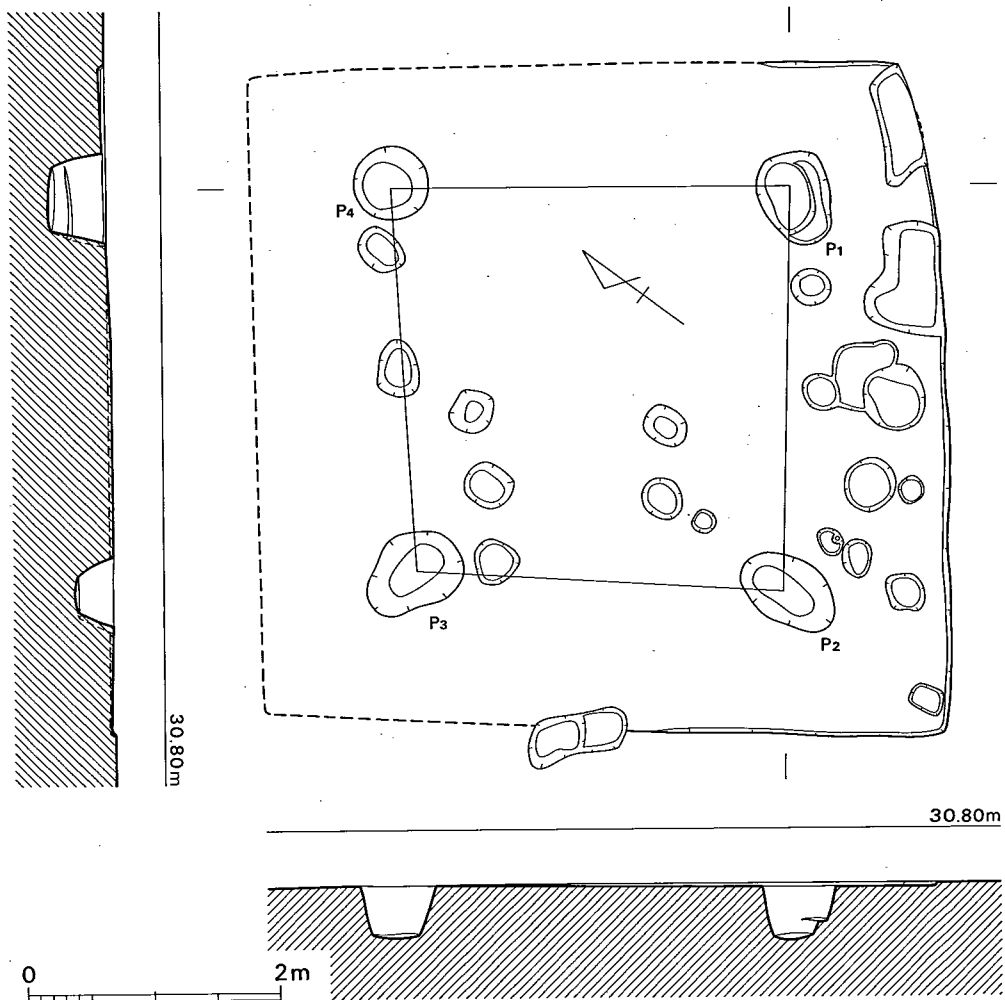
土師器 小皿の口縁部小片で、口唇部は丸く納める。器面調整はナデによる。胎土は精良である。柱穴のあり方からして当住居跡に伴うものでなく、混入品と考えたい。



第155図 66号住居跡出土土器
実測図 (1/3)

67号住居跡 (図版50-2, 第157図)

C群に属し、27・31号住居跡床面の20cm下位で検出した。72号住居跡に北壁コーナーを切られる。平面形は方形を呈し、西壁長4.73m、南壁長4.4mを測る。主柱穴は4本であろうが、P3を検出し得ていない。柱穴は径32~38cm、深さ18~29cmを測る。カマドは遺存しない。

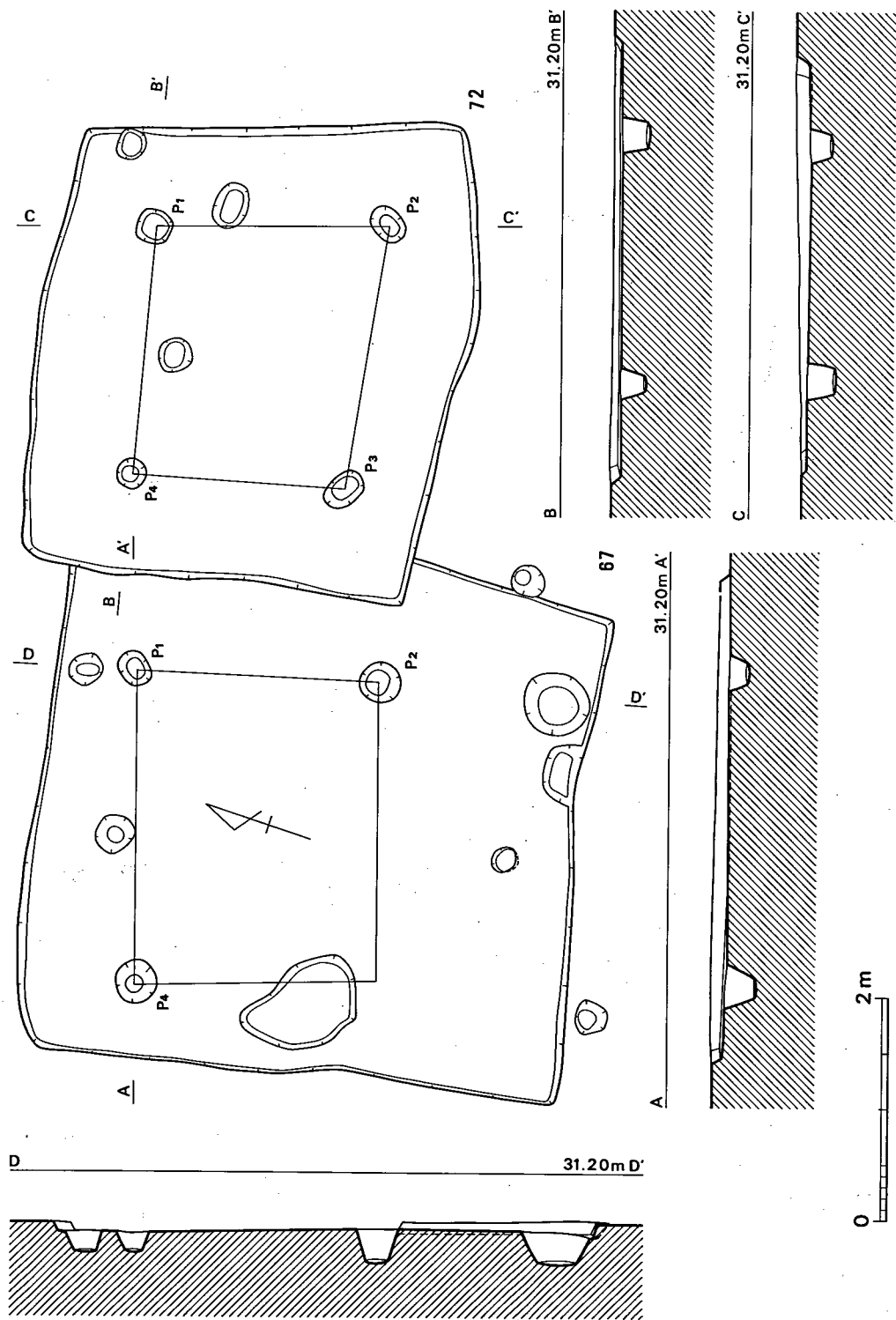


第156図 66号住居跡実測図 (1/60)

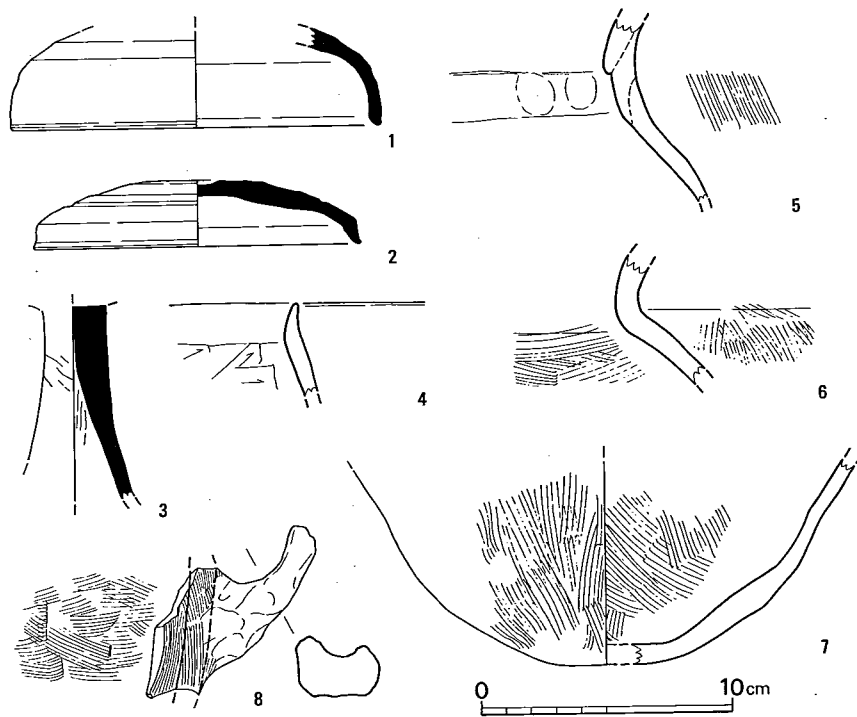
出土土器 (図版134-6, 第158図)

須恵器 (1~3) 1・2は坏蓋で, 1は口唇部内面に稜を有する。口唇部は肥厚し, 天井部との境にヘラ沈線を1条巡らす。口径は14.6cmに復原した。2の口唇部は小さく突出する。天井部は低く, 回転ヘラケズリ調整による。器高2.6cm, 口径12.6cmに復原した。3は高坏の脚柱部破片で, 絞り痕がみられる。

土師器 (4~8) 4~7は甕である。4は口縁部破片で, 口縁部は直立する。5・6は頸部破片である。7は底部破片で, 丸底を呈する。8は甑の取っ手部破片で, 取っ手の中央部は窪む。内外面ともハケ目調整による。



第 157 图 67·72号住居跡実測図 (1/60)



第158図 67号住居跡出土土器実測図 (1/3)

68号住居跡 (図版49, 第150図)

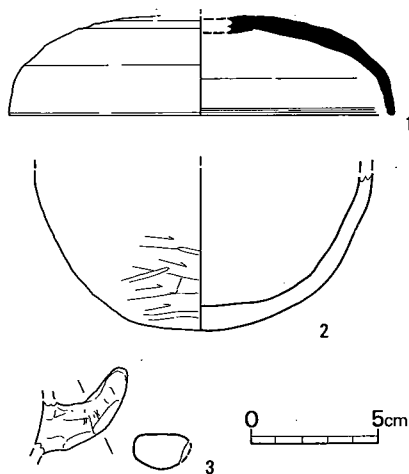
C群に属し、28号住居跡床面の30cm下位で検出した。63・64号住居跡に大半を切られ、南壁を残す程度である。南壁長4.52m、壁高は0.16m留める。主柱穴はP1～4で、径26～55cm、深さ10cm前後を測る。柱間はP1～4間3.2m、P3～4間2.7mの間隔を有する。埋土中から土器が出土したのみ。

カマド本体は遺存しないが、64号住居跡床面下位で検出した焼土がカマドの火床面になろう。

出土土器 (第159図)

須恵器 (1) 坏蓋で、天井は3.9cmと低い。口唇部内面にヘラ沈線を施す。焼成は良好で、灰白色を呈する。口縁部ナデ、天井部回転ヘラケズリ調整。

土師器 (2・3) 2は小型甕の底部破片で、外面へ

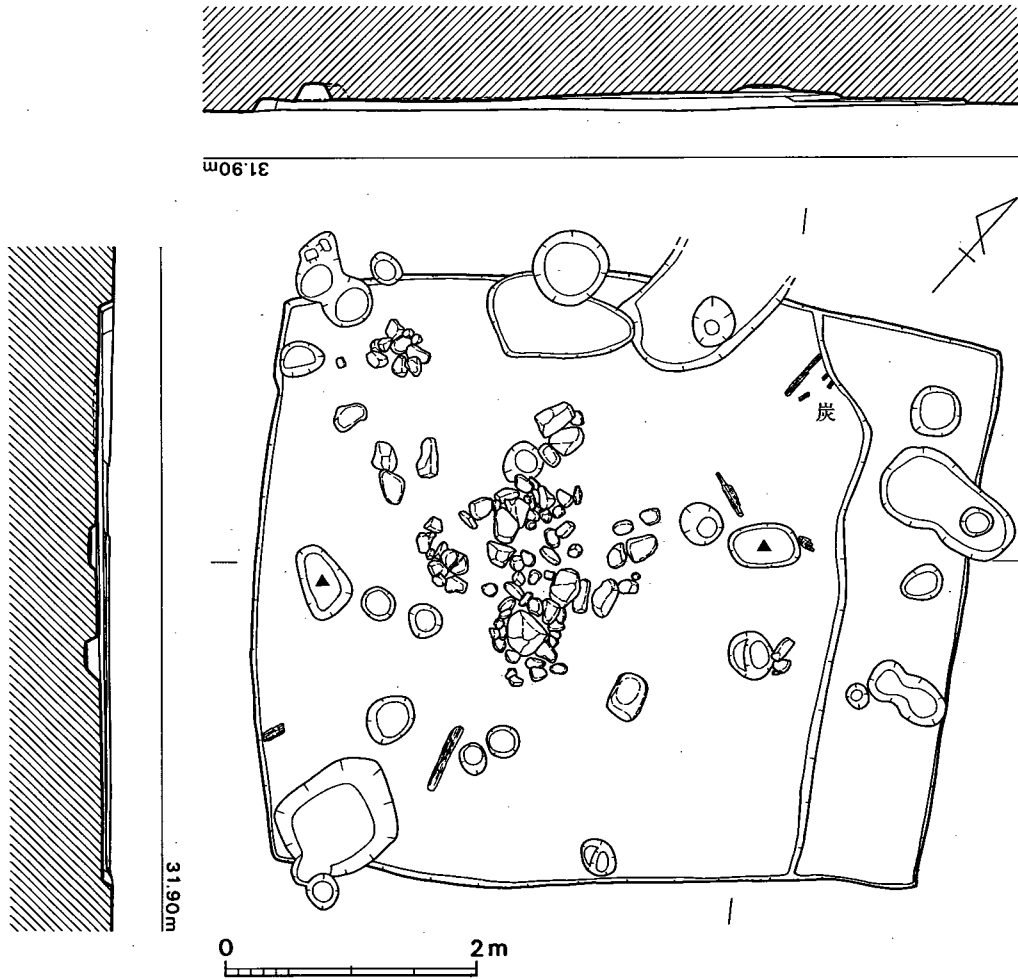


第159図 68号住居跡出土土器実測図 (1/3)

ラケズリ，内面ナデ調整による。内面には炭化物が付着している。3は取っ手部破片であるが，細長いことから取っ手付き椀になるか。

69号住居跡（図版51-1，第160図）

調査区の東端部に位置し，D群に属する。34号建物跡に切られる。平面形は長方形を呈し，北東壁長4.32m，南東壁長5.12mを測る。削平が著しく，壁高は南東壁側で9cm遺存する程度である。支柱穴は2本で（▲印），長径60cm前後，深さ5～14cmを測る。柱間は3.55mの間隔を有する。焼失家屋で，床面には炭化材・円礫が散在する。また，北東壁側には幅90cm，高さ5cmのベット状遺構を付設する。炉跡は不詳。円礫群の中から碇石が出土した。

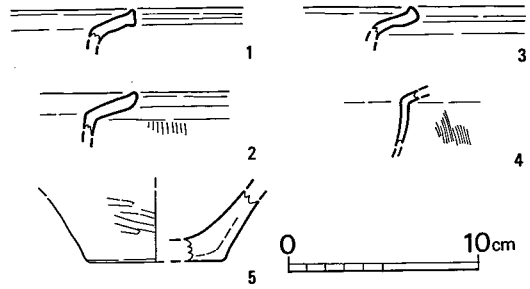


第160図 69号住居跡実測図 (1/60)

出土土器 (第161図)

弥生土器 (1~5) 1~3は甕で、口縁部は逆L字状に屈曲し、1・3の口縁端部は上方に跳ね上げる。4は頸部から丸味を帯びて胴部に移行することから鉢になるか。

5は平底の底部破片で、復原底径は7.2cmを測る。外面雑なヘラミガキ、内面ナデ調整による。



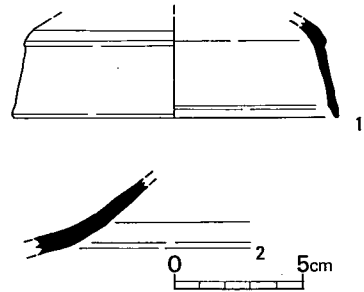
第161図 69号住居跡出土土器実測図 (1/4)

70号住居跡 (図版52-1, 第144図)

58~62号住居跡に大半を切られるため詳細は不明。南西壁長4.32m, 北東壁長4.13mを測り、平面形は方形を呈しよう。削平が著しく、壁高は南西側で15cm遺存する程度。主柱穴はP1~4の4本で、径24~40cm, 深さ15cm前後を測る。柱間はP1-2間2.26m, P1-4間2.7mの間隔を有する。カマド本体は遺存しないものの北東壁側に焼土があり、火床面と考えられる。埋土中から土器が出土した。

出土土器 (第162図)

須恵器 (1・2) 1は坏蓋で、復原口径は12.9cmを測る。口唇部内面に稜を有し、天井部との境には明瞭な段を残す。口縁部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ調整による。焼成は堅緻で、色調は灰青色を呈する。2は坏身の底部小片で、外面はヘラケズリ、内面ナデ調整による。焼成は良好で、色調は青灰色を呈する。住居跡の時期は、6世紀前半であろう。



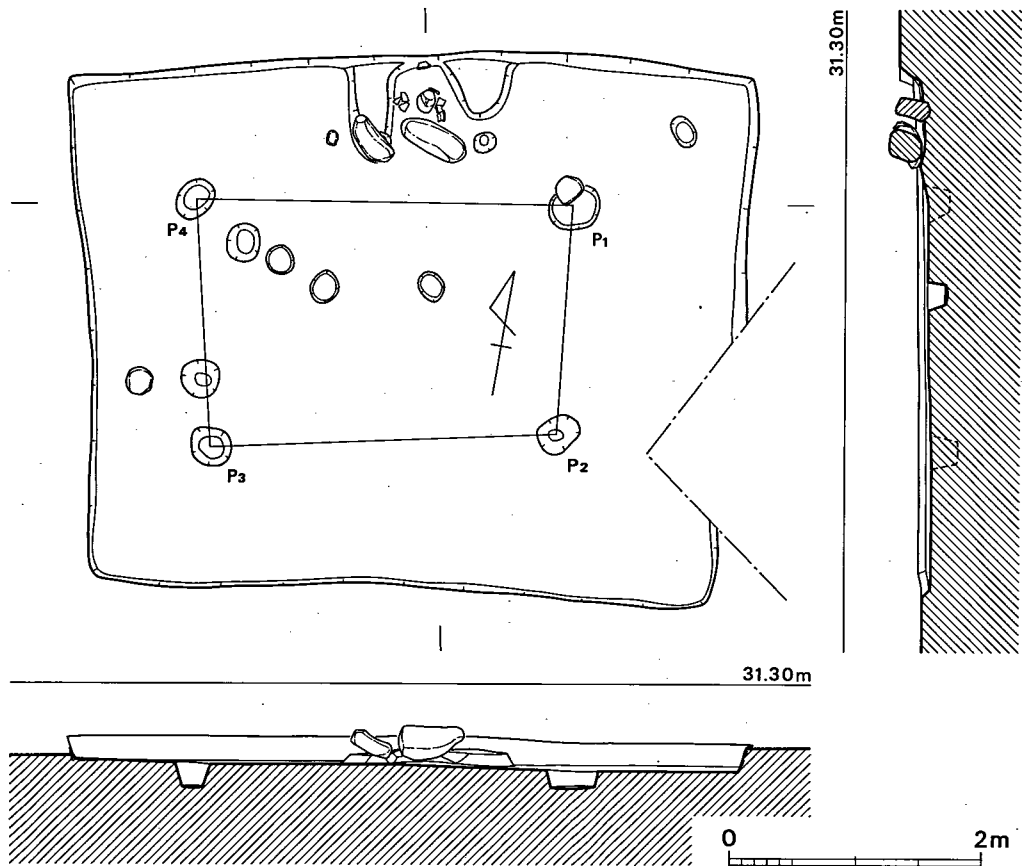
第162図 70号住居跡出土土器実測図 (1/3)

71号住居跡 (図版52-2, 第163図)

32号住居跡床面の40cm下位で検出した住居跡で、C群に属する。当住居跡を掘り下げたところ、さらに下層から20号竪穴を検出した。平面形は横位長方形を呈し、北壁長5.43m, 西壁長3.98mを測るやや大型の住居跡である。壁高は北壁側で24cm遺存する。主柱穴はP1~4の4本で、径34~40cm, 深さ20cm前後を測る。柱間はP1-2間1.84m, P1-4間2.98mの間隔を有する。埋土・カマド内から土器が、床面から鉄鏝が出土した。

カマド (図版52-3, 第164図)

作り付け型のカマドで、北壁のほぼ中央に付設する。遺存状態は悪く、袖部・袖石・支脚を



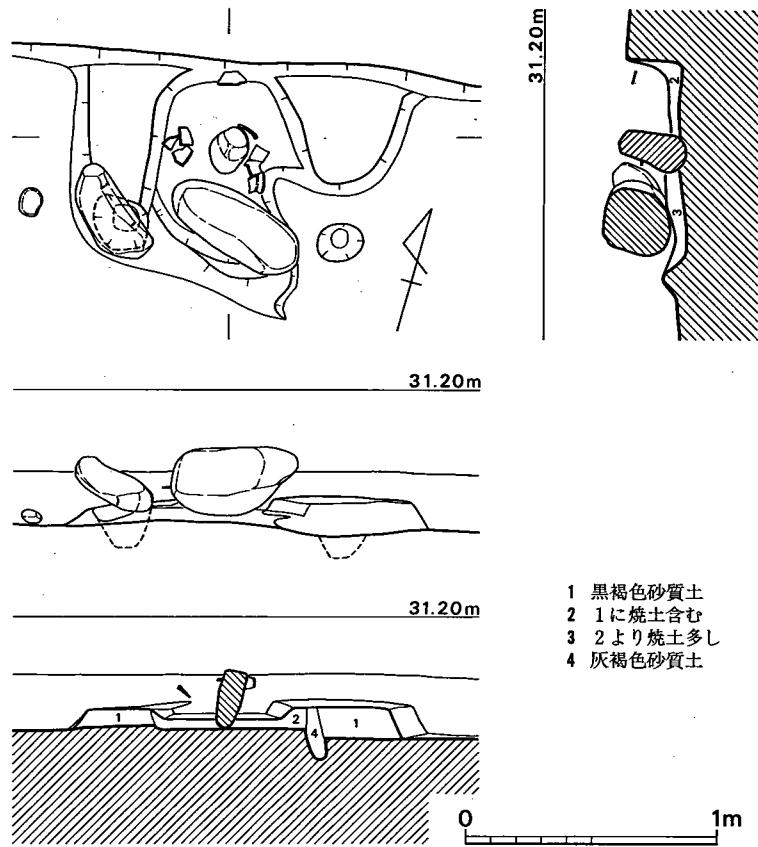
第163図 71号住居跡実測図 (1/60)

留める程度。右袖は残存長47cm, 基底部幅52cm, 残高10cmで, 左袖は残存長55cm, 基底部幅38cm, 残高9cmを測る。左袖の先端には, 長さ42cm, 幅20cmの袖石が倒れた状態で出土した。右袖の先端には, 袖石の抜き跡を留める。また, 袖部の間には長さ56cm, 幅26cmの石があり, 天井石が落ちたものであろう。支脚はカマド奥壁から20cmの箇所であり, 長さ28cmの河原石を立てている。壁体・火床面はよく焼けていた。埋土中からは土器が出土したのみ。

出土土器 (第165図)

須恵器 (1~6) 1は坏蓋の口縁部小片で, 口唇部は小さく立つ。焼成は良好で, 色調は黒灰色を呈する。2・3は坏身で, たちあがりは内傾する。2の受部径は15.6cmに复原した。調整は受部ヨコナデ, 外面回転ヘラケズリ, 内面ナデによる。焼成は軟質で, 暗灰色を呈する。

4は口縁部破片で, 复原口径は10.8cmを測る。口縁部は丸く納め, 椀になるか。焼成は良好

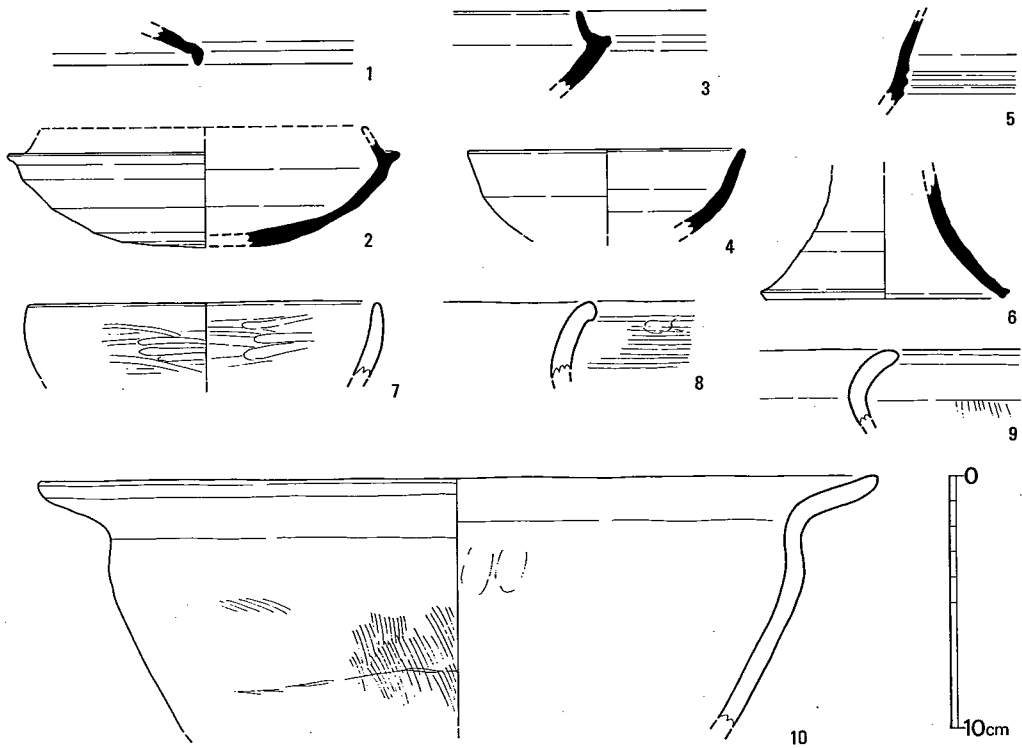


第164図 71号住居跡カマド実測図 (1/30)

で、色調は黒灰色を呈する。5・6は高坏である。5は無蓋高坏の坏部小片で、6は脚部破片である。5は体部に2条のヘラ沈線を巡らす。6の脚径は9.5cmに復原した。端部を横に突出させている。調整は回転ナデによる。焼成は堅緻で、色調は暗灰色を呈する。

土師器 (7~10) 7は坏の口縁部破片で、口径は13.8cmに復原した。口唇部は丸く納め、内外面ともヘラミガキ調整による。胎土に砂粒を殆ど含まず緻密で、色調は肌色を呈する。

8・9は甕の口縁部小破片で、8の口唇部は肥厚させる。外面ヨコハケ目、内面ナデ調整による。胎土に石英・雲母を含む。焼成は良好で、色調は暗橙褐色を呈する。また、外面には煤が遺存する。9は口縁部を「く」字状に外反させ、口唇部は丸く納める。外面には煤が遺存する。10は口縁部が大きく開き、頸部で屈曲した後、底部に移行する。口唇部は丸く納める。口径は34.2cmに復原した。口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ナデ調整による。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。外面に煤が遺存していることから鍋になるか。



第 165 図 71号住居跡出土土器実測図 (1/3)

72号住居跡 (図版50-2, 第157図)

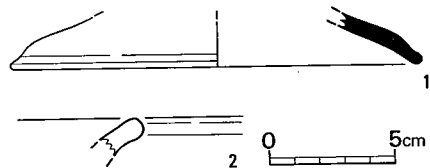
27号住居跡床面の45cm下位で検出した住居跡で、67号住居跡を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し、北壁長3.84m、西壁長3.4mを測る。壁高は西壁側で0.1m遺存する程度である。主柱穴はP1~4の4本で、径26~41cm、深さ23~32cmを測る。柱間はP1-2間2.12m、P1-4間2.24mの間隔を有する。

カマドは存在したと思われるが、その痕跡さえ留めない。遺物は埋土中から土器が数点出土したのみ。

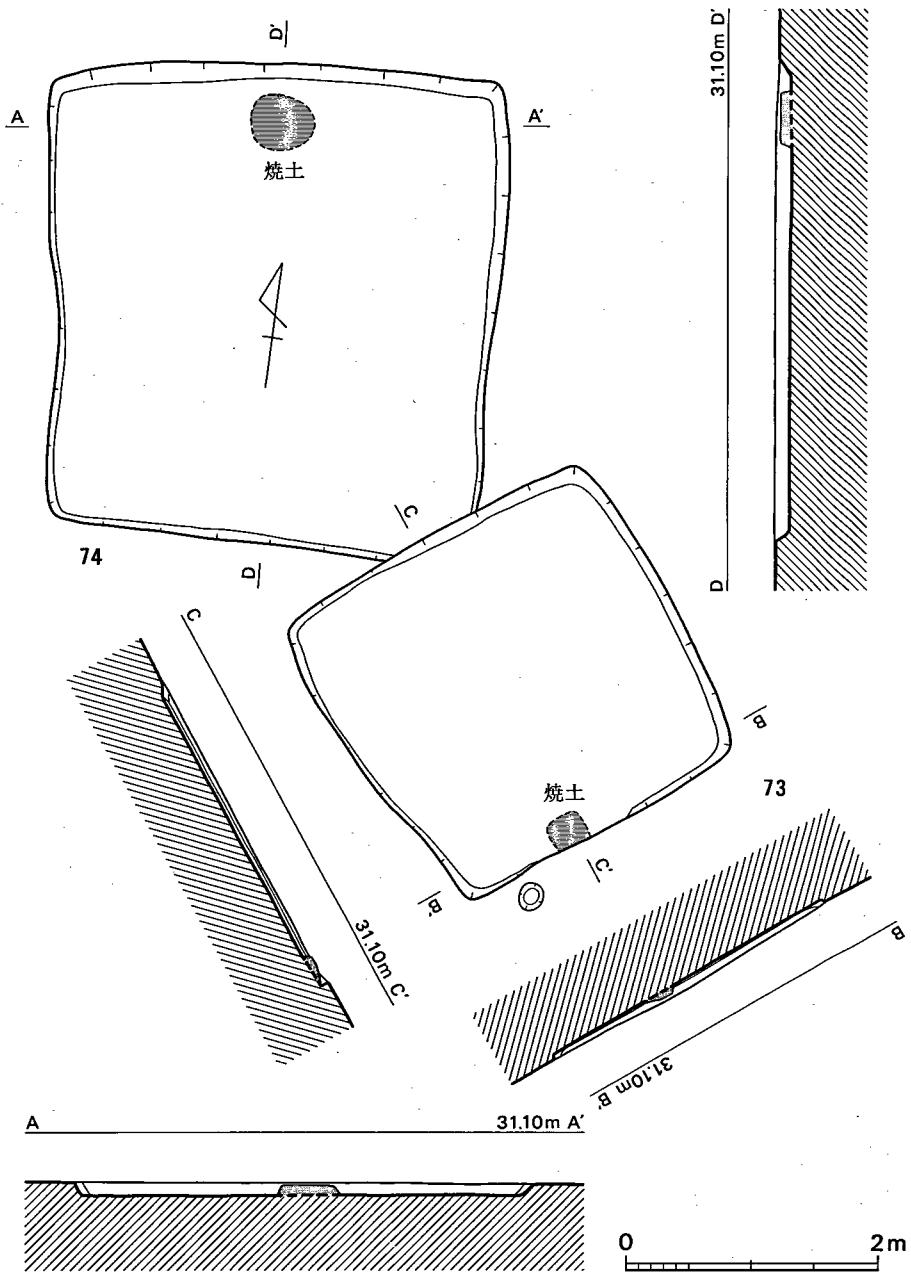
出土土器 (第166図)

須恵器 (1) 坏蓋の口縁部破片で、口径は16.4cmに復元した。口唇部は丸く納める。焼成は堅緻で、色調は青灰色を呈する。

土師器 (2) 甕の口縁部小片で、口唇部は丸く納める。



第 166 図 72号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第 167 图 73·74号住居跡实测图 (1/60)

73号住居跡 (第167図)

72号住居跡のすぐ北側に位置し、74号住居跡を切る。平面形は隅丸方形を呈し、北西壁長2.64m、北東壁長2.56mを測る。削平が著しく、壁高は北東壁側で8cm遺存する程度。灰緑色シルト層に掘り込んでいる。床面がつかめず、支柱穴も判然としなかったため床面を数回掘り下げたが、柱穴は検出できなかった。埋土中から須恵器甕の胴部片及び土師器坏片が出土しているが、小破片のため図示できない。

カマド (第167図)

カマドは南東壁のやや南寄りに付設しているが、焼土を26×30cmの範囲で残すのみ。床面を下げすぎてしまい、カマドが浮いてしまった。

74号住居跡 (第167図)

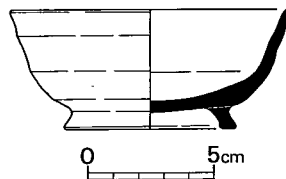
73号住居跡に南東コーナーを切られる。平面形は隅丸方形を呈し、北壁長3.58m、西壁長3.46mを測る。壁高は北壁側で10cm遺存する。当住居跡も床面がつかめず、支柱穴も判然としない。床面を数回掘り下げたが、結局、柱穴は検出できなかった。

カマド (第167図)

カマドは北壁の中央に付設しているが、焼土を44×52cmの範囲で残すのみ。また、床面を下げすぎてしまい、カマドが浮いてしまった。

出土土器 (図版134-7, 第168図)

須恵器 カマド右側出土の坏身で、やや高めの高台を付す。器高4.7cm、口径11.2cm、高台径6.8cmを測る。口唇部は丸く納めている。器面調整は内外面ともナデによる。焼成は良好で、色調は紫灰色を呈する。



当住居跡の時期は、坏身の高台が高いことから7世紀末頃か。

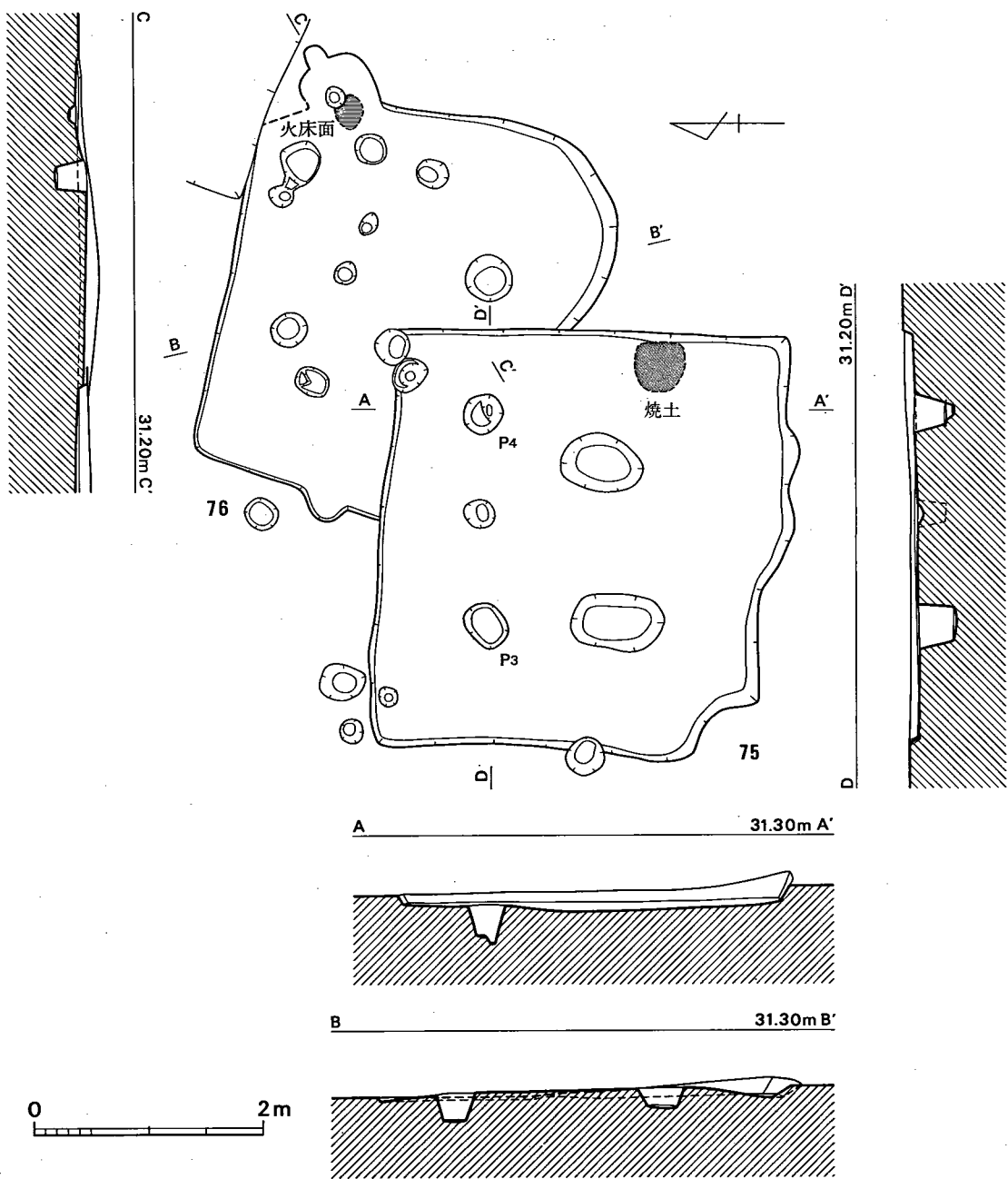
第168図 74号住居跡出土土器
実測図 (1/3)

75号住居跡 (図版54-1, 第169図)

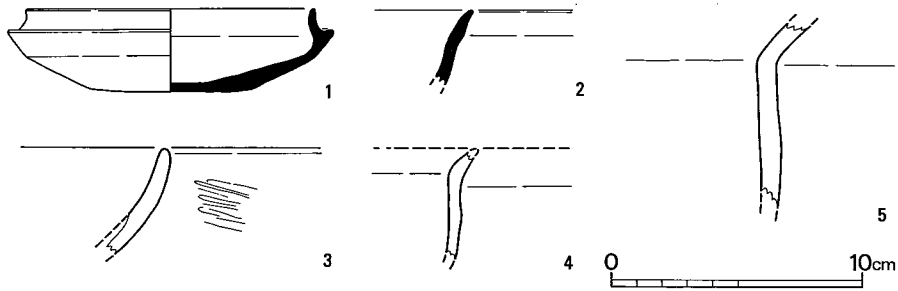
72号住居跡の0.5m南東側に位置し、C群に属する。平面形は不整形を呈し、東壁長3.37m、北壁長3.62mを測る。壁高は北壁側で8cm留める程度。床面にピットが数個あるものの支柱穴は判然としないが、P3・4は支柱穴としてよいものと思われる。径36~42cm、深さ35cm前後で、柱間は1.8mを測る。埋土中から土器が出土したのみ。

カマド (第169図)

カマド本体は遺存せず、東壁のやや南よりに44cmの範囲で火床面を留めるのみ。また、支脚も不明。



第 169 图 75·76号住居跡実测图 (1/60)



第170図 75号住居跡出土土器実測図 (1/3)

出土土器 (第170図)

須恵器 (1・2) 1は坏身で、器高3.3cm, 復原口径11.4cm, 復原受部径13.0cmを測る。たちあがりは外反気味に直立し、受部から平底の底部に移行する。焼成は良好で、色調は内面灰色、外面紫灰色を呈する。2は口縁部小片で、口唇部はシャープである。外面のみ灰を被っていることから坏になろう。

土師器 (3~5) 3は坏の口縁部破片で、外面ヘラミガキ、内面ナデ調整による。口唇部は丸く納める。4は小型甕の頸部破片である。5は甕の口頸部破片で、口縁部は「く」字形を呈する。外面ハケ目、内面は磨滅により調整不明。6世紀末頃であろう。

76号住居跡 (図版54-2, 第169図)

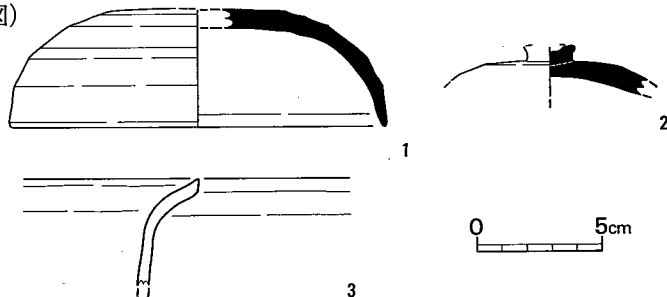
75・77号住居跡に切られる。平面形は不整形を呈し、長軸3.44m, 短軸3.28m, 壁高は南壁側で16cmを測る。床面にはピットが数個あるものの支柱穴は判然としない。埋土中より土器が数点出土した。

カマド (第169図)

東側コーナー寄りに付設される突出型のカマドで、火床面を留めるのみ。掘方は幅62cm, 奥行き56cmを測る。奥壁から24cmの箇所径18cmの小ピットがあり、支脚の抜き跡と考えられる。火床面はその前面に位置し、径26cmの範囲で焼けていた。

出土土器 (図版134-8, 第171図)

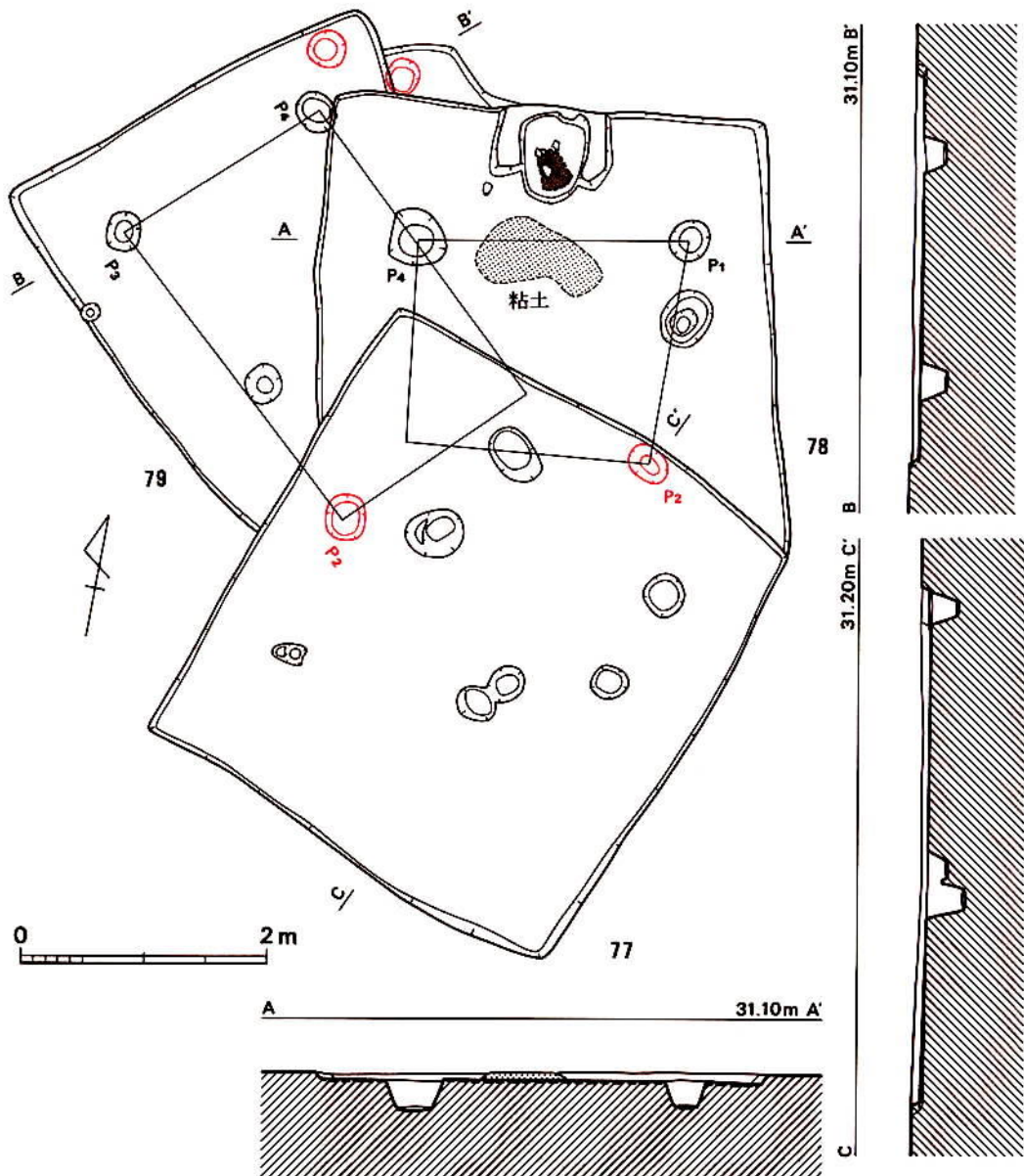
須恵器 (1・2) 1は坏蓋で、器高4.6cm, 復原口径15.0cmを測る。天井部との境のヘラ沈線は施していない。口唇部は割合にシャープである。調整は口縁部ヨコナデ、外面回転ヘラケズリ、内面ナデ調



第171図 76号住居跡出土土器実測図 (1/3)

整による。焼成は堅緻で、色調は紫灰色を呈する。2は天井部の破片で、撮みは欠損する。焼成は堅緻で、色調は灰青色を呈する。

土師器(3) 3は甕の口縁部小片で、端部は上方に立つ。内面には煤の付着がみられる。色調は赤褐色を呈する。6世紀後半であろう。



第172図 77~79号住居跡実測図 (1/60)

77号住居跡 (図版53-2・55-1, 第172図)

調査区の中央に位置し、C群に属する。76・78・79号住居跡を切っている。平面形は長方形を呈し、北壁長3.75m、西壁長3.98mを測る。削平が著しく、壁高は北壁側で6cm遺存する程度である。床面にはピットが数個あるが、支柱穴は判然としない。埋土中から須恵器・土師器片が出土したが、図示不可能。また、カマドも不明で、住居跡としてよいものか疑問が残る。

78号住居跡 (図版55-1, 第172図)

77号住居跡に切られ、79号住居跡を切っている。北壁長は3.47mで、東壁長は3.5m遺存する。支柱穴は4本と考えられるが、P3を検出し得ていない。柱穴は径34~46cm、深さ20~25cmで、柱間はP1-2間1.84m、P1-4間2.22mを測る。埋土中から土器が出土した。

カマド (図版55-2, 第173図)

作り付け型のカマドで、北壁の中央に付設する。遺存状態は悪く、両袖部を留めるのみ。右袖は残存長63cm、基底部幅30cm、残高8cmで、左袖は残存長55cm、基底部幅28cm、残高8cmを測り、黄褐色粘土を盛っていた。カマドの掘方は50×66cmを測り、火床面は22×33cmの範囲で焼けていた。支脚は不明。

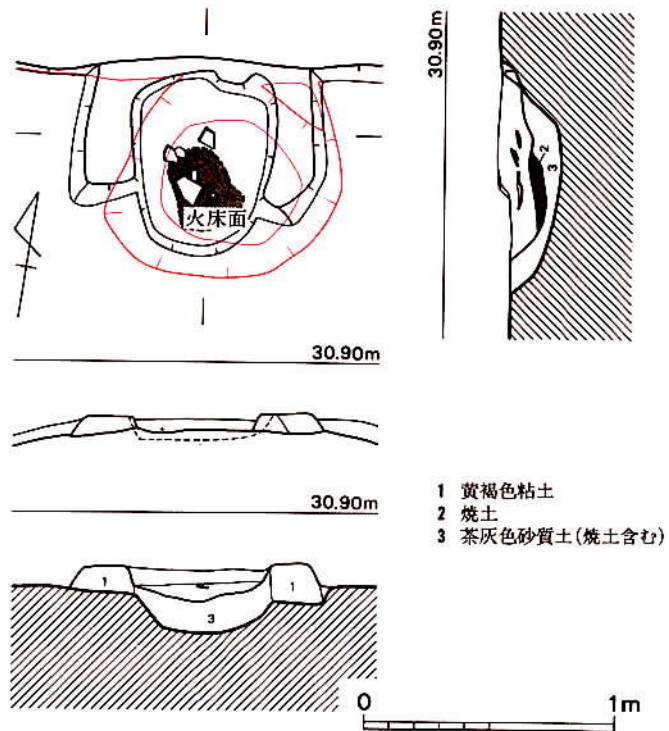
また、袖部の下層には80×95cmの不整形の掘り込みがある。埋土中から土師器甕(第174図6~8)が出土した。

出土土器 (第174図)

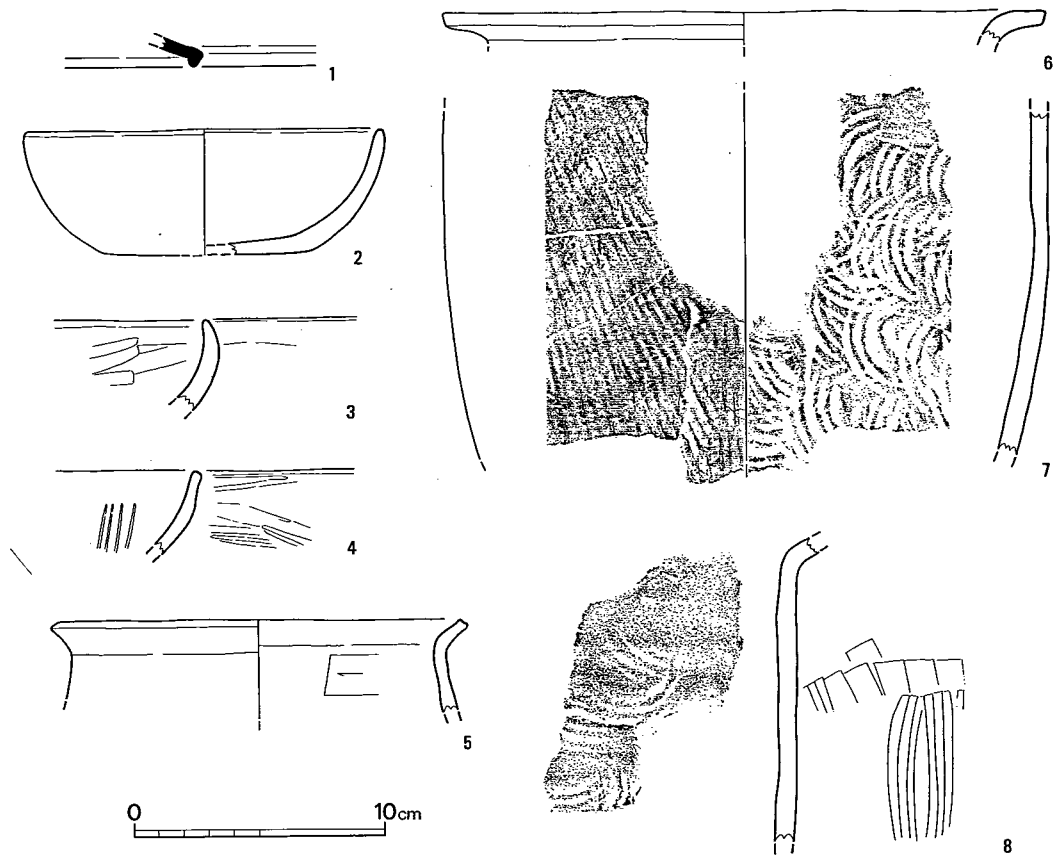
須恵器 (1) 坏蓋の口縁部小片で、口唇部は小さく立つ。

土師器 (2~8) 2~4は坏で、2は器高4.9cm、復原口径14.0cm、復原底径8.4cmを測り、口唇部は丸く納める。3・4は口縁部小片で、内外面ともヘラミガキ調整による。

5~8は甕で、5は小型品。6~8は長胴の丸底甕になろう。口径は5が16.0cm、6は23.6cmに復原した。5の口唇部は「く」字状に外反する。



第173図 78号住居跡カマド実測図 (1/30)



第174図 78号住居跡出土土器実測図 (1/3)

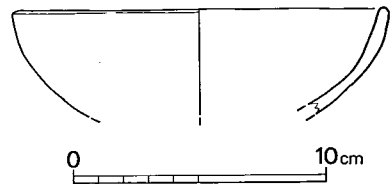
7・8は胴部破片で、7は外面平行タタキ目、内面円弧タタキ目調整による。8は外面工具ナデ、内面円弧タタキ目→ナデによる。

79号住居跡 (図版55-1, 第172図)

77・78号住居跡に大半を切られる。北東壁長3.23mを測る。主柱穴は4本であるが、P1を検出し得ていない。柱穴は径30~36cm、深さ20cm前後で、柱間はP2-3間2.93m、P3-4間1.86mを測る。カマドは付設していたと思われるが、遺存しない。

出土土器 (第175図)

土師器 坏の口縁部小片で、口唇部は丸く納める。口径は14.6cmに復原した。



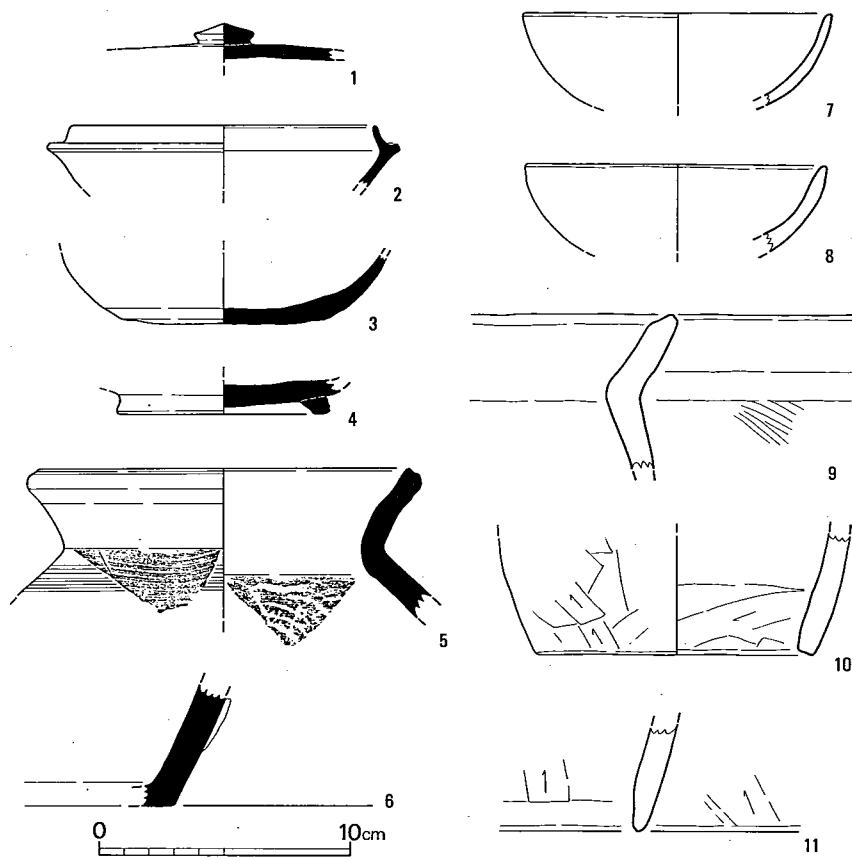
第175図 79号住居跡出土土器実測図 (1/3)

80～85号住居跡検出時出土土器 (第176図)

第176図1～11は、80～85号住居跡検出時に出土した土器で、何れの住居跡に帰属するか不明であるが、ここで取り上げた。

須恵器 (1～6) 1は坏蓋の天井部破片で、偏平な擬宝珠形撮みを貼付する。2～4は坏身で、2のたちあがりは内傾する。口径は12.0cmに復原した。3は底部資料で、口縁部を欠く。4は底部破片で、低めの高台を貼付している。5は広口壺の口縁部破片で、復原口径は14.8cmを測る。口縁部ヨコナデ、頸部カキ目、内面圆弧タタキ目調整による。6は底部破片である。

土師器 (7～11) 7・8は坏の口縁部破片で、口径は7が12.4cm、8は11.8cmに復原した。何れも口唇部は丸く納め、8はやや肥厚する。9は甕の口縁部破片で、口縁端部は上方に立つ。外面ハケ目、内面ナデ調整による。10・11は甕の底部破片で、10は11.0cmに復原した。10は内外面ともヘラケズリ調整による。



第 176 図 80～85号住居跡検出時出土土器実測図 (1/3)

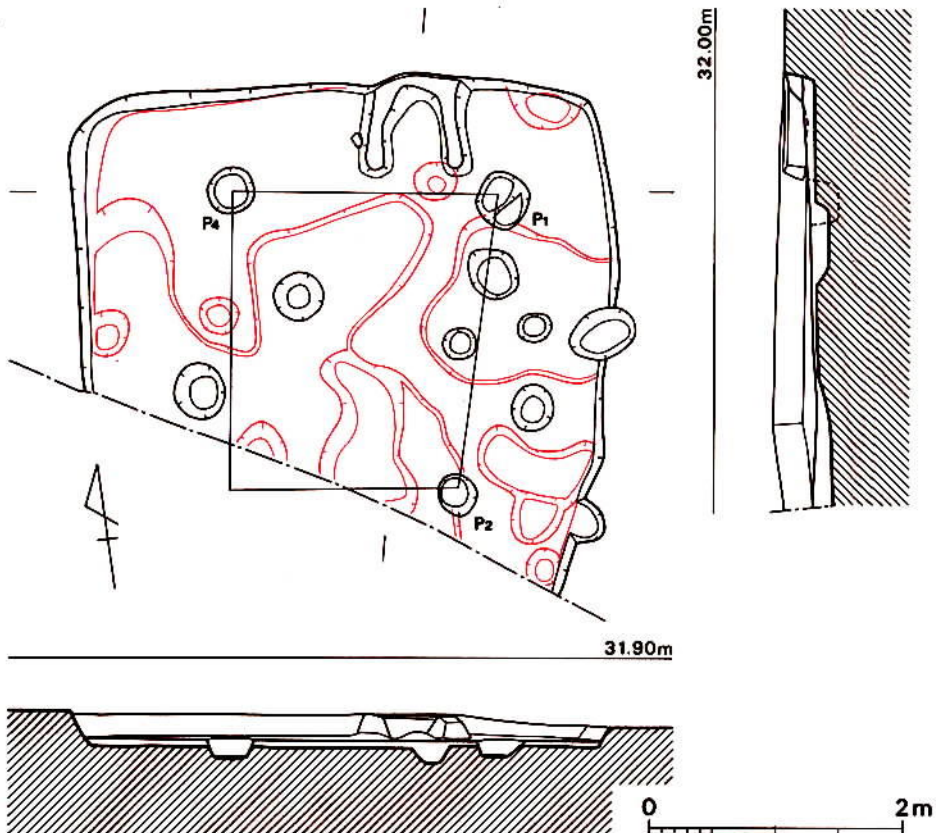
80号住居跡（図版57-1，第177図）

調査区の南端部に位置し，南壁は半分弱ほど調査区外に伸展する。北壁長4.12m，東壁は3.84m遺存する。柱穴は4本と考えられ，P3は調査区外に存するものであろう。柱穴は径30-42cm，深さ18-24cmを測る。柱間はP1-2間2.35m，P1-4間2.1mを測る。

貼床下部からは，ビット・不整形の落込みを検出した。また，遺物は埋土中から土器が出土したにすぎない。

カマド（図版57-2，第177図）

作り付け型のカマドで，北壁のやや右寄りに付設する。遺存状態は悪く，両袖部を留めるにすぎない。右袖は残存長78cm，基底部幅24cm，残高17cmで，左袖は残存長71cm，基底部幅28cm，残高16cmを測る。袖部には茶褐色砂質土を盛っており，中には石が入っていた。補強として入れたものか。壁面はさほど加熱を受けておらず，火床面は焼けていない。また，支脚に関しては不明。



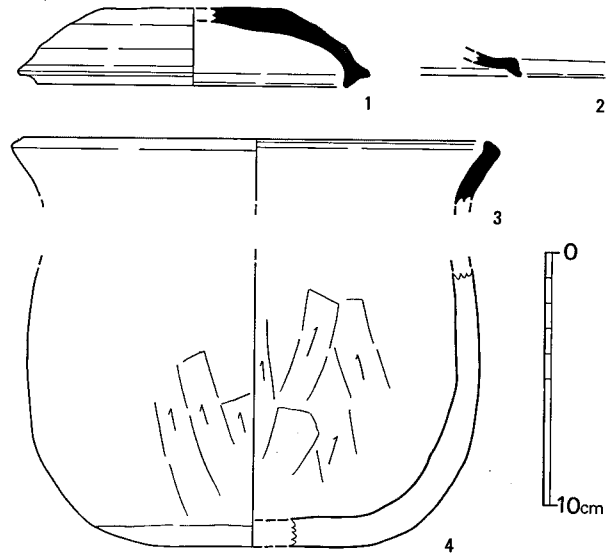
第177図 80号住居跡実測図（1/60）

出土土器 (第178図)

須恵器 (1~3) 1は器高が3.0cmと低く、かえりの突出が弱いことから坏蓋とした。復原口径は14.0cmを測る。焼成は軟質で、色調は灰白色を呈する。

2は高坏の脚部小片である。端部は小さく立つ。3は口縁部小片で、口唇部は内面に小さく突出する。短頸壺になろう。

土師器 (4) 4は土師器甕で、口縁部を欠く。調整は内外面ともヘラケズリによる。胎土に長石・石英・雲母を多く含む。



第178図 80号住居跡出土土器実測図 (1/3)

81号住居跡 (図版58-2, 59-1, 第122図)

調査区の南西側に位置し、F群に属する。38号住居跡に切られ、50号住居跡を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し、北壁長3.88m、東壁長3.32mを測る。壁高は北壁側で18cm遺存する程度。床面で数個のピットを検出したが、柱穴は判然としない。埋土中より土器・鉄器が出土した。

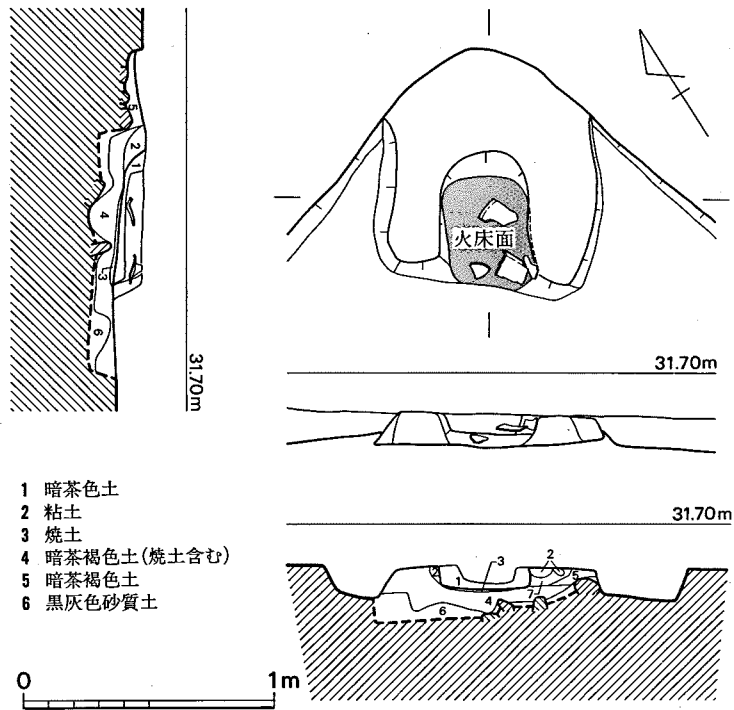
カマド (図版59-2・3, 第179図)

作り付け型のカマドで、北東壁コーナーに付設する。遺存状態は悪く、袖部を留めるのみ。右袖は残存長62cm、基底部幅28cm、残高13cmで、左袖は残存長74cm、基底部幅29cm、残高11cmを測る。袖部には暗茶褐色土を盛っていた。壁体・火床面はよく焼けていたが、支脚に関しては不明。埋土中からは、土師器甕 (第181図7) が出土している。

出土土器 (図版134-9, 第180・181図)

須恵器 (1~4) 1・2は坏身で、1のかえりは直立気味に立上がる。口唇部はシャープで、口径は13.4cmに復原した。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。2は低めの高台を貼付したもので、口唇部は肥厚する。器高は4.2cmで、口径13.2cm、高台径9.8cmに復原した。器面調整はナデによる。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。

3は口縁部破片で、14.0cmに復原した。口唇部は肥厚し、ナデ調整を施す。焼成はやや軟質で、色調は灰褐色を呈する。4は底部破片で、高めのハ字形高台を貼付する。焼成は良好で、色調は紫灰色を呈する。3・4とも坏になるか。



第179図 81号住居跡カマド実測図 (1/30)

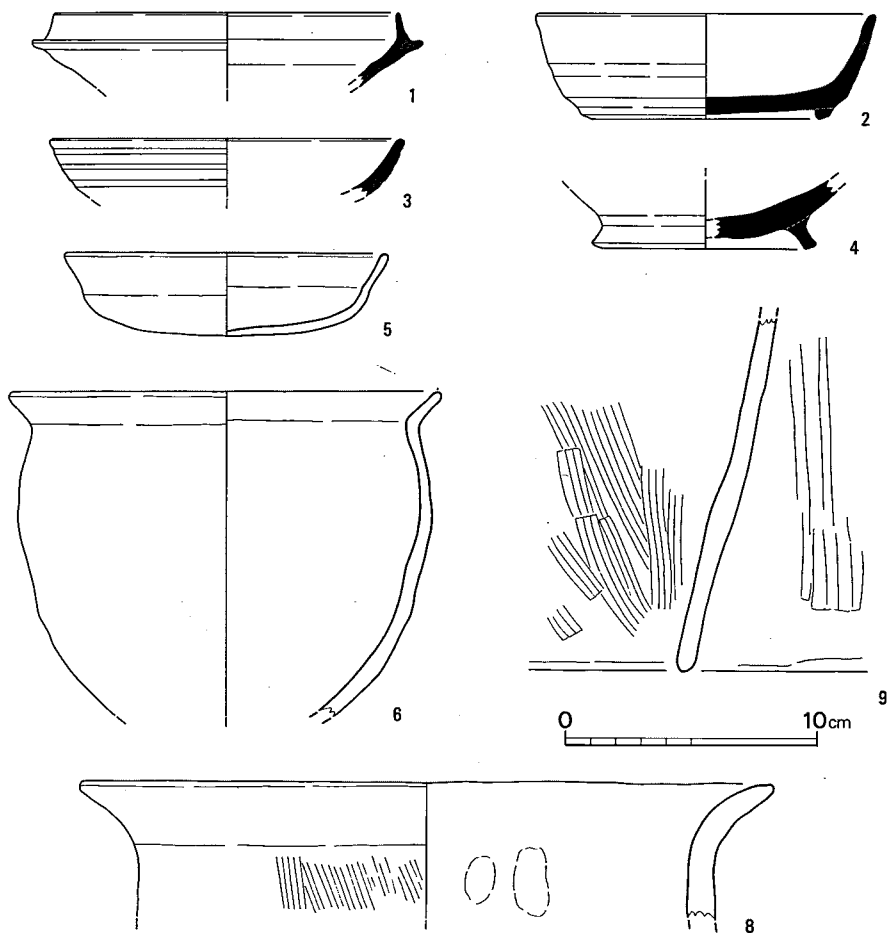
土師器(5~9) 5は坏で、器高3.3cm、復原口径12.6cmを測る。口唇部は丸く肥厚し、体部で一旦屈曲して底部に移行する。口縁部ヨコナデ、外面ナデ、内面ヘラミガキ調整による。胎土に長石・石英・雲母・赤褐色粒を含む。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

6~8は甗で、6・7はカマド内の出土、8は埋土中の出土である。6の口縁部は「く」字形に屈曲し、よく締まった頸部から球状の胴部に移行する。口縁部はヨコナデ調整によるが、胴部外面は二次加熱により器面の剥離が著しい。また、内面には煤が付着する。胎土に石英・赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、色調は茶褐色を呈する。残高12.7cm、復原口径19.0cmを測る。

7は長胴の丸底甗である。口縁部を水平近く折り曲げ、口縁端部は跳ね上げ状をなす。頸部から直線的に胴部に移行し、底部は丸底を呈する。調整は口縁部ヨコナデ、外面平行タタキ目、内面円弧タタキ目調整による。胎土に長石・石英・赤褐色粒を含む。焼成は良好で、色調は暗茶褐色を呈する。器高33.8cm、復原口径26.2cmを測る。

8は口縁部破片で、口径は27.4cmに復原した。口縁部は肥厚することなく、大きく外反する。口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ナデ調整による。9は甗の底部小片である。外面ヘラケズリ、内面雑なハケ目(4条/cm)調整による。

7の長胴甗は、54・56号住居跡カマド内からも出土しており、8世紀後半代か。



第180図 81号住居跡出土土器実測図① (1/3)

82号住居跡 (図版60-1, 第182図)

調査区の南西側に位置し、F群に属する。101・102号住居跡を切っており、南西壁は調査区外に伸展する。平面形は隅丸長方形を呈し、北東壁長3.28m、北西壁長4.23mを測る。削平が著しく、壁高は北東壁側で14cm遺存する程度であった。床面で40~65cmのピットを数個検出したが、柱穴は判然としない。埋土・カマド内より土器が出土した。

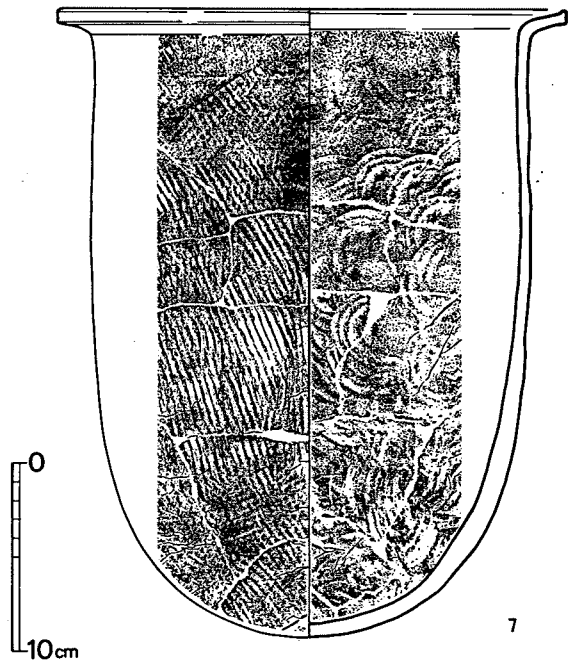
カマド (図版60-2, 第182図)

作り付け型のカマドで、北壁コーナーに付設する。遺存状態は悪く、両袖部を留めるのみ。袖部には焼土層があり、作り替えによるものであろう。支脚については不明。埋土中より土器が出土した。

出土土器 (第183図)

須恵器 (1~4) 1は坏蓋で、カマド内の出土である。口縁部は肥厚し、口唇部は小さく立つ。口径は16.2cmに复原した。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。2は椀で底部を欠く、高台を付していたものと思われる。口縁部は逆ハ字形に開き、口唇部は丸く納める。内外面ともナデ調整による。焼成は堅緻で、色調は暗灰色を呈する。

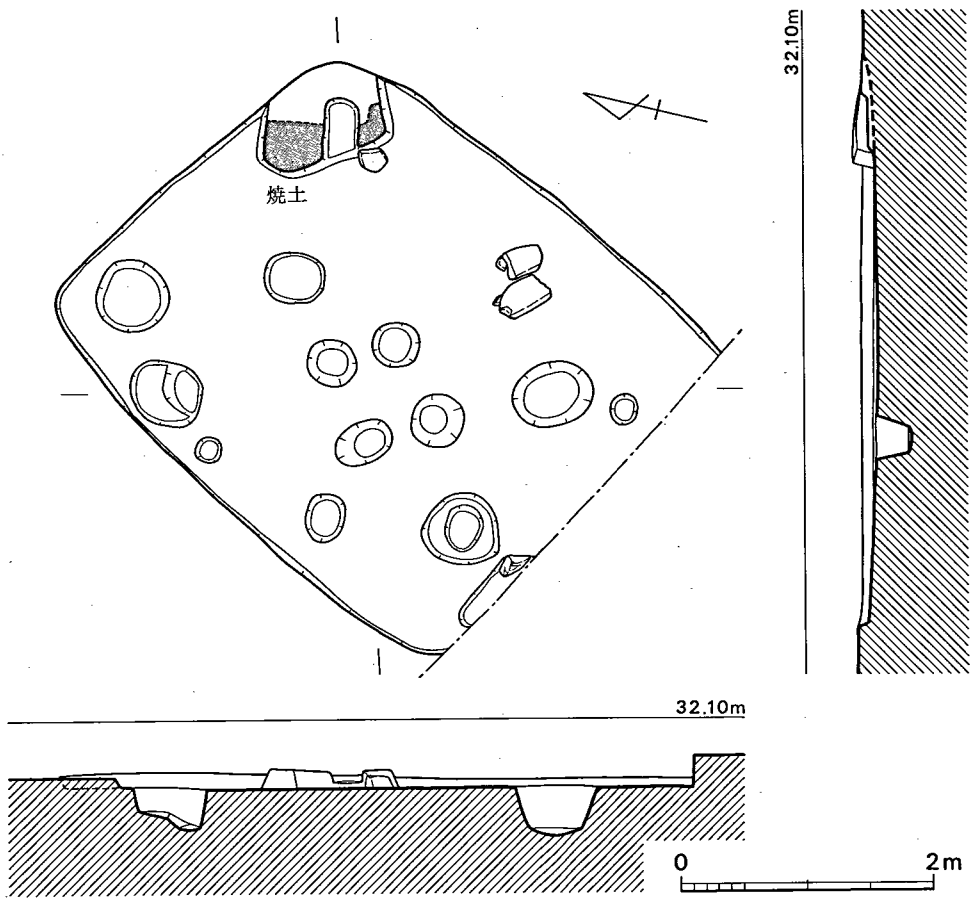
3は椀で器高3.7cm、复原口径13.0cm、复原底径7.5cmを測る。平底の底部から内湾気味に立上がる。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。4は頸部から肩部にかけての破片で、頸部が締まっているので瓶になろう。ナデ調整による。焼成は堅緻で、色調は暗灰色を呈する。8世紀後半代か。



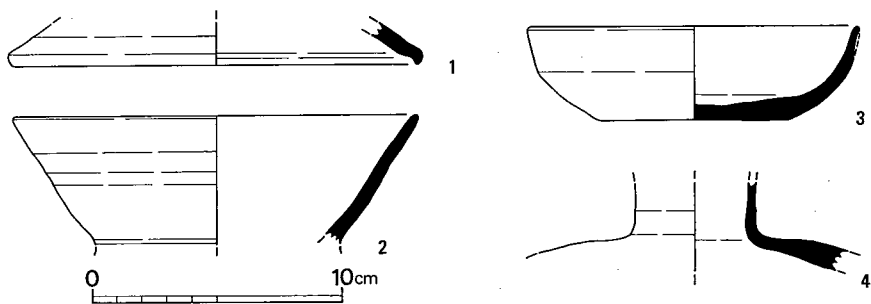
第181図 81号住居跡出土土器実測図② (1/4)



発掘調査風景



第 182 图 82号住居跡实测图 (1/60)



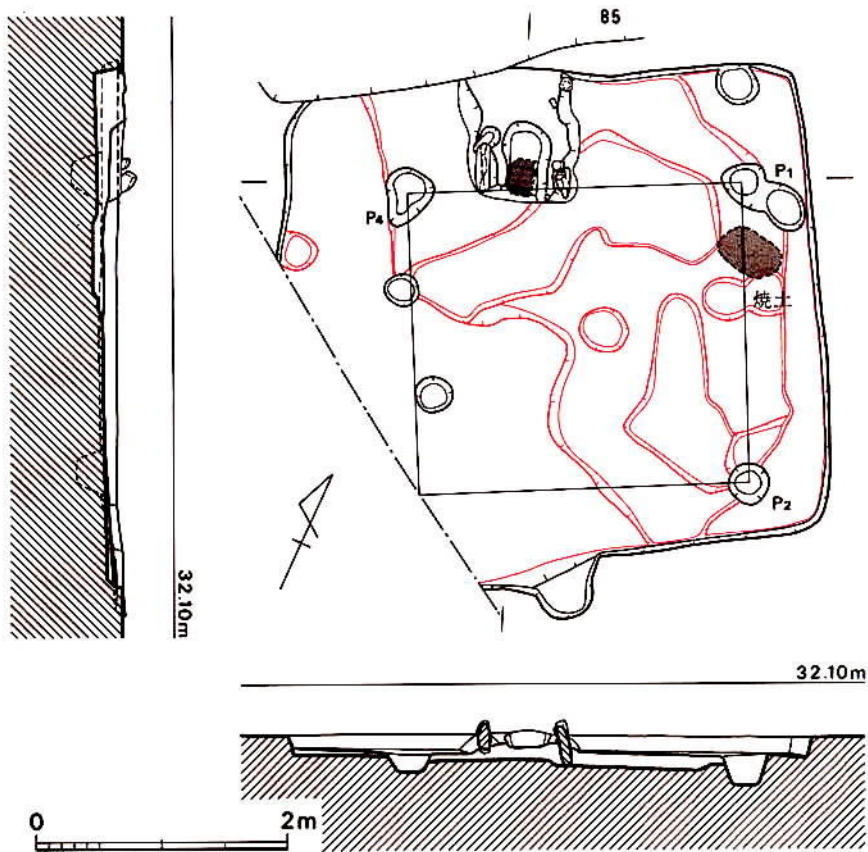
第 183 图 82号住居跡出土土器实测图 (1/3)

83号住居跡 (図版61-1, 第184図)

調査区の南西側に位置し、F群に属する。85号住居跡に切られ、南壁コーナーは調査区外に伸展する。平面形は隅丸長方形を呈し、北東壁長3.72m、北西壁長4.0mを測る。削平が著しく、壁高は北東壁側で14cm遺存する程度である。主柱穴はP1～4の4本であるが、P3は調査区外に存するものと考えられる。柱穴は径34～46cmで、深さは14～22cmを測る。柱間はP1-2間2.38m、P1-4間2.65mの間隔を有する。また、貼床を掘り下げたところピット・不整形の落込みを検出した。埋土中から土器・管玉・製塩土器が出土している。

カマド (図版61-2, 第185図)

作り付け型のカマドで、北西壁のやや左寄りに付設する。遺存状態は割合に良好で、袖石を留めていた。右袖は長さ104cm、基底部幅32cm、残高19cmで、左袖は長さ96cm、基底部幅36cm、



第184図 83号住居跡実測図 (1/60)

残高16cmを測る。袖部の先端には長さ20cm程の河原石を立てており、この上に天井石が乗るものと推測される。火床面は23×28cmの範囲で焼けていた。支脚は遺存しておらず不明。

出土土器(図版135-1, 第186図)

須恵器(1~5) 1~3は坏身で, 1・2は低い高台を貼付している。3は底部破片で, ハ字形の高台を付す。1・2の口縁部は底部から内湾気味に立上がり, 口唇部は丸く納める。器高は1が4.0cm, 2は4.1cmで, 口径は1が15.6cm, 2は13.4cmに復原した。

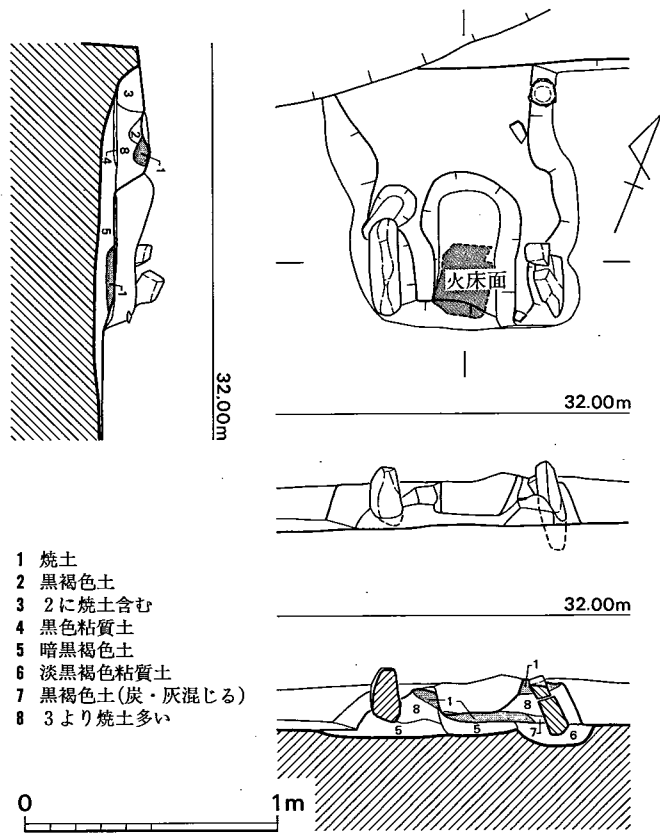
4は口縁部破片で, 口唇部はシャープである。坏としたが, 蓋になるかも知れない。5は坏で, 器高3.8cm, 口径13.5cmを測る。口唇部はシャープである。内外面ともナデ調整による。焼成は良好で, 灰色を呈する。

土師器(6・7) 6・7は甕で, 6は中型品, 7は小型品である。6の口縁部は大きく外反する。口径は22.6cmに復原した。7の口縁部は斜め上方に立つ。復原口径は13.8cmである。

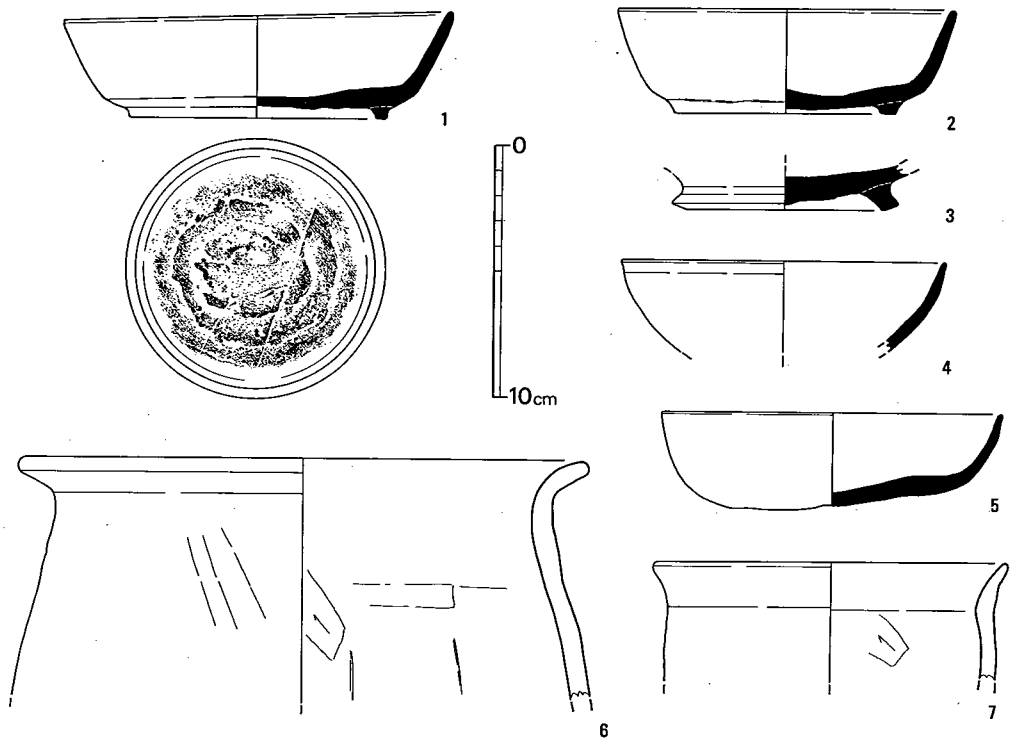
1・2は器高・高台ともに低いことから8世紀中~後半であろう。

84号住居跡(図版62・63-1, 第188図)

調査区の南西端に位置し, 85号住居跡を切る。平面形は不整長方形を呈し, 北東壁長2.83m, 北西壁長3.44mを測る。壁高は北西壁側で18cm遺存する。コーナー部にカマドを有する住居跡は主柱穴が判然としませんが, P1~3を一応主柱穴とした。柱穴は径38~48cm, 深さ16~22cmを測る。柱間はP1-2間2.62cm, P2-3間2.3mの間隔を有する。埋土・カマド内から土器・鉄器が, 埋土中から製塩土器が出土した。



第185図 83号住居跡カマド実測図(1/30)



第 186 図 83号住居跡出土土器実測図 (1/3)

カマド (図版63-2, 第187図)

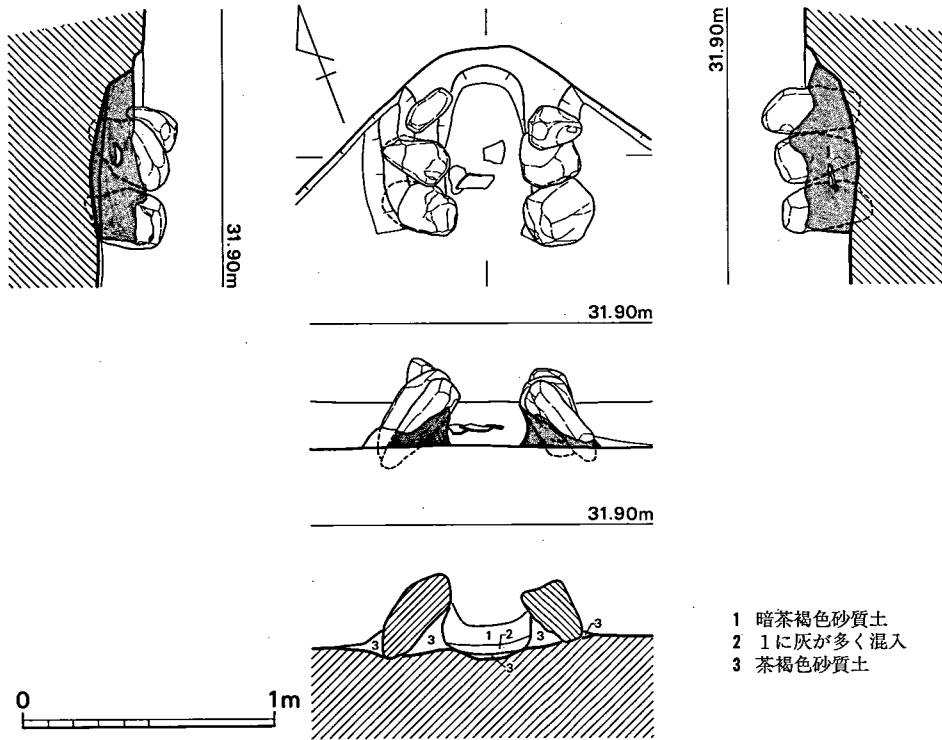
作り付け型のカマドで、北側コーナーに付設する。遺存状態は割に良好で、両袖部を留める。両袖部には長さ20~40cmの河原石を3個ずつ立てており、先端の袖石に天井石が乗っかるものと思われる。右袖は長さ62cm、基底部幅32cm、残高35cmで、左袖は長さ63cm、基底部幅27cm、残高31cmを測る。壁体・床面はよく焼けていた。支脚は遺存せず、詳細は不明。埋土中から土器が出土した。

出土土器 (図版135-2, 第189図)

1~7は住居跡検出時に出土した土器で、84・85号の何れの住居跡に帰属するか不詳。8~11が当住居跡の出土で、12~14が85号住居跡の出土である。

須恵器 (1・2・8) 1は坏蓋で、撮みを欠く。低めの器高で、口唇部は小さく立つ。口径は16.8cmに復原した。焼成は良好で、色調は灰青色を呈する。

2・8は坏身で、8は底部小片である。ともに低めの高台を貼付している。2は底部から大きく開き、口唇部は丸く納める。器高4.8cm、復原口径12.8cm、復原高台径7.5cmを測る。焼成は堅緻で、色調は暗灰色を呈する。



第187図 84号住居跡カマド実測図 (1/30)

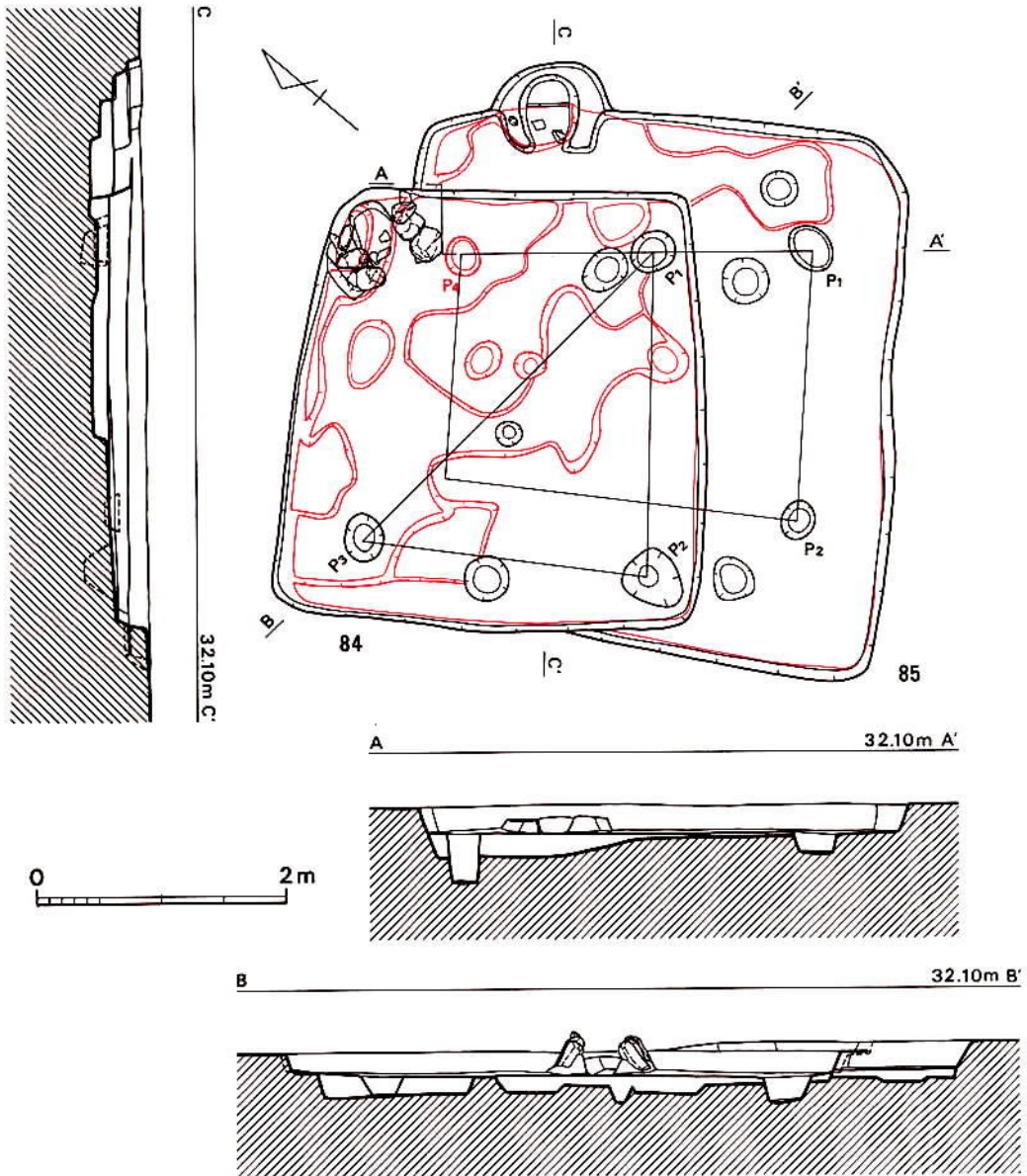
土師器 (3~7・9~11) 3は坏で、器高3.4cm、復原口径12.6cm、復原底径8.0cmを測る。底部から直線的に開く。口唇部は丸く、やや肥厚する。胎土に赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、色調は淡橙色を呈する。混入品であろう。

4~6・9・10は甕で、4・9・10は口縁部破片、5は底部破片である。4の口縁部は逆L字形に屈曲し、胴部は球状を呈する。口縁部ヨコナデ、外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整による。6の口縁部は「く」字形に屈曲し、口唇部は丸く納める。口径は20.0cmに復原した。5は底部破片で、平底を呈しよう。復原底径は9.6cmを測る。胎土に雲母・角閃石を多く含む。9は口縁部小片で、口唇部は丸く納める。10の口縁部は水平に外反し、長胴の甕になろう。口縁部はヨコナデ調整による。胎土に長石・石英・赤褐色粒を多く含む。

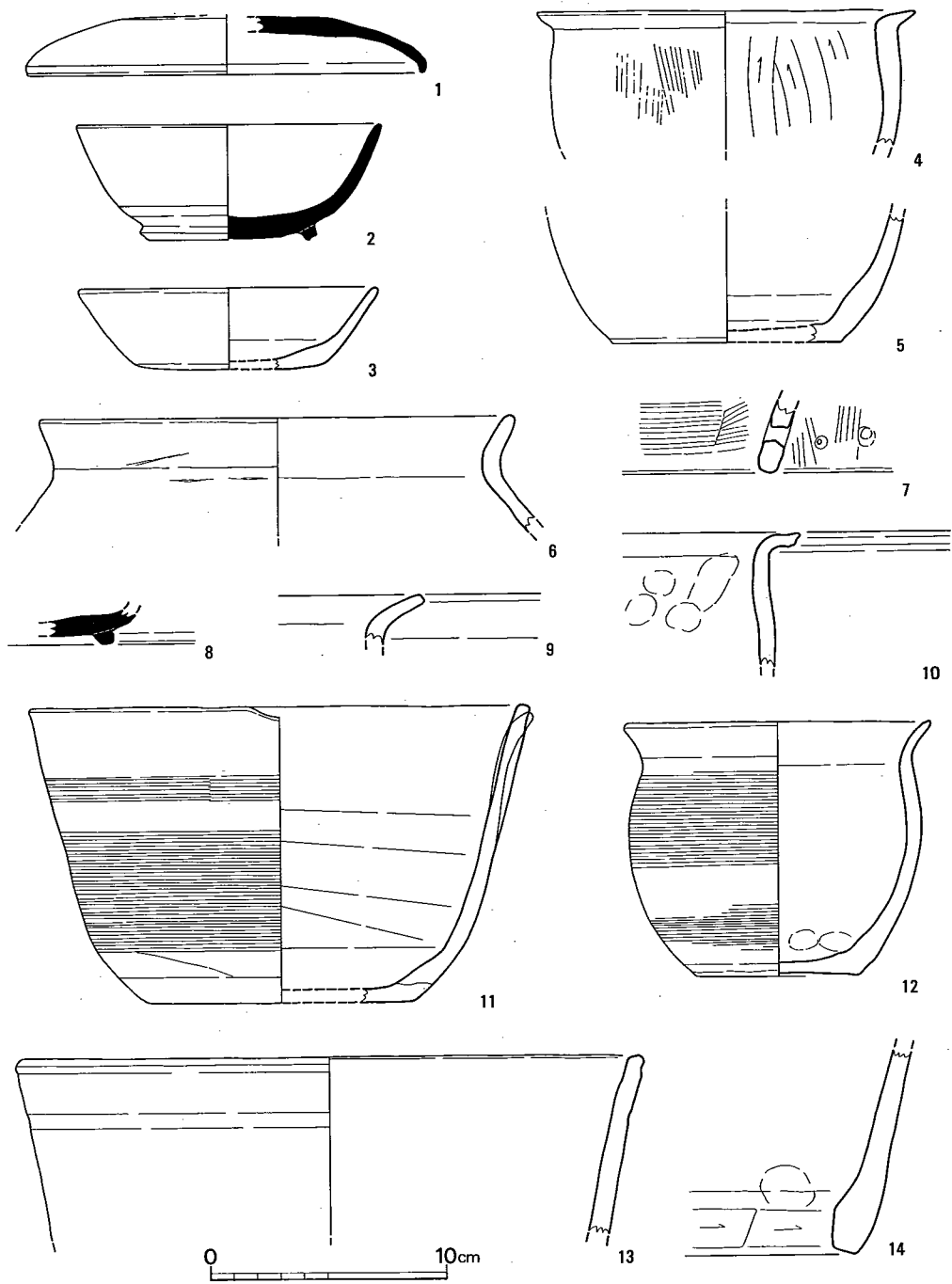
7は甑の底部破片で、2箇所に穿孔を施している。内外面ともハケ目調整による。11は鉢で、器高12.4cm、復原口径21.0cm、復原底径11.2cmを測る。口縁部から直線的に底部に移行し、口縁部の一部を外側に折り曲げ、片口としている。調整は口縁部ヨコナデ、外面ハケ目 (8条/cm)、内面横方向の工具ナデによる。胎土に長石・石英・雲母を含む。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。

85号住居跡 (図版62, 第188図)

調査区の南西端に位置し、F群に属する。84号住居跡に切られ、83号住居跡を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し、北東壁長3.94m、南東壁長4.38mを測る。壁高は北西壁側で20cm遺存



第188図 84・85号住居跡実測図 (1/60)



第 189 图 84·85号住居迹出土土器实测图 (1/3)

する。主柱穴は4本と考えられ、P3は84号住居跡の貼床下部に存するのであろうが、検出し得ていない。柱穴は径28~38cm、深さ16~38cmを測る。柱間はP1-2間2.16m、P1-4間2.83mの間隔を有する。

また、貼床を掘り下げたところ、ピット・不整形の落込みを検出した。埋土・カマド内から土器が出土した。

カマド(図版63-3, 第190図)

突出型のカマドで、北東壁の左寄りに付設している。遺存状態は悪く、袖部を留めるにすぎない。

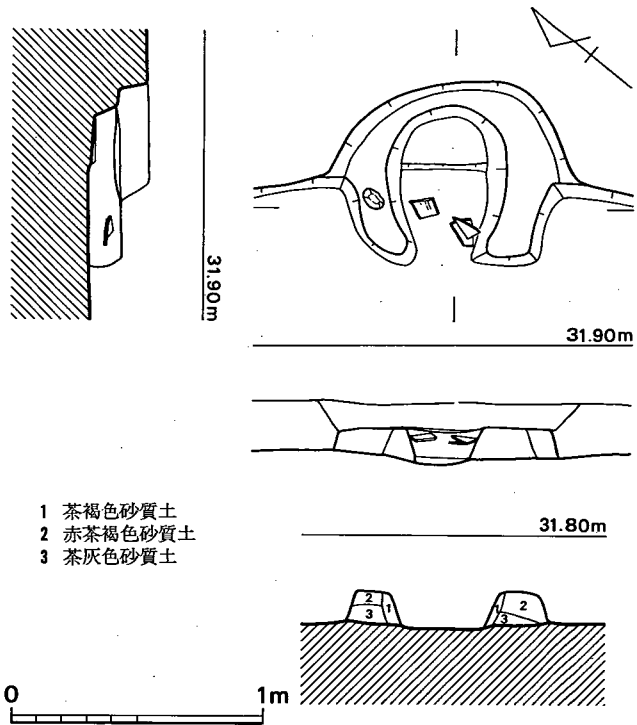
右袖は残存長33cm、基底部幅25cm、残高12cmで、左袖は

残存長36cm、基底部幅21cm、残高12cmを測る。袖部には砂質土を盛っている。壁体はさほど焼けておらず、支脚は不明。埋土中から土器が出土した。

出土土器(図版135-3, 第189図)

土師器(12~14)12は小型の甕で、器高10.6cm、口径12.8cm、底径6.8cmを測る。口縁部は大きく屈曲し、口唇部は丸く納める。胴部で張りをみせ、平底の底部に移行する。調整は口縁部ヨコナデ、外面カキ目(8条/cm)、内面工具ナデによる。また、外底部はヘラケズリを施す。胎土に長石・石英・角閃石・赤褐色粒を含む。焼成は良好で、色調は赤橙色を呈する。また、外面は二次加熱を受けて赤変している。

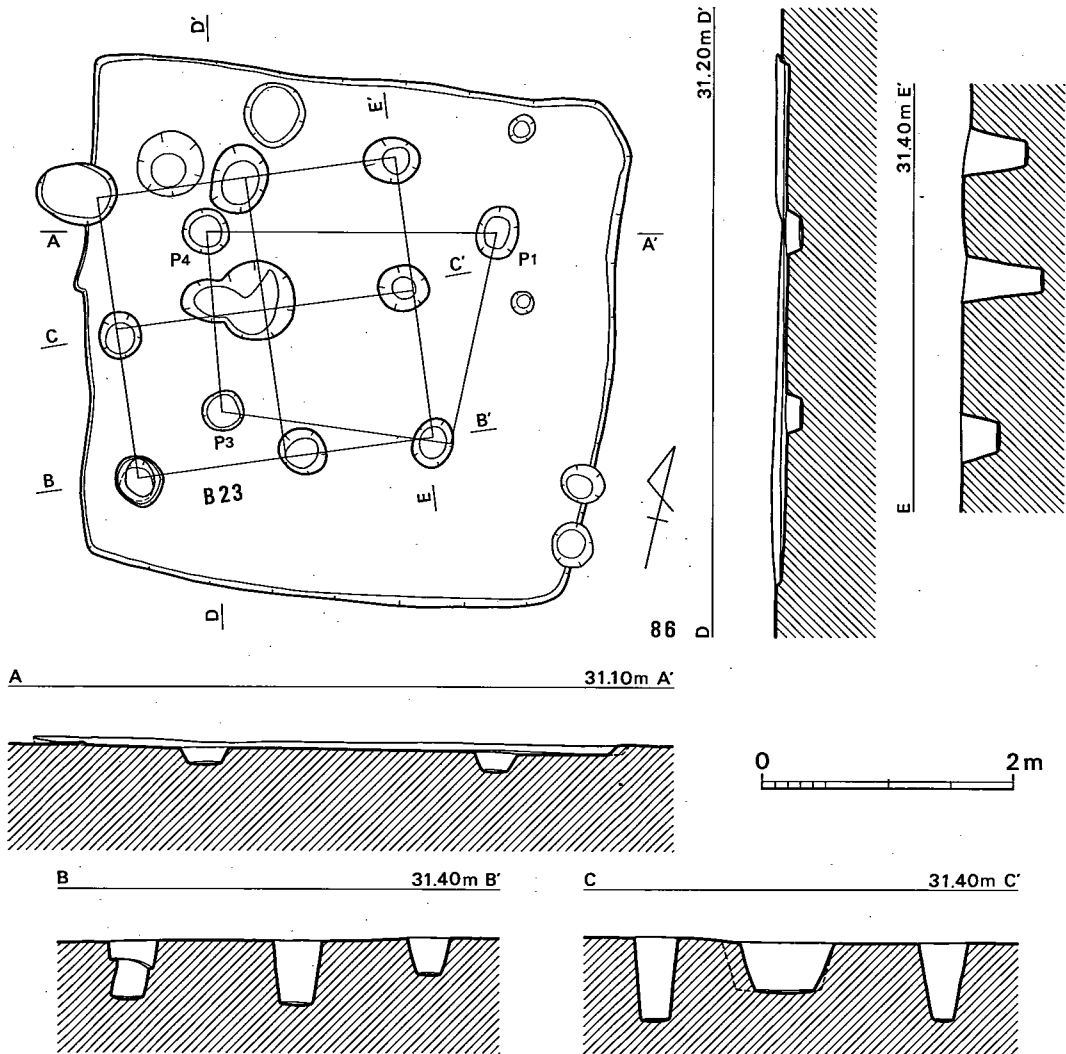
13・14は甑で、13が口縁部破片、14は底部破片である。色調・胎土・調整から同一個体と考えられる。口縁部は直線的に開き、底部は肥厚する。調整は口縁部ヨコナデ、内面ヘラケズリによる。胎土に長石・石英・角閃石・赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、色調は内面橙褐色、外面淡橙色を呈する。



第190図 85号住居跡カマド実測図(1/30)

86号住居跡 (図版64, 第191図)

41号住居跡の1m南西側に位置し、B群に属する。23号建物跡の約30cm下層で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、北壁長4.04m、東壁長4.0mを測る。下層遺構検出の際下げすぎてしまい、壁高は北壁側で10cmを測る程度となってしまった。支柱穴は4本と考えられるが、P2を検出し得ていない。柱穴は径32~43cm、深さ15cm前後を測る。カマドは焼土さえも遺存せず、詳細は不明。また、埋土中から土器が出土しているが、小破片のため図示不可能。



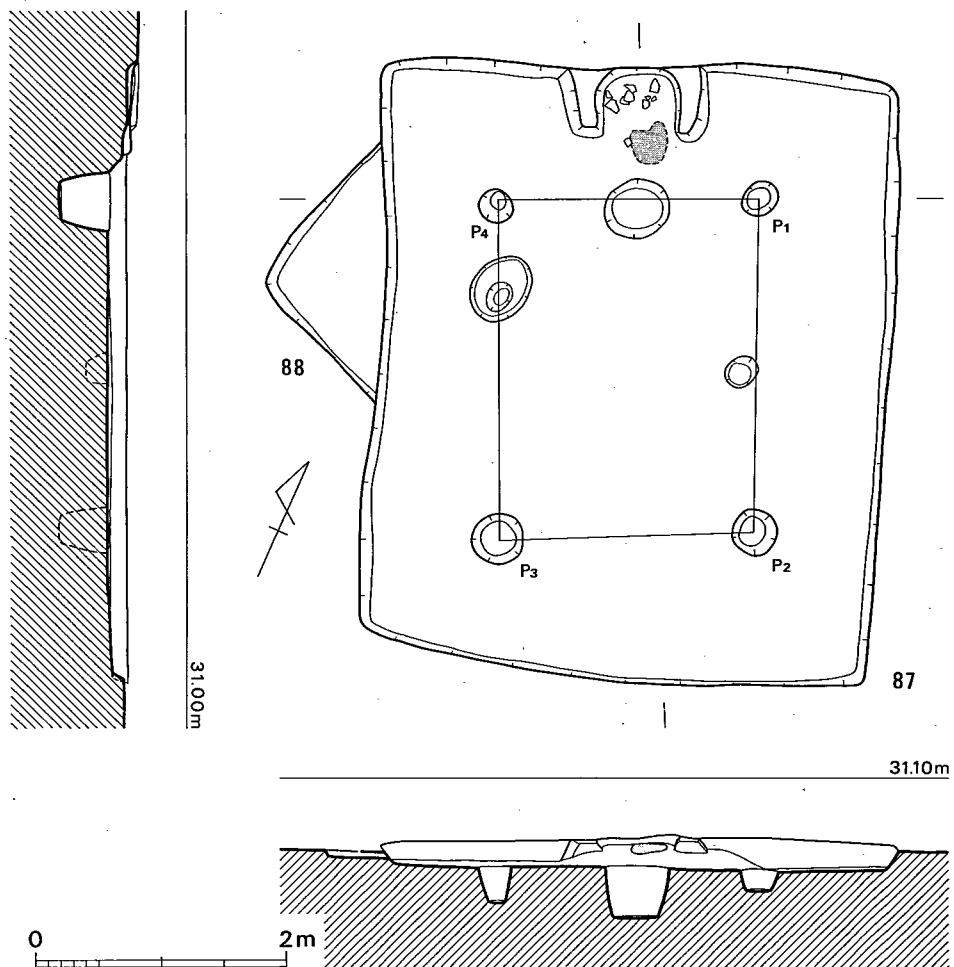
第191図 86号住居跡, 23号建物跡実測図 (1/60)

87号住居跡 (図版65-1, 第192図)

33号住居跡床面の約10cm下層で検出した住居跡で, B群に属する。13号竪穴に切られ, 88号住居跡・3号溝を切っている。平面形は縦位長方形を呈し, 北東壁長4.74m, 北西壁長4.02mを測る。壁高は北西壁側で16cm遺存する。主柱穴はP1~4の4本で, 径30~40cm, 深さ16~38cmを測る。柱間はP1-2間2.65m, P1-4間2.06mの間隔を有する。埋土・カマド内から土器が出土している。

カマド (図版65-2, 第193図)

北西壁の中央に付設する作り付け型のカマドである。床面を下げすぎたため火床面が浮いて



第 192 図 87・88号住居跡実測図 (1/60)

しまった。遺存状態は悪く、袖部を留めるのみ。

右袖は残存長59cm、基底部幅27cm、残高9cmで、左袖は長さ55cm、基底部幅36cm、残高10cmを測る。袖部には黄褐色粘土を盛っている。壁体はさほど焼けていなかったが、火床面は27×30cmの範囲で焼けていた。

支脚は遺存しておらず、詳細は不明。埋土中から土器が出土した。

出土土器 (第194図)

須恵器 (1) 高坏の坏部から脚部にかけての破片である。坏部外面には削出し

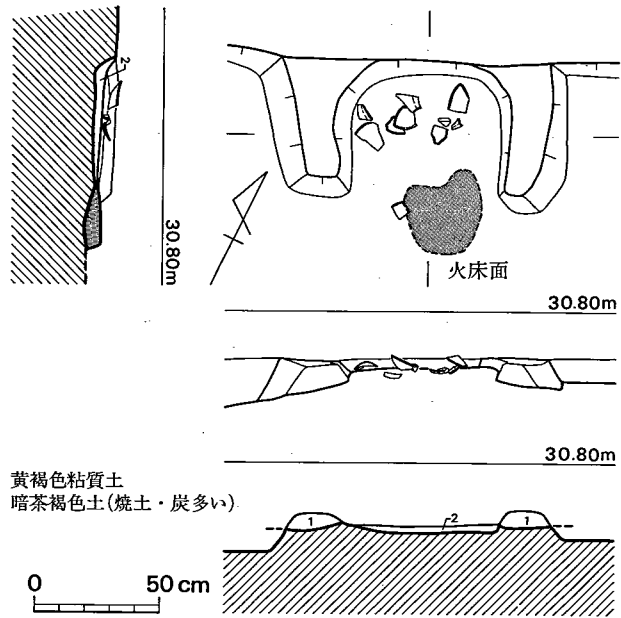
による稜がみられる。脚部のスカシ窓は貫通しておらず、篋先による切込みを施した程度。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。

土師器 (2～8) 2は坏で、器高3.4cm、復原口径12.2cmを測る。口唇部はシャープである。調整は口縁部ヨコナデ、外面細かいヘラミガキにより、内面には暗文がみられる。胎土に長石・石英・赤褐色粒を含むものの精良である。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。カマド内の出土。3は椀で、口径は16.4cmを測る。口唇部で段を有し、端部は丸く納める。外面は篋による擦過痕がみられる。胎土に石英・赤褐色粒を含む。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

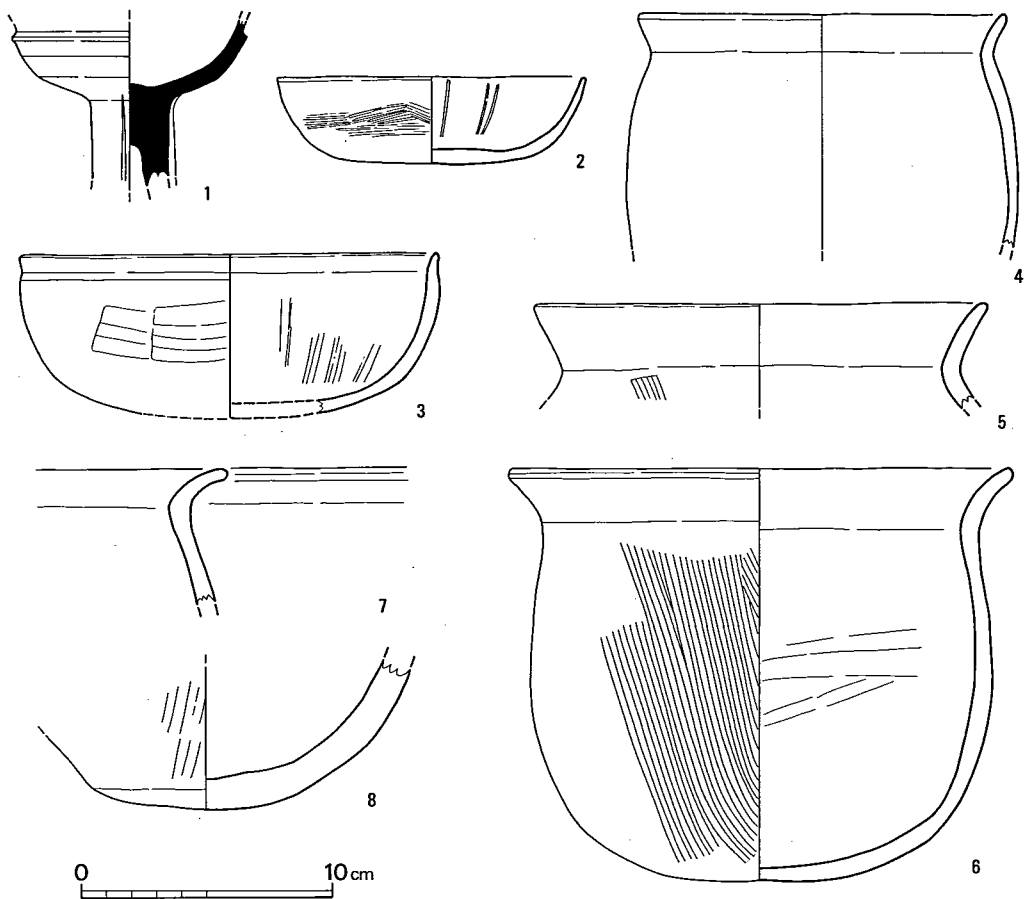
4～8は小型の甕で、7を除きカマド内の出土である。4・5の口縁部は「く」字形を呈し、6・7の口縁部は大きく外反する。6は器高16.2cm、復原口径19.8cmを測る。外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整による。胎土に石英・赤褐色粒を含む。8は底部破片で、丸底を呈する。

88号住居跡 (図版65-1, 第192図)

87号住居跡に殆ど切れ、西側コーナー一部を残す程度である。床面のレベルは88号住居跡の方が若干深く、87号の貼床を掘り下げて柱穴の検出を行なったが、検出できなかった。住居ではなく、竪穴とした方が妥当であろう。



第193図 87号住居跡カマド実測図 (1/30)



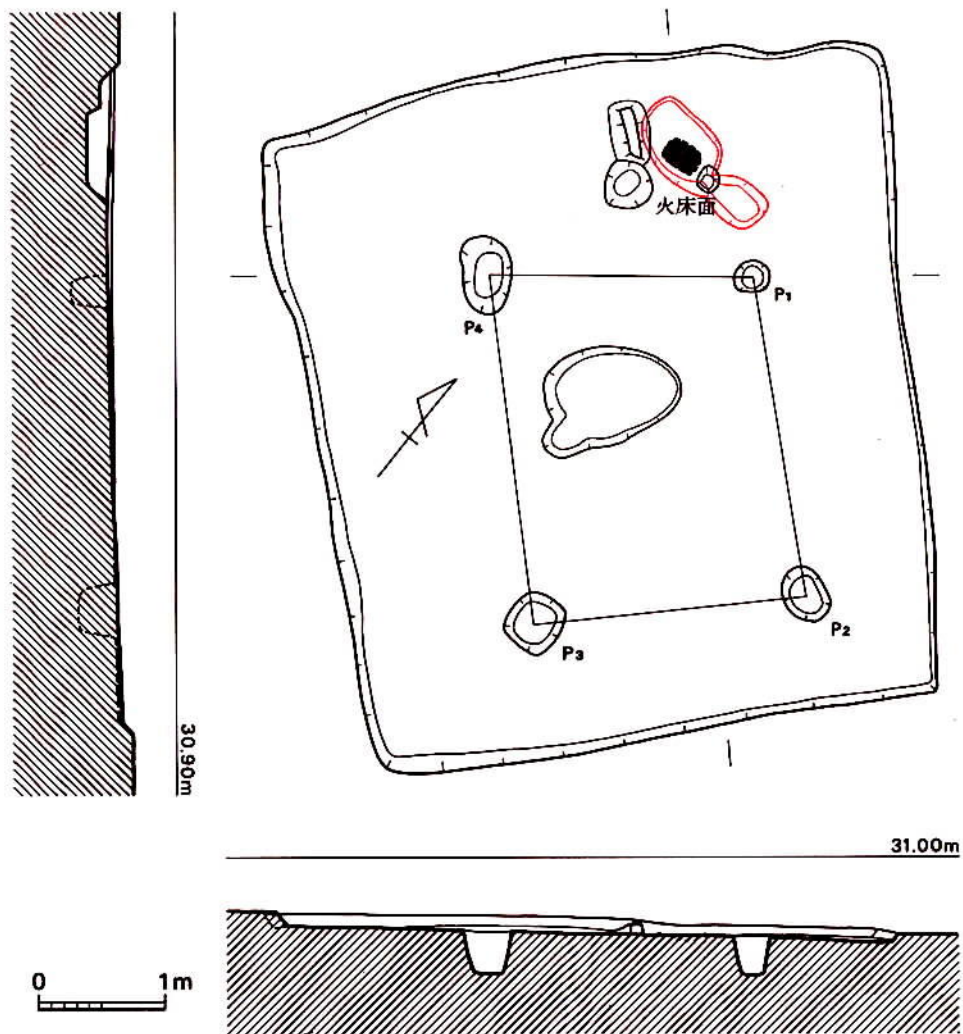
第194図 87号住居跡出土土器実測図(1/3)

89号住居跡 (図版66-1, 第195図)

B群に属する。34号住居跡床面の下層から検出した住居跡で、3号溝を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し、北西壁長4.92m、北東壁長5.14mを測る。壁高は北西壁側で10cm遺存する程度である。支柱穴P1～4の4本で、径28～62cm、深さ30cm前後を測る。柱間はP1-2間2.57m、P1-4間2.08mの間隔を有する。埋土及びピット内から土器が出土しているが、小破片のため図示不可能。

カマド (図版66-2, 第195図)

遺存状態は極めて悪く、左袖の一部と袖石の抜き跡及び火床面を留めるのみ。作り付け型のカマドで、北西壁のやや右寄りに付設する。火床面は住居壁から60cmの位置にあり、20×30cmの範囲で焼けていた。

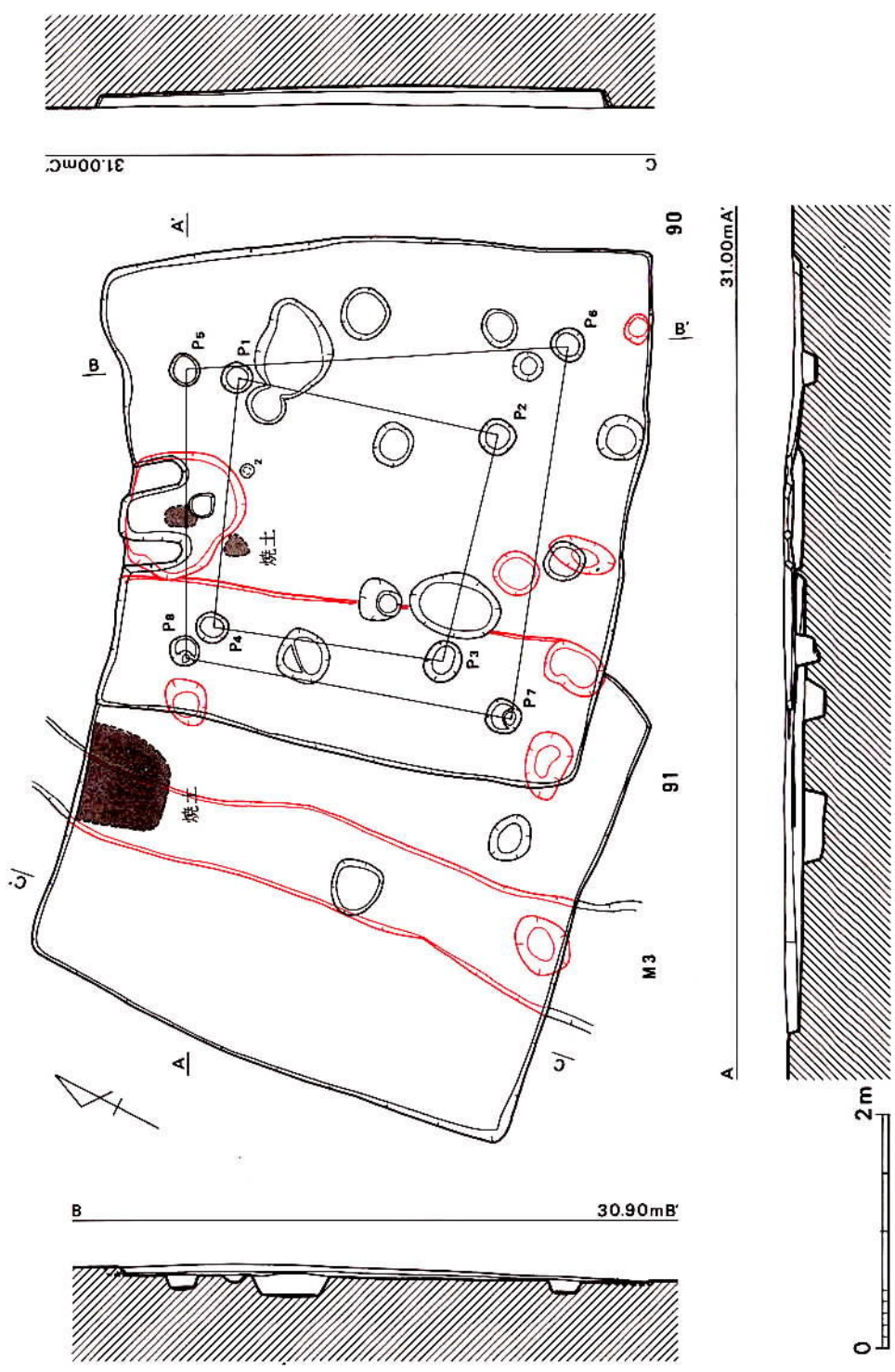


第195図 89号住居跡実測図 (1/60)

90号住居跡 (図版67-1, 第196図)

調査区の北東側に位置し、B群に属する。35号住居跡に切られ、91号住居跡を切っている。平面形は不整長方形を呈し、北西壁長3.7m、北東壁長4.66mを測る。当住居跡も下層遺構検出の際下げすぎてしまい、壁高は北西壁側で8cmを測る程度となってしまった。主柱穴はP5～8の4本(二次)で、径25cm前後、深さ10～20cmを測る。柱間はP5-6間3.26m、P5-8間2.48mの間隔を有する。埋土・カマド内から土器が出土した。

また、カマド左袖の前面には火床面が遺存しており、建替えがなされたものと考えられる。



第 196 图 90·91 号住居跡实测图 (1/60)

一次の支柱穴はP1～4の4本で、径26～34cm、深さ15cm前後を測る。柱間はP1～2間2.26m、P1～4間2.13mの間隔を有する。

カマド (第196図)

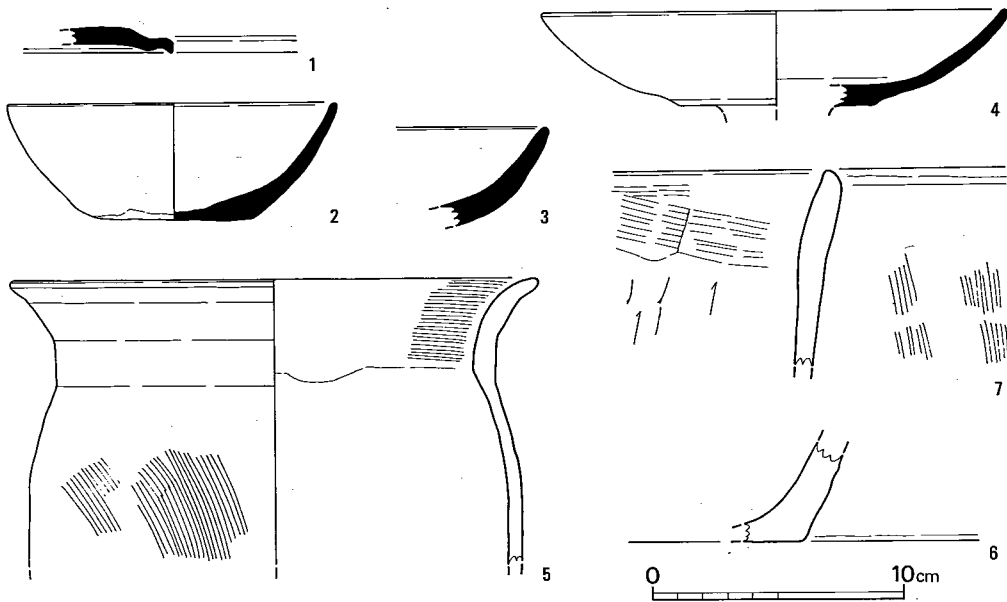
一次のカマドは、焼土を20cmの範囲で残すのみで、詳細は不明。

二次のカマドは、作り付け型のカマドで、北西壁に付設する。遺存状態は悪く、袖部を留める程度。右袖は残存長47cm、基底部幅30cm、残高5cmで、左袖は残存長57cm、基底部幅33cm、残高6cmを測る。壁体はあまり焼けていないが、火床面は18×28cmの範囲で焼けていた。支脚については不明。また、袖部の下層にはカマド構築時の不整形の掘り込みがある。カマドの埋土中から土器が出土した。

出土土器 (図版135-4, 第197図)

須恵器 (1～4) 1は坏蓋の口縁部小片で、口唇部は小さく立上がり、一旦屈曲した後天井部に移行する。2・3は坏で、2は器高4.7cm、口径13.0cmを測る。ともに口唇部は丸く納める。口縁部ヨコナデ、内外面ナデ調整による。4は無蓋高坏の口縁部破片で、口径は18.5cmに復原した。口唇部は丸く納める。焼成は良好で、緑灰色を呈する。

土師器 (5～7) 5・6は甕で、5は口縁部～胴部破片で、6は底部小片である。5の口縁部は大きく開き、肩部には張りがみられる。口縁部内面と胴部外面はハケ目調整による。7は甕の口縁部小片で、口唇部は上方に立つ。



第197図 90号住居跡出土土器実測図 (1/3)

91号住居跡（図版67-2，第196図）

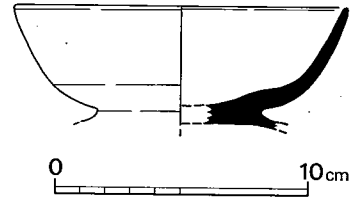
調査区の北東側に位置し，B群に属する。90号住居跡に切られ，3号溝を切っている。平面形は不整長方形を呈し，西壁長4.32m，南壁長4.06mを測る。当住居跡も下層遺構検出の際下げすぎてしまい，壁高は西壁側で10cmを測る程度となってしまった。床面にピットが数個存在するものの支柱穴は不詳。

カマド（第196図）

北壁中央に焼土を72×82cmの範囲で留めるのみで，壁体は削平されて詳細は不明。住居壁を掘り込んでいないことから作り付け型のカマドと考えられる。

出土土器（第198図）

須恵器 第198図は坏に横広がり脚台を付したもので，高台付き坏身とするよりは脚台付き椀とした方が妥当であろう。残高4.9cm，復原口径13.2cmを測る。口縁部はヨコナデ調整により，口唇部は丸く納める。焼成は良好で，色調は淡灰色を呈する。



第198図 91号住居跡出土土器
実測図（1/3）

92号住居跡（図版68-1，第200図）

調査区の北側に位置し，B群に属する。91号住居跡に切られ，93号住居跡・16号建物跡を切っている。下げすぎて南壁を失うが，平面形は長方形を呈しよう。北壁長3.96m，壁高は北壁側で8cm遺存する程度である。支柱穴は4本と考えられるが，P4は検出できなかった。柱穴は径24~38cm，深さ18~26cmを測る。柱間はP1-2間2.06m，P2-3間1.94mの間隔を有する。埋土・カマド付近から土器が出土した。

カマド（図版68-2，第200図）

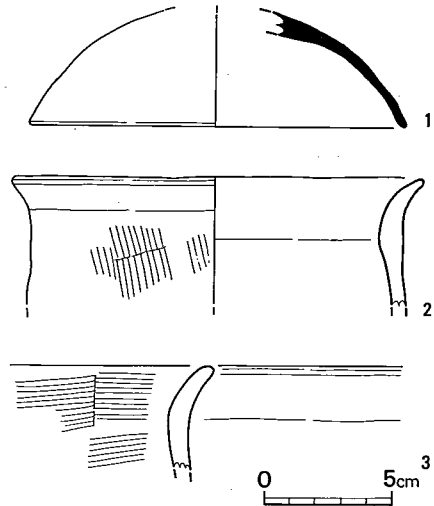
壁体は全く遺存せず，北壁から60cmの位置に焼土を留めるのみ。住居壁を掘り込んでいないことから作り付け型のカマドになるものと考えられる。焼土の北側から土器が出土した。

出土土器（図版135-5，第199図）

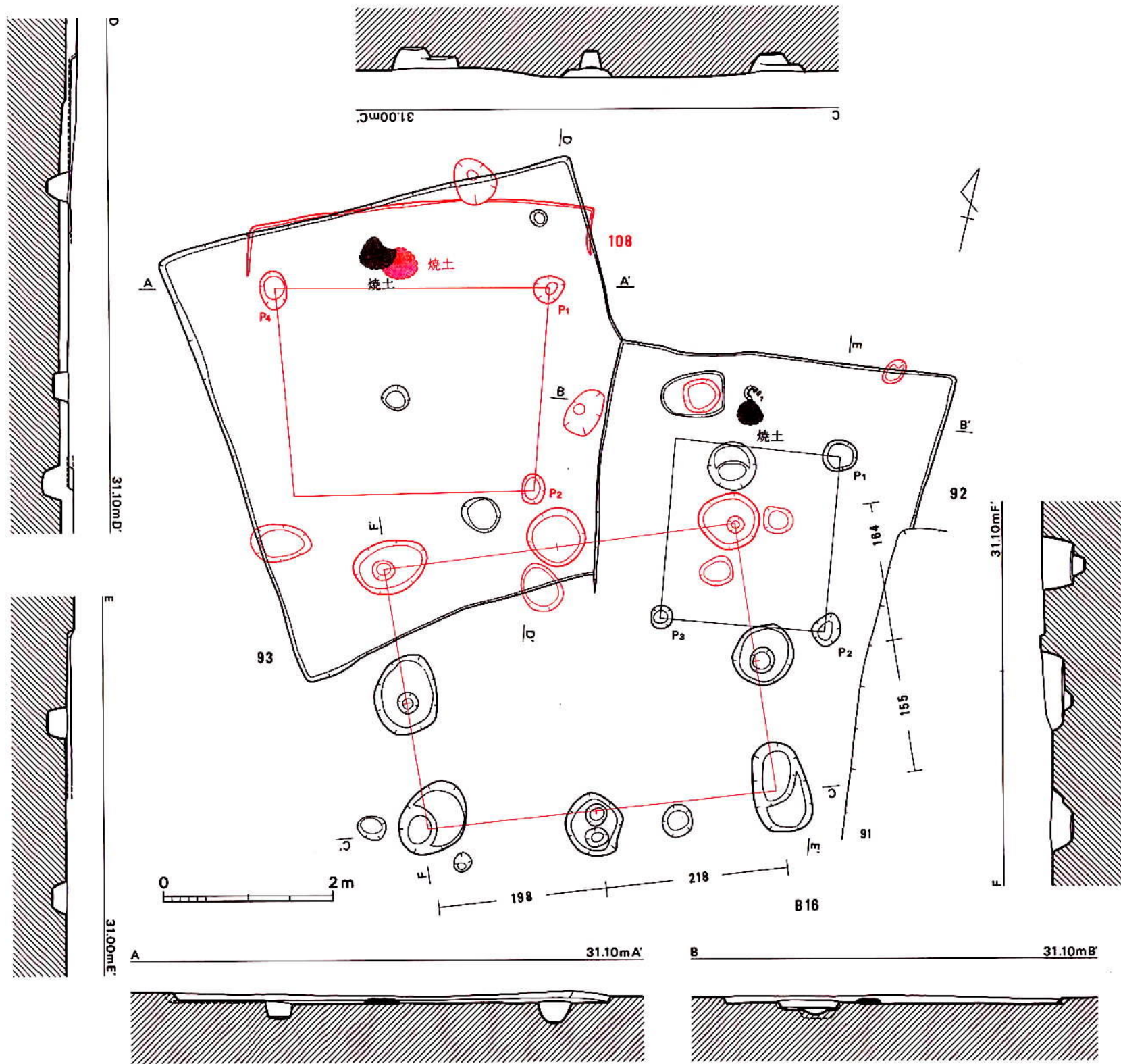
須恵器（1）1は坏蓋で，天井部はドーム状を呈する。口唇部は丸く納める。

土師器（2・3）2・3は甕の口縁部破片で，口縁部は大きく外反する。2の口径は16.4cmに復原した。外面に煤が付着する。

住居跡の時期は，6世紀末であろう。



第199図 92号住居跡出土土器実測図（1/3）



第 200 图 92·93·108号住居跡, 16号建物跡実測图 (1/60)

93号住居跡 (図版69-1, 第200図)

調査区の北東側に位置し、B群に属する。40・92号住居跡に切られ、16号建物跡を切っている。平面形は長方形を呈し、北西壁長5.0m、南西壁長5.28mを測る。当住居跡も下層遺構検出の際下げすぎでしまい、壁高は北西壁側で10cmを測る程度となってしまった。当初、柱穴はP1・2・4としていたが住居壁と平行に配されておらず、108号住居跡の住居壁とは平行に配されることから108号に伴うものと判断した。床面にピットが数個存在するが、当住居跡の主柱穴は不詳。埋土から土器・製塩土器が出土した。

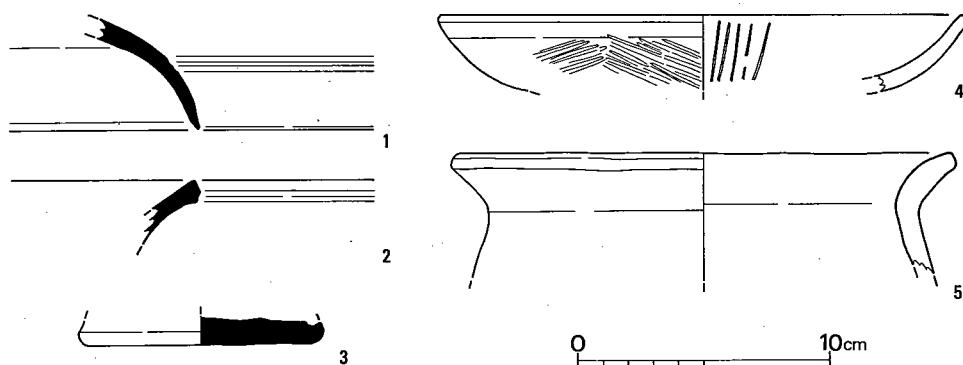
カマド (第200図)

壁体は全く遺存せず、北西壁から35cmの位置に焼土を留めるのみ。住居壁を掘り込んでいないことから作り付け型のカマドになるものと考えられる。

出土土器 (第201図)

須恵器 (1~3) 1は坏蓋で、天井部との境にヘラ沈線を施文する。口唇部はシャープで、内面に段を有する。焼成は堅緻で、色調は黒灰色を呈する。2は口縁部小片で、口縁端部は上方に立つ。広口壺・提瓶になるか。3は底部破片で、剝離している。底径は9.0cmに復原した。

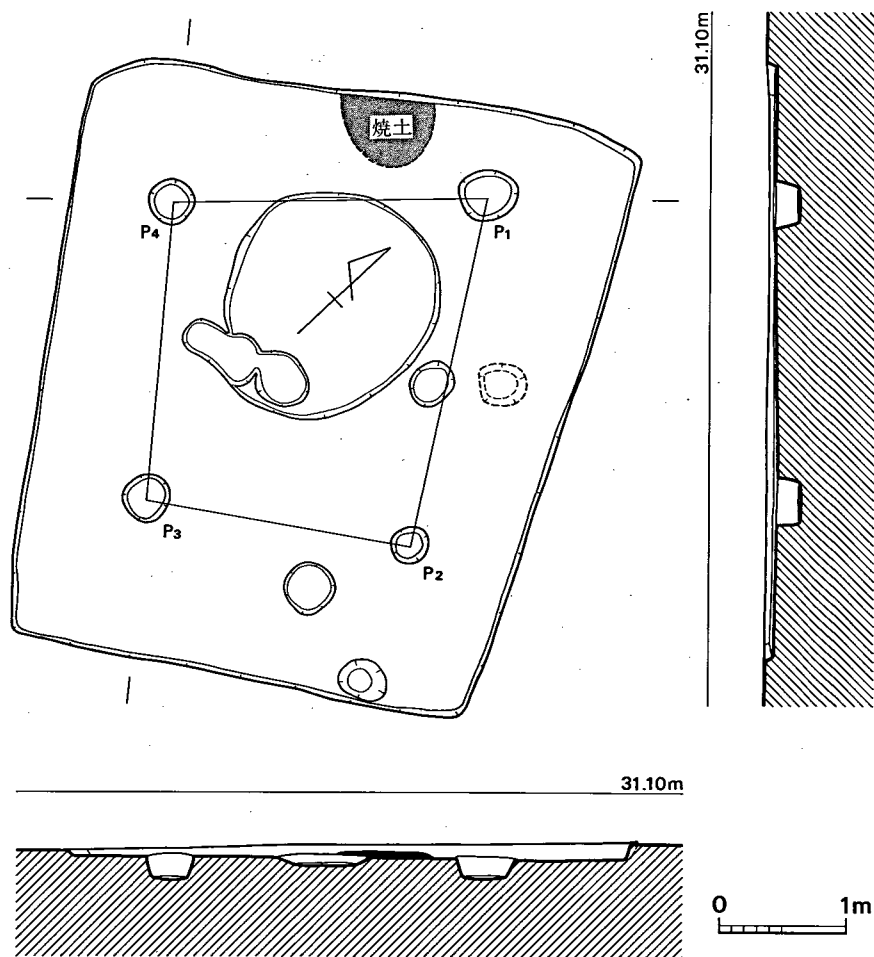
土師器 (4・5) 4は坏の口縁部破片で、口径は21cmに復原した。口唇部は丸く納める。外面細かいヘラミガキで、内面には暗文がみられる。胎土に長石・石英・赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、色調は暗橙色を呈する。5は甕の口縁部破片で、口径は19.6cmに復原した。口縁部は大きく外反する。外面は工具によるナデを施す。



第201図 93号住居跡出土土器実測図 (1/3)

94号住居跡 (図版69-2, 第202図)

93号住居跡のすぐ南西側に位置し、40号住居跡に切られる。平面形は隅丸長方形を呈し、北西壁長4.42m、南西壁長4.42m、南東壁長3.66mを測る。下層遺構検出の際に下げすぎたため壁



第 202 図 94号住居跡実測図 (1/60)

高は北西壁側で 8 cm 遺存する程度。主柱穴は P 1 ~ 4 の 4 本で、径 32 ~ 48 cm、深さは 20 cm 前後を測る。柱間は P 1 - 2 間 2.84 m、P 1 - 4 間 2.52 m の間隔を有する。遺物は埋土中から土器が出土したにすぎない。

カマド (第 202 図)

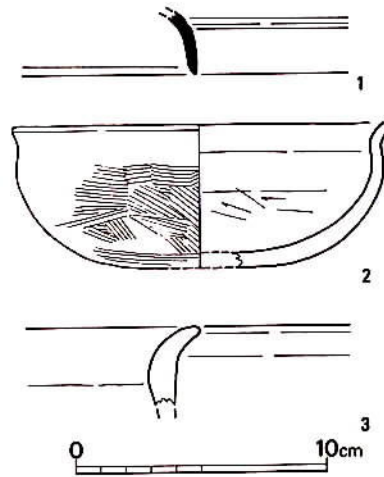
当住居跡のカマドも壁体は全く遺存せず、北西壁に 54 × 75 cm の範囲で焼土を留めるのみ。住居壁を掘り込んでいないことから作り付け型のカマドになるものと考えられる。

出土土器 (図版 135 - 6, 第 203 図)

須恵器 (1) 1 は坏蓋の口縁部破片で、口径は 12.6 cm に復原した。天井部との境にへら沈線を巡らす。口唇部内面の段は退化気味。焼成は堅緻で、色調は淡黒色を呈する。

土師器(2・3) 2は碗で、口径は14.8cmに復原した。口縁部は小さく屈曲し、丸底の底部に移行する。口縁部ヨコナデ、外面ハケ目(7~8条/cm)、内面工具ナデ調整による。3は甕の口縁部小片で、口縁部は大きく外反する。

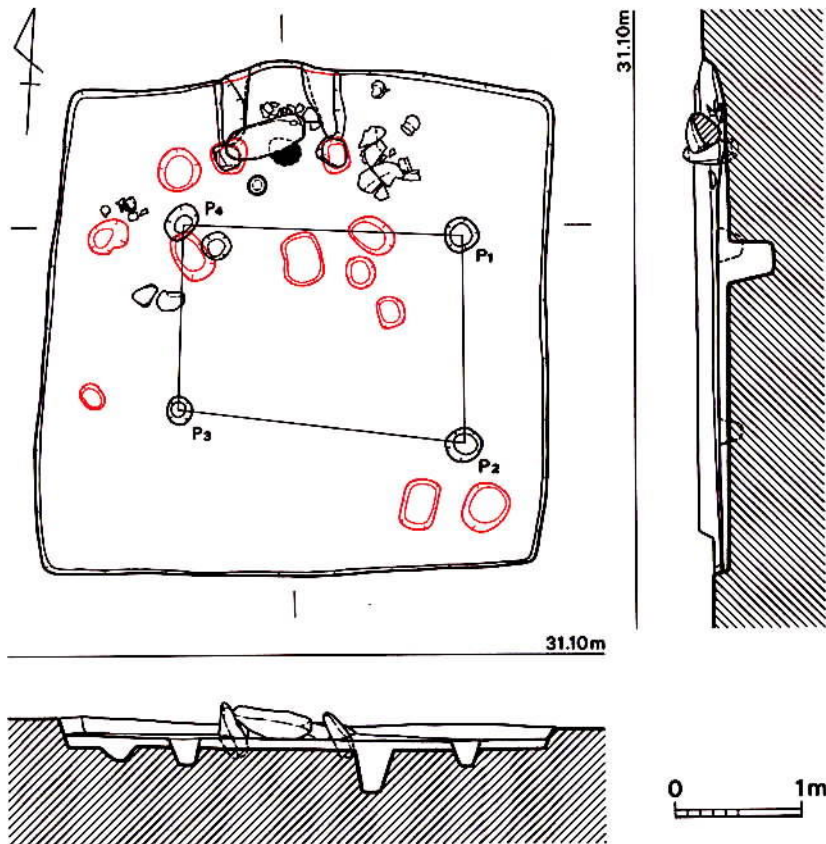
住居跡の時期は、6世紀半ばであろう。



第203図 94号住居跡出土土器実測図(1/3)

95号住居跡(図版71-1・72, 第204図)

調査区の中央に位置し、C群に属する。20号竪穴に南西コーナーを切られる。平面形は隅丸方形を呈し、北壁長3.83m、東壁長3.72m、壁高は北壁側で14cmを測る。

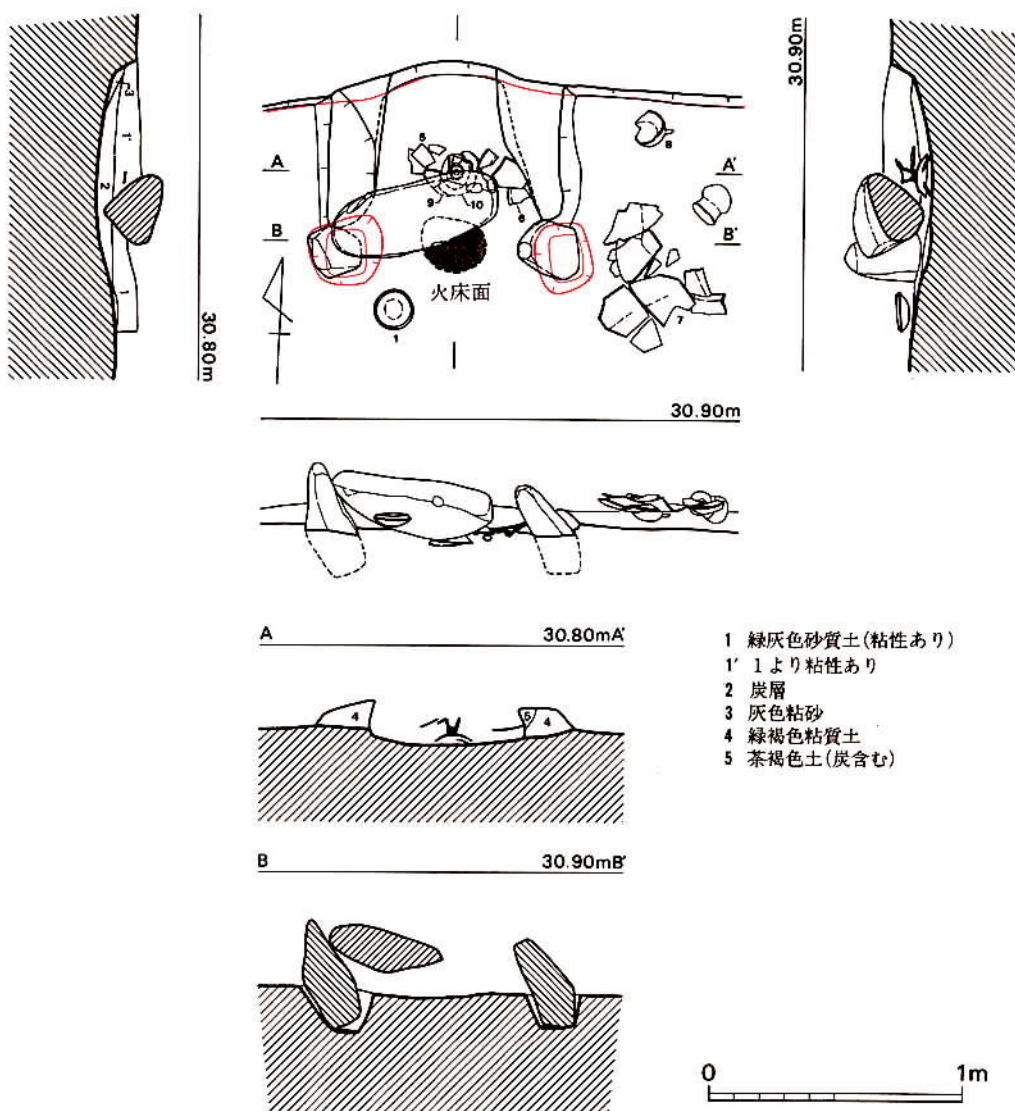


第204図 95号住居跡実測図(1/60)

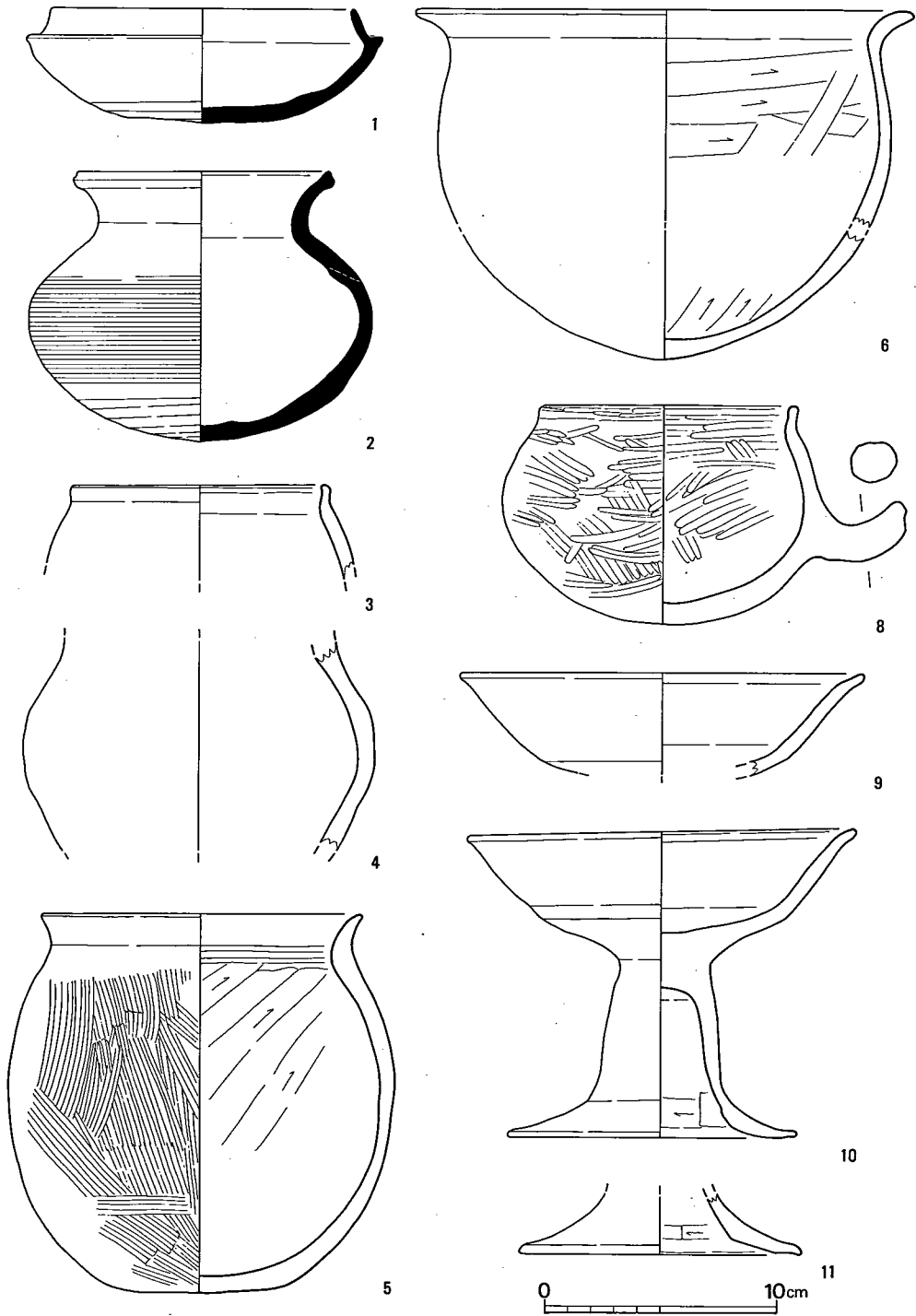
主柱穴はP1～4の4本で、径20～26cm、深さは20cm前後を測る。柱間はP1－2間1.64m、P1－4間2.23mの間隔を有する。カマド内及びカマドの周辺から土器が割合に多く出土した。

カマド (図版73・74-1, 第205図)

作り付け型のカマドで、北壁のほぼ中央に付設する。遺存状態は良好で、天井石を留めていた。袖石が傾き、天井石がずり落ちているが(図版73-1)、これは重機による掘り下げの際に



第205図 95号住居跡カマド実測図(1/30)



第 206 图 95号住居跡出土土器実測図① (1/3)

誤って引っ掛けたもので、本来は袖石に乗った状態であったと推測される（図版74-1）。右袖は長さ51cm、基底部幅30cm、残高12cmで、左袖は長さ48cm、基底部幅28cm、残高11cmを測る。袖部の先端には長さ40~45cmの河原石を立てており、その上に長さ68cm、幅26cmの天井石を懸架する。焚口幅は60cm、焚口の高さは復原すると20cm程になる。

壁体はよく焼けており、火床面は焚口付近が20cmの範囲で焼けていた。支脚は高坏を倒立させて使用している。埋土中及び周辺から土器が出土した。

出土土器（図版135-7・136-1、第206・207図）

須恵器（1・2）1は坏身で、たちあがりは内傾する。器高4.9cm、口径13.1cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、外面回転ヘラケズリ、内面ナデによる。焼成はやや軟質で、色調は灰色を呈する。2は小型の広口壺で、器高11.5cm、口径10.7cmを測る。口縁部は大きく開き、端部は上方に立つ。頸部は締り、よく張った胴部から尖り気味の底部に移行する。口縁部ナデ、胴部中位カキ目、胴部下位回転ヘラケズリ、内面ナデ調整による。焼成は堅緻で、黒灰色を呈する。

土師器（3~11）3は口縁部小片で、口縁部は上方に立つ。口径は11.0cmに復原した。短頸壺とすべきか。4は胴部破片で、胴部中位がよく張っていることから壺になろう。

5~7は甕で、5・6は小型、7は長胴である。

5は器高16.1cm、口径13.7cmを測る。口縁部はS字状に屈曲する。底部は平底である。口縁部ヨコナデ、外面ハケ目（6~7条/cm）、内面ヘラケズリ調整による。外面には煤が付着している。

6の口頸部と底部は接合しないものの、同一個体として実測した。口縁部は大きく外反する。

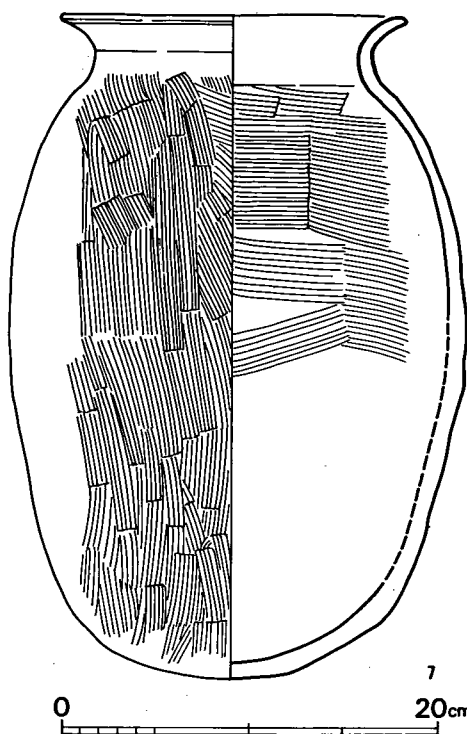
7は長胴の甕で、器高35.8cm、口径17.5cmを測る。口縁部は鉤状に屈曲する。外面縦方向のハケ目、内面横方向のハケ目調整による。

8は取っ手付き椀で、口縁部を上方に立上げる。胴部中位に大きめの取っ手を貼付する。内外面ともヘラミガキ調整による。また、3の口縁部は8に類似することから取っ手付き椀が妥当か。

9~11は高坏で、10は支脚に転用していた。

9・10の口縁部は大きく開き、口唇部が屈曲する。脚柱部はエンタシス状を呈する。器高16.5cm、口径16.5cm、脚径13.0cmを測る。

住居跡の時期は、6世紀後半であろう。



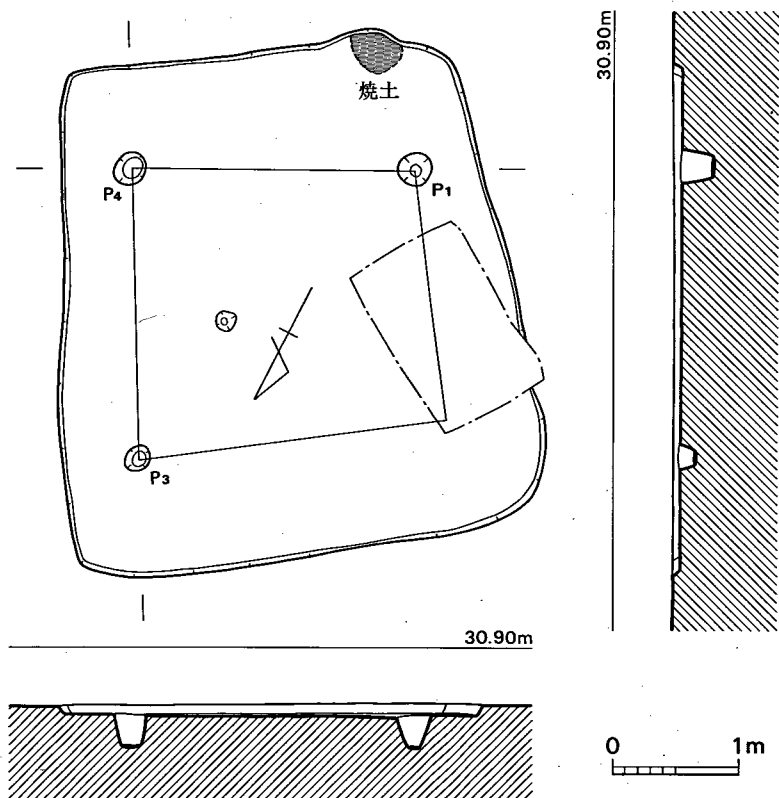
第207図 95号住居跡出土土器実測図②（1/4）

96号住居跡 (図版71-2, 第208図)

95号住居跡の2.4m東側に位置し, C群に属する。74号住居跡の20cm下層にあたり, 23号竪穴を切っている。平面形は不整長方形を呈し, 南東壁長3.02m, 北東壁長3.9mを測る。壁高は南東壁側で8cmを測る。主柱穴はP1~4本で, P2はトレンチに切られて存在しない。柱穴は径18~26cm, 深さ14~26cmを測る。柱間はP1-4間2.24m, P3-4間2.31mの間隔を有する。埋土中から須恵器・土師器小片が出土しているが, 図示に耐えない。

カマド (第208図)

南東壁の南コーナー付近に付設しているが, 遺存状態は悪く焼土を留めるのみ。住居壁を掘り込んでいることから突出型のカマドになろう。



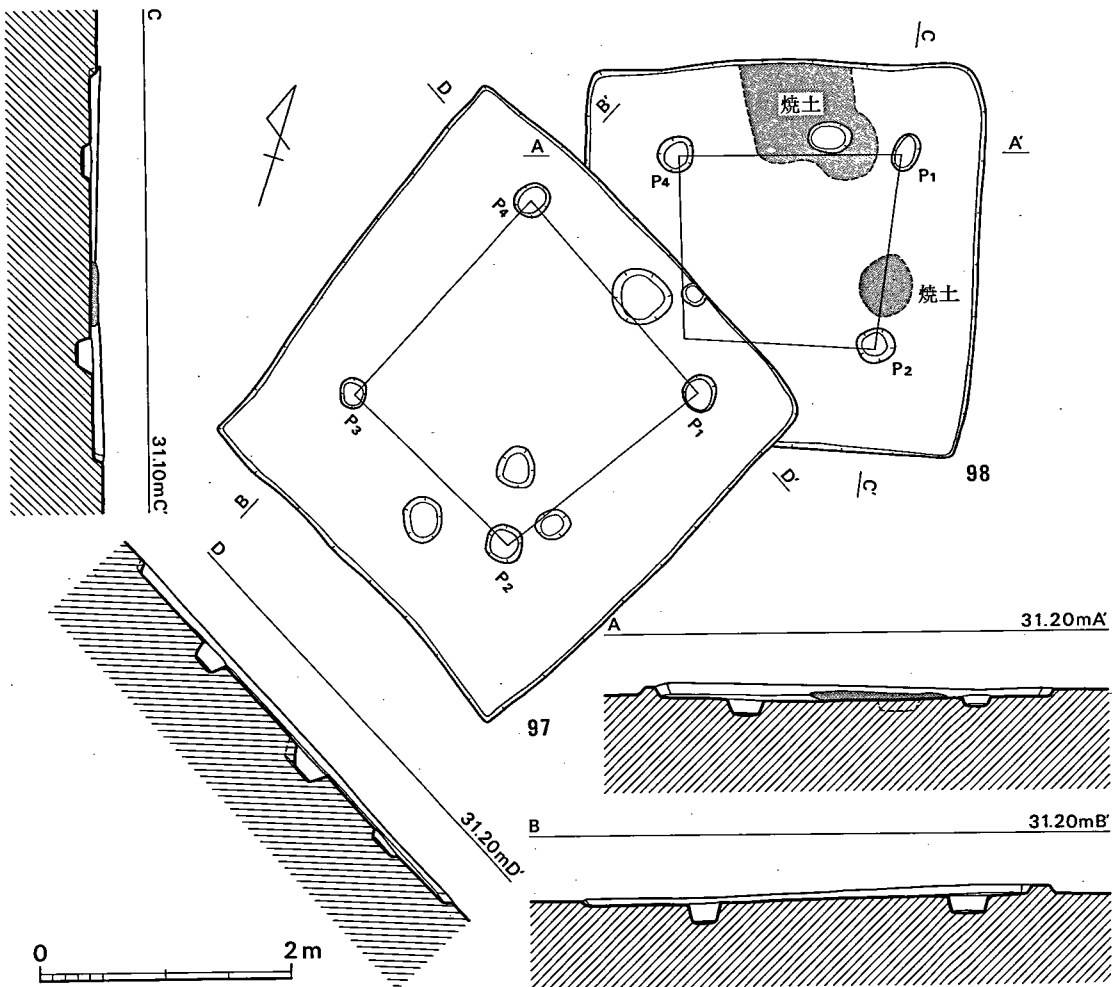
第208図 96号住居跡実測図 (1/60)

97号住居跡 (図版76-1, 第209図)

B群に属し, 41・42号住居跡床面の15cm下層で検出した住居跡で, 98号住居跡を切っている。平面形は方形を呈し, 北東壁長3.57m, 南東壁長3.52m測る。壁高は北東壁側で7cmを測る程度。支柱穴はP1~4の4本で, 径30cm前後, 深さ8~15cmを測る。柱間はP1-2間1.94m, P1-4間2.03mの間隔を有する。カマドは全く遺存しないが, 北東壁側に焼土が若干存在するので, 北東壁側に付設していた可能性が高い。埋土中から土器・製塩土器が出土した。

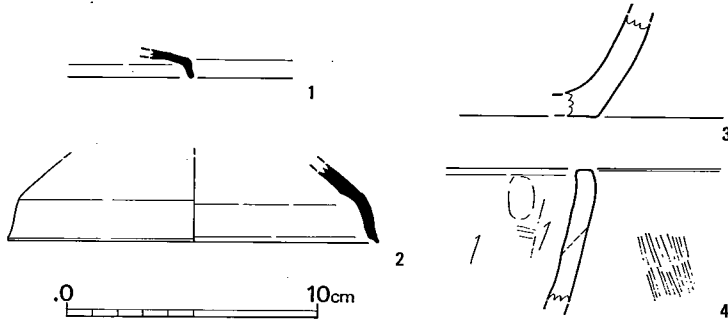
出土土器 (第210図)

須恵器 (1・2) 1・2は坏蓋で, 1の口縁部は小さく立つ。2の口唇部はシャープで, 内面に稜を有する。天井部を欠くが, ドーム状になろう。口径は14.8cmに復原した。



第209図 97・98号住居跡実測図 (1/60)

土師器（3・4）3は甕の底部破片で、平底を呈しよう。4は甑の口縁部小片で、口唇部には5mm程の平坦面を有する。



第210図 97号住居跡出土土器実測図 (1/3)

98号住居跡（図版76-1，第209図）

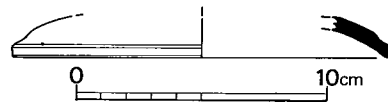
97号住居跡に南西コーナーを切られる。平面形は方形を呈し、北壁長3.02m，東壁長3.1mを測る。壁高は北壁側で10cm遺存する。主柱穴は4本と考えられるが、P3を検出し得ていない。径30cm前後，深さ10~15cmを測る。柱間はP1-2間1.57m，P1-4間1.17mの間隔を有する。埋土中から土器が出土した。

カマド（第209図）

壁体は全く遺存せず，北壁中央に焼土を残すのみ。住居壁を掘り込んでいないことから作り付け型のカマドになると考えられるが詳細は不明。また，P2のやや北側に焼土があり，もう1軒住居が存在していたものか。

出土土器（第211図）

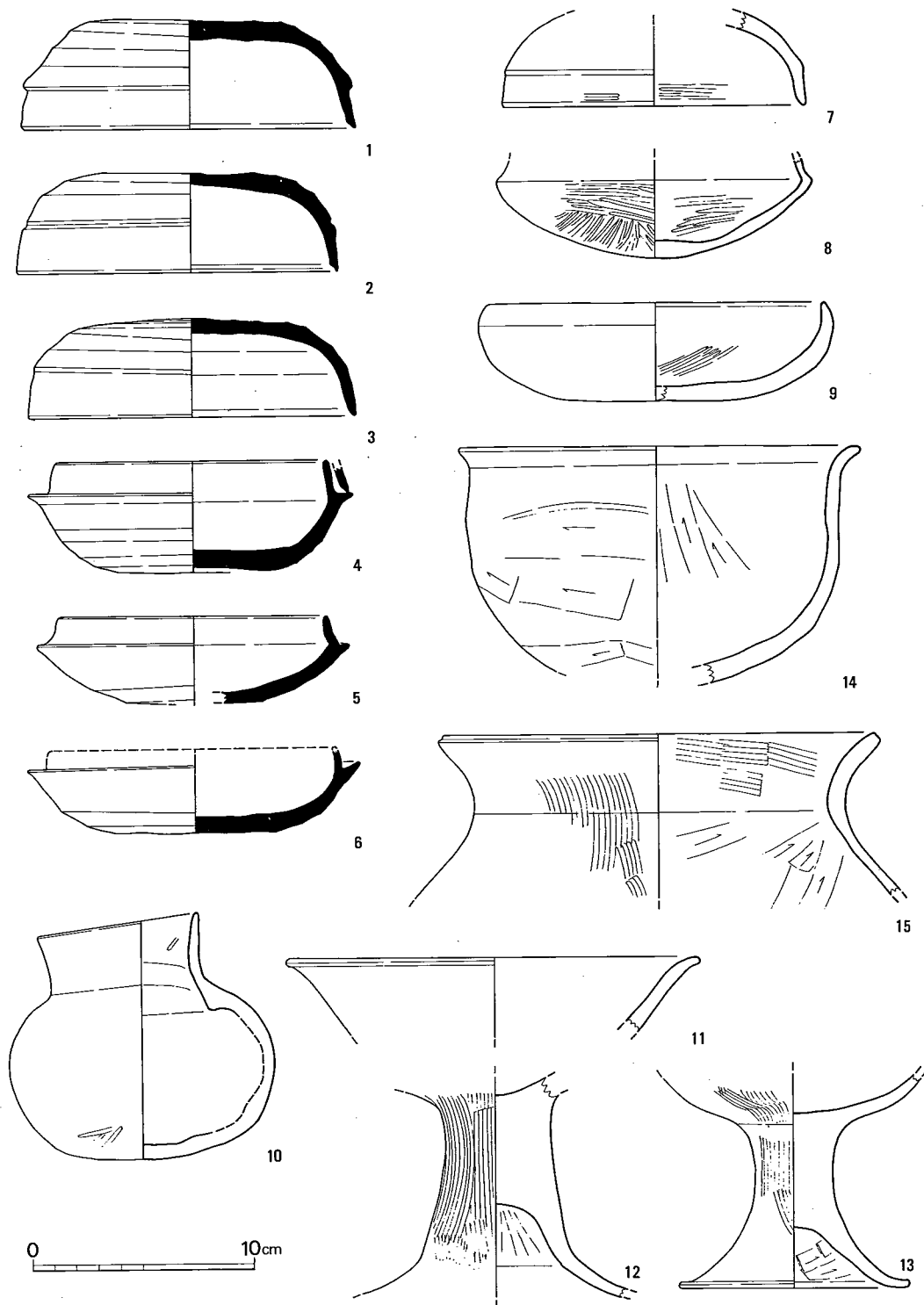
須恵器 坏蓋の口縁部小片で，口唇部は小さく立つ。天井部を欠くものの低い器高を呈しよう。焼成は堅緻で，色調は灰色を呈する。



第211図 98号住居跡出土土器実測図 (1/3)

99号住居跡（図版75，第216図）

調査区の中央に位置し，C群に属する。78号住居跡に切られ，100号住居跡を切っている。平面形は長方形を呈し，北西壁長4.57m，南西壁長4.28mを測る。壁高は北西側で19cm遺存する。床面で数個のピットを検出したが，主柱穴は判然としない。埋土中から多量の土器が出土した。また，ミニチュア土器の出土もみられた。



第 212 图 99号住居跡出土土器実測図① (1/3)

カマド (第216図)

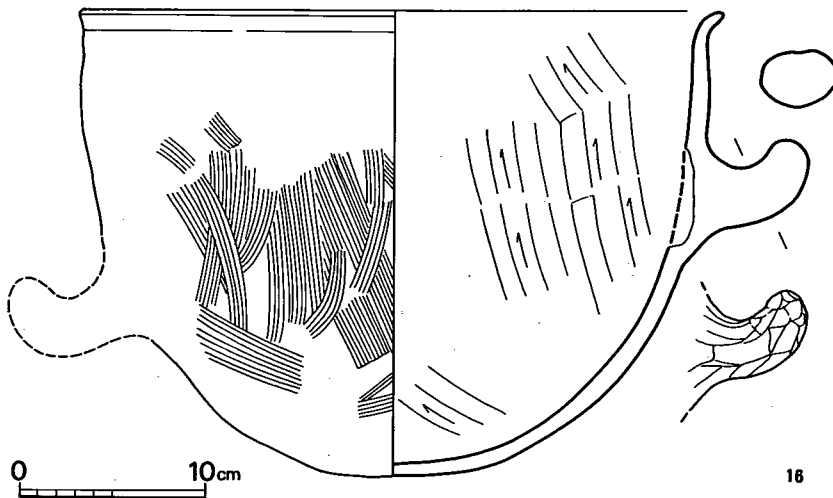
作り付け型のカマドで、南壁コーナーに付設する。遺存状態は悪く、袖部を留める程度。右袖は残存長75cm、基底部幅25cm、残高13cmで、左袖は残存長63cm、基底部幅28cm、残高18cmを測り、砂質土を盛っていた。支脚については不詳。壁体・床面はさほど焼けておらず、カマドとするにはやや貧弱な感がある。

出土土器 (図版136-2・137-1, 第212・213図)

須恵器 (1~6) 1~3は坏蓋である。1の天井部外面の稜は退化傾向にあり、2・3のそれは沈線と化している。何れも口唇部はシャープで、1・2は口唇部内面に段を有する。口縁部ヨコナデ、外天井部回転ヘラケズリ、内面回転ナデ調整による。器高は1が5.0cm、2は4.5cm、3は4.4cmで、口径は1が15.0cm、2は14.2cm、3は14.9cmを測る。

4~6は坏身で、口縁部は内傾する。4は深めで、受部には坏蓋の口縁部が融着している。6は口唇部を欠く。調整は何れも口縁部ヨコナデ、外面回転ヘラケズリ、内面ナデによる。4は器高4.8cm、口径12.2cmを測る。

土師器 (7~16) 7は坏蓋で、須恵器を模倣したもの。天井部との境には稜を有し、口唇部は丸く納める。磨滅が著しいが、口縁部内外面にはヘラミガキがみられる。焼成は良好で、色調は雲母・角閃石を含む。8は口縁部が内傾するもので、坏身を模したもののか。内外面とも細かいヘラミガキ調整による。胎土に長石・石英・赤褐色粒を含むものの精良で、色調は暗褐色を呈する。9は坏で、口縁部は内湾する。器高は4.4cm、口径は15.2cmに復原した。口縁部ヨコナデ、内面ヘラミガキ、外面ヘラミガキ・ナデ調整による。



第213図 99号住居跡出土土器実測図② (1/4)

10は直口壺で、器高10.6cm、口径7.1cmを測る。口縁部は直立気味に立上がる。器面の磨滅が著しいが、ヘラミガキを留める。11～13は高坏で、11は口縁部破片、12・13は脚部破片である。11の口縁部は逆ハ字形に大きく開く。12・13の脚柱部は中実で、ハケ目調整を施す。11の口径は18.8cmに復元した。

14は小型の甕で、口縁部は大きく開く。口径は17.9cmに復元した。内外面ともヘラケズリ調整を施す。15は甕の口縁部破片で、口径は19.4cmに復元した。16は取っ手付き鉢で、口縁部は外方に屈曲する。外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整による。器高24.4cm、復元口径は34.9cmを測る。

時期は、6世紀中～後半。

100号住居跡(図版76-2, 第216図)

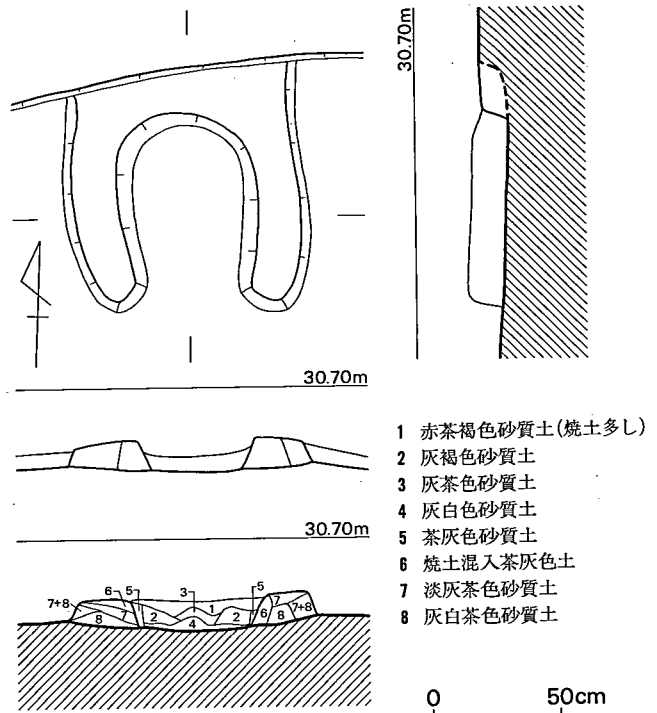
C群に属し、99号住居跡・45号土壇・3号溝に切られる。平面形は不整形を呈するが、大半を切られ、規模は測り得ない。支柱穴は4本で、径18～26cm、深さは6cmと浅い。柱間はP1-2間2.12m、P1-4間2.62mを測る。

カマド(図版76-3, 第214図)

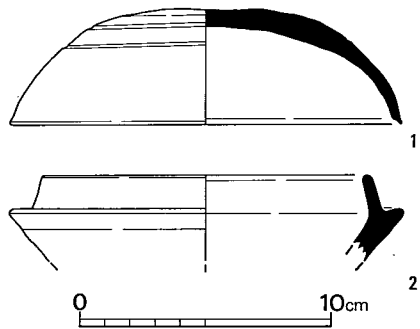
作り付け型のカマドで、北壁のやや左寄りに付設する。遺存状態は悪く、袖部を留める程度。右袖は残存長98cm、基部幅27cm、残高11cmで、左袖は残存長91cm、基部幅27cm、残高11cmを測る。壁体・火床面はさほど焼けていない。

出土土器(図版137-2, 第215図)

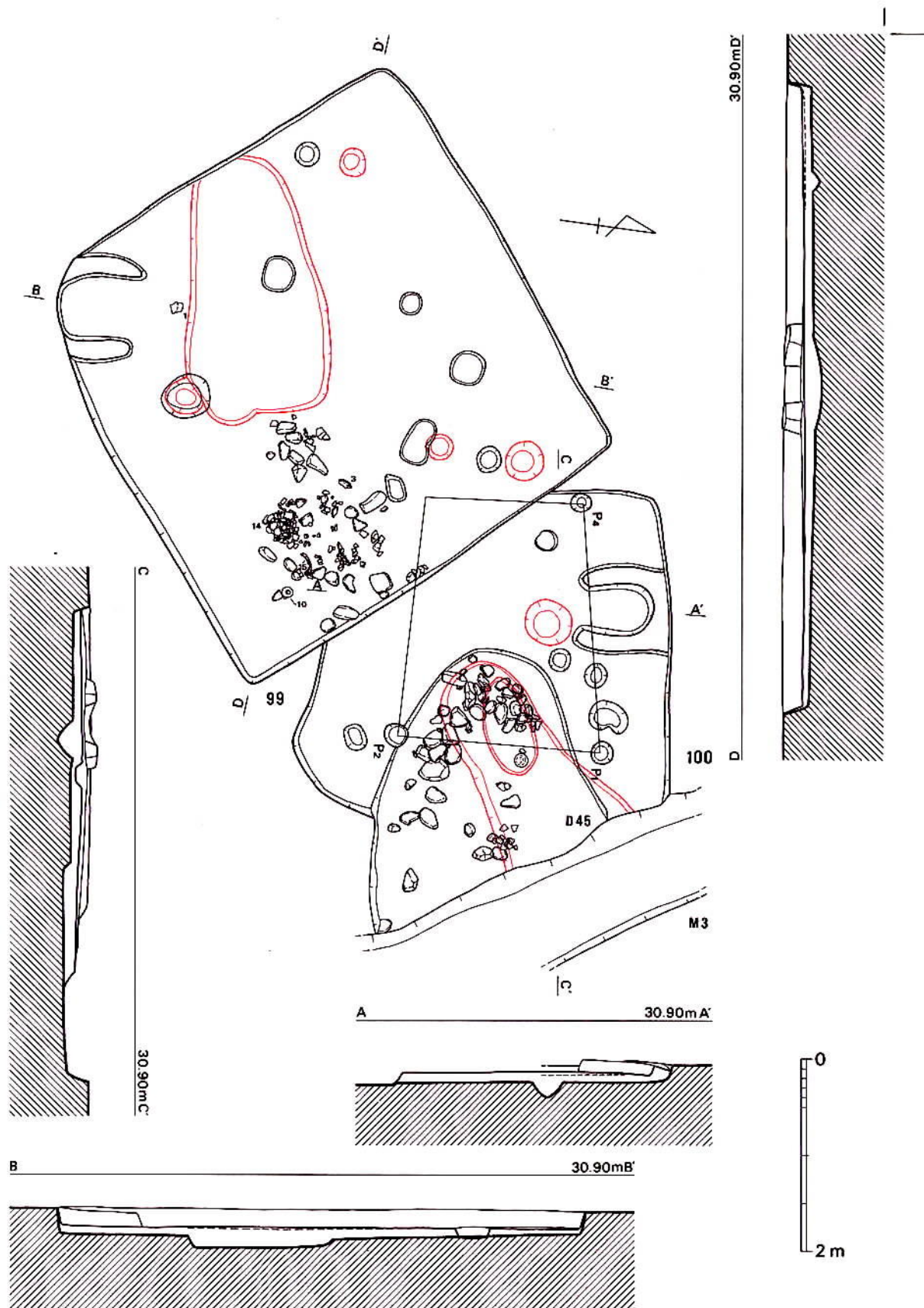
須恵器(1・2) 1は坏蓋で、器高4.4cm、口径15.4cmを測る。口唇部はシャープで、内面には段を有する。天井部外面にはヘラ沈線を2段に巡ら



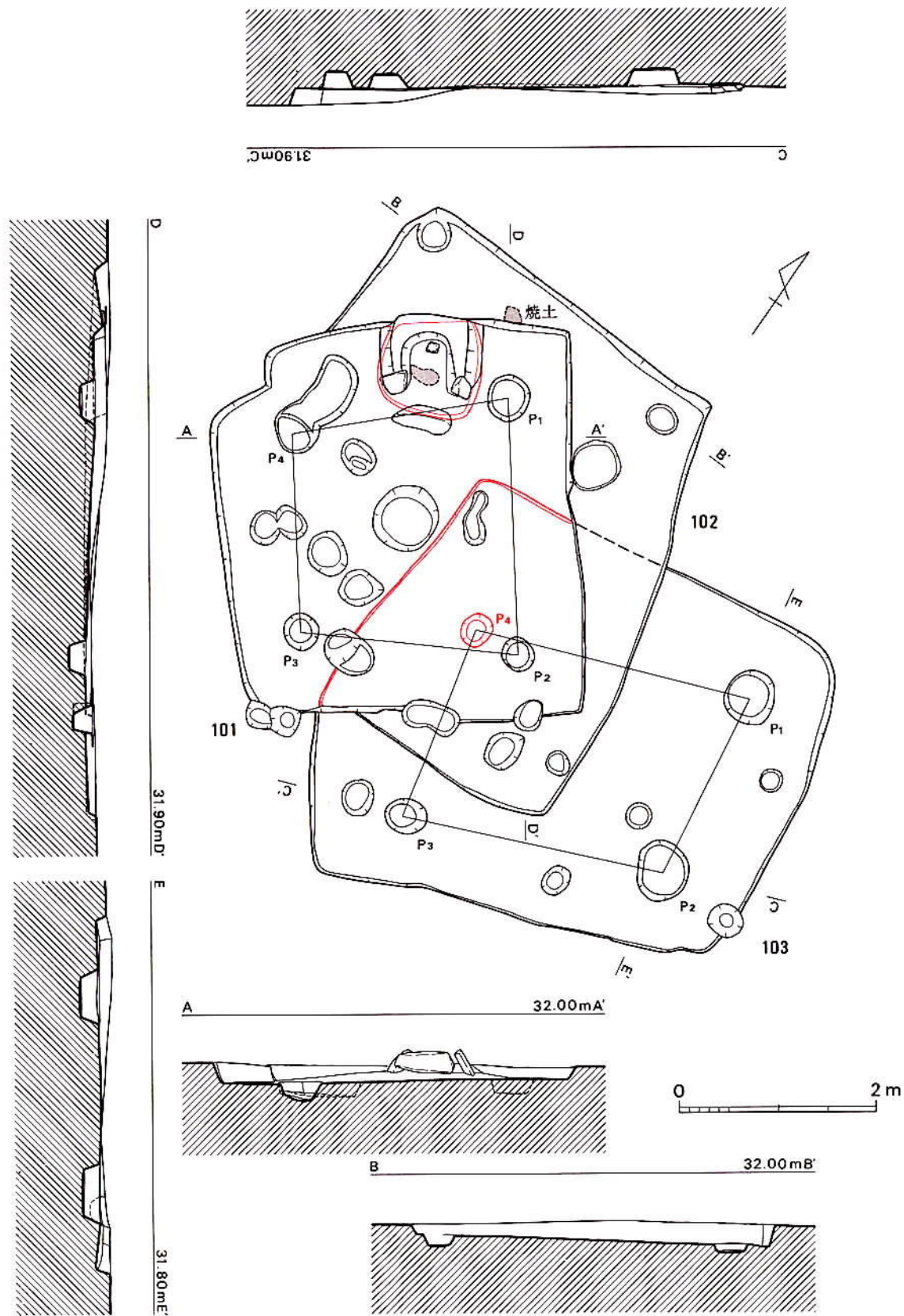
第214図 100号住居跡カマド実測図(1/30)



第215図 100号住居跡出土土器実測図(1/3)



第 216 图 99·100号住居跡，45号土壤実測図 (1/60)



第 217 图 101~103号住居跡実測图 (1/60)

す。口縁部ヨコナデ、天井部回転ヘラケズリ、内面ナデ調整による。焼成は堅緻で、色調は暗灰色を呈する。2は坏身の口縁部破片で、口径は12.8cmに復原した。受部は肥厚する。焼成は軟質で、色調は黄白色を呈する。

住居跡の時期は、6世紀半ばであろう。

101号住居跡（図版78-1，第217図）

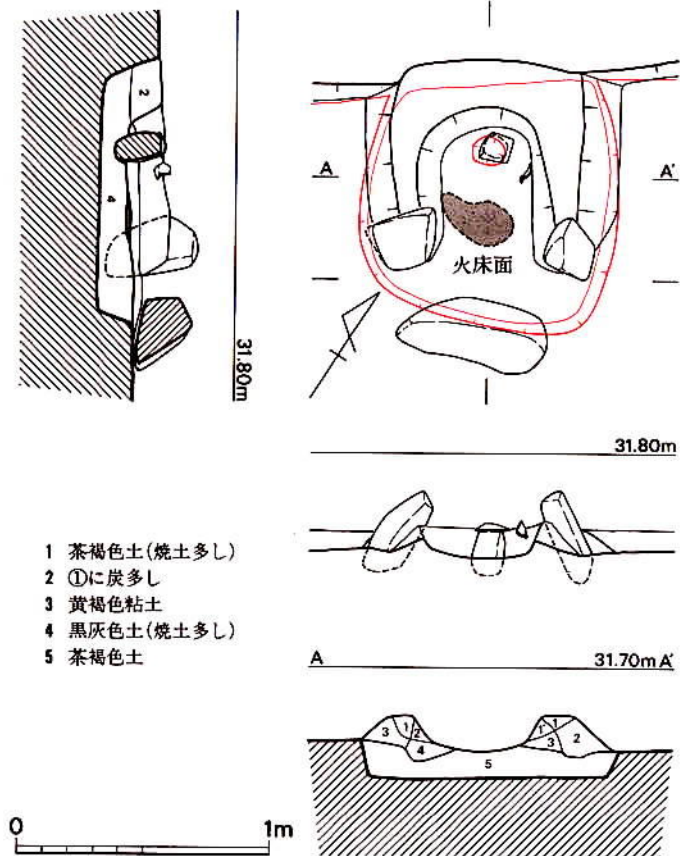
調査区南西端で、F群に属する。81・82号住居跡床面の下層で検出した住居跡で、102・103号住居跡を切っている。平面形は長方形を呈し、北西コーナーに段がみられる。北西壁長3.07m、北東壁長3.84m、南東壁長3.32mを測る。壁高は南西壁側で18cm遺存する程度。支柱穴はP1～4の4本で、径36～46cm、深さ15～22cmを測る。柱間はP1－2間2.56m、P1－4間2.18mの間隔を有する。埋土・カマド内から土器・製塩土器が出土した。

カマド（図版78-2，第218図）

作り付け型のカマドで、北西壁のやや右寄りに付設する。遺存状態は良好で、袖石・支脚を留めていた。本来、天井石は袖石の上に乗っていたものと考えられるが、手前に落ちていた。

右袖は長さ58cm、基底部幅35cm、残高14cmで、左袖は長さ50cm、基底部幅30cm、残高13cmを測り、袖部の先端に長さ40cm前後の袖石を立てている。天井石は長さ60cm、幅26cmで、袖石の手前にずり落ちていた。壁体はよく焼けており、火床面は18×30cmの範囲で焼けていた。

支脚は長さ20cmの河原石を立てており、上部には甕の胴

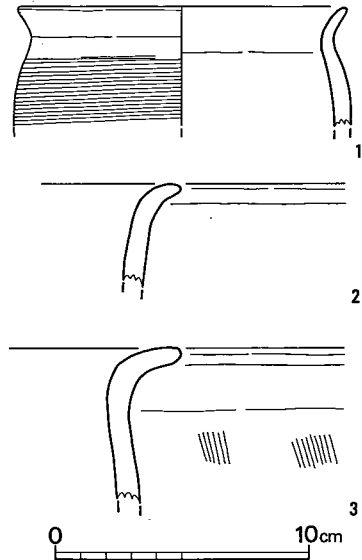


第218図 101号住居跡カマド実測図 (1/30)

部片を乗せている。また、カマドの下層には、100cm程の方形の掘り込みがあり、それを一旦埋めて袖部を構築している。埋土中から土器が出土した。

出土土器 (第219図)

土師器 (1~3) 1~3は甕で、1は小型品で、2・3は口縁部小片である。1は復原口径13.0cmで、口縁部は斜め外方に屈曲する。口縁部ヨコナデ、内面カキ目調整による。2は口縁部小片で、口唇部は小さく屈曲する。ヨコナデ調整による。3も口縁部小片で、口縁部は逆L字形に屈曲する。口縁部はヨコナデ、胴部は磨滅が著しいが、外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整による。何れも、胎土に長石・石英・赤褐色粒を含む。



第219図 101号住居跡出土土器実測図 (1/3)

102号住居跡 (図版78-1, 第217図)

調査区の南西側に位置し、F群に属する。101号住居跡に切られ、103号住居跡を切っている。101号住居跡に大半を切られるが、北壁長3.42m、東壁長4.44mを測り、平面形は長方形を呈しよう。壁高は北壁側で22cm遺存する。主柱穴は判然としない。須恵器・土師器小片が出土しているが、図示不可能。

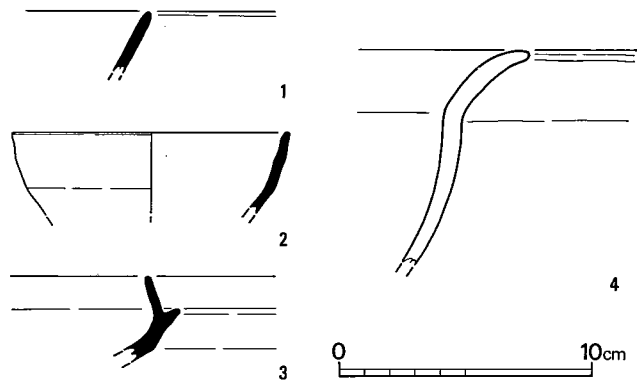
カマド (第217図)

壁体は全く遺存せず、北壁側に焼土を残すのみで、詳細は不明。

103号住居跡 (第217図)

102号住居跡に北西側を1/4程切られて位置する。東壁長3.32m、南壁長3.86mを測り、平面形は不整長方形を呈する。壁高は北壁側で10cm遺存する程度。

主柱穴はP1~4の4本で、径34~54cm、深さ10cm前後を測る。柱間はP1-2間1.95m、P1-4間2.82mの間隔を有する。カマドは付設していたものと考えら



第220図 103号住居跡出土土器実測図 (1/3)

れるが、焼土さえも留めていない。埋土中から土器が出土した。

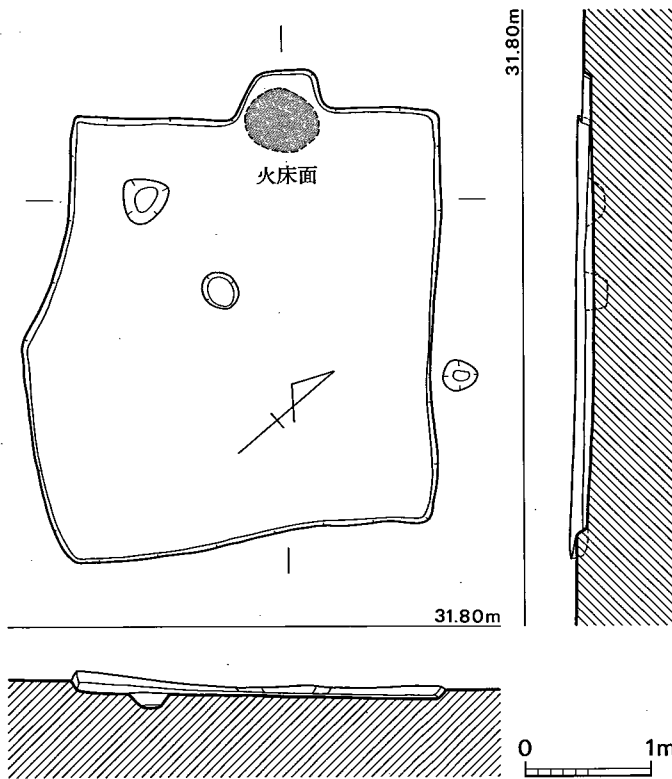
出土土器（第220図）

須恵器（1～3）1は口縁部小片で、口唇部は丸く納める。坏身になるか。2も口縁部小片で、口径は11.0cmに復原した。碗として実測したが、短頸壺の蓋になる可能性を有する。焼成は堅緻で、色調は黒灰色を呈する。3は坏身の口縁部小片で、たちあがりは内傾する。焼成は堅緻で、色調は灰青色を呈する。

土師器（4）口縁部破片で、大きく外反する。頸部からすぐさま底部に移行することから鉢になろう。胎土に長石・石英・雲母を多く含む。

104号住居跡（図版79-1，第221図）

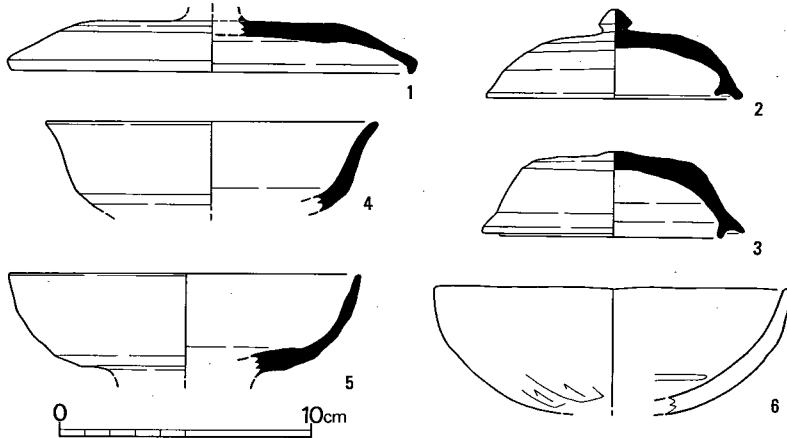
調査区の西側に位置し、22号土壌の50cm下層で検出した。平面形は長方形を呈し、北西壁長2.89m、北東壁長3.29mを測る。壁高は南西壁側で8cmを留める程度。床面には主柱穴とし得るピットはない。埋土中から土器・鉄器が出土した。



第 221 図 104号住居跡実測図 (1/60)

カマド (図版79-2, 第221図)

突出型のカマドで、北西壁のやや右寄りに付設する。カマド掘方は幅72cm, 奥行き33cmを測る。火床面は40×60cmの範囲でよく焼けていた。



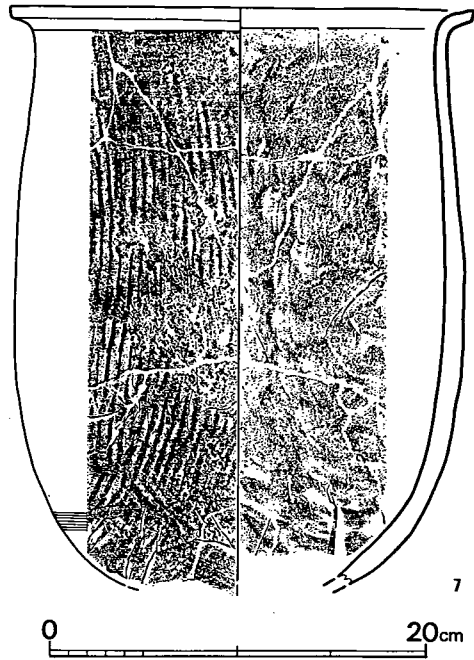
第222図 104・105号住居跡出土土器実測図 (1/3)

出土土器 (第222・223図)

須恵器 (1~5) 1は坏蓋で、口唇部は小さく立つ。天井部は低く、平坦である。残高2.2cm, 復原口径16.0cmを測る。調整は口縁部回転ナデ, 外天井部回転ヘラケズリ, 内面ナデによる。4は口縁部破片で、口唇部はシャープである。高台付きの坏身になろう。調整は回転ナデによる。口径は13.2cmに復原した。

5は無蓋高坏の口縁部破片で、口径は14.0cmに復原した。口縁部は回転ナデ調整を施し、口唇部は割にシャープである。

土師器 (6・7) 6は椀で、口唇部は丸く納める。口縁部ヨコナデ, 内面ヘラミガキ, 外面ケズリを施す。胎土に長石・石英・赤褐色粒を含む。7は長胴の甕で、口縁部は水平気味に開く。頸部からやや張りをみせ、



第223図 104号住居跡出土土器実測図 (1/4)

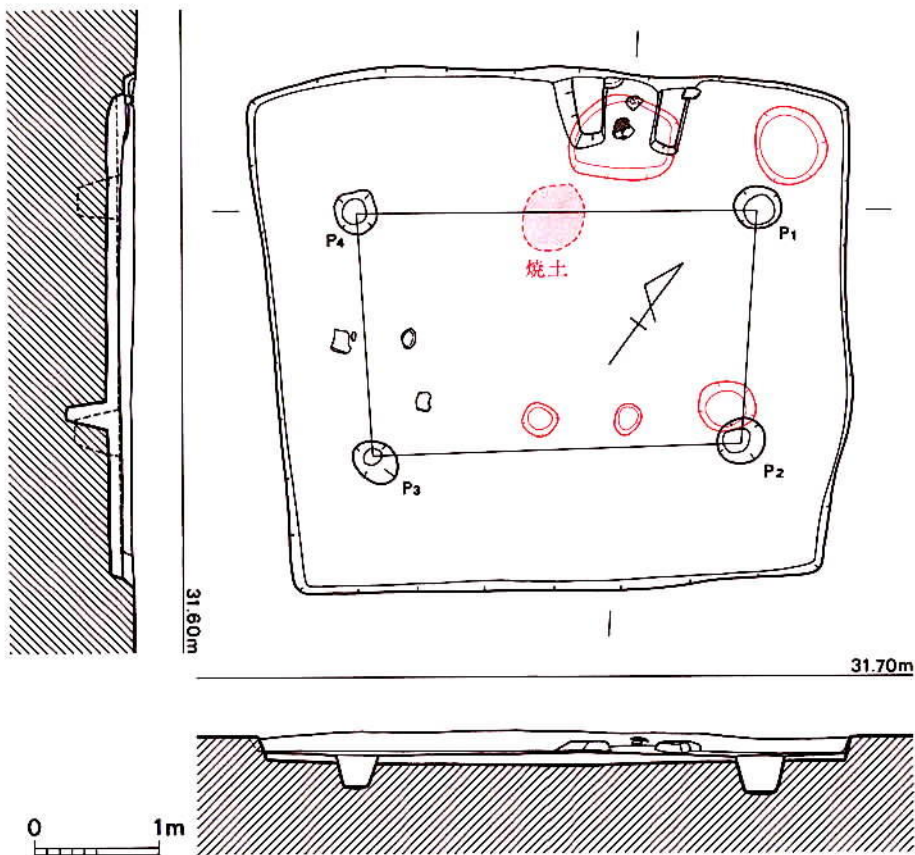
下膨れの胴下半部に移行する。口縁部ヨコナデ、外面平行タタキ目、内面円弧タタキ目調整による。また、胴下半部にはカキ目を施す。胎土に長石・石英・赤褐色粒を含む。焼成は良好で、色調は橙褐色を呈する。残高31.2cm、復原口径24.0cmを測る。時期は、8世紀中葉であろう。

105号住居跡

104号住居跡の北側に位置する。柱穴・カマドは判然とせず、住居跡としてよいものか不明。
出土土器 (図版137-3, 第222図)

須恵器 (2・3) 2・3は口縁部内面にかえりを有する坏蓋で、2の天井部には乳頭状の撮みを付す。調整は口縁部回転ナデ、外天井部回転ヘラケズリ、内面ナデによる。器高は2が3.5cm, 3は3.2cmで、口径は2が10.2cm, 3は8.8cmを測る。7世紀中葉であろう。

106号住居跡 (図版80-1, 第224図)



第 224 図 106号住居跡実測図 (1/60)

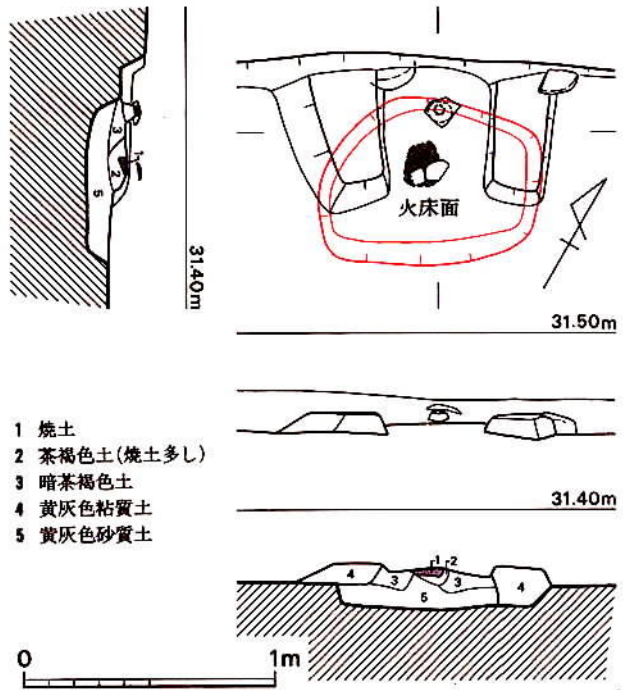
調査区はやや西側に位置し、C群に属する。平面形は横位長方形を呈し、北西壁長4.77m、南西壁長3.96mを測る。壁高は北西壁側で18cm遺存する程度。主柱穴はP1～4の4本で、径40cm前後、深さ26～30cmとしっかりしている。柱間はP1～4間3.17mの間隔を有する。埋土・カマド内から土器、埋土中から製塩土器が出土した。

カマド (図版80-2・3, 第225図)

作り付け型のカマドで、北西壁のやや右寄りに付設する。遺存状態は悪かったが、支脚を留めていた。

右袖は残存長52cm、基底部幅25cm、残高8cmで、左袖は残存長56cm、基底部幅43cm、残高8cmを測り、黄灰色粘質土を盛っていた。支脚は須恵器高台付椀を倒立させ使用しており、奥壁から13cmの位置にある。また、椀の上部には土師器甕の胴部片を乗せていた。

火床面は15cmの範囲で焼けていたが、壁体はさほど焼けていなかった。また、袖部の下層には、66×88cmの長円形の掘り込みがあり、湿気対策のために掘削したものと思われる。カマド内から土器が出土した。

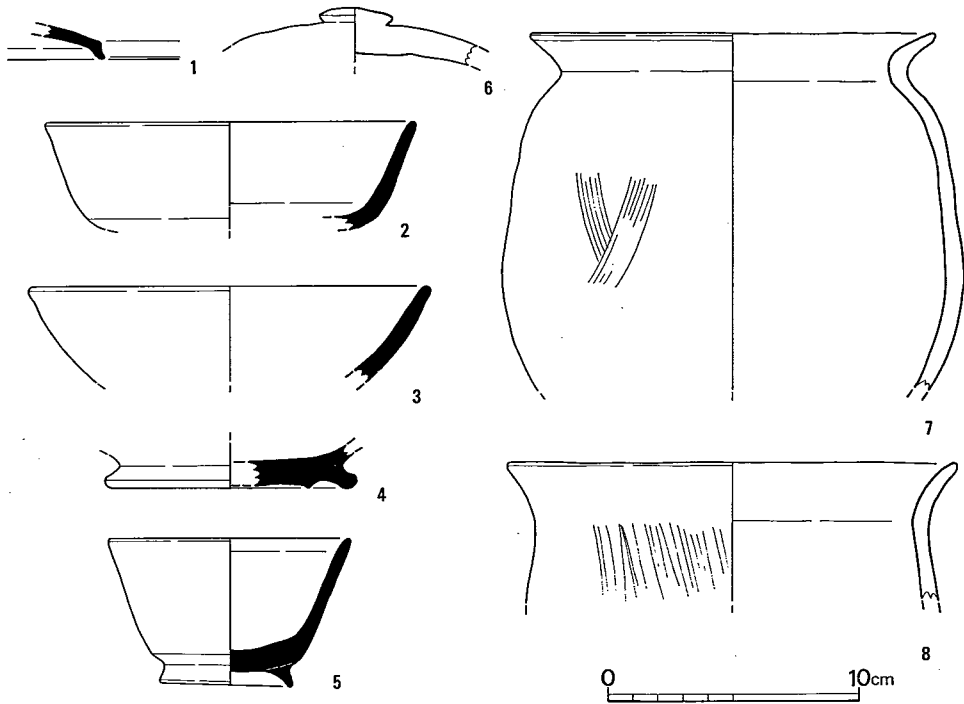


第225図 106号住居跡カマド実測図 (1/30)

出土土器 (図版134-4, 第226図)

須恵器 (1～5) 1は坏蓋の口縁部小片で、口唇部は小さく立つ。調整は回転ナデによる。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。2は坏身の口縁部破片で、高台を欠く。口唇部は丸く納める。口径は14.7cmに復原した。器面調整は回転ナデ調整による。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。3は口縁部破片で、口径15.8cmに復原した。口唇部は丸く納めるものの肥厚し、高坏の坏部になるか。口縁部は回転ナデ調整による。焼成は良好で、外面には灰が掛かる。

4は高台の破片で、高台径は10.0cmに復原した。高台は低く、底部はへたばっている。5は器高5.8cm、口径9.5cm、高台径5.3cmを測る。口径の割に器高が高いことから高台坏椀とした。口唇部は丸く納める。器面調整は磨滅により不明。焼成は堅緻で、色調は淡灰色を呈する。支脚に転用していた。



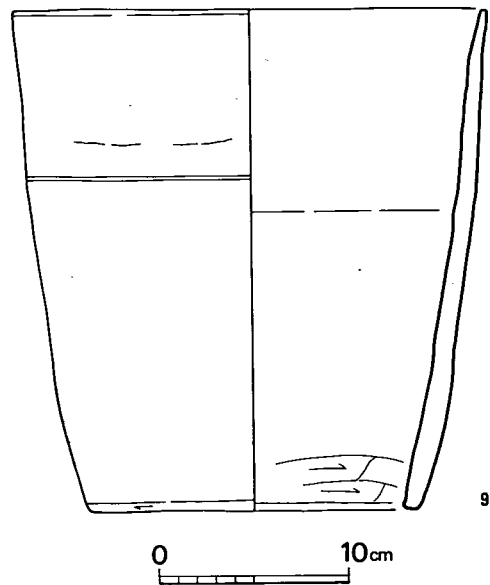
第 226 図 106号住居跡出土土器実測図① (1/3)

土師器（6～9）6は坏蓋の天井部破片で、ボタン状の撮みを貼付する。胎土に砂粒を多く含む。焼成は軟質で、色調は灰白色を呈する。

7・8は甕の口縁部～胴部破片で、7の頸部はよく締まっている。口径は7が15.9cm、8は17.6cmに復原した。7はカマド内の出土。

9は寸胴の甑で、取っ手を欠く。口縁部から直線的に底部へ移行する。器高は25.9cmで、口径は24.8cm、底径は17.6cmに復原した。口縁部ヨコナデ、外面ナデ、内面ヘラケズリで、外面には沈線を施す。焼成は良好で、外面黒色、内面暗橙褐色を呈する。

住居跡の時期は、8世紀半ばであろう。



第 227 図 106号住居跡出土土器実測図② (1/4)

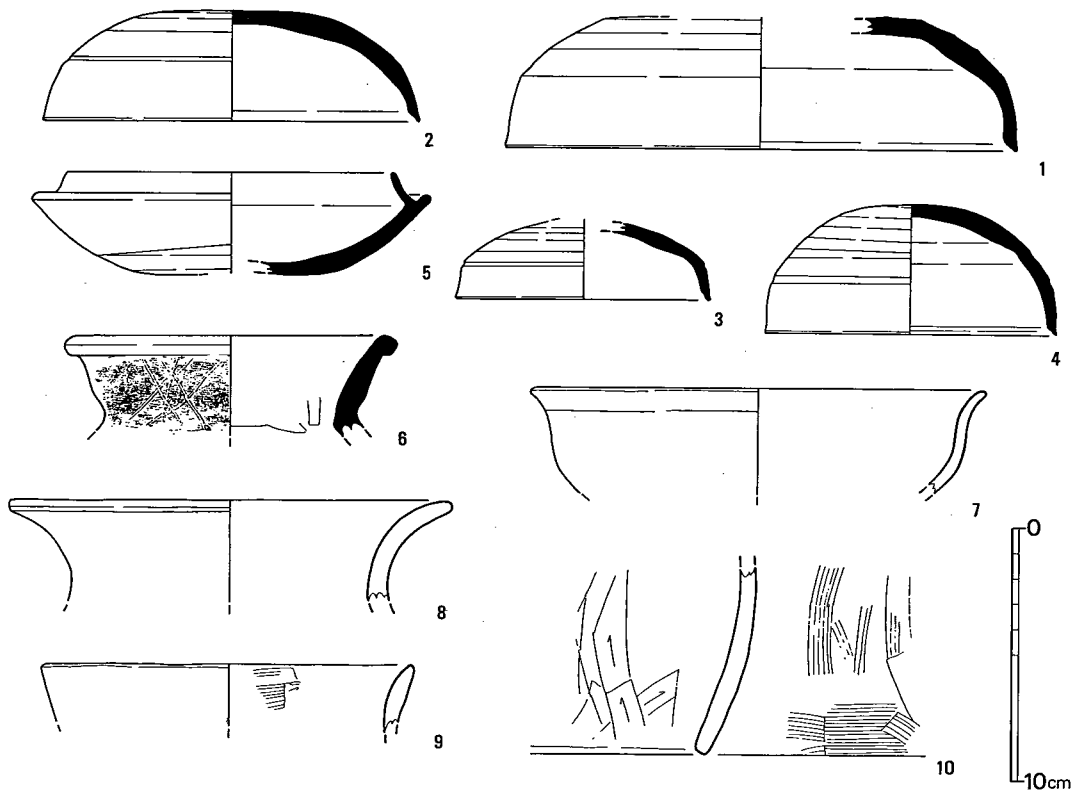
107号住居跡 (図版81-1, 第229図)

106号住居跡のすぐ北側に位置する。検出当初は、46号土壌に切られていると判断したが、双方から土製模造鏡が同レベルで出土していることから同一遺構になる可能性大である。平面形は方形を呈し、西壁長3.86m、南壁長4.08mを測る。壁高は西壁側で42cmを測る。柱穴は4本と考えられるが、P1を検出し得ていない。柱穴は径26~40cm、深さ30~42cmを測る。柱間はP2-3間2.56m、P3-4間2.08mを測る。

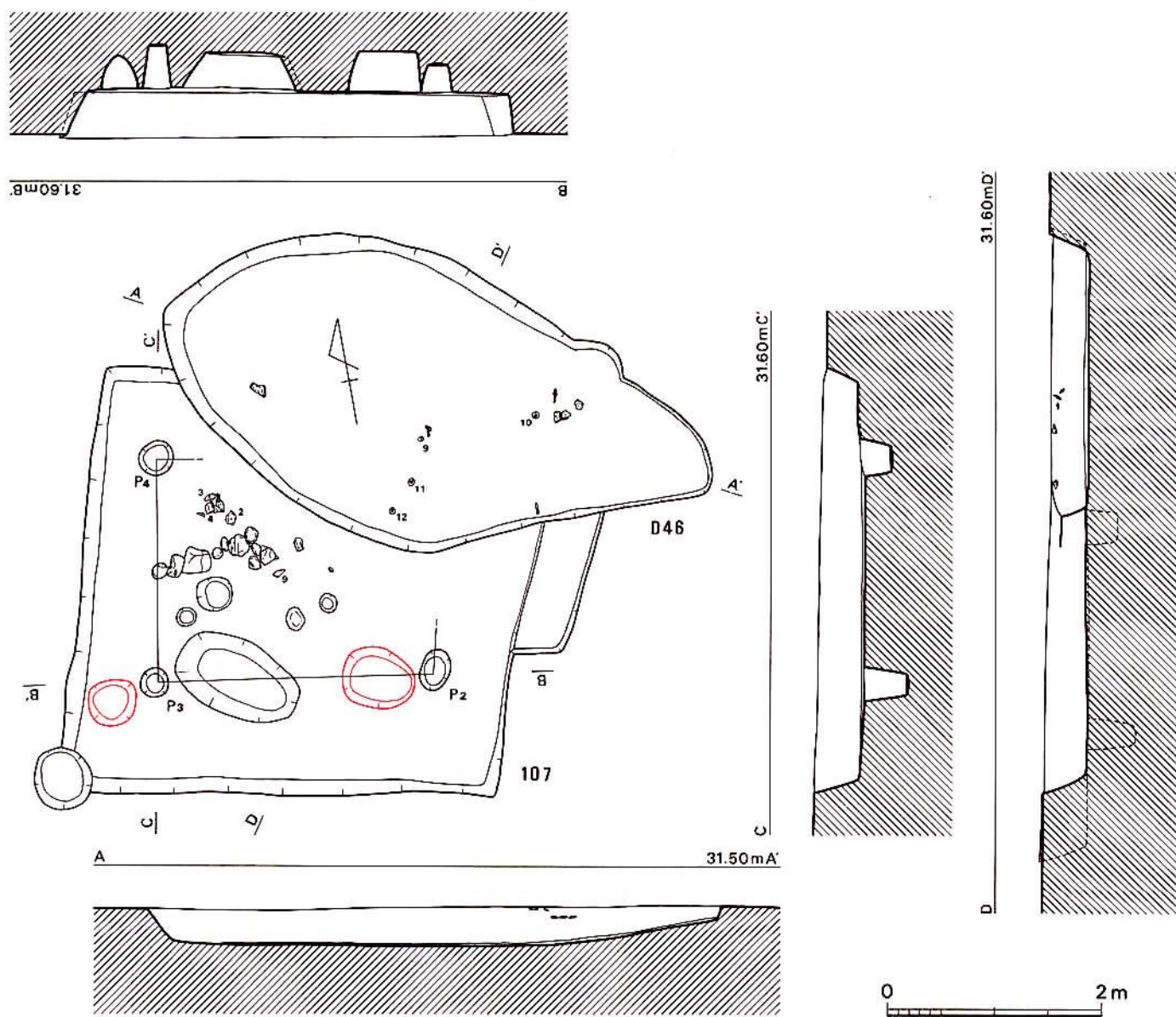
カマドは付設していたものか不明。埋土中から土器・土製模造鏡が出土した。

出土土器 (図版137-5, 第228図)

須恵器(1~6) 1は大型の坏蓋で、残高5.1cm、復原口径20.0cmを測る。口唇部はシャープで、内面に段を有する。2は坏蓋で、器高5.3cm、口径15.0cmを測る。天井部との境にはヘラ先による沈線を施す。1同様、口唇部はシャープで、内面に段を有する。3・4は短頸壺の蓋で、3はやや小振り。天井部外面にヘラ沈線を巡らす。何れも、調整は口縁部ヨコナデ、外天井部回転ヘラケズリ、内面ナデによる。



第228図 107号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第 229 图 107号住居跡, 46号土壤実測図 (1/60)

5は坏身で、かえりは内傾する。2とセットになるか。6は口縁部破片で、広口壺になろう。口唇部は丸く肥厚する。頸部外面には×を重ねたへら記号を付している。

土師器(7~10) 7は口縁部破片で、S字状に屈曲する。椀もしくは高坏の坏部になるか。8・9は口縁部小片で、8は外方に大きく開く。甕になるか。10は甗の底部破片で、外面ハケ目、内面へらケズリ調整による。住居跡の時期は、6世紀半ばであろう。

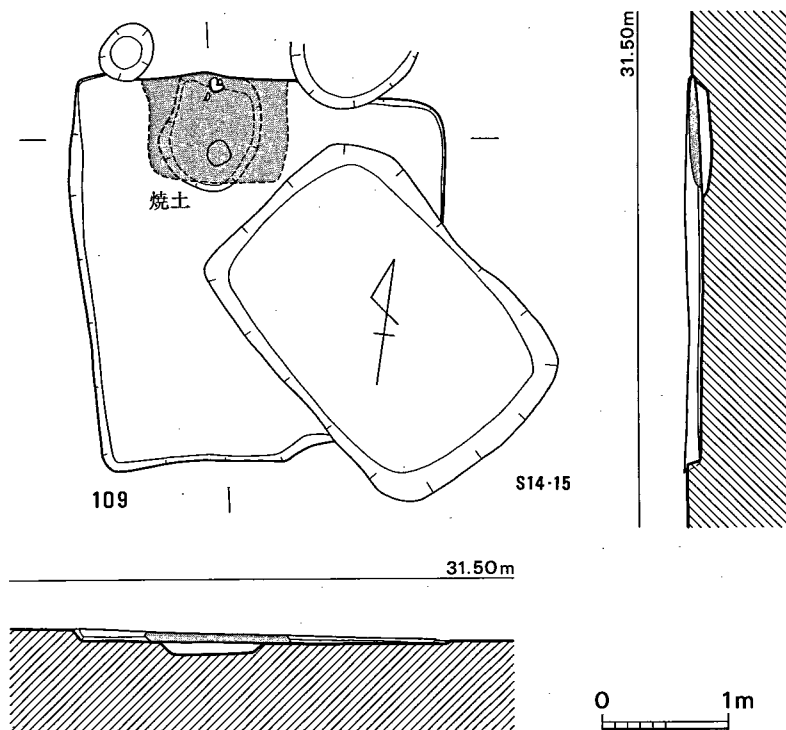
108号住居跡 (第200図)

93号住居跡の下層で検出した。16号建物跡と切合い関係を有するが、前後関係は不詳。北壁を残すのみで、規模等詳細は不明。北壁長は4.06mを測る。柱穴は4本と考えられるが、P3を検出し得ていない。柱穴は径35~40cm、深さ20~25cmを測る。

カマド (第200図)

北壁のやや左寄りに焼土を残すのみで、壁体は全く遺存しない。住居壁を掘り込んでいないことから作り付け型のカマドと考えられる。

109号住居跡 (第230図)



第230図 109号住居跡実測図 (1/60)

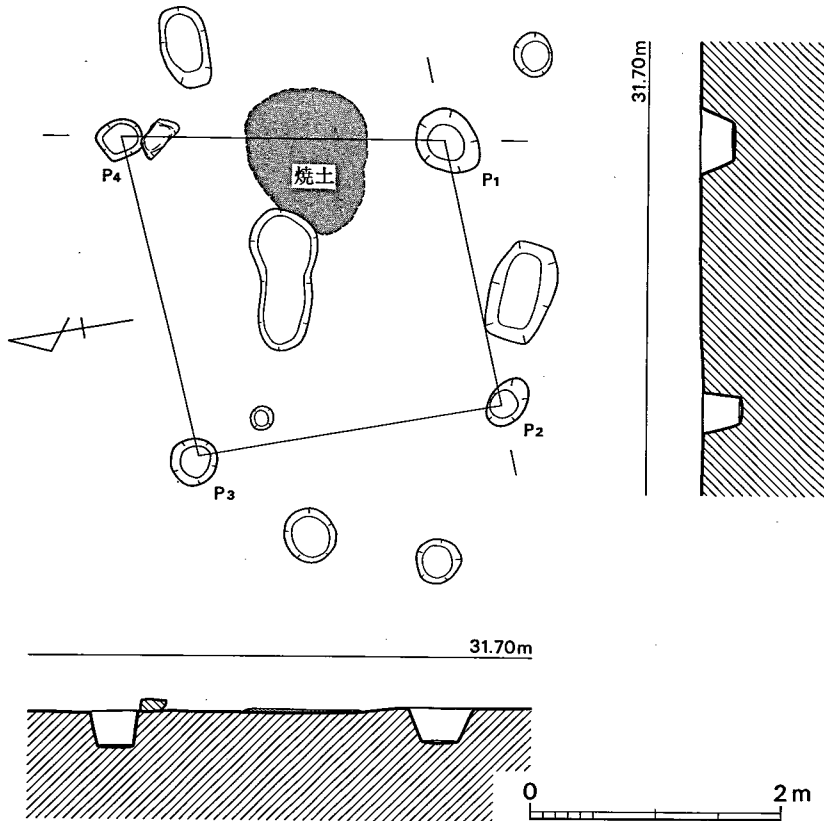
調査区の中央に位置し、C群に属する。14・15号集石土壌に切られる。平面形は長方形を呈し、北壁長2.92m、西壁長3.14mを測る。壁高は西壁側で12cm遺存する程度。床面に柱穴は無く、竪穴部の外側に存在したものが。土師器片が出土しているが、図示不可能。

カマド (第230図)

北壁のやや左寄りに付設する。カマド下層の掘り込みを残すのみで詳細は不明。住居壁を掘り込んでいないことから作り付け型と考えられる。埋土中から土師器小片が出土した。

110号住居跡 (第230図)

調査区の東端部に位置し、D群に属する。削平により住居壁は留めないが、カマドの残骸と考えられる焼土と柱穴を4個検出したことから住居跡とした。柱穴は径36~55cm、深さ30cm前後を測る。柱間はP1-2間2.14m、P1-4間2.56mを測る。土器の出土はなかった。



第 231 図 110号住居跡実測図 (1/60)

表1 住居跡一覧表①

No	群	規 模			面積 (㎡)	柱 間 間 隔				面積 (㎡)	カ マ ド		備 考
		長辺	短辺	残高		P1-2	P2-3	P3-4	P1-4		形態	主軸方位	
1	A	4.17	3.30	0.07	14.6		2.17	2.74			I類		
2	A	4.04	2.58	0.04	11.0	2.92	2.69	3.21	2.74	10.3	Ⅲ類	N41°W	
3 A	A	3.78	2.94	0.04	10.3						Ⅲa	N42°W	住4を切る
4	A	2.80		0.04		1.17	1.55	1.12	1.48	1.7			
5	A	4.78	2.97	0.17	15.8								住6を切る
6	A	4.60	3.80	0.12							Ⅱb	N49°W	
7	A	3.17		0.07									竪穴とした方が妥当
8	B	4.04	3.76	0.23	(16.1)						Ⅲa	N57°W	
9	B	4.06		0.1							Ⅲ類	N81°E	
10	B	4.36	3.67	0.24	(18.0)	1.37	3.48				I b	N51°E	
11	B	3.40	2.48	0.12	(9.1)	1.73	2.50				Ⅲa	N2°W	
12	B	3.42	2.96	0.12			1.88	2.86					
13	B	3.32	2.49	0.13		1.62	2.56						
14	B			0.30		2.38							住13を切る
15	B	4.72		0.25		3.68					I b	N45°E	住14を切る
16	B	3.45		0.26							I a	N14°W	竪穴9・10を切る
17	C	4.44	3.38	0.12	16.7	1.90	2.42	1.66	2.02	4.0			
18	E	3.42	2.65	0.12	11.5	1.98	2.10	2.78	2.64	5.6			弥生?
19	E	3.28	2.98	0.16	12.4	1.45	2.56	1.74	2.42	4.0	I ?		
20	E	3.1	3.10	0.10	10.6		2.78	2.40					
21	E	4.0	2.62	0.14	11.7	2.32	2.39	1.92	2.58	5.3			土壌9・溝6を切る
22	E	4.08	3.50	0.15	16.3	1.68	2.15	1.85	2.05	3.7	I a		
23	B	4.73	4.30	0.17	(20.8)						Ⅱb	N19°W	住24を切る
24	B	4.98	4.72	0.18							I a	N23°W	
25	C	4.16		0.24		2.04	2.48	2.04	2.44	5.0	I a	N53°E	

※単位：m, ㎡

※ ()：推定値

表2 住居跡一覧表②

No	群	規 模			面積 (㎡)	柱 間 間 隔				面積 (㎡)	カ マ ド		備 考
		長辺	短辺	残高		P1-2	P2-3	P3-4	P1-4		形態	主軸方位	
26	C	4.25	3.62	0.14	(18.1)			2.86	2.73		IIb	N16°W	
27	C	5.52	3.49	0.12	20.1	2.04	2.18	1.73	2.13	4.1	I a	N76°E	住31・72を切る
28	C	4.24	3.72	0.15	(17.9)		2.24	2.16					住63・64・68を切る
29	D	5.52	4.95	0.12	26.6	2.58	2.83	2.53	2.56	6.9			弥生?
30	C										?	N20°W	カマドのみ遺存
31	C		3.75	0.18									竪穴とした方が妥当
32	C	4.82	3.96	0.14	(20.8)								
33	B	3.02	2.80	0.18	9.6	1.14	1.01	1.54	1.38	1.6			住87を切る
34	B	5.02	3.72	0.10	19.2	2.08	2.58	1.66	2.92	5.1	I b	N36°W	住89を切る
35	B	4.06	4.06	0.12	(16.0)	1.28	1.98	1.47	2.16	2.8	IIIb	N 2°W	住95を切る
36	B	3.63	3.42	0.16	14.5								住43を切る
37	F	4.28	3.52	0.14					2.38		IIb	N72°E	住45を切る
38	F	3.36	3.10	0.18							I a	N43°E	住37・50・81を切る
39	F	4.59	3.12	0.20	15.9	1.54	2.47	1.58	2.24	3.7	I a	N39°W	
40	B	3.94	3.36	0.19	14.6	2.42	2.02	2.18	2.13	4.8			住90・93・94, 建16を切る
41	B	4.22	3.36	0.22	15.8	2.21	2.00	2.42	1.84	4.4	I 類		住42・97・98を切る
42	B	4.04	3.32	0.13	(14.0)	2.38			2.24				住97・98を切る
43	B	3.90		0.14									
44	F			0.08							I a	N13°W	住45を切る
45	F	3.12	3.00	0.05	10.1	2.44			2.28		I 類		
46	F	3.56	3.12	0.07	10.6	1.28	1.46	1.19	1.44	1.8	I a	N28°W	
47	F	4.43	3.82	0.07	(16.5)			2.97	2.07		I a	N71°W	
48	F	4.66	4.02	0.12	(19.4)	1.78	1.94	2.01	2.00	3.8	I a	N51°E	
49	F	3.68	3.22	0.15	10.3	1.28	1.44	0.95	1.78	1.8	IVb	N23°E	住48・50を切る
50	F		3.76	0.10		2.34					I a	N27°W	

※単位：m, m²

※ () : 推定値

表3 住居跡一覧表③

No	群	規 模			面積 (㎡)	柱 間 間 隔				面積 (㎡)	カ マ ド		備 考
		長辺	短辺	残高		P1-2	P2-3	P3-4	P1-4		形態	主軸方位	
51	F	3.84	3.54	0.27	15.0						IVb	N 2°W	住56を切る
52	F	4.80	3.18	0.20	16.0	1.98	1.85	2.22	1.96	4.0	IVb	N 9°W	住56を切る
53	F	4.14	3.46	0.13	14.4	1.94	2.02	2.47	2.28	4.7	I ?		住56を切る
54	F	4.35	2.74	0.16	12.4	2.24	1.43	1.82	2.12	3.4	IVb	N16°E	住56を切る
55	F	4.04	2.96	0.16	13.1	1.66	2.96				I類		
56	F		4.03	0.29		1.93	2.46	1.95	2.28	4.5	IVb	N18°E	
57	C	4.67	3.18	0.10	15.0						IVb	N72°W	住58・59を切る
58	C	4.16	3.78	0.30	17.6	2.56	2.52	2.47	2.38	2.2			住59を切る
59	C	4.90	4.66	0.16		2.90	3.04	3.04	3.20	9.3			住70を切る
60	C	4.13	3.32	0.05	14.5	2.43	1.65	2.00	1.78	3.8	I ?		住61・62を切る
61	C	4.72	3.96	0.25	19.5	2.33	2.58	2.43	2.97	6.6	I類		住62を切る
62	C	5.82	4.80	0.16		2.58	3.43	2.89	3.13	9.0	II類		住70を切る
63	C	3.82	3.18	0.18	15.2	1.87	1.52	1.66	1.96	3.1			住64・68を切る
64	C	3.96	3.06	0.16									住68を切る
65	D		2.90	0.06									詳細不明
66	D	5.32		0.03		3.22	2.81	3.04	3.15	9.5			
67	C	4.73	4.40	0.11	23.0	2.19			2.84				
68	C	4.52		0.16		2.18	3.30	2.70	3.20	7.9			
69	D	5.68	4.32	0.09	26.0	3.52							弥生
70	C	4.32	4.13	0.15		2.26	2.01	2.38	2.70	5.4	I ?		
71	C	5.43	3.98	0.24	22.0	1.84	2.75	1.97	2.98	5.5	I a	N21°W	壁20を切る
72	C	4.32	3.44	0.10	15.3	2.12	2.39	1.93	2.24	4.7			住67を切る
73	C	2.64	2.56	0.08	7.3						I類		住74を切る
74	C	3.58	3.46	0.10	(13.4)						I類		住96を切る
75	C	3.62	3.37	0.08	12.4						I類		住76を切る

※単位：m, ㎡

※ () : 推定値

表4 住居跡一覧表④

No	群	規 模			面積 (㎡)	柱 間 間 隔				面積 (㎡)	カ マ ド		備 考
		長辺	短辺	残高		P1-2	P2-3	P3-4	P1-4		形態	主軸方位	
76	C	3.44	3.28	0.16							Ⅲ類		
77	C	3.98	3.75	0.06	15.6								住78・79を切る
78	C		3.47	0.08		1.84			2.22		Ⅳb	N 5°W	住79・99を切る
79	C		3.23	0.06			2.93	1.86					
80	F		4.12	0.18		2.35			2.10		I b	N10°E	
81	F	3.88	3.32	0.18	12.3						Ⅳb	N32°E	住50を切る
82	F	4.23	3.28	0.14							Ⅳb	N79°E	住101・102を切る
83	F	4.00	3.72	0.14		2.38			2.65		I b	N22°W	
84	F	3.44	2.83	0.18	11.3	2.62	2.30				Ⅳb	N17°E	住85を切る
85	F	4.38	3.94	0.20		2.16			2.83		Ⅲb	N49°E	住83を切る
86	B	4.04	4.00	0.10	17.0			1.44	2.32				
87	B	4.74	4.02	0.16	19.6	2.65	2.01	2.71	2.06	5.5	I a	N23°W	住88を切る
88	B			0.16									詳細不明
89	B	5.14	4.92	0.10	25.5	2.57	2.17	2.79	2.08	5.7	I 類		溝3を切る
90	B	4.66	3.70	0.08	19.1	3.26	3.22	2.83	2.48	8.6	Ⅱa	N34°W	住91を切る, 建替え
91	B	4.32	3.32	0.10	17.7						I 類		溝3を切る
92	B		3.96	0.08		2.06	1.94				I 類		住93, 建16を切る
93	B	5.28	5.00	0.10	(23.8)								住108, 建16を切る
94	B	4.42	3.36	0.08	19.8	2.84	2.13	2.37	2.52	6.0	I 類		
95	C	3.83	3.72	0.14	15.6	1.64	2.29	1.48	2.23	3.5	I 類		
96	C	3.90	3.02	0.08	19.2			2.31	2.24		Ⅱ類		豎23を切る
97	B	3.57	3.52	0.07	12.3	1.94	1.70	2.07	2.03	3.7	I 類		住98を切る
98	B	3.10	3.02	0.10		1.57			1.17		I 類		
99	C	4.57	4.28	0.19	21.6						Ⅳa	S 8°E	住100を切る
100	C			0.10		2.12			2.62		I b	N 2°W	

※単位：m, ㎡

※ () : 推定値

表5 住居跡一覧表⑤

No	群	規 模			面積 (㎡)	柱 間 間 隔				面積 (㎡)	カ マ ド		備 考
		長辺	短辺	残高		P1-2	P2-3	P3-4	P1-4		形態	主軸方位	
101	F	3.84	3.32	0.18	13.8	2.56	2.19	2.00	2.18	5.0	Ⅱb	N34°W	住102・103を切る
102	F	4.44	3.42	0.22							I類		住103を切る
103	F	3.86	3.32	0.10	17.3	1.95	2.67	2.01	2.82	5.4			
104	C	3.29	2.89	0.08	10.5						Ⅲ類		
105	C												詳細不明
106	C	4.77	3.96	0.18	18.6	1.86	2.93	1.94	3.17	5.8	Ia	N30°W	
107	C	4.08	3.86	0.42			2.56	2.08					D46と同一遺構
108			4.06	0.04		2.38			3.23		I類		
109	C	3.14	2.92	0.12							I類		
110	D					2.14	2.44	2.62	2.56	5.9	?		柱穴・焼土のみ遺存

※単位：m, ㎡

※ ()：推定値

(2) 掘立柱建物跡

住居跡と重複して調査区の全域に散在する。調査時点では、16棟確認していただいただけであったが、図面検討の結果、総数38棟になった。A～D群においては、住居跡と切合い関係にあり、建物跡の大半が住居跡よりも後出する。また、建物跡に直接供伴する遺物は乏しく、時期確定が困難である。

1号建物跡（図版82-1，第232図）

B群の中央に位置し、36・41～43・98号住居跡を切っている。また、16号溝と面的に重複するが、前後関係は判然としない。梁行2間（4.24m）×桁行3間（6.78m）の建物跡で、4面に庇を設けている。梁行の柱間平均値は2.07m、桁行の柱間平均値は2.25mを測る。

柱穴は円形を呈し、径24～34cm、深さ21～52cmを測る。底側の柱穴は割に貧弱である。桁行方位はN30°Eを示す。柱穴内から土器が出土した。

出土土器（第251図）

須恵器（1）1は坏蓋の天井部破片で、口縁部・撮み部を欠く。焼成は堅緻で、色調は暗青灰色を呈する。外面には灰が被る。

土師器（2・3）2は高台付き坏の底部破片。高台は大半が剥離している。胎土に石英・赤褐色粒を含む。3は小皿で、器高1.8cm、復原口径9.6cm、復原底径6.6cmを測る。口縁部ヨコナデ、外面はヘラ切り離し。胎土には砂粒を多く含む。

2号建物跡（図版82-2，第233図）

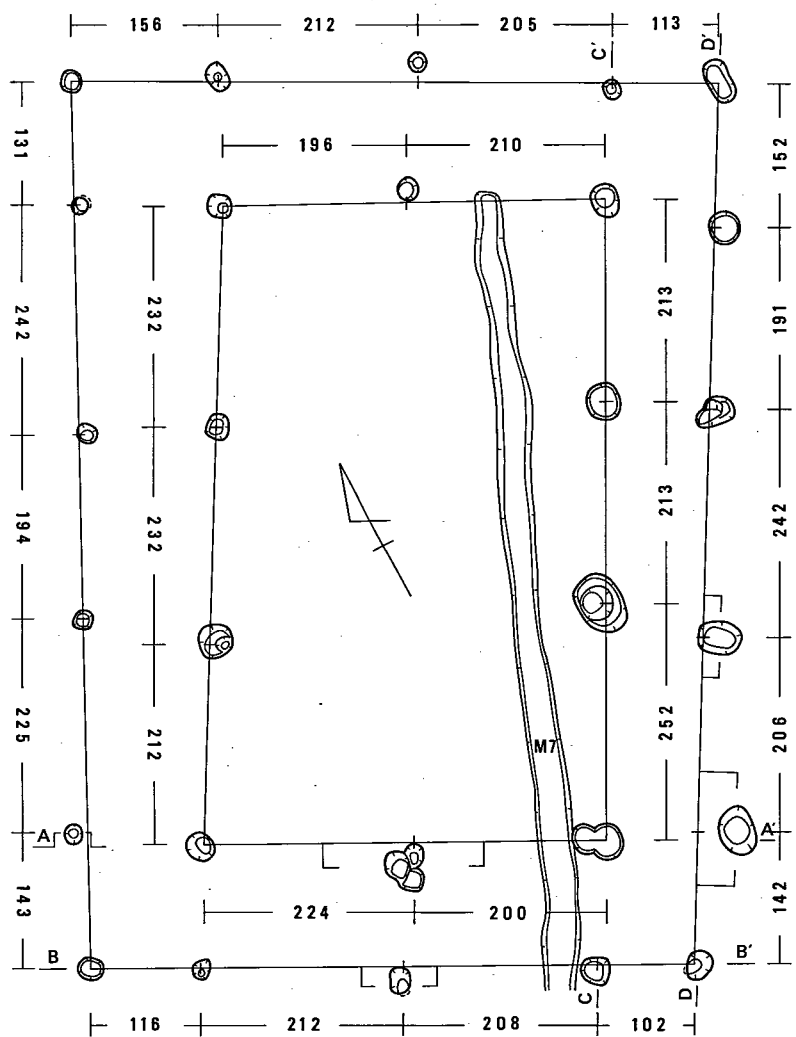
86号住居跡の4m西側に位置し、21・27号建物跡と重複する。梁行2間×桁行3間の建物跡で、南西側梁行3.9m、北西側桁行5.92mを測る。柱穴は円形を呈し、径24～32cm、深さ36～78cmを測る。桁行方位はN42°Eを示す。柱穴内から土器が出土した。

出土土器（第251図）

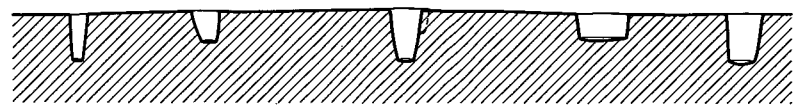
土師器（4）坏の口縁部小片で、口唇部は丸く納める。調整は口縁部ヨコナデ、内外面ナデによる。砂粒は殆ど含まず、精良な作り。

3号建物跡（図版83-1，第234図）

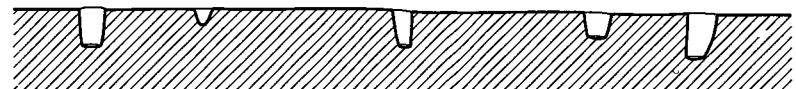
2号建物跡の4.6m北西側に位置する。梁行3間（5.06m）×桁行3間（6.14m）の総柱建物跡としたが、北東側にも同規模の柱穴があり、或は、桁行は5間になるか。柱穴は円形を呈し、径60～80cm、深さ40cm前後を測り、割と大規模な建物跡である。桁行方位はN43°Wを示す。柱穴内から土器が出土した。



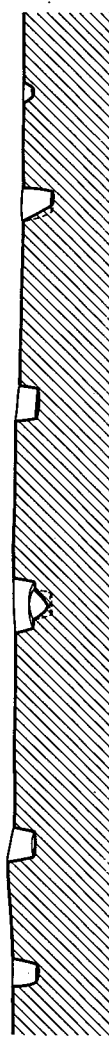
A 31.80m A'



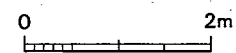
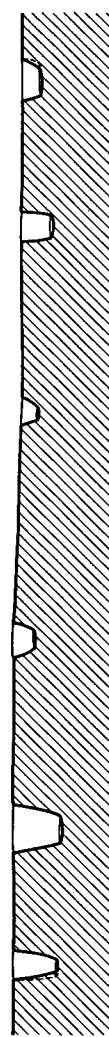
B 31.80m B'



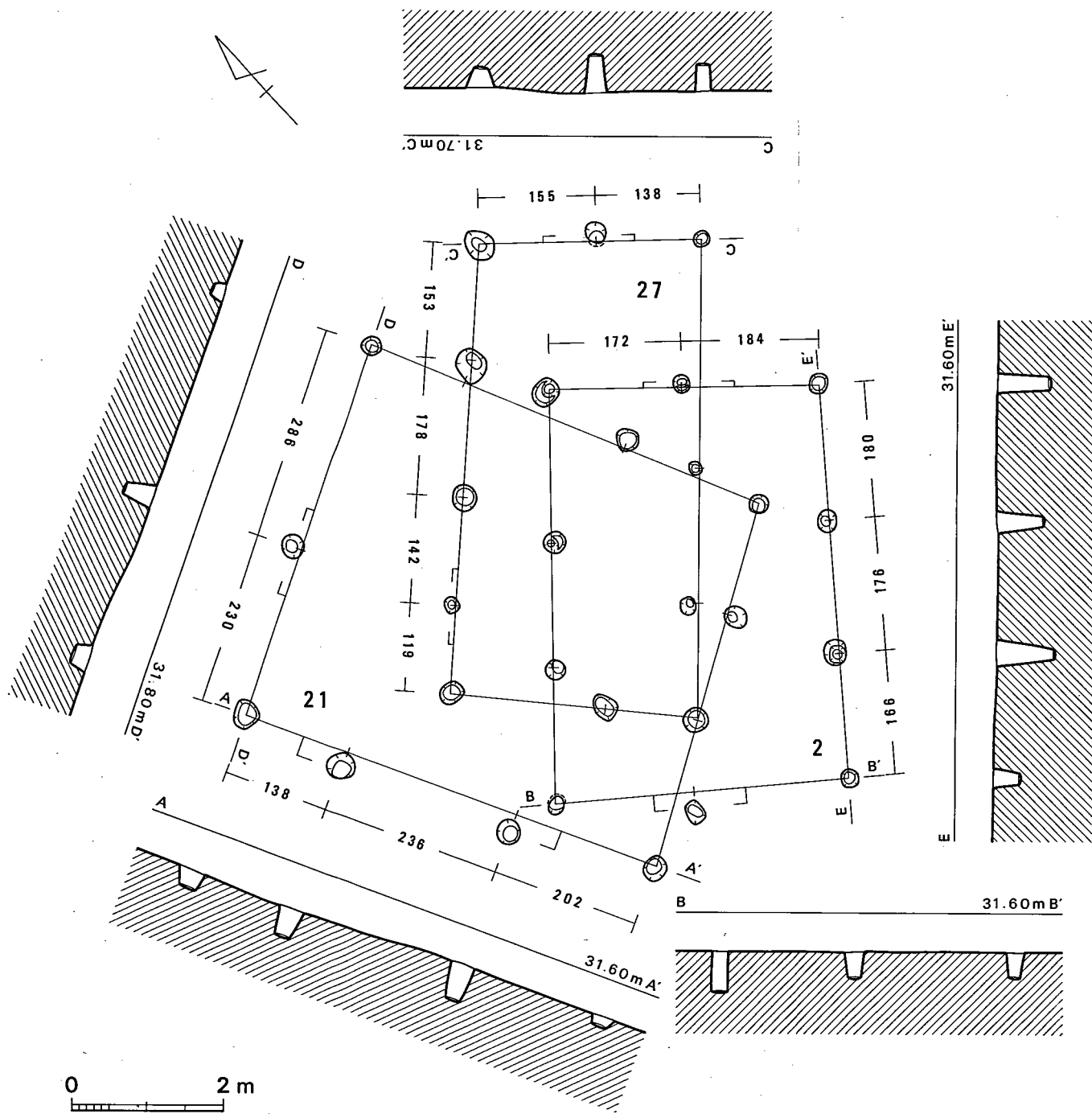
31.70m C'



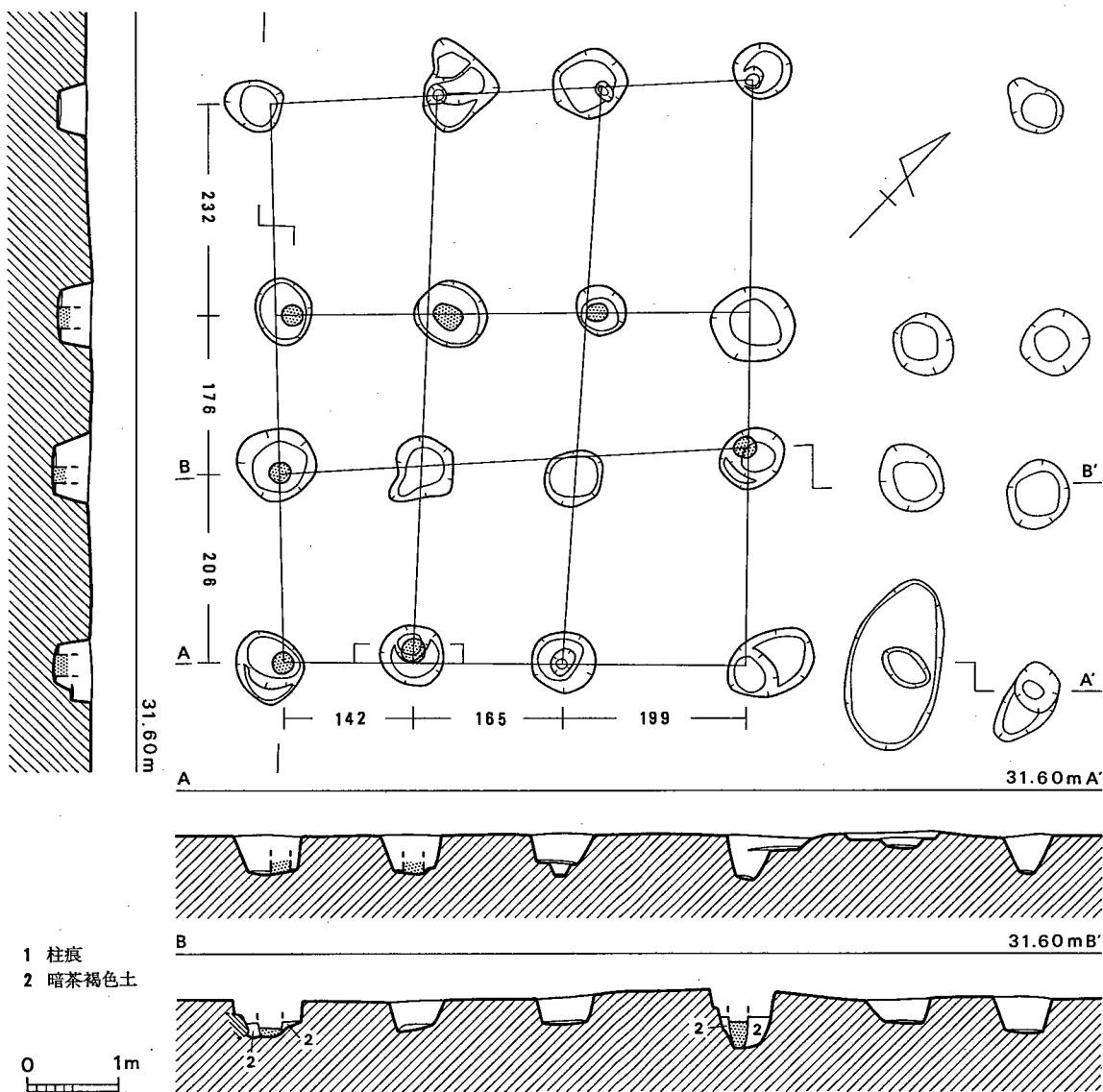
31.70m D'



第 232 图 1 号建物跡実測図 (1/80)



第 233 图 2·21·27号建物跡実測图 (1/80)



第234図 3号建物跡実測図 (1/80)

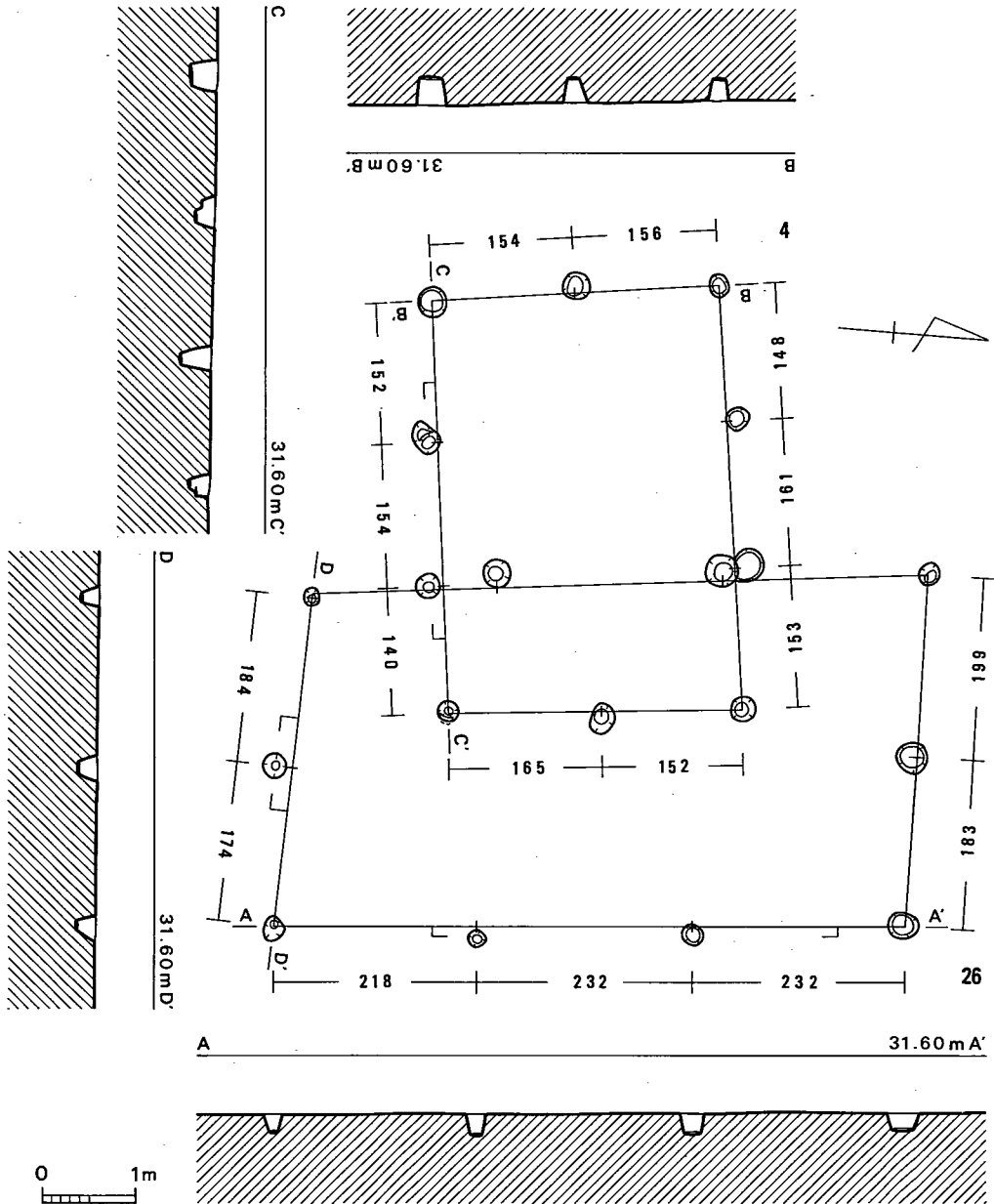
出土土器 (第251図)

須恵器 (5) 5は高坏の脚裾部破片で、脚径は11.8cmに復原した。焼成は堅緻で、色調は暗灰色を呈する。

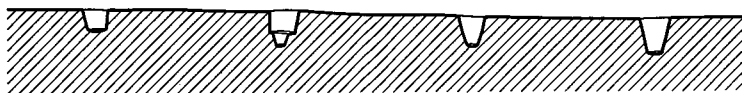
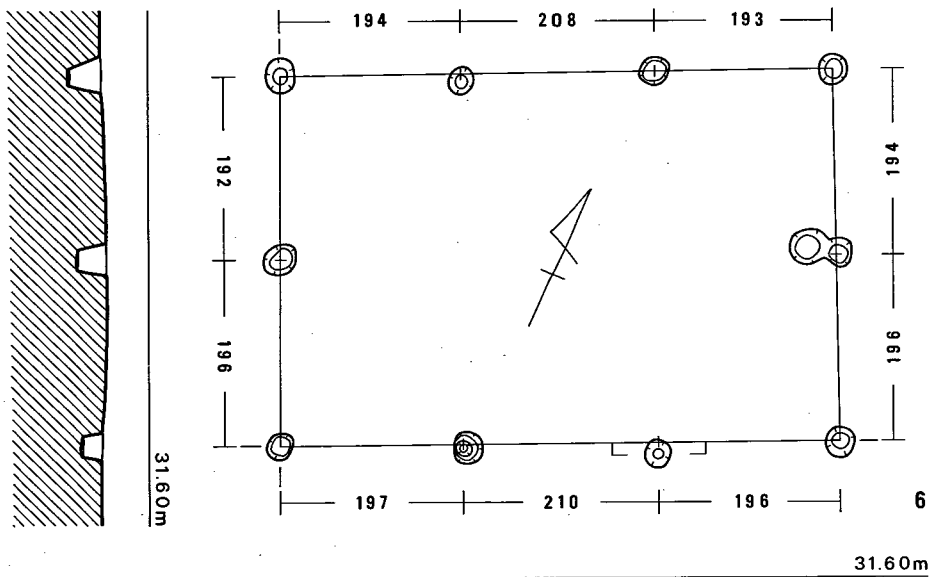
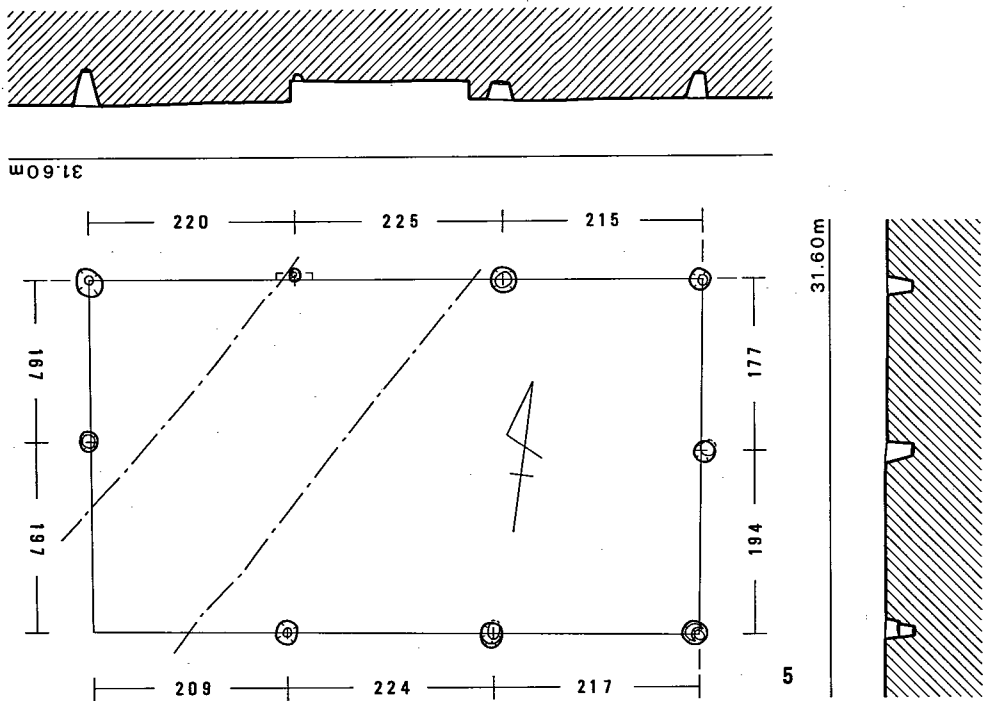
土師器 (6) 6は甕の口縁部小片で、口縁部は大きく屈曲する。口縁部ヨコナデ、内面ヘラケズリ調整による。焼成は良好で、色調は暗橙色を呈する。

4号建物跡 (図版83-2, 第235図)

63号住居跡のすぐ東側に位置し、22号竖穴・42号土壙を切っている。また、26号建物跡と重複するが、前後関係は不明。梁行2間(3.10m)×桁行3間(4.46m)の東西棟の建物跡である。



第 235 図 4・26号建物跡実測図 (1/80)



第 236 图 5·6号建物跡実測図 (1/80)

梁行の柱間平均値は1.56m、桁行の柱間平均値は1.51mを測る。柱穴は円形を呈し、径22～34cm、深さ22～30cmを測る。梁行方位はN10°Wを示す。柱穴内から土器が出土した。

出土土器（第251図）

須恵器（7）7は高台付きの底部破片で、壺になろう。高台径は13.0cmに復原した。内外面ともナデ調整による。焼成は堅緻で、色調は灰色を呈する。

土師器（8～12）8～11は精製の坏口縁部小片で、口唇部は丸く納める。調整は何れもヨコナデにより、10は外面を強くナデている。焼成は11を除き良好で、色調は8～10が暗橙色、11は灰黄色を呈する。12は皿の底部破片で、底径は6.0cmに復原した。外底部はヘラ切りによる。

5号建物跡（図版84-1，第236図）

4号建物跡の5m南側に位置し、73・74・95号住居跡を切っている。梁行2間（3.71m）×桁行3間（6.60m）の東西棟の建物跡で、梁行の柱間平均値は1.84m、桁行の柱間平均値は2.18mを測る。柱穴は円形を呈し、径20cm前後、深さ30cm前後を測る。梁行方位はN7°Wを示す。柱穴内から土器が出土した。

出土土器（第251図）

内黒土器（13）13は碗の口縁部小片で、口唇部は肥厚する。胎土に石英・赤褐色粒を含む。焼成はやや軟質で、色調は内面黒色、外面暗灰色を呈する。

6号建物跡（図版22-2・84-2，第236図）

5号建物跡の3m南側に位置し、27・72・75号住居跡を切っている。梁行2間（3.88m）×桁行3間（6.03m）の建物跡で、梁行の柱間平均値は1.84m、桁行の柱間平均値は2.18mを測る。柱穴は円形を呈し、径20cm前後、深さ30cm前後を測る。梁行方位はN27°Wを示す。柱穴内から土器が出土した。

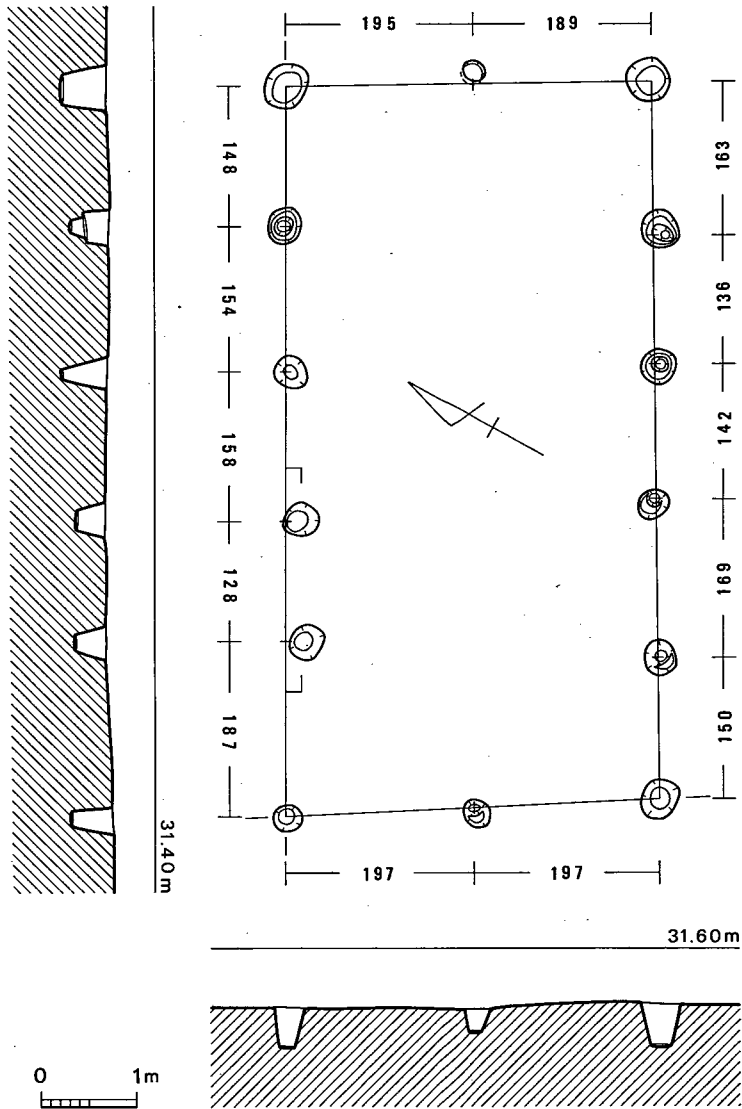
出土土器（第251図）

須恵器（14）14は坏身の高台部破片で、細身の低い高台を貼付する。焼成はやや軟質で、色調は暗乳灰色を呈する。

土師器（15）15は坏の口縁部小片で、口唇部は丸く納める。胎土に石英・赤褐色粒を含む。焼成は良好で、色調は暗橙色を呈する。

7号建物跡（図版85-1，第237図）

5号建物跡の2m東側に位置し、99号住居跡を切る。梁行2間（3.94m）×桁行5間（7.75m）の建物跡で、梁行の柱間平均値は1.96m、桁行の柱間平均値は1.53mを測る。柱穴は円形を呈し、径30～40cm、深さ22～46cmを測る。梁行方位はN30°Wを示す。柱穴内から須恵器・土師器

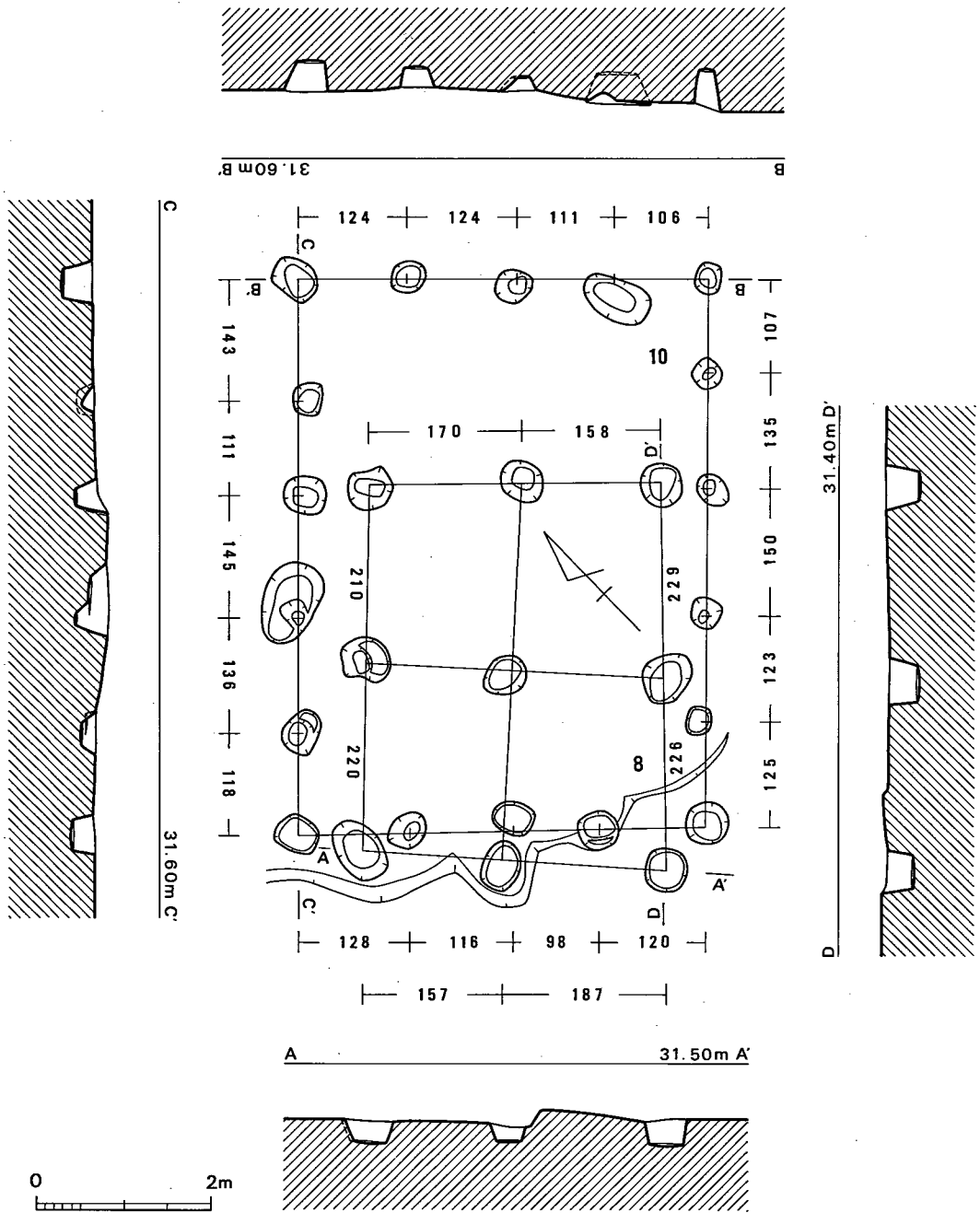


第237図 7号建物跡実測図 (1/80)

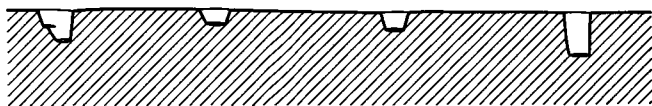
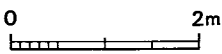
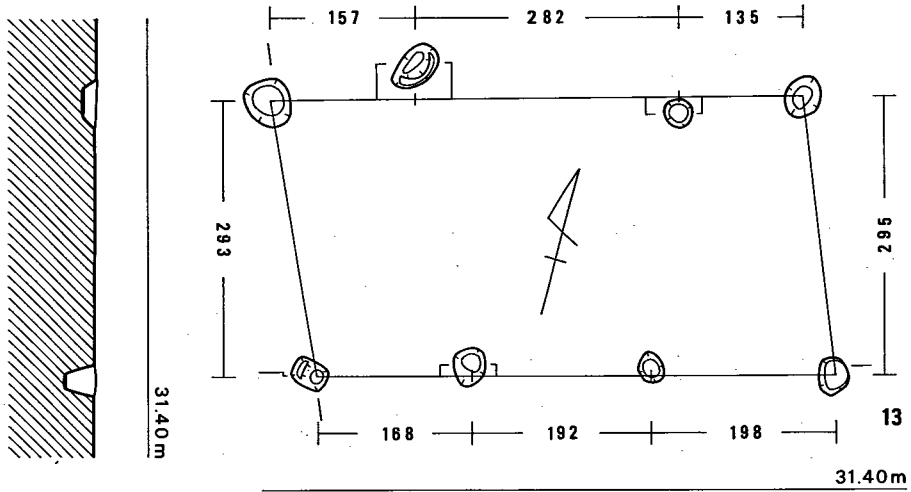
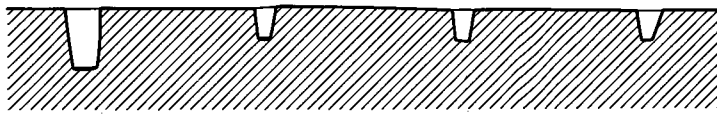
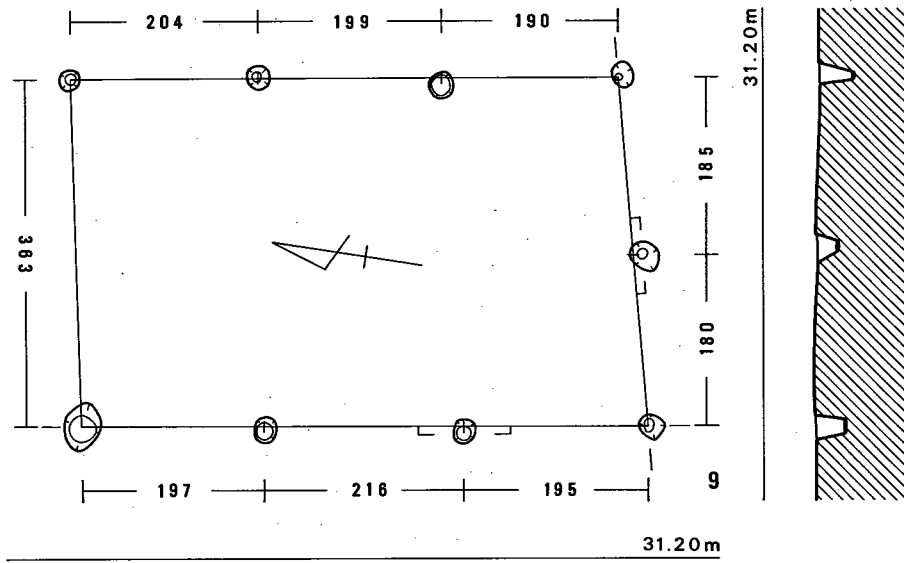
小片が出土しているが、図示不可能。

8号建物跡 (図版85-2・86-2, 第238図)

3号建物跡の4.5m北西側に位置し、10・29号建物跡と重複するものの前後関係は判然としない。梁行2間(4.55m)×桁行2間(3.44m)の総柱建物跡である。柱穴は円・楕円形を呈し、径50cm前後、深さ40cm前後を測る。桁行方位はN43°Eを示す。柱穴内から土師器甕の胴部片が出



第 238 图 8·10号建物跡実測図 (1/80)



第 239 图 9·13号建筑物迹实测图 (1/80)

土したが、図示に耐えない。

9号建物跡（図版86-1，第239図）

34号住居跡の3.5m北東側に位置する。梁行2間（3.65m）×桁行3間（6.08m）の南北棟の建物跡で、桁行の柱間平均値は2.0mを測る。柱穴は円形を呈し、径20～50cm、深さ20～60cmを測る。桁行方位はN9°Wを示す。柱穴内から土器が出土した。

出土土器（第251図）

土師器（16）口縁部小片で、皿になろう。底部から屈曲して外反し、口唇部は丸く納める。胎土に赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、赤橙色を呈する。

10号建物跡（図版86-2，第238図）

8・29号建物跡と重複して位置する。梁行4間（4.65m）×桁行5間（6.53m）の建物跡である。梁行の柱間平均値は1.15m、桁行の柱間平均値は1.29mを測り、他の建物跡に比してやや短い。柱穴は円・楕円形を呈し、径34～56cm、深さ26～36cmを測る。桁行方位はN44°Eを示す。柱穴内から土器が出土した。

出土土器（第251図）

土師器（17）口縁部小片で、S字状に屈曲する。口唇部は丸く納める。調整はナデによる。胎土に石英・赤褐色粒を含む。焼成は良好で、色調は橙灰色を呈する。

11号建物跡（図版87，第240図）

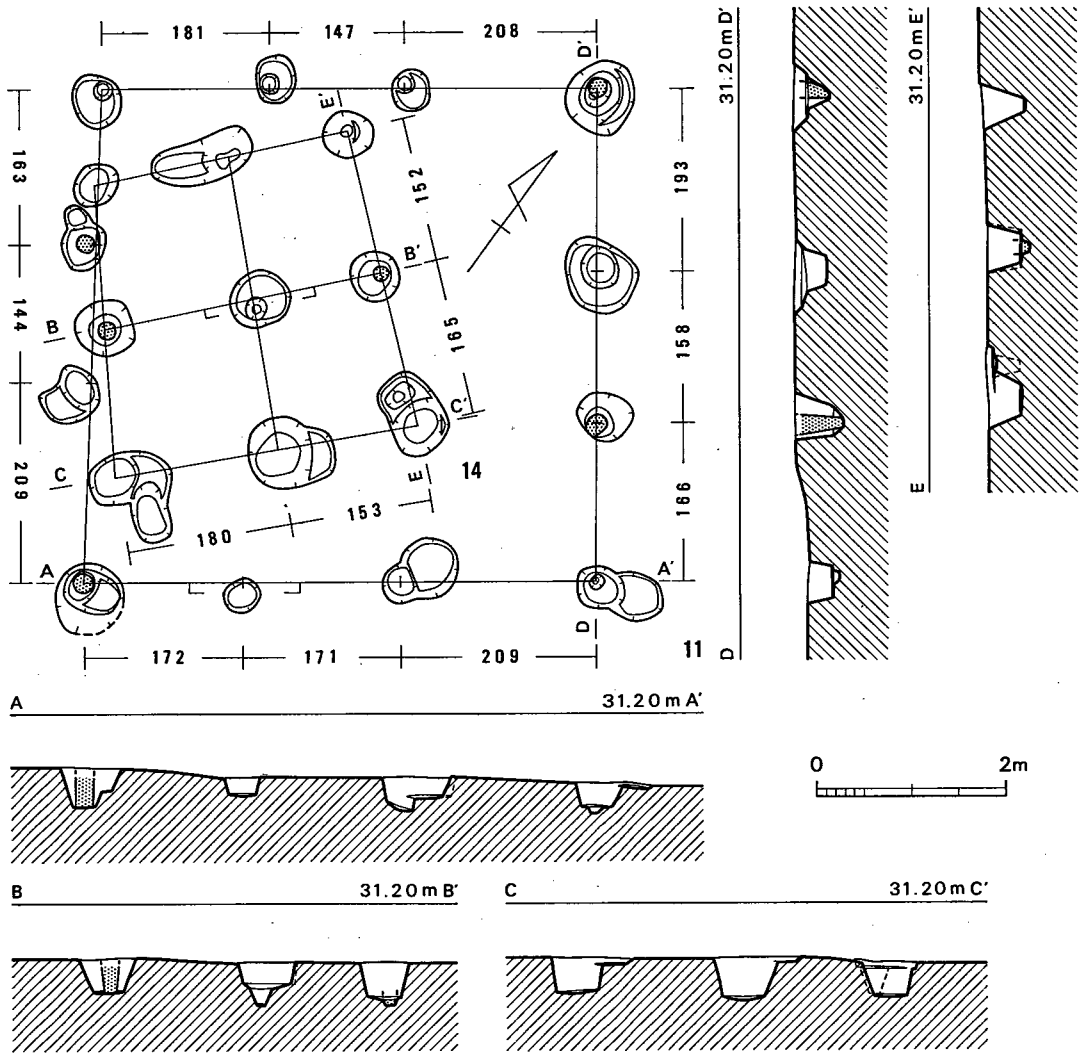
69号住居跡のすぐ北側に位置し、14・36号建物跡と重複関係にある。梁行3間（5.16m）×桁行3間（5.52m）の方形の建物跡で、梁行の柱間平均値は1.72m、桁行の柱間平均値は1.81mを測る。柱穴は円形を呈し、径40～80cm、深さ20～40cmを測る。大半の柱穴が二段に掘っており、二つの柱穴から柱痕（径16cm程）を確認した。梁行方位はN36°Wを示す。柱穴内から土器が出土している。

出土土器（第251図）

土師器（18）坏の口縁部破片で、口唇部は丸く納める。やや深めの器形を呈しよう。口縁部ヨコナデ、内外面ヘラミガキ調整による。胎土に石英・赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、色調は暗赤橙色を呈する。

12号建物跡（図版88-1，第241図）

25号建物跡の9m北西側に位置し、30号建物跡と並列して配される。梁行2間（3.26m）×桁行2間（3.52m）の総柱建物跡であるが、北西側は1間となっている。柱穴は円形を呈し、径50～65

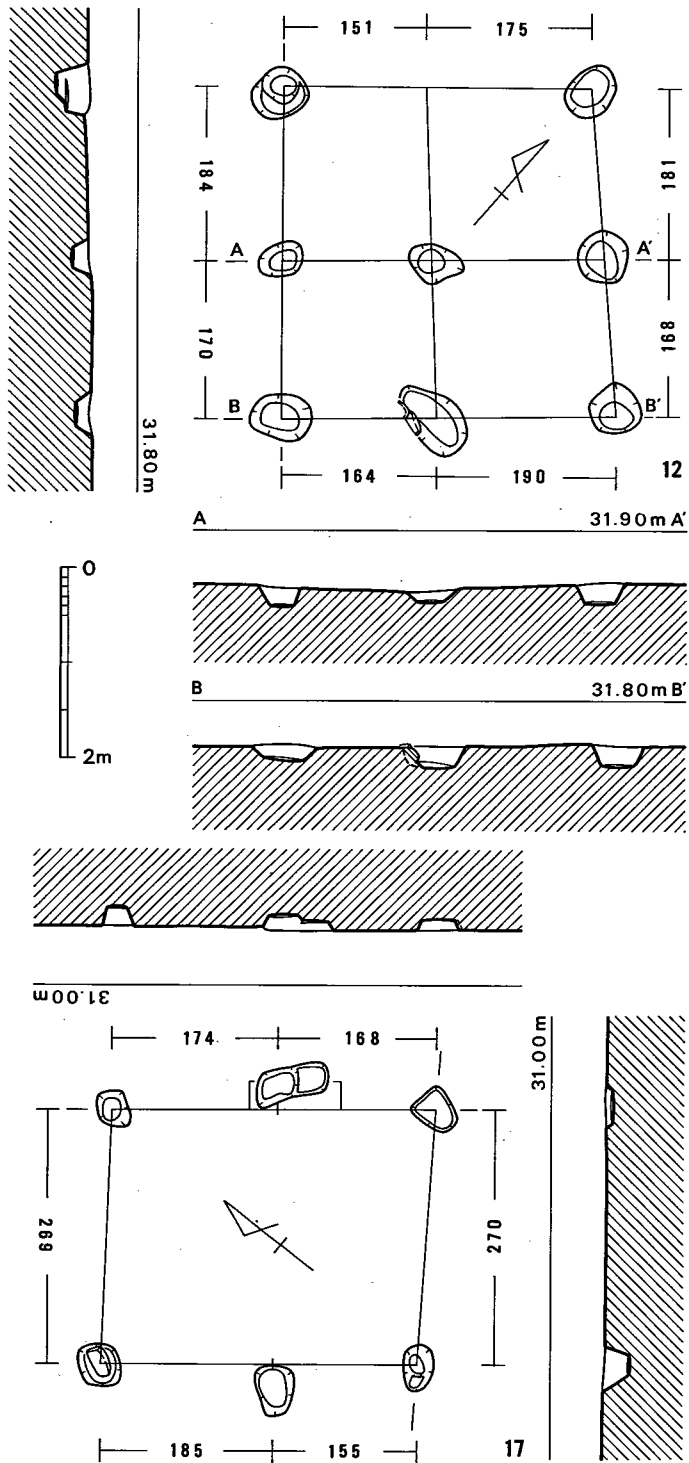


第240図 11・14号建物跡実測図 (1/80)

cm, 深さ25cm前後を測る。桁行方位はN40°Wを示す。柱穴内から土器が出土しているが、伴うものか不明。

出土土器 (第251図)

土師器 (19) 甕の頸部破片で、外面ハケ目、内面ヘラケズリ調整による。胎土に石英・角閃石・赤褐色粒を含む。焼成は良好で、色調は暗橙灰色を呈する。



第 241 图 12·17号建物跡实测图 (1/80)

13号建物跡 (図版88-2, 第239図)

20号住居跡の8.5m東側に位置し、5号溝と重複する。梁行1間(2.95m)×桁行3間(5.74m)の建物跡で、桁行の柱間平均値は1.88mを測る。柱穴は円形を呈し、径31~52cm、深さ20~46cmを測る。梁行方位はN25°Wを示す。柱穴内から土師器片が出土したが、小破片であり、図示不可能。

14号建物跡 (図版87, 第240図)

69号住居跡のすぐ北西側に位置し、11号建物跡と重複する。梁行2間(3.17m)×桁行2間(3.33m)の総柱建物跡である。柱穴は円形を呈し、径50~90cm、深さ40cm前後を測る。南東梁行側柱穴は径が大きく、二段になっていることから柱を抜き去ったものか。桁行方位はN49°Wを示す。柱穴内から土器が出土した。

出土土器 (第251図)

須恵器 (20・21) 20は坏身の受部破片で、たちあがりは内傾する。焼成は堅緻である。21は坏身の底部破片で、低い高台を貼付する。

土師器 (22) 22は口縁部破片で、口唇部が僅かに屈曲する。高坏の口縁部になるか。

15号建物跡 (図版87-1・89-1, 第242図)

11号建物跡の1m北東側に位置し、17号建物跡と重複する。梁行3間(5.04m)×桁行3間(6.06m)の建物跡で、梁行の柱間平均値は1.66m、桁行の柱間平均値は2.01mを測る。柱穴は円形を呈し、径30~70cm、深さ20~42cmを測る。梁行方位はN35°Wを示す。柱穴内から土器が出土した。

出土土器 (第251図)

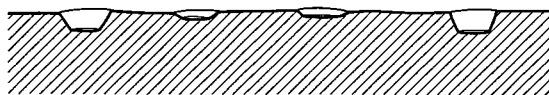
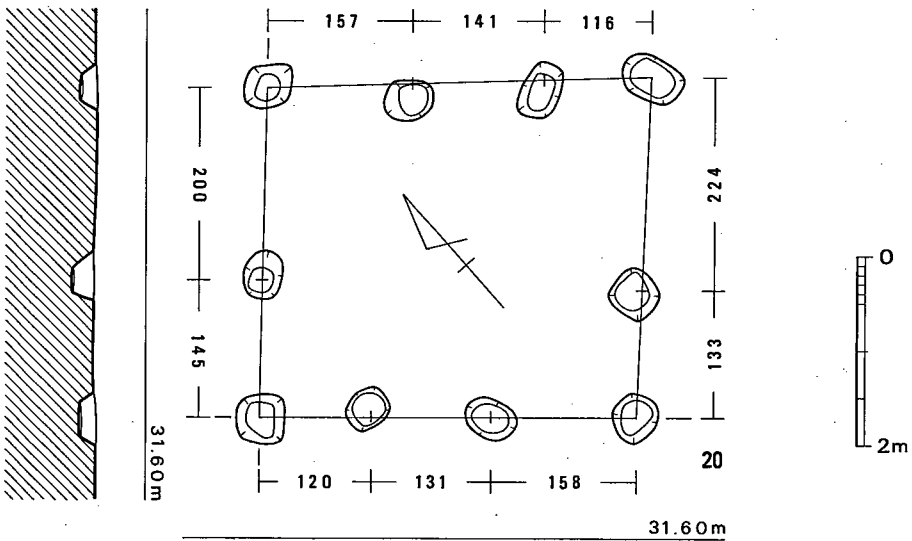
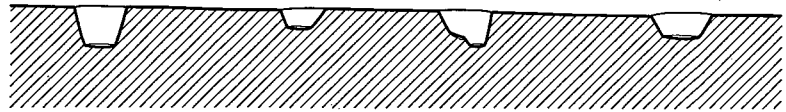
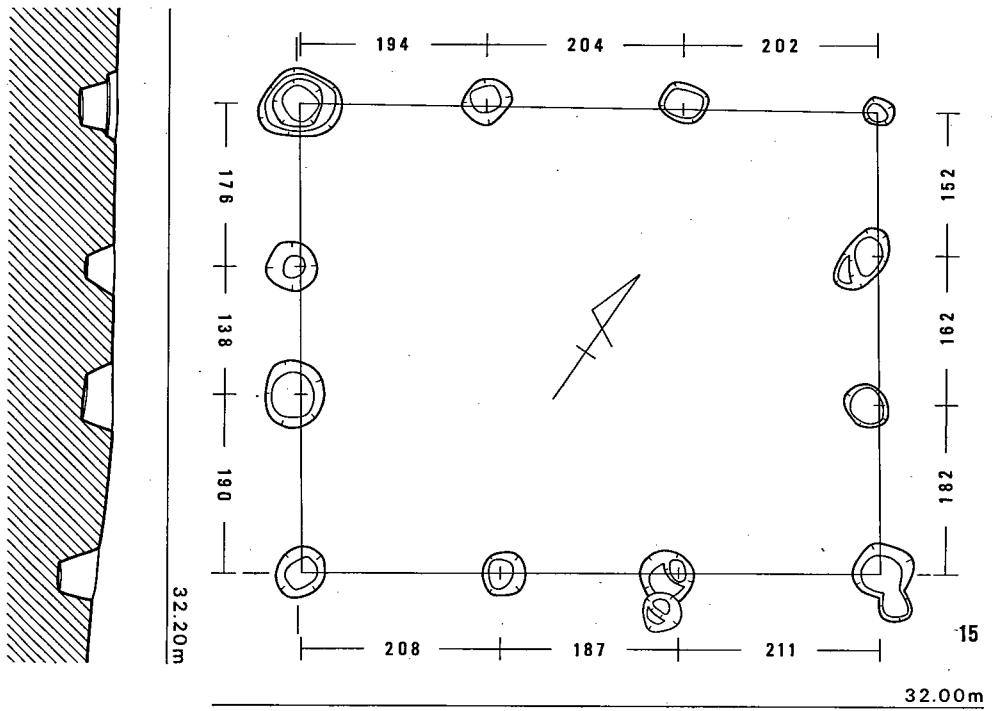
須恵器 (23) 坏身の底部破片で、低い高台を貼付する。高台径は7.0cmに復原した。焼成はやや軟質で、色調は暗灰色を呈する。

16号建物跡 (図版89-2, 第200図)

92・93号住居跡の貼床下層から検出した建物跡で、梁行2間(3.14m)×桁行2間(4.16m)の規模を有する。梁行の柱間平均値は2.08m、桁行の柱間平均値は1.57mを測る。柱穴は円形を呈し、二段に掘っている。径は70~90cm、深さは最大50cm遺存する。二段目の穴は径25cm程。梁行方位はN23°Wを示す。柱穴内からは、土器片数点が出土した程度。

出土土器 (第251図)

土師器 (24) 24は平底の底部破片で、内外面ともナデ調整による。胎土に石英・赤褐色粒などを多く含み、割合に雑である。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。甕になるか。



第 242 图 15·20号建物跡实测图 (1/80)

17号建物跡（図版87-1・89-1，第241図）

15号建物跡と重複し，66号住居跡を切っている。梁行1間（2.72m）×桁行2間（3.41m）の建物跡で，桁行の柱間平均値は1.69mを測る。柱穴は不整形を呈し，径32～51cm，深さ10～32cmを測る。桁行方位はN32°Wを示す。柱穴内から土器が出土した。

出土土器（第251図）

須恵器（25）25は坏身の底部破片で，低い高台を貼付する。高台径は9.0cmに復原した。焼成は良好で，色調は暗灰色を呈する。

土師器（26）皿の口縁部小片で，口唇部は丸く納める。胎土は緻密で，橙色を呈する。

18号建物跡（図版85-1，第243図）

7号建物跡の1m南側に位置する。6・19号建物跡と重複し，73・76～79・99号住居跡を切っている。梁行2間（4.00m）×桁行5間（8.40m）の建物跡で，梁行の柱間平均値は1.95m，桁行の柱間平均値は1.59mを測る。柱穴は円形を呈し，径28～46cm，深さ20～32cmを測る。桁行方位はN61°Eを示す。柱穴内から土器が数点出土した。

出土土器（第251図）

須恵器（27）口縁部破片で，坏になるか。調整は内外面ともナデによる。焼成は堅緻で，色調は暗灰色を呈する。

土師器（28）口縁部小片で，口唇部は小さく屈曲する。胎土に石英・赤褐色粒を含む。焼成は良好で，色調は橙色を呈する。椀になるか。

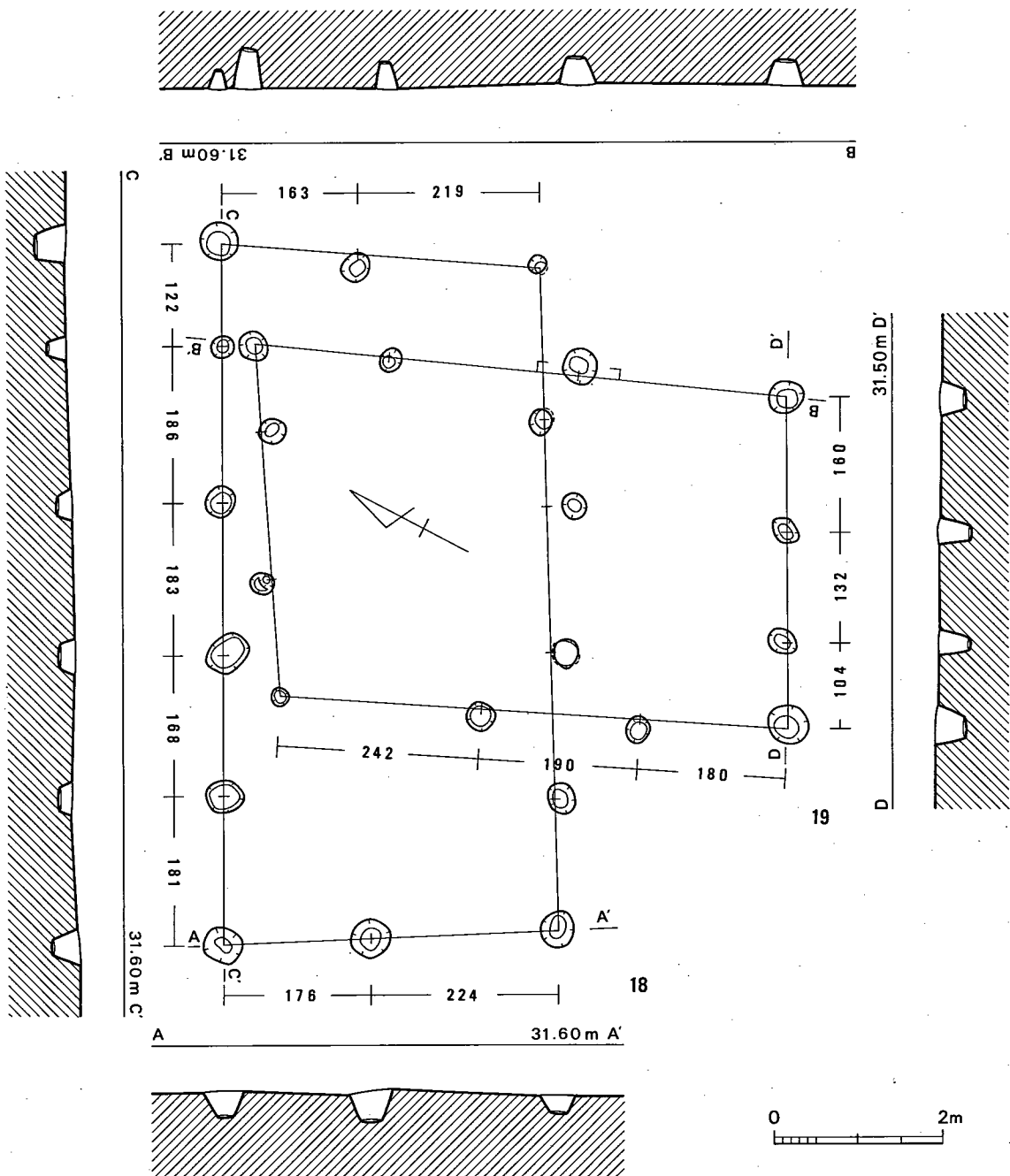
19号建物跡（図版85-1，第243図）

7号建物跡の1.6m南側に位置する。18号建物跡と重複し，75～79号住居跡を切っている。梁行3間（4.23m）×桁行3間（6.41m）の建物跡で，梁行の柱間平均値は1.36m，桁行の柱間平均値は2.08mを測る。柱穴は円形を呈し，径20～50cm，深さ30～40cmを測る。桁行方位はN22°Wを示す。柱穴内から土器が数点出土した。

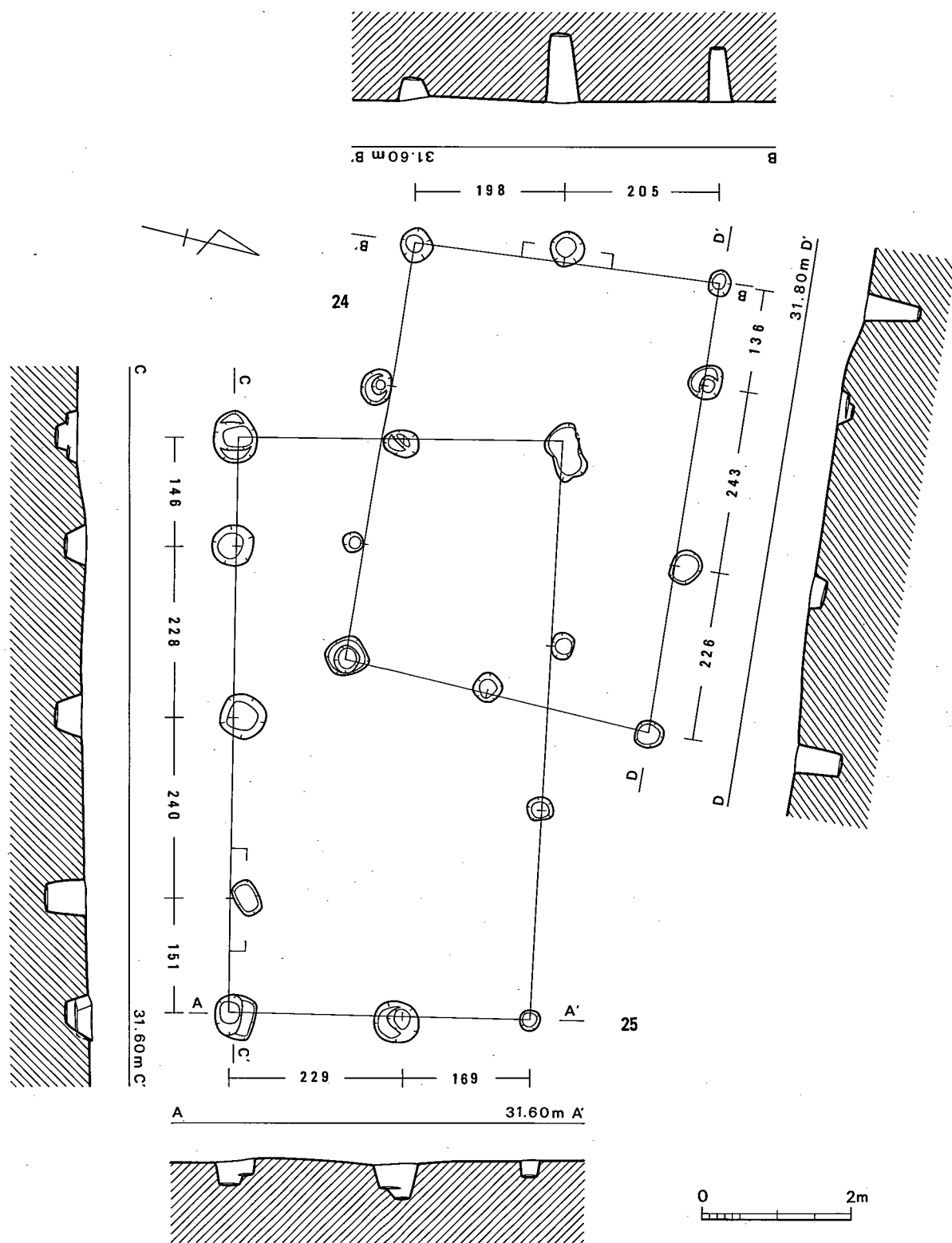
出土土器（第252図）

須恵器（29）坏身の底部破片で，ハ字形の高台を貼付する。調整はナデによる。焼成は良好であるが，色調は暗赤橙色を呈する。

土師器（30～34）30・31は椀で，30は口縁部破片。31は底部破片で，細身の高台を貼付する。外面ヨコナデ，内面ヘラミガキ調整による。胎土に石英・赤褐色粒を含む。31の高台径は8.0cmに復原した。32・33は皿の口縁部破片で，32の口縁部は外反する。色調は両者とも赤橙色を呈する。32の口径は14.4cmに復原した。33は底部破片で，乳灰色を呈する。



第 243 图 18·19号建物跡実測図 (1/80)



第 244 图 24·25号建物跡実測图 (1/80)

20号建物跡（第242図）

1号住居跡の7m北側に位置する。梁行2間（3.57m）×桁行3間（4.14m）の建物跡で、梁行の柱間平均値は1.75m、桁行の柱間平均値は1.37mを測る。柱穴は円形を呈し、径30cm前後、深さ16～40cmを測る。桁行方位はN50°Wを示す。柱穴内からは、土師器片が出土しているが、小片のため図示不可能。

21号建物跡（第233図）

3号建物跡の1m南側に位置し、2・27号建物跡と重複する。梁行2～3間（5.14m）×桁行3間（5.76m）の建物跡であるが、2・27号建物跡の柱穴と共有しており、建物跡とするには無理があるかもしれない。柱穴は円形を呈し、径30cm前後、深さ16～40cmを測る。桁行方位はN27°Wを示す。柱穴内からは、土師器片が出土しているが、小片のため図示不可能。

22号建物跡（第15図）

20号建物跡の1.5m南西側に位置する。2号住居跡と切合うが、前後関係は不詳。梁行1間（2.37m）×桁行2間（5.76m）の建物跡で、桁行の柱間平均値は2.78mを測る。柱穴は円～長円形を呈し、径50～100cm、深さは削平により15cm前後を測る程度。桁行方位はN30°Eを示す。柱穴内から土器が出土したが、図示不可能。

23号建物跡（図版64、第191図）

2号建物跡の2m東側に位置し、86号住居跡を切っている。梁行2間（2.24m）×桁行2間（2.38m）の総柱建物跡である。柱穴は円形を呈し、径40～64cm、深さ30～46cmを測る。桁行方位はN21°Wを示す。柱穴内から土器が出土しているが、当建物跡に伴うものか不明。

出土土器（第252図）

土師器（35）甑の底部破片で、端部は丸く納める。外面は磨滅により、調整不明。内面はヘラケズリによる。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

24号建物跡（第244図）

23号建物跡の1m東側に位置し、86・94号住居跡を切っている。また、25号建物跡と重複するが前後関係は不明。梁行2間（4.12m）×桁行3間（6.05m）の建物跡で、梁行の柱間平均値は2.03m、桁行の柱間平均値は1.94mを測る。柱穴は円形を呈し、径34～52cm、深さ30～50cm前後を測る。梁行方位はN12°Wを示す。柱穴内から土器が出土している。

出土土器（第252図）

土師器（36）椀の口縁部破片で、口唇部は丸く納める。胎土に石英・赤褐色粒を含む。焼成

は良好で、色調は橙褐色を呈する。

25号建物跡（第244図）

24号建物跡と重複して位置する。梁行2間（4.30m）×桁行3～4間（7.72m）の建物跡で、桁行の柱間は1.46～2.78mとばらつきがある。柱穴は円形を呈し、径30～60cm、深さ20～50cmを測る。梁行方位はN13°Wを示す。柱穴内から土器が出土した。

出土土器（第252図）

須恵器（37） 坏蓋の口縁部小片で、口唇部は小さく立つ。堅緻で、色調は灰黒色を呈する。

26号建物跡（第235図）

24号建物跡の東側に重複して位置し、25号竪穴を切る。梁行2間（3.82m）×桁行3間（6.82m）の南北棟の建物跡である。梁行の柱間平均値は1.84m、桁行の柱間平均値は2.24mを測る。柱穴は円形を呈し、径20cm前後、深さ20cm前後を測る。桁行方位はN4°Wを示す。柱穴内から土器が出土した。

出土土器（第252図）

須恵器（38） 坏蓋の口縁部小片で、口唇部はシャープさに欠ける。焼成は堅緻で、色調は暗灰色を呈する。

27号建物跡（第233図）

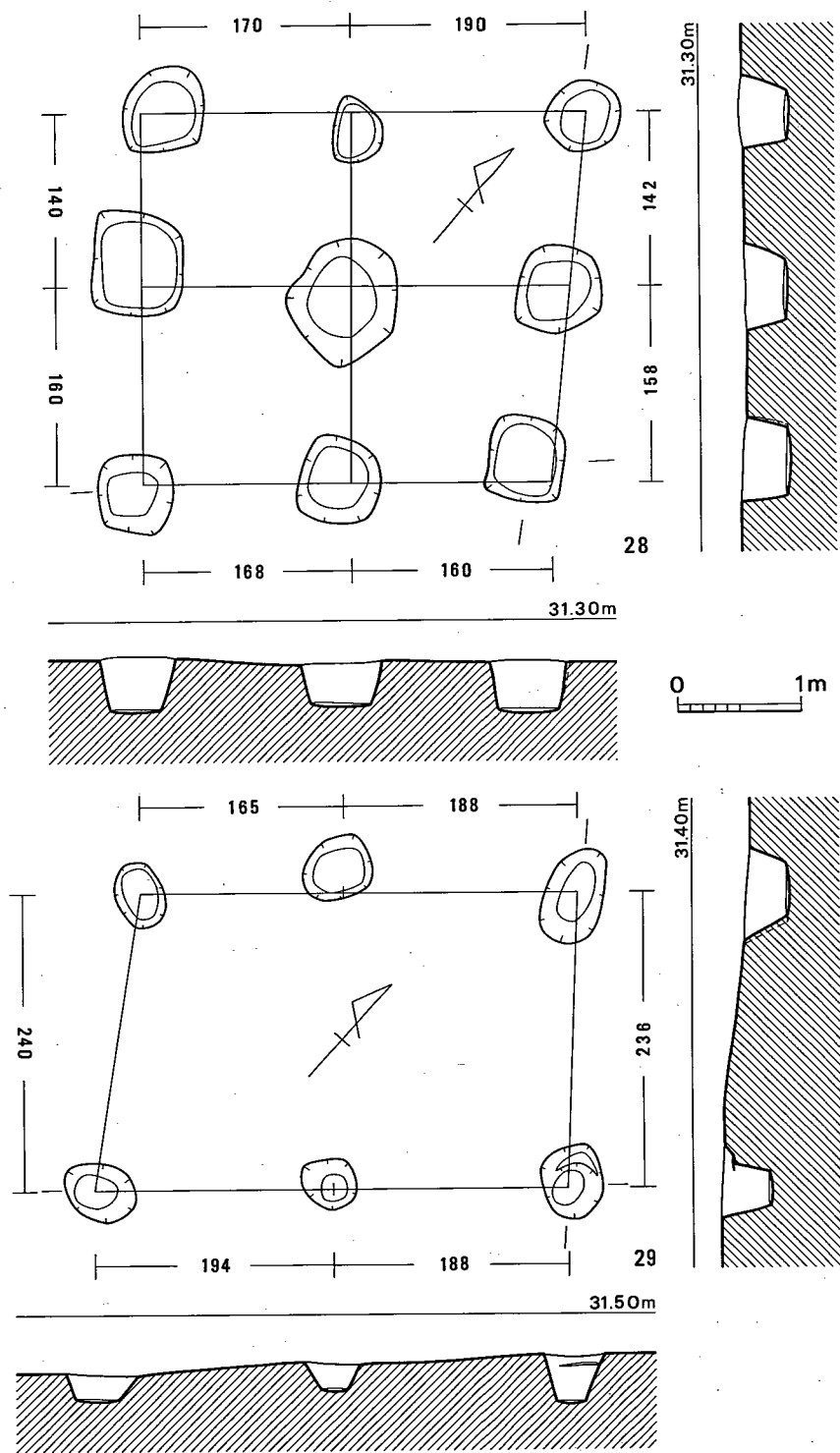
2・21号建物跡と重複して位置する。梁行2間（3.22m）×桁行4間（6.32m）の建物跡で、梁行の柱間平均値は1.53mを測る。柱穴は円形を呈し、径20～40cm、深さ30～50cmを測る。桁行方位はN47°Eを示す。柱穴内から土器が出土しているが、図示不可能。

28号建物跡（第245図）

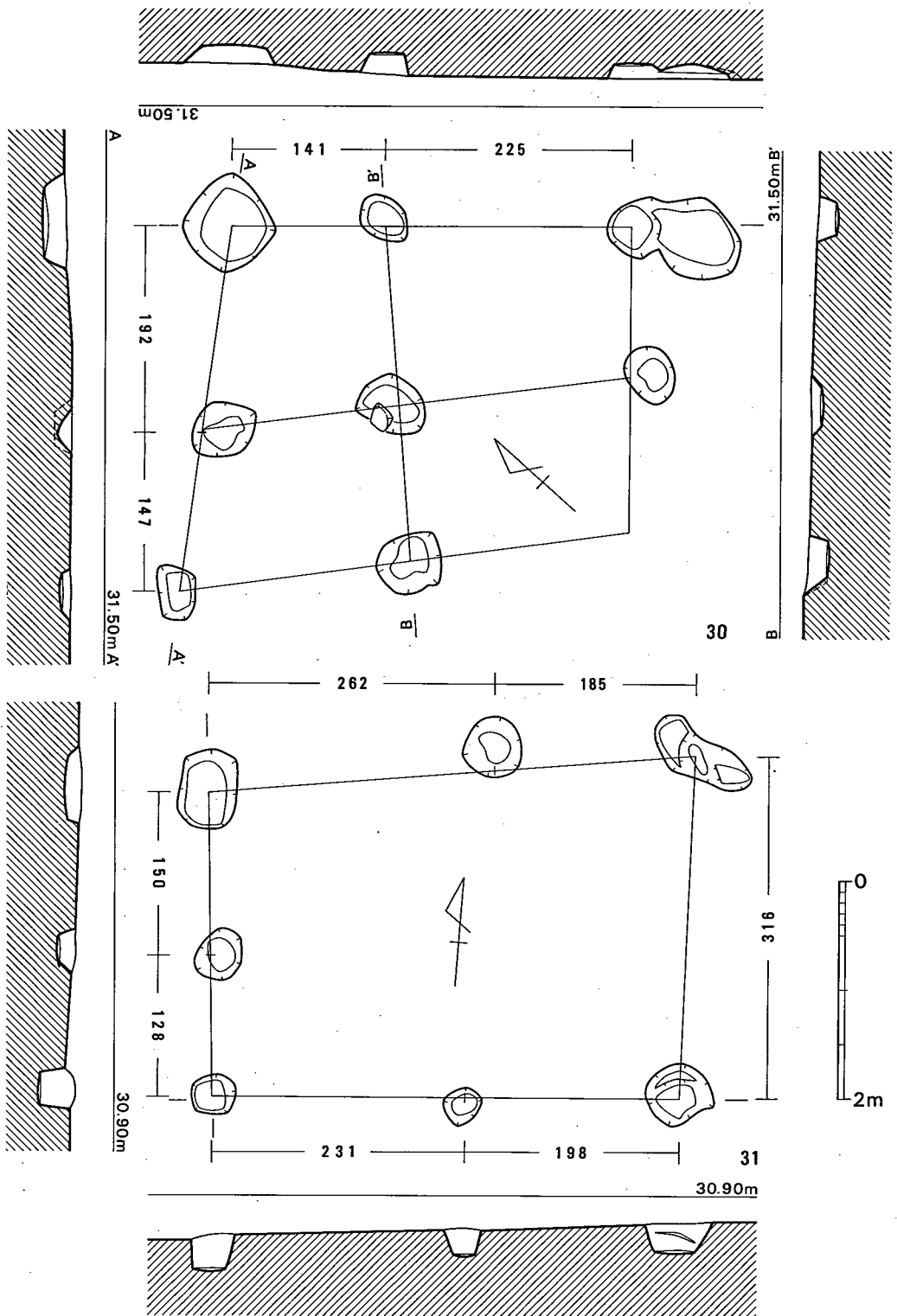
10号建物跡の14m北東側に位置し、3号竪穴、4号土塋を切っている。梁行2間（3.00m）×桁行2間（3.60m）の総柱建物跡である。柱穴は隅丸形状を呈し、径70cm前後、深さ30cm前後を測る。梁行方位はN40°Wを示す。柱穴内からは、須恵器・土師器片が出土しているが、小破片のため図示不可能。

29号建物跡（第245図）

8・10号建物跡と重複して位置する。梁行1間（2.40m）×桁行2間（3.84m）の建物跡である。柱穴は円～長円形を呈し、径40～80cm、深さは40cm前後を測る。梁行方位はN41°Wを示す。柱穴内から土器が出土しているが、図示不可能。



第 245 图 28·29号建物跡実測図 (1/60)



第 246 图 30·31号建物跡实测图 (1/60)

30号建物跡 (第246図)

12号建物跡の5m南側に位置し、両者は並列して配される。北西側梁行2間(3.39m)×北東側桁行2間(3.66)の総柱建物跡である。柱穴は円～方形を呈し、径50～80cm前後、深さ10～20cm前後を測る。梁行方位はN49°Eを示す。柱穴内から土器が出土した。

出土土器 (第252図)

須恵器(39) 口縁部破片で、口唇部は丸く納める。調整はヨコナデによる。焼成は軟質で、色調は乳灰色を呈する。坏もしくは椀になろう。

土師器(40) 坏の口縁部小片であろう。口唇部は丸く納めている。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

31号建物跡 (第246図)

57号住居跡の58m南側に単独で位置する。西側梁行2間(2.78m)×桁行2間(4.29m)の東西棟の建物跡である。柱穴は円形を呈し、径35～76cm、深さ15～28cmを測る。梁行方位はN4°Wを示す。柱穴内からは土師器が出土しているが、図示不可能。

32号建物跡 (第247図)

26号住居跡の5m南側に位置する。梁行1間(2.00m)×桁行2間(3.35m)の建物跡である。柱穴は長円形を呈し、径55～65cm、深さ12～22cmを測る。梁行方位はN29°Wを示す。柱穴内からの遺物の出土はない。

33号建物跡 (第247図)

18号住居跡を切って、その西側に位置する。梁行1間×桁行1間の規模で、竪穴住居跡の住居壁が削平されたものとしては、柱穴の規模・間隔が大きいことから一応建物跡と報告しておく。梁行の柱間は1.80m、桁行の柱間は3.60mを測る。柱穴は円形を呈し、径80～100cm、深さ40cm前後を測る。桁行方位はN17°Eを示す。柱穴内からは、弥生土器・須恵器等が出土した。

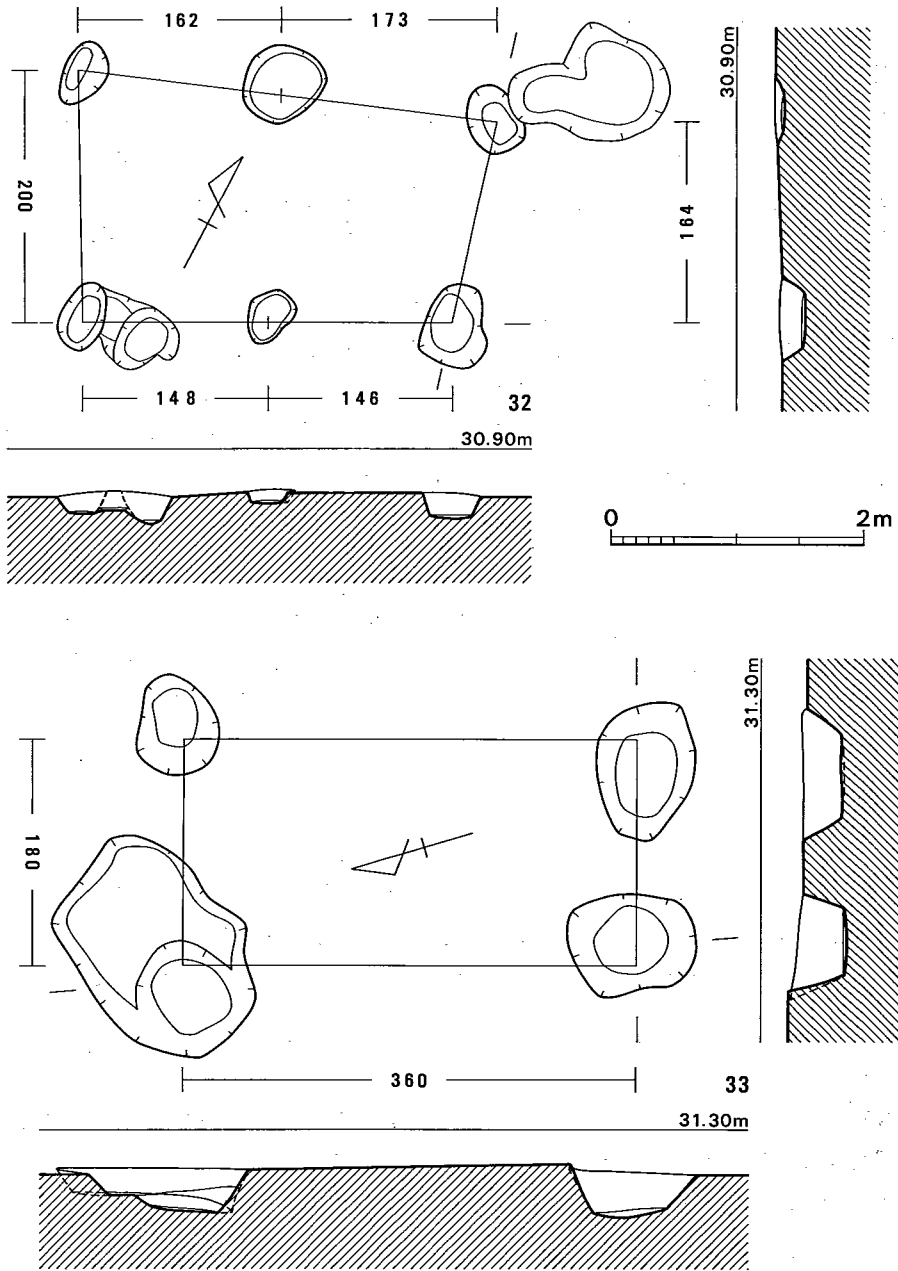
34号建物跡 (第248図)

11号建物跡のすぐ南東側に位置し、11・14号建物跡と重複する。また、69号住居跡を切っている。梁行4間(5.04m)×桁行5間(8.54m)の建物跡で、梁行の柱間平均値は1.22m、桁行の柱間平均値は1.69mを測る。柱穴は円形を呈し、径30～40cm、深さ20～38cmを測る。桁行方位はN45°Eを示す。柱穴内から土器が出土した。

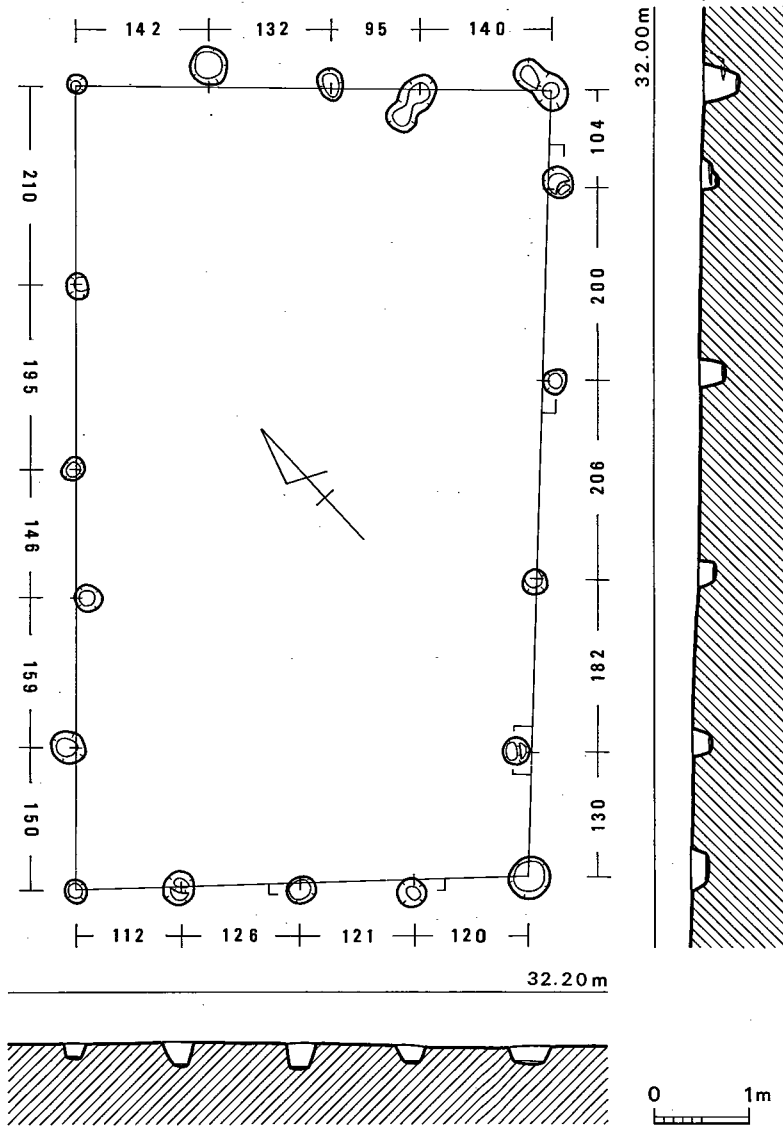
出土土器 (第252図)

須恵器(41) 41は坏身のたちあがり部破片で、受部径は15.2cmに復原した。口縁部ヨコナデ、

外面へラケズリ、内面ナデ調整による。焼成は堅緻で、色調は暗灰色を呈する。42は坏身の底部破片で、低めの高台を貼付する。焼成は堅緻で、色調は黒灰色を呈する。



第247図 32・33号建物跡実測図 (1/60)

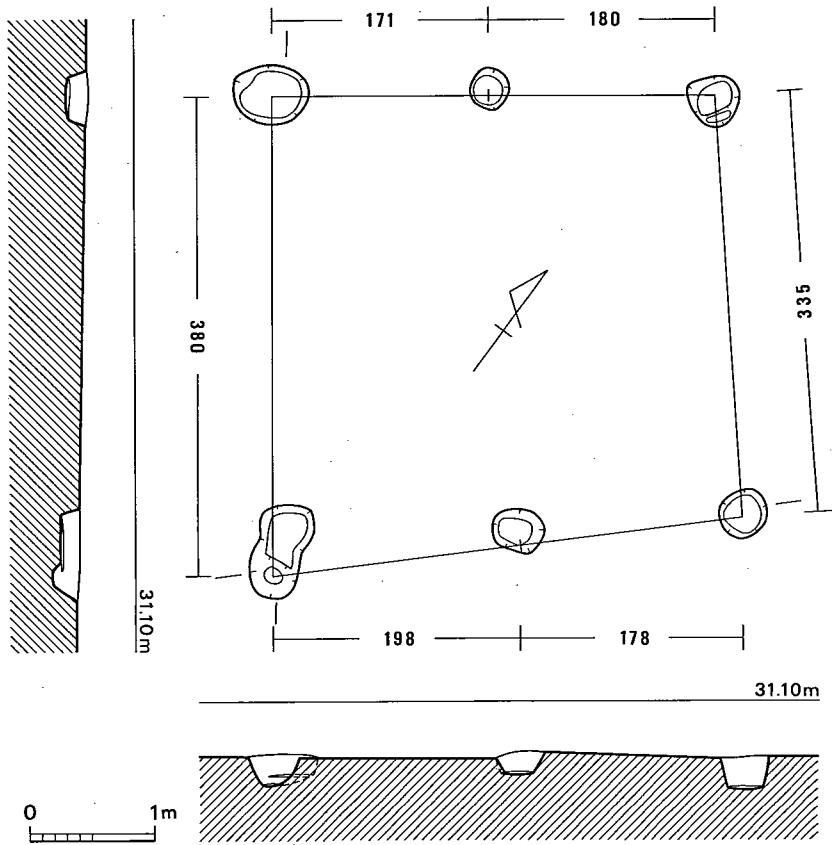


第 248 図 34号建物跡実測図 (1/80)

土師器 (43) 底部破片で、外底面はヘラケズリ調整による。胎土に石英・赤褐色粒を多く含む。焼成は良好で、色調は暗赤橙色を呈する。

35号建物跡 (第249図)

11号建物跡の10m北西側に位置する。梁行2間 (3.76m)×桁行1間 (3.80m) の建物跡であ



第 249 図 35号建物跡実測図 (1/80)

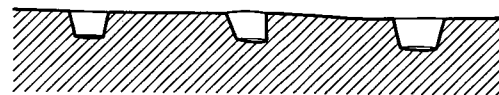
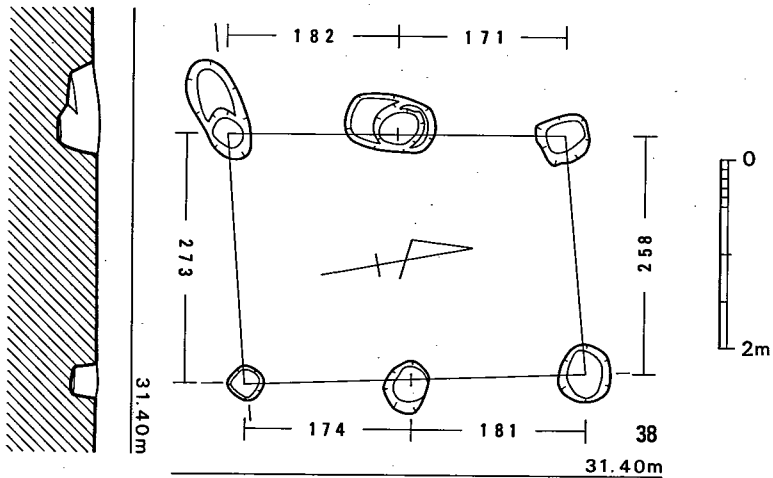
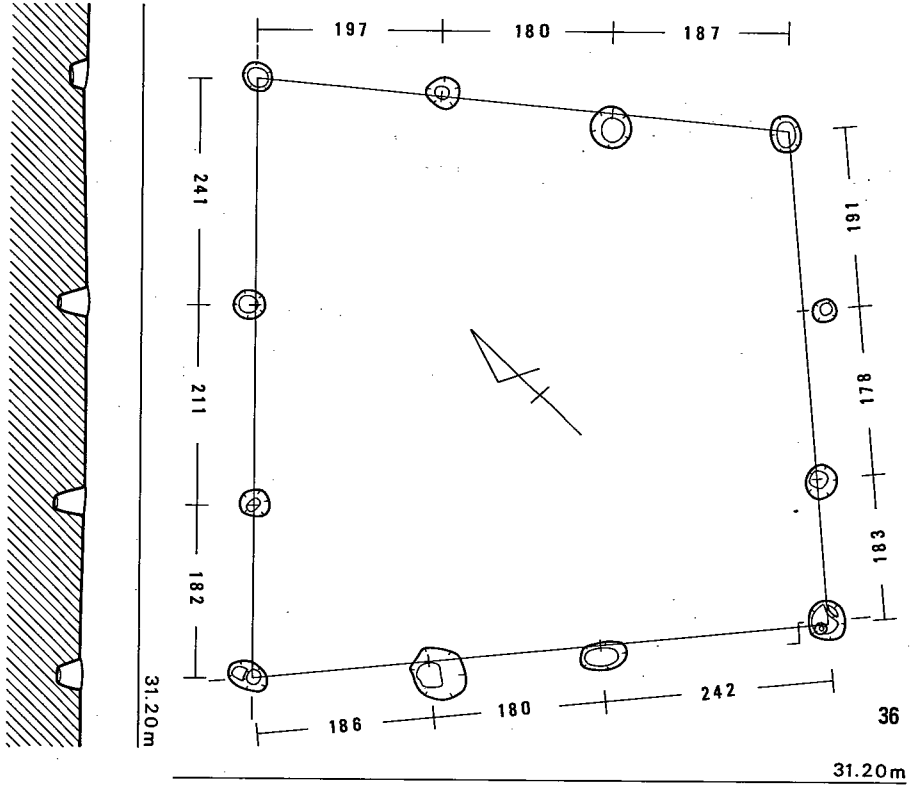
る。柱穴は円形を呈し、径30~60cm、深さ16~26cmを測る。桁行方位はN37°Wを示す。遺物の出土はなかった。

36号建物跡 (図版87, 第250図)

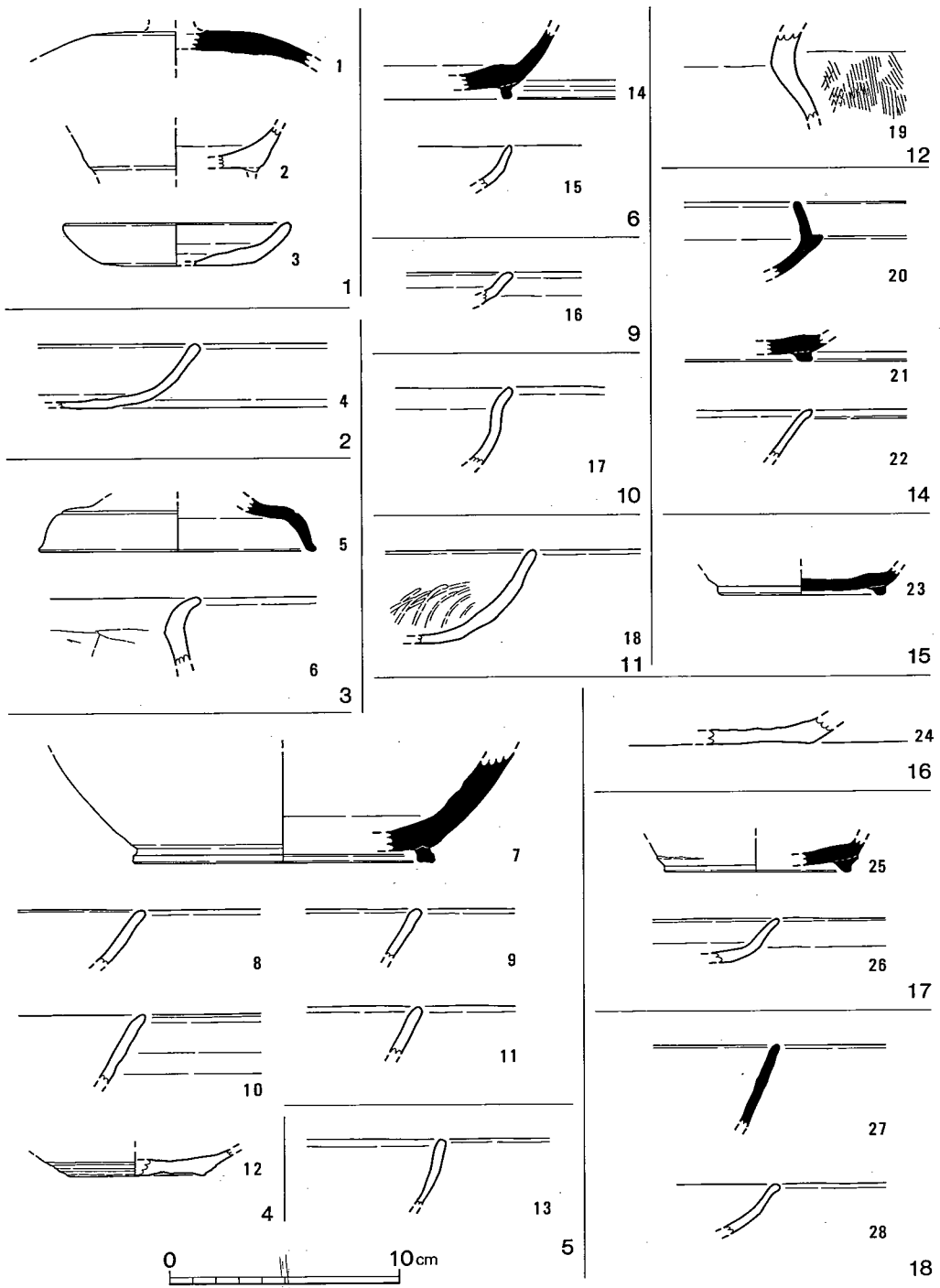
35号建物跡の5m南東側に位置する。11号建物跡と重複するものの前後関係は不明。梁行3間(6.08m)×桁行3間(6.34m)の建物跡で、梁行の柱間平均値は1.95m、桁行の柱間平均値は1.92mを測る。柱穴は円形を呈し、径31~52cm、深さ26~44cmを測る。桁行方位はN47°Eを示す。柱穴内から土器が出土した。

出土土器 (第252図)

須恵器 (44・45) 44は坏身の底部破片で、低めの高台を貼付する。高台径は11.2cmに復原した。体部はナデ調整による。焼成は良好で、色調は暗緑灰色を呈する。45は底部破片で、低め



第 250 图 36·38号建物跡实测图 (1/80)



第 251 图 建物跡出土土器実測図①.(1/3)

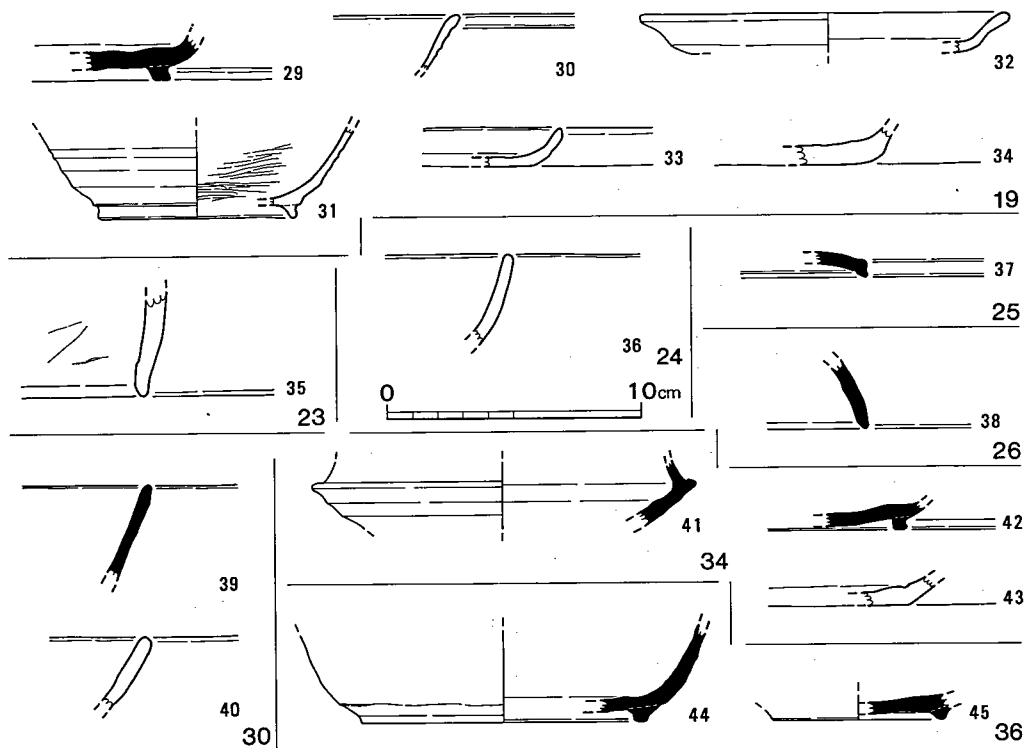
の高台を貼付する。焼成は軟質で、色調は暗灰色を呈する。

37号建物跡（第70図）

12号建物跡の10.5m東南側に位置し、25号住居跡と切合い関係にある。梁行2間（4.08m）×桁行2間（5.12m）の建物跡である。柱穴は円形を呈し、径41～73cm、深さ12～21cmを測る。梁行方位はN54°Eを示す。柱穴内からの遺物の出土はなかった。

38号建物跡（第250図）

33号建物跡の4m南東側に位置する。梁行1間（2.73m）×桁行2間（3.55m）の建物跡で、桁行の柱間平均値は1.77mを測る。柱穴は円形を呈し、径36～60cm、深さ23～30cmを測る。桁行方位はN9°Eを示す。柱穴内からの遺物の出土はなかった。



第 252 図 建物跡出土土器実測図② (1/3)

表6 建物跡一覧表①

No.	柱間数	規 模		柱間平均値		柱 穴 掘 方		主軸方位	群	備 考
	(梁×桁)	梁行	桁行	梁行	桁行	径	深さ			
1	2×3	4.24	6.78	2.07	2.25	24~34	21~52	N30°E	B	4面庇建物, 住36・41~43・98を切る
2	2×3	3.90	5.92	1.86	1.78	24~32	36~78	N42°E	B	建21・27と重複
3	3×3	5.06	6.14	1.72	2.10	60~80	40±	N43°W	B	桁行は5間になるか
4	2×3	3.10	4.46	1.56	1.51	22~34	22~30	N80°E	C	竪22, D42を切り, 建26と重複
5	2×3	3.71	6.60	1.84	2.18	20±	30±	N80°E	C	住73・74・95を切る
6	2×3	3.88	6.03	1.84	2.18	20±	30±	N63°E	C	住27・72・75を切る
7	2×5	3.94	7.75	1.96	1.53	30~40	22~46	N60°E	C	住99を切る
8	2×2	4.55	3.44	1.68	2.21	50±	40±	N43°E	B	総柱建物跡, 建10・29と重複
9	2×3	3.65	6.08		2.0	20~50	20~60	N9°W	B	
10	4×5	4.65	6.53	1.15	1.29	34~56	26~36	N44°E	B	建8・29と重複
11	3×3	5.16	5.52	1.72	1.81	40~80	20~40	N36°W	D	建14・36と重複
12	2×2	3.26	3.52	1.75		50~65	25±	N40°W	C	総柱建物跡
13	1×3	2.95	5.74	2.94	1.88	31~52	20~46	N65°E	E	溝5と重複
14	2×2	3.17	3.33	1.53	1.56	50~90	40±	N49°W	D	総柱建物跡, 建11と重複
15	3×3	5.04	6.06	1.66	2.01	30~70	20~42	N35°W	D	建17と重複
16	2×2	3.14	4.16	2.08	1.57	70~90	50	N67°E	B	住92・93に切られる
17	1×2	2.72	3.41	1.37	1.69	32~51	10~32	N32°W	D	建15と重複
18	2×5	4.00	8.40	1.95	1.59	28~46	20~32	N61°E	C	住73・76~79・99を切る
19	3×3	4.23	6.41	1.36	2.08	20~50	30~40	N22°W	C	住75~79を切り, 建18と重複
20	2×3	3.57	4.14	1.75	1.37	30±	16~40	N50°W	A	
21	2~3×3	5.14	5.76			30±	16~40	N27°W	B	建2・27と重複
22	1×2	2.37	5.76		2.78	50~100	15±	N30°E	A	住2と重複
23	2×2	2.24	2.38	1.12	1.19	40~64	30~46	N21°W	B	住86を切る
24	2×3	4.12	6.05	2.03	1.94	34~52	30~50	N78°E	B	住86・94を切り, 建25と重複

※単位：規模・柱間平均値-m, 柱穴掘方-cm

表7 建物跡一覧表②

No.	柱間数	規 模		柱間平均値		柱 穴 掘 方		主軸方位	群	備 考
	(梁×桁)	梁行	桁行	梁行	桁行	径	深さ			
25	2×3～4	4.30	7.72	2.07		30～60	20～50	N77°E	B	建24と重複
26	2×3	3.82	6.82	1.84	2.24	20±	20±	N4°W	C	縦25を切り、建4と重複
27	2×4	3.22	6.32	1.53		20～40	30～50	N47°E	B	建2・21と重複
28	2×2	3.00	3.60	1.50	1.72	70±	30±	N40°W	B	縦3・D4を切る
29	1×2	2.40	3.84	2.38	1.83	40～80	40±	N41°W	B	建8・10と重複
30	2×2	3.39	3.66			50～80	10～20	N51°W	C	総柱建物跡
31	1～2×2	2.78	4.29		2.19	35～76	15～28	N86°E		
32	1×2	2.00	3.35	1.82	1.57	55～65	12～22	N61°E	C	
33	1×1	1.80	3.60			80～100	40±	N17°E	E	住18を切る
34	4×5	5.04	8.54	1.22	1.69	30～40	20～38	N45°E	D	住69を切り、建11・14と重複
35	2×1	3.76	3.80	1.81	3.57	30～60	16～26	N37°W	D	
36	3×3	6.08	6.34	1.95	1.92	31～52	26～44	N47°E	D	建11と重複
37	2×2	4.08	5.12	2.00	2.49	41～73	12～21	N36°W	C	住25と重複
38	1×2	2.73	3.55	2.65	1.77	36～60	23～30	N9°E	E	

※単位：規模・柱間平均値-m, 柱穴掘方-cm

(3) 竖 穴

26基を取りあげる。竖穴住居跡にしては柱穴・カマド等の設備がなく、土壙とするにはやや浅くて、方形のプランをなすものを指している。しかし、やや深みのあるものをも竖穴としているので、特に土壙とは区別しにくいものも含んでいる。ここは、調査時の呼称どおりとして説明する。その性格については良く判らない。出土遺物も少ない。

調査区内における分布は、中央あたりから北半にかけてが多い。時期的には竖穴住居群とほぼ併行しているとしてよい。

1号竖 穴 (図版90-1, 第254図)

調査区の中央北端付近にある。西側を5号土壙に切られ、南半は未検出であったが、方形のプランになろう。一辺3.3m程度の大きさと思われる。実測しうる遺物はなかった。

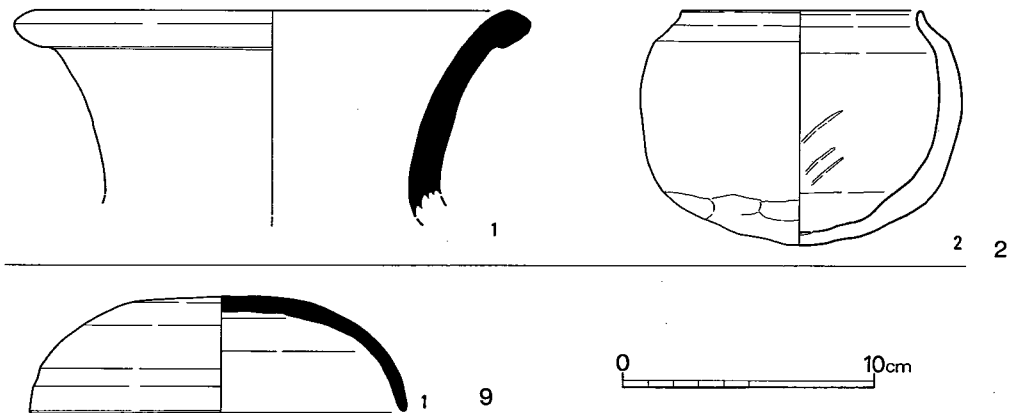
2号竖 穴 (図版90-1・91-1, 第254図)

1号竖穴の北にある。2.7~2.8mを一辺とする方形プランで、北辺・東辺には突出した部分がある。床面の南東側から土器が出土している。また、ミニチュア土器1個、石製紡錘車1個が出土した。

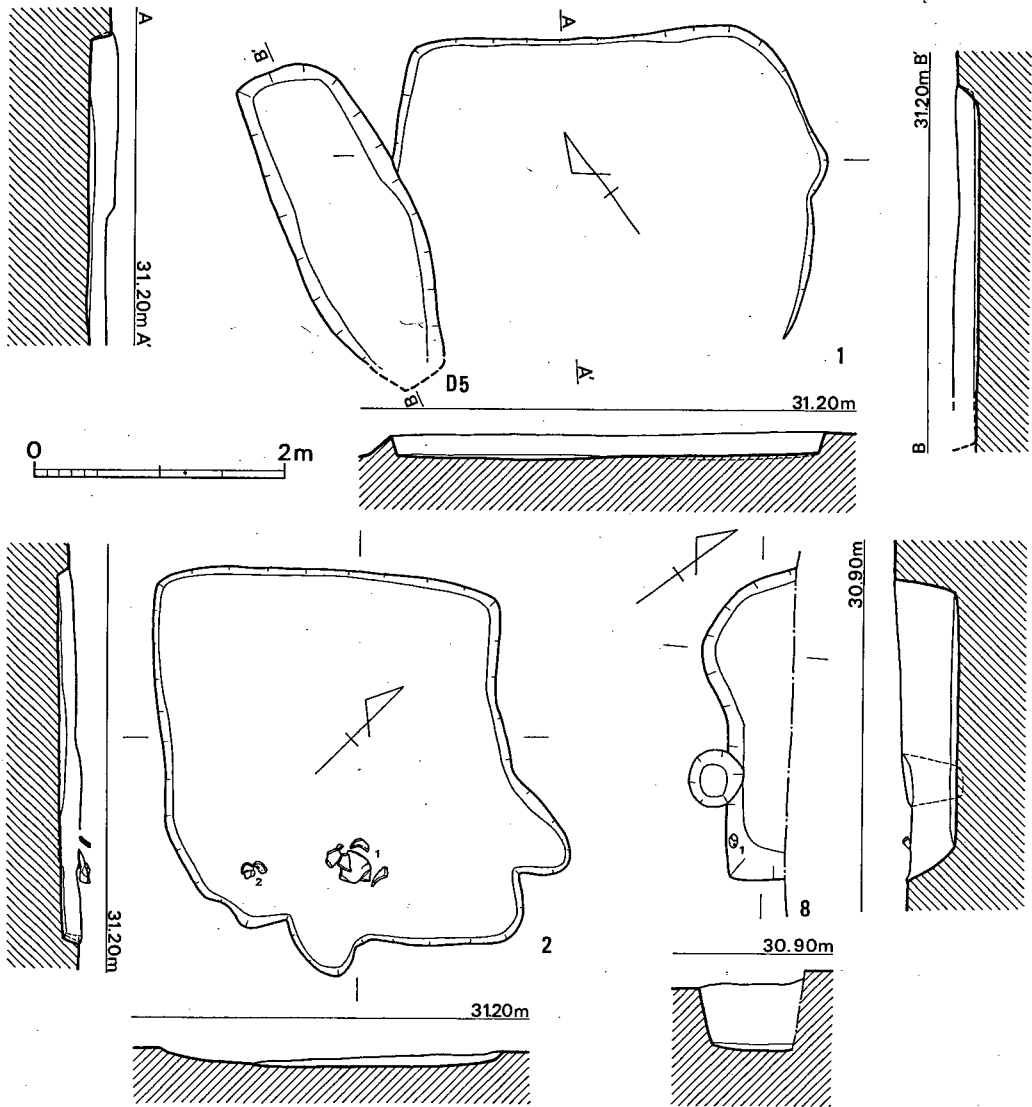
出土土器 (図版138-1, 第253図・第286図T2-3)

須恵器(1・3) 1は甕の口縁部で、復原口径18.7cm。3は生焼けに近い破片で、甕の底部になる。内面の同心円当具痕は粗々しい。

土師器(2) 2は埴であるが、内面に弧状の当具痕か擦過痕が見えており、製塩に関連した土器かもしれない。



第253図 竖穴出土土器実測図①(1/3)



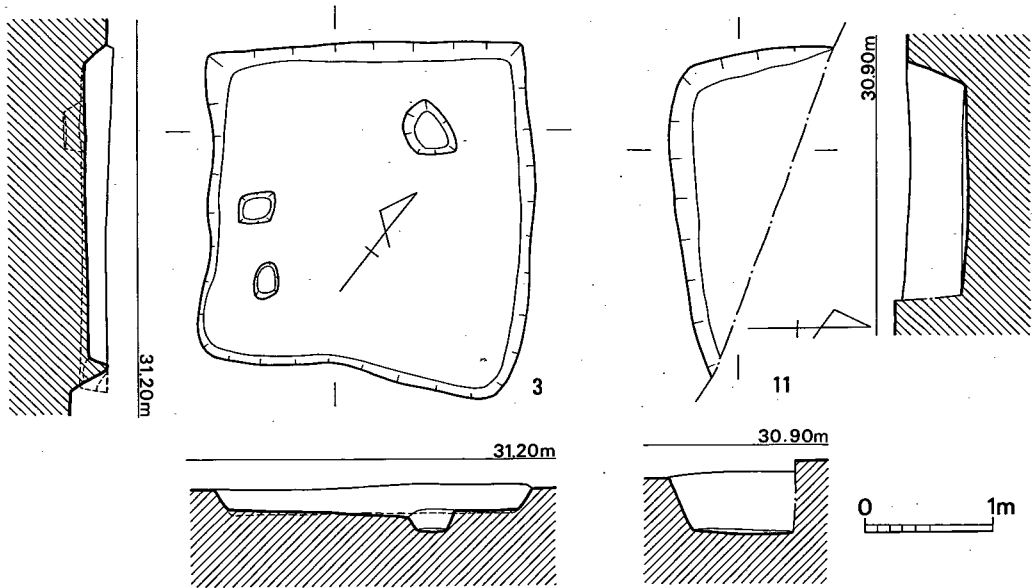
第254図 1・2・8号竖穴，5号土坑実測図 (1/60)

3号竖穴 (図版90-1・91-2, 第255図)

2号竖穴の北東にある。一辺2.5mの方形プランをなし，深さ25cm。28号建物に切られている。出土遺物で図示しうるものはなかった。

4号竖穴 (図版9-2, 第31図)

1～3号竖穴の東方にあり，10号住居跡を切っている。南北3.85～4.4m，東西2.9m程の不整



第255図 3・11号竪穴実測図 (1/60)

形プランをなす。

出土土器 (図版138-2, 第256図)

土師器 (1・2) 1は裾部径10.8cmの高坏脚部である。内面に一部布目痕が見える。2は口径15cmに復される甕で、肩部の張った資料である。

5号竪穴 (図版11-1, 第44図)

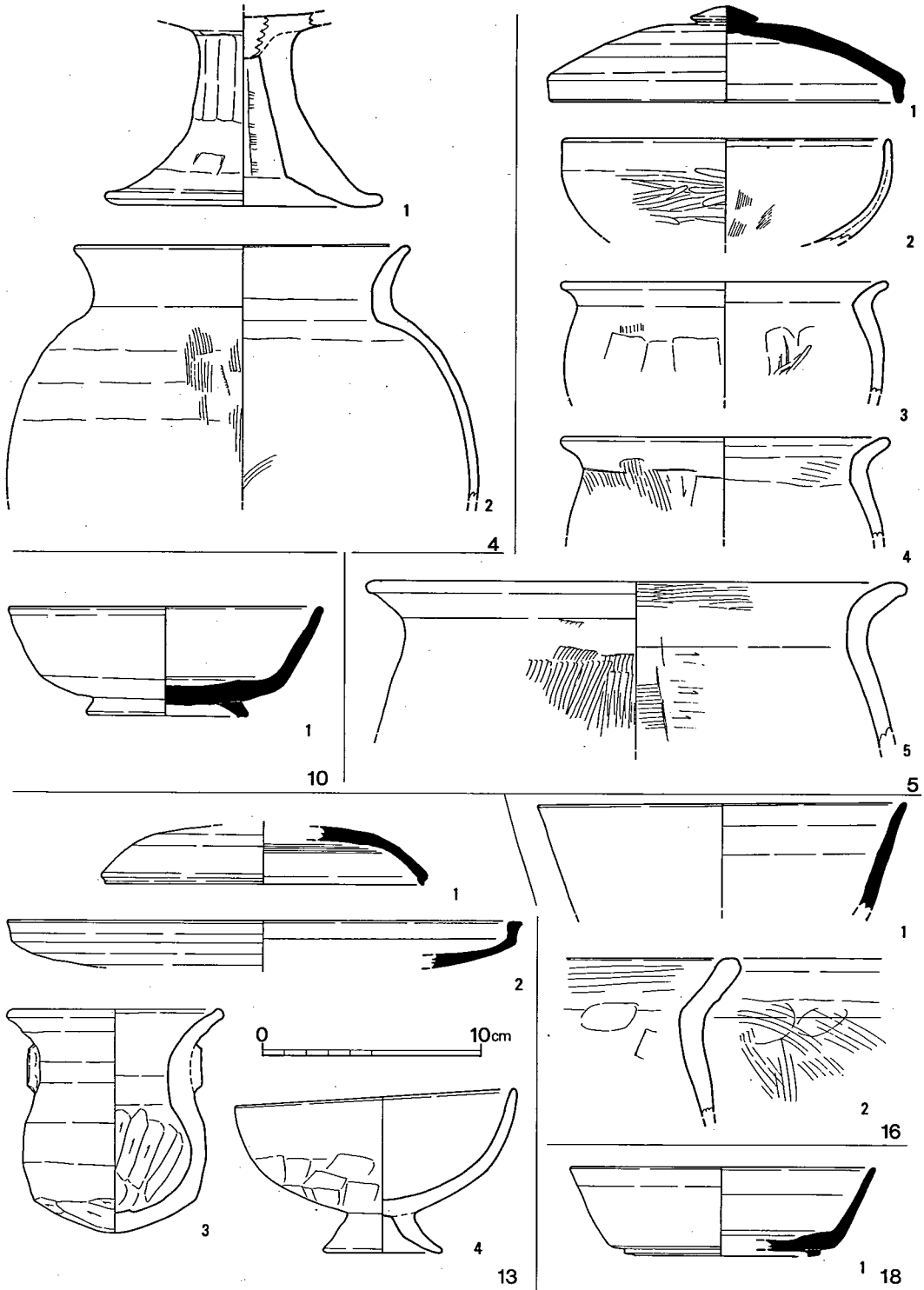
調査区北半の遺構が最も密集した中にある。6・9号竪穴, 15・16・23・24号住居跡, 25号土壇を切っていて、この周辺では最も新しい。東西1.7~2.2m, 南北2.8~3.2mの長方形プランで、75cmの深さをもつ。

出土土器 (図版138-3, 第256図)

須恵器 (1) 1は蓋で、口径15.9cm, 器高4.3cm。口縁の身受け部の立上りは高く、器高も高い。

土師器 (2~5) 2は椀で、外面にはヘラミガキ痕を見る。器体の断面は、粘度板貼り合せ成形の様相を示している。口径14.6cm。

3は甕で、口縁内面の屈折部の稜は鋭い。口径14.8cm。4も甕で、口径14.6cm。5は大ぶりの甕で、口縁の形態は4とよく似る。口径23.2cm。



第 256 图 竖穴出土土器实测图② (1/3)

6号竪穴 (図版11-1, 第44図)

5号竪穴に切られてその東にあり、他の竪穴・住居跡より新しい。南北1.95~2.2mで、東西は2.35mまで確認しうる。長方形プランである。北壁中央にカマドラしき突出部があるけれども、これはカマドではない。深さ20cm弱である。図示しうる遺物は出土していない。

7号竪穴 (図版11-1, 第44図)

6号竪穴の東にあり、10号竪穴、15・16号住居跡を切って、6号竪穴に切られる。方形プランで、一辺1.95m程となる。図示に耐える遺物はなかった。

8号竪穴 (図版92, 第254図)

調査区北東端の5~7号竪穴や13・14号住居跡が密集した所の近くにある。半分以上は調査区外へ入り込んでいるので全形がわからないが、多分方形プランになるのだろう。いま一辺2.45mが知られる。割と深い。検出してすぐの面から飯蛸壺が1個出土した。

9号竪穴 (図版11-1, 第44図)

5号竪穴・3号土壙・16号住居跡に切られ、24号住居跡・25号土壙を切っている。ごく一部しか確認できないが、不整形ながらも方形に近いプランとなろう。南北の残存長3.2m、深さ35cmを測る。

出土土器 (図版138-4, 第253図)

須恵器(1) 1は蓋である。口径14.8cm。

10号竪穴 (図版11-1, 第44図)

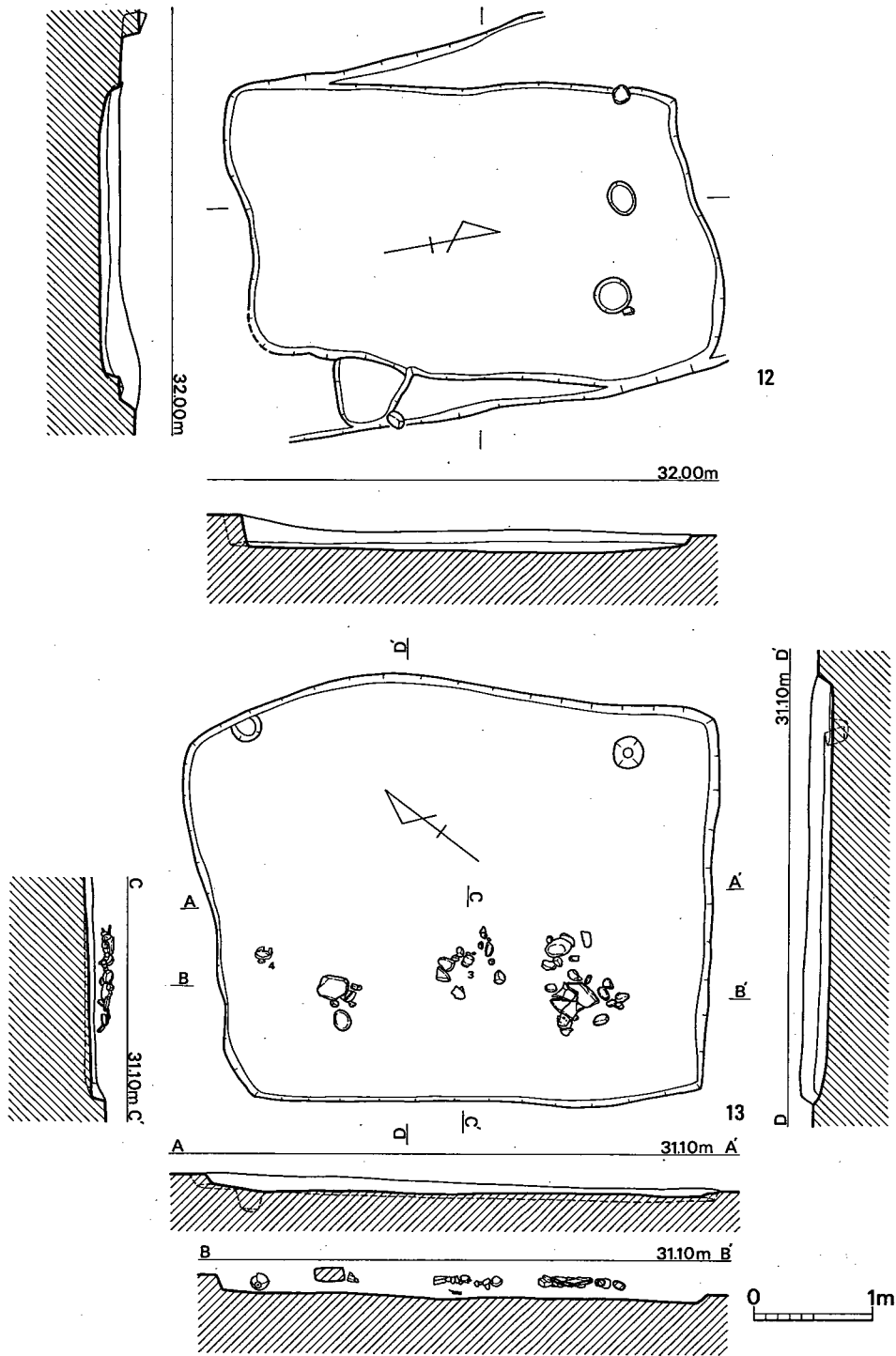
13・14・16号住居跡、7号竪穴に切られ、24・25号住居跡を切って存した。北端コーナーと東辺の一部が知られるのみである。方形プランになるのだろう。

出土土器 (図版138-5, 第256図)

須恵器(1) 椀で、外へ踏ん張ったやや高い高台が付く。口径14.2cm、高台径7.2cm、器高4.9cmを測る。高台の畳付き部分は少し窪んでいる。

11号竪穴 (第255図)

8号竪穴の西にあり、大半は調査区外にかかっている全貌を捉えきれない。いま南辺を2.5mまで検出し、深さは50cm程である。図示しうる遺物はない。



第 257 图 12·13号竖穴实测图 (1/60)

12号 竪 穴 (第257図)

調査区の西端近くで、10号溝の北に存した。南北に長い平行四辺形のプランで、 2.45×3.75 m、深さ約30cmを測る。北半部に小ピット2個が見えるのは、これは上層から掘り込まれたものである。砥石1・土錘1が出土している。

13号 竪 穴 (図版94, 第257図)

調査区中央よりやや東北に寄った所にて、87号住居跡・3号溝を切って営まれている。主軸を北西—南東の方向におく長方形プランで、北辺はやや胴張りとなる。 3.6×4.2 mの規模は住居跡でもよさそうに思えるが、カマド等はない。埋土は焼土粒をいくらか含む暗褐色土であった。南西側に片寄って、床面よりは浮いた状態で土器・瓦等が出土した。また、焼塩土器も1点出土している。

出土土器 (図版138-6, 第256図)

須恵器 (1・2) 1は口径14.6cmの蓋になる。2は高坏であろう。口径23.5cm。

土師器 (3・4) 3は両耳の付く珍しい形態の壺になる。球形胴から少しくびれて、そこに長さ2.2cm、高さ0.5cmの耳を貼り付ける。そして大きく外反して口縁が開く。外面の底部周辺は手持ちのケズリを施す。口径9.4cm、胴径8.4cm、器高10.1cm。4は脚台の付く椀で、精製品である。口径12.7cm、器高6.6~7.5cm。

14号 竪 穴 (図版95-1, 第258図)

12号竪穴の北東10m程の所にある。東西2.4~3.3m、南北3mくらいの不整形プランで、10cm内外の深さしかない。これの上面や周辺から鉄滓が幾つか出土しているので、あるいは製鉄に関連した遺構であるかもしれない。ただし、焼土等は全く検出していない。

15号 竪 穴 (図版95-2, 第258図)

14号竪穴の北東6mにあり、107号住居跡・46号土壙の上層に存した。東西4.2m、南北4.4mの長方形プランであり、最深15cmの深さしかない。図示しうる遺物は出土していない。

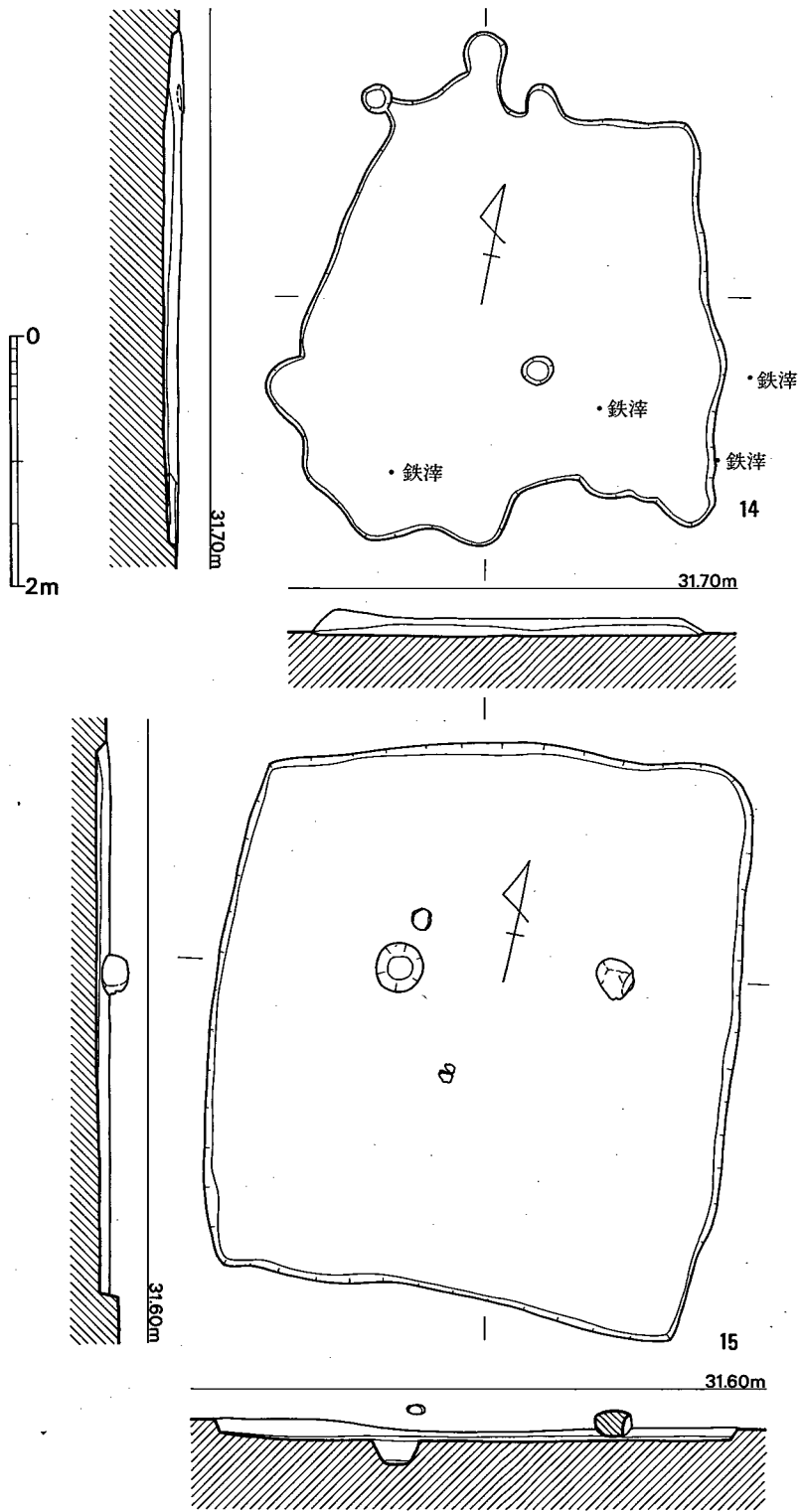
16号 竪 穴 (第259図)

調査区の中央やや北寄りにある。東西が2.8~3.3m、南北3.25~3.75mの台形状プランをなし、10cm内外の深さしかない。

出土土器 (第256図)

須恵器 (1) 1は椀で、口径16.9cm、生焼けに近い。

土師器 (2) 2は甕で、くの字の口縁をなす。外面は極めて粗い刷毛目を施す。

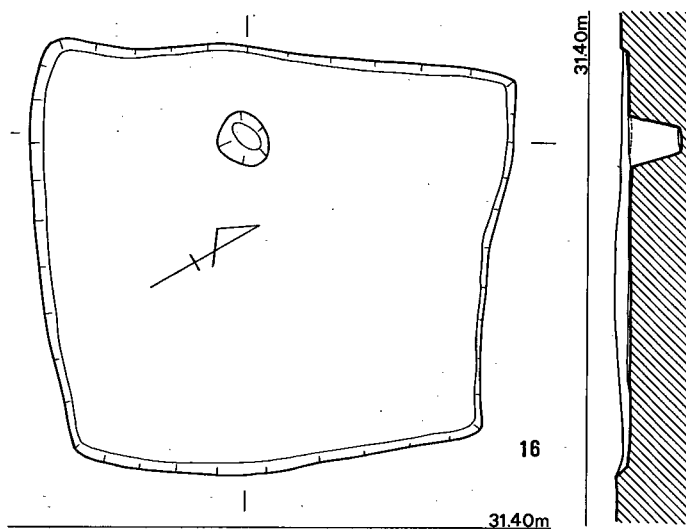


第 258 図 14・15号竖穴実測図 (1/60)

17号竪 穴 (図版93-1, 第259図)

調査区中央の重複関係の激しい中にある。この当りでは、最も古い段階になろう。72号住居跡の中にすっぽり納まるような位置にあり、その上層には27号住居跡もある。また、14号溝にも切られている。

南北2.9~3.2m, 東西約2.8mの方形プランをなす。図示しうる遺物は、出土しなかった。



18号竪 穴 (図版93-1, 第260図)

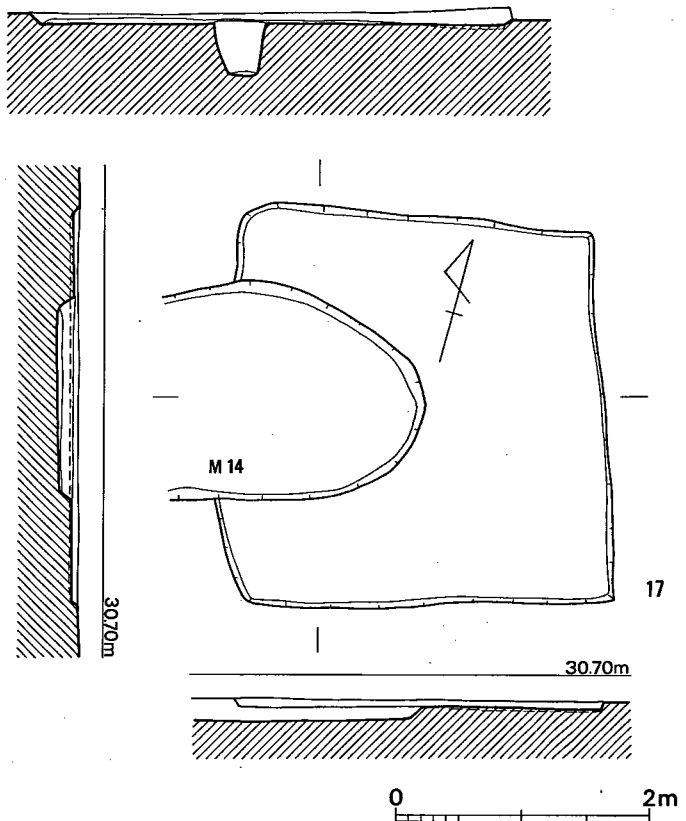
17号竪穴の東隣りにある。3.3~3.75×3.8mの方形プランをなし、深さは約10cm。西隅近くに小ピット1個がある。

出土土器 (第256図)

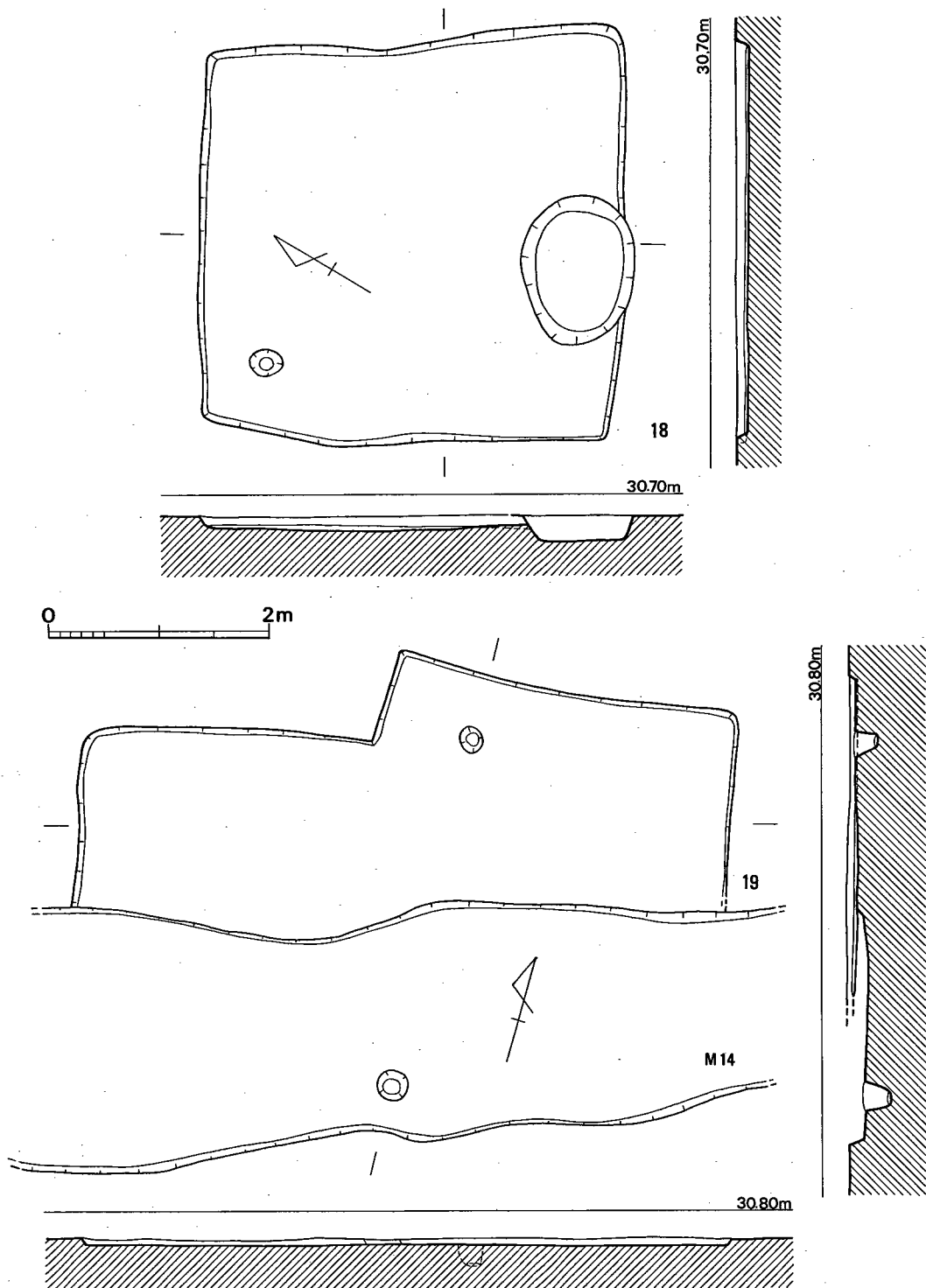
須恵器 (1) 椀で、精良な土器である。口径13.9cm, 高台径7.8cm, 器高4cm。どっしりした安定感のある器形をなす。

19号竪 穴 (第260図)

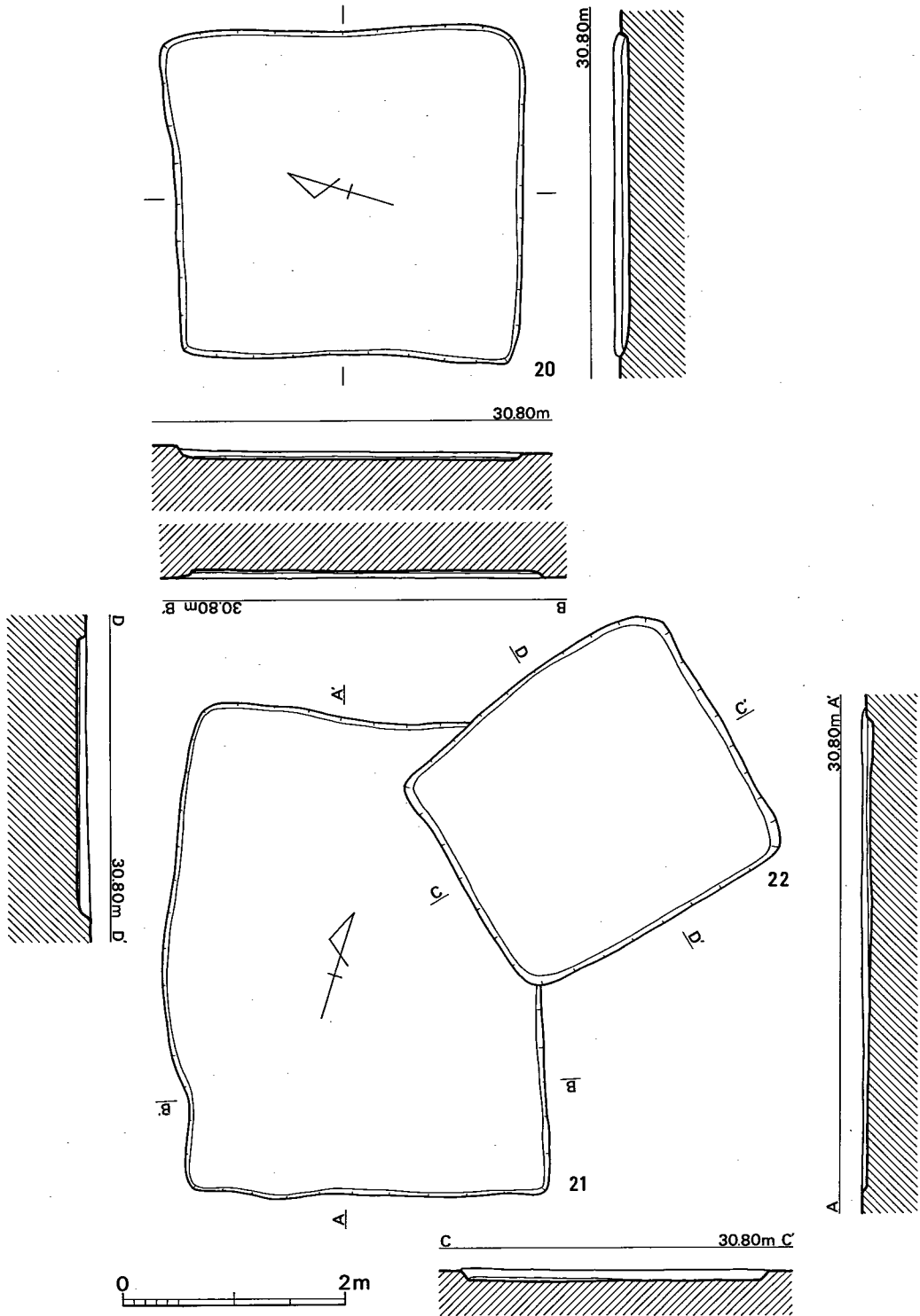
17号竪穴の西隣りにあり、27・31・32・67・71号住居跡, 14号溝より古く位置付けられる。北辺はL字状の折があるので、或は2基が重複していたのかもしれない。東西長5.9m。図示しうる遺物はない。



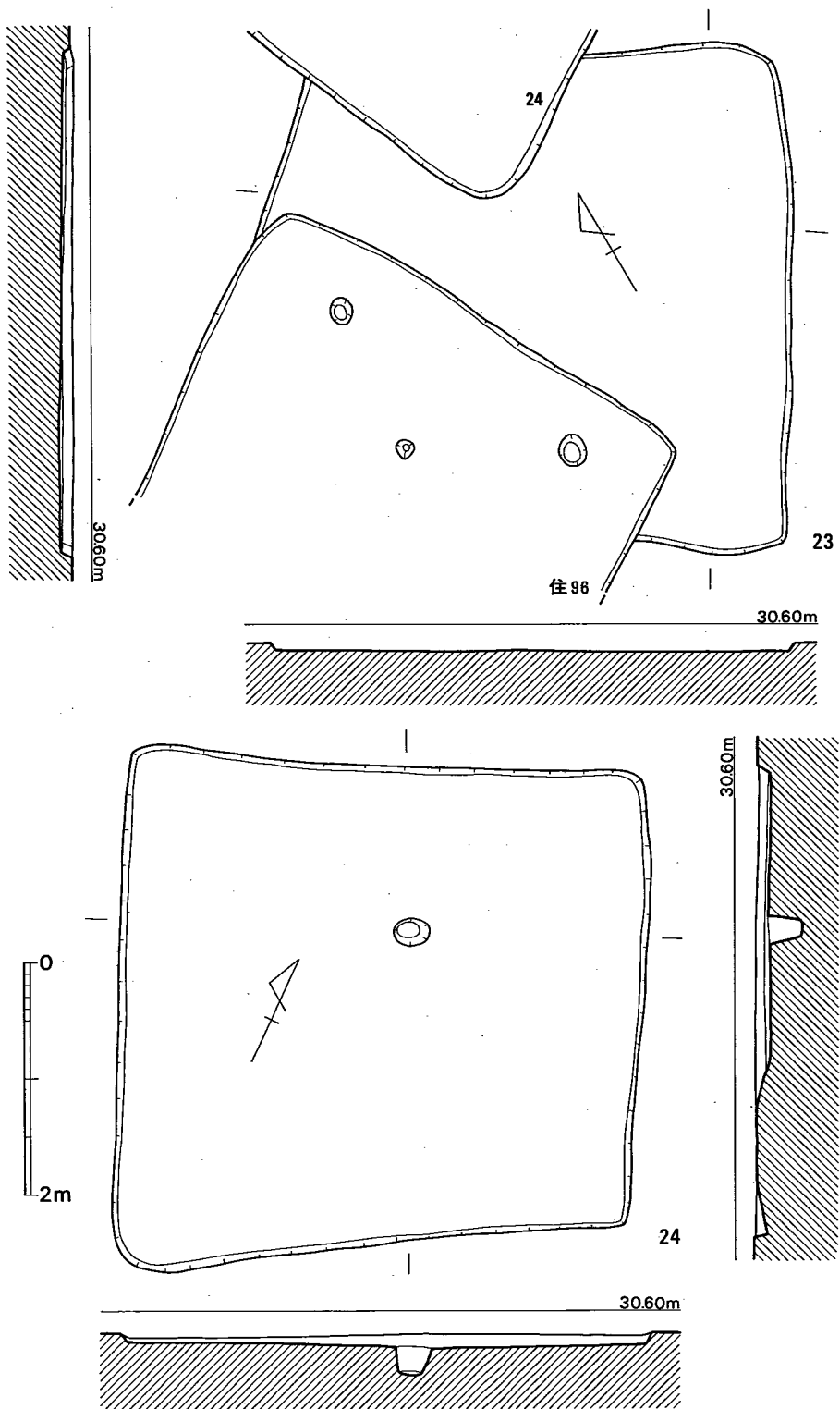
第 259 図 16・17号竪穴実測図 (1/60)



第 260 图 18·19号竖穴实测图 (1/60)



第 261 图 20~22号竖穴实测图 (1/60)



第 262 图 23·24号竖穴实测图 (1/60)

20号 竪 穴 (図版72-1, 第261図)

19号竪穴の北西にあり, 95号住居跡より新しく, 32・71号住居跡より古い。一辺約3mの方形プランをなし, 深さは10cmにも満たない。図示しうる遺物はなかった。

21号 竪 穴 (図版72-1, 第261図)

20号竪穴の北にあり, 28・63・68号住居跡, 22号竪穴より古く営まれている。南北4.4m, 東西3.25mの長方形プランをなす。図示しうる遺物はない。

22号 竪 穴 (図版71-1・72-1, 第261図)

21号竪穴を切っているが, 63・68号住居跡より古く営まれている。2.2~2.5×2.75mの長方形プランで, 主軸を北東-南西にとる。深さは10cmに満たない。出土遺物はない。

23号 竪 穴 (図版71-1・93-2, 第262図)

17・18号竪穴の北方5m程の所にあり, 74・96号住居跡, 24号竪穴に切られる。残存部にて東西4~4.6m, 南北4.2mとかなり大きい。出土遺物はない。

24号 竪 穴 (図版71-1・93-2, 第262図)

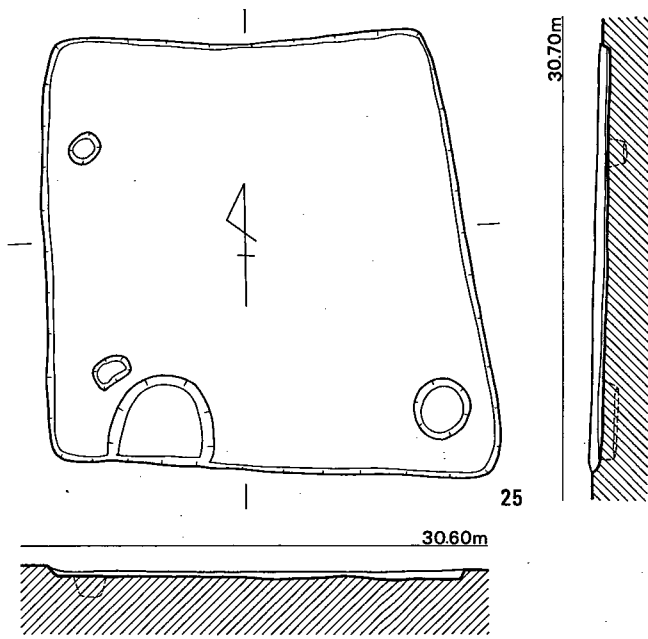
23号竪穴の北にあってそれを切っている。南北3.9~4.5m, 東西4.4mとこれも大規模である。床面に2つのピットがある。図示しうる遺物はなかった。

25号 竪 穴 (図版71-1, 第263図)

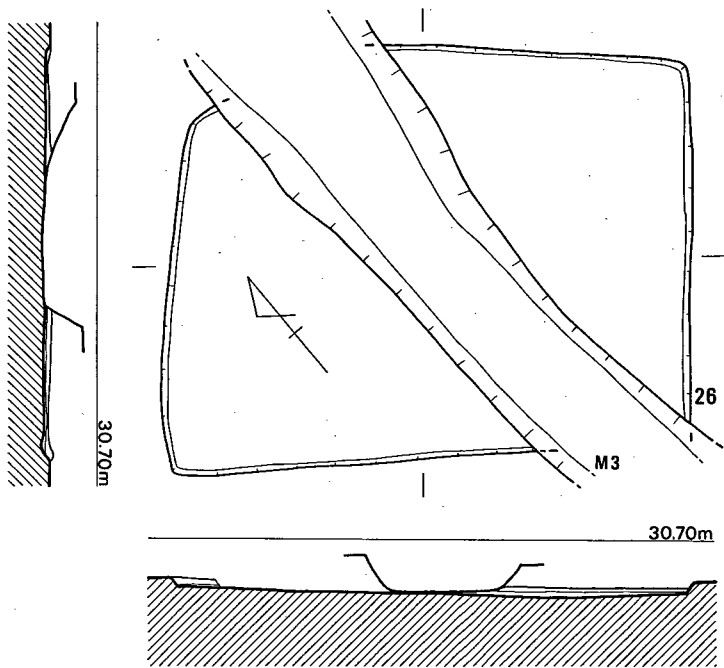
24号竪穴の西にあって, 26号建物に切られている。東西3~3.55m, 南北3.35~3.5mの台形プランを示す。出土遺物はなかった。

26号 竪 穴 (第263図)

13号竪穴の北にあって, 23・24号土壇, 3号溝に切られている。3.1~3.3×4~4.15mの長方形プランで, 主軸は南東-北西方向にとる。図示しうる遺物はなかった。 (伊崎)



0 2m



第 263 图 25·26号竖穴实测图 (1/60)

(4) 土 壙

46基を取りあげる。竪穴としたものが基本的に方形プランで浅いのに対し、土壙は円形もしくは楕円形を基調としながら不整形のものも含んでいる。深さも深浅まちまちである。大体においてこの種の土壙は、竪穴住居や掘立柱建物の周辺にて検出されることが多く、ゴミ穴のような性格を付与されるのが大半と言ってよい。本遺跡の土壙もいわゆる、廃棄土壙が殆どを占めていると考えてよいが、27・29号土壙の2基については、土壙墓もしくは木棺墓である。

調査区内における分布は、ほぼ中央あたりから北半に集中する点で竪穴のそれと似ているが、東半部にも数基が見られることは注意される。

1号土 壙 (図版96-1, 第264図)

調査区北半の中央よりやや東寄りの所、11号住居跡の北隣りにある。主軸を北東-南西方向におく細長い土壙で、10cm内外の深さしかない。主軸長2.5mまでは残るが、その先はピットに切られている。最大幅0.9m。

この土壙中からは、多量の土師器・黒色土器が破片となって出土した。壙内の3ヶ所から小さな骨片と、そのうちの1点の近くから鉄刀子が出土した。これらは、殆どが床面より上位にて出土している。

出土土器 (図版138-7・139・140-1, 第265図)

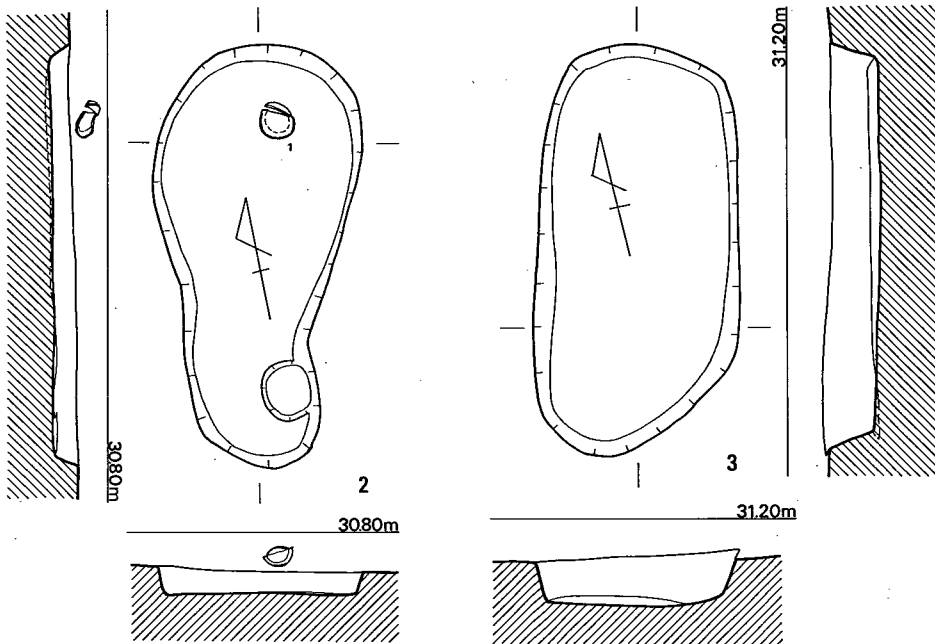
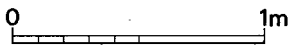
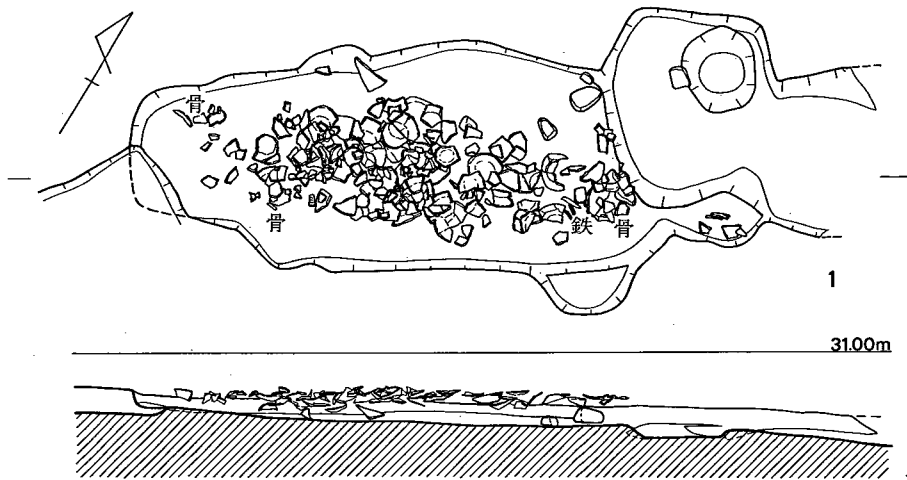
土師器 (1~16, 23・24) 1は皿で、口径13.1cm, 器高2cm。外底部はヘラ切り離しである。2・3は坏で、外面にナデの指オサエ痕がある。2は口径12.6cm, 3は口径12.9cm, 器高3.5cm。

4~14は坏というにはやや深く、椀というには浅いが、高台を有するものと区別して坏としておく。ヘラ切り離しの底部から内湾気味に体部が立上り、口縁に至って外反する。その外反の度合には強弱がある。基本的に平底だが、12~14は不安定な丸みがかかった底部となっている。この11個体は口径が11.8~13.7cmで、平均値12.7cm, 底径6.4~7.1cmで、平均値6.7cm, 器高は3.5~4.2cmにして、平均値3.8cmとなる。内外ともにヨコナデにて調整する。

15・16は高台の付く椀で、4~14の坏に高台を付ければ同じ形態になるが、やや深みのある点は異なる。15は須恵器に似た形状で、口径13.6cm。16は口径13.7cm, 高台径7.2cm, 器高5.2cmの完形品である。

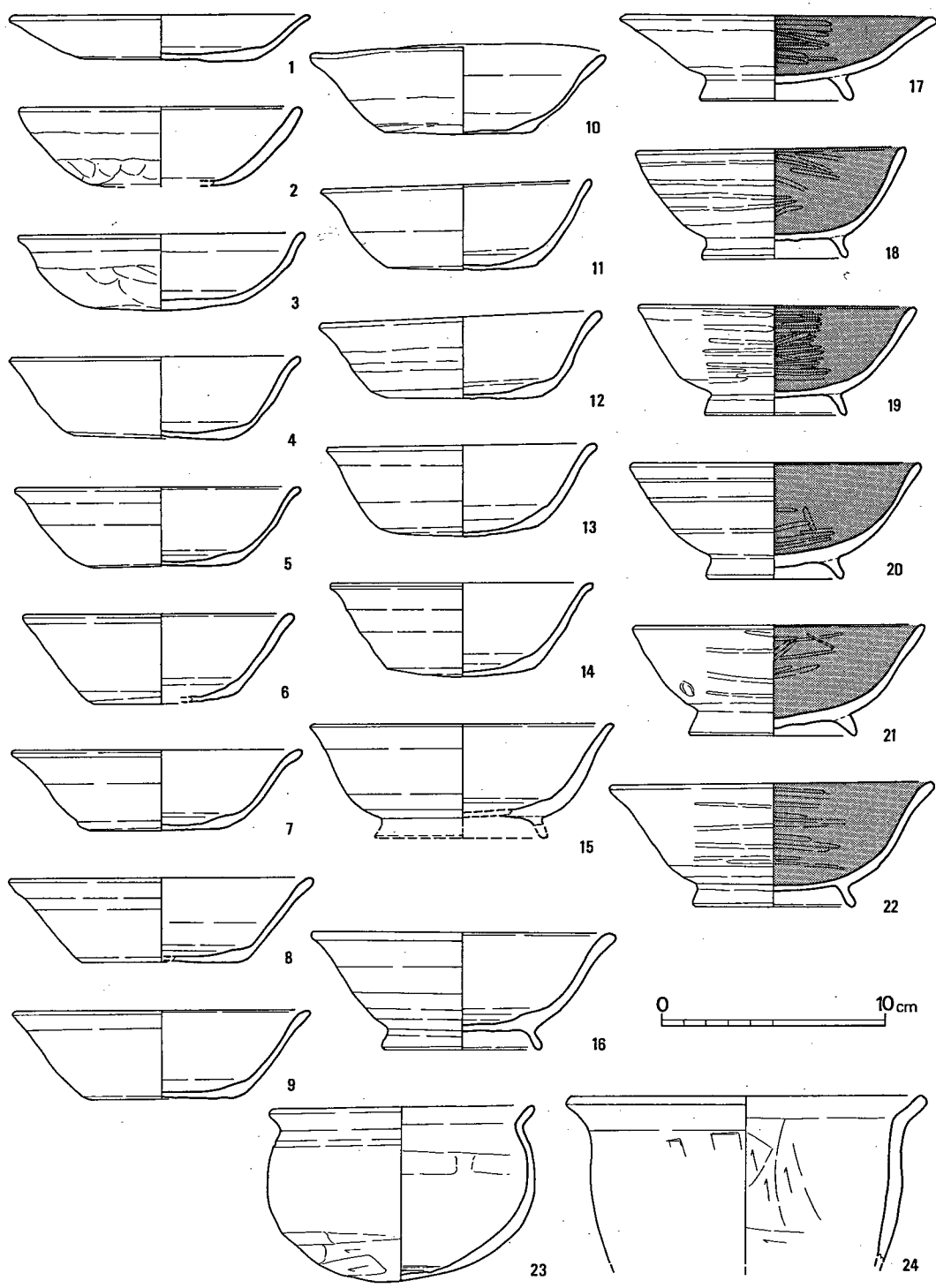
23は埴になる。口径12cm, 器高7.8cm。24は甕で、口径16cm。内面は煤けて黒変する。

黒色土器 (17~22) 17~22は内黒の土器で、土師器の坏・椀と比べれば口縁の外反度のごく僅かであって、丸みの強い形態となる。その中で、22は16などと近似した形状をなす。17は口径14.1cm, 高台径6.8cm, 器高3.8cm。18~21は口径12.1~13.1cm, 高台径6.1~7.5cm, 器高4.9~5.2cmを測る。18~22の外面はナデの上に線状のミガキが施され、内面もヘラミガキを行っ



第 264 図 1～3号土壙実測図 (1/30)

ている。21の体部には補修した痕跡がある。また、この21の高台のみが他と形態を異にする。



第 265 图 土城出土土器实测图① (1/3)

2号土 壙 (図版96-2, 第264図)

1号土壙の東南にあり, 2号溝を切って営まれた瓢形の土壙である。主軸をほぼ南北方向にとり, 長さ1.68m, 最大幅0.8m。深さは10cmしかない。北端部近くから土師器が出土した。

出土土器 (図版140-2, 第267図)

土師器(1) 1は坏である。外面には指頭によるナデの痕跡が著しい。口径12.8cm, 器高3.7cm。

3号土 壙 (図版96-3, 第264図)

5~7号竖穴や13~16号住居跡等が密集した一画にあり, 長さ1.64m, 幅0.8mの隅円長方形プランを呈する。深さは20cm。須恵器・土師器片と焼塩土器片1点が出土している。

出土土器 (第267図)

須恵器(1) 1は蓋である。復原口径16.5cm。

土師器(2・3) 2は坏か皿の高台部分である。3は内面に同心円当具痕を持ち, 外面に平行タタキが入るようだが磨滅している。

4号土 壙 (図版97-1・2, 第266図)

8号住居跡の西隣りにあり, 28号建物跡に切られている。幅1.9m, 長さ1.7~2.3mの台形プランをなす。埋土中より須恵器と鉄器が出土した。

出土土器 (図版140-3, 第267図)

須恵器(1) 坏で, 完形ながらもかなり歪みがある。口径12.5cm, 器高4.1cm。

5号土 壙 (図版90-1, 第254図)

1号竖穴の西端部を切って営まれている。南端部分を完掘していないが, 推定主軸長2.7m, 幅1.05mとなる。図示しうる遺物はなかった。

6号土 壙 (第266図)

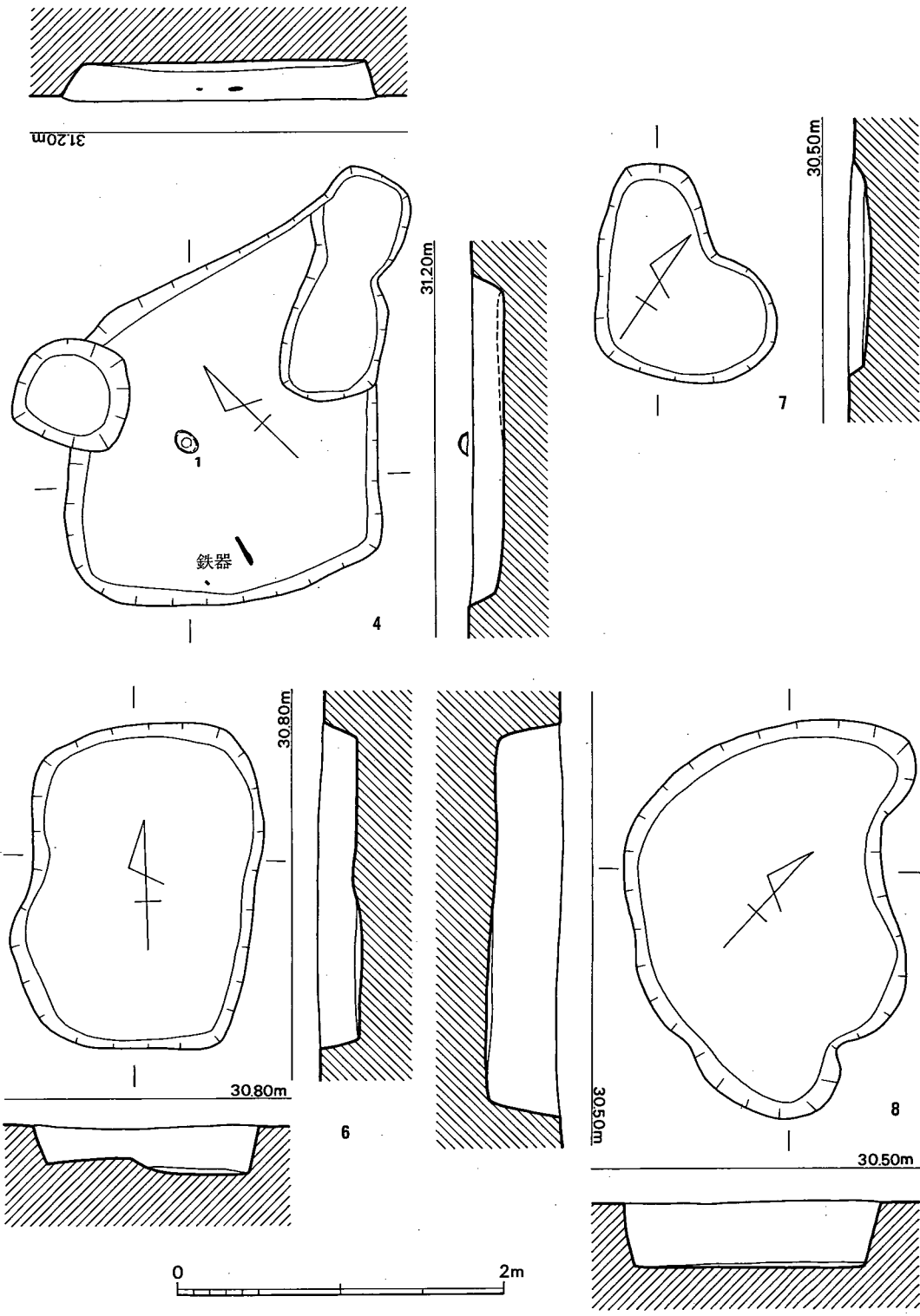
9号住居跡の北東にある。隅円になった長方形プランで, 長さ2m, 幅1.4mを測る。深さは30cm。図示できる遺物はない。

7号土 壙 (図版97-3, 第266図)

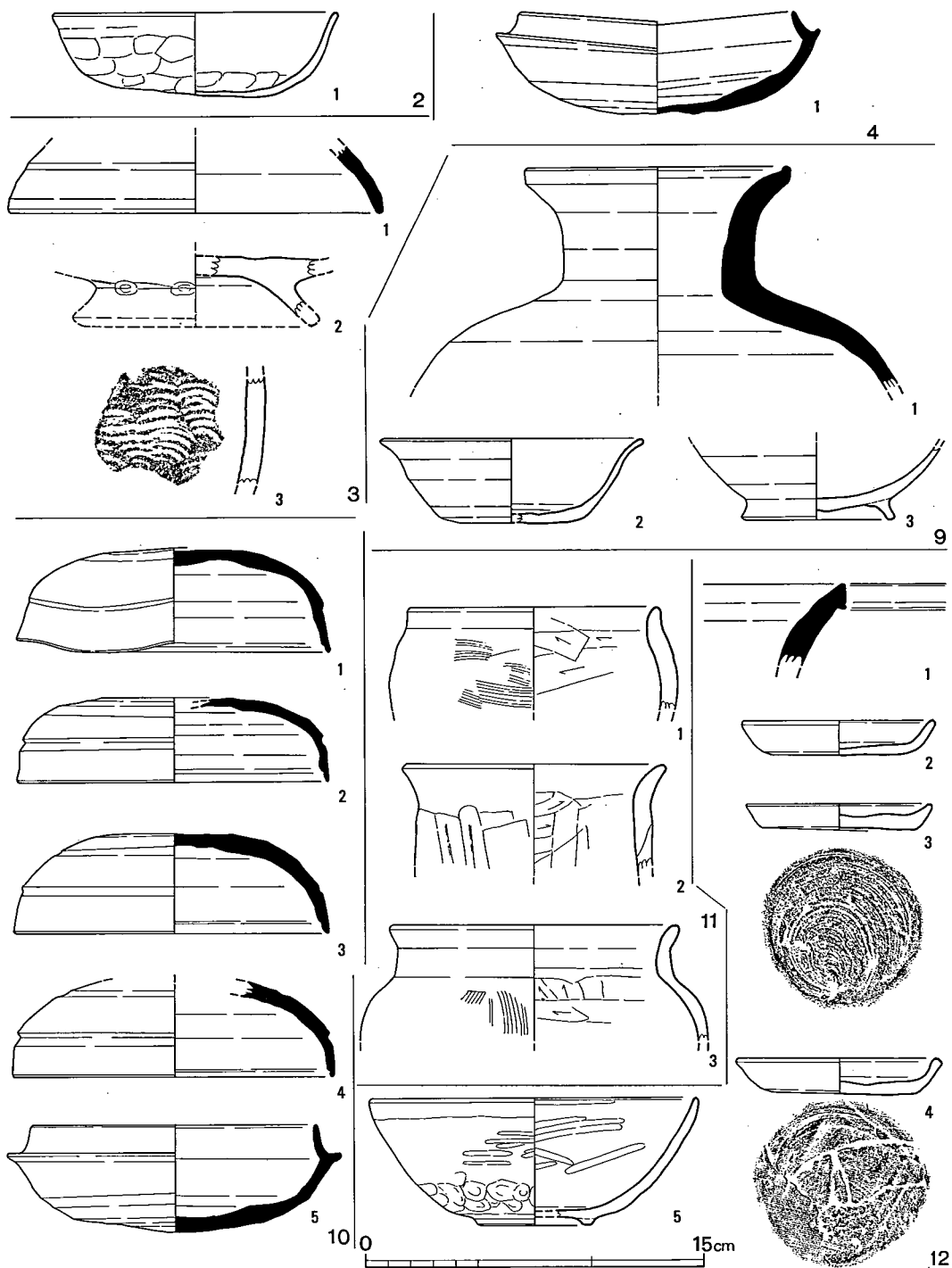
調査区の東隅に近く, 29号住居跡の東北に存する。2つの楕円形がくっついたような形状をなしており, 東西1.1m, 南北1.3mを測る。弥生土器が出土している。

出土土器 (第285図)

弥生土器(D7) 甕1個体の破片であるが接合しない。図上復原でも不自然さがあるので個々



第 266 图 4 · 6 ~ 8 号土坑实测图 (1/40)



第 267 图 土壤出土土器实测图② (1/3)

の図を掲げる。実際はもっと器高は低い。復原口径24.3cm、底径7.4cm。

8号土 壙 (図版98-1, 第266図)

11号住居跡や2号土壙の東方15mくらいの所にある。平面は不整楕円形といった形状をなす。長軸2.4m, 短軸1.55m, 深さ0.4mを測る。

9号土 壙 (図版98-2, 第268図)

8号土壙のすぐ西にある。全形は不明だが、隅円長方形に近いプランとなる。西壁部分はテラスが付く。現状で東西方向が2.5mを測る。

出土土器 (図版140-4・141-1, 第267図)

須恵器(1) 1は肩部のあり方からみて横瓶になろう。

土師器(2・3) 2の坏は口径11.7cm, 器高3.8cm。極めて精良な土器である。3は底径6.9cm。

10号土 壙 (図版98-3, 第269図)

9号住居跡のすぐ西にある。主軸をほぼ南北方向にとる楕円形プランで、長軸1.8m, 短軸1.5mを測る。深さ33cm。西壁にはテラスが付く。埋土は茶褐色の砂質土であり、壙内には玄武岩を主とする円礫が多数入っていた。その中には作業台に使用したらしい石材もある。須恵器・土師器が礫と同じレベルで出土している。

出土土器 (図版141-2, 第267図・第285図)

須恵器(1~5) 1~4は蓋で、何れも口縁内面に段を有し、また外面立上りと体部の境に沈線もしくは段がつく。1はかなり歪んでいる。口径13.9cm, 器高4.6cm。2は口径13.9cm。3は口径14cm, 器高4.5cm。4は口径14.3cm。5の坏身は口径12.7cm, 器高4.7cm。

土師器(6) 6は甕で、胴がかなり張るタイプである。外面肩部には平行タタキ痕がある。

11号土 壙 (第268図)

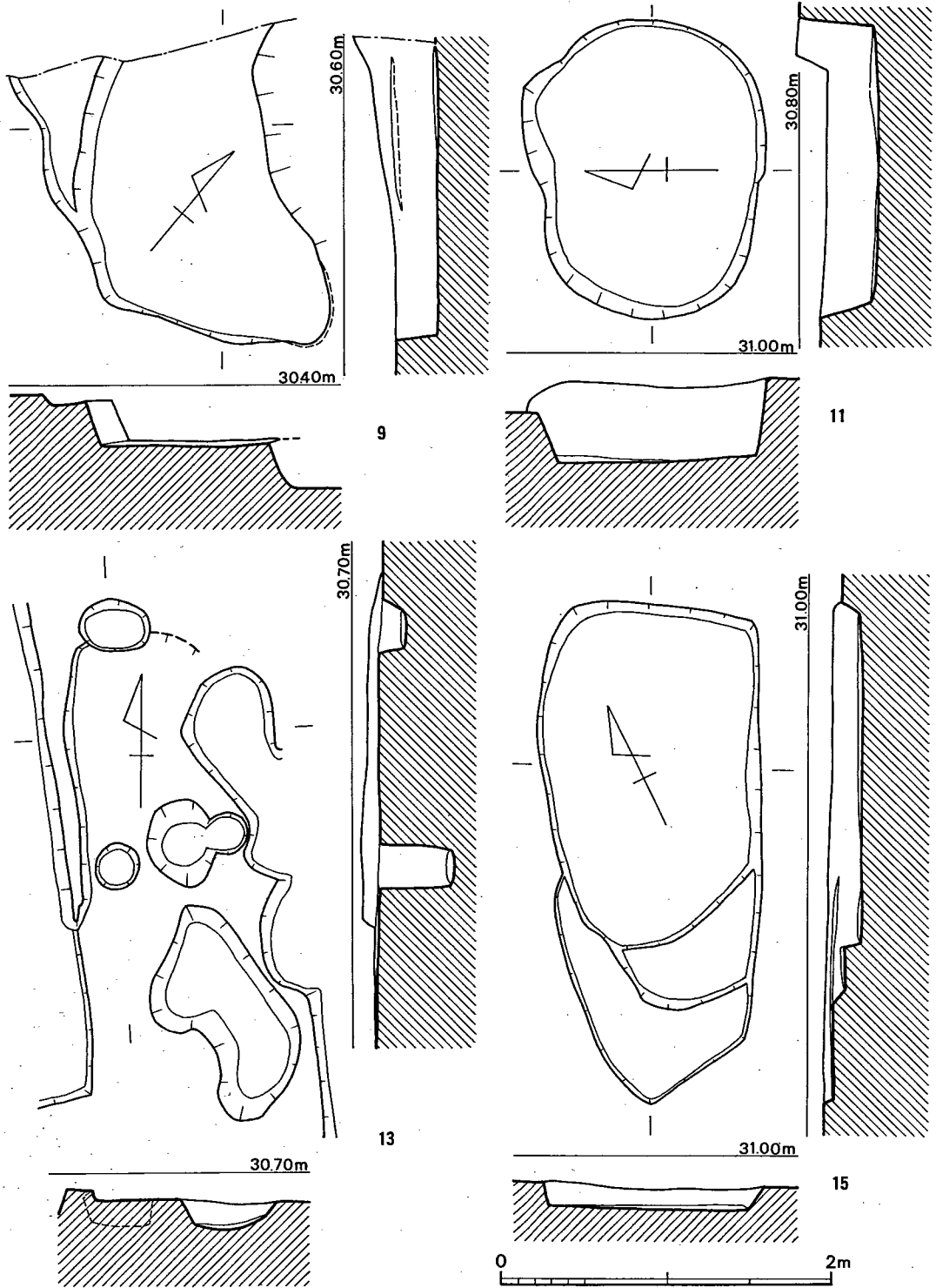
3号土壙の北にある。長軸を東西方向におく楕円形プランで、1.4×1.8m, 深さ0.5mの規模となる。土器以外に土製模造鏡1個が出土している。

出土土器 (第267図)

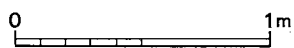
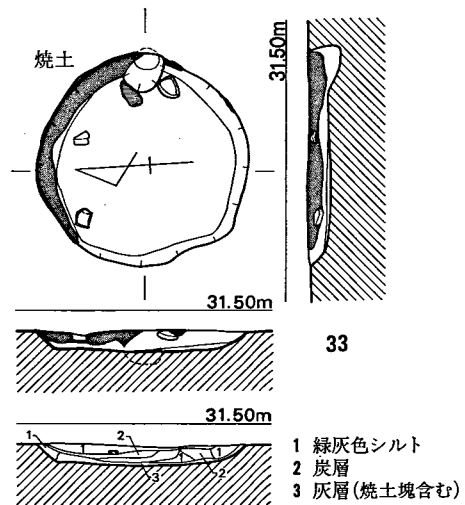
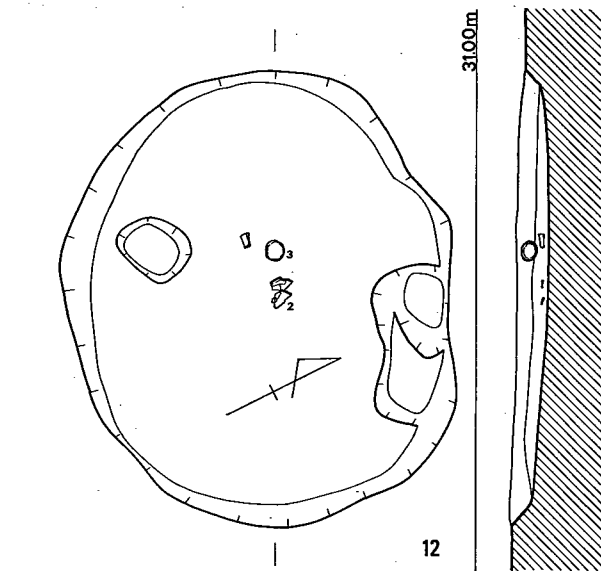
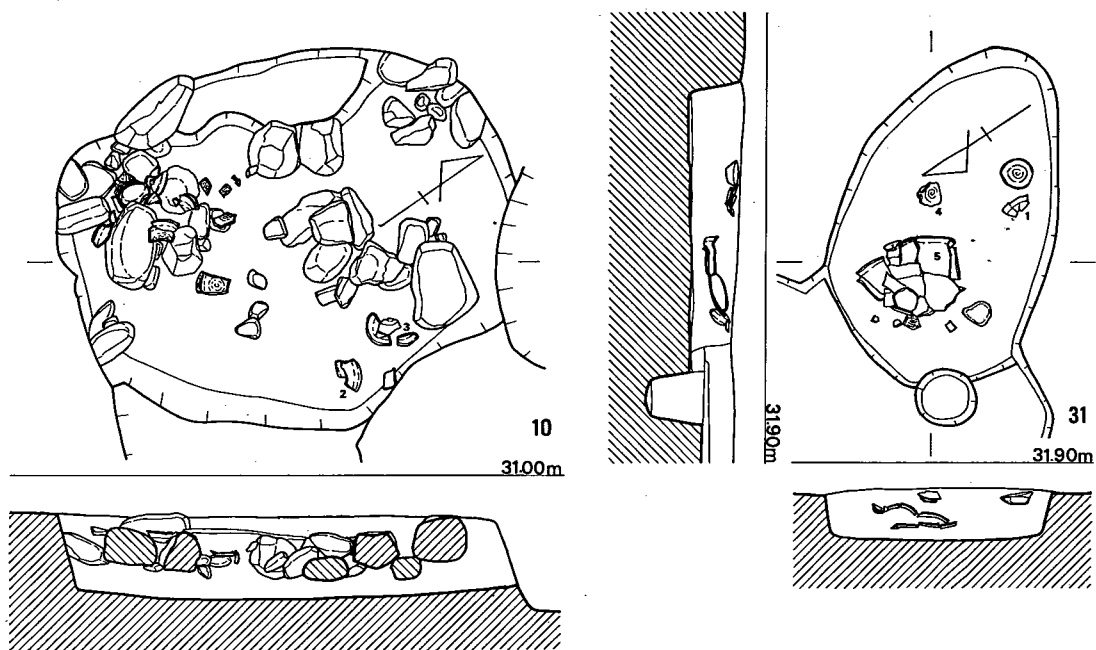
土師器(1~3) 1~3ともに甕である。1は胴部が少し張り、3は肩部の張るタイプである。口径は11.3cm, 2は11.6cm, 3は12.9cm。

12号土 壙 (図版99-1, 第269図)

調査区東端に近い所、3・4号溝の東側にある。主軸を東西に近い方向にとり、長軸1.8m,



第 268 图 9 · 11 · 13 · 15号土坑实测图 (1/40)



第 269 図 10・12・31・33号土坑実測図 (1/30)

短軸1.55mの楕円形プランになる。深さ12cmと浅い。灰褐色砂質土を埋土とし、床面からやや浮いて土器・砥石が出土した。

出土土器 (図版141-3, 第267図)

須恵器 (1) 1は甕の口縁部片である。残存部に波状文等は見えない。

土師器 (2~4) 2~4は糸切り離しの小皿で、3個体とも形状に差がある。2は口径8.5cm, 底径6.7cm, 器高1.6cm。3は底部が分厚くなるもので、口径8.3cm, 底径7cm, 器高1.2cm。4は口唇部が丸くなる。口径9.2cm, 底径6.8cm, 器高1.6cm。

瓦器 (5) 5は椀で、小さな底部から内湾しつつ口縁に至る。口縁直下の外面は1cm程の幅で黒色の帯がある。体部上半は内外ともヘラミガキ, 同下半の外面は指頭押圧痕がよく見える。口径14.6cm, 底径4.9cm, 器高5.6cm。

13号土 壙 (第268図)

13号住居跡に東接し、重複しているが先後関係は判らない。南北に主軸をもつプランと思われるが、それも東壁・南壁がピット等に切られたりして良く判らない。おそらくもとは長楕円形プランであろう。砥石が出土している。

14号土 壙

9号住居跡のカマドの南に、それと重複して存したが、遺構検出時に更に掘り下げていく中で、図化する以前に削平してしまった。細長い長楕円形プランであった。若干の土器が出土しているのみである。

出土土器 (第270図)

須恵器 (1) 1は蓋で、かなり偏平である。復原口径13.4cm。

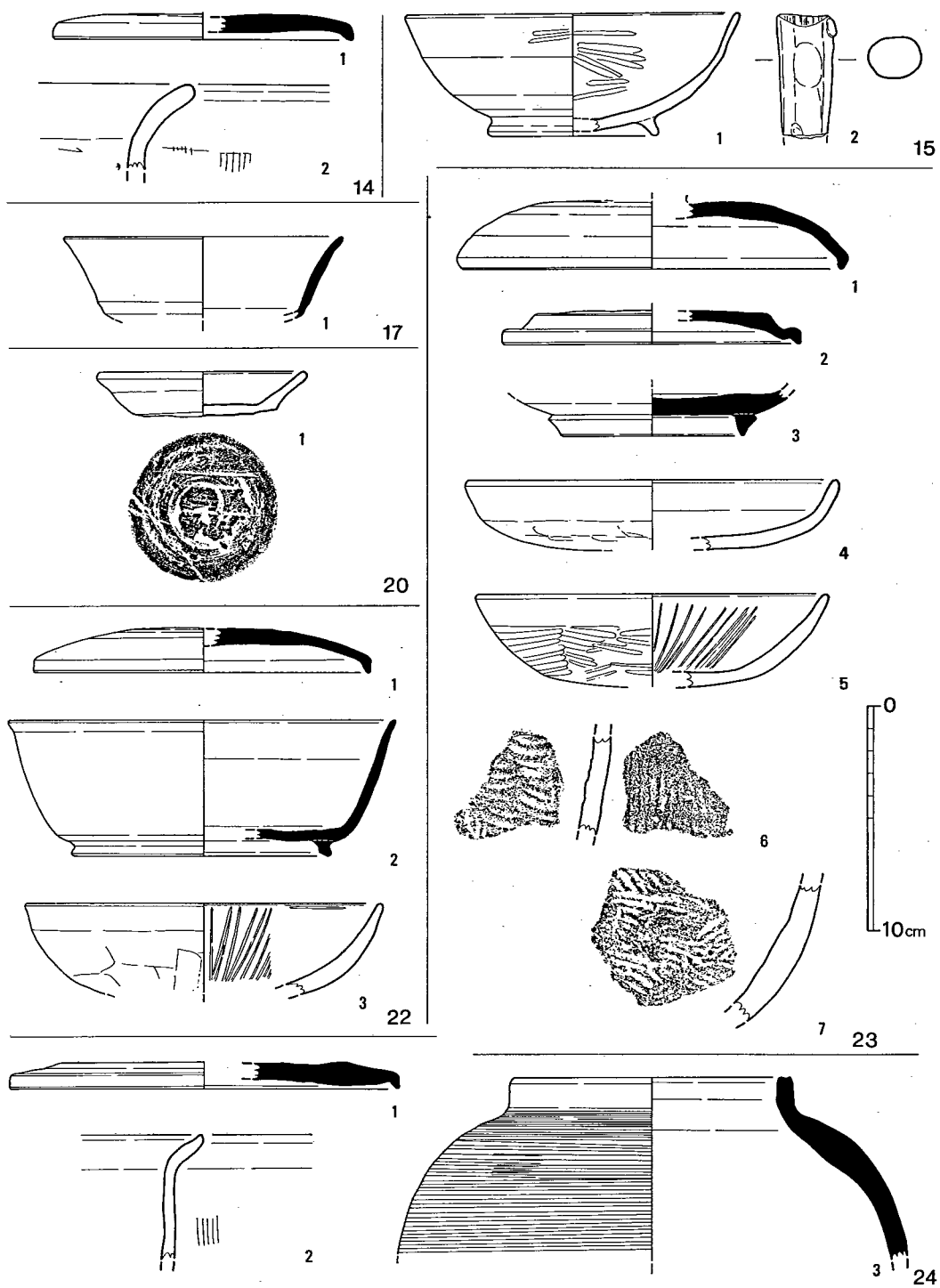
土師器 (2) 2は甕の口縁部片で、胴部の張りは殆どないようだ。

15号土 壙 (図版99-2, 第268図)

調査区南東部の5・6号溝に狭まれた所にある。南北に細長く、南側は3段に段が付く。長軸3.05m, 短軸1.35mを測る。深さ20cmと浅い。

出土土器 (図版141-4, 第270図)

土師器 (1・2) 1は椀で、黒色土器風の胎土をなしている。体部下半の外面は回転ヘラケズリが施される。口径15cm, 底径7.6cm, 器高5.4cm。2は足釜の破片と思われるが、上端部は擦り切って面を取っている。これが二次的なものならば何に転用したものか、逆に製作当初からのものならば足釜の脚でなくて何なのか、を考えねばならないけれども、現時点では不明である。



第 270 图 土城出土土器实测图③ (1/3)

16号土 壙 (図版99-3, 第271図)

15号土壙のすぐ南にある。長軸1.95m, 短軸1.35mを測る楕円形プランをなし、壙内にはピット・掘り込みがある。須恵器甕と焼塩土器1点が出土している。

出土土器 (第285図)

須恵器(D16-1)生焼けの破片である。外面は平行タタキで、内面は当具痕の上をナデている。口径17.9cm。

17号土 壙 (第271図)

1号土壙の東隣りにある。方形プランがやや変形したような形状で、一辺1.25~1.45mの大きさをなす。

出土土器 (第270図)

須恵器(1) 1は高坏の破片で、極めて精良な土器である。復原口径12.4cm。

18号土 壙 (図版100-1, 第271図)

15号住居跡と6・7号竪穴の下層から検出され、23号住居跡を切って存する。1.47×1.85mの長方形プランで、主軸を北西-南東にとる。深さ20cm程である。焼塩土器が出土している。

19号土 壙 (図版100-2・3, 第271図)

21号住居跡に切られ、6号溝にも切られた不整形土壙である。南北3m, 東西3.3mくらいに復されよう。深さは25cm。弥生土器の甕が横たわった状態で出土した。

出土土器 (図版141-5, 第285図)

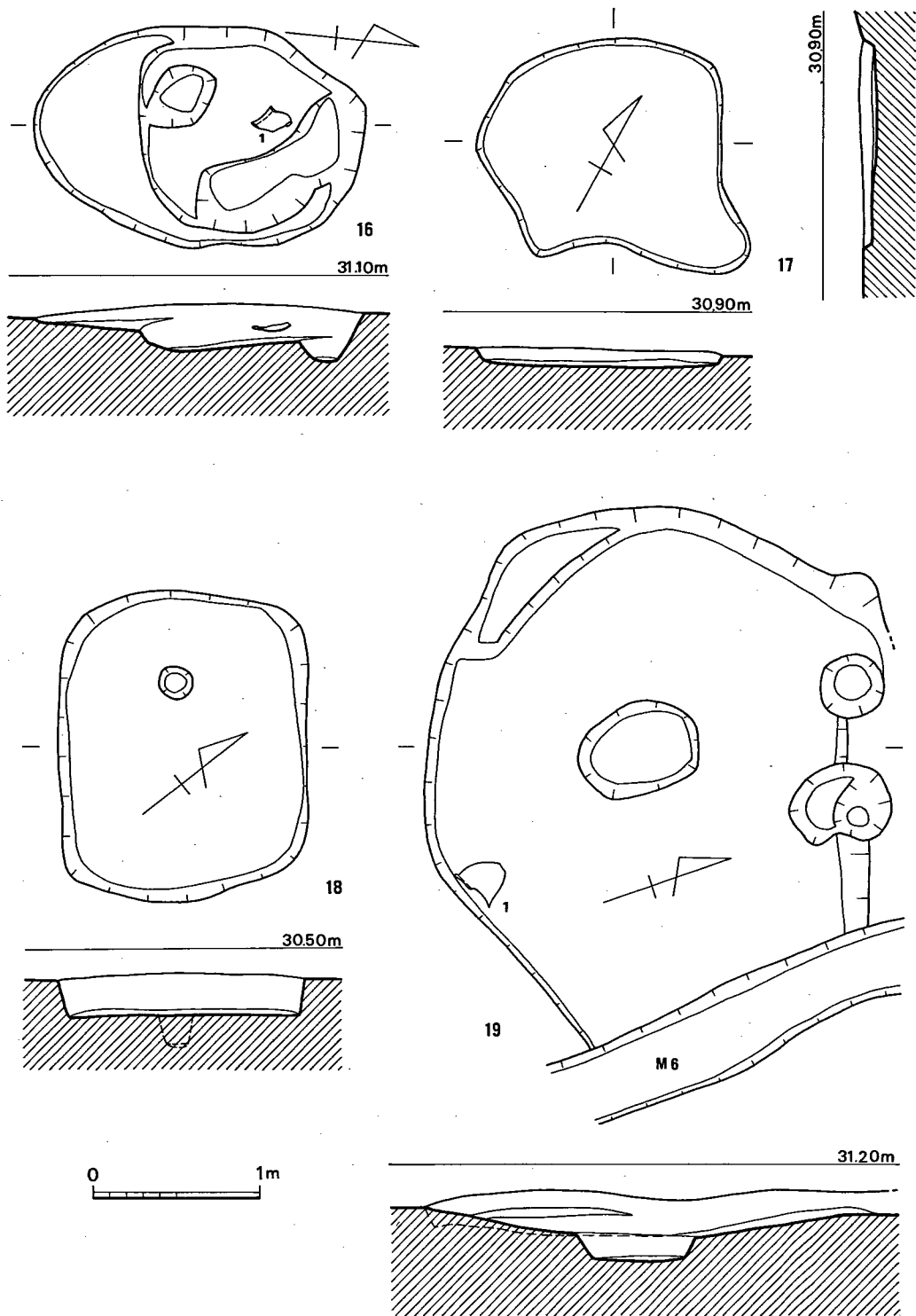
弥生土器(1・2) 1・2とも甕である。1は胴部径が口縁径を上回らないもので、口唇部はやや肥厚し、内面は跳上げとなる。器壁はかなり薄い。口径26.4cm。2の口径は30.2cm。

20号土 壙 (図版101-1, 第272図)

調査区西端に近く、39号土壙の西にある。平面プランは変則五角形と称しうるものであった。長軸3.2m, 短軸2.1mを測る。中央付近を境に北半部が一段低くなり、その北西部は更に一段低くなっている。この北半部の北寄りに、直径約1mの範囲に黒色土が堆積しており、その中に土師器小皿が存した。この小皿の周辺には大小10個程の石があり、この石を置台とするような木棺墓の存在を想定したが、発掘中にそのような痕跡は認められなかった。ただ、可能性はあるものとしておこう。焼塩土器2点が出土している

出土土器 (図版141-6, 第270図)

土師器(1) 1はへら切り底の小皿で、やや深みのある器形をなす。底部は全くの平底には



第 271 图 16~19号土坑实测图 (1/40)

ならない。口径9.4cm, 底径6.4cm, 器高2cm。

21号土 壙 (図版101-2, 第273図)

106号住居跡の南東にあり, 主軸を南北にとっている。長さ2.3m, 幅1.3mの土壙中に14個の偏平な石が敷き並べられ, その周囲にピット状の穴があった。これらの石は黒っぽい花崗岩で, 土壙底との間には10cm強の空間が存する。一見して, 石棺墓の敷石のみが残存したものかと考えられたが, 壙底との空間がありすぎる点からやや疑問である。また, 覆石土壙墓かとも考えられたが, それもいま一つ説得力に欠けるきらいがある。

西端部の石の上面に鉄錆が付着しているので, あるいは製鉄に関連していた可能性も考えうる。埋土は黒色土であった。

22号土 壙 (図版101-3, 第272図)

104号住居跡の上層に存した。主軸を北東-南西の方向にとり, 主軸長4.2m, 幅1.9mを測る。深さ10cmにも満たず, 極めて浅い。南西寄りの所に焼土の広がりが見られた。焼塩土器3点と土器が出土している。

出土土器 (図版142-1, 第270図)

須恵器(1・2) 1は口径15cmに復原される。2は高台の付く椀であり, 薄手の良質の土器である。復原口径17.2cm。

土師器(3) 3は坏で, 口径16cm。内面は細いミガキが放射状に暗文風に入っている。

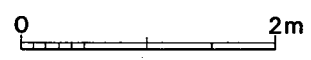
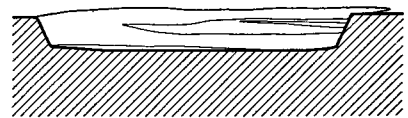
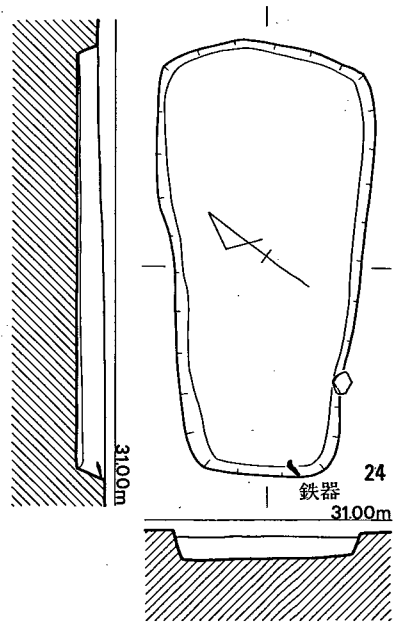
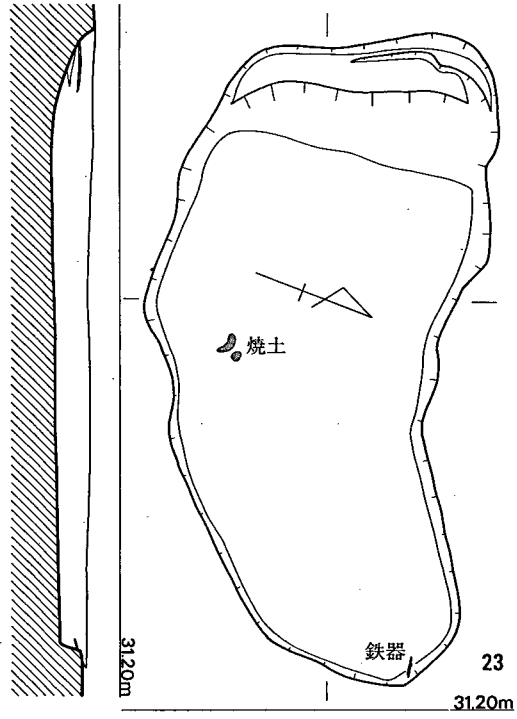
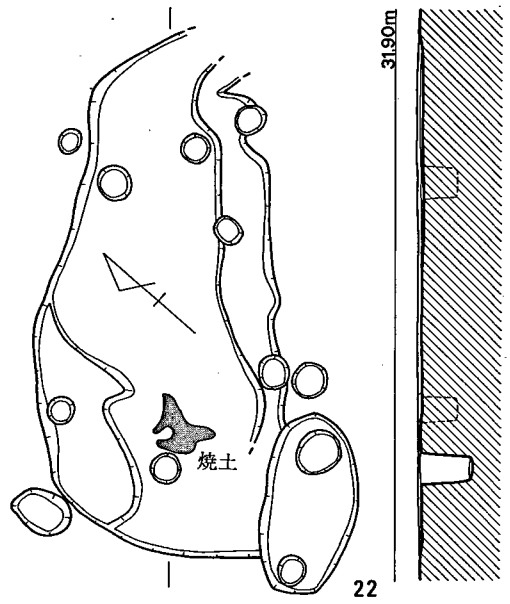
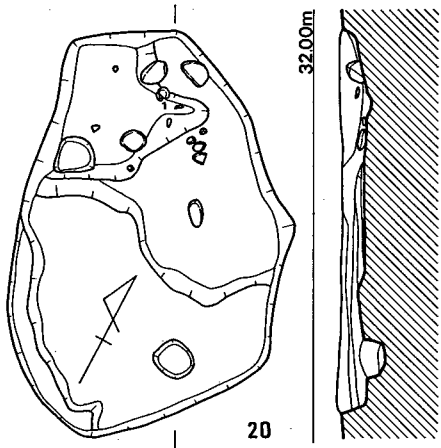
23号土 壙 (図版102-1, 第272図)

91号住居跡の南にあつて, 其上層に存した。南側が張り出す形状の大きな土壙で, 全長5.1m, 最大幅2.3m, 深さ0.3mを測る。西端部は階段状に段がある。土器の他に飯蛸壺1点, 土錘1点, 焼塩土器片19点, 板状鉄製品が出土している。

出土土器 (図版142-2, 第270図)

須恵器(1~3) 1・2は蓋で, 1の口径は16.8cm。2は口径13.4cmで, 天井部から口縁にかけてかなり屈曲する。紫灰色を呈する良質の土器である。3は椀の底部であるが, 高台の内端部が接地して爪先立った形状をなす点に特色がある。高台径8.2cm。

土師器(4~7) 4・5の坏は, 4が口径16.5cm。外面はナデ痕がみえる。5は口径15.8cmで, 内面の細いミガキは暗文風となる。6・7は外面に平行タタキ, 内面に同心円当具痕をもつ土師器である。7は二次火熱を受けている。



第 272 图 20·22~24号土坑实测图 (1/60)

24号土 壙 (図版102-1, 第272図)

23号土壙の南東に隣接しており、幅1.1~1.65m、長さ3.45mの長台形プランをなす。深さは約20cm。土器と焼塩土器片1点が出土した。

出土土器 (第270図)

須恵器(1・3)1の蓋は極めて扁平であり、体部は分厚い。外面は灰被りである。口径17.4cm。3は焼成不良の壺で、口径12.5cm。

土師器(2)2は甕の破片で、二次火熱を受けているように見える。

25号土 壙 (第274図)

5・9号竪穴、24号住居跡の南西に接して存し、それらに切られている。本来は主軸を略東西方向におく楕円形プランであろう。いま、東西2.3m、南北1.8mが残る。55cmの深さである。須恵器と摺石が出土している。

出土土器 (図版142-3, 第275図)

須恵器(1~5)1は高さのある蓋で、口径14.6cm、器高3.7cm。口縁の身受け部分も高い。2・3の坏は、2の方が丸みを持っている。高台はシャープさが無い。口径16.3cm、底径10.3cm。3は高台の内端部が接地する形態であり、口径14.4cm、底径9.3cm。4は壺であり、口縁部は片口風になっている。外面は灰被り。口径9.8cm。5は甕の口縁部と思われるが、あるいは脚裾になる可能性もある。口径21.8cm。

26号土 壙 (図版102-2, 第274図)

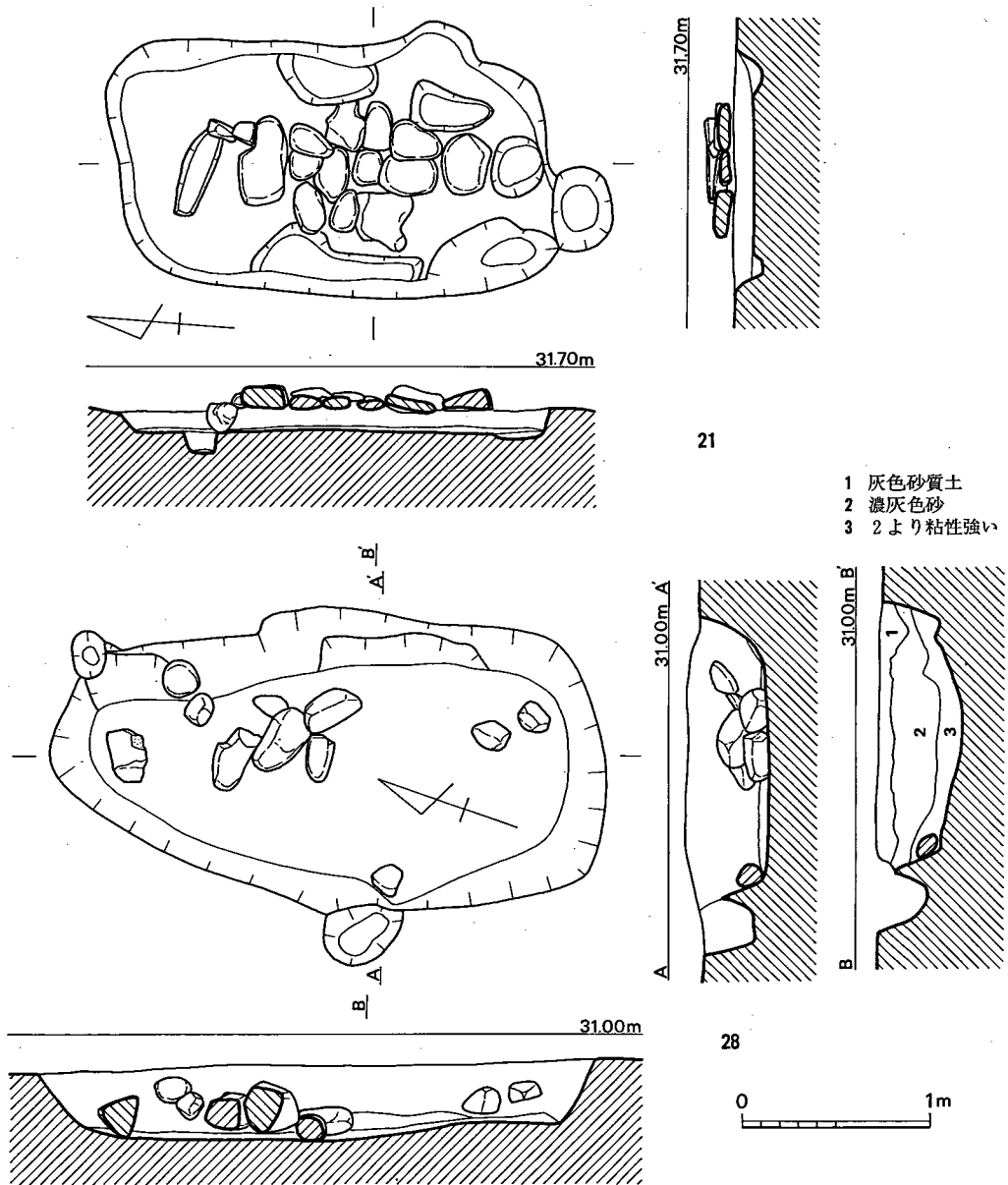
3・4号溝の東、東群集石土壙の東南に存する。長軸1.7m、短軸1.3mの楕円形プランで、深さ30cmの壙内には大小20数個の円礫が入っていた。その中の1個は上面が平滑であり、作業台石として使用されたものらしい。礫の間に弥生土器と石庖丁・砥石が存した。

出土土器 (図版142-4, 第285図)

弥生土器(D26-1~4)1は高坏の坏部で、内外ともヘラミガキを施している。2の底部はやや上げ底となり、胴部の膨らみは大きい。底径7.9cm。3・4は接合しないが、同一個体と思われる。3の口縁は跳ね上げとなり、胴部は殆ど張らない。口径24.5cm。4は摺鉢状の上げ底となる。底径7.3cm。

27号土 壙 (図版103-1, 第276図)

26号土壙の南西方、4号溝よりは東にあり、主軸を略東西方向におく土壙墓である。黒色土を埋土としていた。東西両小口とも段を有し、西側のそれの上には土師器坏が1個存した。土壙の総長は220cm。本体部分については内法で長さ142cm、幅が東小口27cm、西小口35cmを測

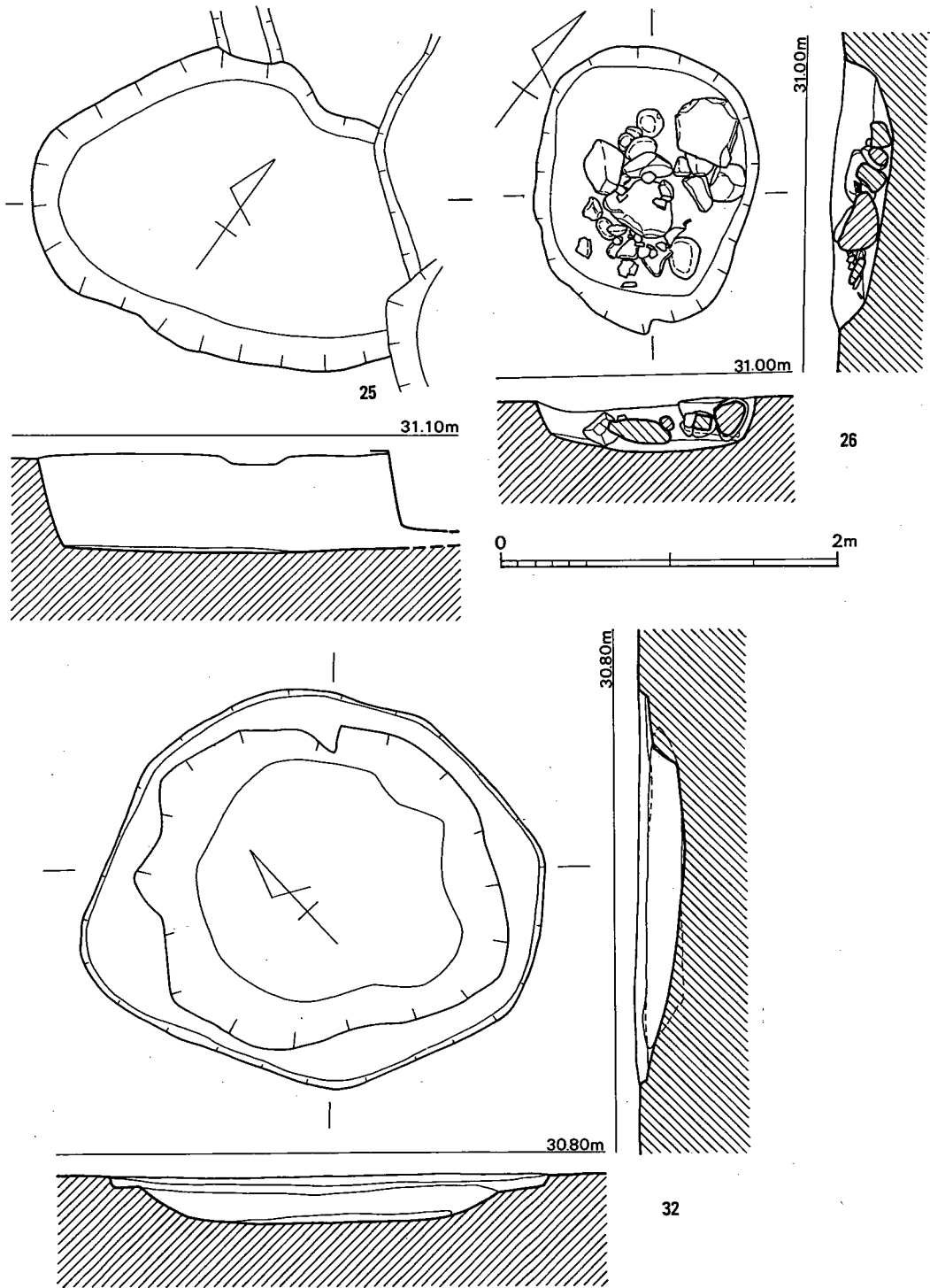


第 273 図 21・28号土坑実測図 (1/40)

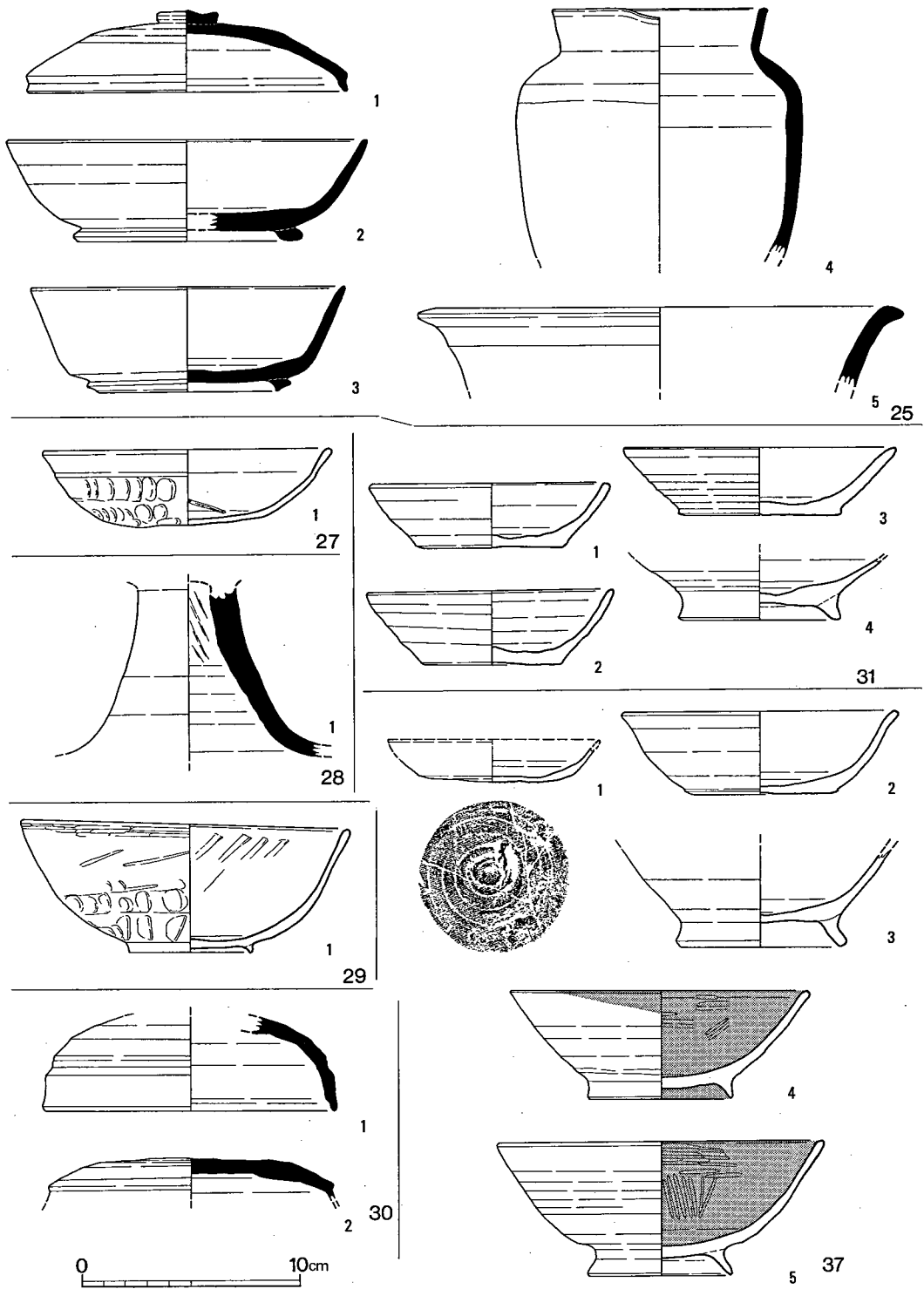
る。本体の西小口近くで骨の破片が出土した。土器のあり方、小口幅等を考えると西側を頭位としたものだろう。主軸方位はN-103°30'-W。深さは25cmが残る。

出土土器 (図版142-5, 第275図)

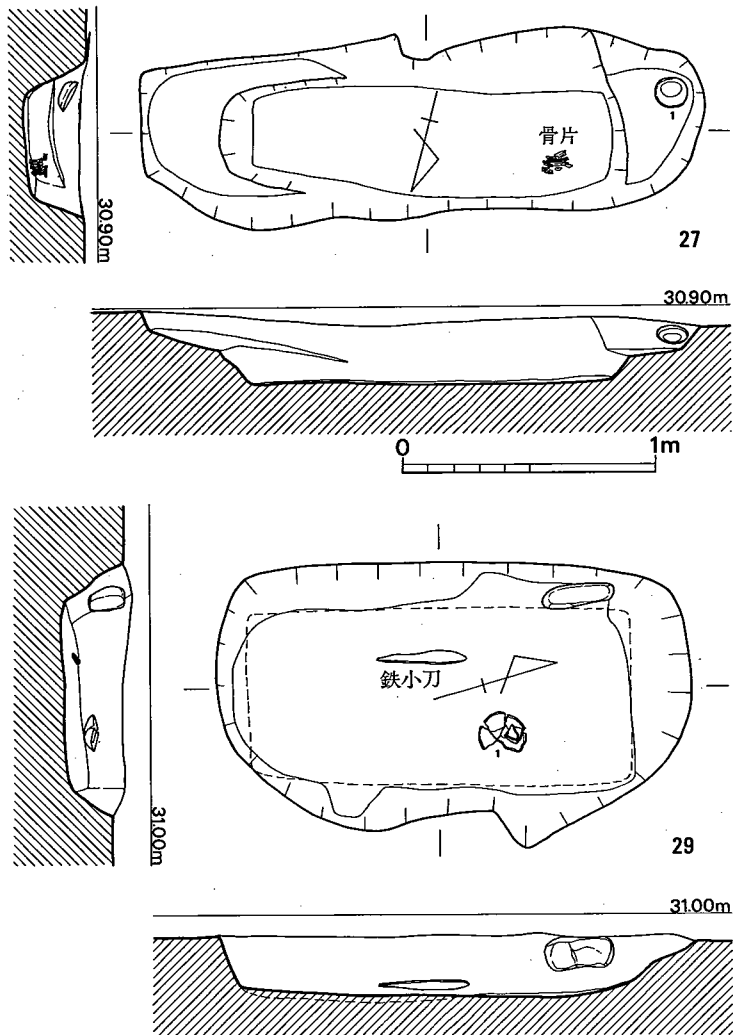
土師器 (1) 完形の坏である。全体に薄手のつくりで、口縁部と体部の境には内外ともに段



第 274 图 25·26·32号土坑实测图 (1/40)



第 275 图 土城出土土器实测图④ (1/3)



第 276 図 27・29号土坑実測図 (1/30)

がつく。体部外面は押圧痕が著しい。内底面には、成形時に藁か何か植物質のものが器胎表面に混入していたのであろうか、圧痕風の条線がみえる。口径13cm，器高3.4cm。

28号土 坑 (図版103-2, 第273図)

26号土坑の東方，29号住居跡との間にある。主軸を略南北方向にとる土坑で，主軸長3m，最大幅1.6mを測る。埋土は3層に分けられるが，総体的に砂質の土である。坑内には11個の礫石が入っていたが，そのうちの北端部にあるものは，熱を受けて赤変していた。中世の土器片や焼塩土器片も出土している。

出土土器 (図版142-6, 第275図)

須恵器 (1) 1は高坏の脚部である。内外ともに灰被りとなる。

29号土 壙 (図版104-1・2, 第276図)

27号土壙の西方, 3号溝よりも西に存した。主軸を略南北におく木棺墓と思われる土壙である。黒色土を埋土としていた。壙底はやや出入りのある丸みを帯びたプランであるが, 図示した破線の如き棺体が推定されよう。主軸長150cm, 小口幅は南が62cm, 北が70cm程となる。床面より少し上位にて鉄小刀, 瓦器椀が出土している。西長辺側の北端に横長に置かれた石は, 棺体の裏込めたる用途のものであろう。深さ27cmが残存する。主軸方位N-16°30'-E。北側が頭位であろう。上記以外に滑石製品が1点ある。

出土土器 (図版142-7, 第275図)

瓦 器 (1) 1は椀である。小さな底部から内湾して大きく開く形状となる。内外ともヘラミガキとナデにて調整するが, 体部下半の外面には押圧した痕跡が顕著である。外面の口縁下1.5cmまで黒化した部分がある。口径15.1cm, 底径5.7cm, 器高5.8cm。

30号土 壙 (図版104-2, 第277図)

29号土壙のすぐ北にあり, 3号溝に東端部を切られている。現存長4.3m, 最大幅1.2m, 壙底は東側が一段低くなる。

出土土器 (第275図)

須恵器 (1・2) 1・2ともに蓋で, 1は口径13.5cm。少し分厚いつくりである。2は口縁周辺を欠くが, 天井部との境には明瞭な段がつく。

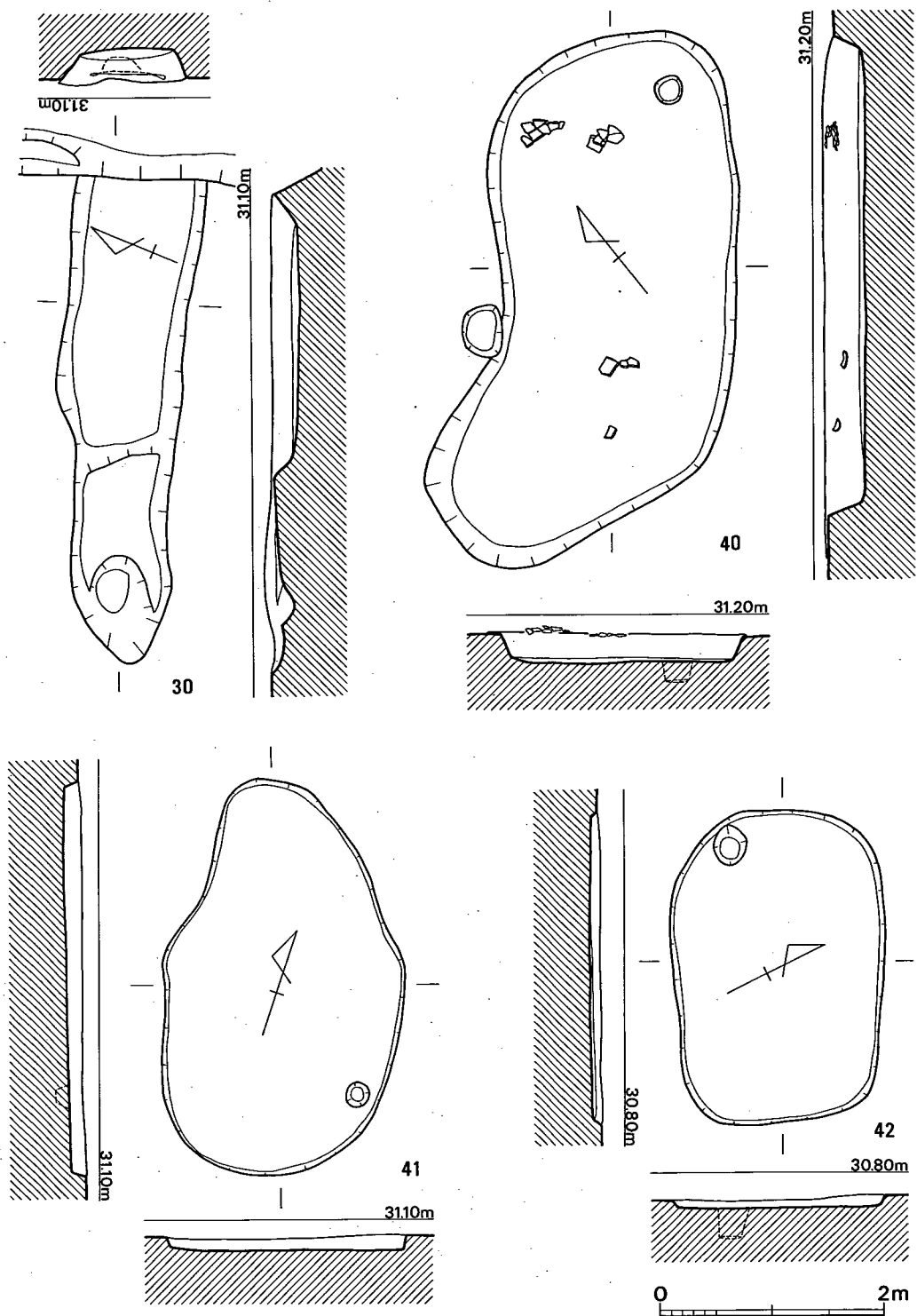
31号土 壙 (図版104-3, 第269図)

34・89号住居跡の東, 集石土壙東群の北西に存した。主軸を北西-南東におく楕円形プランを呈し, 西側は別の遺構に切られている。主軸長1.38m, 幅0.85m, 深さ21cmを測る。暗褐色土を埋土としていた。壙中には床面より上位にて土師器が出土している。

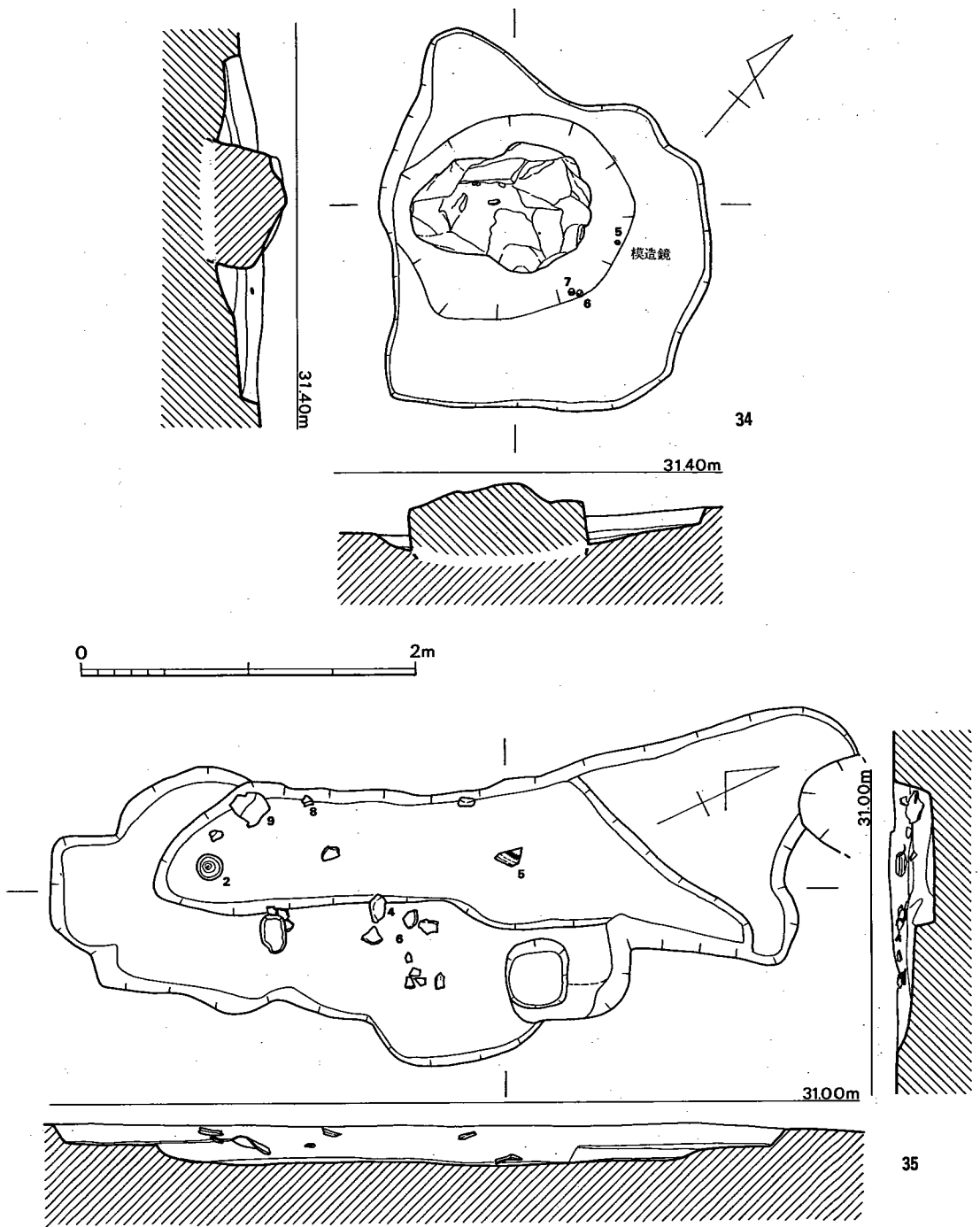
出土土器 (図版143-1, 第275・285図)

土師器 (1~5) 1~3はヘラ切り離し平底で, 小型の坏である。1・2は内湾したまま口縁に至るが, 3のみは口縁が少し外反する。1・2は精良な土器である。口径は1が11cm, 2が11.4cm, 3が12.4cm。底径は1が6.9cm, 2が6.5cm, 3が7.4cm。器高は1が2.9cm, 2は3.3cm, 3は3.1cm。

4は高台の付く椀で, 体部はかなり薄い。瓦質に近い土師器である。高台径7.4cm。5は単なる甕とするより鍋か釜の名称を与えた方が妥当と思われる。底部は分厚く, 体部上方へと段々



第 277 图 30·40~42号土坑实测图 (1/60)



第 278 图 34·35号土坑实测图 (1/40)

薄くなり、くの字状の口縁に至る。内外面ともに煤が付着する。また、胴部内面に一個の靱圧痕が横位に付いている。完形で、口径26.1cm、器高23.6cm。

32号土 壙（図版105-1、第274図）

23・24号土壙の東、9号建物の西に位置する。長径2.8m、短径2.25mの楕円形プランで、深さ27cm。

33号土 壙（図版105-2、第269図）

調査区の西南部、39号住居跡の上層にて検出された。いわゆる、焼土壙と称しうるものであり、直径約80cmの円形土壙中に炭・焼土・灰が堆積していた。壁面は北側から東側にかけて特によく焼けていたが、底面についてはそれ程には焼けていない。深さは8cmと極めて浅い。飯蛸壺が出土している。

34号土 壙（図版106-1、第278図）

調査区の北半部、3号建物の北に存した土壙で、巨石を取り囲む不整形プランをなしている。巨石は80×105cmの平面形に高さ40cm以上であり、これの周囲は120×140cmの範囲が摺鉢状に窪んでいる。更に、これらの外周に最大長227cm、幅185cmの浅い不整形プランがある。巨石の東側にて土製模造鏡3点が出土している。

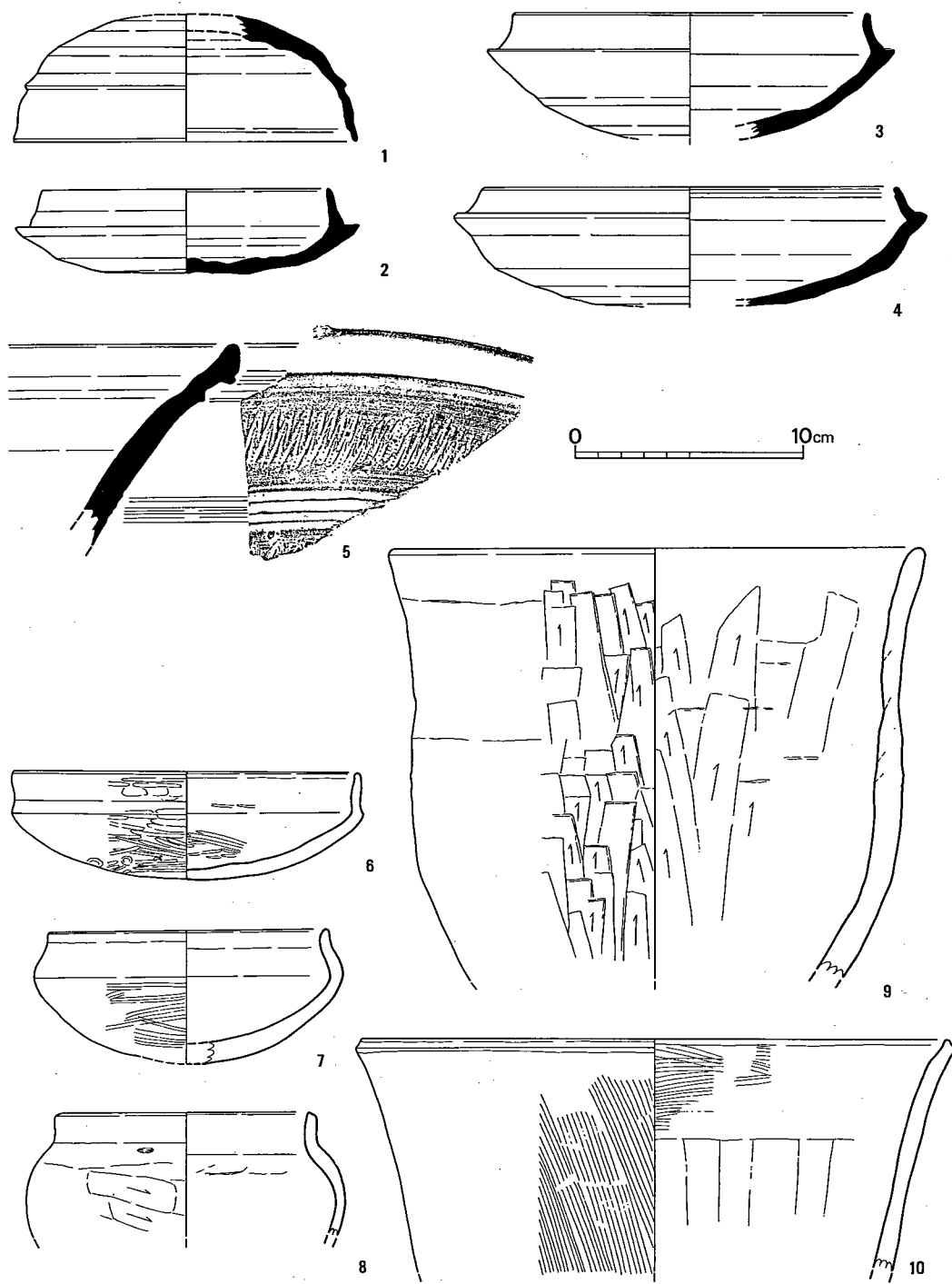
35号土 壙（図版106-2、第278図）

10号建物の北西に存する細長い遺構で、土壙というより溝状とした方が妥当かもしれない。全長4.85m、最大幅1.6mで、深さは25cmしかない。中央よりやや南寄りに土器片が散乱したような状況で出土した。焼塩土器片も1点ある。

出土土器（図版143-2、第279図）

須恵器（1～5）1の蓋はかなり丸みを持ち、天井が高い。口唇部は丸みを持っている。口径15cm、器高5.4cm。2は3・4に比して偏平な感のある坏である。口唇部には打欠きがある。口径12.5cm、器高3.6cm。3は深みがあり、受部の突出度は少ない。口径15.4cm。3はかなり大型の坏で、口径18cm、受部径20.4cmに復される。口唇内面には浅い沈線を有する。5はかなり大きくなるであろう甕の口頸部で、外面は沈線を挟んで上下に粗々しい波状文が施される。

土師器（6～10）6は坏で、内外にヘラミガキを施している。口唇部内側は僅かに窪んでいる。口径17.3cm、器高4.6cm。7は碗と称した方がよいかもしれない。赤褐色粒を多量に含み、器表には化粧土をかけているらしい。口径12.3cm、器高5.8cm。8は埴で、肩部外面に1粒の靱の圧痕がある。口径11.5cm。



第 279 图 土壤出土土器实测图⑤ (1/3)

9・10は甑であろう。9は外面が擦過による調整なので、その厚みも含めて粗々しい感じのする土器である。口径23.4cm。10は内外にハケ目を残している。口径25.8cm。

36号土 壙 (図版107-1, 第280図)

10号建物の西方, 5号住居跡の東方にあり, 旧河道が埋没した後に営まれた土壙である。長軸2.65m, 短軸1.33mの長楕円形プランで, 主軸を北東-南西方向にとる。北東側は別のピットと重複していた。深さは13cm程で, 黄茶褐色砂質土を埋土としていた。旧河道の上面であるため底面は礫が多量に顔を出していた。北東部より土器片が出土している。

出土土器 (図版143-3, 第285図)

須恵器(D36) 横瓶である。外面は擬格子目タタキの上に部分的にカキ目が入り, 内面は粗々しい同心円当具痕がある。口径15cm, 胴部径は27.4~37.9cm。

37号土 壙 (図版107-2, 第280図)

8・9号土壙の西にあり, 11号溝の下層から検出された。長軸172cm, 短軸105cmの不整形プランで, 深さは5cm程しか残らない。この中から土師器と緑釉陶器片, 焼塩土器片が出土している。

出土土器 (図版144-1, 第275図)

土師器(1~3) 1はへら切り底で, 器壁の薄い小皿であり, 復原にて口径9.7cm程となろう。底径は7cm。2もへら切り底の坏で, 口縁が少し外反する器形をなす。口径12.4cm, 底径6.8cm, 器高3.8cm。3は高台の付く椀で, 底径7.7cm。体部は直線的に立上っている。

黒色土器(4・5) 4はやや浅めの椀で, 体部は内湾しているものの直線的である。内面が黒いのはもちろん, 高台内も煤けた如くに黒く, 外面口縁下も一部が黒化する。口径13.7cm, 底径6.7cm, 器高4.9cm。5は内湾度の強い形状で, 高台内も一部が黒化している。口径14.9cm, 底径6.6cm, 器高6cm。

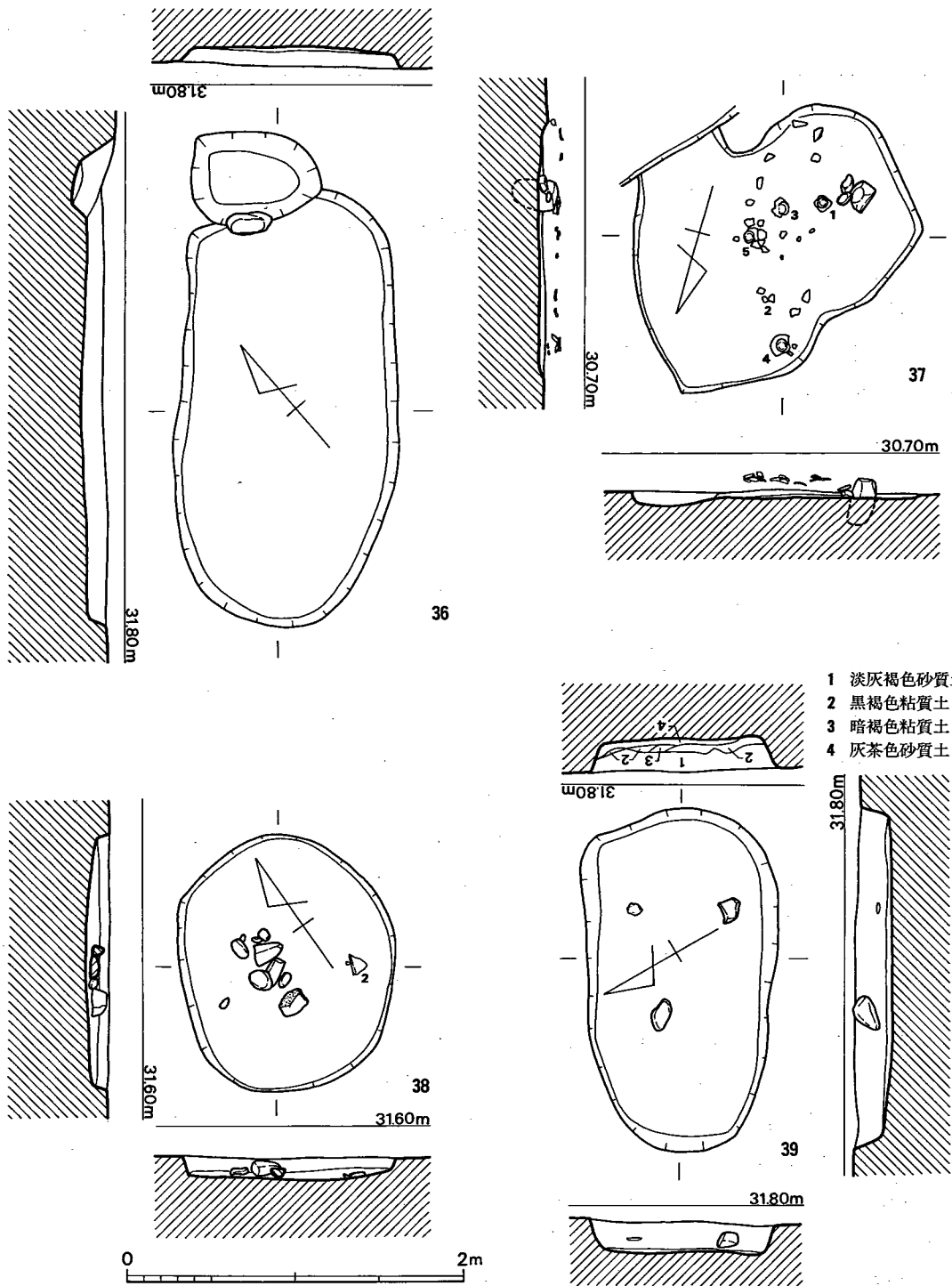
38号土 壙 (図版108-1, 第280図)

調査区西端の12号建物の西南方向にあり, 旧河道上に存する。155×126cmの楕円形プランを呈し, 深さは13cmと浅い。暗灰褐色砂質土を埋土としていた。壙中には花崗岩質の円礫が10個ほど中央付近に存した。

出土土器 (図版144-2, 第281図)

土師器(1) 1はへら切り底の小皿で, 口径9.6cm, 底径6.8cm, 器高1.4cm。口縁に歪みがある。底部は厚い。

須恵器(2) 2は鉢で, 内面の下半は回転ナデの後, 更に平滑にしているので捏鉢かと思われる。口径25.6cm。



第 280 图 36~39号土坑实测图 (1/40)

39号土 壙 (図版108-2, 第280図)

20号土壙の東隣りにある。長楕円形プランをなし、長軸2.06m、短軸1.13mを測る。深さは20cm。淡灰褐色砂質土で大半が埋まっているが、その下位には粘質土が入っていた。

出土土器 (第281図)

弥生土器 (1) 1は甕の破片である。土師器のようにも見えるが、弥生土器であろう。内外ともにハケ目とナデが著しい。

40号土 壙 (図版108-3, 第277図)

調査区の中央よりやや西側、8・28号住居跡等の西方にある。くの字状に曲がったプランで、総長5m、最大幅2.2mを測る。埋土中から土器とともに土錘1点、焼塩土器片2点、鉄刀子1点が出土している。

出土土器 (図版144-3, 第281・286図)

須恵器 (1・2・6) 1は蓋で、口縁周辺はかなり薄くつくられる。口径11.2cm、器高3.5cm。2は胴部に孔があるので甗かと思えるが、やや小さすぎる感もある。子持壺の子にしては大きすぎよう。6は横瓶の破片で、外面は平行タタキの上にカキ目とナデを施し、内面は同心円当具痕がある。頸部径12.2cm。

土師器 (3~5・7) 3は甕の口頸部で、4と同一個体と思われるが接合しない。口径12.6cm。5は大きめの甕の口縁部で、口唇上端には面をとる。口径23.4cm。7は須恵器を模倣した土師器の甕である。外面は擬格子目タタキの上にカキ目を施し、内面は同心円当具痕がある。

41号土 壙 (第277図)

40号土壙の東北方向で、16号竪穴の下層より検出された。長軸3.55m、短軸2.1mの不整楕円形といった形状をなす。南隅に近い所で鉄器が出土している。

出土土器 (第281図)

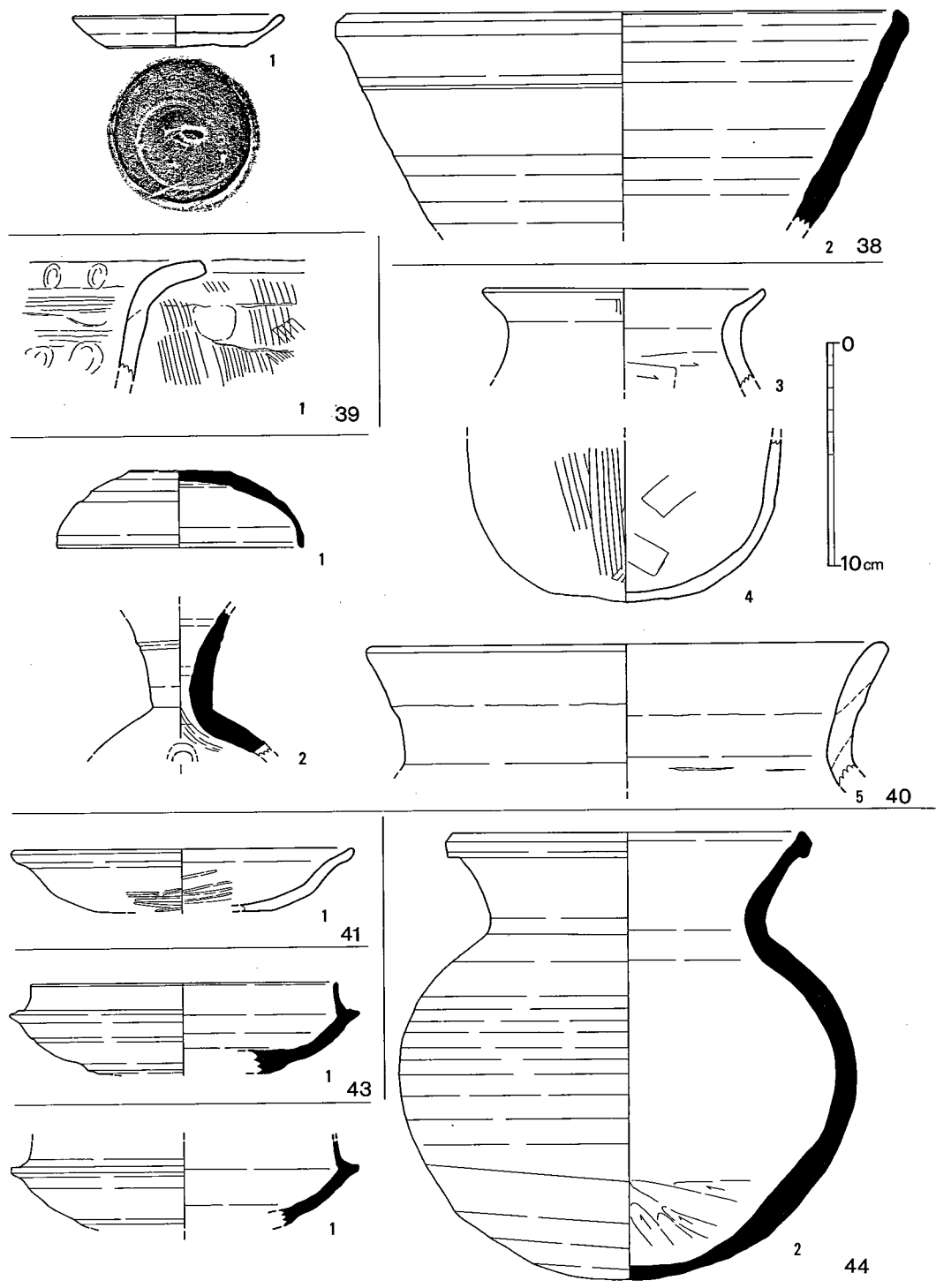
土師器 (1) 1は坏で、精良な土器である。口径15.3cm。内外ともにミガキを施す。

42号土 壙 (図版109-1, 第277図)

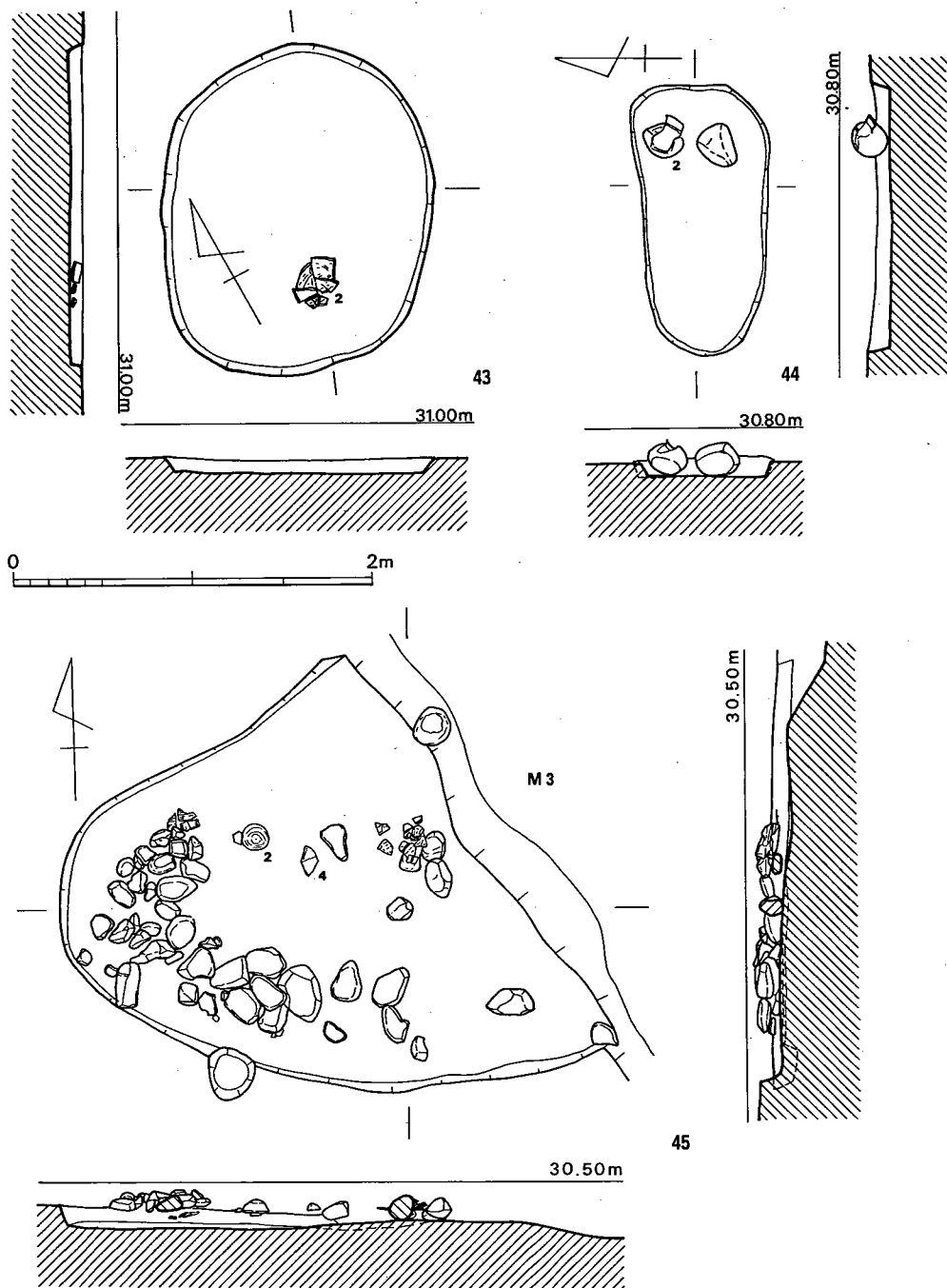
調査区のほぼ中央、住居等が密集した中にあり、63号住居跡の下層に存した。1.9×2.78mの隅円長方形プランをなす。

43号土 壙 (図版109-2, 第282図)

40号土壙の東南にある。1.5×1.85mの楕円形プランであり、きわめて浅い。南寄りの所から須恵器が出土している。



第 281 图 土城出土土器实测图⑥ (1/3)



第 282 图 43~45号土坑实测图 (1/40)

出土土器 (第281・286図)

須恵器 (1・2) 1は坏身で、口縁の立上りは体部に比してかなり細みである。口径13.7cm。2は横瓶の破片で、底部周辺しか残っていないので全形を知りにくい。胴の短径が30cm前後に復されよう。

44号土 壙 (図版110-1, 第282図)

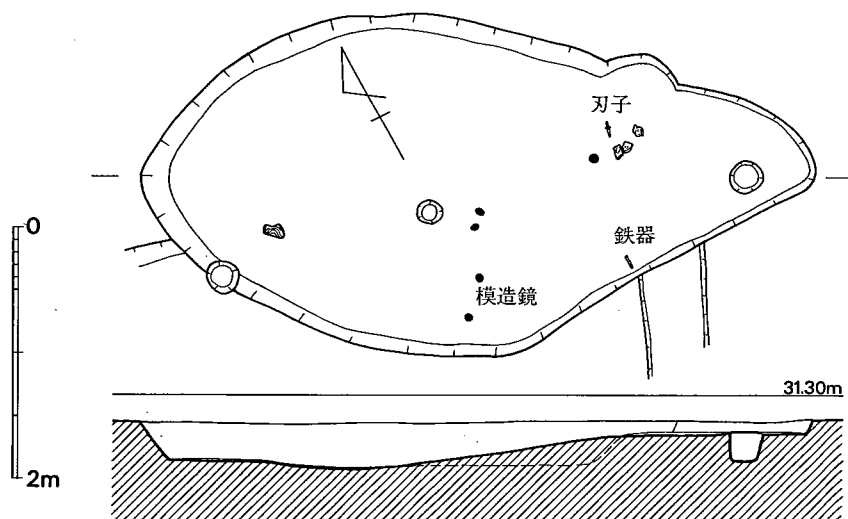
59・70号住居跡の下層から検出された。11号集石土壙の東隣りにあたる。東西方向に主軸をもち、長さ1.5m、幅0.75mを測る。東壁寄りに土器と石があった。

出土土器 (図版144-4, 第281図)

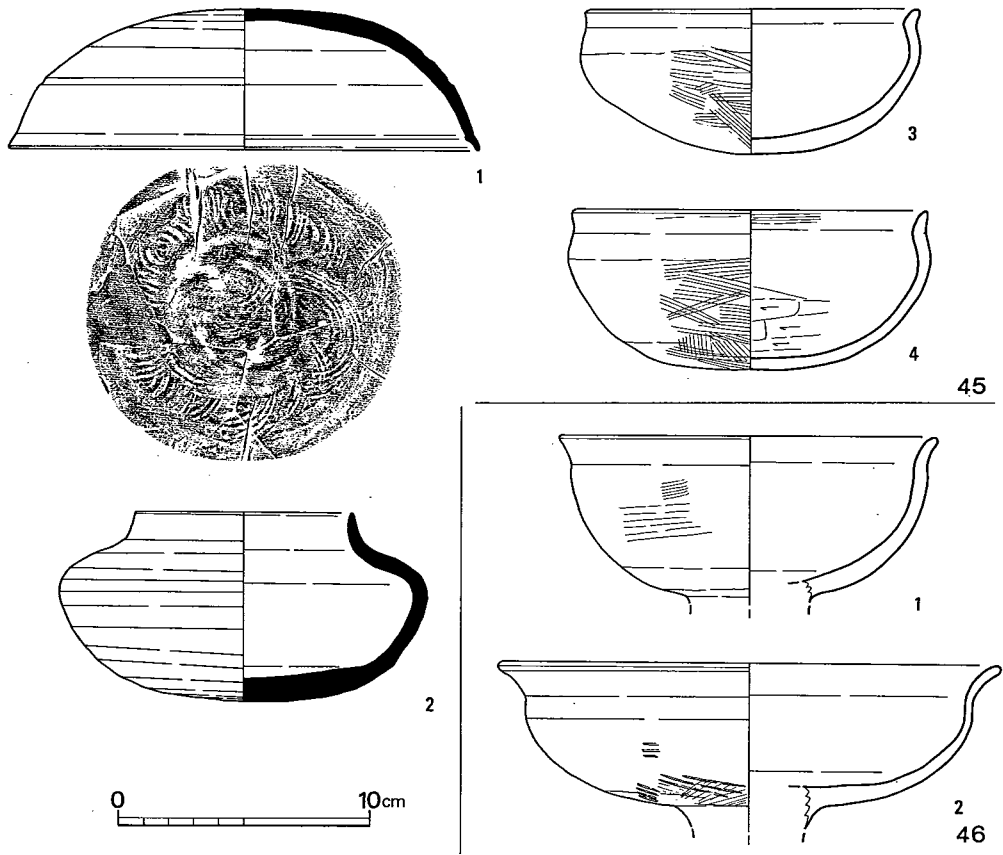
須恵器 (1・2) 1の坏は口縁端部を欠くが、43号土壙の1とよく似ている。受部径15.5cm。2は壺で焼成は甘く、胴部中位から底部にかけての外面には黒斑がある。全体に器壁が厚い。口径16.3cm、胴部径20.2cm、器高20.2cm。

45号土 壙 (図版110-2, 第282図)

東群集石土壙の西にあり、100号住居跡の上層にあって、3号溝に切られている。もとは楕円形に近いプランであろう。残存部分は長さ3m、幅2.6mを測る。土壙内から多数の礫と土器、土製模造鏡1が出土している。



第283図 46号土壙実測図 (1/60)



第284図 土壙出土土器実測図⑦(1/3)

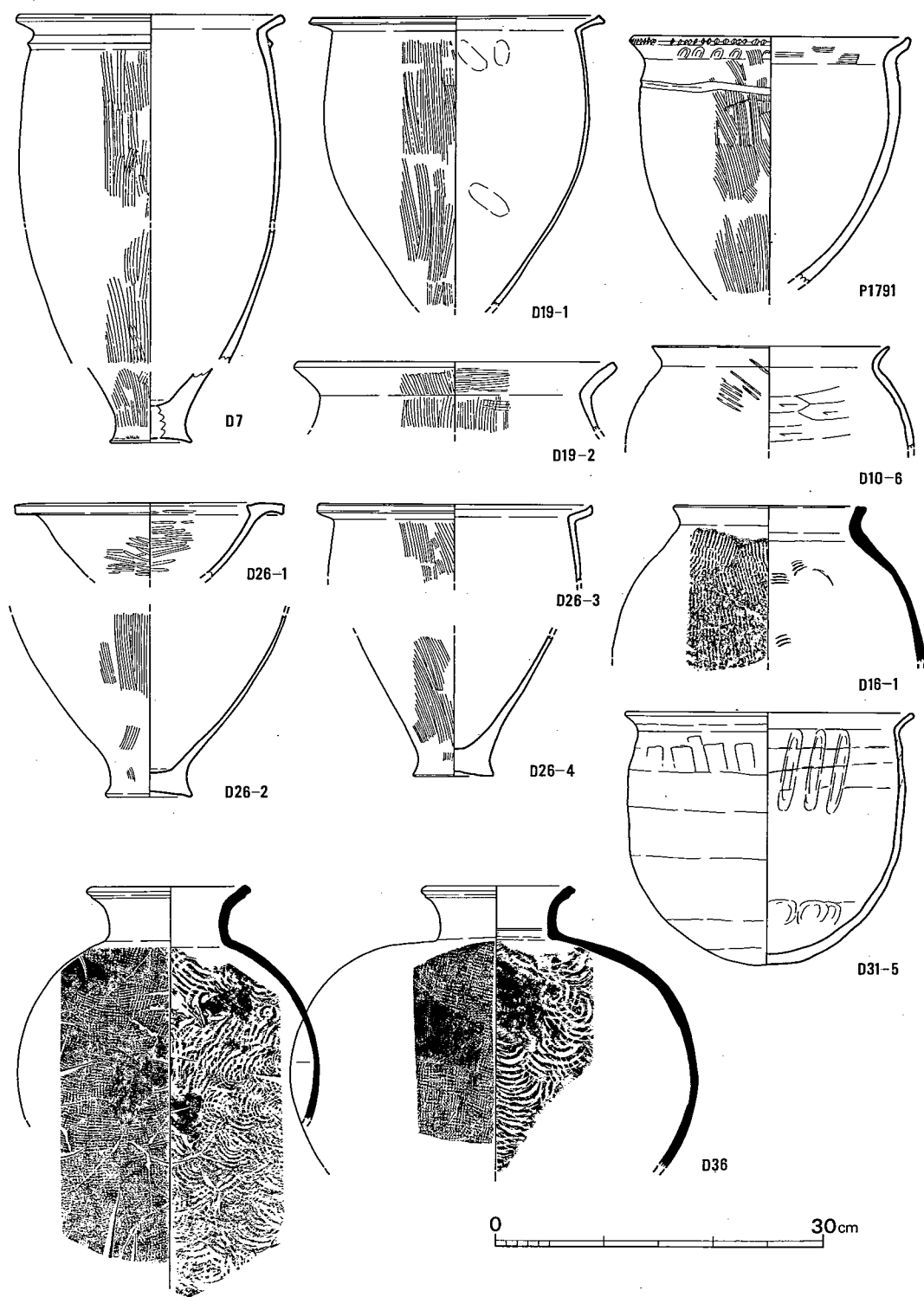
出土土器 (図版144-5, 第284図)

須恵器 (1・2) 1の蓋はかなり大ぶりで、口径18.5cm, 器高5.7cm。口唇部内面は窪み、段になる。天井部内面には同心円当具痕がはっきりと見える。2の埴は口径8.7cm, 胴部径14.4cm, 器高7.6cm。肩部に残る色違いの部分から、この埴には口径12cmの蓋をして焼成したことが判る。

土師器 (3・4) 3・4ともに椀とすべきであろうか。何れも化粧土を掛けている。3の口径13.1cm, 器高5.7cm。4の口径13.9cm, 器高6.4cm。4は口縁内面にカキ目風のナデが入っている。

46号土壙 (図版81-1, 第283図)

中央群集石土壙の西にあって、15号竪穴に切られ、107号住居跡を切って存した。やや歪つな長楕円形を呈し、長さ5.35m, 幅2.7mとかなり大きい。土器以外に土製模造鏡7点、滑石製品

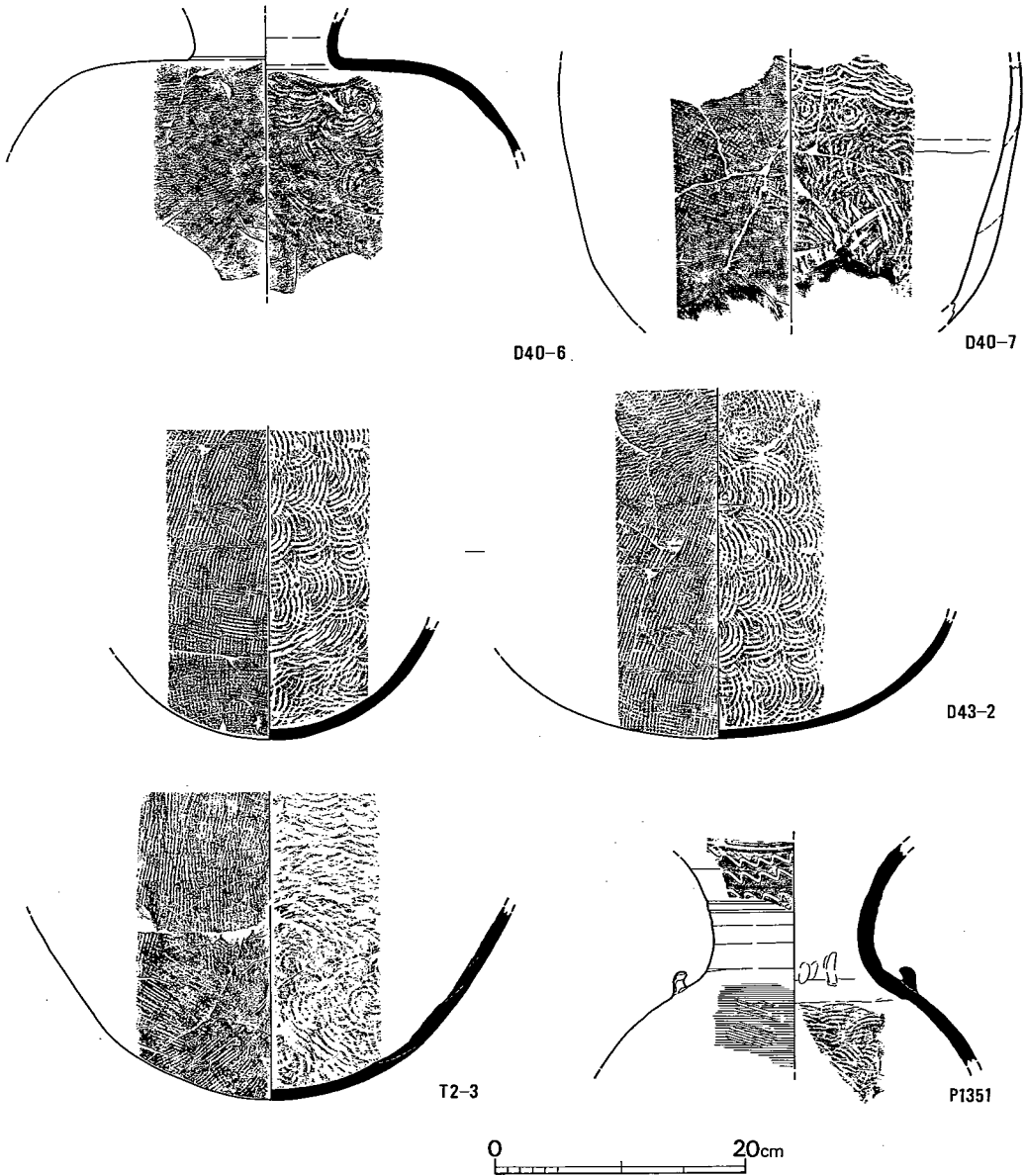


第 285 图 土壙等出土土器实测图① (1/6)

1点, 鉄器2点が出土している。

出土土器 (第284図)

土師器 (1・2) 1・2は高坏の坏部になる。1はやや厚みのある器胎で, 口縁の外反は緩やかだが, 2は外反度が強い。2の外面にはタタキの痕跡がある。1の口径14.8cm, 2は19.7cm。坏部の深さは1が5.7cm, 2は4.9cm。 (伊崎)



第286図 土壙等出土土器実測図② (1/6)

(5) 集石土壙

土壙中に多量に礫石が入っているもので、調査区内の4ヶ所に数基ずつまとまって検出された。1号としたものは1基のみの確認であり、これが調査区外でグループをなすのか否か判らないが、いまは一群としておく。

土壙は基本的に長方形プランを呈し、大きさはまちまちである。中に入っている礫石は、小は直径2cm程のものから大は直径20cmを越すものまで様々であり、これらは置き並べられたものではない。もとこれの上位に構築物があり、その下部遺構とも考えられるが確証がない。図示したものは、礫石除去後のものである。

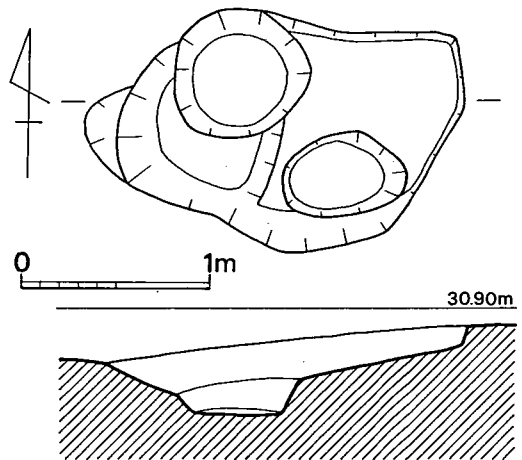
なお、調査時には“集石墓”と捉えていたが、これも決め手を欠くので、いまは石が多量に詰まっていることより、集石土壙と表記しておく。以下、各群ごとに説明する。

〈南 群〉

調査区の南端に近く、9号溝の東端部にそれを切って1号を検出した。この東側は調査区外となって、別に何基か存するの
か否か判らない。

1号集石土壙 (図版113-1, 第287図)

長軸2m, 短軸1.2mの不整形プランをなし、中に3個のピットがある。出土遺物はなかった。



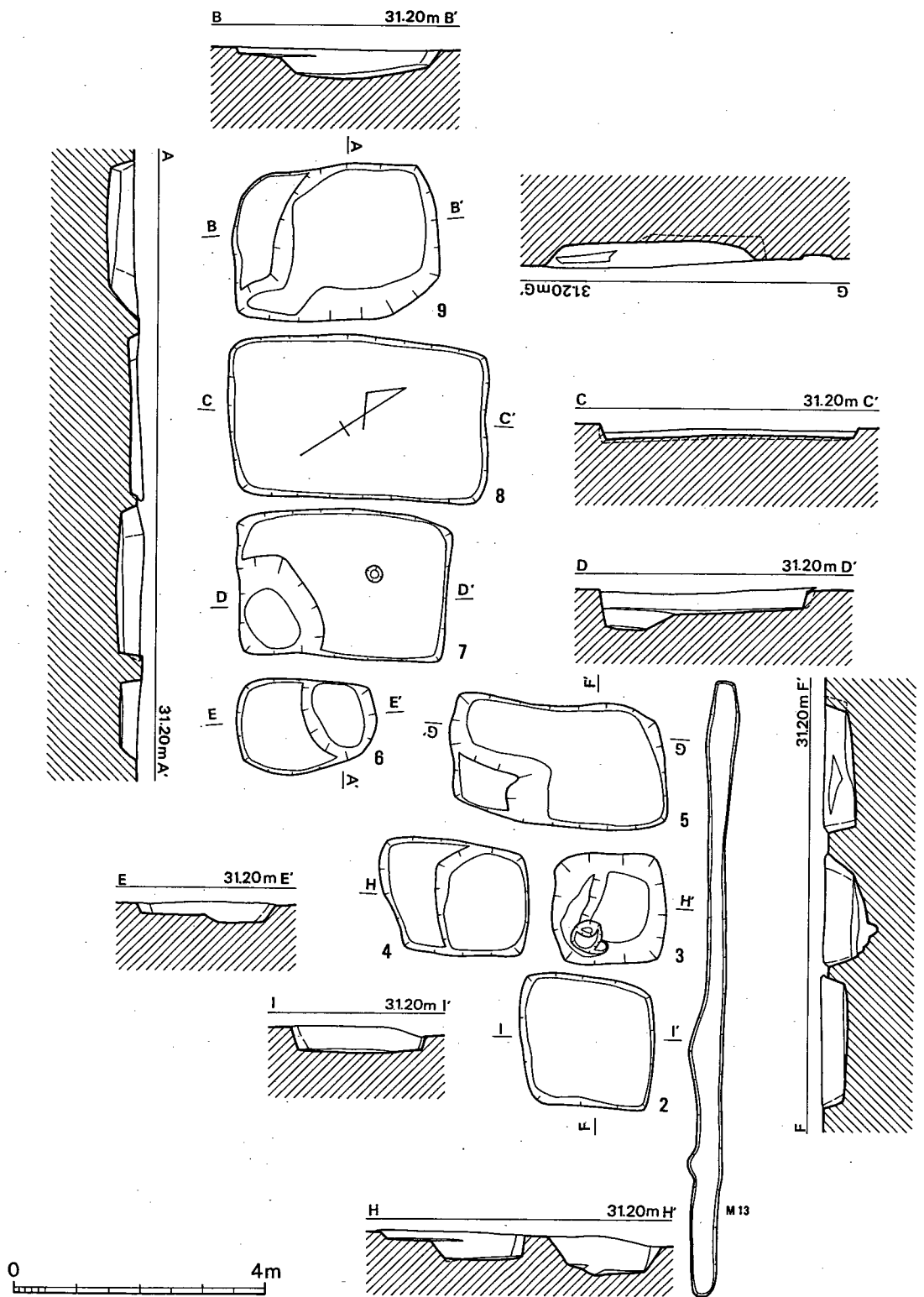
第287図 1号集石土壙実測図 (1/40)

〈東 群〉 (図版111, 第288図)

調査区中央よりやや東側に8基が群集して検出された。これは8基が一単位というのではなく、2～5号と6～9号の2グループに分けられるとしてよいだろう。2・3号を除いた6基は、その主軸を北東-南西にとる長方形プランであり、これらは一見して整然とした配列をなしている。礫石を除去した後の土壙は、6基が二段掘り風になり、7号を除いてみな北東側が低くなっている。

2～5号は、2・3・5号の北東面の辺が揃うようにし、また4号が3号の背後にあって、あたかも2・4・5号の3基で3号を囲むが如き配列となっている。これらの前面にある13号溝も、その主軸方向・位置関係からみて無関係のものではないだろう。

6～9号は、その南東辺が一直線に揃うように配列されており、南東側をこの4基の正面と

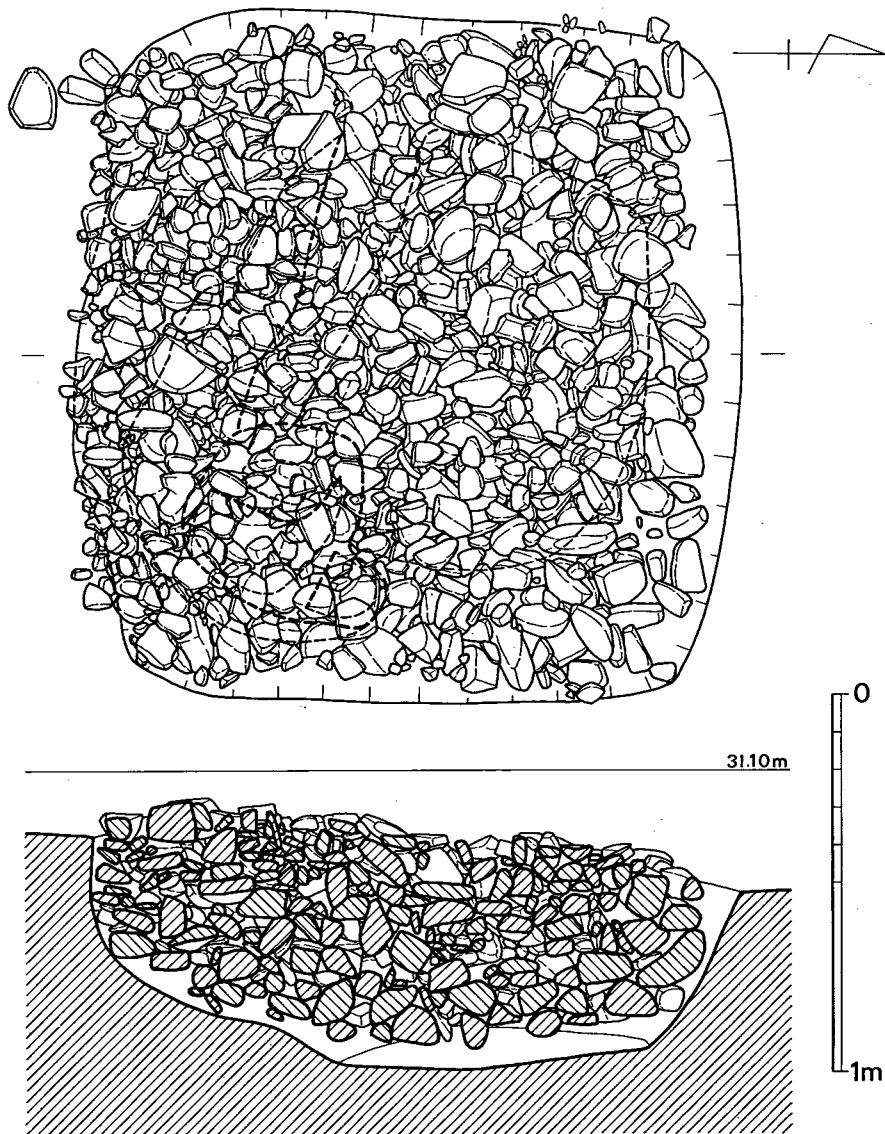


第 288 图 東群集石土壙 (2~9 号) 実測図 (1/100)

見なすことができよう。8号を中央にして両脇に7・9号が配され、6号は7号に付随して置かれているように見える。8・9号は3号溝を切って営まれていた。

2号集石土壙（図版113-2）

一辺2~2.1mの少し歪んだ方形プランであり、深さは0.4m。



第289図 3号集石土壙実測図 (1/20)

3号集石土壙 (図版114, 第289図)

一辺1.75~1.82mの方形プランで、二段掘りになる。最深部で0.6mを測り、この一群では最も深い。壙内での礫石の検出状況は第289図の如くである。青磁碗の破片が出土した。

出土遺物 (第292図)

青磁 (1) 1は皿の破片で、復原口径10.4cm, 底径4.9cm, 器高2.1cm。外面体部下半と底部は露胎である。龍泉窯系であろう。見込みに文様はない。

4号集石土壙 (図版115)

2.3×1.8mの長方形プランで、二段掘りとなって北東部が深くなる。青磁碗が出土。

出土遺物 (第292図)

青磁 (2) 2は底部片で、高台径4.2cm。体部下半と底部は露胎である。内底面は同心円状に釉がかき取られている。暗緑灰色の貫入の多い釉がかかる。李朝青磁らしい。

5号集石土壙

1.9×3.3mの細長いプランで、南コーナーにはテラスがある。足釜などが出土した。

出土遺物 (図版145-1, 第292図)

須恵器 (3) 3は坏で、復原口径15cm。器表面はかなり平滑にされている。

土師器 (4・5) 4・5は足釜の破片である。4の胎土は灰青褐色をなし、須恵質に近い。

5は焼成良く硬質で、釜本体に近い部分には煤が付着している。

瓦 (6) 6は平瓦の破片で、外面は格子目タタキ、内面はナデを施す。器表面は白っぽいが胎の中心は黒灰色をなす。

6号集石土壙

1.5×2.2mのやや丸みを帯びた長方形プランである。瓦質土器片が出土した。

出土遺物 (第292図)

瓦質土器 (7) 7は鉢の破片で、口縁部を丸くつくっている。

7号集石土壙 (図版116)

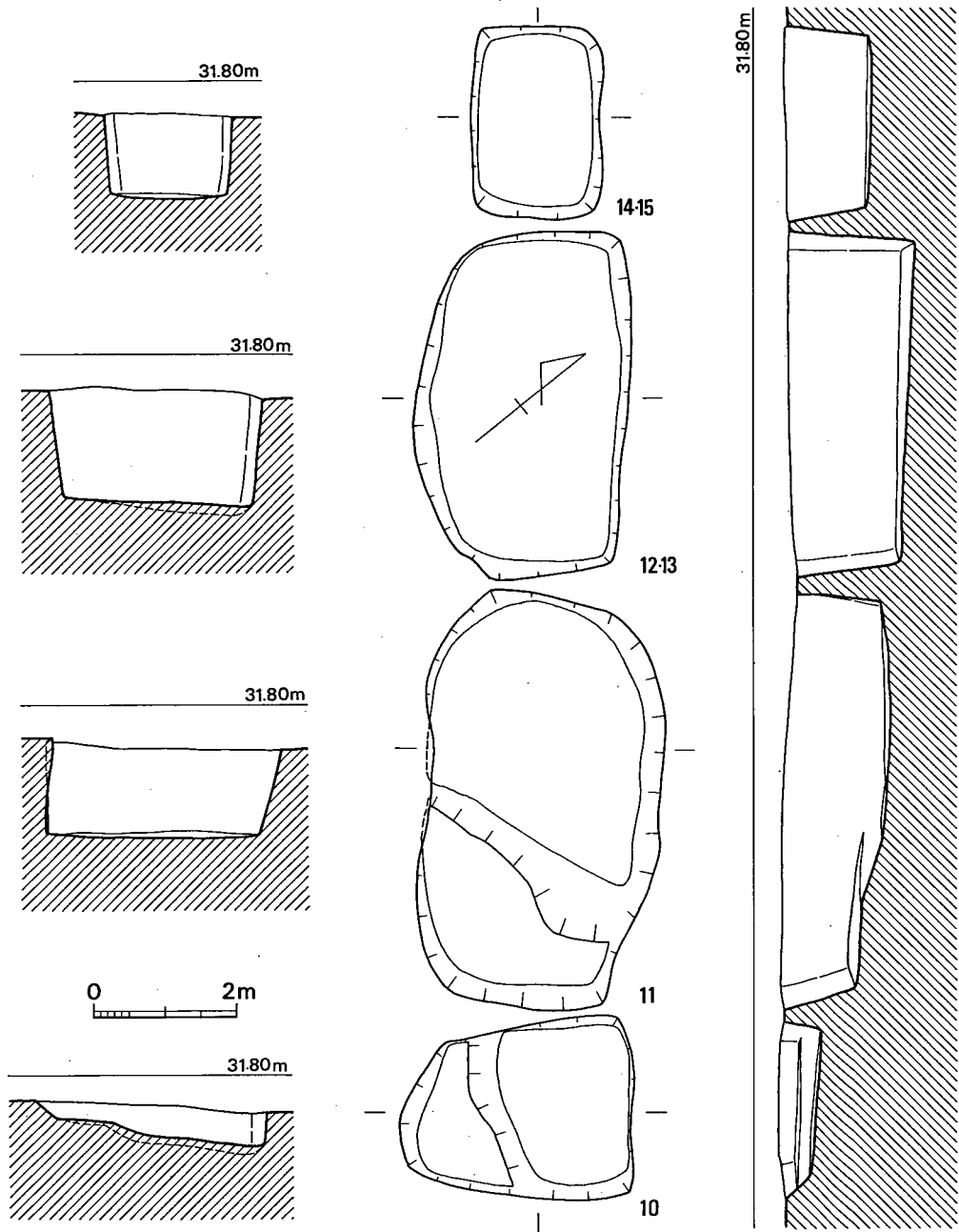
2.3×3.3mの大きなもので、これのみ南隅が低くなっている。また、床面に小ピット1個があった。

8号集石土壙 (図版116)

2.5×4mの大型の長方形プランで、この東群の中では最も大きい。しかし、深さは最深でも

20cm程であって極めて浅い。青磁碗などが出土した。

出土遺物 (第292図)



第 290 図 中央群集石土壙 (10~15号) 実測図 (1/100)

瓦質土器 (8) 8は足釜の脚部片である。

青磁 (9・10) 9は復原高台径6.6cm。内底面に「金玉満堂」の陰刻が入るも、破片にて金の一部しか見えない。10は口縁下外面に雷文帯を持つ碗で、濃緑色の釉調をなす。

9号集石土壌

2.5×3.2mの角のとれた長方形プランで、南西側にテラスがある。瓦質の鉢が出土。

出土遺物 (第292図)

瓦質土器 (11) 11は鉢か壺の破片で、復原底径10.6cm。内外ともナデを施す。

〈中央群〉 (図版117, 第290図)

調査区のほぼ中央にて4基が縦列配置で検出された。当初6基が並んでいるように捉えられたので10~15号としたが、12・13号と14・15号は結果的に1基ずつにまとまった。4基全体は南北-東西方向に並び、11~15号もその方向に主軸をとるが、10号のみそれと直交した主軸をとる。整然とではないものの、北東辺を揃えて配列されているように見える。

10号集石土壌 (図版118)

2.5×3.2mの台形状プランで、北東側は一段低くなる。ここ4基の中では主軸方位も異なるし、最も浅い土壌である。須恵質土器が出土している。

出土遺物 (第292図)

須恵質土器 (12) 12は鉢か甕になろう。復原底径16cm。内底面に靱圧痕らしきものを認めるが断定できない。

11号集石土壌 (図版119-1)

3.3×5.7mの大型のもので、この遺跡全体の中でも最も大きい。深さは1.35m。壙底は二段掘りとなる。青磁・瓦質土器片などが出土した。

出土遺物 (第292図)

須恵器 (16) 16は壺の口縁部片で、復原口径21.4cm。

瓦質土器 (15) 15は瓦質の摺鉢片である。櫛目は9本を数える。底面には板状圧痕が僅かに見える。

青磁 (13) 13は碗か皿になるもので、内面に蓮弁が彫り込まれている。内外ともに貫入のあるうぐいす色の釉が掛かっている。

陶器 (14) 14は陶器の摺鉢片である。

12・13号集石土壙 (図版119-2)

2.9×4.8mの長方形プランだが、南西の長辺は胴張り風となる。深さが最深で1.7mと、集石土壙中では最も深かった。この壙中の礫は直径5～15cmの大ききで、他と比べるとやや小さめではある。陶器・磁器片と、直径が10～25cmになる凹石3個が出土した。

出土遺物 (第292図)

白磁 (18) 18は碗の破片で、復原高台径6.8cm。底部周辺は基本的には露胎である。ごく僅かながら釉が青みがかっている。

陶器 (17) 17は甕か壺の破片である。外面に格子目タタキ、内面に当具痕がみえる。赤茶色の色調で備前焼風である。復原底径20.5cm。

14・15号集石土壙

1.75×2.65mの長方形プランで、深さ1.2mを測る。壙内の礫は南から北へ傾斜して、それも径2～5cmの小礫群をはさんで、上下に径10～20cmの礫を主体とする層が存するという堆積をなしていた。須恵質の土器片が出土している。

出土遺物 (第292図)

須恵質土器 (19) 19は壺の破片で、外面は平行タタキ、内面は同心円当具痕がみえる。。

<西群> (図版120-1, 第291図)

調査区の西端に16～18号の3基が存した。18号はごく一部のみの検出である。中央群などに比べるとかなり規模が小さい。主軸は南東-北西の方向で、縦列配置となる。出土遺物は全くなかった。

16号集石土壙

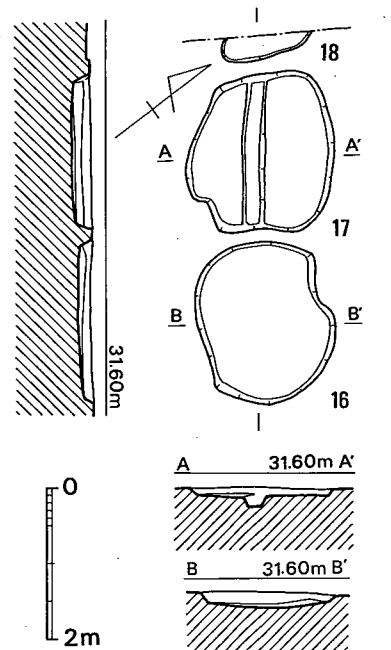
1.7×2.2mの楕円形に近いプランで、深さ15cm程。

17号集石土壙 (図版120-3)

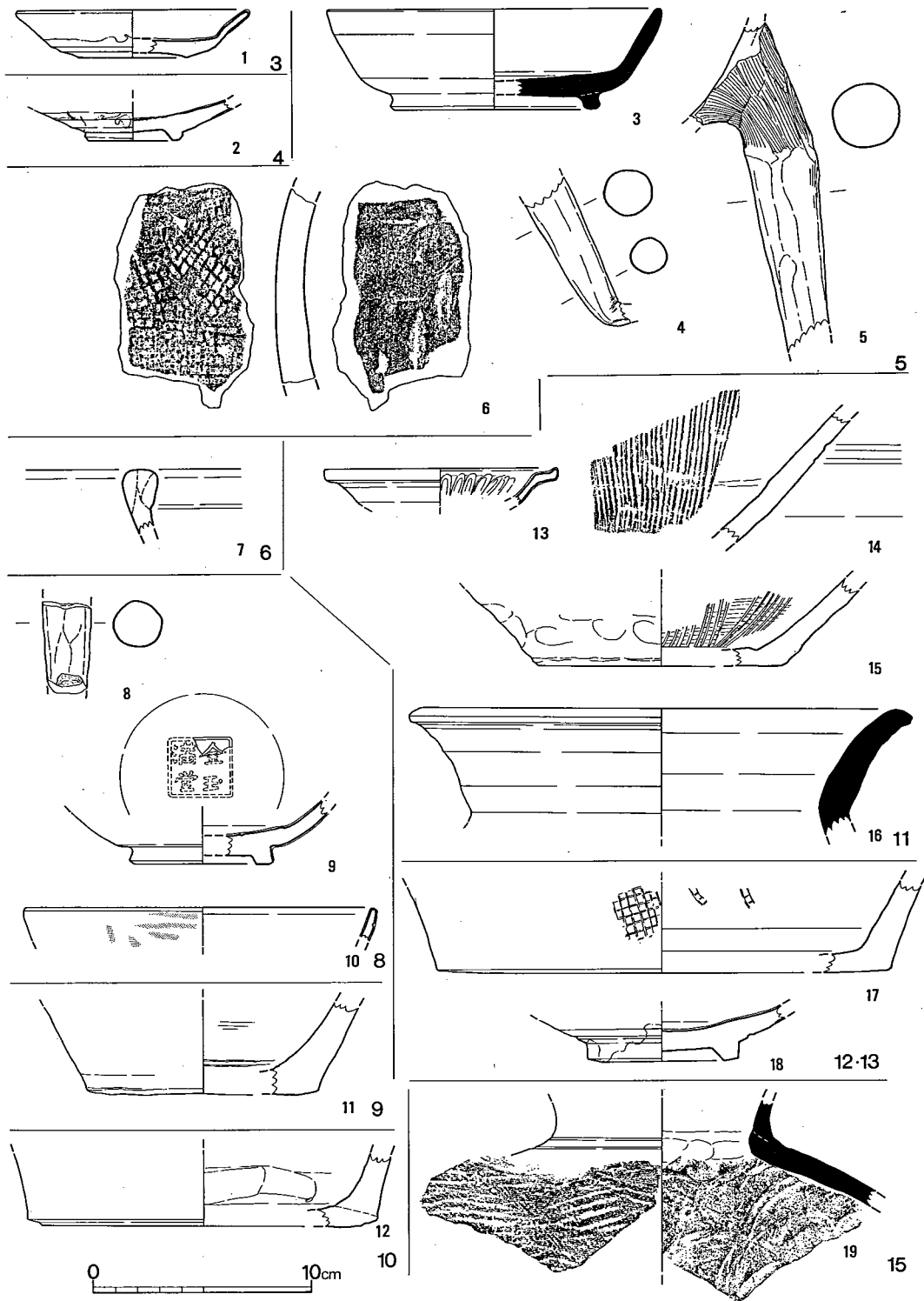
1.9×2.1mの隅円長方形をなす。主軸と平行してほぼ中央に、幅25cm程の溝が掘られている。これがどの様な性格なのか判らない。

18号集石土壙

ごく一部のみの検出にて詳細は不明である。(伊崎)



第291図 西群集石土壙 (16～18号) 実測図 (1/100)



第 292 图 集石土壙出土遺物実測図 (1/3)

椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告

第 8 卷 上 卷

平成 4 年 3 月 31 日

発 行 福 岡 県 教 育 委 員 会

福岡市博多区東公園 7 番 7 号

印 刷 赤 坂 印 刷 株 式 会 社

福岡市中央区大手門 1 - 8

福岡県行政資料

分類番号	所属コード
J H	2 1 3 3 0 5 1
登録年度	登録番号
H 3	12

椎田バイパス関係
埋蔵文化財調査報告

— 8 —

上 卷

塞ノ神遺跡・赤幡森ヶ坪遺跡の調査

付 図



凡例
 住：住居跡
 建：建物跡
 T：竪穴
 D：土壇
 SD：集石土壇
 M：溝

0 30m

付図1 赤幡森ヶ坪遺跡遺構配置図(1/300)